
幻影-まぼろし-のルミナス

みなもと瑠華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻影 - まぼろし - のルミナス

【Nコード】

N3543F

【作者名】

みなもと瑠華

【あらすじ】

オタクとか腐女子とか関係ない。……ただ”好き”なだけだったんだ。古の神話の世界に迷い込んだ腐女子ナミ。現実のアニメ作品の舞台であるはずのそこは、地殻変動後の未来の日本だった。”少女”はルミナスの海で魚になる——瑠美那という偽りの鏡を得て。虚と実が交差するパラレルストーリー（現在更新停止中となっておりますが、全体の改稿含め近々復活する予定です）

プロローグ

ごめんね、未玲。あたし、ウソツキだね……。でも、ほんとに腐とかオタクとか全然関係なくて、ただ好きなだけだったんだ。だけど、もう。

瑠美那——ゆるして。
たすけて、ルミナス。

それとも、この声は、思いは、
もう誰にも届かないのかな。

.....

*

「なんだかなあ……」
涼宮ハルカよろしく、やたらと意気込む未玲をよそに、その日あたしはとてつもない不安に支配されていた。

あたし伊勢崎ナミは、正真正銘のアニオタである。

でも、今ではもう世間的には”いい歳”である三〇代一步手前の二〇代後半。

だから、その世間様に顔向けできないようなコトはすべきでないと、実は内心で思っている。それに、そんな一般人に当たり前に通ずる知識や常識なども少なからずわきまえていると、自分自身でも思っている。

だけど、コイツはそうじゃない。

そう——まごうことなきオタク。いや、腐女子……。

最近ようやく一般にも浸透し始めてきたその単語。

彼女らのある意味で禍々しい生態を表すのに、これほど見合つ的確な言葉もない。なんだか貴腐葡萄でもあるまいし。でも貴腐葡萄なんて、そんなたいそうな表現が似合うほど、未玲は「できてない。いいや、ある意味で彼女らは、既にできあがっているのかもしれない。そ……酔ってるんだ。まちがいない。」

腐女子、上等か。

神代未玲は、それほどまでに腐っていた。

そりゃ本当は自分だって他人のことをとやかく言う資格なんてない。

なぜかって、あたしだって立派な”オタ”だから。

ただ一つ違う点といえば、あたしはそこまで”そっちの道”に腰までどっぷり浸かっているわけじゃない。せいぜい片足ぐらいかな？ だけど未玲はそんなことまるでおかまいなしに、あたしをその腐の道に引っぱり込もうとする。何が「いいじゃん、どうせおんなじ

だし」だよ……。

全然同じじゃないよ——だって、だって腐女子^{かのじょ}らが愛するのは。あたしは違うよ、え。何が？ 何がってその……。

そう問われれば、途端に答えに詰まってしまう。なんでかな。何が違うの？ ナミは何が好きなの——？

まただ。また、あの時の未玲の言葉が白々しく宙を舞う。それは——それは……。

どっちにしても、明日はコミフェ初日だ。

朝からやけに眩しい夏の日差しが、徹夜明けの目に痛い。

それは過ぎ去りし高校時代、もう随分と遠い日のような気がする彼女との日々。

黎明の星が彼方の空で最後の輝きを解き放った瞬間、瑠美那は悟った。

自分が確かに何ものかに生まれ変わることを。それは鏡の向こうの世界、そこにいる、もう一人の自分だった。

イザナギというこの国の名は、その片割れであるイザナミを文字通り黄泉の国へと葬ったことの証、だから。

「ルミナス、だから貴方と出逢えたのね……」

“海”は、どこまでも青く広がっていた。その海原は命の源。そして命が還るのは星の海。

海と天空。生と死は、確かに一つに繋がっていた。その時空を越えてうねり続ける波の彼方で“あたしたち”は一つに繋がる。

イザナミ——それは一つの暗号のようだった。命を生み育み、そして再び生まれ変わるために一時眠りに就くための。その星の輝きを忘れない。月も太陽も、そしてこの大地も海も……全てがそこから生まれた。さあ、おいでなさい。深い眠りの淵で、あたしはその声を聴く。

……きつと、また逢える……、振り向き、闇に飲み込まれる刹那、その手に包み込まれた気がして、ふと安堵した。

何でもない日常が、いつからか不可思議な軌道を描き始める——それは、もう一人のあたしが確かに望んだこと。そうじゃなかったら未玲にも、それにきつと“彼”にだって出会えなかった……。

*

伊勢崎ナミ、二八歳。この事務所に勤めて今年でもう五年になる。

基本的にはデスクワーク。でも一応サービス業ってことで、当然TELでの不在再配達連絡などの顧客対応もする。対外的には、かなり大手の宅配業社。だから新卒ではなかったにしても、当初はそれなりに待遇いいとは思ってたんだけど……。

だけど、そこが甘かった。やっぱりあたしにはサービス業なんて向いてない。ていうか全然ダメだ。最近では大体仕事にも慣れたし、客の扱いもそれなりに分かってきた。なのにこの異様な疲労感はないのだ。とにかく忙しすぎるんだ。今時数少ない座り仕事だったのに。なんでこんなに疲れるんだろう…… やっぱりあたしもトシってことかね。

特別、周囲の人間関係に問題があるわけじゃない。確かにあんまり積極的に人と関わりたいとは思ってないけど。ただあたしは昔から人前で妙に緊張する癖がある。癖…… 緊張？ いや、そうじゃない。本当はそんなもんじゃない。そんな並大抵のことじゃないんだ。

時々人の間にいて他人に囲まれていると異様に苦しくなる。酷くすると、その場から逃げ出したくなる。よくあるパニック障害ってやつなのかな？ と、一時期は一応疑ってみたが、どうもそうじゃないらしい。それよりか幾分、症状自体は軽いが、それに悩まされている本人にとっては、そんな風に単純に比較できるようなものじゃない。

ほんととはこんな風に当たり前に会社に勤めるんじゃないくて、できるだけ人と関わらない仕事に就きたかった。そう、作家とか創作関係。確かに自分の生来の引っ込み思案な性格棚に上げて、些か虫が良すぎる話だけ。

今現在は、とりあえず受診した精神科で処方してもらった抗鬱剤

を飲んでいる。うん、薬も病院の雰囲気も思ったより悪くない。そしてあたしは、気のせいかな歯切れの悪い担当医師に代わって、いつしかその諸悪の根源を突き止めた。

『社会不安障害』——か。最近になってようやく巷で認知され始めた、ネットで調べたその病名は、いかにもって感じで、あたしの症状にぴったりだった。それでも最近では薬のおかげか、それも以前ほど酷くなくなってきていた。職場の対人関係も、それなりに良好だ。でも、何かが空しい……何かが、おかしい。

「伊勢崎さん、電話鳴ってるよ」

「あ、はい……すみません」

右隣の席で書類を片付けていた村瀬さんに促されて、我に返ったあたしは、とりあえず受話器を取る。村瀬さん——一応先輩のこの人は、いつもそうだ。いくら電話が鳴っていても、自分ではほとんど取らない。ま、後輩に積極的にハードルの高い仕事を優先させてやらせるのは、どの職場も同じってやつか。それでも時々釈然としない瞬間がある。

けど、あたしはただ言われるままに淡々と仕事をこなすだけだ。幸いなことに、電話は相手の顔が見えない。だからどんな人間でもある意味自在に演じられる。相手も、そして自分も上手く騙すことができる。ただ淡々と忙しく仕事をこなして、たとえ残業が重なったとしても、いわゆるサービス残業には決してならないのだから、むしろ今現在の収入的なことを考えれば、ありがたいとさえ言える。

だけど。なんか疲れるんだよなあ……。

ほとんどお飾りみたいな銀縁メガネを押し上げて、化粧っ気のな

い血色の悪い顔を、あたしはさらに人知れずくすませる。肩に掛かる髪をいつも後ろで一本に束ねているのは、単に顔に掛かる髪がうるさいだけなのだが、うるさいのはそれだけじゃなかった。自分に吹き付けてくる色んな風圧を、さりげなく受け流して、要するにその余分な空気抵抗を少なくしたいだけなのだ。

もう、一生こんな生活続けるのかと思うと、内心うんざりかもしれない。

けど、あたしには”趣味”がある。その趣味を続けるためには、少なからずの収入源と当たり前の日常が必要だ。こんな退屈な肩の凝るデスクワークだろうと、やたら神経を使うサービス業だろうと、ただありがたく受け入れてずっと続けさせて貰うだけなのだ。

そう、それが当たり前の現実。

……あれから未玲はどうしたろう。あれ以来、彼女からは何の音沙汰もない。こっちは普通に短大卒。そして向こうはマスコミ系の専門学校……を、きちんと卒業できたんだっけか。

本当は未玲に関する、そういった諸々のことを、あたしはほとんど知らない。というか根本的に教えてもらえない。もう余裕で一〇年経つのに、だ。一応、友達でしょ。だけど彼女とは単なるオタ仲間ということ以外、一緒にいる理由があまりなかった。だから、お互いのその後について、しつこく詮索するのは無粋というものなのだろうか。ま、それならそれで別にいいんだけど。

——もう一〇年。いや、普通に考えたら、それが自然なのかもしれない。どんなに仲のよかった学生時代の友達だって、お互いの変化に連れいつかは離れてく。それなのに。どうしてこんなに気にな

る、いつまでもこだわってしまっただろう。

あたしと未玲は、確かに一種の運命共同体みたいなものだった。少なくともあの頃はそう思ってた。一番身近にいて一番心から語り合える何かがあった。誰よりも何よりも？ まあ確かにその意味では、あたしも立派な腐女子なのかもしれない。彼女のように積極的に認めるわけではないが……別にそればかりってわけでもないしね。それでも、その分野以外では何かと引っ込み思案なあたしを、未玲は外の世界へ積極的に引っ張り出してくれた。

だからなのかな。彼女と音信不通になって、何となく心の均衡が崩れ始めたのは——この10年、ずっとこんな調子だった。何か自分が自分でないような、自分の一部を失ってしまったような。

確かに独りでもオタクは続けられた。むしろ孤独だからこそ続けられる趣味って気もする。でも……やっぱり独りは淋しい。語り合える誰かがいるってことは、ものすごく重要なことなんだ。それは別にオタクな趣味に限った事ではないけど。

何が原因なのか分からない。そもそも原因なんて特別見当たらなかったのかもしれないけれど。それでも、あたしは自分でも知らぬ間に大事な片方の対^{たい}を失ったのかもしれない。楽しかった、嬉しかった。未玲と一緒にいて。

だいたい腐女子とか普通のオタとか、オタと一般人同様に比較するコト自体ナンセンスなのだ。別にいいじゃん、あたしたちさえ楽しければ。特別誰に迷惑かけてるってわけでもないのだし——そう、あたしたちだって普通の人間だよ。普通の人間が普通に何かを楽しんで何が悪い。それはそれで当たり前前に暗黙に主張してもよいことだ。

だけど未玲として、確かにどこか何かがつつも引つ掛かっていた。

どうしてもあたしは、彼女みたいに”それ”一方に染まれない。そう、単純に彼女みたいに腐になりきれてないってこと。別にならざる必要なんかない。それは単に性格の違いや趣味趣向の差異みたいなもので、特に気にする必要なんかないはずなのに。それなのに彼女は、未玲は、どこか何かが根本的にあたしとは違っていた。

だからほんとはあたしは、彼女といってもずっと淋しかったんだ。

本当に解り合えない孤独。だからこそ、いつも一緒にいたいと思う気持ち。

もしかしたら未玲があたしから離れたのは、その孤独を断ち切るためだったのかもしれない。

*

昼休みの屋上……あたしはとっておきの一人きりの場所——隅っこの特等席で、いつものように、やわらかな微風そよかぜと斜めに射す日陰を楽しみながら一人弁当箱を広げた。休み時間くらい一人になりたい。それが本音だった。少しでも頭の中に、心の中に隙間を作らないとやっていけない。それは別に社会不安障害だからってわけでもなく。

薄青い空と遠くの山並みでたなびく雲が目優しい。あたしはぼんやり最近見たアニメの内容ことなんか考えながら、ぽけーっと箸を口元へ運ぶ。そのうち心は次第に頭の中に響く無音のアニソンとともに全然別次元へと飛んでいく。

こう表現すると何だかいかにも、馬鹿っぽいアニオタという気がするけど、実際そうなのだからしかたがない。むしろそれは至極自然なことだとも思う。それはまるで昨日会った人のことを思い出すがごとく。昨日あった出来事を思い出すみたいに。そう考えると普通の人が見るドラマだって同じだ。

いやむしろ、現実とドラマの間にどんな隔たりがあるっていうのだろう。突き詰めればアニメだって同じだ。単に二次元と三次元の違いだけなのだ。あたしたちの心の中には、二次元も三次元もないむしろ心とは、アニメや漫画のような平面の世界だって奥行きのある三次元に変換できる便利な代物なのかもしれない。

だから——あたしたちのような救えないオタクがいるのかもしれない。

しかも最近のアニメは諸々の技術が発展して音も映像も臨場感たっぷりだから始末に終えない。別にそれが一番の理由というわけでもないが、それくらい本格的な魅力がある。日本が世界各国からアニメ大国と持てはやされるわけだ。あたしは未玲ほど腐の方向へ突っ走ってるわけじゃないけど、それ以前に子供時代からアニメはよく見ていて、ほとんどアニメで育ったような幼少期だった。だから個人的にこだわりもあるし、この世界に特別な愛着もある。未玲はどうだか知らないけど……青春時代をアニメ全盛期で過ごした、典型的な黄金アニメ世代なのである。

でも、それでもやっぱりあたしは独りだった。

そんな時、こんなあたしが奇跡的に出合ったのが未玲だった。

第一印象は、とにかく冷たくて怖いという印象。それと同時にまるでエヴァの惣流・アスカ・ラングレーみたいな髪型の長いツイン

テールが印象的だった。そう——まるで未玲はお人形さんみたいだった。目力の強い、端正なくっきりとした顔立ち。颯爽とした立ち振る舞い。あれに剣道部よろしく胴衣を着せて木刀でも持たせれば、それはもう立派なコスプレイヤーのできあがり。それは冗談としても、確かに未玲のすらっとしたスレンダーな長身は、いかにも平凡などんくさい風情のあたしなんかより、ずっと人目を引いた。

それに見た目以上に彼女の性格には魅力があった。自分の言いたいことは迷わず、はっきり言う。そして何より主義主張が明確である。そんな彼女なら別に人見知りの激しいあたしでなくても、色んな友達が他にたくさんいても、全然おかしくなかった。でもなぜだか未玲は、いつでも一人だった。

単純にあたしはそんな未玲と一緒にいて嬉しかった。そう、未玲がとても好きだった。彼女はあたしの自慢の友達だった。

あたしほど幅広くアニメ作品についての知識があるわけじゃないが、こと自分の贔屓のキャラのことになる、未玲はことごとく熱くなる。そして、どんどん自分の好みに都合のよい妄想をでっちあげる。実際、絵もネームも水準以上。特別、学校のアニメ系の何かのサークルに属しているというわけではなかったが、あたしたちはいつしか個別に二人だけの同人サークルを立ち上げていた。

無論、それも未玲が主導権を握っていた。

「あんたは絵なんか描けなくなっただけいいの。そっちはあたしが全部やってあげるからね——その代わりあんたのアイデアは、あたしに全部ちょうだい」

あたしだって一応は、その妄想という分野には長けていた。それを認めてくれていた未玲。自分で言うのもなんだが、それだけは事

実だ。ただそれを目に見える形に表現するのが下手なだけ。それを文字通り表立つての表現者そのものの未玲が代弁する。つまりインプットとアウトプット。あたしたちはそういう関係でもあったのだ。星座でいえば、天秤座の未玲と牡牛座のあたし。内と外の表現者。

それでも時々、彼女の腐女子論がうざったく感じる時がある。

「別にいいけどさあ……でもなんで翡翠が攻めで琥珀が受けなの？」それは勿論、某アニメキャラのことである。こういう話をしていくだけで、いかにも腐の会話って感じた。あたしは、ほんととはほとんどどっちだっていいんだけど……。

「だってあなた、ヒスコハは最早確定でしょうに！先週のアレ見たでしょアレ、わかんない？」

「うーん。微妙にわかんない」

「ちょ！解れよ、自分——アソコはですね翡翠が初めて琥珀の芳しい初心さ加減に気付くシーンなの……あれはよかったわ。ものすごい勢いでヒスコハ同人が増産されていく瞬間が見える」

「ええ、アムル宇宙^{そら}が見える、ですか」

うわ。コイツら、やば……くれぐれも、そんな風に引かないように。これがあたしら腐女子のいつもの会話なんだから。ちなみに翡翠と琥珀というのは、その当時アニメ界で一世を風靡していた某監督作品のSF格闘アニメのキャラである。この世界の一般常識ではいかにも優男風味の翡翠が受けて逆に肉体派の琥珀が攻め——つまり男女の恋愛関係における、どっちが女役でどっちが男役かってこと——という見解。それを易々と覆す未玲は、確かにどこかがおかしい。

まあ考えてみれば、常に男と男どころか、ぶっちゃけ無生物と無

生物でさえ、801的思考に置き換えてしまいかねない腐女子らは……。そこまでいかににしても普通男女間で成立するはずの恋愛関係が、彼女らの妄想の中では、至極自然に男同士で具体的な行為に至る。冷静に考えてみれば、そこが自分でも怖いと思う。そうなのだ、頭の中ではどんな妄想でもOKなのだ。だから無論、この世界では、薔薇やよいに対する百合という別なベクトルも存在するのだが――つまり女同士である。こっちはこっちで、それなりにかなりやばい。

そついう妄想が勝手気ままに自由に闊歩し、一人歩きする世界。

それが高じて、よく犯罪などへその世界が暴発するというのは、また別な話だけど。それこそオタやアニメやらが、よく引き合いに出されたりするのだが、実際問題それらが直接悪いというのではなく、単に間接的なことで、それをする人間それ自体の問題だと、あたし自身は思ってるんだけどね。

それはそうと高校時代、あたしと未玲はよく、その翡翠と琥珀の正反対の性格のイケメンがダブル主人公の人気アニメ『ガイアギアス』に夢中になっていたっけ。本作はかねてからロボットものアニメで定評のあり、独自の歴史を築いてきた某老舗アニメスタジオ作品で、ガイアの監督は本スタジオの某大物監督。そして副監督は竜崎、竜崎悟朗。今でこそアニメ業界各所に名を馳せている、いわゆるやり手監督ってやつである。本当は男臭い熱血アニメのはずが、いつのまにか腐女子御用達アニメになってるっていう、よくある某有名少年誌が原作のジャンパアニメみたいな法則。監督はじめスタッフは決して狙ってやってたんじゃないんだろうけど、最早腐のおともだちが皆、ほっとかないわな。

未玲はその当時、そのヒスコハに夢中になっていた。敵同士であ

るという数奇な運命を経て、コトある毎にぶつかり合い、やがて二人は結ばれるっていう美味しすぎる腐的オチ。あの、実際はもつと男同士のガチ勝負の話なんですが……むしろ特撮っぽいヒーローアニメなのに、普通に考えたら、絶対おかしすぎる。それを平然と餌食にされるのが腐女子の皆さんの心理なのです。わはは、楽しいだろ、楽しいよな兄弟。満面の笑みを湛え、すかさずフォローを入れる未玲の姿が脳裏に映る。

さてと、これ以上突っ込んだ話するのはやめにしとこう。そうでないと、あたしが誤解される。

基本的に、あたしにとっての腐モードは別次元の世界だ。

世間で通用する一般常識からオタ世界へ突入して、さらにもう一段階奥まった部分。その禁断の階層、秘密の花園はあたしも、そう何人でも犯せない。でも未玲の場合は、むしろ逆。そういった腐的思考が世界の中心。そして次第に無関心の外の世界へ意識が拡散していくのだろう。そこがあたしと彼女の根本的な隔たりの原因だったのかもしれない。そして、それ自体は至極付随的なハナシで、本当の原因はもっと別なところにあつたのだと、後であたしは気付くことになるのだが――。

安泰な昼休みを終えて仕事に戻り、そして内容のあるような、ないような数時間を過ごしてから、ようやく帰宅。バス通勤なので30分置きに駅に着くバスの時間を確認してから、早速帰途へ。

バスの車窓から何気なく夕暮れの街を眺めながら、とりあえず無意識の関心事は、今ではめっきり減った夕方の某アニメの録画予約が上手くいっているかということ。そのためアフター5は、迷わずまっすぐ帰宅。もう笑わば笑え、の世界である。既にほとんど一般的に三〇代目の姉ちゃんができることじゃない。しかし、あたしは元々一般人から微妙に外れてるし。それに勿論オタであることと同義に、それ自体の行為も極自然な、毎日の日々の流れの延長線上の中に当たり前にある。だから別段おかしいとも思わない。

無事タイマーが始動していることを部屋のデッキ液晶で確認してから、ほっと一息。早速着替えに入る。勿論、パソコンもその時同時に起動させとく。これでとりあえず準備ばたん。夕食時まで一

通りのサイト巡回はまだしも、メールチェックくらいは済ませておく。

あ、無論メールはスパムメールとその他のポイントサイト関連のメールの仕分けが最初の作業。それから各ポイントメールのリンクをクリック。この辺は別にオタでなくとも誰もがやって全然おかしくないことだろう。因みに出会い系のスパムはたくさん来ても、誰かネット上の知り合いからメールが来るってことも最近では随分と稀になった。勿論、リアル友達など、いざ知らず。

ああ。未玲のメアドは……メールを送っても返事が来ないことが怖いから、しばらくそのままにしてある。もうとくにメアド自体変わってるかもしれないしね。

「ナミ——御飯よお」

変に間延びした母の声が階下から聞こえてくる。

ほんとは家事でも手伝ってやりたいところだけど、でも実際あたしの出る幕は、ほぼない。ある意味、放蕩娘でごめん、母さん。この穴埋めは、いずれきっちりするから。と、とりあえず心の中で手を合わせてから部屋を出る。

因みにうちは父も母も健在。当たり前だけど。あたしとその両親との三人住まい。4つ下の妹は既に家を出て、今神奈川の大学に勤めてる。そ、あたしとはそもそも出来が違うってやつ。それでも姉妹だけあって一応あれも一種のアニオタだったりするのかなあ。あたしほど無駄に濃くはないんだろうけど。

居間のTV画面に映っているのは、勿論7時のニュース番組。まちがってもアニメ番組じゃない。第一アニメ自体、近年ではほとんどが深夜枠へ移動している。そのことが指すのは、アニメを見る子

供が極端に少なくなっただけのこと。つまりその大まかなターゲットは——ほとんどあたしみたいな二〇代や三〇代。つまり定職に就き一定の収入があるアニメファン層なのである。無論それはDVDなどの関連グッズを惜しまず買ってくれるから。そして十代ファンもその予備軍でことで外せない。こりゃあますますオタが棲み易い世の中になっていけねえや。などと喜ばしいのか悲しいのか、よくわからない感想を思ってみる。

世間一般では、少子化とか結婚しない若い男女の存在が問題視されてるみたいだけど——それがイコール、オタが増えている傾向にあるのとか関係あるのかないのか。でも結婚してるオタクも世の中にはたくさんいるけど、ね。下手すりゃ夫婦でアニオタとか羨ましい家庭環境だってあるらしい。そういう家の子供は、やっぱり総じてアニオタになるんだろうか？ まあ親がそうなんだから、すべからくそうなるのかもな。ほんとよくわからない世の中になったもんだ。

「ねえナミ……あんた、つきあってる人とかいないの？」

唐突に母、澄江にそう切り出されて、思わず茶を噴き出しそうになる。

「まさか。何、寝言いってんの」

あたしの性癖は既に知ってるだろうに、この母は。

それでも母のあまりに心配そうな表情にうんざりする。

「実はね、実生が近いうちに結婚するんだって」

ほう——そういうことか。実生^{みお}というのは、今、神奈川で一人暮らしをしてる、あたしの妹である。なんだ、やることやってんじやん。実生^{みお}ってば、解^とったことだけど、やっぱりあたしとは遺伝子レベルで仕組みが違^{ちが}うのかな。

「で、それとあたしとどういう関係が」

「あんたも、そろそろ……」

という話が始まった時点で、ほとんど真面目に聞かないことになっている。

そりゃあたしだって一度や二度は真面目に考えたことはある。だけど、考えてもどうしようもないことだってある。なのに、まるでモノ欲しそうな顔して、手当たりしだい男あさりしたいとは思わない。だいたい数撃ちや当たるってなものでもなし、馬鹿げている。実際あたしは友達だって、ほとんどいないしな。そう……未玲以外は。

*

ネットの裏サイトで今、噂になっていている事象がある。それはネットのオタク世界の中で怪情報も怪情報、ほとんど眉唾ものの都市伝説のようなものなのだが。

——『一昨年秋、放送が開始され、爆発的人気を呼んだ深夜アニメ「ルミナスコード」の続編が近く制作されるらしい』
ここまでではいい。問題はそのあとだ。

——『その総監督である竜崎悟朗は、実は宇宙人である』
あはは、つまんね。

——『エエエどんな面白い続編ですか？』
——『竜崎が宇宙人なら円城寺はネカマとかな』

いかにもネット住人が喰らいにつき、好みそうな話題である。あたし自身、そんな噂は箸にも棒にも引つ掛けなかった。そんな碌でもない怪電波は綺麗にスルーするとして、それより、その『ルミナス

コード』である。

あたし個人としても彼、竜崎監督の動向は常日頃から気になっていた。それくらい、いまや鬼才と囁かれ、アニオタ中心に絶大な人気を誇るアニメ監督なのである。そうそう、件の懐かしの『ガイアギアス』も竜崎監督参加の作品でした。未玲との懐かしき日々が瞬間、走馬灯のように脳裏をよぎった。でもそれも一瞬の出来事。

実はすごい美人と噂の円城寺冬華。彼女と竜崎監督が恋人関係（しかも不倫？）……というのは、割とよくある噂である。でもそれにしたって、そんな根も葉もない噂を信じるなんて馬鹿すぎる。中の人——つまり声優自身のプライベートなど問題視しないのと同様、スタッフ間がどんな関係性にあるなんて問題外、ルミナスオタとしては、まさにそんなの関係ねえ、である。

「どうでもいいけど、早く新しいルミナス情報でもあげてくれよ」
思わず口にした途端、一通のメールが入った。

それは登録していたルミナスコードのFCメール。近く都内で開催される某イベントがあるらしい。それに『おめでとうございます。伊勢崎ナミさん、あなたは当選されました』——という地味な文面が画面に踊っていた。

どど、どうしよう、当たってしまった。夢じゃないよね。これってルミナスFCからの真正正銘のメール情報だし。決してガセネタでもスパムでもない。けれどあたしは、そのメールに記載されていたリンク先の先行情報の一つに釘付けになった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

制作 スタジオ・ネプチューン
キャラクターデザイン A/R/C メカニックデザイン 佐原
秀史

メインアニメーター 大森貴幸 若林聖子 美術監督 栗山義之
音響監督 平賀光雄 音楽 藤宮みつぎ
脚本シリーズ構成 円城寺冬華 副シリーズ構成・脚本 神代未玲
監督・原案・演出 竜崎悟朗
企画プロデューサー 蘇芳孝臣 進藤芳和 久米昭二

OPテーマ 「Luminous Code」/ Luna-Ma
ria

EDテーマ 「光のkiseki」/ 水澤ひとみ

- - - - -
- - - - -
- - - - -

数々のスタッフクレジットに紛れ、そこにあつたのは、忘れもし
ない旧友の名前——神代未玲。

*

「ルミナスコード—Luminous Code—」

地球温暖化の進行した2XXX年。地殻変動によって北海道と沖
縄などの各諸島、富士山頂のみを残し、日本列島が沈没した一七年
後、数十個からなる海洋ドーム都市が集まってできた海洋国家イザ
ナギは強国の支配から独立した——その海洋都市のひとつ、沖縄県
ニライカナイに住む女子高生、金城瑠美那^{るみな}は、ある日、不思議な体
験をする。神話の時代の亡国の皇子の生まれ変わりである、光の守

護神ルミナスと出遭った瑠美那。彼女はルミナスの意識体と合体し、生前の皇子の姿を現代に具現化させる。その一人の皇子の願いを叶えるため、ルミナスとなった瑠美那は……。

○海洋国家イザナギ

かつての日本が海洋ドーム都市として生まれ変わった姿。地殻変動によって日本列島全域が海中に沈んだ頃、地球温暖化によって日本海域は熱帯化し、珊瑚礁の広がる南海へと変貌していた。一七年前の大地殻変動から生き延びた人々は難民となり、強国ガイアに従うことで、なんとか自国を存続させてきた。その一七年後、ガイアの科学技術により、海洋都市国家イザナギとして日本は生まれ変わる。

○アマテラス、スサノオ、ツクヨミ

イザナギの三大巨大都市。それぞれの都市は海中トンネルで結ばれている。これら三大都市にそれぞれ付随する五〇からなるドーム都市によって、海洋国家イザナギは構成されている。アマテラスは政治経済など情報処理中枢の存在する文字通りの首都ドーム。スサノオは防衛庁直轄の軍事機能を有する防衛ドーム。ツクヨミは食糧生産中心の大規模な農耕ドーム。勿論それぞれに居住都市機能を備えている。

○ニライカナイ

一七年前の地殻変動によって本土が没する中、逆に隆起し沈没を免れた沖縄諸島——その沖縄本島に隣接され建設された小規模のドーム都市。かつて日本だったイザナギが独立するまで、日本近海に建設された海洋都市イザナギの中で、その名の通りイザナギの楽園と称され、もてはやされてきた観光都市でもある。元からの南国気質がそうさせるのか、強国ガイアの支配という圧倒的屈辱の中においても、ニライカナイの人々だけは、根っからの明るさを失わな

った。

。アマテラス

生前、皇子だったルミナスの祖国。古来、神話の時代に存在したと言われている幻の国家。未だその所在地は明らかではないが、研究者によると（諸説あるが）高天原かつての九州地方であったと推測される。

。イザナミ遺跡

イザナギ近海の高溝付近にあるという謎の海底遺跡。ルミナスの意識がランダムに記憶する暗号が鍵となり、幻のアマテラス神殿への扉を開くための入り口でもある。別称、イザナミの海。

「で――」

蘇芳プロデューサーが唐突に口を開いた。

「これら前期の基本情報を踏まえても、続編二期の具体的な方策は未だ決定していないと」

途端に、殺風景なアニメスタジオの一角にある会議室内が微妙に凍りついた。

「例の新人、本当に使えるんですか？」

前期の基本設定以外、無様に空白を晒している企画書を前に、制作進行が囁く。

「早晩こんな状態で制作を進められるんですかね。監督が直々に推された神代君は」

「ええ――その件に関しましては、どうか私に御一任を」

中央左席で宙空を藐睨んでいた一人の男。彼こそ本作『ルミナスコード』監督、竜崎悟朗であった。どの事務所でも禁煙が暗黙の了解になっている昨今、平然と煙草をくゆらせる蘇芳に竜崎は落ち着

いた声で言い放った。

「……監督、瑠美那役の水澤君は、既に」

周囲にはばかり皆に聞こえぬよう、小声で制作進行。

「大丈夫ですよ、乙部さん。そちらは私が」

長い黒髪、藍紫のスーツが印象的な美しい女性が傍らで微笑を含んだ声で魅惑的に囁いた。円城寺冬華。本作ルミナスコードの脚本シリーズ構成を務める才女である。竜崎、円城寺両コンビは、近年頭角を現してきた新進アニメスタジオ、ネプチューンの二大柱であり、いまや今現在のアニメ業界において並ぶもののない時の人となっていた。

その竜崎、円城寺以下、スタジオネプチューンの手掛けるルミナスコード。前作は主題歌CDやDVDなどの関連グッズセールスが様々なショップで軒並み第一位を誇るトップクラス。無論オリコン集計も一般アーティストや映画に届くほどの驚異的数字を叩き出した。大ヒットを記録したその一期終了から約一年後の今春、待望の続編放送も既に決定済みである。

だから、この決定事項は番組プロデューサーとしても絶対に覆せない。

「解ってるんでしょね、竜崎さん」

「はい、これはビジネスです。私は皆さんを裏切りませんよ。いずれ視聴者であるファンの皆さんにも、満足の行く結果をお見せできるでしょう」

「その自信満々の発言、どうか、お忘れなきよう」

もう一人のプロデューサー進藤が念を押すも、依然竜崎は不適な笑いを浅黒い顔に湛えたまま頷いた。

*

「ああ、そうだ。で、リベルテの上層部は何と言って来ている」
ある雑居ビルの一角にある小奇麗なオフィス。いや、正確には一種のスタジオである。その一室から男のくぐもった声が聞こえる。

『現状を維持——そのまま観察を続けよ、とのことです』

「……あいつらにしては、やけに悠長だな」

男はニヤリと笑うと、傍らのソファに腰掛ける美女にめくばせした。

電話で話しているような、そうでないような。どちらにしても、不思議な光がその部屋から漏れ出しているのは確かだった。おもむろに通信を切ると、男は改めて女に向き直った。

「竜崎さん……いえ、ヴァルゴ。今回のイベントでは、なかなか面白い子がみつかりそうですよ」

「まったくお前さんには恩に着るよ——リーヤ。というのは、ここでは御法度だったかな」

「ふふ、もし誰かが聞いていたとしても、特別何かを感じられることはないでしょう」

そう何しろ、この時代は……。誰かが知るわけがない、何一つ知りようもない。そうね、もしそんな存在があるとしたら、ルミナスと誓約した人間だけかしら。リーヤと呼ばれたその女性は妖しげな微笑を窓の外に投げかけた。

最近、あたしを久々に夢中にさせた作品がある。

それは言わずと知れた、スタジオネプチューン制作の『ルミナスコード』である。監督の竜崎作品としては、これで三作目か。副監督だったガイアギアス、そして続く初監督作品のアクエリアンサーガ。同じくネプチューン作のアーケイディア。どれもそれぞれの味があつて面白かったが、このルミナスコードは、どこか何かが違つていた。

本当になんだらう、この気持ち——それはさしずめ「恋」という言葉のような。そうか、こんなあたしもいつぱしの乙女だったというわけか。そんな風に自分を茶化している暇も碌にないほど、あたしを虜にさせた一人の男。

はは、そうだよ。相手は見事に二次元のアニメキャラ。だが、確かにコイツは生きている。生きてここで呼吸していると感じる。単純に声を当ている声優のせいなのか。確かにキャラクターに命を吹き込む職業、というフレーズは声優の代名詞だけど。

だが、それだけではない不思議な何かが、このルミナスにはあつた。

その射抜くような瞳の引力が、やけに心を熱くさせる。

けど、基本的にはどこまでも我がままで唯我独尊、誰がなんと言おうと我が道を行く、という性格がただけじゃない。それでもコイツのそんな不遜な態度がまたいいという感想もよく見かける。でも、こんなやつ本当に現実にいたら、あたしは絶対に願ひ下げだな。そ

う薄ら笑いを浮かべながら、さつき届いたばかりのイベント詳細通知の封筒を開いた。

そこには一期のお決まりの文句、本作品のキャッチコピーが踊っていた。

『あなたのために誓約します——』

そうなんだ。うん、あたしは結局この一言にやられたんだろうな。今の時代、絶対に日常会話なんかには飛び出さない古風な台詞。中世ヨーロッパか何かの時代の文句みたい。そこにはガイアギアスの男臭さやアクエリのクールさなどとはまた違った何かがある。

あ、そうか。考えてみれば、これって結婚……の言葉が出掛かって、あたしは啞然とする。常日頃、うるさく親から聞かされていた二文字。まだだまだだと思いつながら、世間的にかなり意識を刺し貫かれ続けていた忌々しいあの言葉。

なんでこんな所で——そう思いつながら、あたしはかぶりを振った。そうそう、それどこじゃないんだったわ。

——『ルミナスコード・スペシャルイベント！見事当選されました会員様には、本イベントのチケットを同封いたします。ここでしか見れない聞けない、あれやこれやにあなたの目は耳は釘付け——まさに世紀の人気アニメイベントがここに開幕！ 主催：スタジオネプチューン MCXテレビ 後援：フォーチュンヴィジュアルシャインプロモート』

……つたく、竜崎氏も偉くなったもんだな。十代の頃から氏が関わった作品を見続けてきていたあたしは、このこれでもかとでかでかと銘打たれ、数々の社名の綴られた記事を眺めて、しみじみとし

た感慨に耽った。

どちらにしても、賽は投げられた――。

まさに出たとこ勝負の一〇万分の一の確率。仮にルミナスのファ
ンがそれくらい、いたとして。『賽は投げられた』？でもコレ一
体どういう意味なんだろう。この最後の一文に少し引っかけたが、
そんなこと気にしている場合じゃない。

――『うへー当たったのん？ お宅スゲーじゃん』

――『あれって会員じゃないと当たらないんだよね？ やっぱり
アタシも入会しとけばよかった』

――『ルミナスの中の人も当然来るんだよねー』

――『俺あ、瑠美那役の水澤ひとみタンに会いてえ』

そんな会話を数々のネット掲示板などで日々みかけるようになり、
否応なしに期待と胸の鼓動が高まる。

そういえば、神代未玲って。同姓同名にしては……かなり珍しい
名前だしね。あたしの心には、やはりあのルミナス公式サイトのス
タッフクレジットが焼きついてた。見間違い、じゃないよね。そ
れは何度も確認したから、あたし自身の目の錯覚ってわけじゃない。

未玲――まさか、ね。

それでもあたしは、半分はその事実を確かめるために、その都内
イベントに足を運ぼうとしていた。

*

「海神――w a d a t s u m i――」……ルミナスコード公式FCで

ある。

思えばコレに入会したのが、あたしの運の尽き、いや運命の分かれ道だったのかもしれない。会員には番組詳細情報、そして諸イベントの案内やオリジナルグッズ販売などの会員特典が与えられる。ここまでは普通のFCと一緒に。だがルミナスFCが特異なのは、その突っ込んだ内容にあった。当選者には、制作現場訪問や、出演声優、スタッフとの座談会などへの参加が認められる。

だからある意味で、このスペシャルイベントも、その様相を呈していたのかもしれない。最初は単なる続編発表イベントくらいに思っていたのだが。ところがどっこい、そこはルミナス。

なのであたしは、ほんとに当たってラッキーだったと思っている。いや幸運とか不運とかじゃないな。とにかく気になっていたんだ。ずっと未玲のことが……。

本当は少し怖い。確かに彼女はマスコミ系専門学校に通っていたから、同人制作経験者ということでも、ある意味で夢を叶えたということなのかもしれない。もし、あのクレジット名が同一人物だったとしたら。だからこそ久々に再会できるかもしれない未玲が、突然遠い人になってしまったようで。

でも、あたしは行かなきゃ。やっぱり会いたいよ、未玲。

けれど、その時のあたしはまだ知らなかった。あたしが未玲と同様、ルミナスに選ばれた人間だったなんて――。

*

その日、あたしは久々に顔を出したチャットで不思議な体験をし

た。

そこは、いまや男女問わず人気のルミナス公式サイトのチャットルームである。日々様々な人間がまるで有名サロンに入り浸るよう大勢出入りしていた。だいたい世の公式サイトと名の付くものには、掲示板ならまだしもチャットというものが存在するのは、ほとんど稀だった。それは具体的にNGワードが設定されていたり、いちいち管理者の承認が必要だったり、掲示板のように根本的な管理そのものが今の所十二分にできないから。

だが不思議なことに、このルミナス公式は別物だった。掲示板はおろかチャットまでもが併設されているのに一度も荒れされたことがない。単に規制がなく自由でリベラルなのはよいとして、一体どんな仕掛けがあるんだろうか。様々な謎がひしめくルミナスコード。この公式サイトの一件も、その七不思議の一つだった。

それはそうと、仕事が休みだった土曜のその夜、あたしもいつものように、例に漏れず入室。深夜2時を回った頃から人が少なくなりだした。そして……。

3時か、さすがにもう寝るかな。そろそろみんな落ちる頃だし。と、退出ボタンをクリックしかけた、まさにその時。

——riya『コンバンワ』

相手に合わせ、慌ててキーを叩く。

——namihiei『ども、こんばんわ』

——riya『namihieiさん、面白い名前ね。クスクス』

——namihiei『あは、ほとんどギャグですギャグ』

—— r i y a 『ルミナス、スキですか？』

—— n a m i h e i 『そうっすねーもう最高っすよ』

—— r i y a 『それはよかったです、私も大好き』

……と、こんな感じで話題は進行していく。でも別れ際、あたしたちは実に信じられない約束をしてしまった。それはほとんど、相手に乗せられてしまったからなのだが。

—— r i y a 『今度のイベント当選した？』

—— n a m i h e i 『うん、ほんと信じられないくらいラッキー』

—— r i y a 『実は私も……それで一つお願いがあるんだけど、いい？』

—— n a m i h e i 『なに？』

—— r i y a 『……私と会ってくれないかな——伊勢崎ナミさん……え？』

その瞬間、突然相手の声が頭の中に響いた気がした。パソコン画面の文字から想像していたのは、十代くらいの可愛い女の子。でも、その時あたしの脳内に聞こえたのは……。

ぞつとするほど綺麗な女の人の声、だった。

その瞬間、あたしは突然ワケのわからない目眩に襲われ、いつの間にかキーボードの上に突っ伏していた。翌朝目が覚めると、件のチャット画面はキレイに空っぽになっていた。

*

あたし伊勢崎ナミが、このルミナスコードに夢中になった要因がもう一つある。それは海——要するに海洋都市——が舞台である、ということだ。

子供の頃からあたしは、妙に海という場所が好きだった。つまり海辺。元々海とは縁もゆかりもない内陸部出身だったからだろうか。それだけに子供の頃、夏休みに家族で出掛けた海水浴などが切っ掛けで、それまで普段感じることのなかった海の気配……いつからか無意識のうちに潮風や潮の匂い、潮騒などに殊更に心酔するようになった。しかし成長するに従い”海”という場所は、次第にあたしから遠ざかっていった。

けれど高校時代に未玲というオタ仲間である友人に出合ってからというもの、海は再びあたしに近づいてきたような気がするから不思議である。考えてみれば、年二回夏と冬に開催されるオタクの大イベントである通称コミフェ——コミックフェスタ——は、開催初期は晴海にある東京国際見本市会場がその舞台だった。そして今現在も場所は違えど、同じ東京湾埋立地である有明の東京ビッグサイトにて行われている。

あれは一体なんなのだろう。なんだったのだろう。元々人ごみは大の苦手だった。そして実際、未玲に手を引かれるまま、高校三年間の夏と冬、足を運んだあの場所。有明に舞台が移った今では、たった一度しか行っていないけれど……もう蕁麻疹が出そうなほど苦痛だった。

それなのに、あの場所の異様な熱気にてられたのか、今では不思議に恋しいとさえ感じる。そして、そこにもやはり吹いていた、響いていた。つんと鼻腔をくすぐる潮風と、妙に耳について離れない微かな潮騒のざわめきが……。

その友人、神代未玲が第二期の脚本家として（実質的には副シリーズ構成サブ脚本名義だが）名を連ねていたルミナスコード。これは何かの偶然なのか、単にあたし自身がその必然的意味を頭の中で捻り出しているのか、本作の舞台も海だった。実際に感じることはできないけれど、やはりそこにも潮騒と潮の薫りはしっかり存在していた。まるであたし自身のDNAに必然的に組み込まれているかのように。

……そう。DNA、遺伝子。海って実は、人間本来の故郷とも言えるんじゃないだろうか。いや、実際そうなんだろうけど。だって人間のみならず、生物というものすべて、その起源は、^{はじまり}すべからく海から来ているのだから。

それでかなんてか、あたし自身が異様に海を恋しいと感じるのは、やはりそんな理由があったりするのかなどかは——確かに少し出来すぎて気もするけど。それはともかく、本作ルミナスコードの舞台である、かつて日本だったイザナギの海。もうすっかり四季がなくなり、よいのか悪いのか加速した温暖化のなせる技ということで、そこには珊瑚礁が広がる南海が広がっていた。

これが現実なら本当は憂慮すべきことで、ものすごく怖いことでもあるんだけど——それでも、あたしはそんな現実離れた海に、とても憧れていた。そう、現実なんて、とうにどこかへ吹き飛んでしまっている。ただ青い海と空だけが、どこまでも広がっている。本当になんなの、これ。何が起こっているの、今。

そして無意識のうちに、あたしはルミナスの眸^{ひとみ}に惹かれていた。まるで天真爛漫な主人公の瑠美那が、その意識の海に吸い込まれ、心ごと取り込まれていったように。

ふと我に返ると、あたしはイベント会場である都内某所にいた。

規模的に割と大きめのコンサートなどのイベントによく使われる某ホール会場である。会場には既に長蛇の列が出来上がっていた。ルミナスの会員って一体何人いるの？ 結構人来てるじゃない。確か当選者数は……。

それはそうと、元々人ごみが大の苦手ってことで、コミフェ経験者だつてのに時間まで並んで待つのは、あまり好きじゃない。それでも病院で処方された薬のおかげなのか、この手のイベントにも最近では少しずつ慣れてきていた。大体高校三年間、何とかコミフェの荒波を乗り越えてきた自分が何を言う。だけどその時は必ず側に未玲がいた。そして今度のイベントも、半分はその未玲と会うのが目的だった。

だけど未玲…… 本当にあなたなの？

半分は、まだ半信半疑。だけど、いくらなんでも同姓同名つても。確か彼女は、東京ジャーナリズムなんとかっていうマスコミ関係の専門学校に通ってたんだっけ。学校の専攻からして、その後はどこかの出版社にでも就職したのだろうか。そのくらいのこと、あたしは何一つ知らない。それでも友人って言えるのかどうか。

そもそも、どうして未玲は突然あたしの目の前から姿を消したのだろう。本当に何の前触れもなく。そのことが今でも心に引っ掛かっている。だから、あたしは、その理由を確かめるために未玲に会おうとしているのかもしれない。

そうこうしているうちに列は次第に縮まり、チケットの半券を係員に渡す順番が回ってきた。

「ルミナスの試験会場へようこそ！いや、オーディション、かな？」
「……え？」

一瞬、あたしの聞き間違いかと思った。けど、その男性係員は確かにそう言ったのだ。しかし他の入場者には、訝しがるような人間は誰一人としていない。

席に着いて開演時間を待つ間も、先ほど入場の際、係員にかけられた言葉が気になっていた。むしろ、ぐるぐると頭の中を無制限に回っていた。試験って何、オーディションって……？　これってルミナスコードのスペシャルイベントだったよね？　当選した興奮のあまり、きちんと内容確認してなかったかな。まさか、そんなこと。そういえば、よくよく思い出してみると、実際の内容については一切詳細が書かれてなかったような気がする。慌てて郵送されてきた当選通知、そしてチケットを改めて鞆から取り出してみる。

入場時に配られたパンフレットにも記載されていたが、当日の出演者は……進行役の司会者、MCXテレビの某アナウンサーはともかく。金城瑠美那役の水澤ひとみ、ルミナス役の篠崎聡己、ルミナスの幼馴染であるツクヨミ役の寺嶋彰などの人気声優は勿論のこと。監督の竜崎悟朗、脚本シリーズ構成の円城寺冬華、主題歌担当の男女混合ヴォーカルの人気ユニット、Luna-Mariaなど……まさにそうそうたるメンバーが揃っている。けど、そこには神代未玲の名前はどこにもなかった。

当たり前……なのかな。もし未玲が副シリーズ構成に抜擢されたとしても、突然こんなトコに出てくるわけもない。多分まだ、かけ

だしの新人だろうし。そう、必ずしもここで会えるとは限らないんだ。でも……。

そんなことをぼんやり思案しているうちに、いつのまにか開演時間が近づいてきていた。まさに全身を耳にしてコトの仔細を確かめなければ。そう思うと、急に心臓の鼓動がドキドキと早鐘を打ち始める。

*

『ルミナスコード―Luminous Code―02―緋の記憶くれないのミラージュ』
その日発表された、第二期正式タイトル。

思えば本作ルミナスコードの前シリーズである第一期は、沖縄の女子高生、金城瑠美那の力を借り、地殻変動を経て海洋都市国家となった日本によみがえった古の皇子ルミナスが反旗を翻すまでの物語だった。そこに真意があるのかないのか実に解りやすい、その以前は日本であつたところの海洋国家イザナギの体制の細胞奥深くにまで入り込んだ大国ガイア――右だか左だか解らないけど、こういう毒気のある思想をさりげなく盛り込む所などは実に才気あふれる新進気鋭監督である竜崎悟朗氏らしい。

でもその実、ルミナスとともにダブル主人公の一方である女子高生、金城瑠美那は毒つ気のかけらもない、実に明朗快活な女の子だ。そんな瑠美那を演じる若干二二歳の今をときめく人気声優である水澤ひとみ。彼女は、まるで瑠美那を演じるために生まれてきたかのような、やはり明るく天真爛漫で輝きに満ちた将来有望な女性声優であり、同時に歌もソツなくこなす文字通りのアーティストでもあった。そう、今風の声優（これは特に女性声優に顕著だが）は、そういうった歌方面は勿論、テレビの顔出しなどのビジュアル面での人

気も不可欠だった。

それはともかく、このルミナスコードはそういった大河ドラマ的な政治要素やメカものアクションもふんだんにありながら、同時にパートナーとして絆を築くことになる瑠美那とルミナスの恋愛的な物語展開も、その人気的一端を担っていた。

そう——その主にルミナスなどの女性ファンの多くを獲得するに至った本作こそは。ルミナスと瑠美那の表面的な恋愛パートのみならず。いやむしろ、この二人の主人公の関係が、あまりに普通ではないためか……？ どちらにしても、そういったありきたりな恋愛関係に飽き足らない人種を、その大きなターゲットとして獲得することと相成ったのである。

それこそが腐女子……やおいやらボーイスラブやら、男性キャラクター同士の恋愛関係を好む、その女性オタクである彼女ら腐女子が餌食とするのは、本作ルミナスコードにおいては。瑠美那というよりは、表面上ルミナスと敵対するツクヨミというキャラクターとの絡みにおいて集約される。

他にも瑠美那のクラスメイトである天文部員、石室聡介とツクヨミというカップリングもあたりすぎるが、やはりいわゆるツクルミ（もしくはルミツク）の最強カプには到底及ばない。……というのが、彼女ら腐女子の総合的な見解なのである。

そういうニーズを見越してか、はたまたそうでないのか、ルミナスと瑠美那の正規カップリングは勿論のこと、ルミナスとともに女性ファンに絶大なる人気を誇る、ルミナスとは対極にある存在の闇の守護神であるツクヨミという、もう一人の陰の人気キャラクターを生み出したのが、このルミナスコード脚本家である、円城寺冬華

の一つの手腕でもあった。

だから、ある意味で監督の竜崎は、本作で初めてコンビを組むこととなった、女性だからこそ発揮できる、円城寺脚本の妙味に絶大なる信頼を置いている。

ルミナスとツクヨミという二大人気キャラが意味するもの……。

今世紀始まって以来と謳われるほどの人気作となった、本作ルミナスコードがルミナスコードである所以——それは多くの女性ファンが、その人気のコアたるものを築いていることにこそあるのだが、王道といえば王道といえるだろうが、例えばアニメ界といえど、そういった確かな地盤を持つ、時代の空気を読んだ作風が大きなヒットの一因となったことだけは確かかもしれない。

*

開演直前、緊張する自身の肩を後ろから不意にポン、と叩かれ、あたしは思わずビクツとする。

「あなた、namih eiさん……？」

耳元に声をかけられた、そのほぼふざけたハンドルネームに、あたしはさらに膠着する。

「あの、riyaです。覚えてませんか？」

ふと、どこかで聞いたことのあるような名前だと思った。っていうか、なんでこの人あたしだって判ったの……あたしのこと知ってるの？

そう訝しがりながら恐る恐る振り返ると、後ろの席でエレガント

なツバ広帽を被りサングラスをかけた美女がにっこりと微笑んでいた。未だ深まる警戒心を解けず一言も返せずにいるあたしに、その女性は柔らかに微笑んだまま、軽く会釈した。

自分から名乗り出ない限り、ネットの住人同士は互いを確定できない。その当たり前の法則でさえ易々とクリアするかの如く、相手の女性は不思議な引力であたし自身を特定し意識を捉えた。いや、磁力といった方が相応しいかもしれない。

それだけにあたしは、やはり恐る恐るその r i y a と名乗った女性に半ばしどろもどろで答えた。考えてみれば、人違いですと言えば済むはずなのに何を正直に……。

「ど、どうして……」

「ああ。ごめんなさい。私、読心術が使えるんです」

その一言に殊更にギョツとする。は、読心術？……ますますもって怪しすぎる。ていうかさ——むしろ、やばすぎるよ、この人。

「そうね、人の心を読むなんて非常識すぎる……ふふ、そんなことより伊勢崎ナミさん」

まだだ。まさかパソコン画面通じてでも、人の心が読めるとか言うんじゃ……。

彼女 r i y a のコトを忘れてたわけじゃない。そのはずなのに、今の今まであたしは。まるで何かのロックがかかっていたように、こつして声をかけられるまでずっと彼女の存在は意識に上らなかった。そして…… r i y a はあたしの脳髓にある鍵穴に、おもむろにそのキーを突っ込んだ。

「もうすぐ始まるわ——そう、未来のあなたに通じる扉が今開かれる」

そう囁かれた瞬間、目の前が真っ白になり、意識がどこかへ飛んでいく。そこまでは微かに覚えていた。

そこで彼女も待つてゐるわ……。

未玲……。

最後の一言に思わず脳裏に浮かんだのは、その懐かしい友人の顔。そう、少しだけ淋しそうな。

「ねえ、母さん——母さんは淋しくないの？」

瑠美那は日焼けした顔を不意に後ろの座席の母に向けた。

学校帰りの長いようで長くもない道のり。青い空はどこまでも青く、すぐ傍に見える海も、いつもと変わらず青かった。けれど瑠美那には、時折それが酷く哀しく思える瞬間があった。

「そうねえ……淋しくないって言ったら嘘になるわ。でも」

一瞬言葉の途切れた母の顔がやけに懐かしそうに優しく凪いでいる。その顔を見ていたら、急にそんなことどうでもよくなった。

「うん、そうだね。なんとかなるるっ！」

「もう瑠美那ったら、それ言ったらナンクルナイサアでしょ？」

「アハ、ごめん……でも、やっぱ地元の言葉って何だか恥ずかしくってさあ」

あたし金城瑠美那は、この沖縄県の属するドーム都市、ニライカナイの女子高生。

出身は沖縄だけど、理由あつて一四歳まで本土——だつたところにあるアマテラスドームの叔母さんの所で育った。だから実際は沖縄で過ごすのは、これが三年目。大きくなってから、こうしてお母さんと生活するのも、これが三年目。いわゆる出戻り娘ってことなのかな。

でも沖縄は確かに隆起する昔からここにあつて、近代化されたドームなんか特に必要ないほどの活気に溢れていた。この賑わいは都

市、都会とはまた全然違った、生活感という味わいのある活気なのだ。母さんは優しいし、いつもつるんでる友達との会話も毎日楽しい。

そっだよ——父さんをなくした淋しさも忘れられる。そう、忘れさせてくれる。ここ沖縄は。……きつと、たぶん。

ちょうど今から一七年前。あたし自身はよくは知らない。でも、世界中を揺るがすような、とてつもない大異変が起こった。

それは一〇年の歳月をかけて、世界地図の形をすっかり作り変えてしまった。大地の崩壊。日本列島は東西に引き裂かれ、海中に沈んだ。そして、そればかりか南米北米併せたかつてのアメリカ大陸は、いつしか大西洋を越えユーラシア大陸と一つになってしまった。実際は何万年、何億年かかけてそうなるはずが、たったの十数年で——そう、それは人智の及ばない大自然の力。

一説には惑星間の重力などによる宇宙規模での要因も考えられたが、それは、まるで人間のこれまでの好き勝手な行いに怒り狂った大地の神様が下した鉄槌のように、全世界を混乱の坩堝へと叩き込んだ。ガイアとは、文字通り大地の神の名である。神様が……昔は日本と呼ばれていた、このイザナギにもいたんだよね？　ねえ、父さん。

その神様の怒りが父さんを……もう二度と会えない遠い国へ連れて行ってしまった。なんだか、あたしにはそう思えてならない。

かつての日本列島はすっかりなくなってしまった。確かに地震大国だったし、太古の昔から火山活動も各地で活発だった。でも、誰もが俄かには信じられなかっただろう。絶対に磐石だと思っていた

地面が突然なくなってしまうだなんて。

母さんはもとより、大災害を越えた未曾有の天変地異である、それを目の当たりに体験した叔母さんなんかは、瑠美那は何一つ覚えてなくてよかったって言う。確かにまだ生まれたばかりの赤ん坊だったしね。

でも、そのせいで、あたしは父さんを助けられなかった。父さんが死んだことさえ6つになるまで知らなかったんだ。こんなことである？ あたしにとつては大地がなくなってしまうことより、切実な重大事件だったんだよ……。

沖縄の海や空がとてつもなく青く澄んでいるのは昔から変わらない。でも、日本はその形ばかりか気候までも、すっかり変えてしまった。それは勿論日本ばかりじゃないけど、加速度的に進行した地球温暖化——昔の人たちは結局何一つ努力してくれなかったのかな。そう想像すると何だかすごく淋しい。イヤだな。また鬱モード全開だよ……。

そんな青い海よりブルーになってるあたしを、それでもこの沖縄は優しく包んでくれる。イザナギ自体が今では元の沖縄みたいな亜熱帯の気候になっちゃってるし、相変わらず有害な紫外線も強いけど、それでも工夫すれば全然住めないってわけでもない。だからあえて、あたしたち親子は本島にあるこの一軒家に住んでるんだ。だってドームの光ファイバーによる人工太陽じゃ、なんか、ねえ……。ともかく世の中がどんな風になっちゃって、人間なんかなるもんだ。

そうよ、ナンクルナイサもとい、なんとかなるなるっ！

——その学校からの帰り道、あたしは”アイツ”と出遭った。

*

実際、一度国土をなくした民族の末路など酷いものだった。

そう……だからこそ決断したのだ。例えすべてを何ものかに受け渡してしまおうと。

大地殻変動の混乱も未だ尾を引く世界の中で、誰が国力そのものを失くした、実質的な難民である日本人たちを援けようなどと思っただろう。それほどまでに世界は崩壊し混沌としていた。しかしその中で日本はかろうじてガイアの力を借り、海洋都市国家イザナギとして独立し、新たに出発した……表向きはそうだった。

それには一つの条件があった——それは文字通り傀儡としての未来。その意味ではイザナギは、本当の意味で独立したとはいいがなかった。未だその細胞の奥深く浸透する大国の支配。強いものが弱いものを制し駆逐する、弱肉強食の掟。

そう、かつての日本という国は、ほぼその内部から腐りかけていた。際限なく広がり続ける少子高齢化社会。無論、それは何も日本だけの問題ではなかったのだが、指導者不在の政治、そして次第に生きる意義を見失い疲弊していく国民たち。継続し続ける根源的な食糧難など外からの重圧と内側からの腐敗。中国やインドなど周辺アジア諸国に圧され、とうに失われた、かつての経済大国としての隆盛……先細りするばかりで、どこまでも脆弱な、その未来——。

国土があろうとなかろうと、既に日本という一つ国は、随分前から行き詰まりを迎えていたのかもしれない。”それ”は、既にぐずぐずと崩れつつあった日本そのものを木っ端微塵に粉碎してしまうには十分事足りた。経済的發展という一つの大きな欲望の埒場の結末——その瞬間、大地を割り裂けていく未曾有の大地震とともにすべてが終わりを迎えた。小規模とはいえ、ついに始まった富士山の噴火。この世の終わりとも思えたそれは、ここが火の国であったことも今更のように人々に思い起こさせた。

それでも人々は、ここが変わらぬ自分たちの故郷であることを忘れなかった。例えどんな姿に変貌したとしても——この海がある限り。生き残った命がここにある限り。
そして……。

”あたし”は、今ここに生きている。
金城瑠美那という一女子高校生は、今日も変わらず元気なのです。

*

人々は確かにこの国で生きている。今も変わらず、何一つ疑わず。その一人一人の心を優しく騙し続ける。

政マシナと呼ばれる行為の頂で、その男は今宵も“神”に祈り続ける――
|。

海洋都市国家イザナギとして再びよみがえった日本。それを支えているのは、超大国ガイアの科学技術によって生み出されたアマテラス、スサノオ、ツクヨミと呼ばれる三大ドーム都市を中心とする、海洋ネットワークである。各都市は大小のドームとなり海底トンネルによって結ばれており、無論、以前と変わらず航空便の数も充実している。

ただそれ以上に画期的だったのは、これまで日本国土が悩まされていた台風による水害、あるいは地震などの被害を徹底的に防げるようになったことである。例えば大地震が起こったとしても、その揺れを地下のドーム基盤が瞬時に吸収する。そして無論、台風などの雨風も未然に防ぐ。ドーム都市はそれ自体が巨大なシェルターなのだ。

さらにドーム全体に配置された従来のものより画期的にエネルギー変換率の高い太陽光発電装置に加え、豊かな海洋資源は基よりイザナギ近海の深海底に存在するメタンハイドレートといった新エネルギーの採取により、格段に以前のエネルギー問題を容易に解消することが可能となった。まさに海は資源の宝庫である。

すべてがガイアの高度な科学技術による賜物。事実、かつての大地殻変動時にも、それは日本にとって最初の一步を踏み出すことを実現させてくれた。世界人類の混沌のさなかにもかかわらず、いやだからこそ、かつてない地球規模での巨大地震を察知予測していたのか、ガイアの技術開発チームは日本国民を避難させるべく、その方舟の建設を急いだ。

それが現在イザナギの首都ともなるアマテラスなのである。アマテラスは文字通り、海洋上に浮かぶ難攻不落の要塞であった。その大要塞は、かつての日本沈没の際、満を持したかのように海上に浮上した。

その”方舟”^{はこぶね}は、まさに生き残った日本国民の心の拠り所、故郷となった。事実、災害難民として各国からの受け入れを拒否され行き場を失い、流浪の民と化した日本人たちは、アマテラスこそを仮初の大地とした。その技術を提供したガイア本土でさえ、混沌の増

埇と化し、最早地球上の大地といえる大地は人類の安住の地ではなかったのだ。

確かに——そう考えれば、あたしたちは恵まれていたのかもね。

後から聞かされる大災厄の爪痕の真実を振り返るたび、そう思う。まさにイザナギはアマテラスから始まった。その大要塞が浮上する瞬間、あたしの父さんは、あたしたち母娘をアマテラスに乗せるために……その犠牲になって亡くなったって叔母さんから聞かされる。

そういえば子供心に覚えてる気がする。頑丈なドーム隔壁の向こう側から聞こえるはずのない波の音を。その波音に混じって、父さんがあたしの名を呼ぶ声を——死んじやいやだ、嫌だよ、父さん。

瑠美那……美那……る……みな……。

*

「雨が降るのか……」

夜半、御統は、ふと総理官邸内から窓外を見やった。

このドーム都市アマテラスの天候を司るのも、最早人の力。巨大な人工の天蓋からポツリポツリと思い出したように雫が落ち、窓を叩く。

“神”とともに歩むために我々日本人は古の神々の声いにしえを封じ込めてしまった。その息吹きを伝えるはずの雨粒も緑の木々も、既に作られた何ものかではない。

ただ巨大な要塞とも思えるドーム外に広がる青い海原だけが、全てを支配していた。そう、海——。

時折御統には、その直接耳に届くはずのない無音の波音が、酷く

猛り狂った神の声に聴こえて仕方なかった。

「デルフォイ……か」

それは熊野とともに中央から遠く離れた神々の籠もりの場所。太陽が生まれ出る、まさに子宮。どうして自分は正式に調査団を派遣することを決定してしまったのだろう。それと同時に天照大の竜堂教授に依頼してしまった。もし、その“神”が目覚めるのなら、イザナギというこの国の名が御印を穢していることになる。

御統は怖ろしかった。神の声は、確かにそこに満ちていた。

その声は告げていた——いつの日か喪われ、奪われたヤシマを取り戻すと。

そして、その声を感じ取ることのできる巫女が、最後の聖地ニライカナイ、その沖縄にいるのだということ。

——海は、いつにも益して深く凪いでいた。

ニライカナイドームにほど近い、けれど人気のない、ひっそりと静まり返った入り江の岬に、あたしは一人佇んでいた。太平洋上に続く沖合いを臨むその岬には、やはりひっそりと祀られた鳥居が忘れ去られたように立っていた。

それは時折、時化った荒波の飛沫に洗われ、ところどころの朱塗りが褪色している。だけどそれは確かに古来、マレビト神信仰のあったこの国の名残りとも言えた。そして人々は、その名もニライカナイというドーム都市建設によって、その信仰の由来であった仮初の楽園、理想郷そのものを作り出した。

けれどそれが、真の意味での信仰、そして理想郷と言えるのかどうかは、未だ定かではない。突き詰めればそんなもの、一体誰がそれと決めるのだろう。誰も、何も全てを決められない。一人一人の心を自由になどできない。そう、きつと本当の自由は誰も見たことのない遙か彼方に存在しているのかもしれない。だからここは、その入り口。そこは、古の神を祀った神依いにしえの場所——神聖な鳥居の先に広がる海の向こうは、まさに神の国ニライカナイなのかもしれないかった。

その夕風にきらめく最後の飛沫が、波音にまぎれて静かに消えていく刹那——あたしは、信じられない出来事に遭遇した。

そう……あたしはそこで、後光射す太陽神に出遭ったんだ。場違いといえれば場違いというか、第一普通夕暮れ時に出遭うようなもん

じゃないだろうけど。思えばこの出遭いそのものが、後々のあたし自身の運命を変え、いわゆる腐れ縁そのものの関係になる”アイツ”自身の運命をも如実にあらわしていたのかもしれないけど。

だけど、この感じ。いつかどこかで出逢つてるような気がする――誰かに似てる。どことなく切なくて胸がぎゅっと締め付けられる。ああ、助けて、父さん……。

その眩しい瞳の色が父さんに似ていることに、あたしが気付いたのは、もつとあとのことだった。

*

瑠美那っていう名前は、一七年前に亡くなったあたしの父さんが付けてくれた名前だ。

生前の父さんが初めて沖縄に降り立った時、その海と空の青さに感動して付けてくれた名前。父さんはそこで母さんと出逢った。元々本土の人間だった父さんは沖縄の自然の美しさとその風土の素晴らしさに魅せられ、この地に移り住むようになった。実際、沖縄の人たちは驚くほど明るい。

ナンクルナイサア――御馴染みの地元のこの言葉は、沖縄の人々の明るく、どんなことにもめげない心根の強さを表しているのかもしれない。勿論、それは例の大災厄の時でもそうだった。例えば今ではニライカナイというドーム都市をその拠り所としつつも、本来のニライカナイ――楽園の郷は沖縄の海と空、この大自然そのものの中にこそ潜んでいるのだ。

かつて琉球と呼ばれた沖縄の民芸品である琉球硝子。その透き通

ったマリンブルーの輝きに魅せられ、父さんは琉球村の硝子工房に弟子入りし、そこで働いていた母さんを見初めたのだそうだ。その瑠璃色の琉球硝子は、まさに沖縄の海と空の色を映した結晶そのものだった。瑠美那っていう、あたしの名前には”光り輝くもの”という意味もある。

だからあたしは、絶対めげたりしない、どんなことがあっても落ち込んだりしない、そう父さんとこの沖縄の大自然に誓ったんだ。だから、口癖はナンクルナイサアもとい、なんとかなるなる！

なのに、どうして……。

アイツの瞳の色は父さんにそっくりなんだ。まるで飲み込まれそうに綺麗な、その輝き。

一度も逢ったことがないはずなのに、あたしにはわかる。父さんにも、そしてアイツも。

カタチあるものは、必ず壊れる。だから、もう一度逢いたい、そう。あたしは逢いたかった……。

それは硝子細工が壊れる寸前、無に還る瞬間の飛沫のきらめきに似て……。

——やめて”ルミナス”。

*

鳥居の向こうに広がる波間に漂う最後の光の残滓ざんしを見届けたあと、あたしは自転車を停めた浜辺の入り口に戻ろうとした。もう帰らなきゃ……。

まさにその時――。

その”光”が、おびただしい粒子を振り撒いて、突然現れた。

瞬間、ただただ眩しくて両目を閉じた。それは、まるで焰みたい
に燃え盛る眩い輝きを放っていた。きつく閉じた瞼の奥にまで強引
に届いてくるような、そんな有無を言わせぬ強い光。でも不思議と
あまり嫌な感じはしなかった。

「な……っ！」

けれど、言葉になって出てきたのは、やはり少なからずの驚きと、
そしてちよっぴりの恐怖の感情だった。

「なんなの、これ？」

おまえ、か……？

頭の中に、そんな声が響いた気がした。

そして、きいん――そんな音ともつかぬ音が、音叉のようにあた
し自身を震わせた。直接耳を伝って聞こえてくるものではないのに、
その共鳴の激しさに圧迫され、思わずあたしは両耳を塞ぐ。何が起
こったのかも分からぬまま、あたしは一人、岬の岩棚に立ち尽くし
ていた。

畏れるな――眼を開ける……。

その声に促されて静かに瞼を開く。

え……？

思わずあたしは言葉を失った。目の前の光の繭の中に佇んでいる、

背の高い大柄の一人の青年。怖いくらいに眩い光に包まれた、その青年は、まるつきり非現実的な空気をその場に作り出していた。薄衣と鎧のような鎖帷子くさかたびらを身に纏い、波状にうねる蛇のようなかたちをした金の冠ティアラを戴き——その姿はまるで、古い日本の神話に出てきそうな神像のよう……真っ直ぐ伸びた、ぬばたまの長い黒髪。彫像のように整った顔立ち。そして何より、射抜くような強い眸の光。

「おまえ、なのか——」

彫像、いや太陽神が、もう一度言った。

「……っ」

思わず後ずさる。でも眸はその眼差しに捉えられたまま、一步も動けない。そんなあたしの様子を見て、たまりかねたように太陽神は、さらに言葉を放った。

「怖れるな——！」

瞬間、びくつと全身が震えた。あたしの身体が膠着したのと、そいつが目の前に手のひらを差し伸べたのは、ほぼ同時だった。

「やっと、みつけた——」

その瞳の色にはどこかで見覚えがある。あたしの名を呼ぶ、その切ない声色。

瑠美那……。

「瑠美那！」

突然背後から声をかけられ、あたしははっと我に帰る。

「こんなとこで何してんだ？」

気がつくにあたしは、さっきまで手にしていたはずの鞆を地面に放ったまま、一人岩棚の一角に立ち尽くしていた。

「あ、れ？ 叔父さん」

心ここにあらずという風情で呆然と振り帰るあたし。そこにはあたしの叔父である島嶺黎司が、こちらこそ狐につままれたような表情のあたしに呆気を取られ突っ立っていた。

「叔父さんじゃねえよ、とつくに時間すぎてるだろ」

気がつくと時計の針は午後6時を過ぎていた。そうだ、ここ沖縄じゃ昼間とはかく夜間の外出は一般に禁止されている。ドーム内ならいざ知らず。加速した温暖化、その気候変動の余波は、この亜熱帯の島を赤道直下にも等しい苛酷な環境に変えてしまった。そのせいで大量発生しているハブ以外の蛇の生息条件にも格段に拍車をかけた。マラリヤなどの感染症を運ぶ蚊の被害を防ぐため、沖縄の住人は必ずそのための特殊な予防接種を受けているけど。まさに夜の沖縄本島は熱帯のジャングルそのものなのだ。

「早く帰らないと危ねえぞ、母さんが心配してるだろ」

「そ……そだね、何やってんだろ、あたし」

あたしは島嶺叔父さんに促されて、傍らに放ってあった鞆を手に取りった。そして砂浜に停めておいたままの自転車まで戻った。

「しょうがないな、送ってやるか」

「ごめん。いつも世話ばかりかけちゃって」
「気にすんな、いつものことだろ？」

如才なくからつと笑ってみせる叔父さんの笑顔に、さっきまでのコトがまるで幻だったような気になる。実際、そうだったのかもしれない。だって太陽神だなんて、あんまり非現実的じゃない。けど現実なんて、結構あやふやなものかもしれない。その事実をあたしはすぐさま、この目で垣間見ることになる。

*

母さんの兄である叔父さんが島嶺の姓を名乗っているのは、別に金城の家を出て行ったからとか、かといって金城の家を継いだ父さんのように、どこかへ婿養子に入ったからとかいった理由でもない。ただ”ある人”の意思を継いだからだ。その意味では叔父さんも父さんと似たような理由で以前の自分とは別の名前を名乗っているのかもしれない。

あたしが通っているニライカナイドームの高校は、某大学の付属高校でもある。実は叔父さんはその天照大学てんしょうだいがくの助教授をしている。名前の通り、天照大はアマテラスを作り上げた創始者が立ち上げた大学だ。北海道など北の地とともに唯一人が住め繁栄する大地を残したこの沖縄の地にこそ、古くからの日本を模したイザナギの心を深く伝えんがために。

黎司叔父さんが継いだ、その島嶺という人の意思それ自体については、あたし自身それほど詳しく知っているわけではない。ただ一度だけ、叔父さんが漏らした言葉を聞いたただけだ。

——言霊ことばを寿ことほぐ、十種とくさの神宝かむたからを護るべし、と。

何のことを言っているのか、あたしには見当もつかなかったが、叔父さんは真剣だった。島嶺という名前からして、沖縄の出身者であることは確かなようだけど……。

それはともかく黎司叔父さんは、とにかく飾り気のない気さくな人物で、その飄々とした出立ちは、いかにも生粋の沖縄人という感じだった。後ろで一つに束ねた長髪や無精ヒゲ。いつも草履を素足につっかけているその姿は、とても大学の助教授という風情には見えない。それでも、時折見せる鋭く真実味に溢れた眼差しと落ち着いた口調。そこに潜むものは、先ほどの島嶺の性に絡んだ、叔父さんの大学での研究自体に関係しているのだろうか。

けど、あたしはそんな叔父さんが日々していることとはおかまいたしに、この何にもこだわりのない、さっぱりした人柄がとても好きだった。聞けば黎司叔父さんは、父さんとは昔から深い付き合いのある知り合いだったという。特に親友、とまではいかないそうらしいが。

だから、あたしはよく叔父さんから父さんの話を聞くのが楽しみだった。この人をここまで信用してしまうのは、やっぱり父さんのことをよく知っているからってことなのかな。

実際叔父さんは、ドームから離れて暮らすあたしたち親子の面倒をよく見てくれた。いくら地面の上がいいたって、あの天変地異のあとだ。色々と具合の悪いことも多かった。それだけに男手のない、あたしたち親子の叔父さんへの信頼は厚かった。

「あんまり母さんを心配させるなよ」

二人乗りの自転車をこぐ叔父さんの広い背中越しに、あたしは叔父さんの表情を覗き込んだ。その薄ら笑いを浮かべた口元から零れた台詞に、あたしはでも、今更ながらこの人の飾らない優しさを感じて、ふと微笑んだ。

「ったく、瑠美那はお転婆だからなあ……」

しかし次にその口元に上った言葉に、思わずぶつと頬つぺたを膨らませる。

「あつあたしを誰だと思ってるの？ 潔く金城の家を継いだ父さんの娘、金城瑠美那だよ」

「はいはい、瑠美那ちゃんはいつも清く正しく元気よく……」

「んもう、叔父さんったら！」

そんな軽口を叩いては、既にとっぷりと暮れた家路を急ぎながら、あたしはやっぱりこの人の存在がとても嬉しくて、その頼もしい背中の中に抱きついた。

それでも、やっぱり昼間の出来事が頭から離れなかった。正確には夕暮れ時、だったけど。

なかなか寝付けないままに、あたしは自室である屋根裏部屋の窓を開け放した。それなりに海岸からは離れているっていうのに、それでもここまで潮騒の音が微かに届いてくる。それに火照った頬をくすぐる微風にさえ、しつかり潮の匂いが染み付いている。

やっぱりここは沖縄なんだ。ニライカナイのドームで暮らしていれば、こんな熱気を肌に直に感じることもない。それくらいドーム都市というのは快適なのだ。でも、それって何かが違う気がする。なんだか全然沖縄っぽくないよ……あたしはこの潮風とか波の音が好きなのに。ニライカナイの人工の日差しの中では、陸上部での健全なはずの活動も何だか嘘臭く感じてしまう。まあそれでも温度や湿度の設定は、かつての沖縄並にしてあるんだろうけどね。

そんな風に取り留めなく無意識のうちに駆け巡る今日一日。その中でも脳裏に強く刻まれたのは、やはりあの不可思議な出来事だった。

”あれ”は一体なんだったのだろう。あたしってば、夢でも見たのかな？

そう思えば思うほど、決して夢でも幻でもない気がしてくる。今でもまだ全身が震えてる。何よりアイツの眼差しが、強く心に刻まれてあたしを放してくれない。

そう……あんまり眩しすぎて……。

満月の光に中てられたのか思わずきゅっと目を閉じたあたしは、
我に返って溜息をつくと、

「あーもう寝よ、寝よ」

何もかもを振り払うようにもう一度ベッドに潜り込んだ。

……瑠美那……瑠美那……。

——るっさいなあ……もういい加減寝かしてよ……。

自分でも気付かないうちに眠りに就いていたあたしは、ふと頭の中に響くその声に悪態をついた。

……起きろ、瑠美那。

「あああ——もうなんだってのよ！」

しつこく亡霊のように纏わりつくその声を振り払うように大きく両手を伸ばしてあたしは飛び起きた。ふと窓の方を見ると、確かに閉めたはずの扉が大きく開いている。……っと。

それだけじゃない。そのテラスに腰掛けた背の高い男を見て、あたしは思わず腰を抜かしそうになった。

「あっあっあんった……！」

どっから入ってきた、そう言おうとして、今コイツに掛ける疑問符はそういうことじゃないだろ、と何とか冷静さを取り戻そうとする。

「……まったく、お前は寝起きが悪いな」

涼しい顔をして腕を組んだ“太陽神”は、それでもどこかに違和感があった。

そう、影がないのだ。まさか幽霊じゃあるまいし……。照明を消した室内には、満月の月明かりが大量に差し込んでいるのだが。違和感といえば、今この時のコイツには、あの時のような矢のような後光がなかった。

「それはそうだ。あくまでこの姿は仮のものだからな」
相変わらず平然と口を利くヤツに、あたしは開いた口が塞がらないまま、ただ口をぱくぱくさせていた。それでも、そいつは続けてこう言った。

「さっきお前から貰った生命エネルギーで、こうして何とかかつての姿をよみがえらせているのだ——」

いけしゃあしゃあと告げるその言葉を聞いて、何だか冗談じゃないという気になってくる。

「何よそれ！あたしから何を貰ったってえ？」

思わず突拍子もない声が出る。一度も会ったことのない、得体の知れないこんなヤツに……。

しかし、ぷるぷる震えながら拳を握り締めるあたしに、ふうと溜息をつくと、

「大丈夫だ——貰った力は後できつちり返してやるから心配するな」
あくまで、あたし以上の冷静さで答えた。それより……。

誰よ、あんた。根本的なその問いを訊ねそびれたあたしは、まだその場にもどかしく膠着していた。第一なんだってこの幽霊もとい太陽神は、あたしなんかの傍に現れたんだ。神話の神様の御神託じやあるまいし。そんなあたしの素朴な疑問を他所に、目の前のコイツがまた喋った。

「初めまして……と言いたところだが——残念だが生憎と自己紹介する名前がない」

いや、思い出せないだけ、か……。え？

ふと漏らしたその言葉尻に浮かんだ、心なしか哀しげなその翳りをあたしは見逃さなかった。そしてまた、あのワケの解らない切ない感情が湧き出してくる。でも、それもほんの僅かな瞬間だけだった。

「まずはお前のその疑問に答えてやることとしよう——ついて来いは？ その言葉にきよんとする。見ると次の瞬間ヤツは窓の外へとひよいと身を乗り出した。いや浮かんだ、といった方が正確かはああ——？」

続いて次の瞬間、自分の身体が得体の知れない光に包まれ、浮き上がったので気が動転した。

「ぎゃああああ——！！」

「でかい声を出すな、集中力が乱れる」

いつのまにか太陽神は、月光に包まれたようなあたしを抱いて、その口元を大きな手で塞いだ。そして、そのままどんどん夜空へ上昇していく。夢だ、絶対これ悪い夢だわ——相変わらずあたしは、今目の前で起こっている現実を、ヤツの腕の中でジタバタしながら否定し続けた。

どこまでも澄み切った、頬に触れる夜風が心地いい。っていうか、あたし浮いてる、飛んでる！

「あれが何だか解るか？」

しばらく上空に停滞した太陽神が、おもむろに口を開いた。

「何って月に決まってるでしょ？」

その指先が指し示す先で煌々と闇夜を照らす満月を見て、あたしは憮然として答える。

「そうだ、月……太陽の光がなければ輝けぬ存在だ」

何言いたいのさ、コイツは。そう思いながらも、ヤツの言葉に耳を傾ける。

「お前は知っているか、この時代、”この国”が今まさに置かれている状況を」

そう言われて思わずついこの間独立したばかりのこの国、イザナギについて思い返す。確かに今この国はこれ以上ないほど平和で豊かだ。でも、それってあの世界の混沌を潜り抜けたからの賜物ってやつじゃない。

「いいんじゃない？ やつと各地のドームも完成したし、ほんとようやく本物の平和が戻ってきたってカンジ」

「馬鹿か、お前は——ッ！」

その強い叱責の口調にびくつとなる。

「お前は何も知らないのだ。今この国イザナギは、畢竟あの月でしかないのだという真実を」

そして、次に発したその言葉の激しさに、あたしは殊更に身を震わせた。

「ガイアは必ずや壊さねばならぬ——倒さねばならぬ諸悪の根源！」

*

部屋に戻って眠りに就いたあとも、アイツの話が頭から離れなかった。なんだよ、第一全然答えになってないよ……。

『お前は選ばれた人間なのだ——そう、この私に。いや、かつての日本という、このまほろばの国に……そしていずれ、私の望みを叶えて貰う』

勝手に決めないでよ、それにあなたの望みを叶えるって、このあたしに一体何ができるっていうの。あたしは見ての通り、ただの一人女子高生、金城瑠美那なんだから。

でも、心のどこかに引つ掛かつてる。このイザナギがガイアに操られているなんて。確かに海の向こうの大国、ガイアの力がなければ、こうして日本は生まれ変われなかった。あたしたち日本人は救われなかった。それに例え民族の違いはあるにせよ、同じ人間じゃない……それを。

それより何より、唐突な話である。アイツは——突然あたしの目の前に現れたアイツは、無責任にも何の関わりもないあたしに力を貸せ、だなんて言う。何より有無を言わせぬ、高圧的なあの態度が気に食わない。ほんと冗談じゃない！
だけど……。

何かが引つ掛かる。ふとした瞬間に翳るアイツの眸。やっぱりどこか似てる……あたしの父さん、に。会ったこともない人に似てるだなんて、確かに何だか変な話だけど。

そういえば、何でアイツは自分のことを話さないんだろう。っていうかあたし、どうしてアイツと当たり前のように話してる自分を変だと思わないんだろ？どうして少しも怪しいヤツだと思わないん

だろう。最初に出遭った瞬間とはまるで違う、ふわふわした弱々しい月光——太陽神らしからぬ、蒼い陰みtainなアイツをのことを。

*

翌日、いつもと変わらぬ平穏な朝を迎えたあたしは、いつもと同じよう制服に着替え、学校に通うため支度を始めた。

「ねえ瑠美那、昨日は一体どうしたの？」
「え？」

朝食時、何がしか、ぼうっと考え事をしていたあたしに、唐突に母さんが尋ねた。目の前のTV画面には、ついこの間、首相に就任したばかりの御統総理の会見が映し出されていた。

「——なんでもないよ。偶然、黎司叔父さんとばったり会っただけ。ただそれだけだってば」

あたしは、半分笑いながら答えた。

別に嘘をつくつもりじゃなかった。だけど、それにしただけであんなこと、普通に話して誰が信じる？突然、太陽神が目の前に現れました、だなんて。それでも母は心配そうな顔を隠さない。

「実は、その黎司兄さんがね、来月アマテラスの本庁に転任になるんだって。だから、あんなことが心配で……」

ああ、そうか。島嶺の——これまで、いつかはと何となく思っていたことだけど、それでも実際その時が来ると何だか淋しい。叔父さんの授業、面白いつてクラスの皆の間でも評判だったのに。というか、それだけじゃない。実際叔父さんは学校の人気者だった。

あの飾り気のない叔父さんのさっぱりした気質は、ほとんどの生徒に好かれていた。それに、加えて誰にでも隔たりなく優しいしね。

でも、そういえば、昨日は特別何も言っていなかったな。

*

相変わらず、ぼうつとしたまま、自転車のペダルを踏んだ。――

“アイツ”はまたあたしの前に現れるって言ってた。何だかまだ釈然としない。そのせいで、いつもの調子が出ない。ナンクルナイサ、なんとかなるなる！でも……今回ばかりは、ちよっと、ね。

だけど、あたしは同時に感じていた。いつしかアイツから離れられなくなってる自分を。何だか気になる……それに、なぜだか忘れられない。自分の名前がないと言った、アイツの淋しそうな瞳の色を。

学校に着くと、昨日と変わらない教室のざわめきが出迎えてくれた。

「おはよ、瑠美那——昨日はどうしたのさっ」

鞆を机の脇に掛けると同時に、前方から元気よく声を掛けられた。

「あーおはよう五月。ごめん、私用で部活休んじゃって」

「あそつか、昨日はお母さん迎えに行く日だったかあ——毎月お勤め、御苦労さん」

そう弾む声で茶化すのは、クラスメイトで同じ陸上部所属の藤宮とうみや五月。ういつき彼女は、あたしの気の置けない大の親友でもある。

「ねえねえ島嶺先生、来月アマテラスドームに転任になっちゃうってホントなの？」

すると、すかさず背後からそんな会話が聞こえてくる。

「えーシヨックウ」

確かにちよつと淋しくなるな……それは、何も身内であるあたしだけじゃなかったんだと、今更ながら思う。でも、叔父さんの大学での研究のことを思えば——と考えながら、そういえば、あたしだけが知ってるような気がしてたけど、実際あたし自身、叔父さんの大学での詳しい研究内容について何か知ってるわけじゃないって事実を思い知る。

……十種の神宝。いつだったか、ふと黎司叔父さんの口に出った、例のフリーズの一部が脳裏によりみができる。たぶん、考古学か何かの研究？

またしても思案モードになる。このところ、何だかばーっとしてばかりだ。

「きりーつ、礼！着席」

すると、いつの間にか教室の騒がしさがやんで、教壇の上に立つ担任教師の島嶺先生——そのあたしの叔父さんのよく見知った顔が、まるで寝起きのようにぼんやりした眼まなこを出迎えた。

「既に知っている者もいるかと思うが、先生は来月で本校を辞めることになってしまった——だったんだが」

その瞬間、えーっとか、島嶺センセやめないでえーとか、特に女子の声があがる教室内。

「——申し訳ない。実は理由あって転勤が少し早まってな……」

叔父さんこと島嶺先生は、途端に頭を下げた。

「……来週にも、向こうへ赴くことになってしまった」

その新事実を知った途端、もはや教室内は阿鼻叫喚の嵐である。特に女子の。

あたしは別の意味で驚いていた。あの叔父さんが、あたしに時前に何も言わずに——そして少しかだけ淋しくなった。確かに仕事のこただし、何か火急の事情があるのかもしれない。でも……。

——誰にでも、突然の別れはあるものだ……。
えっ？

突然、頭の中で誰かが囁いた。まさか。アイ、ツ——。

それでもなぜだか、その言葉の持つ意味が解る気がした。特に生まれた途端、父さんをなくしたあたしは……。そしてもしかしたら、アイツも？

「しかし、こちらへはまたそのうち、ちよくちよく戻ってくるさ。何しろ俺は生粋の沖縄人だからな！」

お茶目にウィンクする叔父さんに、はたまたあがる黄色い女子の声。あたし自身といえば、それを聞いて少しかだけ安心する。

「それはともかく——新しい担任教師を紹介しよう」

黎司叔父さんの目線の先に皆の視線が集中する。そして教室の扉が開き、入ってきた一人の美人教師。

「初めまして。草薙瑞穂と申します」

その美貌に思わず教室中が静まり返った。そして、あちこちで漏れる溜息。こちらは主に男子生徒たち。

「草薙先生には来週から、このクラスの担任を受け持ってもらおう。担当科目は歴史だ。とりあえず今日は見学ってことで、よろしく頼む」

それから早速、教室は数字の授業に入った。

何かが、あたしの周囲で確かに静かに動きつつあった。

それは勿論、突然あたしの目の前に現れた”光の守護神”であるアイツ。そして、あたしの伯父さんで担任教師でもある、この島嶺黎司のアマテラス本庁への転任。そして……この新任教師、草薙瑞穂の出現。

そのすべてが直ちに何らかの繋がりを持つなんて、その時のあたしには何一つ、予想なんてできなかった。当たり前だ。本当にその時まで、あたしは何も知らない、ただの平凡な一女子高生でしかなかったんだから。

その日あたしは部活帰りに親友の五月の家に立ち寄った。藤宮神社。そう、五月の家は神社なのだ。古くから沖縄にある琉球八社のうちでも、沖宮、天久宮など伝統的琉球神道の流れを汲む神社である。勿論、あたしの家と同じにドーム都市ではなく、沖縄本島にある。

そうは言っても、古くからある系統の神社とは言え、五月の家はなかなか居心地がよかった。これも沖縄という素朴な土地柄なのか。勿論、正統な神社としても御利益があるらしく、各種祭礼の折など、何かにつけ地元民や観光客が訪ねてくる。

沖縄では海の方こうの理想郷をニライカナイと呼んだ。そう、この沖縄本島に隣接してできた、ドーム都市の名前にもなっている。古来、日本では海の方こうに他界、常世があると信じられてきた。その常世の国から訪れるマレビト信仰は日本各地に見受けられる。

そういえば、ちょうどニライカナイドームへの入り口になっている陸橋近くの岬にも、鳥居が立っているよね。（あたしは、あそこで初めて”アイツ”に出遭ったんだけど……）

古来、かつての日本は神話の世界だったという。文字通り八百万の神々が人々の心に住まう神話の国。でも、急速な経済の発展が、すべての日本人の意識をすっかり塗り替えていった。欧米社会の進出。けれどあの大地殻変動による混乱によって、そのすべてが一度リセットされた。いや、リセットされたのは、何も日本だけってわけじゃないけど。

ともかく現在の日本は、海洋国家イザナギと名前を変え、そのせいか文字通りの神国になりつつある。実際かつての古代日本の信仰が再び各地でよみがえろうとしていた。中国から伝来した仏教などとは違った意味で。事実、政治の世界でも件の御統総理の下、古来の日本の神を奉る動きがもたらされたりしている。もう以前の過ちを繰り返したりしない。欧米化の波に流され、いたずらに消費経済ばかりに日々を費やしていた、愚かな過去を繰り返したりしない。だけど……。

本当にそうだろうか？——いつしかあたしは、そんな風に疑問に思うようになった。

「瑠美那——瑠美那ったら！」

「——ん。え、なに？」

突然、思案の靄の向こうから声をかけられ、あたしははっとする。

「んもっ、話聞してる？最近ずっとこんな調子ばつくだよ、ほんとどうしちゃったの？」

やば、またおんなじこと言われた。あたしは今朝のやけに心配げ

な母の顔を思い出した。

「島嶺先生の転勤がショックなのは解るけどさあ」

うん、けどほんとはそればかりじゃないんだ。内心であたしは一人呟く。

いつものように藤宮神社の境内の縁側に腰掛けて、辺りを見回す。境内の周りは小さいながらも鎮守の杜が広がっており、時折吹いてくる風は潮の響りを運んでくる。それでも五月の家は、以前はもっと海の近くにあったという。それが例の地殻変動の隆起によって――

確かに神社の建物自体は、ほとんどがその時の地震によって壊れてしまったけど、よほど頑丈に出来ていたのか、鳥居と蔵の一部と奥の神殿は全壊を免れた。そして今は海を見渡す高台にある。もしかしたら本当に神様がいるのかもしれないね、などと、宮司で五月の祖父である藤宮老人や家族の人たちと一緒に笑ったりした。

そう、ある意味今のあたしは、本当にその神様がいると言われたって、おそらく信じてしまうだろう。だって事実、あたしは――その神様とやらに出遭ってしまったのかもしれないんだから。

*

.....

.....

時折その場所にパルスのように規則正しい物音が響く。

辺りは暗闇に支配されている。その中で密かに点滅する光。

『コード』の発動を確認した——ああ、僅かな間だが確かな発光だ。同時に大蛇も出現しつつある』

『了解した——ただちに明日ポイントNへ特殊班を急行させる』
『分かった』

男は口元をニヤリと歪めると、その場から立ち去った。

*

どうして何かがおかしいと思わなかったんだろう。

でも、そんなこと、とうに“ルミナス”と出遭ってしまった時点で……あたしの意識はどこかへ連れ去られてしまっていたんだ。善と悪、悪と善——この世はこの二つで出来ていながら、同時にそのどちらもが交ざり合い、判然とせずになだ混沌として存在しているだけ。そう、まるで月と太陽の相克みたいに。

煌びやかでいて、どこか淋しげな——哀しげなルミナスの記号^{コード}は、それを如実に表していた。どちらもが本当で、そしてどちらもが偽り……。

「すまん、瑠美那」

「やだなもう——謝ったりなんてしないでよ……叔父さんだって忙しいんですよ」

「だが——」

ニライカナイ空港。黎司叔父さんを見送る出発ロビーで、あたしたちは話していた。濟まなそうに手を合わせる島嶺叔父。不意に気まずい沈黙が流れる。あれから早いもので一週間、結局叔父さんが、突然の首都であるアマテラス行きについて詳しく話してくれたのは、

それから三日後だった。それになぜだか“アイツ”は、あれから一向にあたしの目の前に現れない。

「……たまにはメール送ってよね。母さんも待つてるから」

「ああ、またすぐ帰ってくるさ」

そんないつものやり取りに、互いの表情に微笑みが戻る。

「俺がいなかったって母さんの前であんまり張り切りすぎるなよっ」
「もう——馬鹿ね！」

叔父さんの肩を盛大に叩くあたし。しばらくは、こんなやり取りもできないのか……。そう思いながら笑顔で叔父さんを見送るあたしには、その後に起こる出来事のことなんか、想像だにできなかった——そう、ここ沖縄の地で。そして文字通り、この島嶺黎司との永遠の分かれ。たぶん叔父さんとは、叔父さんが島嶺の姓を名乗った時から、既に袂を分かつていたのかもしれない。けど、でも。

——本当は失いたくなかった、何一つ失いたくなかったんだ。それはきつと、アイツも同じ。

同時にそれは、あたしと“ルミナス”の永く果てしなく戦いの始まりだった。

「それって一期の一話じゃない？ うひょー既に懐かしー」

普段たむろしている、専門学校時代からの友人、齊木桐子（とく）の部屋で勝手にディスクを回していた未玲が、おもむろに振り向いた。

「ねえ未玲、二期の脚本（ほん）引き受けたってほんとなの？」

半ば興味本位に訊く桐子の問いには答えず、再び画面に乾いた視線を戻す。そして不意に呟く。

「……嫌いなんだよねーあたし」

「へ？」

ぶすつとした表情を膝の上に乗せ、床の上にしゃがみこんだ未玲。その眸は画面に映っている二次元のアニメを見ているようで、その実何も見てはいなかった。ルミナス、瑠美那、ツクヨミ？ ばっかじゃない——あたしが嫌なのは……別にアニメそれ自体とか、いい歳してアニメに夢中になるオタクと呼ばれる輩たちじゃない。相変わらず未玲は醒めた眼線で画面の向こうの何かを眺めた。

本気で登場キャラ達とかに感情移入してしまえるヤツら……。

まあ、それはあたしも同じか。正確には”同じだった”。だけど――。

「ごめん、桐子。もう寝るわ」

プチッとリモコンで電源を落とすと、未玲は勝手に桐子のベッドに潜り込んだ。

*

”その瞬間”のことは何も覚えていなかった。

ただあたしは、最後までぼおとした頭で閉幕時、興奮冷めやらぬ溜め息のような女の子たちのどよめきと、いつまでも鳴り響く拍手の音を聞いていただけだった。イベントは第一期の最終回上映とそれに続く第二期のプロモーション映像上映、そして出演者のトークや主題歌アーティストたちのオンステージと、いかにもありがたい内容だったようだ。

それでも、そこはルミナスコード——決してタダでは起きない。そのありきたりのステージにさえ、尋常でない生感覚（当たり前だが）が宿っていたのは、さすがである。

……いや、それだけじゃない。少なくとも、こうして”ルミナス”の宣託を受けたあたしには。それは言葉ではなかった。そう具体的な言葉が何かあるわけではない。けれど……。

何だか寒気がした。いや違う。むしろ身体は少なからず火照っている。頭の中心が焼き切れそうだ——“その瞬間”あたしは確かに、絶対零度の焰の中にいた。

そのイベントを終えて、何の変わり映えもしない日常に戻っても、あたしは心ここにあらず、といった感じだった。この感覚を誰かに話したい、誰かと共有したい。話して、それが真実だったのか自分自身でも、もう一度確認したい。何だかそんな衝動に駆られた。

けど、あたしがオタだってことは家ではともかく、会社の誰にも話していない。当たり前だ。さしあたって話す必要なんかないから

だ。自分がどんな趣味を持っているかなんて、親しい人以外に話す必要はない。それは職場での仕事や人間関係に一切影響しない。つか、どうだっていいだろ、そんなことってカンジ。

そもそも私はアニオタです、なんて不用意に話したら一体どんな顔されるか。これだから一般人つてのは嫌なんだ……そういうのが、あたしたちオタ人間が、まず周囲に対して最初に必ず抱く感想なのだろうが、そういうことより、あたしはともかく「この件」に関しては、できるだけ慎重でいたかった。

そう、それくらい失いたくない趣味なのだから。正直こんな言い方すると自分でも笑っちゃうけど、アニメっていう「文化」そのものがあたしは好きだから。

だから、というか、むしろ人に話したい気持ちは満々だったりするのだが――だが、それはことごとくキケンだ。海外は基より今や国民的人気を博しているギブリだとか、かつての懐アニだとか一般人にも割と理解のある、彼らに通用するような話をするのではない。最近では、メイド喫茶などの話題を代表するアキバやコミフェ経由でオタクそのもののや、はては腐女子の存在でさえ一般メディアを介して巷の話題に平然と上るようになった。そして、そういった輩に自らなりきるフロム一般人な人種も多数存在したりもする。いやむしろ、それらオタ人口は日々増殖し続けている。

けど、あたしは今あたし自身の話をしているのだ。幸か不幸か、この職場にそんな殊勝な人間はまずいない。もしかしたら、あたし自身が変にガードを硬くしているだけかもしれないけど。どちらにしても、だ。だからこそ、そんな危険な賭けを自ら仕掛けタブーを冒す必要などない。

まったく人と人が妙な偏見を棄て、真に”解り合う”のつて、至極難しいことなのだ。

何となくだけれどルミナスには昔、逢ったような気がしないでもない。何だかこれって作中の瑠美那みたいだ。結局、瑠美那はルミナスの……。そういう解釈が何度ウェブ上の掲示板やらアニメ誌やらで、まことしやかに議論され語られたことか。けれど、その本当のところは、まだ作中で何も語られていない。それを知るには、これから始まる第二期を実際に拝んでみる他はないのだが。

そう思いながら、あたしは依然、霧に包まれたような頭のままで帰宅の途についた。始終こんな調子で、他のアニメ番組の放送のことなどすっかり忘れてしまっていたかもしれない。

あの時、リーヤが最後に言い放った言葉——未玲……。

結局、彼女にはあの会場で会えなかったけど、どこかあたしには決してこれつきり、という気がしなかった。そうだ、きっとあたしは近いうちに未玲と再会する。そんな確信めいた思いにまで支配され、あたしはあのイベント会場の熱気にでも中てられたかと思った。でも、確かにそれは、単なる序まりに過ぎなかったのだ。

瑠美那が名付けた、ルミナスという彼に捧げた名前……それが奇しくも自分自身の名と同じであったことは、単なる偶然だったのか。 ”光”は”光”に惹きつけられる……。だから。そして闇夜もまた、陽光を恋しいと思うのは、至極自然的な摂理であるのかもしれない。だから、こんなに懐かしいのかな。

けれどルミナスと瑠美那の真実に目を向けるならば、むしろそれは、恋人とか単なるパートナーの域を脱し、いうなれば肉親的な関

係性、親和性にまで達していたのであるのだが。

*

『ビンゴ……！決まり、ですね』

弾むような含み笑いするような、そんな嬉々とした女の声が携帯越しに鼓膜に伝わってくる。

「で——無論”彼女”には話したんだろうな？」

『いいえ、まだ……でも、いずれ判ることでしょうから、特には』

「まったく頭が下がるよ、お前さんのその相変わらずの放置プレイには」

『ふふつ、竜崎さんほどの鬼畜ではありませんから——』

そんなまぜつかえたようなやり取りの後しばらく会話が続き、おもむろに竜崎と呼ばれた男はふと右手に持っていた携帯を左手に持ち替え、小声で呟いた。

「ところで例の一件は、滞りなく進んでいるのか……？」

『——ええ、近いうちに。準備が整いさえすれば、すぐにでも』

すると翳り始めた夕闇の部屋に沈んだ竜崎の表情は、俄かにほくそ笑み、続けた。

「ふつ……スポンサーさえ手に入れば、こっちのもんだ。祭りはすぐ始められる、というわけか」

『祭り——マツリ、ですね。それさえ上手くいけば……』

いつになく不安げな彼女の声が携帯越しに響く。

「春の到来はいつしか雪解けから始まり、冬の鬱積を忘れさせる。

植物が芽生え花開く増殖のスピードは、夏至を迎えても容易には終わらない。そうだろう、円城寺君」

まるで意味不明の呪文を唱えているような話のようだったが、それでもその女——円城寺冬華には、その言葉の真の意味が手に取るように理解できた。

『そう、だからこそ私たちは、ルミナスの——そして瑠美那の』
「……そうだな、古の兄妹が創り上げた国土、天地の……あめつち永遠のマツリ、か」

女に、そう誰に語りかけるでもなく竜崎は一人ぼつりと呟いた。

……

……

……

そうか、そうだね。

『だから、あたしたちは、”この海で”出逢ったんだ——』

*

「どうして、沖縄沖縄から離れなきゃなんないのよ！」
いきなりそう切り出された途端、あたしは徐に思わずアイツに食って掛かった。

「……お前は気付いているはずだ、既に事が始まっているということ——それが証拠に今日の前に私がここにいる」

そ、そりゃそうだけどさ……確かに得体の知れない不安はずっと続いていた。あの日、コイツと出遭った瞬間から。でも、だからって……。

「——お前にはすまないと思っている……だが、これは運命なのだ」
「ちょ、何よそれ……ッ」

けど、伏せた後に凜とした強さまで伴い見開かれた眼差しに、また身動きが取れなくなる。

うんめい、ね。なんて都合のいい言葉なんだろう。久々に姿を現したアイツを前に月明かりに照らされながらあたしは、不思議に切ない気持ちに支配されていた。そう、あたしはいずれコイツの言葉を受け入れる。受け入れてしまう……不思議なくらい快く。

自分でもどうかしてると思う。だから今驚きを隠せずに、こうして精一杯反論してる、自分自身に。この得体の知れない、ワケの解らない、いとおしさにいつか飲み込まれてしまうんじゃないかって。つまり、そういう漠然とした不安。

「で……あたしは、あたしたちは一体どこへ行けばいいのよ？」
怒りとも戸惑いともつかぬものがないまぜになった身体の震えを抑えながら、あたしは訊ねた。

「わからない。だが、差し当たったの目的地である行先は”アマテラス”だ」
「アマテラス——」

そこは先日、黎司叔父さんが旅立ったばかりの場所だった。考え

てみればアマテラスは、あたしの生まれ育った故郷だ。でも”ルミナス”が言っているソレが、必ずしもこのイザナギの首都である巨大ドーム都市を差しているわけではない、ということを知るのはもう少し先の話になる。

「正確には、我々は一つ処に留まっではいけない……なぜなら、」

傲慢そのものの太陽神の面影は、その表情にはない。整った顔立ちにさつと翳りが走る。伏せた睫毛の先の僅かな陰影に、とくんと心臓の鼓動が高鳴った。でも、それも一瞬だった。次の瞬間きりりと解き放たれる言葉。

「――龍神を……ダークホライズンを、この地に呼んではならない
」

それはいつか『全ての諸悪の根源であるガイアの息の根を止めねばならない』と、宣げた時の強く厳しい瞳だった。ぞく……、思わず背筋が寒くなるほど、それは冷たく凍り付いた決心だった。

*

だがあたしの、あたしたちの決意は脆くも崩れ去ることになる。

いや、それはアイツと出遭った以上、簡単に崩れるはずもない運命の上の単なる一時的な突発事項だったかもしれない。第一龍神？ダークホライズン？矢継ぎ早に放たれる単語についていけない。しかし、そんな程度の驚きはアイツに出遭った時点で既に消化済みのはずだ。そもそもヤツの行動原理であるところの願いとやらに間接的どころか、直結することなのだろうか。

でも、確かに何かの危機が迫っていることだけは、あいつの表情の厳しさからも読み取れた。ほんとにあたしは、どうしたらいい？

そんな中、翌日あたしはいつも通りに登校した。叔父さんが旅立ってから早くも二週間が経っていた。いつも通りのクラスメイトとの会話。そしていつも通り始められる退屈な授業。けれどそこに怪しげな不確定要素、イレギュラーが潜んでいることに、あたしはまだ気付かなかった。

3時限目は歴史。それは、あたしの叔父さん島嶺先生の替わりに赴任してきたばかりの例の草薙先生の授業だった。

「……かつて日本を分断し海底に沈めてしまった大地殻変動は、代わりにアマテラスという箱舟を我々に授け、イザナギというこの新たな海洋国家をここに生み出すに至ったのです」

何度も聞き飽きたこの国の歴史。それは今更、勉強する必要性もないほど、あまりに当たり前にあたしたちの意識に染み込んだ一般常識だった。

「確かにこれは当たり前すぎて特に復習する必要もなさそうな私たちの国の史実ね。でも今だからこそ、もう一度復習して欲しいの」
今だからこそ……思わずアイツの顔が浮かんでびくつとなる。

草薙瑞穂——彼女は島嶺先生、叔父さんの大学の後輩だという。

確かにこの学校は天照大の付属高校だから、そこから叔父さんの替わりに赴任してくるというは至極自然な流れだ。でも、そこに確かに潜んでいる本当の事実。そもそもアマテラスはどうして、ここ沖縄の地にこの天照大付属高校を作ったのだろう。突然降って湧いた疑問に、あたしは不意にテキストから顔を上げた。

その視線が教壇の上の草薙女教師とぶつかる。いや、正確に言う
とあたしの視線は捕らえられたのだ。ふと、にっこり微笑うこの得
体の知れぬ美貌の持ち主に。

「……さん、金城さん」

「え、あ、はい！」

一瞬、あたしは不思議な幻の中にいた。そこから脱するのに数秒
を要したあたしは、自分の名前を呼ぶ声に気付くのに数秒遅れた。
いや、なんだか随分長い時間が経っていたような気もする。そして
慌てて叫んでいた。

「ふえっ！ な——なんとかなるなるッ」

途端にどつと湧く教室内。

「どうしたの？ もしかして居眠りしてた？」

「い、いえ！ ちょっとぼうつとしてただけです、すみません」

顔を真っ赤にするあたしに、再びクラスは偲び笑いに包まれた。
でも、思わず全身を包んだその羞恥と困惑とが、あたしの意識を弛
緩させたのだった。

「……じゃあ、質問に答えて——金城瑠美那さん、確かあなたはア
マテラスの出身だったわね。アマテラス建設に多大なる貢献をして
くれた超大国ガイア。じゃあガイアは何故、この海洋国家イザナギ
の建国に力を貸してくれたのかしら？」

そんなの答える間もなく回答が既にテキストに用意されている。
ガイアはかつて今はなき米国と盟約を結んでいた経済大国であった

日本を蘇らせるべく、あくまで人道的観点から私たちの国を救ってくれたのだ。そして日本は文字通り海洋国家イザナギとして生まれ変わった……むしろ海があることが、あたしたちにとっては幸いだった。

「それはイザナギが、日本がガイアにとって必要な国だったからです。アマテラスに住んでいた頃、叔母さんや伯父さんがそう教えてくれました」

「そう。あなたのお父さんは……」

ふと淀む声色。おそらく黎司叔父さんから聞かされていたのだろう。あたしの心は不意に今は亡き父さんへの思いにさまよう。

「ごめんなさい——席に着いていいわ」

一体どう必要だったのだろう。着席してから、あたしはしばらく先程の質問内容について思いを巡らせた。こんな風に思ってしまうのは、やはりアイツと出遭ったからだ。アイツはきっぱり言い放った。イザナギはガイアに支配されているのだと。

表面上はそんな素振りは全くない。むしろイザナギは以前のようにガイアと同盟関係を結んでからというものの、目に見えるように復興し今新たな国づくりを推し進めている。磐石なる大地、国土を失った代わりに各地を結ぶドーム都市は、文字通りの海洋国家としての役割を十二分に担っている。けれど……。

*

『月の光は正直苦手だ……』

……ふと、そう搾り出すように言葉を漏らした太陽神の瞳は、確かに心なしに苦しげに切なげに揺れていた。そもそもなんで、アン

夕は満月の夜しか姿を現さないのよ、と何気なく、いつもの調子で
無然と振舞うアイツに対する、あたしの当たり前の接し方で言葉を
かけた矢先だった。

不意に突然また表れる、あの淋しげな瞳の色にドキツとする。

まるでそれは、あるはずのない幻の月の海のようにだと思った。そ
れはまるで何か、あたし自身の中に唯一眠る傷の痛みをよみがえら
せるようだった。だから、苦しいんだ。何かがどこかで疼く。実体
のない、儚げな眼差し。水を湛えているわけでもない、どこかもど
かしい、その渴いた眼差しがあたしも辛かった。

今は月明かりの中でしか、その実体を現せないアイツ。しかも一
月に一度の満月の夜。そして次の満月の夜には、早急にこの沖縄を
離れ出発するという。その真の目的がどこにあるのか、あたしには
皆目見当もつかない。ただ一方的に、あたしに力を貸せたの、望み
を叶えるだの……。

拳句の果てに、来月にも一緒にここを離れるだなんて。今更だけ
ど、あたしはさ、母さんの生まれ故郷のここ沖縄が大好きなんだよ
もう一生ここで暮らしてもいいとさえ思うほど。まさにあたしにと
つての”ニライカナイ”。なのに——ね、瑠美那は将来、一体何に
なりたいの？ あたしはさーやっぱアマテラスに行きたいなあ。
そこで自分の生き甲斐見つけたいの！勿論、愛する旦那様とかもね
っ。おいおい、自分ちの神社はどうすんのさ。そんな五月との他愛
ないやり取りをふと思い出す。そうか、アマテラスはあたしの故郷
……でも、何だか嫌な予感がする。どうしてだろ。ねえ、その理由
を教えてよ。

そんな日常のさなか”それ”は、突然起こった。

＊

「——“アマテラス”は、どうして滅んだのか知っているかね？」

「そんな古の郷の名……日ノ神の名前をどうして……そちらの方が疑問ですよ」

「ははは、その昔、日神は女神でなければならなかった。だからこそ疎まれたのだよ」

無機質なドーム都市には似つかわしくないアンティーク調の執務室兼、研究室で初老の男が笑った。

「ところで島嶺君、”彼女”は元気かね？」

「ええ、そりやもう——憎たらしいくらい健全な南国の太陽をたっぷり浴びて、ね」

テーブルを挟んで対峙したソファに身体を沈める男は、浅黒い髭面を撫でながらニヤリと笑う。

「……だがもう」

おそろく”出逢っているんだろう”かな、島嶺と呼ばれた男はしばし沈黙に包まれた。

何しろあいつの親父と俺は、心底並々ならぬ関係だったから……親友？ そんな生易しいもんじゃない。どうでもいいが太陽つてのは、どうしてああも小憎らしいんだ。別に頼んだわけでもないのに朝になれば、ちゃあんとその季節毎の時刻に律儀に東の空に昇ってくる。俺はまだ暗黒モードのまま、あそこで不貞寝を決め込みたかったってえのによ。なのにあいつときたら、俺を無理やり朝日の

中に連れ出しやがった。まったく思い出すだけで反吐が出るぜ。

「月は日の映し身——でも、どうして月の神は海神でもあったんですかね」

「イザナギもイザナミも……そう、かつては海蛇の化身だったようだ」

「イザナギ、イザナミ——アマテラス、そしてツクヨミの生みの親、ですか」

こりや大蛇様が迎えにくるのも時間の問題だな。そんな切迫した案件を目の前のコーヒークップの中の冷めた黒い液体とともにのほほんと飲み干すと、島嶺は言葉を継いだ。

「……確か明晩は満月。それも沖縄本島では皆既月食。文字通りの祭り、ですか」

浅黒い顔を一層強張らせながら、だがその眸は確かに一瞬ギラリと光ったようだった。

満月前夜。その夜は、いつでもどこか落ち着かない。

第一だって太陽と月の間に地球が入るなんて、どう考えたって、そわそわするじゃないか……！

そんな色んな意味で満月の夜がお気に入りです。仕方ない。聡介は、いつもの屋根裏部屋で先日瑠美那から頼まれた月の海に関するレポートをまとめにかかった。聡介の自室でもあるその部屋の窓際には、特製の天体望遠鏡が置かれている。それは彼自身の心にも置き換えられるような一つのオブジェだった。

聡介も瑠美那と同じく沖縄本島から学校に通っている。実は自宅はニライカナイにあり、学校でも一応天文部に属しているのだが、あそこでは満足に生の星も拝めないといった個人的理由から、無理に本島にある祖父宅に居候している。瑠美那の家とは割と近い。ため、色々と詮索好きな祖父から、こいつめ、おとなしい顔してようやるわい、などと笑われ、案外図星だったため何も言い返せなかったというエピソードもあったのだが、本当の理由は聡介自身の部類の星好きから端を発していた。

それにしても瑠美那さん、こんなの趣味だったわけ。確か彼女は体育会系。ついこの間までは、天文部の僕の話なんか上の空で聞いてた癖に。くそっ石室聡介、一生の不覚！

『ねえ……月の光ってどうしてあんなに淋しげなのかしら？』

『へ？』

あの日は、まるでらしくもないロマンチックな発言に思わずドッ

キリして眼鏡がずり落ちそうになったものだ。何だかんだいつて、やっぱり女の子なんだなあ。そんな妙な感慨に耽りながら、聡介は改めて天体望遠鏡のレンズを覗き込んだ。よおし、視界は良好、晴天なり。今夜もばっちりだ。

本来は月というより、その先の宇宙、数々に瞬く恒星である自ら輝く星や銀河たちを探索するはずの望遠レンズは、今夜ばかりは主役の月にスポットが当たっていた。第一明日の満月に向け、ますます光を強める満ちていく月の夜などは、むしろ天体観測には適さない。けど、それはそれでよいものだ。

しかも明日の満月は月食でもある。文字通り月が地球の陰に隠され、月光を遮られる現象。だから今月に限っては満月前夜の今夜、というわけなのだが。満月は月に一度、一人ぼっちの月が太陽の光を燦燦と浴びて最高に美しく輝く夜。まさに晴れの舞台じゃないか。

どちらかという僕は太陽より月の味方なだけだね。数限りなく存在する恒星の一つである太陽より、影の薄い月の方が好みだなって矛盾してるけど。だけど大概の人がそう思うんじゃないかな。まるで当たり前のように大地に降り注ぐ太陽の光は、眩しすぎるのかもしれない。だけど、その当たり前の事実があるから、僕らはこうして生きていられるのかもしれないけど。実は地上の僕らも月と同じなのかもしれないね。

……ただし明日の満月は皆既月食。何だか月に一度の宴を強制キヤンセルされたみたいない気分になるけど、それにしても何となく妙な感じがする。聡介は、いつになく神妙な瑠美那の表情を思い出した。それに、むしろ月食は満月のパワーを更に強力にするらしい。一瞬、月光を失う暗黒の月。

——確かに月は太陽光がないと輝けない。その事実があるから、月はいつまでも太陽に縛られるんだ。

それはあまりに絶対的な真理。でも月面の表面は凸凹なのに、どうしてあんなに鏡みたいに素直に日の光を反射させるんだろ。だって月の引力は地上のすべてのものの生命を司ってるんじゃないか。海の干満、産後の産卵、そして人間の女性の月経周期……地表でさえ月の引力の影響を受けるといふ。

なのに。太陽はもつと月の気持ちを考えるべきだよ。『なあに言ってるのよ聡介君ったら！またいつものロマンチック病が始まった？』朗らかにくすくす笑う明るい瑠美那の笑顔が脳裏によみがえる。そう、まるで太陽みたいな——。

思わずぼおつとなる聡介の眼鏡の奥の瞳に、その時何かが映った。

「え？」

——キラッ

流れ星、じゃないよな。それは確かに今まさに煌々と闇夜に照り映える月面から放たれたような気がした。

……気のせい、か。

『コンバンワ……』

その月の光の雫よりも微かな、そのはじめましての挨拶の言葉に、けれど聡介は気付かなかった。

*

「月の海、か——」

我ながら恥ずかしいコトを他人に頼んでしまったと思う。でもきつと聡介君なら……。

アイツ、古の太陽神の真の願い。そう、アイツが求めているものの秘密を、あたしは知りたい……。当たり前じゃない、だってアイツは他人の迷惑顧みず勝手に——。勝手に決めてしまった。そう、あたし自身の運命を。

だからせめて、それが何なのか知りたいだけなの。表向きは自分勝手に強引で、まるでこっちの気持ちなんか知らずに無視を決め込んで。あたりかまわず照らし出す太陽の強い発光そのままに。

だけど時折覗くあの淋しそうな瞳の色。それはむしろ月の光みただった。どちらも光り輝くものだから、どっちにしてもアイツ自身であることに変わりないのだろうけど。それはまるで海みたいだ。何かを照らし出す光の海……。

面白いよね、反射望遠鏡は、微弱な星の光を捉えてその姿をレンズに映し出すんだ——そういえば、いつか聡介君がそう言ってたっけ。きつと月もそれと同じことしてるのかもね。闇夜に太陽の光を映し出す、それは孤独な夜の鏡。その月の海に隠されたアイツの願い。あたしには知る権利があるよね？　だって、あたしは……。

満月の夜を待つて静かに高鳴る鼓動に、どこかで見つめているアイツが同調しているような気がした。

*

『イザナギ、イザナミ……龍蛇であることを禁じられた神、か』

「ナーガ……」

設定ではガイアとは、その源流に北方系遊牧民（諸説によれば幻のシュメール民族であるとも）を戴く民族からなる巨大合衆国である。無論、欧州EUや南北アフリカからの種族も加わるが、ガイアがこういった多種多様な人種の坩堝と化したのは——それはかつての地球規模の大地殻変動による二大陸の融合によって急激に加速したためである。

それらに対し、古くは日本国であつたイザナギ。日本は古代インドをはじめ、インドネシアなどの南アジア、東南アジアからなる南方モンゴロイドをルーツとする海人族に由来するとの説がある。無論モンゴルなど北方大陸系からの流入も否めないが、それもこの国が基より南北双方のルーツを頂く文字通りの交差点、人種の坩堝といえるのであつたのかもしれないが。

古来より類まれなる航海術に長け、海洋を自在に行き来した海人族。彼らが崇め奉つた神はナーガ、すなわち龍蛇神であつたという（正確には男性形をナーガ、女性形をナーギという）どうやらイザナギの語尾『ナギ』とは風の意味の他、ナーガから転化したものであるらしい。いや推測とはいえ、その説には言語学的にも信憑性がある。

そしてナギと同様ナミも単純に波、もしくは波状の連続性を持つ生命の象徴であるとの説もある。寄せては返す波……潮の満ち引きは、そのまま海、そして生命の連続性、永続性をも示している。そうだ、取りも直さず龍蛇神とは龍神、海神のことなのだ。

ということは、かつて古代日本の国生みであつた男女二神イザナギとイザナミの、その本質は龍蛇であると言える。しかも二人は実

の兄妹神である。「いざ」は「いさ」——禁じることを意味する詞^{ことば}であり、同時に「潔し」や「いさをし（勲し）」などの物の本質の意味であるとも取れる。そこから導き出される答えは、もとは兄妹^{きょうだい}神であつたとするならば、文字通りイザナギ、イザナミは禁忌の二神とも言えるのだらうが……。

しかしガイアの手によって生まれ変わったイザナギは、その名の通り、元来は日本国であることを”禁じられた”国なのかもしれない。なぜそんなことをするのだらうか。それは愚問だ。同時にイザナギの名には”その本質”であるという真実が込められてもいる。いつか巨大化した大国の支配に反旗を翻す可能性を秘めた民族……。

イザナギの半身であるイザナミは冥府に葬られ姿を消した。だがしかし実際は海神としての本質を失わず、国土を消失したイザナギを、文字通り包み込む海洋として今も変わらず存在している。それは無意識のうちに人々の裡^{うち}に刻まれ育まれた記憶そのものだ。

そう、海こそは真に人々の、人類の遙かな生命誕生の記憶を内包している潜在意識そのものなのかもしれない。だからこそ海洋国家——劇中における現在のイザナギはイザナギたりえているのかもしれないのだ。

作中の島嶺黎司が思つたままの思考を、今またそのまま原作者でもある竜崎は思つた。

本作ルミナスコードに日本神話をメインテーマとして据えたのは正解だつた。いや、むしろ必然であつたとさえ言えるだらう。今まさにすべては古代神話にこそ回帰するべきなのだ。本作はそのための通過点である。島嶺黎司は主人公、金城瑠美那にとって、そしてひいては日本人にとっての文字通りの反逆者、裏切り者だらう。そ

して対する文字通り反逆の皇子ルミナスでさえも。だが裏切りの本質とは何だ。誰が誰を裏切るのか。裏切られた、と思った側が実は裏切っていると言えなくはないか。そう、両者の間に本当の真実などどこにもないのだ。

そして同時に人の本質とは、善悪双方にこそある。人は無意識のうちに誰かを傷つけているものだ。いやむしろ生きるという行為そのものが……。

そこまで思案した時、手元の携帯が再び鳴った。

『竜崎さん、至急応接室まで来てください。神代君が今——』
「分かった……ああ。彼女には、そのままそこで待っているように」

*

……できた。

いや正確には、全くといってほとんど出来上がってはいなかったのだが、自分の中で何かが固まった。今までの迷いが嘘だったみたいに。迷い？ああ、そうか。あたし迷ってたんだ。でももう覚悟は出来た。形だけでも、その意味での「完成」だったのかもしれない。

本当はアニメもオタクも嫌い。いや、正確に言うとなんか嫌いだ。そういう何かで自分自身を誤魔化している自分が嫌だった。あたしはずっと、唯一人のあたしだったはずなのに。だからあたしがあたしでいられる、そんな代弁者は毛頭必要ない。だから、ナミとも連絡を絶った？……違う！ 未玲は思わず心の中でかぶりを振った。あの子は関係ない？

……ちが、う。あたし、あたし、は——。
ひんやりとした黎明の薄蒼い闇のただなかで、密かに何かが生まれた気がした。

「あたし、タブーに挑戦したいんです」

その言葉に眉を顰めるでもなく、煙草にライターで火を点けていた竜崎は真顔で顔を上げた。

「それは……どういう意味かね？」

「言葉通りの意味で……文字通りの”タブー（禁忌）”です——」

そのうちこの娘は突拍子もないことを言ってくるだろうとは思っていたが、まさかこんな直球で来るとは。奇しくも古の^{いにしえ}記紀神話にて歪められた、まつろわぬ流^{るどん}熾の神々の物語を思わせる……。

竜崎は燻らせていた啜え煙草をテーブルの上の灰皿に乗せ、おもむろにふふつと笑うと未玲に答えた。

「いいだろう。で、そのタブーとやらを破る覚悟は既に出来ているんだらうね」

「——はい」

瞬間、竜崎の鋭い視線に魂そのものを射抜かれたような気がした。だがそれも一瞬だった。

「期日は一週間後……いや三日後だ。何分、制作が押しているものでね、時間厳守で頼む——解っているだろうが、これはビジネスだ。最初に円城寺君の言ったような生半可なファン心理だけなら、即座に退場して貰うよ」

「ええ、勿論。生憎プロ意識だけは持ち合わせているつもりですから——出来る限りのことをさせていただきます」

ははは、その糞生意気な物言いに思わず笑い声が出る。しかし竜崎が求めていたのは、まさにこの怖いもの知らずの強気な眼力だった。同時に未玲自身も、相手が竜崎だからこそ引き受けたのだとも言える。それこそ最初は円城寺さんに引き抜かれたんだけど。

業界でも強引な手腕で次第にトップにのし上がって来た、悪運ばかりが強いと悪名高い竜崎悟朗。そいつと互角に渡り合ってみたい。そんな思いが心の底に確かにあった。学校で脚本科を専攻しただけのことはあった。未玲には、元々やる気も実力も備わっていた。

だがメイン脚本家の円城寺冬華とともに竜崎が提示してきたのは、未玲にとつては、まさに難題だった。

そう、今の彼女にとつては……。

とつくに忘れたはずのナミとの日々がよみがえる。あの時のままのあたしだったら、きっと躊躇なんてしなかっただろう。でも、もう忘れたんだ……。どこかに封印した。けど自分でも知らないうちに、それはあたし自身の中にしっかりと染み付いていた。

……いいや違う、そうじゃない。元々あたしは。

昔、未玲の中で棄てたはずの心寂しい記憶がよみがえる。

雨に打たれた子猫みたいに、びしょ濡れのまんま、乾くことのない。かかった想いはいつしか、あたしの中で次第に腐り果てて行ったんだ。

その女、円城寺冬華からの連絡があつたのは、あれから半月後のことだつた。

そろそろ春の日差しが感じられるようになったある日、あたしは久しぶりにルミナス限定の同人即売会に顔を出していた。一期での人気は衰えるどころか留まることを知らず、それはこういったファン同士のイベント会場の熱気にもそのまま表れていた。

本当は、基本的に人ゴミ苦手だし……でも、やっぱり気になる。何がつて？ 勿論ルミナスコードもなのだが、それ以上に……。

ナミはあの日会えるはずもなかった末玲を思った。

きつと”彼女”はまた何らかのコンタクトを取ってくるはずだ。それを思えば多少なりとも空怖ろしい気もしないでもなかったが、ただどそれ以上に。第二期の制作は滞りなく進んでるんだろうか。確か彼女は言つた。すべてはまだ完成形に至っていないと。そして是非ともあなたの力が必要なの、と。

……なんだか本編中の瑠美那にでもなつた気分だ。

正直、本当は苦笑いする余裕もなかったのだが、あたしはそんなことを思いながら各サークルを物色した。

——うわ、エロいわーこれなんかかなり好みのシチュかも。やつぱルミナスは誘い受けかね？（相手がツクヨミの場合）いやま、場合によっては襲い受けや攻めつてこともありうるけど……。

しかし思わず我ながら苦笑い。取りも直さずこういう場所にいて、
こういうことを自然に思っている自分は、結構当たり前に腐寄りだ
ったりするのかもしれない。

相変わらずのカップリングは、ダントツ人気でルミナス×ツクヨ
ミ、もしくはツクヨミ×ルミナスカップが多い。だが、その陰で男女
問わず人気を得ているのは、やはり正統ラブであるルミナス×瑠美
那……まあそんなもんでしょ。よくある女性向けロマンス系統の作
風も持ち合わせているルミナスコードだけのことはあるわ。その当
時、あたしは余裕でそう思っていた。

でもそれが、大きな間違いであると気付くのは、文字通りルミナ
スの第二期が中盤に差し掛かった頃だったのだが、この時のあたし
に何が予想できただろう。

本当は、あの時の彼女の言葉だって半分は信じていなかったのか
もしれない。

第一読心術なんてさ……あんまりウソ臭いよね。
そう何かの間違いだったのだと思いながら、ふと背中に冷や汗が
流れるのをあたしは感じていた。

ブルルルルrrrr……！

その瞬間鳴った携帯にビクンと全身が跳ね上がった。

*

あたしは何を言ってるんだろう。

“タブー”なんて最早、使い古された道具のひとつにすぎない。誰もが今やそれを求めるあまり、いつのまにか手垢にまみれ、本来の意味を失った哀れな樂園の末路。玄人^{クロウト}どころかアマチュアの素人までもが同人という安易な形態を借りて、その聖域に無遠慮に押し入ってくる。基より禁忌を冒すとは、冒されざるべき場所を汚す行為なのだ。

でもその行為自体に何の意味もないのなら、それは既に禁忌とは言わない。ただの面白くもない独り善がりなデモンストレーションだ。言葉は、言葉以上の意味を持たない。そう、あまりにも皆、その“タブー”という言葉に寄りかかりすぎた。

それをすれさえすれば扇情的になる、それこそがセンサーシヨナルであるなんて、あんまり馬鹿げている。

でも、あたしは違う。言い訳がましく聞こえるかもしれないけど、少なくともそんなあからさまな宣伝効果を期待してタブーを冒すんじゃない。

——そう。これは「あたしの中のあたし」が勝手にやろうとしていることなんだ。だから、あたし未玲自身が、まるでしからぬほど動揺してる。勿論、何度も抗おうとした。だけどそれ以上の引力で、あたしの中のあたしは理性を押さえつけ、好き勝手に主張してくる。なんなんだよ、これ。

正直、全然後先考えてない。ただ、好きっていう感情に突き動かされて……。

ああもう！だから、自分でも全然信じられないんだ……っ！
ほんとあたし、何やってんだろ。正直、馬鹿すぎるよ。

だけど、そんなあたしの中のあたしの人知れずの感情おもいを知り尽くしているらしい、あの女リーヤ、円城寺冬華にあたしは。ハハ、まんまとしてやられたよ。ほんとアイツは危険な女だ……。

でももう戻れない。ルミナス……あんたはほんとに綺麗だ。そう、本当に怖くなるくらい。

*

第一“あの人”の言ってることがさっぱり解らない。少なからず、そっちの才能のある未玲ならともかく、なんであたしが……。あの時、あの女の言った言葉が何度も脳内でリピートする。

『あなたはただ、そこにいてくれるだけでいいのよ』

は？ いるだけでいい……？ って、一体どういう意味なんだろう。第一手を貸せていうこと自体、どうということなのか。あの女リーヤがルミナスコード脚本家の円城寺冬華だったこと自体驚きだったが、それ以上にあたしには信じられなかった。本当に何の取り柄もない、このあたしが。例のイベントで耳にしたオーディションという言葉が、ふとよみがえる。本当にあたしは“合格”したんだろうか。でも、一体何に？

『そう、合格よ——』

「っ？」

不意に鳴ったケータイに出ると、開口一番“その女”は、そう答えた。“読心術”——まさか、本当にそうなんだろうか……いつぞやネットで見かけた竜崎監督が宇宙人だっていう根も葉もない噂。じゃ、このリーヤも実は——？

はは、まさか、ね。あたしは再び得体の知れない寒気が全身に走るのを感じた。

『リーヤ……いいえ、円城寺です。ごめんなさい、何だかまた驚かせちゃったかしら？』

リーヤもとい円城寺冬華は、どこもなく楽しそうに鈴のような声で笑った。

それでも、あたしは怒ることも嫌がることもできず、ただただこの女に翻弄されるだけだった。いや実際、本当はとても怖かったのだが。それでも、何かに繋がるただ一つの一点があたしを捕らえて離さなかった。

「あの、本当にルミナスコードの……」

『ええ、そうよ。何度も言うようだけど、現在スタジオネプチューンで制作してる、そのルミナスコード脚本家・円城寺冬華……まだ信じられない？』

雑踏の中で、あたしは一人携帯を手にしたまま相変わらず凍り付く。それでも彼女、円城寺冬華は、かまわず続けた。

『おめでとう。とにかく、あなたは合格したの——伊勢崎ナミさん』唐突におめでとうと言われて一体あたしは何を喜べばいいんだか。

『うふふ、そうね。でも、そのうち解るわ……だって“彼女”もあなたと同じに』

その瞬間、あたしの脳裏に未玲の顔が浮かんで消えた。

「まさか神代……神代、未玲っていうのは……！」

思わず口走ってしまったその名に、自分でも啞然とする。でもまあもし、あたしの思考が相手に筒抜けなら、別に気にする必要はないんだろうけど、それでもあたしは自分自身の普通の反応で返すしか、全然心の余裕がなかった。

『——友達、なのね。唯一無二の』
そうなんだ、唯一無二……。

ただでさえ引つ込み思案なあたしには、あれから誰一人として満足に友達が出来たためしがなかった。社会不安障害っていう厄介な精神疾患はともかく、それが何とか治まってからも、やっぱりあたしはずっと独りだった。そんなあたしにとって未玲は……変すぎ。これじゃまるで誰かに恋してる、みたいだ。

「重症ね——」

不意に後ろから声をかけられギクツとする。振り返ったそこには、同じように携帯を手にした黒ずくめの女性が一人きり立っていた。

*

“それ”は、まさに“祭り”だった。

血湧き肉踊り、いつしか心そのものが、どこかヘトリップする。実際、古来巫女が行った神事では、魂が肉体を離れ、そしてそこに存在するはずのないものの魂が、その肉体に宿ったりもする。事実、ルミナスコードの舞台であった沖縄にはノ口という巫女が存在した。言葉通り巫女とは、元来女性がなるものである。卑弥呼や天照大神でさえ巫女だったように、沖縄の巫女であるノ口も漏れなく代々女

性が務めてきた。それは遠い常世ニライカナイからの神の言葉を聞くため、その魂を宿す神依かみよりの御神雛みかななぎ。

祭りとはマツリ——まさに神聖なる神事である。そして一度巫女となった者は自我を失くし、文字通りのトランス状態に陥る。そこが神世へ至る第一歩なのである。炎上するブログとかウェブサイトでの「祭り」……今時の流行りのスラング的には、そういった意味もあつたりするけど。

奇しくも人は何かにより心身が興奮すると、まさにこういったトランス状態に簡単に至ることができる。案外その“恍惚”を生み出すものは、日常生活の至るところに転がっている。音楽、映画、舞台、小説——それを我々は「文化」と呼ぶのだ。

私たちは、それを日々鑑賞し堪能し追体験して、さらにはいつしか己自身から、そういつた創作物を生み出すことを夢想する。元来人間とは感情の生き物だ。その感情そのものが、諸々の思考を伴った哲学と出合うことで「文化」と称する創作物へと昇華する。それを言ったらアニメだって……。

「そうね、立派な文化かもしれないわ——」
微妙な濃淡のサングラスの奥の瞳が妖しく微笑んだ。

目の前の得体の知れない魔女に言われるまでもなく、あたし自身もそう確信していた。いや、あたしが確信する以前に既に世間一般だって気付いていたのかもしれない。第一アニメや漫画っていうのは元々は子供のもものだ。それが今や……喜ばしいことなのか、それともそうでないのか、大の大人が鑑賞しうる世界や価値観そのものを、その「文化」は獲得した。

いや逆だ。元々がその可能性を秘めていたからこそ……それは文字通りの「文化」となり得た。だって今現在大人である誰しもが最初は子供だった。そして子供はいつしか成長し大人になる。その過程で大抵は、子供時代のことなどすっかり忘れてしまうのが普通なのだろうが、あたしたちの世代は違った。正確に言えば、ここまで面白おかしく発展してきたアニメ世界それ自体が。そんな人種を増やすに至った。いつまでも子供の頃のままの心が輝きや柔軟さを失わない。いいや、誰だって――。

そうでなければ、人間の精神は死んでしまう……。

手塚治虫が国内初のアニメーションを生み出してから、既にこうなる事は決まっていたのだ。もう戻れない――奇しくもアニメ漫画文化が世に蔓延ることでおたくが堂々と世間を闊歩することで、異様にこの世知辛い世の中の風当たりが幾分と和らいだ。実際、同時に一昔はなかった数多くの不可解な犯罪も頻発してはいるのだが……それでも。

手塚はそしてデイズニーは今にして思えば確信犯だった。萌えもやおいも、すべからくが元来、昔から存在してきたものの延長線上にあるにすぎない。可愛らしいものを可愛らしいと思う。性別関係なく、愛しいと思うものを愛しく思う（それでも腐女子は、あくまで微妙に違ってるけど）。要するにそれは“樂園”そのものなのだ。

「そう――樂園。本当は誰もが辿り着きたい魂の理想郷……」
あたしの思考を結ぶように、やおらリーヤ、円城寺は呟いた。

第一あたしたちオタでさえ、そのうちオタでなくなりつつあるのかもしれない。それがあまりに当たり前になってしまった時点で、異端は異端でなくなる。オタクはオタクでなくなるのだ。そんな時

代が来るだなんて、考えただけでぞつとしないけど。

それはともかく巫女とか祭りとかいった話が出てきた時点で、あまりに真実めいた胡散臭さMAXである。いや、それが実に本当のことのように思えること自体がやばいのだ。そう、それが真実であるのなら、なおのこと。何だかあたし、とんでもないことに首を突っ込んで巻き込まれてやしないだろうか。そんな得体の知れない不安が、ずいと鎌首をもたげてくる。

——ただそこにいてくれるだけでいい。

先日彼女があたしに言った言葉を思い出す。そうか、もしかしたら——人は「ただそこにいる」だけで、既に何かを成しているのかもしれない。生きているという事実そのものが。第一あたし自身、オタという原罪を密かにしでかしているのだ。

そう……イエスキリストで言うところの原罪。人間が本来背負っている罪。誰もがそれをしれつと犯しているのだろう。歳を取らない魂、それが樂園を謳歌し続けることは、やはり罪なのだろうか。どこことなく病んでいる、オタクという永遠のモラトリウム。

そして未玲も……多聞に漏れず腐女子は、どこか現実を逸脱している。もしかしたら彼女らは、そうすることで当たり前の自分自身を保っているのかもしれない。

男女間の現実の恋愛に本気になれない。いや、むしろ本気になるためにどこことなくその恥ずかしさをはぐらかす。男×男の恋愛を描いていながら、その実、限りなくその本質は現実の女性が夢想する恋愛観そのものにどこまでも沿い続けている。実際、男性向けの工口とはどこか性質が異なる。それは入れて出したら終わりという単

純で即物的なものではなく、どこかとても情緒的で観念的……実は腐女子とは、どこまでも初心で夢見がちで、そして真剣に恋愛そのものの理想を夢見ている生物なのかもしれない。

だけどそれを真顔でやったら、何とも格好がつかない。だから男同士、という役柄を設定して自分たちだけの世界を構築する。その上本人たちにとっては、それはたまらなく背徳的で、そして最上に美的であつたりもするのだ。（それが一部の男性たちに不評であるのは、ある意味当然のことなのだろう……苦笑）

＊

「あたしもさあ——最初、何となくそうだと思ってたよ」

おでこの広い眼鏡顔の桐子が、その眼鏡の奥の悪戯っぽい瞳孔を大きく広げて未玲を覗き込んだ。

「ん……最初はガチで断る気でいたんだ……だけど」

でもだからこそ、あたしはチャンスだと思った。未玲は腐である自分に何の躊躇いもないはずだった。だけど、そういう自分がある時期臨界点に達した、のかもしれない。

別に誰の断りもなく腐であることは楽しかった。勿論、誰かに断る必要なんて毛頭ない。つまり腐女子にも色々ある。あたしみたいな心底の真症から、なんちゃって腐女子まで。要するにオタも腐女子も、自分自身でも気付かずいつのまにか病状が悪化していることが多々あるのだ。まあ年に二回のコミフェ通いが常習化し、あれもこれもとまではいかないが同人誌を買いあさっているうちに、そしていつしか自分自身でもその作り手側に廻り、その「罪」の連鎖を繋ぐ役割を我知らず担ってしまう度に……。

ただあたしは、それだけで楽しかったんだ。でも――。

『あんたは何がしたいの、ナミ？』

いつか自分の相方だったあの娘に訊ねた言葉が、今度はあたし自身を貫く。本当は心から問い詰めたかったのは、あたし自身だったんだ。なのにあたしはあの娘に。そのことに今頃やっと気付いた。だから――あたしはあたしの道を探したい。ここからどこに続いているのかもわからない、行方知れずの途^{みち}だけだ。

その途中のどこかで、あんたに会えたらいいな……ナミ。

「ごめん、ありがと――」

「んにゃ、いいって」

突然、呼び出されたにも関わらず、今現在友達してくれている桐子は未玲ににかつと笑ってみせた。

別段何か込み入った真剣な話をするでもないけれど、ただそこにいてくれるだけで未玲は気分が安らいだ。ほんとう、助かるよ……。

でも、あたしは。あたしの我がままでもいい、心から向き合いたい誰かが確かにいる。でも今は。正直今会ったら、自分でもワケがわからず、途端におかしくなりそうな自分がここにいるんだ。だから、ごめん。

でももう、遅いのかもしいないよ……。

未玲もあたしも“その瞬間”まで、鏡の向こうの誰かがクスッと意地悪く微笑んだのに、まだ気付いてなかった。

「あれが有名な静かの海、そしてこっちで白っぽく輝いてるのがテイククレーター」

その夜、あたしは聡介君ちを訪ねていた。うーん、どうしようかな。とりあえず臨時の天文部課外勉強会ってことで。ってことは、あたしはその臨時の天文部員？　ぎこちなく恥ずかしそうに説明する聡介に瑠美那は訊ねた。

自分でも思いがけない展開に少し驚いている。確かに天体観測は夜に行うに決まってる。とはいえ……しかたないねえ、聡介君ちのご近所だから石室さんの御祖父さんとは顔見知りだし、それでも夜歩きは心配だから、今晚だけは泊まつといで。そう言いながら、どこことなく嬉しそうな顔をしてみせる母さんに、あたしは迷惑顔。

というより、聡介自身が瑠美那以上に戸惑っていた。あの、クラスでも密かに憧れてた瑠美那さんが僕んち（正確には御祖父ちゃんちだけど）に泊まるなんて——こりゃあ月の女神様に感謝かなあ。って、そんなこと言ってる場合じゃ全然ない。ほんと全然余裕ないよ。

「ほんと聡介君って意気地ないねーこの際だから、がんばがんば！」

ほとんど人事のように笑い飛ばす同じくクラスメイトの五月ちゃん。思えば彼女がさりげなく瑠美那さんに助言したのが始まりだという。そういうことだったら聡介君が適任だよ、と。まあそう言われちゃあ天文部副部長の自分としても引き下がれない。部員数5名という少人数の弱体クラブだけど、クラスでも人一倍人気の瑠美那

さんにアピールしとけば、もしかしたら……。

と、決して実現するとは限らない期待はさておき、とにかく今夜は満月だ。

しかも皆既月食の起こる今夜は、月面観測としては月が本影に入る午前零時までの間が勝負。ま、それはそれでもしかしたら、面白いものが見れるかもしれないけど。

……面白いもの。別の意味でそれがまさに今夜起こるのだとは、さしものあたし自身も気付かなかった。

いいえ、それは嘘だ。だって今夜限りで、あたしは——久々に姿を顯すであろう、アイツとともにこの沖縄を今夜離れなければならぬんだから。だから、ほんとには母さんにも、それから五月にも、じっくりお別れが言いたかった。それは勿論、今日の前にいる、聡介君にも……。

でも、もしそれがほんとなら、決して回避できない運命なら、別れを惜しむのは正直あたしの性質^{たち}じゃなかった。まさか金輪際、今生の別れってわけでもなし、すぐ戻ってくるから、という希望的観測も含め、ちよつとの間だけアマテラスに行ってくるね。ごめん、母さん、そしてみんな。

けど、そんな生易しい現実ではないのだということを、後になつてあたしは嫌というほど味わうことになる。

これじゃ、まるでかぐや姫だよ……。

ただ、あたしが「還る」のは、決して月の世界ではなく“アマテラス”という、あたしたちの分身の故郷だったんだけど。

そのちよつぴりの哀しげな予感を振り切るように、あたしは聡介君とのつかのまの時間を楽しんだ。そう、月のかたちが地球の影に隠れるまでの間。それはあたし瑠美那が瑠美那でいられる、最後の瞬間だった。まさにアイツが差し伸べる手を取った瞬間、あたしはあたし自身でありながら、あたしではなくなつたんだ。moon eclips——月の光が永遠に失われるわけでもないのに。

でもまさかそれが、あの忌まわしい龍蛇を呼ぶことになるだなんて——。

そして聡介君自身でさえも。ほんの少しでも、あたし瑠美那に関わつたばかりに……。

いいえ、それは半分は彼自身の優しさが招いたことかもしれないでも。アイツのことなんか頼まなければよかった？　だって聡介君は全然関係ないよ。それなのに、どうして。

ほんの少し前まで、それほど接点のなかったあたしたち。それがある意味、これほどまでに深い関わりあいを持つに至ってしまう。まるで太陽と月そのままに。それが良好な関係性なら、いざしらず——可愛さ余つて憎さ百倍、か。これもアイツの言う運命なの？　あたしはただ平凡な高校生活を送りたかつただけだよ、なのに。それに聡介君だって。

太古の昔から、太陽と月は相容れない。これほど大きく深く関わりあっているというのに、決して同時には双方の輝きが天空に現れることはない。だから……時に恨み罵りあい、それ以上に深く愛し合い。あたしたち人間は、こんなにも両者から多大なる恵みを授かっているっていうのに。その海の底よりも深い因縁の強さにあたし自身が焼かれそうだよ。

全能なる太陽の輝きを映し、けれどそれが精一杯というように、淋しげに優しく夜を照らすだけの独りぼっちのちっぽけな存在。決して、そんなことないのにね……なのに、貴方は。本当は、常に受身であり続ける、月からの一方的な片思いなのかもしれないけど。それだけに……。

けど、今まさに最後の光を投げかけようとする月光は、そんなことこれぼっちも思わずに、ただ穏やかに微笑んでいるだけだった。

——まるで今、目の前にいる聡介君みたいに。

その「想い人」を求めて、さまよう月の陰。それを望遠鏡越しに地上から眺めるのは、いささか気が引けたけど。

でももしかしたら、それは取りも直さず、不可解な愛しい謎を秘めて、あたしの中に潜もうとする、アイツの影を求めるあたし自身だったのかもしれない。

「でね、……あの、瑠美那さん？」

何となく上の空のあたしに聡介君が声をかけた。

「あ、ごめんね——いま聞いてなかった」

慌てて苦笑い。それでも、確かに心ここにあらずといった状態になるのは当然かもしれない。そんなことを全く知らない彼、聡介君はあたしに笑いかけた。

「今日の満月は、あんまり綺麗だもんね。僕だつてつい見とれてぼんやりしちゃうよ」

そう、それは“月”が次第に力を蓄えつつある予兆でしかなかった

た……そんなことさえ知らないあたしと聡介君は。ただその人智の及ばぬ宇宙エネルギーがもたらす、包み込むように強く淡い光源の美しさに見惚れるだけだった。

「ねえ——龍神って知ってる？」

徐にあたしは聡介君に問い掛ける。

「え、龍神…… ってのは確か海神、海の神様のことだよな」

「そういえばニライカナイは、ここ沖縄の美ら海^{ちゅら}の果てにある理想郷のことだけど、そこにも神様がいるのよね」

「うん。沖縄のニライカナイもだけど、大昔の日本神話では、国生みの神イザナギとイザナミや、それからその子供たちのうちの二人スサノオとツクヨミも海神だっという説もあるみたいだよ」

「イザナギ——それからスサノオにツクヨミ」

それはすべて今現在この国やアマテラスに次ぐ二大ドーム都市に由来する名ばかりだった。改めてそう言われてみると何だか不思議な感じがする。考えてみれば、なんて海に関わりの深いあたしたちの国なんだろう。まあ元は島国だしね。でもアイツの言っていた龍神……あたしたちの国に決して呼んではならない神様って一体。

「あ、そういえばツクヨミは月の神様でもあるんだよね。その名の通り月の暦を読むっていうことから来た名前なんだろうけど」

ドクン……！

一瞬、あたしの中で誰かの鼓動が高鳴った気がした。まさか……アイツ？　だが、それがすべての“はじまり”だった。

＊

“^{のそ}希み”を叶えるために必要だったのは、^{のそ}その希みの先にある愛しい誰かの命だった。

それが誰だったのかは最早分からない。いや、知っている、解っている。——ただ思い出したくないだけだ。その忌まわしい真実そのものを。だがアマテラス……^{あなた}貴女へと繋がる映し身をみつけてしまった、今ここに。

そうか、そうだね。貴方はまだ^{かのひと}彼の女……母君のことを。ならば私は――。

瞬間、長い髪を翻した長身の影が、最後の月の陰を覆い尽くした。

『この光の剣をもって、貴方への想いをここに捧げよう――』

……クスヒ……。

誰？ あなたは誰なの。その瞬間、まるで走馬灯のように一瞬の剣戟とともに脳裏に駆け巡った誰かの強い想い。瞬時にあたしはどこか別の空間へ放り投げられたような気がした。ダークホライズン。それは遠く広がる昏い水平線だった。まるで黄泉の国から放たれた暗闇のような、その剣戟。果てしのないその絶望……誰の？ 誰の絶望？ あたしにはまるでわからなかった。どうしてアイツが、そんなに哀しそうな、苦しそうな^{かお}表情をしているのか。それなのに容赦なく伝わってくる。あたしの内側から、確実に身体を蝕む鈍痛のような、^{いた}その痛み。

「瑠美那さん！」

一瞬、目の前の聡介君が揺らいで、そして何も見えなくなった。

とても、とても愛していた。そして、だからこそ憎かった。この手で殺してしまいたいほどに——だが。同じ血を分けた“分身”は、我が身同様にここに沁みついていた。胸に沁みわたる、最上の愛しさ。己自身を愛でると同様に貴方を愛で、赦されるのならば、自分自身の中に飲み込んでしまいたいほどに……。

飲み込む、飲み込まれる——。

その時、あたしは強い光の中にいた。息が出来ない。それはまるで濁流のようにあたし自身を翻弄した。すべてを忘れたいと思うほどに苦しかった。そう、苦しい。もしかしたら、これはアイツの感覚？ アイツの感情？

すべてを忘れてしまいたくて、そして同時にどうしても忘れたくなくて。だから……。

『瑠美那、きこえるか、瑠美那——』
え？

気がつくと、頭の中にどこか懐かしい凜としたアイツの声が響いていた。

『私の唱える祝詞いじひを聴け、そして心をひとつに束ね、ともに奏上するのだ』

何のことだか解らない。でも……。

『……はやく！』

奇しくも月が地球の陰にすっぽり入る瞬間だった。その時、どこ

からともなく顕れた双頭の大蛇^{オロチ}。その咆哮の地響きは大気を割り裂き、天地に鳴り響いた。それは、恐怖そのものだった。

暗闇からアイツの掌が差し伸べられる。もう戻れない。戻ることではないんだ。そんな予感とともにあたしは再び何かに飲み込まれる。でも、今度は違った。あたしは迷うことなくその温かな掌に自身の手を伸ばした。

よかった……父さん。やっぱり生きてたんだね。

どこかで聞こえていた誰かの泣き声がやんだ。それは、あたし。あたし自身の心が泣いてた涙だったんだ。

気がつくあたしはアイツの手をしつかり握っていた。そして懷に強く抱き寄せられ、ともに繋いでいた両手を大きく広げた。クロスする電磁場の中で化学感応が起こり、いつしか一つになったアイツとあたしの中心^{コア}に核融合が起こる。それはとてもとても熱くて温かくて、そして力強くて。すべての懐かしい記憶がアイツから流れ込む。なのにそれは一瞬の光源となつて幻の絶望^{てき}を切り裂くため、惜しむことなくあたしから雪崩れ込むと相手へと一気に放出された。

天地開闢^{てんちかいびやく}——！

『天地、開闢……！』

——パン！ アイツが大きな掌を打ち鳴らしたのと同時に、いつしかあたしもその詞^{ことば}をと共に唱えていた。

意識がどこかへ遠のく。恍惚とした感覚とともに飲み込まれた熱い奔流にあたしは自分自身を見失いそうになる。あたしの中にアイツが、アイツの中にあたしがいる。その時、確かに二人はひとつに

なつた。

その瞬間、おびただしい光の渦が周辺に巻き起こった。最初の出遭いの時とは比べ物にならないほどの巨大な光球。その強い光はまるで太陽の陽光コロナのようにすべてを焼き払わんが如くの力で目の前に広がる暗黒を一瞬でかき消した。プラズマの粒子が飛びかう熱風の中、あたしは強い磁力のような、その想いに気付く。その燃えあがる紅焰プロミネンスに、あたし自身が恐怖する。

もう、やめて……！

すべてが終わろうとしていたとしても、やむことのない怒りの焰けど、あたしは、その中に人知れず潜む深い哀しみに触れた自分自身を知った。それは想いの中心核コア。幼い、幼い子供が泣いてる……あれは、そうアイツ。安心して、もう独りにしたりしない。

母さま……。

覚えていて、クスビ。貴方はいつの日か私わたくしよりも相応しいこの郷くにの帝おうとなるのです。そのために知らなければならぬ……私の弟ツクヨミ、そしてスサノオの真の姿を。陰と陽——その双方の真実を。ひのかみ日神の名にかけて例え滅んでも、このアマテラスを護りなさい。

もう一度、戻る。ともに還るのだ。

あたしはアイツの裡うちに潜む強い信念を知った。そしてすべてを瞬時に理解した。その時から、あたしはあたしでなくなり、けれどそれさえも新しい自分に生まれ変わったような気がして、不思議に清々しくもあった。それなのにどうして、なぜ。まだ何かがどこかでこの胸にわだかまっているの……だけど、それでも。この運命を受

け入れた、のだ。

あたしはアイツとともに行こう。

いつしかあたしは、その本当の真実の名をみつけた気がした。そして、そつと呼んだ。

「——ルミナス」

あたしが名付けた、アイツの名前。太陽と月、そして宇宙のすべてを構成する、銀河^{ほし}そのものの輝き——“光り輝くもの”。それは密かな、でも確かに芽生えた絆の象徴だった。嵐はとうに過ぎ去り、生まれ変わった月が新たな光を地上に投げかけていた。

「……なんだ、それは」

「何ってアンタの名前に決まってるじゃない！」

「おかしな名前を付ける、な——」

それでも、その初めての名前に、月光に照らされたルミナスは少しだけ微笑んだような気がした。

*

そして、もう一人。

瑠美那、さん……そんなやつと一緒に引っちゃダメだ。気を失っていた聡介は気付かなかった。

いつしか自分が闇の宮で、月の神の膝元に抱かれていることを。

「よお——同類」

それはあまりにあっけない再会だった。

……予想に反して。言ってみれば、もつと劇的な再会ってやつを期待してたのだろうか。目の前の相手があんまり当たり前にしれつとした表情で手を挙げたものだから、何だか唐突に言葉に詰まってしまったのだ。はーやっぱりコイツは一筋縄じゃないわ。

そんなことを同時に思いながら、そしてまずあたしは彼女の容貌の変化にも驚かされた。あんなに長かった髪をばつさりカットしてシャギーがかったショートカットにしている。わわ、綾波かよ。まあね——だってあれから一体何年経つてると思ってるのさ。お互いもう結婚しても全然おかしくない二〇代後半だよ？ それでも何だかやはり不可思議な懐かしさが漂う。やっぱり伊達に濃い高校生活三年間を二人して過ごしてなかったってことか。

あたしは例によって謎の美女、円城寺冬華の口車に乗せられ、とうとうここまで来てしまった。都内某所の雑居ビル。そこは確かにかの有名なアニメスタジオ・ネプチューンが在籍する場所だった。何だかそわそわと落ち着かない。ただでさえ対人恐怖症に毛のついた元精神疾患持ちだったのに。

それはそうと、そもそもどうしてあたしは……先日このリーヤもとい円城寺女史の言っていた言葉の意味も碌に把握できないままにそれでもあたしは、やっぱり彼女に会いたかった。きっと会えるよな気がした。たぶんどんなキケンな罠が待っていたとしても？

……わからない、でも。

何かしら、とてつもなく嫌な予感というやつを胸に抱えながら、それでもあたしの足は躊躇しなかった、できなかった。まるで魔法にでもかかったみたいだ。魔法？ そうだ、魔法。第一業界内でも有名な知る人ぞ知るアニメ監督、あの竜崎悟朗作品である、この「ルミナスコード」に、かつての友人の未玲が関わっていること自体、何かの魔法みたいだ。それはそうと彼女はともかく、何よりこのあたし自身ですよ。もうなんで？ っていう感想しか湧いてこない。

一生に一度人には奇蹟というやつが起こるとはよく言っけど。奇蹟、これって奇蹟なのかな。あんなに会いたかった未玲に逢えたのも。そして、このいわく付きのルミナスコードに間接的にあたし自身が関わることになることも……。

でも、その時あたしはまだ知らなかった。そんな生半可な事態じゃないってことに。未玲もあたしも、なんて一筋縄じゃないかない、とんでもないことに巻き込まれてしまったんだろう。……まるで、奇しくも劇中のヒロイン瑠美那みたいに。

「み、未玲——さ、ん？」

「誰だよ、それ」

恐る恐る声をかけてみたが、返ってきたことなく不満そうな、ぶっきらぼうなその口調に冷や汗たらり。確かに早くも十年が経過しているとはいえ、あたしたちは決してそんな他人行儀な関係じゃなかった。それでも、そんな相手の反応に反面どこか安心している自分がいた。あは、ははは……思わず気まずそうな空気が流れ、自然と出てくる不自然な自分の笑い声にかえってあたしは膠着する。

「——コレ」

かと思うと、未玲が唐突に差し出した一冊の漫画冊子に今度は目が点になる。いわゆる同人誌というやつである。それもそのはず、いやーお懐かしや。それはあたしと彼女が高校時代にコミフェに出品した、かのガイアギアスのヒスコ八本であつた。まるで走馬灯のようにあの日の場面の一つ一つがよみがえる。

でも未玲は言った。なんとそれは元々彼女自身が所持していたものではなく、かのアニメ脚本家であり、あたしたちを今回の件に巻き込んだ張本人、円城寺冬華が所蔵していたものだという。驚くのは、そればかりじゃなかった。リーヤモとい円城寺は、この一冊の同人誌を手掛かりにあたしたちを探し出したのだそうだ。

まあそう言われてみれば未玲はともかく、便乗してあたしもつてことも解らないでもないけど、だけどあたしはこの誌面作りに関しても、たいして何もしてないんだよ？ ほとんどが未玲の創作。あたしは単に彼女にアイデアを貸しただけ。いつだってあたしたちはそうだった。妄想の出所は確かにあたし自身だったかもしれないけど、実際の作業はほぼ未玲のみの作品である。だから解らないんだ。

「驚いてるのはこっちの方だって……ナミ、どうしてあんたが」

さしもの未玲自身も合点がいかないようで、それでもあたしたちは、数奇な運命によって再び出会ったことに変わりなかった。

「でもよかった。まさか未玲にこんなところで会えるなんて、ね」

「う、ん……でも、そう素直に喜んでいいんだか悪いんだか……」

つまりあたしたちはハメられたのかもしれない。あの女、円城寺冬華に——その時未玲が飲み込んだ言葉に、いち早く気付けばよか

ったんだろつか。そう同類、つまりあたしたちはその意味でも確かに「同類」だった。

*

その日あたしが通された応接室で一時二人して話していると、しばらくして、あたしを連れてきた円城寺女史が再び部屋に現れた。

「待たせちゃってごめんなさい——ふふ、どう？ 久々の感動の再会ってやつは」

「ええ、どうも」

まったくどうもこうもないといった表情で未玲^{かお}が答える。確かに曲がりなりにも本作品の脚本家とサブ脚本家、である。当たり前かもしれないが、実にビジネスライクに円城寺に対して未玲は振舞っているようだが、それでもどこことなく心から本心を許していないといった感じた。

「本当にどうしようかと思ったのよ。あなたがなかなか軸となるテーマを決めてくれないものだから……」

ああ、そうか。ルミナスの話ね。やはり制作が若干遅れているっていう噂は本当だったのか。

「でもこれで準備万端整ったというわけね。神代さん、あなたが上げてくれた本稿と、そして——」

唐突に視線を注がれ、あたしは思わず緊張する。

「ここに……伊勢崎ナミさん」

何しろ今現在制作の真っ只中ですからね、その合間を縫って時間を取るのも難しいというのが実情だけど……。でも、必ず会ってくださるって言うてましたよ。その円城寺の話に未玲がふと目配せする。取りも直さず他でもない、その面会の相手というのは、本作監督の竜崎悟朗その人であつた。

未玲は言っていた、本当はあんたを巻き込むなんて本意じゃないでも、相手も”プロ”だ。そうそう逃げられるもんじゃないっていうのが分かつてるんなら。

「……あんたはあたしが守る」

その言葉に何だかあたしはどきつとする。確かに未玲には責任があるっていうのは解る。どうやらあたし自身はスタッフクレジットにも載らないようであるし、それ自体がどことなく怪しい扱いのよくな気がしてならない。それに……。

安心して——彼女のその言葉が何よりあたしは嬉しかった。この上なく。何よりたぶんしばらくの間は未玲に会える。うつん、きつと。あたしたちは再会すべくして再会したんだ。そんな気がしてならない。例え行く末にどんな嵐が待っているとも。

そう、どんな嵐が待っているようにも……。

あ、れ。これってどこかで？

え……もしかして、瑠美那とルミナス？

*

熊野奇魂命——クマヌクスヒノミコト、と読む。

え？ 誰だつて？ そりゃ企業秘密ならぬ、制作極秘事項よ。でも本作「ルミナスコード」における主軸の核ともいえる、大バレであることだけは確かだね。何しろ暗号、記号が渦巻く本編ならではの……。

神話では、クマヌクスヒは天照大神の五人の息子のうちの末子。

アマテラスがイザナギノミコトの左目から生まれたように、クマヌクスヒはアマテラスとスサノオの誓ひの儀式の際、スサノオが砕いて吹いたアマテラスの玉飾りから生まれた。アマテラス、スサノオ、ツクヨミがイザナギノミコトが生んだ三貴子なら、クマヌクスヒはアマテラスの玉飾りから生まれた五柱の神の一人ということになる。

でも要するに一番影の薄い、記紀神話にも記述の全くといってない謎の末弟。その名に冠されたクマヌは勿論、熊野。〓隠された場所、文字通り鬱蒼とした神の隠れる地、との意味がある。だからじゃないけど、瑠美那は神隠しに遭っちゃったのかな。そうそう、あの月とも太陽ともつかない、おかしい男神に連れられて——さすがアマテラスとスサノオの息子……おっとつとと。

え、あたし？ あたしが誰かっていうのも、今度こそ企業秘密。ってというか国家機密、か。

要するに「ルミナス」は面白いよー、っていうことを言いたかっただけ。

何しろ森羅万象、この世の色々なエッセンスを練りに練って混ぜ込んであるからねえ。最もそれも、たった一つのシンプルなことだけを言いたかっただけなんだけどね。

そ……すべては究極の一に集約される。そしていつしか、すべて

は無に還る。ヴァルゴもリーヤも、その辺のところよく解ってるみたいだね。

龍神のおわす国、日本。陰陽すべてを巻き込んで、それは古の神話に還る。龍蛇^{ナーガ}が疎まれ忌み嫌われ、そしていつしか畏怖の念を持つて崇拜の対象になったように。

善は悪に取って代わり、そして悪は善に……。

気をつけた方がいいよ。アンタも気付いたら悪に染まってるかもしれない。でも、ぶっちゃけどっちだっていいのか。だって双方とも、その両方のうちのどちらでもあるんだから——。

さ。そろそろあの二人に新たな刺客でも差し向けようかね。というか恋敵。

まあ、あの娘はルミナスにぞつこんだからねえ。
色んな意味で踏絵。

.....

クスヒ様。

どこにいらつしやるのですか——。

眼光の鋭い細面の少女が、一人眸^{ひとみ}を開いた。

いや女剣士、といった方が相応しい、凜としたその容貌。腰には文字通り一握の剣を携えていた。

そこにも深い闇夜とともに、ひっそりとした月の光が差し込んでいた。

*

『聡介、聡介……起きてください……』

その柔らかな声に呼ばれ、聡介は一時の眠りから醒めた。

気がつくとは自分は広い大きな寝台に寝かされていた。ひんやりとした感触の、絹糸でできたような生地ベッドシーツが心地よい。どこからともなく聞こえてくる穏やかな水音。それが今までの快い夢見心地を誘っていたのかもしれない。

そつと上体を起こしてみる。いたた、何だか頭が痛い。思わずこめかみに手を当てると、その同じ場所に再びひんやりとした感触が触れた。

「どこか痛みますか？」

額に手を添えた先程と同じ優しげな声の主に、そつと声をかけられ、ふと見上げる。そして聡介は息を呑む。

そこには驚くほど美しい人が腰かけていたからだ。女？ 男？ そのどちらでもないような。美人、といえば、例の草薙先生もかなりの美人だったけど、でも何かが違う。

その人はとにかくどこか人間離れしていた。蒼い水底を映したような髪の色。切れ長の涼しげな瞳。蒼白に近い色白の滑らかな素肌。その背はすっと伸び、足元まで長い髪の毛が渦を巻いている。そう、まるで月の光の妖精がそこに佇んでいるかのようにだった。

いや。というより、何だか怖いくらいの神々しさを纏ったその人は、さしずめまるで無慈悲な微笑を浮かべた月の神のよう。

「あの、あなたは一体……ここはどこですか？」

一瞬言葉を失い我を忘れた後、思い出したようにかすれ声を発する。その問いにすぐには答えず、その人は言った。

「あなたは何を見ていたのですか——」

その瞬間、聡介はぞくつと身が竦むような寒気を感じて身体を引いて後ずさる。そして見てはいけない何かを見たような気がして、思わず震えながら、かぶりを振る。しかし、どこからやってくるのか解らぬ怯えに支配された目の前の少年を見て、月の神は元の優しい表情を取り戻した。

「何も心配は要りませんよ……あなたはただ悪い夢を見ていただけなのですから」

そう言われて何があつたのだろうか、ふと記憶の糸を辿り思い返してみる。けれど、真白な聡介の頭の中の映像には何も映っていなかった。でも、ただ一つだけ。

「そうだ！ 瑠美那さんは……」

「瑠美那？」

そこまで言いかけて、はっとする。何かの不思議な光が、あの時彼女の身体を包み込んで、それから……。

一瞬、目の前に佇むその人の眸の奥が鋭く閃いたような気がした。

「——私の名はツクヨミ」

突然、目の前の不思議な人が自ら名乗った。

「初めまして——今日からあなたの護り神になる、夜を統べる月の神です」

その言葉に聡介は再び息を呑んだ。

*

“その小島”に龍神はいるという。

勿論、この間沖繩に現れた雷の幻龍^{いかずち}ではない。

差し当たつての目的地、かつての本土の首都だったアマテラスドームにまでは、かなりの距離があった。だから、あたしたちは、そこまで行つてとりあえず“乗り物”を調達しなければならない。

「カグツチ——」

乗り物、なんて言い方したら、ルミナスに失礼かもしれない。カグツチつまりそれは火龍、彼が可愛がっていた、要するに“ペット”だからだ。

ルミナスは少しずつ記憶を取り戻しつつあった。けれど、そうは言つても、すべてを完全に思い出したわけではない。あの瞬間よみがえった記憶のすべては、あの幻の闇龍を消し去るためのエネルギーに変換されてしまったからだ。

何だかな……もしかしたら、思い出す傍から自分自身を保つためのエネルギーに消化してしまうのかな。ルミナスが言うには、彼の意識体に適合する、あたし自身の生体エネルギーがまだ完全ではな

いからだそうだが。

だって、そりやそうだよ。あたしは生まれてこの方、こんなことするの初めてなんだから。っていうか、そもそもすべてが特異すぎる。

「どうして、あたしなのよ……」

思わず、ぼやくように呟く。もうとっくに受け入れたはずの、なのにまだ完全には納得できかねている、この太陽神、つまり光の守護神とあたしとのおかしい関係。そんなあたしを見て、ようやくその姿を保っているのかもしれないルミナスは大きく溜息を付く。

「——やはり」

それでも、どこか躊躇っているかのようにヤツは言いかけた言葉を途中で切った。

「な、何？……なんなのよ、一体」

まだ沖縄の地を完全には脱していない。そのことが瑠美那自身の決心を鈍らせているのか——それとも。午後の日差しが照りつける沖縄近海に浮かぶ小さな環礁で、いつしかあたしたちは言い合っていた。

「言いたい事があるんなら、はっきり言えばいいじゃない！」

あれから、とうに二日が経過していた。けれど、一人ぼっちでこんなとこまで連れてこられて、既に丸二日何も食べていないあたしは、さすがにお腹が空いていた。何より空腹は苛立ちを助長させる。

「アンタはいいわよね、だってあたしの生命エネルギーで生きてる

んでしょ？」

「そうだな——だが俺には生憎とお前の面倒を見る余裕がない」

まーよくも抜け抜けと……何よ。その冷たい態度にさすがに腹が立つたあたしは、思わず怒鳴り散らしていた。

「やつぱり帰る！泳いでだって、あたし一人で絶対沖縄に戻ってやるんだから！」

言つとくけど泳ぎは得意中の得意。陸上部所属の体育会系、金城瑠美那さんを舐めんなよ。しかし、ずかずかと怒り任せに地面を踏みしめて、背中を向け歩き出しても、相手は一向に呼び止める気配もない。なので、思わず盛大に叫んでやった。

「ほんとに帰るんだからあ！」

「ああ、勝手にしろ——」

はあ？ 背後から返って来た応えに怒り心頭である。もう、あつたまに来了。ルミナスなんてたいそうな名前、付けてやるんじゃないかった。あんなやつルミナスどころか、役立たずのヘボナスだよ。

役立たず……。

だけど、その言葉に思わず不安げに振り返る。けれどルミナスの姿は、もうそこにはなかった。

もう、どうしてだよ。勝手に現れて勝手に消える。この環礁にやってくるまでは、ずっと二人だったけど。でも、確かにルミナス自身も疲れているように見えた。それはそうだ、まだ本格的に姿を顕せるようになってから、何日も経っていない。それなのに空を飛翔している間中、彼は私を例の光の繭の中で守ってくれていた。その腕に抱かれている間は、もっとずっと穏やかな気持ちでいたのに……。

勝手なのは、あたしの方だ。そう思うと、ついさっきまでの空腹感がどこかに行ってしまった。勿論、お腹が空いて倒れそうなのは変わらないけど。

すると、先程まであんなに晴れていた空が俄かに曇り始めた。スコールだ。あたしは僅かに環礁にへばり付くようにして生えている森林に向かって走り出した。熱帯の森独特の植物が生い茂る緑のそこは、それでもどこか鬱蒼としていた。僅かでも雨粒を凌げる場所を探す。その間にも、どしゃぶりの雨が既に身体中を叩いていた。

しばらくジャングルをさまよった先に、こんな小さな島には珍しい、こんもりとした小ぶりの岩山が葉陰から姿を表す。その崖の隙間に小さな洞穴が開いている。あたしはこれ幸いと、その岩穴に駆け込んだ。

激しい嵐は一向にやむ気配がない。雨に濡れた身体を震わせ、岩屋根の下から不安げに真っ黒な空を見上げる。そうしていたら、先程の空腹がまた襲ってきて、あたしはさすがに心細くなり泣き出しなくなった。

沖縄本島にいた時は、こんな雨、屁でもなかったのに……さしもの強気の瑠美那さんも、かたなしですか。不意に昨日まで傍で感じていた、ルミナスの温かい体温が懐かしくなる。幽霊もとい太陽神に体温、というのもおかしい話だけど。でもアイツの身体は確かに^{ほの}仄かな温もりに包まれていた。

それはまるで、春の日の陽だまりに似て……。その温もりを拒否したのは、あたし。アイツだって、きつと今淋しいに違いない。たぶんだって、あたしがいないとアイツは……。その当たり前の体温でさえ保ってられないんでしょ？決して傲慢ではない気持ちで、あたしは一人思った。

そうしたら、急に後悔の念が襲ってくる。さっきはどうしてあんなこと言っただらう。あたしとアイツは、きつともう離れられないかもしれないっていうのに。そう、あたしたちは既に一心同体の間柄になったんだ。

いつしか地べたに座り込んだ身体が急激に冷えてきて、ぶるっと身を震わせる。何とかしないと風邪引いちゃうよ。ふと所在無げに振り返った洞窟の奥で何かの光がちらつと揺らめいたような気がした。誰かいるの？思わずあたしは、恐る恐るその光の動く方へ足を踏み出した。

洞窟内は意外と深く暗く、考えもなしに奥へ入ってしまったことを今更ながら少なからず後悔する。でも、確かにその光は奥へ奥へと続き、あたしを導いた。

その時――。

「停まれ！」

その声にはつとした瞬間、誰かに後ろから羽交い絞めにされ、突然身動きが取れなくなる。

「んむうつ……！」

とつさに叫ぼうとしたが、間一髪掌で口を塞がれ、悲鳴も出ない。薄暗い洞穴の中では、相手の顔も判然としない。同時に頬にナイフの切っ先を突きつけられたあたしは、いよいよ恐怖感に襲われた。ほんと心臓の鼓動が止まるかと思ったよ。

「——お前は誰だ、どこから来た？」

それはまだ歳若い女の声だった。けれど、どことなくその声は凜とした響きを纏い、その身体の動きにも寸分の隙もなかった。だけどこんな小さな環礁の無人島の、それも鬱蒼とした熱帯雨林の洞穴に、どうしてこんな若い女がいるのだろう。そんな当たり前の疑問も素直に湧いてこないほど、今のあたしの状況は切迫していた。

だが雨に濡れてよほど冷えていたのだろう、口元を塞がれて碌に呼吸もできないあたしは、思わずケホケホと咳き込み出した。すると背後の女が、さすがに見かねて声をかける。

「大丈夫か？」

どうやら、それほど悪い人物ではなさそうだ。

*

「よほど腹が空いていたようだな」

あたしはその人物に促され、洞窟の一角で燃えている暖かな焚き

火の前に座り、少しばかりの燻製の魚と汁物のスープを口にしていた。さつき見えた明かりは、この焚き火の炎だったようだ。少しだけ焦げ臭かったが魚も、そして有り合わせの青菜や芋などが入った汁物も本当に美味しかった。やっぱり目の前の相手が言うように、よっぽど空きつ腹だったんだ。

しかし、問題はこの目の前の相手である。見た目の顔つきは、まだ歳若い少女のようであるのに、厚手のマントを身に纏い、華奢だが決してひ弱そうではない相手の、そのごつごつとした指先は、よほどの手練である証拠だったのだが、凡人のあたしにそんなことが解るわけもない。それより何より、その一寸の隙も見せない切れ長の眸の眼光の鋭さに圧倒させられる。

「本島しまの人間か？」

確かに少女の言う通りだったが、彼女にアイツのことを話して、はたして信じてもらえるのかどうか。なので適当にここまで来た理由を考えてみるが、まさか漂流してきました、とも言えないし……。

「え、ええ……」

思わず曖昧な返事で笑って誤魔化そうとする。ど、どうしよう。そんな風に所在無げに焦りまくるあたしを、どうやら相手は不審に思ったようだ。いきなりフツの女子高生が、こんな無人島に……確かにあやしいと言われれば、あやしすぎる。

「お前、何者だ。返答如何によつては——」

いきなり先程みたいな殺気を帯び始めてきたその声色に、俄かに膠着する。するとひらり、と払いのけたマントの下に隠していた長

剣が姿を表し、あたしは愕然とする。少女は光のような素早さで鞘から剣を引き抜くと、眼前に構えた。

「……ッ？」

その途端——いきなりその剣が眩いばかりの輝きを放ち始め、あたしは思わず両目を瞑り手の甲で覆う。

「こ、これはっ……!？」

さしもの少女もこれには驚いたらしい。厳しい顔つきに歳相応の反応が現れ、その眸が見開かれる。まさか……、少女は確かに短くそう叫んだ。どうしてこの剣が光るのか、おそらく彼女にはその理由^{わけ}が解っているようだった。

あたしはというと、ただただ腰を抜かして、その場にしゃがみこむだけだった。勿論、腰を抜かす程度の事なんてアイツと出遭^{であ}ってからというものの、ほとんど日常茶飯事だったけど。

「まさか、お前は——」

なんとか剣を鞘に収めようとしながら、少女が改めてあたしの顔を見下ろす。だが、その先の言葉は容易に出てこないようだった。いや、単に不用意に出さないだけだったのかもしれない。それはきつと、あたし自身が、とある太陽神と並々ならぬ関係になってしまったことを話せないのと同じ理由からだっただろう。

けれども、その相手がまさか……第一最初から何だか変だと思ってた。まるでRPGのファンタジーから飛び出てきたような相手のその容貌。それを言えばルミナスだって、余裕でそのファンタジーの住人そのものだ。

突然の出来事に、さっきまでの静かだった空気が急にピリピリし出してきて、あたしはこの相手と一緒にいること自体に疲れてくる。だって目の前で常に殺気と妙なオーラの眼光を発して来られたら……。しかし、その緊張と互いの警戒心がピークに達した頃、次第に外の雨音が弱まり始めた。

「……お前は どうする？ やはり私と一緒に 行くか」

辺りの荷物をまとめ、身支度を始めた少女にそう訊かれ、当然躊躇する。

「あの……でも、やっぱり」

はつきりしないやつだな……私はもう行くぞ——そう苛立ち紛れに素っ気なく言い放ちながら、相手はさっさと洞穴の外へ出て行く。勿論その場に留まるわけにも行かないから、あたしも仕方なく付いていく。しかし、横顔だけで振り返り背後をちらと窺うその眸は、やはり油断ならぬ光を放っていた。

外に出ると、もうすっかり雨はあがり、南国特有の嘘のような青空が輝いていた。その日光の差す反対側の海辺には、まだ靄が立ち込め、そこに鮮やかな大きな虹がかかっている。

「虹……か」

わあ綺麗な虹、そう素直に言葉に出したかったのだが、なんとなくこの女剣士の手前、そんなことでさえ憚られて思わず口を噤む。

「——お前は沖縄の人間だな、虹にまつわる伝承は知っているか？」

まるでわざと試すようなその口調に、あたしは一言だけ、沖縄には虹のことを蛇に見立てた伝説が残っている、とだけ答えた。

詳しくは知らないが、そういえば虹と蛇はなんとなく文字が似てる。考えてみれば、虹は太陽光が雨粒に当たって、その光のプリズムが七色に光ってできるんだっけ。その意味では太陽に決して無縁ではないどころか大有りな現象だ。たぶん蛇の鱗は見ようによっては七色に光って見えることもあるから、大空に弧を描くあの独特の細長い形もあいまって、まるでウロボロスの環のように大昔の人は虹を蛇に見立てたのかもしれない。

「そう——すべては太陽があるからこそ」

ポツリと呟くその後姿が、急に心寂しそうに揺らいで見えた。そして、決してそのことを忘れるな。その言葉に滲んだ警告めいた響きに、なぜだかあたしは不意に緊張する。

確かにすべては太陽の眩い輝きによって成り立っている。あの美しい虹の輝きは、そのことを如実に物語っていた。太陽、虹、蛇、龍神……やだな、何だかすべてが一つの糸で繋がってる気がする。それでも、さすがにアイツが心配しているだろうと思って、少女と別れてから精一杯の声を張り上げて、その名を呼んだ。

「ルミナス——ッ」

……大声でわめくな。すぐに耳元にその声が聞こえてきて、あたしは腰を抜かしそうになる。

「もつつ急に傍で話しかけないでよ!」

いつの間に現れたのか、傍らにすつと立つ長い髪をした長身。その黒髪に映える、煌びやかな黄金きんの飾り冠や身に纏った鎖帷子の渋い銀の輝きには、もう慣れたけど。

「どうやら空腹は満たされたようだな」

あつたりまえよ、沖縄育ちの野生児、瑠美那ちゃんを見くびらないで貰いたいわね、そう見得を切ったものの、例の少女が側で聞いていたら、なんて言うか。

「お前の体力も回復したようだし——さあ、行くぞ」

さっきまでの喧嘩が嘘のように、ルミナスは毅然とした態度で告げた。ちよつと癪に障るけど仕方ない。

めざすは、淤能碁呂島オノゴロ……！

そこに待つ火竜、カグツチと、そして——。

とうとう自己紹介もしなかったな。

その時のあたしには、まさか今日出遭った同じ人物との出会いが、そこで再び繰り返されるなどとは思っても寄らなかった。

*

古来、日本で皇位象徴の神器として尊ばれたのは、鏡、剣、そして勾玉たま、いわゆる三種の神器であった。

その中でも最高の宝器とされているのは、天照大神の神威を象徴する鏡である。すなわちアマテラスは天皇家の祖神として祀り上げられ、鏡はその権力の象徴でもあった。しかし、鏡「カガミ」は「カ

ガメ」が転訛した古語であり、カガはすなわち蛇のことであるというのは、記紀神話など様々な古典文献や古語などから容易に抽出できる事実だ。

様々なものの姿を映すだけでなく、何より光を反射し輝くことから、鏡には神の威光が宿っていると信じられてきた。それはおそらく異様な輝きを放つ蛇の目の擬態であり、だからこそ、いつしか「カガメ蛇目」「カガミ鏡」と呼ばれるようになったという説である。

日神であるアマテラスが蛇神であるというのは、一見異様な話だが、しかしアマテラスの生みの親であるイザナギ、そしてイザナミこそが龍蛇の化身であることを考え合わせると、いとも簡単に腑に落ちる。これも興味深い話だが、東西に細長い日本列島は龍蛇の姿形をしている。まさに龍神の国、だ。

……その大地の形が消え失せ海に飲み込まれた途端、“神”は再びその姿を顕した。

太陽と月、陰と陽。しかし、太陽神が鏡を表す蛇の化身だとすると同時に月も、その反射の性質や陽に対する陰の気質、そして、その陰の気質さながらに、記紀神話で多くを語られぬ月神ツクヨミノミコトが海神、すなわち龍神であるというのも実に興味深い話である（どちらにしても日本は陰の国、ということか）。

つまりこの国には太陽も月もない、陰も陽もない。そして同時にどちらでもありえるという、実に不可解な話になってくるのだ。だが真理などというものは、存外そうしたものかもしれない。というより、一つの物事にはプラスマイナスの両面が常にあってしかるべきだというのが本当の真実かもしれない。

> i 7 8 5 1 — 4 4 7 <

h o t o b y . N A S A

p

——どこを切っても蛇、蛇、蛇だらけだ。

竜崎は今更ながら、腹の底からこみ上げるくぐもった嗤いを抑える事ができなかった。蛇、か。つまり古来より日本人は邪神を崇拜してきたことになる。古の時代からがこの調子だ。^{いにしえ}近い未来にこの国がどうなっているかなど容易に想像できる。いや……。

常に性善説を信じ唱えたがる人間こそが、その邪神を己の裡に宿^{うち}しているのかもしれない。特に神社神道などは潔癖こそが神聖に繋がると妄信するきらいがある。だが人間の脳のほとんどは使われずに眠っている部分が多いというが、理性の殻に固く身を閉ざしたその中心にどんな化け物を飼っているか分かったものじゃない。

……そう。人間の本質は、遠い進化の道筋を反時計回りの螺旋状に遡った処にこそある。ヒトの脳は確かにかつて爬虫類だった頃の記憶をその裡に宿している……眠れる竜蛇。

そして畏怖こそが信仰の大本の核となる。人は畏れ^{おそ}を抱くものこそを崇拜の対象とする。

だからこそ——。

二匹の獲物は確かに今この掌の中に入った。いつしか己自身が蛇にでもなったような気になってくる。狂気、か。時と時の狭間のエポケットに嵌まり込んだまま、このまま時が停まればよいと思っただが、それも一時の戯れにすぎない。

竜崎は携帯画面で時間を確認すると、仮眠を取っていた薄暗い部屋を後にした。

相澤太一……本作ルミナスコード第二期の副監督に急遽任命された男である。

まあ一期が竜崎悟朗単独の監督作だったので、二期のサブ脚本家、神代未玲とともに今回は監督、脚本ともにいわゆるダブルスープ方式を取っているのは、やはり単なるテコ入れ以上の意味合いがあるということだろうか。そんな考察が、その後アニメ業界やらファンの間で、まことしやかに噂された。

しかし、これは本人に関する実情を知る者だけが知り得た情報だが、相澤は神代とともに元オタだったというから面白い。それも実は……神代未玲とその昔、顔見知りの間柄だったとか。勿論これはファンはおろか業界内でも、ほとんど知られていない事実だった。

でも——あたしは知ってる。未玲がどんなに相澤^{コヘ}に手を焼いていたか。

あの夏の日、コミフェの同じスペースで……確かアイツはあたしたちの隣のサークルにいたヤツだった。今でこそ女性向けと男性向けは別の日程を組まれ開催されているコミフェであるが、その当時はまだイベントとしての規模もそれほどでもなかったということもあり、男女混合のオタが会場にこった返していた。

『ふん……やおい、ねえ。気色ワリ』

隣のスペースのその眩きを未玲は聞き逃さなかった。だが、その時は別段気にする事もなく、適当に受け流していた。でも。

確かアイツの所は結構有名な人気作家を数名抱えるサークルで、あたしたちみたいな名もない弱小サークルにとっては、まったく世界の違う目障りな、どうでもいい存在だったかもしれない。そうだよ。だいたい、あくまでアマがアマとして楽しむコミフェ市場で、何をプロ気取ってんだか。そもそもそういうやつらには、あたしたちは金輪際関わりたくなかったし、それに、その時までは特別気にも留めていなかった。

それは、そのうち午後早くに、隣のスペースで俄かにパチパチと大きな拍手が巻き起こった瞬間だった。

『おー完売、完売！おめつとさん、今回もいい成績残せたわ』

そいつのそんなあからさまな台詞が嫌でも耳に入ってくる。普通ならサークル間の交流ということもあって、おめでとうの一言くらいかけてあげたいところだが……。満面の笑みで勝利を祝う隣のサークルとは対照的に、あたしたちのスペースは人影もまばら、見事に閑古鳥が鳴いていた。

『あれ？ お宅たち随分と苦戦してるねえ——』

うるさい余計なお世話だ、くらい言ってやりたそうな未玲の表情でも相手は構わず続ける。

『第一あれじゃん、男×男なんてジャンル、同じエロでもあんまり普通じゃないってーかさ、要するにオタの面汚し』

ピキ、その瞬間未玲のこめかみが、そんな音を立てたような気がした。み、未玲、相手にしちゃダメだよ……耳元に囁くそんなあたしの言葉も、今の彼女の耳には入らないようだった。そして——それはとうとう爆発し決壊した。

『もういつぺん言ってみるよ!』

瞬間、その一角の空気が瞬時に凍りつき、皆が振り返る。

『あーこれだから女オタは怖いねえ……そりゃ俺たちも立派なオタだけどさ、まったく冗談の通じない相手つつーのも辛いわ』

未玲……、すんでのところであたしが止めたせいもあって、その場は何とか収まった。でも、その年の冬もアイツらのサークルは相変わらず大手並の幅をきかせており、あたしたちは結局、毎年同じしこりを残すことになった。何せ相澤は、たとえ同じスペースでなくとも各サークルを周るついでに、何かに付けてあたしたちのサークルにねちねちとした攻撃を繰り返したからだ。

あんなのは男じゃない、女の腐ったやつだ。未玲は每期ごとにそう言っていた。でもコミフェに当選する度に、そんな話をしなきゃならないなんて、どう考えても癪に障るから、あたしたちはあえて何も考えないことにした。そして完全スルーを決め込むことにした。

今だってネットの荒らしには、まずそういう対処の仕方が一番の鉄則なのだ。まったくいつの時代にも、同じような輩はいるものである。ほんと、あたしとしても未玲としても、単にそんな風に簡単に片付けられたらよかったんだろうけど。

「相澤……なんでアイツまで……」

偶然にしては、あまりに上手すぎる。まあオタ市場なんてそんなものか、世間は広いようで狭いって言うけど――、確かにそんな風に片付けられそうなハナシではあったが、相手が相手だけにあたしたちにとっては、人事ではなかった。第一どういう経緯で?それ自

体が、あたしたちのケースを取ってみても怪しい話だったし、何かが気持ち悪かった。そんなあたしたちは、このルミナスコードに纏わる“闇”について、まだ何も知らなかった。

一体、男向けエロが健全で女性向けが不健全、だなんて誰が決めたんだろう。確かにそれを言ったら、一般的女性向けＢＬ市場としては元も子もないけど。結局、そういう女側の主義主張が男どもは気に入らないのかもしれない。男尊女卑？ 冗談じゃあない、一体いつの時代だと思ってるのさ。けど、それは確かにこの日本文化そのものに深く根付いた悪習だった。未だに相撲の土俵には女性は入れないし、女人禁制の慣習が残っている伝統文化は数多くある。やまとなでしこ、女はおとなしく男の後についていけばよい、そういう意識は未だ世間に根強い。

でも、時代は変わった。女も男同様に同じステイタスに立ち、社会で活躍できるようになった。

何よりこのオタ文化、オタ世界においても同様の変革が起きている。それが世に言う腐女子という存在とＢＬ市場の登場だ。もっとも基よりやおい、つまりボーイズラブは当たり前リアルに存在した。仏教の伝来とともに広まった平安時代より続く衆道、が何よりの証拠だが、むしろ二次元の世界であるＢＬは、その美的構造を高め、より普通に女性の感性に訴えるように完成されてきた。確かに一昔も二昔も前から、少女漫画の世界では当たり前存在する、この女性的な男同士が繰り広げる恋愛浪漫ロマンなのである。

男は単純、女は繊細、決してそんなレッテルを貼るつもりはないけど、それにしても腐女子に対する、腐男子、なんていう存在もいたりするから、今にしてみれば解せぬものである。要するに女性向けオタ文化であるＢＬが男にも広く受け入れられた証拠なのか。ま

あそんなことは、どうでもいいけど。

それにしても、なぜアマテラスは女神でありながら日神^{ひのかみ}として日本神話に迎えられたのかしら？——いつだったか円城寺女史が言っていた言葉を思い出す。

古代、女は女神だった。それは原初の生命誕生の海と繋がる子宮を持つ、すべての命の源だからだろうか。それなのにいつの日も、この国で女は虐げられてきた。それは“穢れ”を持つがゆえだ。だけど、誰もがその穢れた血の海から産まれてきたのに、どうして女ばかりが一方的に犯され、男の欲情を満たしてその精を受け入れなければならぬのだろう。単なる染色体の違いで、こんなにも扱いが異なる。男は皆、母である女から生まれてきた。日女^{ヒメ}巫女^{ミコ}。日巫女^{ヒメ}。卑弥呼でさえも、その名の由来は日神である。男は陽、女は陰。太陽と月。

ルミナスが太陽でツクヨミが月。けれど、どちらも男——いや、元々性別なんか関係ないのかもしれない。そういう瑣末な事にこだわらるから、人は本質を見失う。要するにアマテラスは、あたしたち腐女子なんだ。それこそが原始の日神の特権。太陽も月もない。男も女もない。だから男同士の恋愛劇を好んで世に演出^{アビール}し、新たな世界を創造する。

でも、そう考えると、ルミナスが反乱を起こしたのって……。

思いもかけず、この相澤が監督の片腕とも称される副監督に迎えられたのは。なんだか嫌な予感がする。

……もつとも、元々がいい予感なんて何一つなかったんだけど。あたしたちはもう、オタというオブラートにくるまれて純粹培養さ

れてる場合じゃなくなった。少なくとも、あたしと未玲は――。

*

その週の土曜日、いきなりあたしは、例によって再び前触れもなく呼び出された。

『あ――伊勢崎さん、今日お休み？ならちょうどいいわ、少しだけ時間貰ってもいいかしら？』

やっぱり携帯番号なんか教えるんじゃないかった。今更のように、あたしは後悔の念に襲われた。が、それも既にあとの祭りというやつである。円城寺は、あたしにとある駅前を指定し、その場所で午後3時に待っているようにと伝えた。勿論、当然白ばつくれることも出来たのだが、これまで同様、あたしはその指示になぜだか逆らう事が出来なかった。

もう春……四月初旬、それもそのはず、だ。本来なら、既にルミナスコードは春の新番組として放送にかかっていなければならなかったのだが。でも、今からあたしが会う相手が、まさかここでこんなことをしていようとは、どんなルミナスフリークであろうと、決して窺い知ることなどできなかっただろう。

やはり未玲に一言報告しておくべきだったろうか。でも、ただでさえ忙しいのに迷惑かけられないような気がした。って言うたら、彼女は怒るかな。それに……。

などと一人駅前の雑踏の中で思案していると、一台の車のクラクションが唐突に鳴った。思わずその音に振り返る。すると、ロータリーの舗道に突っ立っているあたしの目の前に、その車は滑り込ん

できて静かに停止した。

「——君、伊勢崎ナミさん？」

運転席側のウィンドウが音もなく降りると、その向こうで眼光ばかりが強い光を放つ、浅黒い精悍な顔つきの男がニヤリと笑い、あたしは思わずギクツとする。

男は車内から一枚の名刺を差し出すと名乗った。

「——私が例のルミナスコード監督を務めている、竜崎悟朗です」

要するに、キミの雇い主^{クライアント}ね。そう言われると改めて緊張する。目の前の相手は、少しくたびれた風情のオールバックの、歳相応の落ち着きの中に血気盛んさと漲る野生を同居させた、何とも言えない存在感を放つ男性だった。でも写真で見るより割と普通だな、などと当たり前の感想を思いながら、あたしは恐縮しつつ、その名刺を受け取った。

本音を言うと心臓バクバク、絶えずあたしの心の中のオタマインドが、わーわー、これがあの竜崎悟朗監督その人なのですかあ！などと一人盛大に騒いでいたのだが、それはここだけの秘密（まあ確かに憧れの人だしねえ）。

そんなことより、当面今問題なのは、一体これから監督とどこへ向かうのかということだった。ただ促されるままに助手席に座ってしまったのだが、本当はとても怖かった。だって相手は会ったことのない見知らぬ男性である。……ま、竜崎悟朗その人だということ
は勿論知ってはいたんだけど。

そんなあたしの緊張を察したのか、竜崎氏は、
「そんなに警戒しなくても大丈夫だよ。まさか取って食おうってわけじゃないから」

あ、あたし、そんなこと思ってたん？ 確かによく知りもしない男性ひとの車に平然と乗ってしまう方がどうかしてるだろうけど。でも……。第一印象で怖い怖いと何となく思っていた竜崎氏は、それなりに冗談の通じる、話の解る相手だった。

現在、ルミナスコードの制作は急ピッチで作業中、本来ならば監督自ら、脚本やコンテは基より原画チェック、そういった画面造形そのもののクオリティの維持は勿論、最終段階のアフレコ音響作業にも参加しなければならいし、そればかりか全体のセクションの進行具合を常に監視していなければならない。まったくアニメーションの監督業というのは、決して楽なものではないのだ。ま、それもこれも、急遽副監督として抜擢した相澤君が自分に替わり、現場に立ち会って文字通りの監督指揮を執っていてくれるから、今頃こんなところで油を売っていられるんだが。

相澤太一——監督自身の口を上ったその名に、思わず耳がピクツと動いたような気がした。

そんなことを呟きながら、それもこれも本来の脚本担当でもあり、監督自身の片腕ともいえるコーディネーター役を買って出ている円城寺君のおかげだよ、と竜崎氏は続けた。やっぱり相澤をスカウトしたのは円城寺女史なのか。

……円城寺冬華、やはり只者じゃないのかな。まあ元々やり手コンビとは前から各所で評されてたみたいだけど、さすがに御本人の口から、そういった話を聞くと説得力がある。だけど……。

あたしは不意に思い出した。ダメだ、こんなにリラックスしてちゃ。だって、どう考えたって怪しいことが多すぎる。そもそも最初の話からして、どうしてリーヤ円城寺は、あのイベントであたしのことを知っていたんだろう。読心術、というのは確かにあまりに嘘臭い話だ。そして、未玲とあたし、さらに相澤太一までが、どうして今ここで一堂に会したのか。それぞれがそれぞれに、このルミナスコードという人気作の制作者の一人として。

そんなことを考えていると、どうしても緊張がピークに達してしまふ。そしていつ竜崎の口からその経緯や理由が伝えられるのかと、あたしは身構えた。しかしそれでも竜崎は、絶えずそんなあたしに對して、あくまで紳士的に振舞い、笑い話などを交えながら緊張を解く手助けをするだけだった。

あーもー、何やってんだろ、あたし。監督は結構優しいし、でもそんな相手のペースに乗せられちゃダメだったのは、勿論解ってはいるんだけど。これじゃほんとに未玲に叱られるよ。第一さつきからずっと気になっている、その本題。あの、今日は一体どこへ行かれるんですか。だがしかし、なかなかその質問を切り出すタイミングが掴めない。

「あ、あのう……」

しかし竜崎氏は、構わず続けた。

「伊勢崎さん、君はこっちはいける方？」

そう言っつて、くいつと一杯やる手振りをして見せる。

「——なんていうオヤジっぽいアプローチは一切しないつもりだから、安心してくれ」

かと思うと、穏やかな低音でそう告げる。それでも、くくつと笑う竜崎氏に、あたしは内心穏やかではない。そして、案の定。

「オタクっていうから、どんなあばずれが来るのかと思っていたら…… 案外君、かわいいね」

ええ、よく言われます。ってそうじゃなくって——ちらと少なからず品定めするような視線に、思わず頭の先から爪先まで全身が膠着する。う、もしかして典型的セクハラ親父。まるで蛇に睨まれたカエルにでもなったみたいだ。しかし、竜崎は言った。

「いや、かわいいつてのはその……つまり君は神代君とは違うつていう意味だよ」

未玲とは違う。まあ確かに。それは今更他人に指摘されるまでもないことだった。だから、あたしと未玲は……この人はまさか、今になってもあたしたちの間に見えない透明な壁が存在していることを知っているんだろうか。未玲もあたしも、お互いそんな素振りは少しも見せないけど。でも、そんなはず……。

「まあ神代君は神代君で——腐女子、ねえ。実に言い得て妙だな」
竜崎氏は、いかにも面白そうに指摘した。

「お宅も結構、その腐ってるお友達の一人だったりするのかい？ふ、何が面白いんだか、っていうのは余計な御世話かな」

——え、えっ？ まさかのルミナスコード監督の台詞が飛び出す。これって思わぬ本音ってやつ？

半ば腐女子を商売相手にしている人の発言としては、それなりに問題かもしれないが、案外実情は、そういうものなのかもしれない。そうだな、何だかんだいって結局「商売」だもんね。そう思いながら、心なしか淋しくもなった。そして、かつてこの人が参加した作品を未玲と批評しあった懐かしい日々が脳裏によみがえった。

創作物には、それを作った人の心が表れるというけど。だから本音を言えば、あたしは今日の前にいるこの人を信じたかった。だって——そう、体温。確かにこの人の作品には“心”があった。人の心を掴む力……それを人心掌握術と呼ぶのだとは知っていたけど。

その時、何を思ったか不意に竜崎は車を車道脇に寄せ、エンジンをかけたまま停車させた。

「だが……それもこれも一興。そして君と俺がここで出遭ったのも何かの縁。君自身がオタクを返上していいかどうかはともかく」

——カッチン、カッチンというウインカーの単調な音がやけに耳障りに響く。竜崎の眼の奥が、その時一瞬光ったような気がした。

「君、もしかして——」
え。

「……男と寝た経験もなかったりして」

その瞬間、あたしは今日の前にいる相手は何者であるかを思い出した。決して男嫌いというわけじゃない。そんなカマトトぶったような真似が今更できる歳じゃない事もわかった。だけど、だけど。狭い車の中、今日の前にいるのは。

四十代。正真正銘の大人の男。そして——あたしは。

「たとえば、こんな風に……」

突然、近づいてくる車内の人影。苦味を帯びた煙草の薫りがふいに目と鼻の先に漂う。ドクン、ドクン……鼓動が激しく高鳴り、頭の中が真白になる。怖い……。何の予告もなく、唐突に覆い被さるうとする眼前の男を、だけど我知らずあたしは——自分の意思と反して、まるで神様が操るように、勝手に手が動いた気がした。

——パシン！

「い、っ」

瞬間、自分でも何が起こったのか全く解らなかった。でも、確かに……。う、わああ。やっべ殴った、殴っちゃったよっ！希代のアニメ監督、あの竜崎悟朗カントクをつっ！

「ご、ごめんなさい！あたしはただ我を忘れてテンパるばかりだった。要するに、当たり前前に防衛本能が働いた、ということなのだろうか。それにしたって。」

「ふ……上等だ」

顔を上げた相手の口元が、不敵にニヤツと笑ったのに気付き、あたしの恐怖はMAXに達したのだった。

*

「冗談でなく枕営業でもしなきゃならないか思っただろう？」

数分後、屈託なく竜崎はくつくつと笑っていた。結局、あまり気

にしていないようだ。というより、その程度のことは氏自身、日常茶飯事のようなものだったのだが。だが、竜崎は突然黙り込み、次の瞬間、意外な言葉を告げた。すべてを見極めた上で話す本音のように。その声色に滲む真剣な響きにあたしは思わず目を見開く。

「嫌なら今のうちに降りてもいいんだぞ——決して無理強いはいしないつもりだ」

嘘だ。この人は嘘をついている。決して逃がさないつもりでいる癖に……狙った獲物を。どうしてそう思ったんだろう、要するにさつきみたいな“草食動物”としての野生の勘が働いたのだろうか。相手が仮に肉食動物なのだとしたら、つまりあたしはそういうことになる。確かに動物占いこじかだけどね。

「まったく蛇つてのは怖いよな……心理学では男根に例えられるらしいしね、要するに邪悪の根源つてわけだ」

は、蛇？ ダンコン？……やっぱりセクハラ親父じゃないか。つてそうじゃなくつて。蛇は肉食動物なのか？

「君の思ってることはもつともだよ、俺だつてイッパシの男だ——やることはやってるしね」

一体この人は何の話をしてるんだろう。未玲だったら、きつと走つてても無理やりドアをこじ開けて車から降りるだろうな。

「だから、そんなに警戒しなさんな。ま、別段あんに全く魅力がないってわけじゃないがね」

あの、カントク。貴方を前にして、安心しろという方が何か無理ですって。それでもあたしは、何だかこの人が悪になりきれないダークヒーローに思えてしかたなかった。きつと嘘をつくのが苦手な

人だ。でも、それはあたし自身の甘さから来る油断だったの
か。だろう

ありがとう。今日は楽しかったよ、竜崎監督はそう言って、約一時間後にあたしと別れた。だがその実、監督自身はその後リーヤモとい今回の計画のコーディネーターである円城寺冬華に、かなり皮肉めいた事を言われたのだが。

「本当に、監督の御人よしには困ったものです——」
「いや、すまない。つい気乗りがしなくなつてな」

本来なら今日、彼女伊勢崎ナミは所定の場所で所定の検査を受けることになっていたのだが。それを滞りなく遂行するのが「監督」である竜崎悟朗の役目だった。まあいいじゃないですか、まだ十分チャンスはありますよ。ネプチューンの事務所の一室で、そんなやり取りの二人を前にして一人の男が口を開いた。

三〇代前半、だろうか。ほっそりと背の高い、きつちりしたブランド物のスーツを身に纏ったその男。サラッとした髪といい、よく手入れの行き届いた肌といい、何となくヴィジュアル系であるが、それなりの美男子である。が、どことなく容赦ない冷たさを携えた、まさかコイツがあのだ、かつてメタボで元オタだった相澤太一その人であるなどと、おそらくあたしも未玲も信じなかつただろう。

久しぶりだね、神代未玲——。

そう、あたしたちが相澤、こいつと再会するのは、もうすぐだった。

『はああ？ 竜崎悟朗と会ったあ——？』

案の定そんな返事が返って来た。さすがに本人と今日会見したことを未玲に黙っているのはまずいと思い、それに何とも言えない不安感を胸に帰宅したあたしは、例えTELでも、その声を聞かずにはいられなかった。

あんた、一体何してんのさ！相手は何考えてんだか、解らない要注意人物だよ？その懷に自分から飛び込むなんて冗談キツイよ！

——例えそんな叱咤の言葉でも、あたしは未玲の声を聞いただけで何だか安心した。でも相手はというと、

『もう、信じられない！今からそっち行くわ』
今にも携帯を放って飛んできそうな勢いだった。

結局あたしたちは、あたしの自宅近くのファミレスで落ち合った。夕食時だったし、あたしはちょうどよかったんだけど、でも……未玲は確か脚本作業の見直しの真っ最中じゃ……。

「いいのいいの、いざつてときやリーヤが何とかするでしょうに」
まったく真面目なんだか不真面目なんだか。それぞれに注文したメニューをぱくつきながら、あたしたちは話した。

「で、ヤツは何て言ってたわけ？」
勿論、あたしの“起用”の理由とその詳細について、である。

けど、あたし自身でさえ不思議なくらい、そのことについては全くといって何一つ触れられなかったのである。結局あの人は何しに

来たんだろ。あたしと何を話したかったんだろう。そのことは未玲に訊かれるまでもなく、あたし自身が知りたいことだった。それより何より、未玲は心配だったようだ。何って勿論。大の大人の男の車にホイホイ乗ってしまふ、あたしのあまりの無防備さと、まるでそれを前もって見越していたかのような、相手の大胆不敵極まりない、挑発的な出方にある。

未玲は電話で話していた時から、ずっとイライラしていたようだ。ほんつとに、あんたって人は——警戒心のカケラもないわけ？ うん、まあ。そりゃそうだね、未玲が心配するのも無理はない。

「何かされなかった？」

「う……ん、」

そう訊かれて、あたしは思わず言葉を濁す。ちよ、やっぱり何かされたのかよ！その非常に言い難そうな煮え切らないあたしの反応に、未玲は我慢できないというように上半身を乗り出した。

「あんのセクハラ親父、今度会ったら絶対タダじゃおかない……」
今からでもネプチューンに戻って一発触発の一騒動でも起こしそうな勢いの未玲。だけど……。

「それが……、というか、むしろ」

次の瞬間あたしが告げた信じられない事実、未玲は思わず突拍子もない声を上げた。

——な、殴ったあ？

未玲の素っ頓狂な声に、周囲の客が振り向く。……そりゃそうだ、未玲が驚くのも無理はない。このあたしが——あの、竜崎悟朗を、

である。あたし自身でさえ、未だに信じられないのだ。

「ちょっとあんた！よくやった、じゃない、このあたしでさえ躊躇するような、そんな大それたことをよくも……」

さっきまでスタジオが竜崎宅に殴り込みでもかけようかという勢いだっただ女が何を言う。

「それはそうと、なんで竜崎はあんた本人を前にして、今回の核心に何も触れないばかりか……」

そうだ、それはあたし自身、最も疑問に思っていることなのだ。まさか単に若い女とドライブがしたかったわけでもなかるうに。それ、おおあり。未玲のその図星な指摘はともかく、とにかく今回の件には不可解な事が多すぎる。

「確かにね、例の相澤の件にしたって、あたしには最近まで何も知らされてなかったんだよ」

それこそ正に不可解といえ、不可解である。例えサブでも新人でも、本編スタッフの脚本家の端くれなら、もっと初期段階で副監督の存在くらい知らされていて当たり前だ。それより、何より。相澤がいきなりここに出張ってきたこと自体が、まずおかしい話だった。

だってヤツにはこれまで、こういったアニメ関係の仕事をしていたような素振りはどこにもないのだ。やっぱり出所はあたしと同じような出版関係なのか？ 未玲は思案した。まるで唐突に芽でも生えたように、ヤツは、このルミナスの表舞台に姿を表した。そう、まるであたしたちみたいに……。

あたしたちみたいにな？——ああ、そうか。つまりはそういうことか。未だにどうしても解せぬことが多すぎる今回の件だったが、相澤の一件も、つまりはそういうことなのか。まったく、どこで何がどう繋がるのか解らない。竜崎にしても、円城寺にしても……どうしてこう、気味悪いくらい。

それはそうと——、

あたしは唐突に未玲に、橙色の何かを乗せた右手を差し出した。
「ねえ、これどういう意味だろ？」

ホオズキ。あんた、これ。うん……帰り際、竜崎監督に貰った。

……ホオズキ？未玲はその橙色をした物体を訝しげに見つめた。微妙に少々ドライフラワー化してはいたが、膨らんだその萼^{がく}の中の実は、確かに天井の照明の光を受け、誇らしげに赤く照り光っていた。

「……ホオズキ。ナス科ホオズキ科の多年草、カガチ、又カヅキともいう。そして、花言葉は『偽り』」

まるで辞書でも引いて読み上げるように、未玲が得意の記憶頭脳を披露した。

……イツワリ？ あたしは、思わず未玲の顔を不安げにじつと視つめる。その実に含まれるアルカロイドには腹痛を起こす作用や、墮胎作用があるって知ってた？

その言葉に、あたしはちよつと怖くなる。

「そういえば、ホオズキは鬼灯とも書くんだよね」

この一見無邪気なオレンジ色が、なんだか急に先程の竜崎氏に重

なつて見えた。それは、まるで内なる焰だ。いつ噴火し牙を剥くか解らないような……。

『コレ、あげるよ』——あたしは別れ際、竜崎の見せた、いかにも人畜無害そんな笑顔を思い出した。その時あたしはまだ、その少し尖った姿形が蛇の頭のことだとは知る由もなかった。

*

その部屋は、まるで隔離病棟の一室のようだった。

殺風景なただっ広い真白な空間に、規則正しく点滅する機器の光と作動音が木霊する。ピッピッというその音は、確かに誰かがそこで生きて呼吸している証明だった。まるで最後の命綱のように、その装置はそこで誰かの命を延命させ、ほぼ人としての意味を成さなくなった、抜け殻のような身体を腐らせず永久保存させていた。

相変わらず飽きもせず延々同じ動作音を響かせる、その機器の傍らのベッドに横たわる人の形をした肉塊。それはまるで目覚めの時を待つ眠り姫のようでもあったが、同時にそれは、その希^{のそ}みさえ絶たれた人形そのもののようでもあった。確かに“彼女”はもう生きてはいなかった。ただ仮初の体温と未だ瑞々しさを保つ身体自体は生きてはいたが、その唇にかつてのような生き生きとした言葉や歌声が蘇ることはなかった。それでも、まるで誰かが新しい息吹をその抜け殻となった心身に与えてくれる時を待つように、彼女の肉体は若々しいまま、歳さえ取らず——。

しかし規則正しい機器の作動音以外は、水を打ったような静けさの室内に、時折静寂を破り、訪れる来訪者がいた。そして、今日もまた。

「……おはよう、ひとみ」

朝なのか夜なのか最早解らぬ、時を忘れた場所で、彼は決まって開口一番そう挨拶する。今日は何だかいつもと調子が違う。何かの新しい報告があるようだ。

「いよいよみたいだよ。どうやらキミの替わりが見つかったらしい」
「……」

そうなんだ。けれど返事を返すことは出来ない。いつもと同じように、植物のように呼吸して、ただ無言で応えるだけ。

「——とはいっても、まだキミの役目が終わったわけじゃないから安心して」

男は優しく微笑むが、その微笑みはどこかひんやり冷たく、まるで人形に話しかける独り言のように、その声は残酷に響いた。

本当は、私だってもっと演じていたい。瑠美那でいられたあの半年間は、本当に幸せだった。けれど、その絶頂を迎えた時にはもう……遅かった。第一こんなこと気付くはずないじゃない。私はただ自分の声優という仕事に一生懸命なだけだった。それはいつでも、そう今回も同じ。けれど瑠美那として文字通り生きていた間、私は今まで一度も感じたことのない幸福感を感じた。それはまるで光そのもの。その“光”は、強く熱く私自身の生命いのちそのものを光り輝かせるようだった。ああ……それはどこまでも暖かい、ルミナスの光。けどそれは、まるで永遠を一瞬に閉じ込めたかのような刹那、突然終わりを告げた。

——君の命の器うつわの許容範囲を超えてしまったんだね……。

誰かが人事のように呟く。その声は遙か遠く水底に沈んだ耳元に幻のように響いた。

そう……替わりが見つかったの。

“彼女”は、きっとルミナスの。

でも、もうそれ以上考えることは出来ない。

……でも、もしまたルミナスに出逢うことができるなら。私はまた生き返ることができる。演じることが、歌うことが出来るのね。

——嬉しい。

眠り姫の心が、どこかで密かにさざめいた。

*

「また水澤君に会ってきたのか？」

「ええ、これでもデビュー当時のファンですから……勿論、それだけじゃないですがね」

相澤太一のこの笑顔には、正直薄ら寒いものを感じる。

だが竜崎とて、その共犯者の一人に過ぎない。共犯？ 嘘を付け。むしろ己自身が火をつけたのだ。元々この男が持っていた何かに火をつけ油を注いだのは何を隠そう自分自身だ。だがもう罪の意識とやらの悶々とする事すら遠い記憶の彼方。ビジネス——そうだ、その仕事という言葉がすべて。それ以上に任務という任務を越えて、竜崎自身を突き動かしていたのは……。

「確かに水澤ひとみは、まだ生きている——ということになってい

るがね、表面上は」

「それもこれも、“彼女”次第ですよ」
相澤の眸がキラリと光った。

「君は確か彼女のことを知っているんだったな」

「ええ、そりやもう……というより、」

言葉を切った相澤は、それはそれは嬉しくてしかたないといった表情でニンマリ笑った。

「……神代未玲か」ふう、と溜息が出た。

竜崎自身にはどうでもいいことだったが、それがこいつをやる気にさせる原動力だというのなら、しかたない。まあ勿論、神代未玲自身にも十分利用価値はあったのだが。

「ところで――」

いかにも、さて本題に入りましょうか、というビジネスマンの顔になった相澤が、徐に向き直る。

「“誓約”の準備は整っているんでしょうね？」

……誓約。そうだ、それこそが本作ルミナスコードの本懐であり、すべての序まりだ。本編中の瑠美那ですらも、そこに至るまで、それなりの時間を要した。だが、龍蛇は「脱皮」せずには、生き続けることはできない。蛹は蝶に。いずれ変身の刻はやってくる。

「――ええ、勿論よ」

その時、会話に割って入った一人の女の声が、渡り廊下に面した階段の上から降ってきた。

「彼女は本当によいものを持ってるわ、監督」

「そうだな……」

竜崎は静かに階段を下りてくる円城寺を振り仰ぐと、そう答えた。

「所詮一介のオタ女……腐女子風情に何ができるのかと僕もタ力を括っていました」

「あら、相澤君は解ってるでしょ——ね、腐男子さん？」

その言葉に相澤はくくつと笑う。円城寺さんにはかなわないな、ええ。だからこそ僕が必要だったんでしょうけど。きっと神代君が聞いたら開いた口が塞がらないだろうけど……今はそれが楽しみで楽しみで。ああ、円城寺さんは彼女たちの同人誌^{ほん}読んでたんでしたっけ、あれは傑作だったな。

悪趣味。きつと今頃、未玲は人知れず寒気を覚えていることだろう。

「じゃ、僕はまだダビング作業が残ってますんで——」

鼻歌交じりで去っていく相澤のスリムな後姿を見送ると、円城寺はふと竜崎に囁いた。

「実際のところ、どうだったのかしら？」

ふふつと悪戯っぽく微笑うリーヤに竜崎は本音を漏らす。

「ああ、いい子だった……まったく忘れていた罪の意識とやらを危うく思い出すところだったよ」

「竜崎さんにしては、やけに珍しい反応ですね——」

……そして、だからこそ強い適正がある。

円城寺が呟いたその言葉は、どこか鋭い確信に満ちていた。

「……」

思わず竜崎は黙り込む。今更何かを躊躇し後悔するわけではない。

そんな生易しい気持ちで、ここまで来たわけではなかった。相澤とは別の意味での無感性が確かに人の情を越えたところで常に正常に働き、この身を動かしていた。

「まさか情が移った、というわけではないでしょうね？」

そんなはずがない。彼女とは、たった一時間話しただけだ。だが。

「ふ、情か。そんなものはとうにどこかに置き忘れてきたと思っていたが……」

だが、それがあからこそ、我々はここまでやって来れたんじゃないのかね。

竜崎の言葉に、円城寺はふと少しだけ淋しげな表情（かお）になった。

「忘れていました……そうでしたね」

そして、

ほんと、存在そのものがセクハラなんだから……！円城寺は楽しそうに笑った。おいおい、そりやないだろう？そう返す竜崎も、ひと時忘れていた。本当の意味での真の脱皮、新たなメタモルフォーゼの瞬間が近づいていることを。

*

沖縄には御嶽（ウタキ）という場所がある。文字通り琉球の祖神を迎え祀る神聖な宗教施設である。が、実際の御嶽は森や川や泉など、島そのものであることさえある。御嶽によってはイビという石碑がある場合もあるが、その多くは神が降り座す空間そのもののことを指す。

あたしたちが訪れた島、（オノコロ）淤能碁呂島にも、それと同じような場所があった。切り立った岩が聳え立ち、その周辺に円形のストーンサ

ークルのように、まるで神々が座す岩跡が点々と環を作っている。でも、確かここって奄美諸島近海じゃ……確か御嶽は沖縄本島や、その周辺の島々、宮古、八重山諸島にしかないものと思っていた。

でもルミナスの口添えにより、あたしの疑問は難なく氷解することになる。

「本来の御嶽ではないが、どうやら、それに似たものは存在しているらしい——」

まあ、奄美にもノロ制度や沖縄に似た文化はあるらしいからね。思わず、その聳え立つ岩塊に近寄り手を触れてみる。何だか懐かしい心地がして、あたしはそっと目を閉じる。

そう……温暖化の進行とともに壊滅状態にあつた沖縄の珊瑚礁の被害の拡大を食い止めたのは、高温となる海温上昇にも耐えられる褐虫藻が、この近海から沖縄へ津波とともに流れ込んだためだ。その原因は解らない。そもそも突然のあの一七年前の天変地異による本土壊滅の原因だって解らないことだらけだ。でも、珊瑚と共生関係にある褐虫藻は光合成をする。そのおかげで沖縄の珊瑚礁は以前と変わらぬ美しい色や姿形を保っていることだけは確かだ。

虹、珊瑚……、あたしはまた、あの環礁での思わぬ出遭いを思い出して、ふと目を開けた。傍らには、なぜだか神妙な顔つきをしたルミナスが寄り添っている。時々無性に問い掛けなくなる時がある。——ねえ、貴方は誰なの？

しかしルミナスは、そんなあたしの思いにすら気付かぬように、擬似御嶽の石塊に掌を沿え、静かに念を送り始めた。

「此処に“いる”ことは確かなようだ……」

確かにこの島には、不思議な虹色のオーラが漂っていた。第一鳥の声がしない。ただ静けさの中、打ち寄せるさざ波の潮騒が響いているだけ。動物一匹、人つ子ひとりいない——まあ、そりやそうだけど。無人島。こんな小さな島が一体いくつあるんだろう。ただ人が住めないだけで、でも確かに生命に満ち溢れた島は数多く残されている。あたしは、人の住める大地が確かに失われたイザナギの皮肉を思った。

それにしたって、この島は……、

「ねえ、アンタの言うカグツチって、火竜なんですよ……どうして龍なの？」

少しだけ言いにくそうに言葉を濁す。あたしの脳裏に瞬間、あたしたちが旅立った月食の日、沖縄に現れた闇龍がよみがえった。

「お前の言いたいことは大体分かっている。なぜ龍蛇の仲間を飼っているのかと問いたいのだろう？」

その厳しい横顔に、さっと鬨りが走り、あたしは何も言えなくなる。

「——確かに龍蛇は、ダークホライズンは、滅ぼさねばならない忌むべき存在だ。しかし、」

そのルミナスの言葉には大きな矛盾があり、しかしだからこそ、納得できる部分があることも確かだった。

そして、それがために……。

「光は闇があるからこそ生まれ出でる、だがその闇がすべてを覆い尽くしてしまうのならば、私は」

己自身の葛藤を飲み込むように、光の守護神は、きつく唇を結ぶ

と、その拳を握り締めた。

「ルミナス……」

*

貴方はなぜ……。

「私とともに来てくださらなかったのですか？」

少女は、ふと呟いた。あの闇を統べる月の神の誘いさえ受け入れなかったというのに……。ならば、私とともにアマテラスに戻られなかったのは、なぜ。どうして、そんな顔をなさるのですか。母君の跡を継ぎ、貴方ならば立派にこの国を統べることができるのに。

だから、私は貴方を探さねばならない。

クスヒ様、貴方の心を……。

そう、クスヒ——貴方の心を。

傍らの少年は、再び眠りに就いた。可哀想に、突然の出来事におそらく精神自体が容易に付いていけないのでしょう。しかし月神は、そんな小さな運命の行方さえ、かまわぬように冷ややかに微笑した。

ツクヨミ、この名に秘められた意味を思い返す——月を読む。そうだ、私は姉上の死期を悟っていた。それは日読みなどより、不確かな事象をも容易に導き出す。みつけたんですね、貴方の愛しい人の映し身を。

日と月は本来、対でなければならぬもの……天空と大地が呼応するように。龍蛇は、もはや貴方の心そのものなのです。光と闇、その狭間に生まれし愛しい子。

すべては、無意識の闇の深層、その海のさなかに還らねばならない。再び生まれ出るために――。

「うつ……」

その時、傍らで眠る聡介が呻いた。

「ふ、優しい子……」

ツクヨミ、僕は君の味方だよ――！

先程の言葉が、まるで儚い幻のように、ふと、その耳元によみがえった。

*

男と寝ることに一体どんな意味があるっていうんだろう。

あたしは先日、竜崎監督との会見で言われたことを改めて思い返していた。確かにこの歳になってキモいやつ、とか言われかねないけどさ。それにあたしだって一応女だ、性欲が全くないってわけでもない。けど好きな人もいないのに、そんな簡単に出来るわけないじゃん――結論は、結局そこに行き着くのだ。そういえば、未玲はどうなんだろう？ 突然そんなことが気に掛かった。いくら腐女子だからって、ね。

考えてみれば、未玲は何だってあたしなんかより経験豊富、っていうイメージが勝手にある。それだけに、あたしはいつでも彼女に

守られてしまう。守られ上手、独り上手ってわけでもないけど。

……独り上手、あたしはこの言葉にふと未玲を浮かべた。もしかしたら、未玲は。

誰かに恋している暇があったら、腐女子なんかやってない。アニメキャラのどうたらこうたらに夢中になんかなくてない。まあ例外も当然あるだろうけど。でもあたしは、それでも根本からして、未玲とあたしでは、その意味合い自体が全く異なるのだとは思っても寄らなかった。

『ねえ——キモチいいことしない？』

面と向かって、そう言われる瞬間、いつだって吐き気を覚える。

なんで、あたしがアンタなんかとそんなことしなけりやならないわけ？ 次の瞬間、あたしの肘鉄が見事に相手の鳩尾みそおちに命中するのだ。本来なら、直にお見舞いしてやりたいところだけど、それだけはあたし自身も勘弁。

……もう嫌だ。絶対にあんな思いをするのは。

未玲にとって、それは二度と思い出したくない、消し去りたい記憶の断片だった。子供なんか産めなくなつていい。冗談じゃない、嫌だ嫌だ嫌だ——！死にたい死にたい死にたい。ただ痛みだけが心と身体に残った。その傷跡を埋める、ただそれだけのために後の人生は残されてた。父さん、あんたは死んで当然だったんだよ。

ああ、そうか。そこにアンタがいたんだね、ナミ。まるでアンタは、あたしの絶望の中で微笑む天使みたいだった。腐女子なんて、ただの隠れ蓑にすぎない。確かにどうにもならない思いを紛らわす

には、これ以上楽しいことはなかったけど。

だって……、

“レンアイ”が現実でできないなら、絵空事で誤魔化すしかないじゃない。

あつはつはは、つくづく救えねーよ……。

ルミナスと誓約する――。

それは、己の脊髄中枢に眠る龍蛇を呼び覚ますこと。

クンダリーニ。それは、世にも美しいこの上なく幸福な体験……。

第一蛇と交わるということ、それが注連縄しめなわなどに顕れた造形表現のみならず、楔みそぎそれ自体の意味までが脱皮になぞらえている事実を誰も知らない。

おぞましくも美しい、その畏怖そのものの象徴。

*

“その人”と会うのも、あたしは初めてだった。

当たり前だ、だって彼は――本作ルミナスコードのもう一人の主役である、ルミナス役の声優、篠崎聡己。

初めて見た時、なんて綺麗な男の人なんだろうと思った。勿論、ルミナスとは別の意味で。ルミナスのあの美声は、この柔らかそうな白い喉元の奥から発せられるのだ。どこことなく柔和な、けれども何かが張り詰めた――。

そう、それは今にも壊れそうな……遠く儚い官能的な低音。

声優、篠崎聡己は、言ってみればルミナスに抜擢されるために生まれてきたような人間かもしれない。おそらく彼自身は否定するだろうが……、

でも、どうしてあたしが——しかも今度は、自分から？

『ありがとう。君が教えてくれた……本当の魂の在りか』

それは、あたし自身が真正銘、今現在の状態の瑠美那役の水澤ひとみと出会ってしまったからだ。でも、ルミナス役のこの人と自分が本当に恋に落ちてしまっただなんて、あたし自身、その時は寸分の一だって思ってもみないことだった。

それは、なんて儚い絆。そして、なんて甘美でどこまでも優しい……。きっと未玲に嫉妬されてしまいそうなほど。だけど、でも。

ああ。聡、己……。

今度は未玲に時前に報告した。

本来そうするのが当たり前だったのに。というか今回、未玲自身も副監督である相澤太一に初めて対面したのだ。予期せぬ再会。要するに発端は、そこから始まりだったのだが。実際未玲は、木刀でも持参しようかという渋い面構えだった。

「やあ、久しぶりだね、神代君！」

案の定、嬉々とした表情で相澤は、あたしたちを出迎えた。どうやら、あたしはほとんど視界に入っていないようである。それにしても、よくまあ人間ここまで変われるもんだ。まるで別人だよ。ほっそりした指先と色白の肌。耳にあけたシルバーピアス。さらさらの髪は、まるで光に透けるよう。ブランド物のスーツに身を包んだその背の高い美男子は、さしずめホストのようだった。未玲はともかく、あたしは嘘のように美しく変貌した相手を、思わず穴が開くほど眺めてしまった。

「あんた、生きてたんだ……」

ぶすつとした顔を隠そうともしないで、未玲が低く呟く。

「やだなあ、そんな御挨拶。それにしても嬉しいよ、また君たちとこんなところで会えるなんてねえ！」

心にもないこと言ってんじゃねえよ、いかにもそんなコトを思っ
ていそうな未玲の表情は、不快感を顕にしていた。でも実際は、相
澤は心から未玲との再会を喜んでいたのだから、始末に終えない。

ほんと、やっと副監督とサブ脚本家が遅れさせながら、御対面つてとこだねえ。確かにその通りだ。前半の制作が佳境に入っている割には不自然極まりない。

「あ、ごめん……というか、むしろ主役は君の方だったね」

思い出したように相澤は、未玲の後ろに隠れるあたしを見つけて興味なさそうに言った。

「ってことで、僕と神代君は、これから打ち合わせ。伊勢崎さんは、会わせたい人がいるって円城寺さんが」

「……ナミ！」

思わず危険を感じて、未玲があたしの手を握り締めた。しかし、「ごめんなさいね、二人の仲を裂こうってつもりはないんだけど」

突然、背後から現れた円城寺に、あたしは開いている方の右手を引っ張られた。思わず弾みで未玲の右手があたしの左手から離れる。

「ダメだナミ、」

「未玲！」

未玲に続いて、あたしも悲痛な声で叫んだ。それもそのはず、あたし自身も今度ばかりは、何だか嫌な予感がしたんだ。これじゃ何だかあたしたち、ロミオとジュリエットみたいじゃないか。

「大丈夫だって——ただ伊勢崎さんに是非会って欲しい可哀想な女の子がいるだけ」

そう告げると円城寺はくすつと笑った。大体あなたたちは、逃げやしないし。そう、そうなんだ、不思議なことに。本物の運命って

やつに出遭ってしまつと、人間ってやつはどうしてこう、我知らず無防備になつてしまふんだろ。いや、そうじゃなくって！

そんなワケの分からない理屈が、結局あたしたちを……。

「……趣味が悪いな」

ぼそつと呟く竜崎監督。だから、どうしてあなたはいつもそこで暇そうにしてるんですか。何気なく待合室の片隅で煙草に火をつけていた竜崎氏を見て、思わずあたしは内心ツツコミを入れる。というか、ここ禁煙だろ。

「さあ、行きましょう」

頬に笑みさえ浮かべている円城寺女史。連れてこられたのは、とある都立病院だった。

そんな竜崎氏に、今度ばかりは監督自ら付き添って貰わねばなりませんからね、逃げられませんか。とでも言いたそうに円城寺は妖艶に微笑む。

専用のＩ・Ｄカードを使って三人が乗り込んだエレベーターは、地下最階のフロアに吸い込まれていく。この病院、よくある都立病院だけど、普通こんなに下まで降りていくものだったっけか。そんな疑問を何気なく浮かべながら、あたしは次第に得体の知れない不安感に包まれていくのを感じていた。

しばらくするとエレベーターは一番下の階で停止した。ドアが開くと、そこには真白な渡り廊下が、ずっと奥まで延々と続いていた。その長い廊下の間には不自然なほど部屋の扉が一つもない。突き当

りまで来て、ようやく観音開きの重たいドアに辿り着いた。

あんまりここには来たくないんだがな……、ふと呟く竜崎に円城寺は、アイコンタクトするように目配せする。

すると、何もない部屋の中央奥左側に、誰かが寝ている大きな医療用ベッドが目に入った。

「ま、いいから……伊勢崎君」

竜崎に促されて、あたしは恐る恐るそのベッドに近づく。

「……！」

誰？ その延命装置の付いたベッドに寝かされている蒼白の少女を見て、あたしは息を停めた。どこかで見覚えのある、その顔。彼女はまさに眠り姫のように昏々と眠り続けている。

どうし、て？——確か彼女はあのイベントのステージに立っていたよね。茫然自失となっていたはずでも、あたしは確かに知ってる。あの時、彼女が嬉々とした表情で生き生きと歌い踊っていたことをじゃあ、ここにいるのは誰……つい一ヶ月前までは、あんなに元気だったのに。

「水澤、ひとみ——？」

思わず声が漏れ出て、あたしは自分で自分の声に心臓が停まりそうになる。どうして彼女は、こんなところで、まるで死んだように眠っているの？ 思わず後ろに控えている竜崎と円城寺に助けを求めようと振り返る。

「そう……あなたもよく知っている、金城瑠美那役の水澤ひとみさんよ」

その役名を耳にしたあたしの脳裏に、モニター越しの瑠美那の快活そうな弾む声が響き渡る。

『ルミナス！』

嫌だ、何かの間違いじゃない？——急に怖くなって、あたしは目の前の現実から目を逸らしたくなった。

「見ての通りだ……水澤ひとみは、既に」

竜崎の地の底から響くような沈んだ声が、あたしに追い打ちをかける。目の前の女性は今に永久に目を覚ますことはない。嘘のようなその真実が、けれど今日の前に厳然として存在している。え、じゃあルミナスコードの続編どうすんの？

そんな、今目前で静かに息をするだけの屍と化した女の子には、もうどうでもいいことをあたしは当たり前のように思った。

そう、彼女には、もうどうでもいいことだった。でもその実、彼女の唇は今にも何か言いたそうに、その不毛な呼吸の度に瑞々しく息づくのだった。あたしは思わず、彼女の傍らに不思議に吸い込まれるように近づいていく。もう一度、あの元気な明るい声を聞かせてよ。もう一度、瑠美那を演ってよ。お願い……！そう思うと、突然胸が締め付けられるように痛くなり悲しくなって、あたしは思わず彼女の陶器のように透き通った指先を両手で包み込んだ。

その瞬間——、

奇跡が起こった。でも、何が起こったのか、あたし自身にも解らなかった。ただ、ビリッとした電気ショックのような衝撃が指先に走った後、不思議なオーラのごとく、ぼんやりした光に包まれたかと思うと、瑠美那の、いや水澤ひとみの唇がうわ言を囁くように上下左右に動いた。

「……………る、み……………な……………、す」
え？

ルミナス、そうはつきり彼女は言った。まるでそれは機械仕掛けの人形が喋るように抑揚がなかったが、確かに彼女の唇は、その名を口にしたのだ。

「も……………い、ちど……………あい、た……………い」

確かに彼女は泣くようにそう呟いた。そして、その薄っすら閉じた両目からは、とめどなく光る涙の粒があふれて……………。

その時、あたしは気付いた。あたし自身の瞳からも、苦しくなるくらい涙があふれ、いつしか頬を伝っていた。

もう一度、逢いたい。ただその感情おもいだけに支配されて、あたしは。

「——決まりだな」
「ええ」

背後で様子を窺うそんな二人の機械的な呟きは、その時のあたしには届かなかった。

*

「我々はパルジャミヤ——我が神の御名により、この物資はありがたく頂いていく……！」

怒号のような歓声を轟かせ、賊どもに支配された海が突然その色彩を変えていく。海軍並の武装を施された現代の海賊船艦とその手下どもの乗る小型水上マシンが、その輸送船と数隻の護衛船を取り囲むのに、さほど時間はかからなかった。

海面を滑るように移動し、次々と輸送船団に群がっていくのは、彼らの操る海馬スーリヤであった。

「アグニ、例のお宝とやらは見つかったのか？」

「いいや。やはりこんなところにはいないようだな……」

戦況を見守るその長髪の青年海賊の若き長は、部下であり同時に友人でもある航海士ヴァルナに答えた。

沖縄近海を航行していたガイア船隻を襲ったテロ集団——少し古めかしい言い方をすれば、海賊。もしそれが真実であるならば彼らの目的は、この世界に新たな革命を起こすことだった。それは無秩序と破壊と混沌から生まれる、真の意味での再生。パルジャミヤ、それはまさに再生と新たな萌芽を促す豪雨を生む雷雲の神の名。

「ナーガラージャ……神聖なる恍惚、クンダリーニから生まれる王の中の王」

だがアグニ自身にも、それが何なのかまだ分らなかった。

「そういえば、例の密航者はおとなしくしているか？」

「ああ、面白いことに我々と取引したいと言っているようだ」

それも女、いやまだ歳若い少女のようだが——それを聞くと青年長は、意外そうにその紺碧い瞳を瞬かせた。

*

「瑠美那……それに聡介君まで……一体どこに行っちゃったの？」

あの月食の夜、突然沖縄地方を襲った地震と正体不明の暴風。一説には突発的な低気圧の仕業とも言われたが、あの夜の暗闇と瞬時に起こった地鳴りは不気味さを通り越し、人々をパニックに陥れた。確かに短い時間の出来事であったため、神風のような暴風と揺れが収まり、満月が消えかかる前と変わらぬ淡く蒼い光を投げかけると再び嘘のような静けさが地上に訪れた。

ただ一つ——その夜、その家の天窓で満月を観測していた二人の消息を除いては。

本当に”神隠し”にでも遭ったように……。

瑠美那の友人、五月は思った。警察の搜索も虚しく瑠美那と聡介、結局二人の消息は、杳として知れなかった。五月の家、藤宮神社の宮司である祖父が言っていた。ありやあ間違はなく神隠しだと……。そういえば、何となく最近様子がおかしかったつけ。何を聞いても、上の空。そして、どこか誰かを探すような遠い目をしていた親友、瑠美那。確かにあの子のお父さんは……。

そこまで思つて五月の心は嫌な予感に包まれた。でも、それじゃ聡介君は……まさか、瑠美那と一緒に？ 神様、どうか二人を返してください。こんな時だから御祈りするわけじゃないけど——神社の巫女でもある自分が、五月はどこか虚しかった。

『先頃、沖縄と論島沖を航行していた、ガイア輸送船隻を襲ったテロ組織パルジャミヤは——』

ニユースの報道は、あの夜のことなど、もう何一つ取り上げていない。虚しく切り替わるTV画面は、いつもの朝と何ら変わりなかった。

「兄さん、本当に瑠美那は……」

『ああ、大丈夫だ。とにかく今は落ち着いてくれ』

電話越しに響く弟、島嶺黎司の声は、どこか遠くに聞こえた。しかし母には何かが解っていた。瑠美那の父、金城隆志が何者であるのかも。そして娘であるあたしが、どこへ行ったのかも。ねえ母さん、一体父さんの何を知っているの……。

「やっぱり、あの子は——」

『……』

きつと父さんが連れて行ったのかもしれないね……。その言葉を飲み込むのが、母には精一杯だった。

*

コードLの発現が示すこの世界の行く末。その前途を思うだけで身震いがした。

「金城瑠美那さん。確かに彼女は本物かもしれないわ……」

『先日転送されてきた特殊班の観測データから見出せる真実……それがすべてと言うわけさ』

赴任したばかりの新任教師、草薙瑞穂の手に握られた携帯電話。遙か彼方のアマテラスドームが、まるですぐ傍にあるかのように彼女はその男と話した。そう、すべてはまるで時代さえも超越するかのよう。今まさに「神話」は、すぐ傍にあるのだ。

「ええ、はい。こちらが落ち着いたら、すぐにでも——それじゃ」

草薙は、まるで事務的用件を済ますように手元の携帯を切った。その眼鏡の奥の眸には何も映っていなかった。ただ一つの優先事項を除いては。まだ、まだだ。”彼女”が生まれ変わるのは——でも、近いうちにきつと。

*

この海賊船艦に忍び込んだのは、正解だったかもしれない。

あの夜、闇夜に紛れ、無人島沖に停泊していた船影に近づいた。月が雲に隠れていたのが幸いだった。確かに相手はプロのテロ集団。一筋縄ではいかないかもしれないが、そんなことを言っている場合ではない。もし”アイツ”が本物なのなら——早くあの島へ赴かねばならない。

「クスヒ様……」

少女はまたその名を一人呟いた。今はもう失われてしまった幻の王国。それなのに自分自身が、今ここにこうして存在すること自体が解らなかった。でももし、その理由があるのだとしたら、それは、ただ一つ——あの方がこの時代によみがえったからだ……。

私は、そのためだけにここに存在している。かの人を探し出すた

めに。

一人物思いに耽っていた少女の静寂は、部屋の外に近づいてくるその足音によって破られた。

「その服装、^{いでたち}無人島から流れ着いた、ただの漂流者ってわけでもないみたいだな」

浅黒い肌、エメラルド色をした碧眼……インディアか。つい先日この世界に目覚めたばかりとは思えぬ思考が、少女の脳裏に閃いた。軟禁されていた地下室にやってきたのは、この船のリーダーと思しき男とその部下一人だった。

「お前が船長か？」

両手を後ろ手に拘束されながら、少女は臆することなく尋ねた。
「そうだ、俺はアグニ。このパルジャミヤのリーダーだ。そして、こっちは部下のヴァルナ」

少女が携えていた長剣は無論、その腰にはなかった。だが、どうやら頭直々にお出ましになるということは、少しは話の解る人種らしい。

「あんた、どこの人間だ。どうやらこの海域の日本人——いや、イザナギの人間って顔でもないようだが」

——そうだな、どう答えようか。まさか失われし古代の王国アマテラスから来たと言っても、相手は信じないだろうし。少女は沈黙の中で思案した。

「……だんまりか、まあいい」

ニヤリと笑うアグニの顔を探るように視ると、少女は唐突に口を開いた。

「お前たち、ナーガという神を知っているだろう？」

ナーガ——龍蛇。それは、アグニたちインディアの部族が崇めている神の一つだった。

「王の中の王……ナーガラージャか」

ふ、やはりそうか。この男の探しているものは……それが奇しくも自分自身が探し求めているものと同じとは。このパルジャミヤの若き長、ヤツが革命の名の下に手に入れようとしているのは。

「取引だ。私の拘束を解く代わりに、お前たちが……いや、お前が探しているものの居る場所に私が連れて行ってやろう」

一瞬、相手のペースに飲み込まれハツとするところだったが、面白いことを言うやつだな。アグニは瞬間的にこの女が気に入った。

「いいだろう。もしその場所を本当に知っているというのなら」

それと、この剣も返してやろう、大事な得物^{モノ}なんだろう？ そう言うアグニはヴァルナに目配せして少女の拘束を解いてやり、部屋の入り口に立てかけてあった長剣を投げてよこした。

——あの身のこなし、どうやら只者じゃないようだな。

先程、長剣を受け取った時の俊敏な少女の動作をアグニは見逃さなかった。それにあの剣、そして旅慣れたような、あの井出達。どう考えてもワケありの御仁のようだ。赤みがかった髪、しかし顔立

ちは東洋系のようにも見えるが……。

世界それ自体が以前のような意味を成さなくなった、混沌と混沌が支配するこの時代、例えばどのような逆境を潜り抜けてきたとしても別段驚きもしないが、アグニは圧倒的な鋭い視線を常に周囲に配る……そう女剣士、そう言った方がしつくり来るかもしれない——女剣士のただならぬ隙のなさに、どことなく自分と同じ匂いを感じていた。

海賊、テロ集団と言われれば聞こえは悪いが、確かにその通りであるから、全く気にする事もないばかりか、そう怖れられた方がこちらとしても動きやすい。

あの未曾有の天変地異の後、超大国と化したガイアの支配の網の目を掻い潜るように、我々パルジャミヤは活動してきた。未だ混乱が尾を引くこの世界を制するのは、もはや大陸的思想ではない。海流と潮流の動きを見極め、その航海術で海原を駆ける海人族。アグニたちの祖も勿論、そうだった。今や、まさしく海流の中に散らばる群島として機能する、このイザナギもしく。そして、本来ならば龍神の国であるこの海域にこそ、もしかしたら、”それ”はいるのかもしれない。

*

「星が綺麗だな……」

まるでテロ集団の親玉とは思えぬ発言に、思わずふと女剣士は若き青年長の横顔を視た。どことなく似ている……。いや、そんなはずはない。あの高貴な御方とコイツを比べる方がどうかしている。そう思いながら少女は隣に佇む、深い海のようなアグニの遠い瞳に

誘われた。

「あの星の輝きがあるからこそ、我々は自由にこの海を行き来することができのさ」

確かに今でこそレーダー技術が発展し、その最先端の科学の羅針盤を頼りに、例え夜の海でも難なく航行する事が出来るのだが。だが、このインディアの海人族は、その遙か昔の航海術を今でも大事にしている。そう、大切なのはいつでも生きている人としての、その本来の野生の勘だ。

それを失ったからこそ、いつしか人類は駄目になった……。

「光と闇、世界はこの二つでできている。そして光とは生命の輝きそのものだ。我々を導くあの星も、何億光年か遙か昔の瞬きでしかないのにも関わらず、こうして俺たちを今も見守っていてくれる……」

そう、遙か昔に滅んでしまったはずの光の王国。考えてみれば、時間などに何の意味もないのかもしれない。ただ流れ行くそのただ中では、人の意識と無意識でさえ、拘泥することもなく抗うこともできず、ただ虚しく流れ去るのみだ。

——それでも、この記憶が確かに覚えているのなら。

「お前は一体何を求めている、この先に待つ奇跡に一体何を……」

呟くように訊ねる少女の視線の先には、彼女が指し示した”あの島”へと続く海路が暗い波間に続いていた。

ナーガとは海の神、そしてそれは取りも直さず、繰り返される生

命そのものの象徴だった。だからこそ海蛇の神、ナーガはこの海人族に崇め奉られる。例えば人類が滅び去っても、未来永劫続く生命の営みこそは、あの星の光の輝きの如くの深遠さと神聖さとに符合する。

ああ、クスヒ様……。

なぜコイツはかの人に似ているのだろう。わからない、そう一言だけ答えた、まるで龍王のようなこの青年に不思議な野生が内在しているのを感じて、少女は初めてふと囁いた。

「私はクロエ——この名は仮初の記号であるとだけ、今は答えておこう」

*

仮初の記号。確かにそうかもしれない。

あたしがアイツに名付けた「ルミナス」という名前。でもどうして……。それになぜアイツはどこことなく父さんに似てるんだろう。どうして、父さんに逢えるような気がしたんだろう。そういえば、瑠美那というあたしの名前は父さんが付けてくれた名前だ。

どうしてか、あたしはアイツ、ルミナスに父さんの面影を探してしまう……。だから。あたしたちはこうして今、ここにいます。あの月食の日の二人の核融合以来、ルミナスは昼間でもその姿を保っていられることができるようになった。

「……ねえ、ルミナス」

いつものように声をかけるが、どことなく躊躇してしまう。この世の全てをあまなく照らし出す太陽そのもののような、その光の守護神の強引さに、あたしの運命はことごとく掻き乱されてしまったっていうのに。それにアイツは、まるでこの世の全てを焼き尽くしてしまいかねない、あんなに強い力を発揮することができるのに。なのはどうして、こんなに切ない気持ちになるんだろう。

確かに今のアイツは、どこか心ここになかった風情で不安定に揺れているように見えた。以前からそんな感じはしていたけど、この島に着いてからというもののずっと。あたしの不安が伝染^{うつ}った、なんて言わないでよね。それじゃまるで太陽に照らされるだけの月みたいじゃない。そうか、月。

そう思った途端、ルミナスは答えた。

「どうしてあの月食の夜、ダークホライズン、あの闇龍が現れたのだと訊きたいのか？」

心なしか俯く視線の先が、あてどなく夜明け前の波間にさまよう。

「あれは月の神の仕業だ——光をも飲み込む闇夜を統べる夜の神」

そして同時に海蛇、そう龍蛇の化身でもある……、そう呟きながら、その声はどこか昏く遠くに沈む。月の神。光の守護神である太陽神に対して今度は闇夜の神——、確かに今更驚くことなんて何一つないんだけど。どうやらルミナスの記憶は肝心の自分自身の生い立ちとはともかく、それらの事象に関してだけは至極鮮明なようだ。

「おそらく私を探しているのだろう……」

でも、あの月食の夜、どうしてルミナスはあれほどの力を発揮で

きたの。確かにあたし自身のせいってことも言えるのかもしれないけど。でもいつだったかアイツは、我々はここに留まっていけない、と言っていた。だからなの？沖縄の地を後にしたのは。

確かに月は太陽の光に照らされるからこそ輝ける、だけど。月も太陽も、その光の源は宇宙の生命の息吹そのもの。ただ自分自身で輝けるか否かの違いだけ。だから今更ながら、その”記号”としての名前が不思議に意味を成すような気さえしてくる。記号、か。

もしかしたら、まさか龍蛇はあなた自身であるなんてこと……。

カグツチ、その火龍を待つ薄明の岸辺で、あたしたちはただ途方に暮れるように立ち尽くすだけだった。

この海賊船艦に忍び込んだのは、正解だったかもしれない。

あの夜、闇夜に紛れ、無人島沖に停泊していた船影に近づいた。月が雲に隠れていたのが幸いだった。確かに相手はプロのテロ集団。一筋縄ではいかないかもしれないが、そんなことを言っている場合ではない。もし”アイツ”が本物なのなら——早くあの島へ赴かねばならない。

「クスヒ様……」

少女はまたその名を一人呟いた。今はもう失われてしまった幻の王国。それなのに自分自身が、今ここにこうして存在すること自体が解らなかった。でももし、その理由があるのだとしたら、それは、ただ一つ——あの方がこの時代によりみがえったからだ……。

私は、そのためにここに存在している。かの人を探し出すために。

一人物思いに耽っていた少女の静寂は、部屋の外に近づいてくるその足音によって破られた。

「その服装^{いでたち}、無人島から流れ着いた、ただの漂流者ってわけでもないみたいだな」

浅黒い肌、エメラルド色をした碧眼……インディアか。つい先日この世界に目覚めたばかりとは思えぬ思考が、少女の脳裏に閃いた。軟禁されていた地下室にやってきたのは、この船のリーダーと思し

き男とその部下一人だった。

「お前が船長か？」

両手を後ろ手に拘束されながら、少女は臆することなく尋ねた。

「そうだ、俺はアグニ。このパルジャミヤのリーダーだ。そして、こっちは部下のヴァルナ」

少女が携えていた長剣は無論、その腰にはなかった。だが、どうやら頭直々にお出ましになるということは、少しは話の解る人種らしい。

「あんた、どこの人間だ。どうやらこの海域の日本人——いや、イザナギの人間って顔でもないようだが」

—— そうだな、どう答えようか。まさか失われし古代の王国アマテラスから来たと言っても、相手は信じないだろうし。少女は沈黙の中で思案した。

「……だんまりか、まあいい」

ニヤリと笑うアグニの顔を探るように視ると、少女は唐突に口を開いた。

「お前たち、ナーガという神を知っているだろうか？」

ナーガ——龍蛇。それは、アグニたちインディアの部族が崇めている神の一つだった。

「王の中の王…… ナーガラージャか」

ふ、やはりそうか。この男の探しているものとは……それが奇しくも自分自身が探し求めているものと同じとは。このパルジャミヤ

の若き長、ヤツが革命の名の下に手に入れようとしているのは。

「取引だ。私の拘束を解く代わりに、お前たちが……いや、お前が探しているものの居る場所に私が連れて行ってやろう」

一瞬、相手のペースに飲み込まれハツとするところだったが、面白いことを言うやつだな。アグニは瞬間的にこの女が気に入った。

「いいだろう。もしその場所を本当に知っているといるというならな」

それと、この剣も返してやろう、大事な得物^{モノ}なんだろう？ そう言くとアグニはヴァルナに目配せして少女の拘束を解いてやり、部屋の入りに立てかけてあった長剣を投げてよこした。

——あの身のこなし、どうやら只者じゃないようだな。

先程、長剣を受け取った時の俊敏な少女の動作をアグニは見逃さなかった。それにあの剣、そして旅慣れたような、あの井出達。どう考えてもワケありの御仁のようだ。赤みがかった髪、しかし顔立ちが東洋系のようにも見えるが……。

世界それ自体が以前のような意味を成さなくなった、混沌と混沌が支配するこの時代、例えどのような逆境を潜り抜けてきたとしても別段驚きもしないが、アグニは圧倒的な鋭い視線を常に周囲に配る……そう女剣士、そう言った方がしっくり来るかもしれない——女剣士のただならぬ隙のなさに、どこことなく自分と同じ匂いを感じていた。

海賊、テロ集団と言われれば聞こえは悪いが、確かにその通りであるから、全く気にする事もないばかりか、そう怖れられた方がこ

ちらとしても動きやすい。

あの未曾有の天変地異の後、超大国と化したガイアの支配の網の目を掻い潜るように、我々パルジャミヤは活動してきた。未だ混乱が尾を引くこの世界を制するのは、もはや大陸的思想ではない。海流と潮流の動きを見極め、その航海術で海原を駆ける海人族。アグニたちの祖も勿論、そうだった。今や、まさしく海流の中に散らばる群島として機能する、このイザナギもしくり。そして、本来ならば龍神の国であるこの海域にこそ、もしかしたら、”それ”はいるのかもしれない。

*

「星が綺麗だな……」

まるでテロ集団の親玉とは思えぬ発言に、思わずふと女剣士は若き青年長の横顔を視^みた。どことなく似ている……。いや、そんなはずはない。あの高貴な御方とコイツを比べる方がどうかしている。そう思いながら少女は隣に佇む、深い海のようなアグニの遠い瞳に誘われた。

「あの星の輝きがあるからこそ、我々は自由にこの海を行き来することができのさ」

確かに今でこそレーダー技術が発展し、その最先端の科学の羅針盤を頼りに、例え夜の海でも難なく航行する事が出来るのだが。だが、このインディアの海人族は、その遙か昔の航海術を今でも大事にしている。そう、大切なのはいつでも生きている人としての、その本来の野生の勘だ。

それを失ったからこそ、いつしか人類は駄目になった……。

「光と闇、世界はこの二つでできている。そして光とは生命の輝きそのものだ。我々を導くあの星も、何億光年か遙か昔の瞬きでしかないのにも関わらず、こうして俺たちを今も見守っていてくれる……」

そう、遙か昔に滅んでしまったはずの光の王国。考えてみれば、時間などに何の意味もないのかもしれない。ただ流れ行くそのただ中では、人の意識と無意識でさえ、拘泥することもなく抗うこともできず、ただ虚しく流れ去るのみだ。

——それでも、この記憶が確かに覚えているのなら。

「お前は一体何を求めている、この先に待つ奇跡に一体何を……」

呟くように訊ねる少女の視線の先には、彼女が指し示した”あの島”へと続く海路が暗い波間に続いていた。

ナーガとは海の神、そしてそれは取りも直さず、繰り返される生命そのものの象徴だった。だからこそ海蛇の神、ナーガはこの海人族に崇め奉られる。例えば人類が滅び去っても、未来永劫続く生命の営みこそは、あの星の光の輝きの如くの深遠さと神聖さとに符合する。

ああ、クスヒ様……。

なぜコイツはかの人に似ているのだろう。わからない、そう一言だけ答えた、まるで龍王のようなこの青年に不思議な野生が内在しているのを感じて、少女は初めてふと囁いた。

「私はクロエ——この名は仮初の記号であるだけで、今は答えておこう」

*

仮初の記号。確かにそうかもしれない。

あたしがアイツに名付けた「ルミナス」という名前。でもどうして……。それになぜアイツはどこなく父さんに似てるんだろ。どうして、父さんに逢えるような気がしたんだろ。そういえば、瑠美那というあたしの名前は父さんが付けてくれた名前だ。

どうしてか、あたしはアイツ、ルミナスに父さんの面影を探してしまう……。だから。あたしたちはこうして今、ここにいる。あの月食の日の二人の核融合以来、ルミナスは昼間でもその姿を保っていられることができるようになった。

「……ねえ、ルミナス」

いつものように声をかけるが、どことなく躊躇してしまう。この世の全てをあまねく照らし出す太陽そのもののような、その光の守護神の強引さに、あたしの運命はことごとく掻き乱されてしまったっていうのに。それにアイツは、まるでこの世の全てを焼き尽くしてしまいかねない、あんなに強い力を発揮することができるのに。なのにどうして、こんなに切ない気持ちになるんだろ。

確かに今のアイツは、どこか心ここになかった風情で不安定に揺れているように見えた。以前からそんな感じはしていたけど、この島に着いてからというもののずっと。あたしの不安が伝染^{うつ}った、なんて言わないでよね。それじゃまるで太陽に照らされるだけの月

みたいじゃない。……そうか、月。

そう思った途端、ルミナスは答えた。

「どうしてあの月食の夜、ダークホライズン、あの闇龍が現れたのだと訊きたいのか？」

心なしに俯く視線の先が、あてどなく夜明け前の波間にさまよう。

「あれは月の神の仕業だ——光をも飲み込む闇夜を統べる夜の神」

そして同時に海蛇、そう龍蛇の化身でもある……、そう呟きながら、その声はどこか昏く遠くに沈む。月の神。光の守護神である太陽神に対して今度は闇夜の神——、確かに今更驚くことなんて何一つないんだけど。どうやらルミナスの記憶は肝心の自分自身の生い立ちとはともかく、それらの事象に関してだけは至極鮮明なようだ。

「おそらく私を探しているのだろう……」

でも、あの月食の夜、どうしてルミナスはあれほどの力を発揮できたの。確かにあたし自身のせいってことも言えるのかもしれないけど。でもいつだったかアイツは、我々はここに留まってはいいけない、と言っていた。だからなの？ 沖縄の地を後にしたのは。

確かに月は太陽の光に照らされるからこそ輝ける、だけど。月も太陽も、その光の源は宇宙の生命の息吹そのもの。ただ自分自身で輝けるか否かの違いだけ。だから今更ながら、その”記号”としての名前が不思議に意味を成すような気さえしてくる。記号、か。

もしかしたら、まさか龍蛇はあなた自身であるなんてこと……。

カグツチ、その火龍を待つ薄明の岸边で、あたしたちはただ途方に暮れるように立ち尽くすだけだった。

*

『夜明け前には、あんたの言う神の島に近づけるだろう——』
先程のアグニの言葉に、心ならずも胸が高鳴る。

クロエは知っていた。その島”が特別な島であるということをもしもアイツがあの方の神代かみしろであるならば、答えは既に出ている。クスヒ様は確かにこの時代に顕現なさっている……。

神代は、我々古の人間——神人の文字通り依代いにしえとなる存在である。かつて、かの方の神威によって鍛えていただいたこの神剣が反応したとなると……”みつけられた”のだ、あの方の望みになう依代を。それが、”アイツ”。ならば、ともに向かう先はあの島しかない。そう、王である龍蛇としての証である、あの火龍サラマンダーの隠れる島へ。

「なんだ、眠れないのか……？」

突然の異郷の来訪者を警戒する無骨物の手下たちの手前、確かに本人に特に問題はなさそうだが、それでも部屋を別に用意することできなかった。

アグニの自室は、この船の長であり海賊パルジャミヤの頭でもあるだけに、豪華とまではいかないが、さすがにそれでも立派なものだった。やはり国柄なのか、その部屋はどこか異国の匂いに満ちていた。すまないな、と告げるアグニに反して、クロエは別段何一つ気に留める素振りもない。むしろ、あの黴臭い地下室に比べれば、随分と高待遇である。

アグニのベッドを占領しては申し訳ないので、とりあえず毛布を敷き詰めて床に着いたが、やはり目を閉じる気にはなれない。

「私は随分と長い間、眠っていたような気がする……」

冗談とも思えぬその真剣さに、相手は思わず苦笑いを浮かべた。

「はは、だから眠る必要がないっていうのか……ま、それでも眠れる時には極力眠っておいた方がいい」

わかつてるさ、そんなことぐらい。それでも……。

やっとあの方に逢える、それと同時にクロエの心を占めていたのは——それは再会と共に訪れる別離だった。そうだ、あの方はとうとう見つけたのだ。私など、及ぶべくもないその魂の片割れを。

ふと目尻に浮かんだ水滴を、暗闇の中アグニの目から隠すことができたのが唯一の幸이었다。

*

「本当にあいつの言うことが信じられるんだろうな？」

「ああ、心配するな」

ヴァルナのその懐疑の言葉はもっともだった。確かにこのパルジヤミヤを統べる長としての責任もある。まったくこの馬の骨ともわからぬ相手の言葉をまともに受け止めるなど、リーダーらしからぬ愚行である。だがヴァルナには解っていた。この人がその愚かな行動の元に、今ここにこうして、この船に乗っているのだと言うことを。そして手下たちの誰でもさえ解っていた。彼が”それ”を実行するに値する人物だということを。それが出来ることイコール、

唯一皆の上に立つことのできる証に他ならない。

そう、アグニこそが皆の行く先を決める羅針盤なのだ。

愚かだと解っていて、それを真つ先に行動に移す。まったく……、思わずくすつと笑うヴァルナは、ふと手元の計器に揺れる針を見た。まっすぐ東南東。この時期、太陽が昇る方角だ。

「アグニ、お前が龍蛇にこだわるのは、やはりあの日のことが尾を引いているからか？」

それは、彼にとって特別な出来事だった。もう戻れない母国での日々。おそらく故郷の民たちは、彼が今世に怖れを撒き散らすテロ組織、海賊パルジャミヤを率いているなどと思いもしないことだろう。

「……そうだな」

アグニは思わず視線を遠い水平線の彼方に移す。一直線に薄赤く染まる黎明の海の彼方は、すべてを照り輝かせる日の出の瞬間を、今か今かと待ちわびていた。

それ以上は訊いてはならない、それでも沈黙を越えて訊かずにはいられないのは、ヴァルナが彼にとっての唯一無二の親友を越えた盟友だからだ。そう、何もかも知っている、解っている。アグニという神の名が持つ、焰ほのおのような激しさの裏に沈む哀しみも――。

今や世界的に名を馳せる海賊パルジャミヤが目指す真の改革。アグニ自身は、そんなたいそうなものじゃないと反論しそうだが、それでも彼らが真に求めているものが、その龍蛇の王ナーガラージャ

という合言葉の裡に隠うちされていることは事実だった。それが実質的にどのような意味を成すのかは誰にもわからない。だが、そこに隠された本質が全てを物語っていた。

いずれ、時が来ればわかるのだろう。おそらく”それ”が、我々を導くのだ。いや、もしかしたら世界そのものを。

そんなとりとめのない思考に時を忘れている暇もなく、アグニが合図する。前時代の遺物のような帆船に最新鋭の装備を施した海賊船デイヤウス号は、躊躇することなくその島影を目指す。気が付くと朝日がその眩いばかりの輝きを水平線上に覗かせる刹那、ヴァルナはいつもの威勢のよい、ときの声を傍らで聞いた。

「さあ、お前たち——上陸だ！」

海図にも載らない幻の神の島——オノゴロ淤能碁呂島は、既に目と鼻の先にあつた。

*

「ねえ、少しだけあたしの話をしてもいい？」

あたしは半分試すようにルミナスに声をかけた。

今まさに夜明けの朝陽が穏やかに差し込む浜辺には、まばゆい波間の光が乱反射していた。不思議な静けさを満たす波音だけが、あたしたちを包み込む。不思議ね、怖いくらいにあんなに綺麗で、この世のものとは思えなかったひとが、今はなんだか昔からよく知っている”誰か”みたいな気がする。友人、いいえ家族……もしかしたら、恋人？

やだ、何考えてんのあたし——、少しだけ恥ずかしくなって、あ

たしは寄せては返す波打ち際に一歩足を踏み出す。

ふと振り返った背後に佇むルミナスは、確かにそこに”存在”していた。幽霊なんかじゃない、ましてや神様？ 未だにあたしにはそのことが信じられなかった。確かに得体が知れないだけじゃなくて、強引でいきなりで身勝手に、でも……。

「……あたしが生まれた一七年前、世界中を揺るがすような天変地異が起こったの。その時あたしは、あたしの父さんを——、」
そう言いかけた途端、思いがけずルミナスが言葉を継いだ。

「——知っている。お前の父親が、その時どれほどお前を呼んでいたか……」

え……、思わず言葉を失ってしまう。知っている……それって、どういうこと？ どうしてあなたはあたしの父さんのこと……。神様だから、なんていう理由も勿論ありかもしれないけど。でも、あたしは。

そもそもルミナスがこの世に現れたのはなぜなのか。あたしはその根本さえ知らなかったんだ。ルミナスは父さんのことを知っている。あたしが不思議に彼に惹きつけられてしまふのは、これまで一度だって一言も嫌だなんて言えなかったのは。

「どうして……」

波打ち際で一人立ち尽くすあたしに、ルミナスは思いも寄らぬ真実を告げた。

「あの天変地異は、おそらく我ら神人が引き起こしたものだ——」

そ、んな……。あたしはしばらくそこから動けなかった。ただ声も出せず、毅然としたルミナスの紫水晶の眸を見つめるだけだった。それじゃあ、父さんが死んだのは……。

それでもルミナスは無情に続ける。

「この世界が新たな時代を迎える度、古来より連綿と続く荒魂あらみたまの軌轢によって目に見えぬ大地の裂け目が次第に拡大していった。大陸だけではない、大海を流れる海流にも影響を及ぼし、今現在それは文字通り次第に停滞しつつある——大規模な気候変動による海水温の上昇、そしてそれに伴う海面上昇。それはお前たち人類にも少なからず心当たりがあることだろう」

地球温暖化、確かにそれは過去の人類がその発展のうちにもたらしたものだ。いや……むしろ海全体の僅かな変化がこの惑星ほしの帰趨を決する。全球の七割を占める海洋こそが、その生命線とも言えるのだ。確かに地球が青いのは、その七割を占める大海原があるからこそ……。

ルミナスの言葉が、まるであたしたちを包み込む波音のように次第に意識に沁み込んでいく。それは必然的な浸透圧のように、あまりに自然に。リトマス試験紙を浸されたのは、むしろあたしの方かもしれない。

「お前たちは仮初の大地に安住し、それを自らの城として、欲しいままに発展を続けてきた——そして今そこに君臨する、超大国ガイア。それこそが真に諸悪の根源なのだ」

諸悪の根源——、

その言葉はまるで、あたしたち人類そのものまでをも差している言葉のように聞こえた。確かにガイアは、前時代の人類の発展そのままに今世界に君臨していた。

「未だ浄化できぬ荒魂が、ダークホライズンを呼ぶ……」

そこまで続けると、不意にルミナスは額を押さえ、苦しげに片膝をついた。

「ルミナス……！」

一気に流出してきた記憶のせいなのか、それとも……。

あたしは一時に押し寄せてきた動揺と少なからずの衝撃に襲われながら、それでも半ば倒れ込むルミナスに駆け寄った。神人と人間、その狭間に潜む罪という存在に苛まれながら。なぜ、どうして……。でも違う、ルミナスのせいじゃない。

「……溜美那、お前は私とここまで来た。その意味が解るか？」

もう一度、あたし自身の意思を確認するかのように、ルミナスは答えを促す。そして不意に立ち上がり、呆然と見上げるあたしの震える頬に右手を添える。そして持ち上げるように顎にその長い指を滑らせると、ゾクツとするような声で告げた。

「私と一緒に往くのだ——、」

最後の最後で覚悟を迫られた、そんな気がした。怖い。初めてルミナスが怖いと思った。何度もう戻れないと思っただろう。でも、その度にあたしは躊躇し立ち止まっては、一人駄々を捏ね続けていた。でも、もう……逃げられない。

そう思った瞬間、吸い込まれそうに綺麗なルミナスの瞳が近づいてくる。あたしは目を閉じることもできず、ただその場に釘付けになった。まるで蛇が絡みつくように、全身が凍り付いて動けない。有無を言わせぬ瞳の力。やめ、て――、

でも不思議にあたしは拒否することができなかった。なぜだか身体が熱くなる。このまま心を侵されてもかまわないような気がした。そうルミナス、あなたのためなら……。

ふいにあの時、二人が初めて一つになった瞬間、よみがえった記憶の断片が再び脳裏を掠めた。どうして、なぜこんなに懐かしい気持ちになるんだろ。あの時、あそこで泣いていた子供。あれはやっぱり……。

まるで何かの儀式のようだった――戸惑いながら、目を閉じる。確かにこれは誓いの儀式なのだと、おぼろげながら思った。

「瑠美那……」

そう名を呼ばれ、ふと瞳を見開くと、目の前の光の守護神は驚くほど優しく微笑み、愛しそうな眼差しで、あたしを見つめて囁いた。

「……やっと逢えた」
——ドクン！

その穏やかな表情が、なぜだかまだ見ぬ父に重なり、あたしはさすがに動揺する。でも……無性に惹かれてしまう。あたしの中に眠る、これは誰かの記憶？ それがあたし自身を揺り動かしては離さない。

あたしはルミナスを愛していた。確かにそのひとは、かつて心身を捧げた唯一の存在に他ならなかった。

しかしそれも刹那、一時の幻のようにルミナスは元の真剣な顔に戻ると、改めてあたしに告げた。

「私と誓うのだ——どんなことがあるうと、共にいると」

誓約。それがどんな意味を持つのか、あたしにはわかっていた。あたしはただ、ルミナスにすべてを捧げて。身も心も、あたしのすべてを——。

——はい……誓います。あたしは当然のように、そう応えた。

なぜだか胸が一際高鳴り、意識が遠のき朦朧とする。身体が言うことを利かない。目の前にいる太陽神、いや光の守護神は龍蛇の王。そして父さんの仇……なのに。相変わらず響く波音だけが、意識の片隅で遠くさざめいた。

その返答を待つと、光の守護神はあくまで一つの儀式のようにそのまま近付く。

ルミナス……。

その瞬間、眩しい何かが心の深遠で弾けるのを感じる。生まれたばかりの黎明の眩い光の中で、あたしはその唇を奪われた。

「あ……、」

瞬間、胸の奥の熱い何かが全身に膨れ上がり、尾骨から脳天まで甘い痛みが駆け上がって、あたしはまともに立っていらなくなる。ただしつかりと抱き寄せるルミナスの腕に身体を預け、まるで精神が抜け落ちた抜け殻のようになり、感覚そのものが拡散する。

や……あつ……。

何、これ。意識の内側で強い光の奔流がほとばしり、あたしの服がビリビリに裂けて散った。でも恍惚の坩堝に放り込まれたあたしは、ただ溶けるようにルミナスの気だけを欲し、生まれたままの姿で身体を仰け反らせる。

……ルミナス、もっと……もっと。

まるで光そのものになったみたいだ。重なり合い触れているすべてがルミナスを欲し、そして同時に文字通り、引き合う磁石の両極になったように、あたしのすべてがルミナスに流れ込んでいく。それは、あの時の融合のように強く熱く、けれどももっと違う潜在的な何かがあたしを満たしていく。広がっていく、もっと愛しくあたにかい、確かな何か。

一瞬、真っ白な瞼の奥に何かの景色が広がった気がした。とてもとても懐かしい、その風景。まるで空を飛んでいるみたい。その瞬間も、しっかりとルミナスがあたしの手を握ってくれていることを感じると、……嬉しい。この上ない喜びに満たされるのを、あたしは感じた。永遠なんて言葉、信じるわけじゃないけど――。

うつすらと閉じた瞳から、いつしか涙があふれ、ツ——と一筋類を伝った。まるで、ゆらゆらと揺れる水面みなもを漂うように、拡がる波紋。込み上げる愛しさが停まらない。その限らない感情の高まりが、いつしか引き金となった。

先程の静寂が嘘のように、島全体が不思議な暁色あかとぎのオーラに包まれる。いつ戻ったのか鳥が啼き、さっきまでひっそりとしていた辺りが俄かにざわめき出した。まるで島全体が、そして青い海が、突然、生命の揺りかごであることを思い出したようだ。

その時、“それ”が目覚めた。まるで空と大地を結ぶ虹のように……。それは満ち潮の海に突然、弧を描いた。

一声地鳴りのような咆哮をあげると、まるで天を貫く激しい火柱があがるように、その長い尾を一振りさせて海を裂き、赫あかみがかつた鈍色の一匹の巨龍が忽然と姿を顕あらわした。

その鱗は朝陽と飛び散った飛沫を受けてキラキラと輝き、今にも火を噴きそうな、火龍サラマンダーそのものの赤く巨大おおな口を開けて再び啼くと、“彼”は主人との再会を心から喜んだ。

「カグツチ——」

夢から目覚めたばかりのように、呆然としたままのあたしは、ルミナスとともに、その巨大な火龍を見上げた。確かにあの幻の闇龍とは違う。その光り輝くような堂々たる立派な佇まいには、まさに龍王としての圧倒的な存在感があった。

「すーい……」

ルミナスに手を取られ見上げたあたしは、思わず感嘆の声を上げる。不思議と怖い、という意識はなかった。それは奇しくもまるでルミナスに対する時と同じように。

ルミナスはあたしから離れるとカグツチに近づき、その虹色に照り輝く鱗に手を触れ撫ぜる。すると火龍は、嬉しそうにグルグルと神妙な声で啼いた。

「本当にドラゴンなんだ……」

「ああ」

あたしはルミナスに声をかけたが、先程の恥じらいを思い出し、思わず頬を赤らめる。そんなあたしを、心なしかカグツチはその長い首を傾げると、興味ありげに宝石ルビーのように煌く眼ひとみで見つめた。

「瑠美那、お前に挨拶がしたいそうだ」

ルミナスがそう言うが早いか、カグツチの鼻先がすぐ目の前にやってきて、瞬間あたしは腰を抜かしそうになる。でも――、怖がらなくても大丈夫だ、ルミナスの言う通り、すぐにあたしたちは仲良くなった。

「案外、おとなしいのね……」

さっきの接吻くちづけと恍惚の余韻がまだ残っているのか、まともにその顔を見れなかったが、あたしは背後のルミナスに囁いた。

不思議なことに、このカグツチのひんやりした鱗の感触が初めてではない感じがして、なんだかやっぱりそれはルミナスに対する時

と同じだ、と思った。なぜだろう、なんとなくルミナスに似ている感じがする……それに。

龍王。それはまさしく龍蛇の中の龍蛇、王の中の王だった。それを己の楯と矛として所有するルミナス。それはとりもなおさず、ルミナス自身が、その神格に値する高貴な王の中の王である証に他ならなかった。

一瞬、あたしは人知れず身震いした。

ルミナスは改めてカグツチの頭に手をやると、目を閉じ、己の靈力との同調を試みた。すると、まるで焰のようなオーラが辺りに立ち上り、龍との接点である額のチャクラが輝きを増す。その瞬間、文字通り火龍と主人である光の守護神は一体となった。それはまるで、先程のあたしとルミナスとの誓約の儀式にも少し似ていた。

「大丈夫のようだな……」

少し安堵したように、そう呟く。とりあえず、空を飛行するだけの力はあるようだ。もし目覚めたばかりで無理なようでも、ルミナス自身とあたしの靈力でなんとかなる。そうルミナスは言った。

そうなんだ、やっぱりあたしはルミナスと――、
そう思うと、また身体が熱くなる。やだ、どうして……。

愛とか憎しみとか、好きとか嫌いとかじゃない、そんな個人の感情を超越し無視した、それは有無を言わせぬ禁忌の衝動。それがどうしようもなく、あたしとルミナスを惹き付ける。

思わず自分の腕で自分を抱き締める。さっきのは幻。裂けたと思

った服が元通りであることを改めて知っても、不覚にもあたしは、密かに鼓動が早鐘のように鳴り響くことを止められなかった。

ほんと、ルミナス、全部あなたのせいだよ。

*

確かにそんな予感があった。しかし、実際に“それ”をこの目で見るまでは、アグニには信じられなかった。本当に龍蛇がそこにいるなどと。

「俺はアスラで出る。ヴァルナ、船のことはお前に任せる。くれぐれも周辺海域の監視を怠らぬよう。それと——、」

アグニは深紅の自身専用スーリヤ“アスラ”に跨ると、後ろを振り返った。

「来い！」

そう言うが早いか、クロエが飛び移りマシン後方に跨る。ま、当然だろう。やっこさんもそれが目的で俺たちの船に便乗したんだろ
うしな。

発進するや否や、アグニのスーリヤ・アスラは唸りを上げ波間を前進する。まさに海馬、だ。エアバイクのように水面抵抗を減らした身軽な機体は、この海賊集団にはもってこいだった。しかも海を滑り手下たちの海馬スーリヤを従えたその姿は、まさに光り輝く太陽神のようだ。

しかし、アグニたちがその島影の沖合いに近づいて間もなく、それは起こった。突然島全体が光り輝き、異様な生気に満ち溢れた。そして突如唸りを上げるその咆哮。その、この世のものとは思えぬ

生物の声が、この海にやってきた者たちを殊更に恐怖させた。

「ナーガ、なのか……！？」

長い黒髪をためかせるアグニの肩越しにクロエは見た。夢にまで見た、見覚えのあるドラゴン、あの火龍サラマンダーの雄姿すがたを。

「カグツチ——クスヒ様……！」

カグツチが目覚めた。ということは……。

いや、そんなことはとうに解っていた。“アイツ”はきつと既にかの人と……出会っていたんだ、私が出会うより先に。本当は認めたくなかった。認めたくはなかった、それが運命と知りながら。

運命——誓約の理ことわりが、龍蛇であるかの人とその依人との約束の在あり処かを目覚めさせる。すなわちナーガラージャ、真の龍王の誕生である。

そうであろうとなかろうと、この忠誠心は変わらないはずだった。いや、本来ならば喜ぶべきところだ。そう自分自身を納得させようとしながら、どこかクロエの心は虚ろだった。

「ナーガラージャ……」

アグニは瞳を見開いた。今眼前に起っていることこそが、アグニたちインディアの部族に伝わる伝説そのものの光景だった。正義という名目でテロという破壊行為に明け暮れながらも一時たりとも忘れなかった、それは彼らの念願、いや悲願といってもいい。本当の意味で求めている再生の光の象徴だった。

「……そうか、やはり実^{いた}在^{いた}なんだな」

半ば呆然と笑いながらアグニは呟いた。世界を壊し、世界を創造する。その象徴が龍蛇の中の龍蛇、王の中の王、伝説のナーガラージャ。彼らの名パルジャミヤでさえ、それに従属する神の名だった。アグニのスーリヤ、アスラはそのまま、その入り江へと滑り込むように接近する。そこに現れる“畏”の存在も知らずに。

*

「聡介、どうしてあなたは私を怖れないのですか？……そればかりか」

どこか憂いを含んだ月の神の涼やかな眸を、少年は真っ直ぐ見つめ返した。

ここは一体どこなのか。それすら分からない目覚めの瞬間でさえ、聡介には解っていた。“この人”が真に悪い人なのではないということが。それなのに月神、ツクヨミはこの少年をいずれ己自身の中に取り込もうとしている。それが悪でなくてなんなのだろう。

だのに少年は、その己自身の運命を知ってか知らずか、その好奇心そのものの純真な瞳を眼鏡^{レンズ}の向こうで瞬かせる。それは決して裏切ることを知らない、嘘をつかない真っ直ぐな瞳。

「いつだって僕は貴方のことを見ていた気がする……」

それは本当だった。数多くの星々を覗くのが目的の天体観測ではあったが、その中でも月は無意識のうちに、そのはかりしれない存在感で彼を魅了し続けていた。殊更に太陽と月の神話は聡介の気持

ちを、この月の神に寄り添わせた。

「僕にも好きな人がいたんだ。でもその人は、まるで太陽みたいに明るくて、僕にとっては何ものすごく眩しい存在で、——たぶん片思いなんだろうね」

そして少しだけ淋しげに笑った。ああ、そうなのですか。あなたも……いえ。ツクヨミはそのほっそりした指を伸ばして背後から近寄ると優しく抱き締める。ひんやりとした冷気が瞬間、聡介を包み込んだ。

「大丈夫、ですよ。きっといつか、その想いは届きます。きっと、ね」

*

そう、瑠美那。聡介、あなたの想い人がそうだったのですね。ならば、話は早いというもの。

ツクヨミは一人ほくそ笑むと、目の前の水晶球を視つめた。冷たい水底を映した丸い水鏡のようなそれは、眩い光の奔流を映し出していた。あの島……やはり。

きっと私たちが行くより早いでしょう。その神の咆哮に引き寄せられた者たちが自然と。

そう思うとツクヨミは冷たく微笑んだ。クスヒ、貴方にもいずれ再び逢えることでしょう。そう、焦らずとも近いうちにきっと。その時、貴方が貴方の分身を躊躇うことなく己自身の中に取り込んでいることを祈っていますよ。

それでこそ、龍蛇りゅうだの中の龍蛇りゅうだの証。恐怖を導く真のダークホライズンから生まれ出る、愛しい人。その畏怖の前に、あまねく者たちは平伏すのです――。

その海に広がる光環。それが、おそらくすべての序はじまり。

*

たくさんの人が死んだ。突如太平洋上に落下した、いや発生した光の球。それが今や発展の最盛期にあった人類の歩みを停めた。本来ならば、誰も生き残れない、そんな本当の地獄がそこに広がっているはずだった。だが――。

海面ごと地表をえぐるような、その急激で巨大な衝撃は、それが起こったことですら、地上の誰一人に教えることはなかった。ただ、真っ青だった空が、突然深紅に塗り変えられ、水分が蒸発し大気はその意味を成さなくなり、呼吸することさえ出来なくなったことも知らず、無数の人という人が都市まちごと飲み込まれ、焼け死んでいった。ただ一握り、「光環ひかり」に守られた人々を除いては。

父さん……。

あたしの知らない、父、金城隆志。島嶺叔父おもいさんが話してくれた思い出話は、その断片のすべてが懐かしい記憶に満ちていた。でも……その“光”に隠された“影”の部分が、やけに濃い陰影を落として、あたしの脳裏にくつきりと映っている。瞼にこびりつく、そんなヒリヒリするような深く昏い闇。

もしかしたらあたしは、その「秘密」に触れたくて、アイツと誓

約したのかもしれない。それは、怖いくらいに揺ぎの無い真実。きつと「嘘」から生まれる真実^{まこと}だってあるよね……。

瑠美那とルミナス。あたしと同じ、その名前。まるで兄妹^{きょうだい}みたいな、あたしたち二人。その先に続く無限の闇。螺旋の運命に飲み込まれ、吸い込まれていくような、そんな言いようのない絶望と衝動、その限らない陶醉感。何もかもを置き去りにしたまま、ただ廻り続け、そして宇宙^{そら}の深遠に上昇しながら落ちていく。そう、上も下もない宇宙に吸い込まれるのって、本当にこんな感じなんだ。

でも、ルミナスに抱かれながら堕ちていくなら、何も怖くない。これってつまり“手遅れ”ってこと……？
でも。……父さん。

*

なぜガイアの技術者たち——ガイアの前身であるリベルテ——は知っていたのだろう。“それ”が起こることを事前に察知していなければ、アマテラスは生まれなかった。まるでムー大陸が一夜にして海底に沈んだように、あたしたちの世界は一瞬にして、かき消えた。業火に焼かれ、朝も昼も夜もない日々がしばらく続いた。どこにも逃げることでできない絶望。“最期の日”って、案外いきなりやってくるものなんだね。

それでも地面が裂けて堕ちる寸前、あたしたちはそのブリッジに飛び乗った。最後の瞬間に、まだ赤ん坊だったあたしを母さんの手に渡した、その人は……。

『瑠美那、お前は母さんと生きるんだ——』

あたたかい、その声を最後に聞いた。いや、ただ一つ記憶に残っている、それが最初に聴いた父さんの声。

光は、闇から生まれる。朝は夜から始まる。闇夜がなければ、きつとあたしたちは光の存在でさえ気付かなかった。今にも壊れそうな、その眩しい奇跡に気付けないまま、きつと。だから……限りない螺旋の闇に抱かれた、それは儚い生命いのちの奇跡。

まるでメビウスの環みたいに、あたしたちはどこかに還って往くんだ……ねえ、そうでしょ、ルミナス。

「まさか、すべての人間の記憶を操作したなんてこと……そればかりか」

「それが出来るのが、我々ガイアの科学力なのです——いや、」

そう言いかけて一旦言葉を切った相手に、女は核心に迫るように念を押す。

「いいえ、ワイズ博士はくし。あなたの仰りたいことは解っています。やはりレムリアンが関与しているのですね？」

「レムリアン……失われた幻の大陸に存在していたという。いや、大陸などという即物的、物質的な捉え方は正しくない。むしろ霊界、そう神界とでも言えばよいのか……」

「神人、つまりそう仰りたいわけですね」

銀色の光が満ちるその部屋に木霊する密かな会話。それは誰も知る由のない、この世の真実を語る全てに満ちていた。

「イエス、と言いたいところですが、……草薙女史」

草薙と呼ばれた女は、眼鏡の奥の眸を微かに震わせた。やはり只

者ではない、その言葉の端々からそれが感じられ、思わず緊張する。

「あなた方は既に掴んでいるのでしょ——コードLの発現の事実を」

コードLとは、彼らの組織の間では特A中の特A、そう最重要機密事項だった。それをこの男が知っていないわけではない。なぜなら彼は、我々が強く協力を仰いでいる大国の科学技術庁、ガイア特務機関の最高技官だからだ。男は銀縁眼鏡の奥の銀緑色の瞳を光らせた。最高技官とはいえ、まだ三十代半ばの白人。だが、どこか油断ならない輝きをその瞳は放っていた。

「しかも、既に接触しているのですね。そう、その神人とやらと誓約した人間——その少女と」

金城瑠美那。“あの”金城隆志の忘れ形見。その存在までも、既に知っているというのか。確かに隠したところで、全てはいつか露呈する明白の事実なのだ。私たちはただそれを、ありのままに報告するだけ。だが、それでも……。

『利用する』——逆に彼らに利用されていると分かっているところで、我々の真実は何一つ変わらない。それはイザナギという失われたこの国の民族であるという以上に……。

「島嶺君、そして竜堂教授によりしく……どうぞ御手柔らかに、とね」

ふふ、と口元だけで冷たく笑うとロベルト・ワイズ博士は扉の向こうに消えた。

天変地異、か。それだけで全てが片付けられるわけがない。確かに事実はその通りだった。だが肝心な事が巧妙に隠蔽されている。十数年。そんな短期間で大陸移動や列島の沈降が起こるはずがない。それに……すべてが最初から“仕組まれた”ことだったら。一体誰に？ いや、もしかしたらそれは人ではないのかもしれない。神人……そんな馬鹿な。

とりあえず沖縄から帰還した草薙瑞穂を会見に差し向けたのは正解だった。ともすれば先回りされかねない、相手はガイアの最高機関である。ガイア——今や破滅と混沌を経た世界のすべてを掌握し支配していると言っても過言ではない、その超大国。その名ですら、神を冒瀆していると言えなくもないが。まあ、今はせいぜい牽制しておくさ。

ここイザナギの地には、元々龍穴が存在していたと言われている。そう、まだ列島という姿形で本土があった頃の日本という国に、だ。その最も強力なパワースポットであった富士山は今も見る影もない。いや山体の形こそ崩れ、山頂を残して小さな小島になってしまったとはいえ、まだそこに存在している。火山として姿を顕していたマグマのエネルギ―は海底深く沈んだだけだ。それに何より……確かにアマテラスをはじめとした三大ドームは強大だが、そんなものはお飾り、ただの慰めに過ぎない。

だから、神人様が降臨なさったというわけか……生命の揺りかごである海を司る龍神。

ピピピッ——その時、手元の通信機が鳴った。無言で受話器を取ると、乾いた女の声が響いた。

『そちらは変わりないかしら?』「ああ、相変わらず暇なもんさ」

そうわざとつまらなそうに言ってみせると、あら?そんなこともないんじゃない、そう切り返されて、思わずニヤリと笑う。

「で——、どうだった」

『あちらも随分と動きが早いわね。例の沖縄の異常現象以来、既に新たな動きを掴んでいるようよ』

「ああ、こつちも受信を確認した……やつこさん、とうとう本性を顕したようだな」

神隠し、言い得て妙だな。彼らがコードしと呼んでいる霊体现象、それはどうやら確固とした人格を有しているようなのだ。いや、この場合神格か。それに彼の姪である金城瑠美那が深く関与していることは、最早疑いようなない事実だった。神人に選ばれし誓約を交わす依人。よりひと

『瑠美那さん……』

「あいつなら、大丈夫——な、わけねえか」

さすがに今回ばかりは、御得意のなんとかなるなる、というわけには……、そう瑠美那の天真爛漫そのものの性格を思いながら、それでも何かの確信をどこかで島嶺は感じていた。

「なんせアイツの娘だ、それでも案外図太かつたりしてな!」

……酷い叔父さん、草薙は回線越しに苦笑いしてみせるも、確かにそう思った。

そう、確かに彼女は金城隆志の娘、なのだ。それが何を意味して

いるのかは、現状を鑑みれば既に理解できる。先程観測されたばかりの、二度目の発動。それが彼女が選ばれし人間であることの何よりの証拠なのだ。

「で、既に確定ポイントに“罠”を張っているってわけか」

『まあ、可哀想』

そう半ば茶化しつつも、草薙は内心で慄いていた。ガイアという大国の容赦のなさ、そして決して躊躇いを見せないその執拗なまでの素早い決断力。もしかしたら神様でさえ、その力の前に屈服し圧倒されてしまいかねないほどの。

だから、それを冒涇というのだ。いつか神の怒りを買う。いやもう十分買っているのかもしれない。でももしそれが、この宇宙に存在する一つのエネルギー体が姿を変えたものだとしたら。それさえも利用しようとするガイアの、人類の科学技術はそれ自体が神への冒涇だというのか。

「すぐさま現地集合、と言いたところだが――、」

今回の件に、どうやら例のテロ組織パルジャミヤが絡んでいるよなのだ。どういうわけか、彼らの海賊船団が当該海域に姿を現したのだという。

「神様と海賊……か、これも龍神様の御導きってやつか」

そう呟きつつも、一戦どころか三つ巴の大決戦になりそうな予感に心がはやる。

その中心にいるのが、瑠美那——金城瑠美那。

琉球弧は奄美諸島近海の孤島に現れた海賊パルジャミヤと謎の発光現象。前者の捕縛は当然として、問題は後者である。評議会はそれが先頃、沖縄で起こった異常現象に関与していると言及していた。

睦月は母艦アステリウスにて再びマシンの調整を行いながら、次第に迫り来る孤島へ向かう波頭を見つめていた。

——ガイアが誇る精鋭特務部隊、イオリゲル。

彼はその隊員でもあった。何人も不可侵の力、デユナミスを操る彼らは、まさしく「選ばれた人間」であった。それは確かに超能力と呼べる類のものかもしれない。だがしかし、デユナミスは思いの力の強さが作用する。だからこそ「信じるもの」を強く持つ者たちは誰でも、その適正が強いと言えるのだ。誰がいつ、どこで発見したのかもさだかでないそれは、それでも睦月ら、イオリゲルの配備する人型マシンD-2の力の源でもあった。

「睦月、準備はいいか？」

最後の調整を終えた瞬間、彼の背後から精悍な顔つきの男がそう声をかけた。

「はい、キリアン隊長」

「今回の作戦は極秘任務だそうだ」

その言葉に思わず眉を顰める。

「……あの噂は本当なんですか？」

あの日沖縄本島で姿を消した一人の少女。彼女が取り込まれた怖れのある「龍神」を撃て、と。それが今回彼らに課された命令だっ

た。

「だとしたら自分は――、」

「我々はテロ海賊組織パルジャミヤを迎え撃つ、ただそれだけだ」

イオリゲル隊長としての任務遂行がすべて、ただ固い表情で呟く
キリアンは手元のマーキングに照準を合わせた。

*

元々あの部隊は寄せ集めではあるが――、
ワイズ博士は、おもむろに腰掛けた椅子を窓側へ回転させた。

デユナミスを操れる、その事実だけは本物だった。それでも、まだ歳若い少年少女たちも所属する彼らはエスパーまがいのように扱われ、実際、時折暴走者も現れることから、表向きの真価や地位とは裏腹に一部では上層部から煙たがられてもいた。

ことに彼らは「龍神」との感応も強いようだ。まるでイルカの脳波のように、それを敏感に感じ取るのだろうか。それはまさしく“同類”の如く。

だからこそ彼らが必要なのだ。実際、今回の作戦には彼らの能力が不可欠だった。そう、予め龍蛇の出現すると思われる場をピックアップする。これまでの経緯もあるが、今回は特にその“兆候”が強く出た。いや「其処」は確かに特別な場所なのだ。

ああ、そうそう……。

「デュナミスは、このガイア創生の源でもあったね」

ただ強い想いがすべてを駆逐する——それこそがこの世界の真実。

*

光も闇も、すべてを飲み込み、ただ崇高な魂を得るために。

だからスサノオとともに貴方を生み、この世界をあまねく照らす
輝きを生み出した……。

このアマテラスを討つために——。

母さま……。

『ぎゃあああ——目が、手がア……!』

目の前の液晶TV画面から派手に悲鳴を上げる男の音がする。

——やっぱりさあ、この展開正直エグくない？

未玲は思い出していた。何となく訪れると必ずルミナス一期視聴会議になっていた、友人桐子の部屋での会話。

——別にいいんじゃない。このくらいやらないと今の子は全然食いついてこないだろうからね。

——うは、きつつ。でもさ、やっぱり地上波でも深夜じゃないと、さすがに無理っぽ……あはは。

何を今さら。あたしたちは今、その問答無用の人気作である「ルミナスコード」制作スタッフの真っ只中にいるんだ。だったら、やるとこまでやってやろうじゃない。そう思いながらも未玲は目の前の優男を見ると、げんなりした気分を払拭することができなかった。大体なんでコイツなんかと……。

そうは言っても現実問題、あたしはコイツと組む以外になさそうだ。どうやら俄か雇われスタッフ？にしては、やれることはやれるようだし。そんなことより、ナミ……! !

未玲の頭の中には今、旧友のナミがどこに連れて行かれたのかということしか存在していなかった。正直言っであの子は関係ない。なのに、なんで。本当ならこんなやつなんか蹴り飛ばして、今すぐナミを悪の手先どもから奪還しに行きたいんだが。

ナミ、あいつらの言うことなんか聞いちゃダメだからね……！

そうは思いながらも、どこかで未玲は我が身の無力さと言いつたような敗北感に苛まれていた。

「……で……ねえ、神代君聞いてる？」

はあ？ 思わずギロリと睨む未玲に相澤は律儀に怯んだ。あたしは今、最っ高に機嫌が悪いんだ。アンタはアンタでやりたいようにやればいいじゃん。どうせ仲介役の円城寺が間にいるんだろっし。

そうは言っても確かにそういうわけにもいかないようだった。メインシリーズ構成の円城寺冬華はナミを連れて、今さっきどこかに雲隠れしたばかりだ。総監督の竜崎もどこで油を売っているか分かったもんじゃない。

「……ていうかアンタおかしいと思わないの？——こんな御都合主義の見え見え展開、一体どこの馬鹿が食いつくと思ってるのさ」

「……神代未玲くん、世の腐のお友達を舐めて貰っちゃあ困るなあ」

ギク。思わず相澤の目の色が変わったのを見て取り、未玲は一寸身体を引いた。

確かにそうだ。目の前の相澤に言われるまでもなく、その実それは未玲自身が、ほんの数年前まで実感していたことだった。そう、あたしたち腐女子はストーリー展開とか、そんな表面的な、ああだこうだは言ってみればどうでもよかった。それより目の前に用意された素材を、どう自分なりに解釈し料理するかだ。そのためには例えルミナスが極悪人になろうと、瑠美那が男化しよう……確かに

瑣末なことに片付けるには、あまりに「ファン」としてどうかと思うけど。

……だから。

「——アンタ、腐男子って噂ホントなの……？」

はあっと大きく溜息をついて立ち上がると、正直まともに話もしたくもない相手に向かって吐き捨てる。本来ならそれを肴に思いきり冷笑を浴びせてやりたいところだが。だがしかし。

唐突にオタとしてのベクトルである、その方針を一八〇度方向転換してみせた驚愕の相澤はともかく、確かにあたしはあたしで……少なからず一步引いたスタンスで腐女子らを見ている今現在とはともかく——過去の汚点だなんて、すっぱり笑い飛ばせられればよかったんだけど。

「ふっふっふ。よくぞ聞いてくれました。ボクはその昔ナルシス相澤と呼ばれていましたねえ……」

第一それ一体いつの昔の話だよ。それ以上、未玲はもう何も聞いていなかった。

*

そんなこんなで身も蓋もない、副監督とサブ脚本家の不毛な脚本会議は、たいして何の進展もないまま小一時間が経過した。どういうわけだか、こんなんでもまともに通るのが今時のアニメ制作会社の裏事情らしい。というか単にあたしをここに足止めしたかっただけじゃないのか？ 今さらのように、そんな疑念が当然湧き起こっ

てきてもしかたない。

ナミ……ナミ……ナミ……！

まるで絶望的なほど恋人を拉致され、半殺しの目に遭わされてしまったみたいだ。っていうか、だって実際そうだったらどうする。

そう考えると未玲は居ても立ってもいられなくなった。ああもう、アンタほんとに何も知らないの？。知ってて黙ってるんだっいたらタダじゃおかないからね！可哀想な相澤の首を絞めながら、ぶんぶん振る。だが気の毒なことに下っ端の副監督は、監督らから何一つたいた事実を伝えられていないようだった。今やげっそりと青菜のようにシナシナになって力なく首を横に振るばかり。

「あはは……神代……さ……も、う……カンベン」

とか言いながら、相手は結構それでも満更でもない様子なのが、どうにも気持ち悪い。

しかたがないので、相澤の首根っこを掴んでいた手をパツと唐突に離し一人思案する。そうだ、円城寺と裏で通じていそうな相手が一人いたつけ。何を隠そう、それはいかにも腰の低そうな小心者、制作進行の乙部晴之だった。

*

そういえば、瑠美那って一期ラストでは……。

狐につままれたような面持ちのまま、竜崎らと一緒に病院を後にしたあたし。なんだかルミナスコード第一期の最後がよく思い出せない気がする。あんなに衝撃的なラストの展開だと思ってたのに。

というか、さっきまであたしは誰と話してたんだろう。何だか頭の奥で誰かが話しかけてきて。確か後光の差した背の高い——やべルミナスの見過ぎだってば。

そういえば、ネットやら雑誌やらで散々話題に上っていたはずのそのラスト展開の感想云々すらも何一つ覚えてない。一体何がどうしたっていうんだろう。

今さらながら、さっきまでにこやかに談笑してた監督の竜崎氏や円城寺女史のことが、うつすら不気味に思えてくる。

ああそうか……！水澤ひとみ。

それについて結局、あの二人は何の説明も付け加えてくれなかった。ただ一言、『君が来てくれて、よかったよ』——そう別れ際に告げた竜崎氏のどうにも胡散臭い笑みが脳裏にこびりついて離れない。やっぱり絶対何かがおかしいよ、未玲。

そうだ、早く未玲に会わなくちゃ。携帯、携帯つと。さっきまで病院内でマナーモードになっていた鞆の中の携帯に手を伸ばす。

……そして、数秒の呼び出し音の後。

『もしもし——ナミ！？』

相手の突拍子もない慌てふためいた取り乱し方に、こちらが驚く。

「未玲！」

『あんだ、今までどこに行ってた……もとい連れてかれてたのさ！』

「未玲、よかった……」

それはこっちの台詞だよ。そう噛み付くように言われて思わず度肝を抜く。確かにそれはそうかもしれない。決して離しちゃいけないと肝に銘じて思っていたその手を、いとも簡単に引き離されてしまったんだから。

『……………今どこにいる？』

どうでもいいから、早く落ち合おう。ふうと安堵の溜息を大きく吐いてから、未玲は呟いた。

*

「ああ、そういえば。円城寺さん、今日は西宮医大病院に行かれるとかって言ってましたね」

……………なんて口の軽いヤツ。正直こいつがルミナスコードの制作進行をやってるんだから驚くわ。ま、そういうことは別段、関係ないのか。でも、そうは言っても——もしかしたら、こいつから何かの“秘密”を聞き出せるかもしれない。

秘密、か。あたしたち一体何の秘密を暴こうっていうんだろう。ルミナスはただの人気アニメ。それ以上でもそれ以下でもない。そしてそれに奇跡的にあたしたち二人が巻き込まれただけ。ただ怪しいのは、それがあまりにも唐突すぎる話だっていうことだけだ。第一あたしはともかく、ナミはほんとのズブの素人だよ。

そう、あたしたちはただのオタク……………だった。あたしもナミもただの。

相変わらず忙しい様子で去っていく乙部の後姿を見送りながら、未玲は一瞬物思いに耽っていたが、それも刹那、突然かかってきたTELに我に返り、慌てて手に取った携帯を思わず取り落とすところだった。

*

都内某所にある録音スタジオ。そこで彼は普段と何ら変わらぬ“仕事”を淡々とこなしていた。

『はい、テストもう一回ね』

『はい——』

背後のブースからマイク越しに音響監督の指示が下る。目の前のTV画面には、ところどころ省かれた真白な線画が映っている。それと手にした台本とを交互に見比べながら、タイミングを見計らう。既に台本の台詞は全て頭に入っていた。そして目の前で動いているはずの「彼の分身」が今どんなことを思っているのかも——。

“その瞬間” 自分自身の呼吸がそのままその「分身」に移る。そうなければもう、手馴れたものだ。

——まるで、もう一人の自分を操っているみたいだな。
そんなことを、時折思う。

確かにその瞬間、彼は二次元の画面の向こうの世界にいた。演技や声の出し方の幅さえ習得できれば、自分が発する声によって、どんな人間も演じられる。いや人間だけじゃない、動物だって、そう宇宙人だって——この世にいるはずのないSFファンタジーの住人にだって瞬時になれるんだ。そう悪魔や神様だろうと……。

その瞬間、自分はいつだって自由になれた。それはまるで自分を縛っている物理法則に、いとも簡単に逆らうようだった。変身……それは本当に快感を感じる瞬間だ。

だけど、“その作品”に参加していた半年間は別物だった。あれは一体誰なんだ……なんだったんだ。

声優である自分が演じている、操っているのは、確かに目の前のVTR画面の中にしか存在しない二次元の存在だった。その平面の世界に描かれた、ただの色付きの線画。だが、それが一旦動き出すと何か別のものに豹変する。自分が演じているのに、自分が発する声で喋っているのに、全然自分じゃない感じがした。演じる、操る？ 違う、まるで逆だ。

そう「操られている」——その瞬間、自分は自分ではなかった。自分自身であると認識している自我がどこかに消え、その時確かに彼は誰かに操られていた。収録自体が終わってから金縛りのように一日中、自分でない誰かに自身を乗っ取られていた。収録のある日は決まってそうだ。

恐怖……そうだ、あの半年間、自分自身を始終縛っていたのは、その恐怖そのものだった。だのに——。

『——はい、本番ラスト！』
「お疲れさまー」

瞬間、緊張の糸が切れたように、どやどやというざわめきが周囲に広がる。

「やー今回、割とラクだったっすねー」

そんな陽気な声をあげる某若手男優。そうだね、こんなのは、ほんとに楽なもんさ。あの時の異様な緊張感に比べれば……。

「だけどさ、水澤さん大丈夫かしらねえ？」

「ちよつ、ばかつ」

「あ——ごめんなさい」

そう、水澤ひとみ。今では、この業界では禁句だった。特に声優仲間の間では、僕の目の前でその名を口にすることは。突然、失踪した僕の元恋人。彼女は文字通りの、若手人気女性声優だった。

明るく屈託のない性格そのもので、それが張りのある高いトーンの声そのものにも現れていた。その実、実際役に入り込むと実力を発揮する。かわいくて涙もろくて、切羽詰った瞬間の感情が雪崩れ込む迫真の演技には定評があった。彼女は僕の5つ年下の同じ事務所の後輩。だけどデビューするや否や、どんどん実力を着けていき、アニメのアフレコだけじゃなく歌やグラビア方面なんかにも積極的に進出するようになって、そして……。

運命の“あの作品”で共演するまでは、そのラストシーンを録り終えるまでは、絶頂の只中にいた。

どうして……。

*

『斉藤さんちのリルベツト』——要するに萌えアニメっていうのかな、世間的には。妖精リルベツトが迷い込んだ、とある一家のドタバタコメディ。その斉藤家の長男役。ちなみにリルベツトに恋する次男である主人公役が今喋ってた、若手声優の西河大吾君。ああ、

一応付け加えれば。リルベツト役には……当然のように水澤ひとみがキャスティングされてた。明るくて凛としていて、それでいて可愛げのある彼女の声は、どの作品でも引っ張りダコだった。

それが放送開始直前になって、御覧の通り。リルベツト役は彼女の同期である同じ事務所所属の若手声優、松宮彩菜に急遽変更。

「ねえ西河君、篠崎さんの様子どう思う？」

「どうって、いつも通りじゃないんすか？」

母親役である妙齡の女性声優と西河大吾の囁き声が聞こえる。割とよく声の通る声優だからってわけじゃないだろうけど、丸聞こえだよ。

「まあここんとこ、ある意味リハビリっぽいカンジはしますけどね」

ああ、そうだね。リハビリ。確かにそんな感じた。あれから色々あって、しばらく休業。でもやっぱり食つてくためには、そうそう遊んでもられないから、ようやく決まったレギュラーの脇役で無事現場復帰。でも、どうなんだろ、実際……。

声優、篠崎聡己。二十七歳。この業界に入って初めてのスランプ突入。

「ね、実際どうなのかしらね、水澤さん……」
もう、その話題はいい。

「なんか変な宗教にハマってたって噂もあるみたいっすよ」
そんな噂、勝手に流すなよ。

「えーやばいんじゃないの、それ」
やばいのは、あんたの方だろ。

「あと薬とか……」

おい、そんなわけあるか……っ！

「じゃ案外、自殺……」

——グシャ！

思わず膝の上に広げていた台本のページを握り潰していた。

……もう、いいよ。

諦めたように一人席を立つ。本日の収録は無事終了。早く開放されたい。そう思いながらスタジオを後にする。午後の日差しがやけに明るく、それまでビルの地下にある薄暗いスタジオにいた自分を白々しく出迎える。

*

どうやら「ルミナスコード」の続編は当然のことのように、あるらしい。そんな悪夢のような噂をどこかで耳にした。まさか、そんなわけ……ああ、そうか。別に俺じゃなくなつていいのか。そうだ、別にひとみでなくなつて——。

少し前までは、そんな風に単純に考えていた。でも、あの作品だけは「特別」だった。いや単にアニメ界で一世を風靡した人気作だからつてことだけじゃなく。作品自体が生きている、そう登場人物、架空のキャラクターが命を持っている？ 冗談じゃない、馬鹿馬鹿しい。もしそれが本当だとしたら、それは声に命を吹き込むと言われている俺たち声優の仕事だろ。だけど、そうだとっても、自分はも

う無理だ。あの作品に関わるのは金輪際ごめんだ。もし続編があったとしても、ルミナスには別の誰かが声を当てる。それでいいじゃないか……。

だけど、その日かかってきたTELによって全てが暗転した。

「はい、篠崎です」

『——やあ久しぶりだね、篠崎君』

久しぶりに聞くその声が、まるで悪魔の囁きのように聞こえた。だから、何度事務所を通してくれて……。新しい携帯番号教えたの誰だよ。

『今日は折り入って頼みがあつて……実は君に会って欲しい子がいるんだけど』

水澤ひとみ——まさか……！？

『……の、代わりというか、何というか』

「——僕にもう一度ルミナスを演れっていうんですか？竜崎さん」

んーまあ、そんなとこかな。やめてください、すぐさまそう言い掛けるも、ふいに言葉に詰まる。……もしかしたら。

僕が承諾したら、水澤君の居所を教えてくださいませんか。押し殺したような低い声でそう訊ねると、相手は言葉を濁しながら、うん、まあそうだね——そう、はつきり答えた。

「わかりました」

硬い表情で携帯端末を握り締めながら搾り出すようにそう答えた

瞬間、脳裏に変わらぬ恋人のくすぐったい笑顔が浮かんで消えた。

……要するにそれが一ヶ月前の話。その後あれよあれよという間に。イベント会場で再会したひとみは、そう、以前と変わらぬその笑顔で僕を出迎えた。

*

——やっぱりダメだったな。

神代君から採取したエネルギーは本物だったが、所詮借り物でしかなかった。それでも、たった一日ステージに立てただけでも、まだよい方だった。そんなことを話していた一ヶ月前がまるで嘘のようだ。

「天然、てことかしら。要するに」

円城寺冬華は、あたし伊勢崎ナミのぼわんとした表情を思い浮かべながら、クスリと笑った。

「だが既に問題はクリアしたも同然だ」

ほんの一瞬、接触しただけで、あれだけの適正を見せた。その瞬間から全てが決定事項へと、すんなり移行していったのだ。

先日あたしが某大病院地下で出遭った某人物。そう、若手女性声優の水澤ひとみ。あれから彼女が人工呼吸器に頼らず文字通り息を吹き返した、なんて事実、当然あたしは全然知らなかった。でもそれは事実なのだ。そう、その事実が、これから始まる“偽りの関係”を生むことになるなんて……。

「第一話の収録には間に合わせるつもりです」

監督、竜崎の無言の視線に応えるように円城寺は告げた。

そう。続編であるルミナスコード第二期、その第一話。そのためにあたしたちは、このネプチューンの竜崎、円城寺を軸として、ここに集められた。神代未玲、相澤太一、篠崎聡己、水澤ひとみ、そして伊勢崎ナミ……。

「水澤君のコンディションが整いさえすれば、すぐにでも、か——」

そのための良質のデユナミスですから。円城寺がはっきりと、そう言った。デユナミス——ある意味このルミナスコードの物語の横糸とも言えるキーアイテム。想いの力。可能性を意味するそのギリシャ語の概念は、想念とも取れる異様な真実味を持って本作を支えていた。

「篠崎君には、私から連絡しておきます……水澤さんが“目を醒ました”ってこと」

それはある意味で残酷な報告だった。いや、もう既に水澤ひとみは彼の中で目を醒ましていた。というより、しばらく昏睡状態に陥っていたことすら、彼は知らされていなかった。ただ久方ぶりに逢った恋人とほんの一ヶ月間会えなかったただけなのだ。

そして再び彼と彼女は本作「ルミナスコード」で主人公の瑠美那とルミナス役として再会する。いいえ、本当は瑠美那を演じるのは水澤ひとみではない。篠崎聡己と恋仲になる伊勢崎ナミ。所詮、水澤は彼女の意識の容れ物でしかない。

「そこまで周到なシナリオを用意してくれたのはありがたいが……」

本当に上手くいくのか。ええ、上手くいくはずです。その妙に確信めいた円城寺の異様な瞳の色に、思わずぞっとしないものを感じて竜崎は肩をすくめる。

「ルミナスの御魂が二人を繋ぐなら——“彼女”は瑠美那になる。それに篠崎君はきつと応えてくれるはず。水澤ひとみの魂を取り戻すためにもね」

それってつまり……。

お人よしルミナス君に伊勢崎君を誘惑しろってことになるのかね。その真意を知り、いよいよ竜崎は苦笑いする。こりゃ文字通り泥沼だな。その中に純真無垢な彼女を放り込むのは、いささか気が引けるが……。

今さら躊躇することなどない。それだけが彼らの真実だった。

やっぱりフツの女の子だ。

ルミナス第二期、第一話のアフレコ台本を貰って一週間。会わせたい子がいるからって、監督直々に頼まれて会ってみれば……。それも、まるでこの第一話のアフレコ収録に合わせるかのように、あれから一カ月後に。

何だか釈然としないものを感じながら、篠崎は目の前で膠着しながら席に着く同年代の女の子を何気なく見つめた。

あのイベント後、恋人である僕に一言も説明もなく、ひとみは再びどこかに姿を消した。「ルミナスだけじゃないですからね、彼女は。新曲録音に次のツアーの打ち合わせの合間にグラビア撮影に諸々各種取材……」そうだ、僕たちの事務所であるシャインプロモートとも繋がりのある円城寺女史の言葉通り、新進若手女性声優は常に多忙なのだ。ほんの一ヶ月会えないなんてことは、今さらどうってことない。

でも、何かがおかしい。イベント最中に同じ作品の共演者として話した以外、そのステージ終了後、プライベートな瞬間に戻っても結局、彼女は一言も発することなく沈黙していた。でも、確かに彼女はそこにいた。朗らかに笑うその笑顔はいつも通りだった。なんだ、何事もなかったじゃないか。思わずそう安堵してしまうほど、あまりに自然にそこにいた。なのに……。

「伊勢崎ナミさん。初めまして、僕がルミナス役の篠崎聡己です」
……正直そう名乗るのも怖ろしかった。それなのに、どうしてこ

んなにすんなりと。

目の前の“少女”（確か一つ年上と聞いていたが、彼女はまさにそう形容するのに相応しかった）の瞳が何気なく発する何かが、まさか僕をこんな気持ちにさせるなんて――。

*

「初めまして……ルミナス役の篠崎聡己です」

正直、何も言えない。

感無量というのは、このことを言うのだろう。

とはいえ、あたしは今日の前にいる、この人の熱烈なファンというわけでもない。ただなんというか――とにかく目の前の人気男性声優が発する物言わぬオーラのようなものに、ただただ圧倒されて

そう、オーラだ。あたしがこれまで認識してきた“声優さん”というのは、割と素の一般人の雰囲気に近いというか、確かに芸能人の一端ではあるのだが、その存在自体が、まるっきりの芸能人そのものとは意味合い自体からして全然違っていた。つまり一般人に限りなく近い芸能人。いや、芸能人という呼び方自体に何か違和感が……それより何より「声優」という一個の特別な。それくらいの、何とも形容しがたい親しみ、親和感があつた。

そう、あたしたちオタにとっては特別なんだ。声優も、アニメもいわゆる、あたしたちだけの“聖域”ってやつか。

その“声優さん”である篠崎聡己。デビュー当時の記憶は定かではないけれど、それでも数年前に某人気作品で火がついてからは、

結構有名どころ人気どころ男性声優の一人だった。確かにそれほど目立つ存在ではなかったけど。ルミナスもそうだが、主演作が男女ペア主人公の場合、必ずといっていいほど相手役の個性を消すことなく、むしろ引き立てる性質の役柄を演じることが多い。それは彼自身の柔和な声質に、もしかしたら理由があるのかもしれない。

その彼が今あたしの目と鼻の先、手を伸ばせば、すぐ届く距離にいる。

驚いた。こんなに色白だったっけ？ていうか、目の輝きが半端じゃない。どこが一般人に限りなく近い芸能人だよ。やっぱり今時の声優……ってのは——やっぱりすごい。

「は、はじめましてっ」——伊勢崎ナミです……。

そう挨拶を返すのが精一杯だった。

*

『やっぱり“御扱い”くらいは一応しとかなないとマズイかな』

竜崎氏が柄にもなく、そんなことを言ったかどうかは定かではない。それでも、あたしと篠崎氏を会わせる口実として、どうもそんなことを提案してきたことは確かなようだ。じゃ一期の時はどうだったんだよ。勿論、形ばかりのものだろうし、それ相応のことは何かしたんだろうけど。どっちにしろ、アマテラスその他、日本の神様を題材にしている本作だ。その手の神社は五万とあるんだろうし、一応、神様に御挨拶くらいはしておかないと罰が当たるだろう。

「私と竜崎監督、それから篠崎君と水澤さん、それとあなた——」

円城寺氏にそう名指しされ、またしても、なんでっていう思いに
かられる。が、こうなったら、もう何でもあり、である。今さら何
を疑問視したところで何も変わらない。それよりルミナス役の篠崎
さんには何て説明するんだろう。それに――。

それより何より……水澤ひとみ。

結局、彼女はあれから何事もなく退院したという。あたしはそう
聞かされた。でも、ルミナス役のこの人は、そのことを知ってるん
だろう。いや、そもそも。彼女がああ病院の地下で昏睡状態にあ
ったことを知っていたんだろうか。

「ごめんね、突然のことではびっくりしたでしょ？」

「は、はあ」

篠崎氏は当然のこのように、そう気遣ってくれる。一体監督に
どんな風に説明されたんだろ。どっちにしろ、あたしたちはこの日、
天照大神を祀る、とある神社にメインスタッフとともに出向くこと
になっていた。

「でも、伊勢崎さんがルミナスのファンでよかった」

「え？」

なんていうか……僕としても一声優として、作品に理解を示して
くれる人が一緒に御参りしてくれるというのは、純粹に嬉しいとい
うか。名前が伊勢崎さんっていうくらいだから、きっとそちらの関
係の方だとは思っていたんだけど。

ああ。でも、あたしんちは伊勢の神宮様とは何の縁もゆかりもな
いんですけど……。無言でそう否定する。でも、それだけで何の疑

問も持たず、あたしを出迎えたこの人の邪気のなさに逆に何だか感動する。だけど、なぜだか不思議に……。

そう、不思議にあたしはどことなく翳りをまとった不吉なこの人の横顔に惹かれる自分を感じていた。

それは、ルミナスに惹かれるのとはまた別の感覚だ。二次元のアニメキャラと現実にいる人の違いであるのだし、何もかも違って当たり前なんだけど。でも、この人の優しさ柔らかさ、そしてあたたかさは、ルミナスの冷たさ鋭さとは相反するものだ。それなのに――なぜだか導かれる場所は一つ、同じ場所のような気がする。彼が持つ優しさは、その儚げな空気のような雰囲気は、どこことなく今にも消え入りそうな、そうだ。いつしか彼はルミナスに取り込まれてしまう。そう、存在自体が、まるで始めからなかったように。

嫌だ、あたし何考えてるんだろう。なんて怖い……。

「どうしたの？」

怪訝な顔をして、あたしを覗き込む篠崎氏に気づき、思わずドキツとする。本当に綺麗な眼をしていると思う。真っ直ぐで飾らない、純粹そのものの瞳の色。

オタクとしてファンとしてというより、一人の人間として彼を見ている自分が、いつしかここにいた。

*

「御抜い？」

未玲は怪訝そうな顔で携帯画面を見つめた。さつき送った、あたしからのメール文だ。しかし、どうやら未玲の所には、そういった連絡は竜崎氏たちから一切入ってきていなかったらしい。で、当然の如く、あたしの携帯が次の瞬間けたたましく鳴った。

『ナミ、御被いって何よ？——あたしんところには、そんな連絡なんにも来てないよっ！』

「……そ、そうなんだ」

思わずその語気の荒さに苦笑いしつつ、それでもやっぱり心配してくれる未玲を嬉しいと思う。

参加者は、あたしと篠崎氏、それと竜崎監督と円城寺女史、そして水澤ひとみ他、数名スタッフ。

「相澤はともかく、なんであたしが呼ばれてない？」

助監督の相澤と一緒にされた（というか、単に相澤は現場を離れられなかったただけなのだが）というより、サブ脚本家といえど自分がないがしろにされたことが……勿論、何より一番の心配事はナミのことだったんだけど。きっと竜崎たちは、あたしが来ると色々面倒だから、とでも思っただろうけどさ。

ぶすつとした声で携帯越しに鼻白む未玲。確かにそうかもしれない。

『きっと大丈夫だから……』

何となく今回はそんな気がして、未玲をなだめるも、

「そんなわけじゃない！」

当たり前のように大切な旧友は、そう食い下がる。

「あんだ、この前一体どこに連れてかれたと思ってるの？水澤ひとみが入院してた病院でしょ……その水澤が何で参加リストに載ってるのよ！」

未玲はあたしから聞かされてた。あの水澤ひとみが昏睡状態にあったってこと。勿論、それからすれば、一体どういう奇跡が起きて彼女が目覚めたのかって話になるのは当然だ。それについては、あたし自身だって未だに半信半疑なんだから。

でも、確かに水澤ひとみは目を覚ました。だって現に今こうしてここに、あたしのすぐ目の前にいる。未玲からのTELはすぐ切れた。勿論、あたしから聞き出した神社のある場所へ赴くためだ。

未玲、今回は本当に大丈夫だよ。だってあたしは、彼（と彼女……）を守らなくちゃいけないんだから。

……不思議にそんな気がする。例えあたし自身が、何かに飲み込まれていくのだとしても。邪も聖も一緒くたになって混沌とした、果てしない闇に吸い込まれていくのだとしても。そう、あたしだけは……。

『——大丈夫だよ』

*

都内の一角にある、大きくも小さくもない、とある神社。さすが天皇家の祭神だけあって天照大神を祀る神社は数多い。その総本山

は伊勢神宮である。その全国各地にある、珍しくもない平凡な神社のうちの一つ。なのに、どうしてこんなに緊張するんだろう。まるで、何かに呼ばれているみたい……。

朱塗りの鳥居を潜って境内に入ると、そこはもう一種の聖域だ。別にちつとも珍しくない、本当にどこにでもある神社の風景。鬱蒼とした小さな鎮守の杜^{もり}。社殿まで続く参道の脇で静かな水音を立てる手水舎。玉砂利が敷き詰められた地面を踏みしめるだけで、何となく、心持ち精神が改まり清められる。

時折聞こえる、雄鶏の声。静まり返った辺りに染み渡るように、午前中の朝の空気を震わせるように。

そこに集う男女5人。竜崎、円城寺、あたしと篠崎氏、そして水澤ひとみ。と、数名スタッフ。何やら神妙な空気に合わせ、誰もが口を閉ざして静まり返っているのが何だかおかしい。予め用意してあったのか、「ルミナスコード緋の記憶」と筆で書かれた札が、いかにも霊験あらたかそうな風情で、両側に置かれた御神酒と榊の葉枝とともに祭壇に祀られている。

「水澤君の調子は大丈夫なのか……？」

ふと竜崎が皆に聞こえぬよう、小声で円城寺に訊ねる。

「ええ。本調子に回復するまでには、もう少し時間が必要でしょうけど」

「……にしても。よく話を合わせられたものだな」

水澤、篠崎両名の隣でかしまる、あたし伊勢崎ナミを見て竜崎は無表情の半笑いを顔に貼り付かせた。

「水澤さんと篠崎君の件に比べれば、お安い御用ですよ」

確かに。彼女はこれまでと同様、大いに疑問を差し挟んでもよいような状況下の中、それでも一切を拒否するような素振りは見せなかった。まあつまるところ、それが出来ないような何かの引力が働いているということなのかどうか。それはともかく、水澤と篠崎の二人の方が、よほど危ういといえは危うい。

何しろ既に「抜け殻」と化していることも知らず、彼は彼女が何一つ変わらぬ姿で帰って来たと信じて疑わずにいるのだから。そもそもそれが、“彼女”が傍にいるおかげだとは露知らず。つまり、このまま彼と彼女の間柄を無事に存続させるためには、“彼女”の存在が不可欠、ということになる。まあそのうち……本末転倒と言っては何だが――彼は彼女ではなく“彼女”を選ぶことになるのだが――。

彼女のことを信じて疑わない彼のすぐ横で、自分たちは、なんていう企てをしているのかと正直この身を疑う。だが……。

そう言えば、そうだったな。アマテラスも、そしてその産みの親のイザナギ、そしてイザナミも皆が皆、龍蛇だった。そのおぞましい祭神を祀った、神聖という皮を被ったこの祠へ参っている時点で……。

腹の底から、どこからともなく湧き上がって来る、黒々とした嗟い。人というのは一度壊れてしまうと、どうしようもなく残酷になるものだな……そう内心で思いながら、どことなく絶望にも似た心持ちで左手に並ぶ三人の若い男女を舐めるように一瞥する。

「ひと……水澤さん、こちらは今回御一緒させて頂く、伊勢崎ナミ

さん」

篠崎氏が紹介すると、水澤ひとみは小首を傾げる様にして、あたしに視線をやった。その眸は確かに光を宿し、以前と変わらぬ微笑を口元に浮かべると、こんにちは。と、徐に小さく口を開いた。

でも、何かが変だ。輝くような若さと美しさは以前と何ら変わらない。でも――。

なんだか異様な空気が彼女を取り巻いている。きっとそう感じているのは、あたしだけじゃない。隣で何となく落ちつかない、どこことなく不安げな表情をしている篠崎氏がいる。ひとみさん、きっと彼女が心配でたまらないんだ。だけど……。

あたしは、彼女から彼を奪わなければならない。彼女を媒介として彼と繋がって、その向こうに続く誰かへの道を開くために。

え？　今、誰かが何か言った？　――あたしの中で、誰かが囁いた気がして、ふと身震いする。

でも、大丈夫。きっと大丈夫。もう一人の誰かが、あたしの中で囁く。何だか“あたし”という核を通じて、あたしの中で誰かと誰かが言い合っているみたいだ。

相変わらず水澤ひとみは、妖しい微笑を前方に傾けている。誰も見ない、何も見ていない、虚ろなその眸。

――嘘だ……！

『伊勢崎さんがルミナスのファンでよかった』

『作品を理解してくれる人が一緒に御参りしてくれて……』

自分が発した一言一言に微妙な嘘が混じっている気がして、人知れず思わず頭^{かぶり}を振る。

伊勢崎さんは、今日ここに来るべきじゃなかった。なのに、一体何を怖れている。そうだ、何かを怖れているから、監督に言われるまま、今日僕はここへ来てしまった。彼女だって……そう、ひとみも。

ひとみ？ 目の前にいる彼女は一体誰なんだ。確かにひとみは以前と変わらぬ様子で僕の傍に戻ってきた。だけど……。だけど、彼女はひとみであって、ひとみじゃない。不思議とそう感じるんだ。どうして。どうして自分は彼女、伊勢崎さんに偽りの微笑みを浮かべる。どうして、何事もなく接していられる。どうして、彼女を今日この場に居合わせた。どうして……。

落ち着きのない奇妙な疑問ばかりが、ぐるぐると脳裏を巡る。俺はただの一声優。そう、ただの。

そうであれば、どんなにか、よかったか。

『——あなたは、選ばれた人間なのよ』……そう、ルミナスに。

ルミナス？ 誰だ、一体誰なんだ。

そう問うたところで、誰も答えてくれはしない。マイク前で台本を構えた途端、“アイツ”が降臨する、ただそれだけだ。そして、いつしか自分は自分でなくなる。それが半年間続いて、そして……ヒロイン金城瑠美那を演じた水澤ひとみは、自分の前から姿を消し

た。

それなのに今こうして、二人は再び出逢った。ルミナスコードという悪夢の作品を介して。

*

タクシーを拾って、急ぎ“その神社”へ向かう。

どうにも解せないことばかりだが、今回もやっぱりおかしいと思った。何しろ昏睡状態にあった水澤ひとみ。その話が本当なら、一体どうやって彼女はそんな植物状態から目を覚ましたっていうんだろう。そしてそこへ案の定、何の脈絡もなく参加させられるナミ。しかも、今回はあたしに一言もなく。ただの御祓いの儀式なら別に何だっていい。だが、作品が作品だ。ルミナスコード——やっぱり何もかもが、どこもかしこも怪しすぎるよ。

釣り銭を貰うのもどうかしく、あたしは車を降りた。未玲、来ちゃダメだ。正直、携帯で話した時、ナミは心のどこかでそう言っていた気がする。だけど、黙って見てられない。ナミがルミナスに関わること自体、絶対におかしい。

なのに、どうして……毎度のことながら、そう思う。どうして、あたしたちは結局この作品のクビキから抜け出られないんだろう。あたし自身、断ろうと思えば断れた。でも……。それにナミだって……逃げようと思えば逃げられた？ 違う！ ナミは「逃げられない」んだ。少なくともそう思う。——だからあたしも、逃げない。逃げることは決してできない。

鬱蒼とした鎮守の杜の手前に立つ神社の拝殿が見えてくる。玉砂

利を蹴り、鳥居を潜り。すると、神妙な空気を震わせるような祝詞の声が聞こえてくる。どうやら、もう始まっているらしい。

ハアハアと息を切らして、祭殿の前に立ち並ぶ皆の背後に立ち止まるも、静まり返って神主の唱える祝詞に耳を澄ます皆には聞こえていないようだ。差し当たって何の異常も見受けられない。本当にただの御祓いの儀式なのか。

ふとその気配に気付いた円城寺が、ちらと一瞥を未玲に投げるも、何事もなかったように再び目を閉じる。しばらく未玲は一部始終を静観することにして、呼吸の激しさが収まるのを一人待った。

ルミナスコード、か。アマテラスという幻の国から降臨した、光の守護神。ルミナスはそういう設定だ。で、沈没した日本は古の神の名イザナギと名前を変え、その繁栄の場であった陸を失った代わりにドーム都市を築くことで、海を拠点とした海洋国家となった。

まあ、よくあるアニメ的設定——そもそも日本列島は金輪際沈没する気配はないし、地球規模の巨大地殻変動でも起こらない限り、世界地図も決して描き変わらない。だからこそ面白いとも言える。決してありえないことにこそ、人の心は動くものだ。だから、想像力を掻き立てるアニメの世界は面白いんだ。

あたしもナミも、きっとその夢の世界で遊ぶことに無意識に取り込まれていた。そう、現実という灰色の砂漠の海を忘れるために。

だけど、だけど、さ……「現実を忘れて」何が楽しい。あたしたちは、その現実の住人だよ。よくも悪くも。そのことに気付くのにもう少し遅れていたら、きっとあたしたちは。

一通り祝詞を終えると、神主はお決まりのようにシャッシャと手にした榊を祭殿の前で振って皆に一礼をする。

「天照大神の名の下に、ルミナスコード第二期、くれないミラージュ緋の記憶が無事完成、放送されますことを祈願いたしまして……」

そう不器用に番組名とともに放送祈願が奉納された。何のことはない、ありていな御祓い。そして一同に配られる御神酒。おみきあまり酒に強い方ではないあたしは（むしろ下戸）日本酒のアルコール分を飲み干す瞬間、独特の熱さを喉に感じた。

ああ、これってもしかしたら、ルミナスと誓約する時の感じにちよつと似てるのかな……そういう妙な熱っぱさ。アルコールは確かに液体だけど、瑠美那がルミナスに触れた瞬間感じた、いわゆるあの絶頂感つてのは、つまり酒に酔った時の妙な陶酔感に似てるのかもしれない。たいして酒も飲めないあたしが言えることじゃないけど。

少しそんなことをぼんやり思い、少量の御神酒を飲み干したあと、空になった小さな杯を下げようとすると――、えっ？ 突然目眩に襲われ、ふらつとその場に倒れかかる。

「あぶないっ」

すかさず、隣にいた篠崎氏に支えられ、あたしははっと我に返った。

「大丈夫？」

「あ、はい……すみません」

こんな少しの酒で酔うなんて、さすがに恥ずかしい。それに何だか傍らの篠崎氏がやけに眩しく感じられて、あたしの頬は心ならずも熱を帯びる。でも、それを背後に立ち尽くす未玲に見られているのを知った途端、あたしは再び我に返った。

「未玲……」

「ナミ！ さ、帰ろ——」

言うが早いか、未玲はあたしの腕を引つ掴んで、さっさと歩き出した。まるで篠崎氏から、あたしを奪い返すみたい。でも、それはこれまでの文脈からすれば、少し違っていた。むしろ奪い返したのは、竜崎と円城寺からなのに。そんなあたしと未玲の様子を柱の陰から眺めながら、円城寺がくすつと笑ったのにも、あたしたちは気付かなかった。

*

彼女は一体……。

彼女、伊勢崎ナミと別れてタクシーを拾い、ひとみを連れて乗り込むと、途端にひとみはぐったりして目を閉じてしまった。彼女はちよつと持病を持つてるの。あまり連れ回さないで、そのままおとなしく自宅へ帰してちょうだい。持病？ そんな事実^{はなし}今まで一度も聞いたことないぞ。そう思いながら、円城寺のひんやりした視線に震えが走るのを感じた。

一瞬、一瞬だけど、何かを感じた。それも、目が合う度に感じる何か。僕が言うのもなんだが、別に取り立てて何かの取り柄がある

わけでもない、ただの同年代の女の子だ。それも普通の。そんな子がどうして……。

平たく言えば、ただのルミナスファン。要するにアニメオタク、ってやつか。最初に会った時は眼鏡を掛けていたけど、今日は掛けてなかったな。結構、可愛い、かもな。

——俺は何を考えてるんだ？ハツとして思わず我に返る。自分と彼女は、ただルミナスという軸を介して出合ったただけだ。それも、向こう側とこちら側に分かれた……受け手と送り手、それ以上に。傍から見れば、要するに有名人と一般人ってやつか。

ただ、それだけの関係で終わるはずが——いや、関係も何も彼女とは金輪際……それなのに。ひとみという枷を嵌められながら、それでも嵌ってしまう。それもこれもすべて“ルミナス”が仕組んだことだなんて。そのことに気付くのは、もう少し後になるのだが。

伊勢崎ナミ……まるで、冥界に隠れたイザナミの呪いみたいだ。

*

なんだか一瞬、燃えるような熱さを全身に感じた。

何となくこれって既視感がある。いや、そういうのともちよつと違うけど。そうだ——人魚姫が人間の姿を手に入れるために、魔女に自分の声をあげるのと引き換えに貰った毒薬を飲み干す場面。ただ陸の王国に住む、憧れの王子に逢うためだけに。

あの話は子供ながらにちよつと来た。でも、どう考えてもこれって、子供に話して聞かせる童話じゃないよ。そういうどうにも妙な、

そう、いわゆる官能的なやらしさを感じた。どう考えてもエロいつて……。上半身裸の人魚姫がっていう意味も勿論あったけど。自身のを捨てて捧げた、彼への想い。憧れの王子様、か。まったくそういうものにはとんと縁がありませんな。そう思いつつ、昼間の篠崎氏が脳裏に映って少し焦る。

……人魚姫は地上へ王子に会いに行くために声を失った。声を失ったのは、水澤ひとみか。違う？彼女は再びよみがえった。声も演技も再び元通りになって……。だけど。彼女が本当に逢いたいのは、篠崎氏なの？それとも……。ルミナス。

そんな風に内心で話題を逸らしながら、あたしは気付いてなかった。本物の人魚姫はあたし自身だってこと。そして決して届かない世界にいる王子様は、篠崎聡己……。？それとも、本当の恋人たちを下界に残して、あたしが昇る天上で待っているのは――。

なんて切ない物語なんだろうって泣いてしまった幼い子供だったあたしには、そんなこと知る由もなかったんだ。

*

.....

.....

.....

—— 瑠美那…… 瑠美那。

目を覚ませ、瑠美那。

え？ 聞こって……。

——お前は生まれ変わったのだ。

私と一つになり、新たな命を取り込んだ。

——だから、もう泣くな。お前の泣き顔はみたくない……。

ルミナス……。

——もう、誰にも渡さない。地上の人間にも、闇の支配者にも。

さあ、今こそ新たななる世界を、私とともに。

『——メタモルフォーゼの刻^{とき}を』

誰かが呼んでる。でもその声は、すぐに途絶えて消えた。

あれから、あたしは一体どうしたんだろう。確かルミナスと、そしてカグツチと出会ったあの島の浜辺で。……空と海から、たくさん何かをやってきて、そして。エメラルド色の無数の光線がカグツチを貫いた。それから先は、何も覚えていない。ただ、ルミナスが怒りの焰を手にした矛先に変えて。辺り構わず焼き尽くしたことだけは覚えている。ダメ、ダメだよ——そう何度も叫んだのに、苦しくて悲しくて、その人たちの痛みの分だけ嘆き哀しんだのに。

やめて……ルミナス……お願い、もう……やめて。

あたしは、こんなことのために、貴方と出遭ったんじゃない。こんなことのために……。

でも、我を忘れた龍神は、強引に嫌がるあたしを。

そんな乱暴なキスでも、やっぱり受け入れてしまっ、あたしの中の誰か。

あなたは誰？　あなたは……イザナミ……？

*

その“少年”は、ずっとそこにいた。

そう、かつてこの超大国ガイアが新たな国としての姿を形作る以前から——少年は人身御供として、この国を支配する使命を負わされた生きた神そのものであった。その光り輝く銀髪から「白の光」^{メシア}と称され人々から崇められていた。実質ガイアを秘密裏に支配するギルガメシュ財団、その奥深くに人目を忍ぶよう幽閉されているように見えながら、それでも世界がかつてと変わらぬ姿を保っている。それは、その先を見通す神秘の千里眼があつたからとも言われている。そう……まるで大天使ミカエルのように、少年は歳を取ることもなく下界の人々を見守っているのだ。

『リヒテル——、』

クリスタルパレス

水晶宮の心臓部から、そう声が響いた。

「……は、デユナム様」

『もうすぐ“彼”が来る——いや、今はまだ目覚めたといった方が正しいかな』

少年に仕える神官である白金の髪を聖布で覆った碧眼の男は、遙かな過去から伝わるような少年の妙なる声に耳を^{そばた}敬てる。

『黒の光……そう、もう一人のメシアが』

「龍神、ともワイズ博士は言っておられました」

この私と共に世界の光と闇、その双宮を統べる存在——いや、彼は私を滅ぼしに来るのかもしれない。

その言葉を聴いてリヒテルは微かに眉を顰める。

「双子……まさか御身と対となる存在なのですか？」

『そうだね。けれどもっと苛烈な運命を背負い、すべてを黒曜石の如く艶やかなる闇に導く王だ』

神と王、その二つはどちらもが至高なる存在。けれど無なるものが実体を持つことで、すべてを凌駕する力を手に入れる……。

「ふふ、楽しみだよ。闇の皇子^{ヴェリエル}」

ガイアが再びこの世界を安定へと導いたのは、まさにその高度な科学技術によるところが大きい。無論それは崩壊する以前の前時代から引き継がれ、保たれたものであったが、実質それ以上の何かがあったことは事実である。そうでなければ、世界は再び歩みを始めることを出来なかった。まるでこの世のものとは思えぬ、天高く聖都に聳えるセントラルタワーにしても、広大な全土をあまねく繋ぐネットワーク機能にしても。ライフラインは完璧に敷かれ、政治経済など社会機構は整然とし、かつてのコンピューター社会以上の全能なる力が随所に満ち満ちていた。機械はいつか壊れる。だが生命は無限である。そう、例えば一度死に滅びに瀕したとしても、再び生まれ変わる力を持っている。

だから必要なのだ。その永遠ともいえる再生の力を持つ生命の力が。

かつての人間社会が、その行き過ぎた消費経済の発展のうちに、いつしか疲弊し、最後には見えざる手によって葬られたように。いつの日か終わりを来る未来ではなく、未来永劫続く真の理想社会を築くために。それを人はユートピアと呼ぶのだろうか。

だが“少年”は、それを壊しにやってくる。何のために？ かつてなくした双児の片割れを取り戻すために——それは彼であって彼ではない、太陽と月がこの地上で二元的観点から、人々から迎えられたように。本当は彼方に存在する天球の星々こそが唯一の神であるのに。その唯一神、北極星が、どこにあっても……。

かつて世界の裏社会を支配したといわれるイルミナティの秘密結

社。その血脈がギルガメシュ財団の先駆けとも噂されている。大地の地母神ガイア。それに対し、龍神に守られ海を統べる海人族。人類の発祥、始祖とも考えられているメソポタミアはバビロンの地に興ったシュメール文明は、まさに天と海とを崇めた太古の文明であった。古代シュメール神話の海の神ティアマトは、その語が転じて倭となったのか。そう、それはかつての日本、イザナギである。シュメールとは、すなわちスメル、スメラミコトの語源となったとの説もある。

世界のはじまりが、かつて全てひとつでなかったという証拠はない。むしろそうであつた可能性の方が高い。ガイアもイザナギ（日本）も、もしかしたら、その起源は一つ処に集約されるのかもしれない。神が創つた人間の社会。シュメール「崇高なるもの」という語源が意味するものは……。

かつて世界の主権を握っていた米合衆国が解体し、国連がその意味を成さなくなり、人種の坩堝と化した混沌の大地を再び一つの連合国家にまとめ上げたのは、まさに神の力なくしてはありえなかった。それが人智を超えた存在でなかったなどと言えるだろうか。例えば軍事専制国家として未だ混乱の収まらぬ世界をその手の内に力で支配していたとしても。

*

『人々は自由という名の鳥籠の中に飼われていた方が幸せなのだよ』
——かつてギルガメシュ財団を束ねていた元老院メンバーであつた父が言っていた。

確かにそうだ。秩序という名の檻がなければ、途端に世界は瓦解す

る。法がなければ欲望という欲望があたりかまわず跋扈し、人類の社会秩序が乱される。その当たり前の囲いなければ、人間は人間としての理性と尊厳を見失う。だが何かがおかしい。

リヒテルは、先日のイザナギは奄美諸島近海の孤島で起こった戦闘により、拉致されたテロ組織パルジャミヤの若き首領の言葉を思い出していた。

『我々は決して屈しない——我らが神ナーガラージャの加護の元、その光の奇蹟が指し示す限り……！』

半ば傷ついた身で……そして大半の仲間を、あの容赦ない龍神が放つ焰火によって失いながら。確かに最初に砲火を発したのは、我が軍の方ではあったのだが。だが、あのアグニという首領の放つ異様な眼光に胸騒ぎを覚える。

デユナム様……。

イザナギも、そしてパルジャミヤの母国であるインディアナ共和国も、同様の神を崇めている。ただその名と姿形が変化しただけで、実は元は一つだったのではないか。それこそが命の源であるところの龍蛇の神。かつて大地母神ガイアの怒りが沈めた幻の大陸と、再びこの地に集い大国を興した神秘の光。——数年前にイザナギ——日本列島を沈めた原因不明の大地殻変動。それは再びガイアの鉄槌がこの地上に下されたことに他ならないのではないか。

それでも人は再び起き上がる。例え地球上が混乱し、人類の大半が失われたのだとしても。その復興を支えたのは、何よりこのガイアの科学技術なのだ。かつて科学と宗教は相反するものだった。しかしその実、両者は同じ目的のために存在していた。ガリレオ・ガ

リレイら中世ヨーロッパの科学者らは宗教によって神の名の下に弾圧された。だが今、神は自らが科学を用い、その全知全能の力で世界を治めている。ガイアの国家元首は確かに存在しているが、それもデユナム様の力によって操られているに過ぎない。

『——本当は彼でさえ、見えざる神によって操られているのかもしれない。』

ふとワイズ博士の発した言葉が脳裏に蘇り、リヒテルは頭を振った。そんなはずが……！ 彼にとって「白のメシア」は唯一絶対の存在であり、だからこそこの身を財団に、国のために捧げたのだ。例え聖なる少年が出自の知れない、まるで天使そのものの実体を持つため者のようであったとしても。

*

「ねえ、待ってよデユナン！」

少女は、ようやく追いついた少年の背を呼びとめた。

「お前は……確かリリアン・パステイム……だったか」

「だったか、じゃないわよ。転校生に同じ班の班長のあたしが校内を案内するのは当然でしょ？」

なのに、さっさと一人で行ってしまつて——、リリアンはそこまですぐに言いかけて、待って！ それでも無視して行こうとする目の前の少年の手を取ろうとした。

「……触るな！」

触れかけた左手をさっと避けると、少年は低い声で静かに制止した。

「……っ」

少女は思わずその手を引つ込める。

「——すまない。一つだけ教えてくれ」

デュナンと呼ばれた少年は、一瞬凍りついたように黙り込んだ少女に謝ると、ある場所を尋ねた。

「大学の教授棟は、どこだ？」

＊

アマテラス・ドームの中心地に位置する、トウキョウ市に校舎を構える天照大学付属学園、通称アマテラス校。そこはイザナギは勿論のこと、多くのガイアからの学生が通う文字通りのエリート校であった。ガイア人、すなわち白人であるブリティッシュには、類まれなる優秀な生徒が多かった。だからここでは、通常の授業は勿論のこと、普通の高校なら学ばないような、大学研究以上の高度な授業も多数行われていた。

リリアンは、見た目ブリティッシュでも、転向してきたばかりのデュナンは、何かと不慣れを感じていると思い親切心から、いや班長として当たり前のことをしようとしただけだった。

——でも、どことなく東洋系の顔立ちでもあるわね？

リリアンはデュナンの少々迷惑そうな仏頂面を思い返していた。デュナン・リトラス。何よ、人がせつかく……そこまで思って、先程のデュナンの瞳に一瞬走った氷のように鋭い光を思い出して、理由もわからず身震いする自分を不思議に思った。

「でも、教授棟に一体何の用があるのかしら？」

ふと呟いてから、竜堂教授に提出する物理学の授業の提出物があったことを思い出す。

*

やはりエリート校として名を馳せる天照大学の付属高、それも中心基地とも言えるアマテラス校のエリートアカデミー科だけあって、いくつもの棟に分かれた立派な校舎が林立する広い校内が続く。その広大な敷地内で、たった一人の教授を探し出すのは困難に思えた。ただでさえ忙しい身の有名大学教授だ。幾つかのクラスの授業が終わってからも、自身の研究対象における研究目的で執務室に籠ることもあれば、大学図書館を徘徊したり、教授同士の研究会などの会合に出席したりすることもある。

だが――。

デュナンは独特の鋭い勘によって――実際はそうではないのだが――、半ば閑散とした放課後の広い校内を、まるで海洋の中に紛れた一滴を探し出すイルカのように黙って泳いでいく。

『リリアン・パステイム……あの女……彼女は使えそうだな』

そう胸の内で念じると、ダメ！そう、消え入りそうな、もう一つの声が木霊する。

『――大丈夫だ、悪いようにはしない』

それでも、少年の中の“少女”の心は不安だった。

……ダメ、ダメよ。もう誰も傷つけないで……。

*

「——お願い、もう誰も傷つけないで……！」

不意に響く、その半ば泣き叫ぶような声にビクッと身を起こす。睦月は、ずっと放心したままだった一人の少女を共に連れ帰ったことを思い出した。

あの島で唯一生き残ったキリアン部隊に所属していた睦月真吾。捕虜として拘束したパルジャミヤの頭領と、その数名の手下達。おそらく銃殺刑は免れないだろうものを生かしておく選択を取った上層部の判断を不審に思いながら、それでも、心のどこかでほっとしていた自分がいた。

「お願い……ルミナス……」

ルミナスって一体誰のことだ？ 龍神と共にいた少女、金城瑠美那。自分は隊長から、彼女の身柄の保護と監視を命じられた。それだけに緊張は高まる。しかし。見たところ同じ年のようだしな——、そう言って茶目っ気のある笑いを含んだキリアンの瞳に、冗談きついつすよ。と思いながら、本当はどことなく興味があつたのは事実だ。

“龍神”のことなのか、ルミナスって。僅かに伝えられていた情報では、龍蛇、龍神は光り輝く神でもあると聞く。実際は霊体、アストラル体が実体を持ったものなのだろうが、それをルミナスと呼ぶ少女、金城瑠美那。

島の片隅で発見された時、彼女の瞳は涙で濡れていた。こんな可愛い子を泣かすやつは、まったくヒトデナシだな。そう胸の内で咳いてから、相手が人でなかったことを思い出す。……なのに、どうして。どうして彼女は、それほどまでに悲しんでいたのだろうか。

おそらく、そこまで精神を侵されてしまうほど、龍神の少女は禁忌の神に文字通り魂を吸い取られてしまっていたのだ。キリアン隊長や上層部は多分そう判断するだろう。でも……。

睦月には、それだけであるとは到底思えなかった。

イオリゲルの母艦アステリウスは、明後日アマテラス・ドームに立ち寄る。最重要危険人物である、パルジャミヤの幹部を連行していることもあり、実際はそのまま本国へと帰還しなければならないのだが、諸々物資の補給と共に、傷ついた兵士達の一時移送や医療品の確保を隣接するツクヨミ・ドームで行わなければならなかった。さらに当然、D-2の整備もスサノオ・ドームにて事足りる。

それまでに“彼女”を落ち着かせたいところだが……。時折、真夜中に思い出したように泣き叫ぶ以外、彼女・金城瑠美那は、何か言葉を掛けても何も応じる気配もなく、ただ力タカタと身を震わせらばかりだった。……可哀想に。

「君はどうしてあの島にいたの？」——当然そう訊ねても答えはない。

睦月は上から命じられていた一切の尋問を一時やめることにした。無理に訊き出そうとしても、きつと無駄だ。それはキリアン隊長も了解してくれるはずである。それよりも、心を覆っている悲しみの感情と恐怖心を取り除く方が先決だ。

そつと毛布で冷えた身体を包み、ホットミルクの注がれたマグカップを差し出す。

「大丈夫。心配しなくても大丈夫だよ」

そんなことを言っても、せん無いことは重々承知の上だった。それでも閉じていた心が次第に光を取り戻し、開いていく。それを確信しているのは、やはり彼がデュナミスのエリート部隊であるイオリゲルの一員だからか。

……どうしてだろうな。なぜだか君とはどこかで会っていたような気がする。そう心で呟くと、少女の^{とび}鳶色の瞳が不意に見開かれる。

「初めまして、僕は睦月真吾。あらためまして、金城瑠美那さん」

そう初めて自己紹介すると、俄かに少女の唇が動くのが分かった。

「睦月……真吾」

そう、そうだよ。特に失語症にかかっていたわけでもないけれど、初めてこうして向き合って言葉を交わせたような気がする。何より睦月の温かい人柄と穏やかな優しさに満ちた瞳が、彼女を^{まほろし}幻影の牢獄から救い出したのかもしれない。でも。

「ルミナス……」

相変わらず彼女は時折、その名を呟いた。そんなにアイツのことが好きなのか。そんなわけもないだろうに、不思議と睦月はその“ルミナス”とやらの嫉妬する自分をいつしか発見していた。

“その瞬間”少女は、「もう一人の自分」に意識を明け渡しってしまった。でもそれは、心の奥深くで心底彼を信じていたからだ。そう……もう一人の自分。大丈夫、大丈夫だよ。——誰かがどこかでそう囁いた。それは鏡の向こうから響いてくる声のように、この世界に新たな熱い息吹を吹き込む。例えこの世界が仮初の映し鏡なのだとしても。

「……ルミナス」

絶望と希望が交錯する。それはまさに光と闇。手を伸ばせば、すぐ届きそうなのに、この声を洩らして叫んだら答えてくれそうなのに。なのにその人は遠く微笑む。今もここにいる。この胸の中で、あたしを温めてくれてる。すぐ傍らで息づく、あたしの太陽神。ねえ、あの時の微笑みは嘘だったの？ 違う。あたしは今も彼を——ルミナス、あなたを。

ああ、父さん。

あたしが眠っている時は彼が。彼が眠っている時はあたしが。彼はあたしで、あたしは彼で。メタモルフォーゼ……一つになった、あたしとアイツ。でも、心と身体はもう、こんなに離れてしまった。だのにどうして、こんなにアイツを近くに感じるの。

その罪も罰も——背負った運命の重みまでも。

*

「瑠美那……瑠美那！」

ハッとして見上げると、開け放った部屋の扉の前に睦月が佇んで

いた。

「もうすぐアマテラスだよ。明日の朝には到着する予定だ」

——ごめんなさい。あたしはアマテラスには行けない。だって、あそこにはアイツが。

しかし、睦月は続けた。

「君はニライカナイの天照大付属高校に通っていたんだっただね。じゃ、ちょうどいい。実は僕の双子の弟がアマテラスドームの同じ高校に通っているんだ」

睦月は翌日、久しぶりに一日だけ休暇を取り、その弟に会いに行くのだという。

「勿論、追々君は沖縄に帰してあげるつもりだけど、色んな手続きが終わるまで、君をアマテラスの知人に預けようと思うんだ」

——いや、それはガイアの、イオリゲルの上層部が……、その言葉^{かぶり}を飲み込み、頭を振ると睦月は明るい笑顔を作った。

「大丈夫だよ、君もよく知っている人の知り合いだから」

“その人”が、伯父の島嶺黎司の知人——上司だと知るのは、もう少し経ってからのことだった。

「う……ん、ありがとう——睦月」

でも、あたしはもう少し、この人の側で過ごしていたかったな。何だかとても安らげる。そう、忘れられるものなら、忘れたかった。きつと睦月だったら。……この人だったら、あたしを果てしの

ない闇の呪縛から救い出してくれる。なんとなく、なんとなくそんな気がしたんだ。

*

その地下牢はコンピューターデバイスによって完全制御されていた。いや、本当はそんなものなど真の意味で必要なかったのかもしれない。なぜなら、ここはデユナミスのエリート部隊、イオリゲルの母艦内部であるからだ。アステリウス、怪物ミノタウロスの別名。怪物——彼らはまさに本能に支配された、人と獣の合いの子であるのかもしれない。

「くっ……！」

死なぬ程度に治療されたとはいえ、未だ血の滲む傷跡の残る身体が軋む。両手首を電子ロックの鎖で縛られたまま、海賊パルジャミヤの青年首領は唇を噛んだ。本当ならこのまま生き恥を晒すより、自ら舌を噛み切って自害するという選択も残されていたが、そんなことは己の心^{プライド}が許しはしない。——それは彼が母国インディアナ共和国の皇族出身であるばかりでなく——、そうだ、俺は生きねばならない、決して死んではならない。あの孤島の海で命を落とした多くの同胞達のためにも。

——そう、あなたは生きなければならない。

「……！ 誰だ！？」

ふと、脳裏に響いたその声にアグニは眸を見開いた。聞き覚えのある女の声だ。まさか……。不意に気丈な女剣士の厳しい眼差しが、瞼の裏側に蘇る。

そうだ、あの時俺はアイツを庇って。彼女はそのまま海に落ちた。少女とはいえ、よく鍛えられた身体は例え高波であろうとも、無事泳ぎきれはらずだ。そう信じたからこそ、アグニは潔く正面からこの傷を受けたのだ。

それはある意味で一つの“洗礼”であるのかもしれない。例え俺が捕らえられたとしても、ヴァルナと、そして残された仲間達が必ずやパルジャミヤを立て直す。それより、あの龍神は——光と闇の交差する場所で輝く、あれはまさにナーガラージャ……。

そうだ、俺は生きねばならない！ この鎖の拘束が解かれるものなら、今すぐにでも……！
今すぐ。あの龍神が導く光に手を伸ばす。

*

掌にずっしりとした重みが伝わる。クロエはその神剣の重みを改めて胸に刻んだ。それはあの時も、そして今も同じだ。この心に刻まれた想いは変わらない。例え忠誠心という言葉に固く隠されていたとしても。“アイツ”はきっとここにいて、ならば。

例えカグツチが傷ついたとしても、かの人のプライドは傷つかない。いや、それどころか、怒りという名の紅蓮の焰が地上という地上を焼き尽くすだろう。だが、そのために彼らを犠牲にしてしまった。その償い——と呼ぶには、あまりにも傲慢だが。そう、私は必ずや彼を救い出す。

……待っていてください、クスヒ様。いいえ——、
ぐつと飲み込んだ言葉に、喉元が不意にツンとした痛みを伴い一瞬啼いた。

＊

あの神の孤島^{しま}で再び合いまみえた時、アイツは心を失っていた。
メタモルフオーゼ。“奪われた”のだ。

「立て！」

そう声をかけ叱咤した。決して自分を見失ってはならない。己の裡に眠る日の光を。それは、かの人^{ひと}に心奪われた少女自身を呪ったからではない。もう同じ過ちを犯してはならない。ただそのために私はクスヒ様を。かの人の辛苦を理解できるなどという、おこがましさは持たない。だが。

神と人間。その不条理極まる次元の壁を超えて……かの人^{ひと}は神代の娘を見出し、神代の娘はかの人^{ひと}と——、その強固な絆は決して事切れることはないのだ——だから。

お前は立ち上がれ……！

世界を両断する使命を帯びた、パルジャミヤの頭が救ってくれたこの身で波を掻き分け岸を目指したのは、かの人^{ひと}を目指したからではない。必ず伝えねばならない。“お前”は生かされている、そう今も生きていることを。龍神の娘ならば、そのことに気付くはずだ。いや、それは生きる者すべての至上命題といってもいい。例えクスヒ様の魂が離れても。依代の力で新たな肉体に分離したとしても。誓約の儀式を終えた者は常にその心身と共にある。

クロエ——か。仮初のこの名はアイツの父が付けてくれた名だ。
例えあの無人島^{しま}で初めて出会った時名乗ったとしても、アイツに何

か分かっただろうか。……そんなはずはない。それでも。

「ルミナス……」

ふっ——神々しい、美しい名だ。

うわ言のようにそう呟き続ける、既にあの方のものとなった少女の唇に、ふと嫉妬した。

「ねえ、睦月の弟さんって」

本当に双子なんだ、睦月の部屋のチェストの上に何気なく飾られた二人並んで映っているフォトスタンドを見て、あたしは感嘆の声を上げる。

「あはは、改めて言われると恥ずかしいな」

「あたし一人っ子だから。だから、何だか羨ましくって」

ああ、そっか……ごめん。つい声のトーンを落とす睦月にあたしは、

「や、やだなあ——」

思わず気まずそうに笑って誤魔化した。

でも、羨ましい。そう思ったのは事実だ。ほんとう母親手一つで育ったあたしには、にぎやかな兄弟や家族の温もりそのものが、やけに眩しく思える。きっと睦月の家族はあたたかい人たちなのね、そう呟くと、

「うん。正確には“だった”——」

あ……。背を向けたその背中が、微かに震えているのにあたしは気付く。

「君と同じに僕も例の地殻変動以来の混乱でね、色々あって今は弟の諒牙リョウガと二人きりさ」

そうか。この人もその家族も、あの天変地異の犠牲者の一人なんだ。当たり前のようなその事実、ふと胸が痛んだ。

「あたしこそ、ごめん……」

「はは。君こそ、やだなあ」

お互い様だね、そう言つて二人して、くすりと小さく笑つた。

だけど、あたしにとってそれは決して人事ではなかった。そう、ただ同じ境遇の身であると当然のように励まし合えたら、どんなにいいか。だけど「あたしは違う」。だって、あの天変地異は、ルミナスが……違う！　だけど、ねえ、神人ってなに？　答えてよ、ルミナス。今は返事があるはずもない、その名をまた何度目か胸で虚しく呟く。

こんな風に親しげに話している間も、睦月の心には嫌な罪悪感が付き纏つていた。本当は自分が彼女の保護と身の回りの世話兼話し相手役を命じられたのは。それは彼女が「龍神の少女」であるからに他ならない。おそらくアマテラスに到着してから、彼女は――。

「監視の籠の鳥」……それどころか酷ければ、軟禁されてしまう可能性もなくはない。文字通りガイアという国の、それ自体がもしかしたら宿命なのかもしれない。自分がイオリゲル隊に入隊したのだから、ただ弟を普通に学校に通わせるため。それに何より自分たち兄弟が生きたためだ。実は諒牙自身にも、兄と同じくイオリゲルに入りたいという夢があるようだが、兄である睦月自身は、それ自体を感じしない。こんな危険な職業しごとできれば、弟にはさせたくない。

元はイザナギの、日本人である彼がガイアの軍に従事しているのは、そういった様々な理由からだったのだが、元来がイザナギ自体ガイアの庇護がなければ、ここまで復興できたかどうか。むしろ世界中には今も混乱が長引く国も少なくないというのに。龍神の少女への執着、それはそのままガイアのイザナギへの執着にも思えた。

とにかく睦月に課せられた使命は彼女、金城瑠美那から龍神に関する何らかの情報を引き出すことなのだ。本来ならイオリゲルのメンバーである彼にとって、それは朝飯前のはずだった。しかし、こと彼女に関しては全てが無駄だった。そう、何か。障壁のようなものが彼女瑠美那の思考を読み取ることを阻止しているのだ。

それだけに同い年で話も合いそうな睦月が適任というわけである。つまり心を読むというよりは、心を通わせる――。そんな当たり前の単純な方法しか、こと彼女に対して有効な手段がなかった。だからこそ……内心、睦月の心は二つに引き裂かれるようだった。

――ごめん。本当なら、もし叶うなら、君とはこんな形で出会いたくなかった。それにできるのなら……君を救いたい、守りたい。このガイアという超大国から。そんな大それたことを心から願うほど、睦月はいつしか目の前の見たところ、平凡な少女に淡い想いを抱いていくのだった。

*

本当はあたしにだって何もかも解ってた。今あたしがいる、この艦^{ふね}の目的も、そして睦月がなぜ、あたしに優しいのかも。ただ今は彼に迷惑を掛けないようにと、おとなしくしてるけど。でも、それもいつまで続けられるの。いつまで、こんな穏やかな二人の時間が続くの。そんなわけない。事実全然そんな綺麗事じゃないんだってば。

いつかルミナスが言っていた、ガイアは諸悪の根源だという言葉が蘇る。じゃあ、睦月も？ でもルミナスの言葉が真実だっていう確信はあるの？ だってアイツは――父さんの仇。わからない、わからないよ……ねえ教えて。答えてよ、ルミナス。

そんなあたしの不安をよそに海は変わらず青く波打ち、冷たい潮風をこの頬に届ける。そういえば最初にルミナスと出逢ったのも、こんな潮風の吹く海だった。熱く、そして冷たい熱風。黒潮に乗りアステリウスは太平洋を北上し航行する。一七年前あたしが生まれた、アマテラスドームに向かって。

*

「うん、よかった……兄さんが無事で」
それだけ確かめられただけでも、諒牙にとっては大きな収穫だった。

“普通の学生”であるなら、当たり前前に携帯端末を使って会話するところだが、この睦月兄弟の場合は違っていた。そう、ただ念じるだけでお互いの思考が繋がるのだ。事実、睦月真吾の弟、睦月諒牙は次期イオリゲル候補生の最有力生徒だった。やはり双子である、ということも大きな要因なのだろうか。一卵性双生児は、それだけでいわゆるテレパシーのような能力を互いに持っているという。その上デュナミス特有の“想いの力”も強いとあれば。

「へえ、女の子、転校生？」

そのうち、そっちへ転入になると思うから、何かあったらよろしくな。そう兄が言うが早いか、諒牙はすかさず答えた。

「了解！そういえば最近、男子で見たところ東洋系だけど面白い転校生が入ってきたよ」

デュナン、デュナン・リトラス。奇しくも彼は諒牙と同室のルームメイトでもあった。天照大アマテラス・ハイスクールは全寮制高

校なのである。

*

リリアンはすっかり閑散とした放課後の校舎敷地内を、教授棟へ向かって急ぎ歩を進めた。もう二年生になるのに、相変わらずこの学校の広大さには辟易する。それにもうすっかり日は落ち、薄蒼い闇の帷が降りてこようという時刻である。

デユナンにこの場所を尋ねられて、すっかり失念していた竜堂教授への提出物があつたことを思い出した。それもこれも、当の彼が勝手な行動を――、そう思いながら先程のデユナンの厳しい視線を思い返す。

何だか、ただの高校生には見えないような……そんなこと。それくらいの高圧的な態度、全てを許さない強い威厳、のようなものを感じられ、リリアンは思わず身を震わせた。そういえば、あの感じって。デユナミスという不思議な力を使うと言われているイオリゲル。世界各地で勃発するテロや暴動などの鎮圧で大きな功績を収めているガイアの特務部隊。TVニュースくらいでしか聞いたことはないけど。もしかしたらデユナミスの有無を言わせぬ強い力って。

そんなことをぼんやり考えながら、既に所々電灯が付き始めた中庭を校舎の薄闇の降りた窓辺から眺めた。

「それにしても、デユナン――」

転入時の提出物の提出漏れでも何かあつたの？ でも、それって学生課じゃないのかしら。それとも、授業で解らないことでも……。

リリアンは彼のことが気になってしかたなかった。ちょっと無愛

想で怖いところはあるけど、別に嫌なやつってわけでもないし。むしろ、その風情が少々ミステリアスに映らないこともない。はは、そう思ってリリアンは思わず一人笑いして顔中を緩ませた。

どうでもいいけど、早く済ませて寄宿舎に帰ろうつと。

*

「ほう、金城瑠美那君が」

『ええ、来週にはそちらの転入手続きが取れるそうです』

資料が山と詰まれた薄暗い執務室にくぐもった男の声が木霊する。

「それにしても、よかつたじゃないか——というのが近親者へのせめてもの心遣いというものかな」

TELの相手は、ははっと笑うと受話器越しに小太りの中年男へ言葉を返した。

『どうなんでしょうね、何せ相手は“龍神様の御手付き”ですから』

そう、いつ何事を起こすかも解らない。とにかく相手は未知の神様である。そういう警戒もあつての特別措置なのだ。表向きは穩便に、だが常に監視の目を怠つてはならない。

「要するに巫女というところかな。憑依、シェイプ・シフト……そういう能力があるようだが」

だからイオリゲルですよ、そういうことには彼らは適任、というか他にいないんですけどね。まるで人事のように話す男に、執務室の中年男はふうと溜息をついた。

「やはり一年生だが、ここは睦月君に任せるべきか……なあ島嶺君」

この学校に彼女が転入してくる以上は、その適任者に対応を任せるべきだが、生憎と在校生にイオリゲルの正規隊員はいない。とすると、

『睦月諒牙。確か、睦月真吾の弟君でしたか。ここは伯父としても頼みます、というところですか?』

半分冗談交じりに、瑠美那の叔父である島嶺黎司がそう返す。本当なら、その龍神様とやらに一度御挨拶申し上げたいんだが……何せこちらの大切な姪を好き勝手に自分の嫁にしてくれちゃって。結果的にそちらにお世話になるってことで、竜堂教授にも御手数お掛けしますが。それを聞いて、ほっほっほ。竜堂は思わず福の神のような腹を揺すって笑った。

どちらにしても、この天照大には重要な研究室もある。それは考古学、物理学、生物学など、世界の真実を知る上で重要なポストを各セクションに配置していた。だから、それに付随するハイスケールも超一流のエリート校というわけだ。今やイザナギは、このアマテラスを中継地点とするガイアの要といってもいい。かつては要塞の用途も担っていた（当時は被災に際するそれが主だった建造目的だったのだが）。それだけに各ドームの護りは万全である。

今やイザナギは——ガイアは神にも匹敵する力を蓄えつつあった。いや、それは確かにそうかもしれない。何しろ超大国ガイアの陰の真の支配者は言葉通り“神”であるのかもしれない。『白のメシア』——噂に聞く生き神様である。

本来なら、白のメシアに関する詳細な情報流布は御法度に近かった。というより、何もかもが文字通り謎のヴェールに包まれている。つまり本国の首都である聖都中心部に鎮座する水晶宮にその謎は集約され隠されているのだが、それ自体が聖域であると同時に禁域だ。数年に一度の聖齋祭くらいしかメシア自身が御目見えすることはない。

「……すべてはギルガメシュ財団、そしてロベルト・ワイズ博士が真実を握ってるってことですかい」

竜堂とのTEL会話を終えて島嶺叔父は一人呟いた。

——あの銀狐め、一体何を考えていやがるんだか。だが、早急にコトを進めては元も子もない。今はおとなしくあちらに従っているのが得策である。どちらにしても、瑠美那はこのアマテラスに「戻って」くる。沖縄のお転婆娘も、おつかねえ生き神様の息がかかった御手上げってとこかな。まあ、御手柔らかに頼みますよ。

とにかくガイアの銀狐博士のスポークスマンの方は草薙女史に任せるとして——、差し当たっての問題は“コイツ”かな。

野生児をそのまま成長させたような浅黒い貌を歪ませながら、島嶺は目の前の一見して胎児のような勾玉状の赤黒い物体を一瞥した。

*

正直、信じられなかった。まさか自分が男の子になってしまうだなんて。

あの時、強引にルミナスに唇を奪われて、それから——。眩い強い光に再び包まれたと思ったら、またビリビリに服を引き裂かれる

夢幻^{ゆめ}を見て。そして気付いたら、此処にいた。

さらさらと乱雑に切り揃えた黒い髪。黒い詰襟の学生服。まるで喪服のような。そして……や、だ。元々そんなにある方じゃなかったけど、胸の膨らみがない。その代わりに薄付きながら付いた筋肉。加えて股間に携えた妙な違和感。まさか……あ、あたし！お、男の子になっちゃったの！？

——そんなに驚くな。

不意に鼓膜に響いた、その聞き覚えのある声に何故だか安堵する。ル、ルミナス、これって……。

——お前の本体は別にある。だから心配するな。

心配するなと言われても。なんだか自分の身体を好き勝手に弄繰り回されたようで、ちよつと嫌な感じ。それに……あたしはさつきまで泣いてたのよ……！やっぱり酷いよ。確かに貴方と誓約したけど。あたし……あたしは。

途端に抗議したい気持ちがあふれる。切なくて悲しい、だけど、だからこそ伝えたい何かに導かれた想い。が、くくっ——その低く響く笑い声を聞いて不意にビクツとなる。押し殺したような、何かを征服した悦びを隠しきれないような。そうだ、ついこの間までアంత呼ばわりしてたっていうのに。いつのまにか、アイツのペースに巻き込まれてる。

って、そういう次元の問題じゃない。あ……、んっ 何だかまた、変な気持ちになる。

——瑠美那。もう絶対に離さない。

そう耳元で低く囁かれてゾクツとする。……や。いや。

その否定の言葉は肯定だった。あたしの身体で何かが弾け駆け巡る。まるでトグロを巻いていた蛇が体内で一気に自由に泳ぎ始めたみたいだ。そう思った途端、意識を失った。

＊

デユナン・リトラス。無論、偽名と瞬時にでっちあげた架空のプロファイル。だが、そんなものでも容易に信じさせてしまうのが、“この力”の真髄のようだ。いや、そんなことはどうでもいい。肝心なのは、潜入したこの天照大で“あれ”を探し出すことだった。

我が祖国アマテラスより古くから伝わる力の源。要するに増幅装置。幻の最終兵器、オーパーツとも世の人間は呼んでいるようだ。その数は全部で十。十種とくさの神宝かむたから、とも言われている。その中でも三種の神器と呼ばれている、剣、鏡、そして勾玉たま。

剣と鏡は特に重要だが、さらに勾玉は、それらを起動させるために必須なのだ。つまり起動キー……そこまで脳裏で反芻して絶句する。いつ思い出したのだ、そのような重要な事柄まで。これがあるの力なのか。そして例の両頬を膨らませ怒った顔を思い出し、人知れず、ほくそ笑む。ルミナス——ふつ。本当に可愛いものだ。我が依代となる御神雛みかんなぎ、我が望みを叶えるに相応しい龍蛇の巫女よ。

デユナンとして行動している時、あいつは眠りに落ちる。そして我が身が鎮まる瞬間、あいつが目を覚ます。そうやって離れていながら相互に力を循環させるのだ。男や女などという性種の形態の違いは瑣末な問題だ。要は一つの生命として、どう躍動し活動し続け

るかだ。望むならば、デュナンとして覚醒し、活動している際のお前の肉体を愛撫してやってもいい。それで力が漲るならば、だ。

……まるで太陽と月だ。デュナンと瑠美那。ふと妙な符号に、いつしか望まぬ感傷に耽る。

いつしか世界は男と女に分かれた。それが人間という業だ。だが、そのうち体温を保ち、子宮で育つ哺乳類である人類は、いずれ滅びに瀕する。男性種の消失。しかし龍蛇であるならば、生命は未来永劫栄える。そのために――。

だが、一つだけ。絶対に二人はデュナンと瑠美那として出合ってはならない。対消滅、反物質エネルギー。その一瞬で世界が消滅し崩壊する。瑠美那、それだけは忘れるな。

*

『それほどまでに己の生まれ故郷に帰るのが怖いのか――』
――えっ？

そのナイフのように凜とした鋭利な声に思わず振り返る。でもまだ歳若い少女の声。それは耳に鼓膜に届くのではなく、直接心の中に響いてくるものだった。

「――こっちだ」

今度はちゃんと「声」として聞こえた。一瞬戸惑ったけれど、少ししてその声の主が、つい最近出会ったばかりの人のものであると悟る。声のする方へ顔を向ける。それは艦ふねの外、あたしのいる部屋の窓の外から聞こえた。小さな窓を開ける。

「あなたは……っ」

「また会ったな。いや、正確にはこれで三度目か」

かろうじて出来たパイプの出っ張りに手足を掛け、船体にようやくへばり付くようにして、その小柄な少女は笑いもしない無愛想な表情をあたしに向けた。

「お前に渡したいものがある」

そう言つて少女は手を差し出すように顎で促す。少女は腰に吊るしていた袋から、ある小さな石の塊を取り出し、石に付いていた皮の紐を啜えた。あたしの掌に転がるようにして収まった小さな緑色の石の塊。それは勾玉の形をしていた。エメラルド、いいえ翡翠、かな。

「クスヒ様——、いや。お前の呼ぶルミナスという御神を、これで」

突然のことに、あたしは何の反応も返せない。そう、この人はあの無人島で出会った女剣士だ。でも、なぜその人がこの艦ふねに、それになぜルミナスのことを知っているの——今なんて言った？　クスヒ？

「細かい説明はしてられない。私はこれからある人を救いに行かねばならない」

——それって、もしかして。唐突過ぎる話の中で、あたしはその存在に思い当たった。

「そつだ、その海賊の首領だ」

えっ。少女はあたしの心の声を読み取るように答えた。どうして――。
その心の裡の問いに答えることはされぬまま、少女の厳しい視線に捕えられる。

「忘れるな。お前があの方とともに居ることの真実を……」
呟くようにそれだけ告げると、少女の姿は視界から消えた。その眸に一瞬宿った光を、あたしは見逃さなかった。

そして掌に残された深い緑色の石塊。

*

——リユシフェラス・デユナム。
なんていう得体の知れない名前かしら？

ヴェルトーチェカ・アルマは思った。

あの「白いメシア」……色々怪しすぎると普通思っじゃない。ふっ——でも、あたしもその昔ベアトリーチェと呼ばれてたんだっけ。かの古典「神曲」の永遠の淑女にして魔女、ベアトリーチェ。魔女と悪魔、なんてお似合い……。

でも、彼女の中の沈黙が何かを赦さなかった。あいつは嫌い、嫌いだ。そう、ひとりぼっちは嫌だ。私からすべてを奪うものは――。

「……………」

ね、ヴェル！

「ヴェルったら、聞いてる？」

……だから、いい加減その呼び方は。静かだった水面が、いきなりざわつく。ヴェルトーチェカが一人辿っていた深い物思いから彼女を呼び戻したのは、相変わらず癪に障る甲高い少女の声だった。

「転入生のデュナンのことなんだけど、やっぱりあたしたちで何とかしてあげた方がいいと思うの」
そうか？

「ほら、彼つて見たところ色々難しそうじゃない。ただでさえワケありのこの学校に時期外れで転入してきたってこともだけど、彼つて性格的にも何となく難がありそう。クラスの皆に早く馴染んだ方が彼のためだと思うし」

それは要するに色々、ありがた迷惑と言うものじゃ……。

早口でまくし立てるリリアンを他所にヴェルトーチェカは、その無愛想な“ワケあり”の転入生の顔を思い出した。

「ねえ、そう思うでしょヴェル！」

沈黙は便利だ。この世の全ての厄介な問題を回避するには、それが最も早道……。な、そうだろ、“デュナン”。彼と似た静かなる面持ちに全てを隠し、その唇に歪んだ微笑みを浮かべて薄闇に沈む校舎を見つめる。

「リリアン」

「え？」

ヴェルトーチェカは、ふとこちらも無愛想な、何の表情も浮かべていない色白の自分の顔を自身で指差す。

「ルームメイト」

「……？」

うん、そうよね。あたしたち。

しかし何を言わんとしているのか、一向に察しの着かないリリアンを、頭はよいのに鈍い娘こ、と内心罵りながら、ヴェルターチェカは続けた。

「睦月……諒牙」

「え。睦月、君？」

あ、ああ。そっか！リリアンの突拍子のない声が放課後の教室に木霊する。

「そう、睦月君だったわね、彼のルームメイトって。確かに彼に頼むのが近道っていう気がするわ」

リリアンは一つ年下の天才次期イオリゲル候補生を思い浮かべながら思った。そう、彼ならきっと。やはりエリート能力者集団、イオリゲルの候補生だけあると言うべきなのか、それとも。諒牙のほんわりとした雰囲気、けれど、いかにも賢そうな聡明な瞳を思い出す。

でも心のどこかで、そればかりじゃない何かがきつと彼を……。そんな不思議な予感に立ち上る淡い期待にリリアンは思わず笑みを浮かべる。

「じゃ、早速」

「リリアン……？」

「何事も早い方がいいでしょ！ありがと、ヴェル」

そう言うが早いか、三十分前に教室を出て行ったデュナンの幻を追って、リリアンは無言のヴェルトーチェカを残し、教室を後にした。

「……………」

結局、睦月君のことは言い出せずじまいだった。まずは彼自身に話すのが先決とも思ったが、それでも、とりあえずは先に教室を後にしたデユナンを掴まえた衝動に駆られた。休み時間も、それに授業の合間の教室移動の時もそう。ほんと、いつでも不意にいなくなってしまうんだから。こんな時、あたしにもデユナミスが使えたら、とも思った。睦月君ご兄弟のように。そうしたら、こんな面倒な堂々巡りしなくてもいいのにな。

でも、本当に人と人とは直接の意思の疎通を解して、真に解りあえるものかしら……。確か噂では、イオリゲル内部で全く問題がないというわけでもない、そんな話もちらほら聞いたりする。だって、そんな風に直接、気持ちと気持ちが解ってしまつたら……。逆に取り返しのつかない大きな溝が出来てしまう気がする。

そんなことをふと思ひながら、リリアンは教授棟の竜堂教授の執務室へ通じる3階へ続くエレベーターの前まで来た。さつき私がデユナンに拒否されてしまったのは、あたしが睦月君たちイオリゲルじゃないから。違う、そんなことじゃない。でも、きつと。

ボタンを押し、1階まで降りてきたエレベーターの扉が開く。何だか知らないけど、どこか知らない世界へ繋がる未知の扉みたいな気がした。学級委員も務めていたリリアンは何度かここへ来ていた。なのに——今日に限って妙な胸騒ぎがする。それってやっぱり、デユナンのせいなの？

やっぱりヴェルトーチェ力と一緒に来て貰えばよかった、そんな一抹の後悔に襲われる。

*

ねえ、リリアン。あんまり彼に深入りするのはどうかと思う。くすくす、笑いながら彼女は彼女の中の誰かに向かって続けた。

『そう、瑠美那がいるんだ——……』

彼女の中のもう一人の片割れには、それはあまりに信じがたい事実だった。でも、事実は事実。それを受け入れて、それからどうするか。まず、そのことを考えるべきだ。……私たちだって、こうして一つになってしまったんだから。

ヴェルトーチェカの白銀の髪が揺れる。その眸は何も視てはいなかった。

*

瑠美那の魂と同調し身体を二分して、それは少し経ってから感じたことだった。

あの“勾玉”^{たま}の力を強く感じる。確かに瑠美那とのシンクロニティは強力だった。それはこれまでも何度か自ら実感、もとい体感してきたことだ。だが——なぜ、この学校に来てから初めの頃は感じなかったことを、今になって強く感じるようになったのだ。

やはり“欠片”を渡した者がいる。誰だ。「アレ」は我が祖国と同じ時代に生きた者でなければ手にすることは叶わぬもの。

まあ、いい。そのおかげで「アレ」の実体の足がかりを容易に掴めるというものだ。

デュナンは殊更に神経を研ぎ澄ました。案の定、勾玉たまのありかを知る者は、執務室へやに居るようだ。もしも拒むようなら、本来の己の力を使つて――、だが、それは些か物騒すぎる結末のようだ。さつきから何度も、胸の奥底で愛しい巫女の悲鳴が木霊する。ああ、心配するな。決して血を見せるようなことはしない。そう胸中で呟きながら、既に湧き上がる日の神の本性に無表情だった眸の奥の妖しい輝きを隠せない。

そうだ……そうやって、あの時も俺は母様を。

忘れたはずの遠い記憶が今になって鮮明に蘇る。だが、そうしなければ世界は救われなかった。いや、決して世界を救おうなどという思いは欠片もなかった。ただ、あいつが――どうして幼馴染などという嘘をついたのだ。そうであれば、あんなにも心を許さなかったものを。だが、事実は事実だ。己の魂は、古いにしえのあの時から既に穢れているというのに……。

「う……っ」

突然、激しい目眩に襲われ、膝を折る。目頭を押さえ倒れ込む視界の先に、しかし確かに禍々しい気配を感じる。

どうであれ、先に進むしかないか。

ルミナス……。そう何度も囁く微かな声を耳にしながら。

*

島嶺黎司から渡された“オーパーツ”が、要するに単なるレプリカであることは解っていた。だが、そうして彼を泳がせておくのは、

こちらとしても都合がよかった。

竜堂教授は腹の底で笑わずにはいらなかった。ほほ。リベルテ、自由か。だがその実、その「自由」が我々人類の足枷となるのだ。そして、いずれ時が来る。その時、あの宝を制するものが、この世界の覇者となる。

——いや、そんな大それたことは誰も望んじゃおらんよ。

だが、やつらは危険じゃ。大国ガイア、そしてその真の源となるイザナギの神。

……なあ島嶺君。

「どちらにしても、その勾玉たまは大事に扱ってくれたまえ……」
「何を大事に扱うんだ」

不意に背後から声を掛けられ、ギクツとした教授は思わずデスクの椅子から転げ落ちそうになった。

「だ、誰だ？」

そそけ立つような赫あかく妖しい光をその眼に宿した黒髪の少年が一人、薄明かりの中、立ち尽くしていた。

「きき、君はっ」

本当にいつ入ってきたというのだ。確か執務室の扉には鍵を掛けておいたはず。

「ええ、教授。先週こちらに転入してきたばかりのデュナン・リトラスです」

さも、おとなしい転入生のごとく、デュナンは落ち着き払った穏

やかな声で告げた。しかし確かに部屋に木霊する、その声色の冷たさ。其れを渡せ——、全ての者を強く圧するような有無を言わせぬ威厳に満ちた言葉の響き。決して言語にせずとも、異様なデュナンの眸の輝きは、そう語っていた。

「……実は教えていただきたいことがあります」
滑らかに口をついて出る白々しい言葉に乗せ、それとは判らぬ脅迫の時は続く。

「なんだね、授業で解らないことがあるなら、いつでも訊いて構わんよ」

「そうですね。そちらは追々——、ですが」

だが、早急に知らねばならぬことがある……！

デュナンの眸から言葉にならぬ言葉が発せられた。
ぎゃあああ——ッ

*

「え？」

身の毛もよだつような、その悲鳴を耳にしたリリアンは思わず全身を膠着させた。まるで絞め殺されるような、魂ごと恐怖に晒されるような。ぞつとするような何かが今この暗闇の建物内で起きている。

デュナン！

何だか嫌な胸騒ぎがする。そう思うと勝手に身体が動いていた。

「ただ、こちらの質問に答えてくださればよいのです」

竜堂は相変わらず、蛇に睨まれた蛙のように硬直していた。

「大国ガイアの膝元、ギルガメシュ財団から、もたらされた古の秘宝^{いにしえ}。それを探している」

「な、なぜ、それを君がっ」

「知れたことでしょう。あなた方は我々が誰か知っていて事を起こそうとしている」

ま、まさか……！

『ええ、そのまさかです』

少年の声が途絶え、代わりに脳内に直接“声”が響く。

ぎゅうぎゅうと見えない力に締め付けられ、竜堂は息も絶え絶えだった。しかし、

『大丈夫ですよ、殺しはしません。あなた方が誰に牙を剥いているのか、よく知っていますから、だがしかし——』

「もし“彼女”に何かしたら赦しはしない！」

少年は強い語気も激しく平然とそう言い放つ。

「教える——、」

「やめてデユナン！」

不意に響いた少女の悲痛な声に振り返る。リリアンの血の気の引いた凍りついた表情^{かお}がそこにあった。

“その姿”は、まるで御伽噺に出てくる龍神のようだった。赫光に輝き、逆立つ黒髪。そして全身を覆う鱗にも似たオーラの輝き。何にも増して恐怖を煽り立てるのは、その赫く輝く両眼だった。

「……ッ」

小さく叫んだ後、リリアンの顔が、みるみる蒼白に染まっていくのが分かる。

『——見るなっ!』

無駄とは分かっているけど、デュナンの意識はそう叫んでいた。

「……………」

リリアンが気絶するのと教授が脅迫の鎖から解放たれる瞬間は同時だった。デュナンの眸から怪しい光が消え、倒れ込む少女に駆け寄る。

「あなた……は……っ」

——今見たことは忘れる。

ふと少女に覆い被さる黒髪。不意に触れた唇の感触も曖昧に、リリアンは意識を失った。

「そう、すべて忘れた方が、お前は幸せだ……」

*

翌朝、リリアンはいつものように寄宿舎のベッドで目覚めた。隣のベッドでは、珍しく同室のクラスメイト、ヴェルトーチェカが先に起きて身支度をしていた。

「おはよう、リリアン」

そのヴェルトーチェカの挨拶も、いつもと何だか違って聞こえた。

「あふ、おはようヴェル……」

狐につままれたような心地で静かに起き上がる。何か、何かが昨夜あったような。

「ねえ、昨日あたし一人で帰ってきたっけ？」

それさえも全く覚えていない自分。そう。確か昨日、教授棟で何かが……。

「デュナン」

「え？」

話を聞けば、ヴェルは昨夜携帯で呼び出され、外に出ると女子寮門前でリリアンを抱きかかえたデュナンが立ち尽くしていたのだという。

まさかあたし……、図書館で眠りこけてたあ？ 第一発見者としては、確かにそれをそのまま放っておくわけにもいくまい。でも、ただ。確かに昨日何かがあった気がする。物凄く大事な何かが。その予感のままに、リリアンは己の唇に残る何かの微かな感触に気付いた。え、もしかしたら、キス？

デュナン……どうして……。

いきなり不可思議な転入生を意識し始める自分に激しく動揺する。

*

本当に不思議な人だ。諒牙は、そう思わずにはいられなかった。

先週、この学校に転入してきた日系ブリティッシュのデュナン・リトラス。両親は例の文字通り世界を揺るがした一七年前の大災厄

のため他界。それまでガイアで叔父に引き取られて育てられたというが、その叔父も三年前に病死。それから、たった一人で生きてきたという。たとえガイア人の裕福な叔父に育てられたからとはいえ、彼自身の発する、他人を寄せ付けない冷たさまでも感じる厳しい雰囲気、なのに思わず人を惹きつけずにはおけないカリスマ的な静かなオーラのようなものは、もしかしたらどこかの皇族の出ではないかとまで思わせた。

皇族？ そんな馬鹿な。きっとデユナン自身が聞いたら、そんな風に鼻先で笑うかもしれない。いや、とはいうものの彼自身、滅多に笑うことなどなかったのだが。

その日、諒牙は久しぶりにイオリゲルの任務から戻った双子の兄の真吾と会った。

「明日から例の金城瑠美さんって子が、そちらに通うことになった」

おいおい、会って早々その話ですか。

「ん……なんていうか、とにかく心配なんだ。だから」

確かにこの全寮制の天照大付属学園、しかもイザナギの中核であるアマテラスドームに居を構えるここは、エリート校中のエリート校といっても過言ではなかった。そんな中で、たとえ同じ高校とはいえ、沖縄はニライカナイ出身の彼女が上手くやっていけるのか。ま、確かに実際彼女が通うのは、一般生徒が通う普通科なのだが。

そもそも、このアマテラススクール自体が一種の学園都市のようなものだった。だから一連の研究施設を設けた大学棟に、それに隣接した形で高等部、そして中等部も配されている。また、それぞれ

特に高等部には、一般生徒の通う普通科もあるってわけだ。

それはともかく、実質高校一年生である僕は、一年前までその普通科の中等部にいたわけなのだが、今は飛び級して三年生の授業まで受けている。確かにだから、僕を突然変異だのと、神童扱いする人は多い。次期イオリゲル候補生ということは別にしても、僕自身としては、それくらいで神童？とか、思っちゃうんだけどね。

「とにかく瑠美那さんは普通科だね。でも、そのうち僕みたいに思わぬ才能発揮して、こっちに来たりしてっ」

冗談めかして言う諒牙に、真吾はあの奄美諸島近海の無人島の龍蛇絡みの事は黙っておくことにした。いや、無駄か。もう彼には御見通しかもしれない。いや、実際そうだから。

「そうだよ、ごめん兄さん。もう全部知ってるよ」

兄さんが彼女に抱いてる気持ちのこと……。

時々、自分たちのこの能力を恨めしく思うことがある。本当はお互いのために隠しておきたいこともある。けれど、僕たちイオリゲルには、それは許されない。だから――。

そのために事実、仲間内でいがみ合ったりしたこともあった。互いの腹の内が読めてしまうのって、実はとてつもなく辛いことだ。だから僕たちイオリゲルは、仲間であって仲間ではいらなかった。それぞれ個々人が限りなく孤立し独立していた。

それだけにキリアン隊長や、それから諒牙とは、例え互いの心が読めてしまっても大丈夫なくらいの何かを共有していた。それがいわゆる、信頼ってやつかな。やはり人間には、そういうものがない

とダメだ。それでも壊れることはある。イオリゲル同士、人間同士でもそうだ。解り合えそうなのに、解り合えない。

「きつと僕たちは普通の人とじゃないと結婚できないだろうね」

確かに個体数が限られているイオリゲル同士、よりはずつと可能性としては高いわけなのだが。それでも事実、生涯独りでいる可能性の方が圧倒的に高い。

「例え瑠美那さんがその龍蛇の巫女だとしても——、きつと大丈夫だよ」

「諒牙……」

応援する、それが何を意味するのもかも全て理解していて、僕たちは手を取り合う。キリアン隊長はともかく（実際は、これにも問題があるのだが）まずガイアの上層部が許さないだろう。きつとそのうち僕たちは危険視される。それまでは……。

「それはそうと、そのデュナンってやつのこと、もつと聞かせてくれないか」

突然、さりげなく話題を変える。うん、それがさ、顔に似合わずスポーツ万能で……。

確かに真吾はデュナンという転入生についても興味があった。

*

どうしてあたし、こんなところにいるんだろ。

これまでのことを色々考えてみる。どちらにしても、すべてはル

ミナスと出逢ったことから始まったことだった。ルミナスはアマテラスに行くと言った。でも、結局あたしも同じ場所に行くことになるんだね。

——もう一人のあたしがいる、あの学校。確かに「あたしたち」は、真つ向から面と向き合うことはないだろう。というか、それは物理的に無理だ。だって、あたしが起きている時はアイツが、そしてアイツが起きている時はあたしが眠っているんだもの。アイツの言う理屈ではそうだ。でも、もし万が一そんな事態が起きたら……あたしたちだけの問題じゃない、この世界そのものが破滅する。

そんなことは、もう金輪際、嫌だよ……ねえ、父さん。

*

あれから睦月真吾と別れて、あたし瑠美那はアマテラスの天照大付属学園、その理事長さん宅に預けられた。

『瑠美那、今はまだ無理だけど——そのうち君を迎えに来る』

真吾の言葉の真意を反芻する。これって、もしかしてプロポーズじゃ？ 言葉通りに解釈すると必ずしもそうじゃないだろうけど、だけど、でも。真吾には迷惑掛けたくない。

あたしはルミナスと「誓約」した。もう、あいつのものなんだよ。それでも「待っていて」。心から、そう言ってくれる彼。

真吾、ごめん……あたしは。

そのどことなく懐かしい暖かな温もりを思い出したら、涙が出た。

「あなたが金城瑠美那さん、ね」

この学校を実質的に束ねる、理事長先生。リツコ・キリエ・バーミンガム先生。話には聞いていたけど、やっぱりガイア人なんだ。ルミナスが言っていたように、確かにこのイザナギという国はガイアに支配されていた。例えその強大な庇護の下、独立という名目を得ていても。その司令塔であるかもしれない、このアマテラスドームの天照大付属学園。学園そのものが、アマテラスの研究施設みたいなものだ。ルミナスがここに狙いを定めたのも、ある意味無理はなかった。ここアマテラスドームに何があるのか、まだ何一つ教えてはくれないけど。

バーミンガム先生は、見るからに高等教育そのものという感じの品のよい婦人だった。けれどガイアの人間には一瞬たりとも気を許すな、というルミナスの言葉が、あたしの心には相変わらず巣食っていた。

「今日からここがあなたの部屋です。自由に使っていいわ」

沖縄の家の屋根裏部屋とは似ても似つかない、天井の高い、豪華な広々とした部屋。案内してくれた理事長先生が出て行き一人残されると、うわー、そんな歓声と共に思わず部屋中を見回した。

確かにここは一種の小綺麗な鳥籠だ。本当なら、あちらの寄宿舎に入れて貰うのが筋というもののだが、あたし個人に限っては、そうはいかなかった。何せ、龍神と誓約した「龍蛇の巫女」。あたしはあたし、のはずなのに。もうそんな自由は、あたしにはないの？

だから、真吾はいずれ迎えに来る、なんて言ったのかな。それ自体はものすごく嬉しいけど、でもあたしは、高い塔に住むお姫様で

も何でもないんだよ。

『確かに、そんな御転婆な姫君はどこにもいないな——、』

部屋のベランダのテラスを乗越えようとしていると、ふと耳元にその声が響いて、あたしは床に尻餅を着いてしまった。いたたた、

「もう、ルミナスったら——っ」

思わずそんな声を上げたあたしは、あたし自身驚いた。もう前みたいに、こんな風に明るくやり取りできないと思っていたのに。確かにルミナスは、以前のような綺麗なだけの存在ではなくなってしまった。決して夢でも幻でも何でもない。ルミナスは、あたしにとつて……。

——そんな風に想って貰えるとは、光栄だな。

ククツと笑うその声に、また思わず硬直する。そう、最愛の人であり、そして同時に最大の……敵。あたし自身、もう彼と離れ離れになれないからこそ。ねえ父さん。どうして、いつも黙ってるだけなの。こんな可哀想なあたしを救ってよ。

『“あそこ”には、大したものは何もなかったようだ』

しかし、冷静なルミナスのその言葉に我に返る。そう。あたし自身もデュナンとして体験したことだ。ものすごくややこしいけど、男の子になった、もう一人のあたし自身。

——だが、まだ油断はできない。

ルミナスはそのまま、あたしの意識からいなくなった。けれどあたし自身は、デュナンという、もう一人の個体を介して、いつでもルミナスと一緒にいるのだ。本当は怖いから眠りたくない。この間、強制的に昼間眠ってしまったと思ったら、いつのまにかデュナンとして覚醒していた。結局、ルミナスの意のままってこと？

でも、それを結果的に許してしまうのは、やっぱりルミナスが好きってこと……？

——それなら、また気持ちのいいコトでもするか……。

そんな声が聞こえた気がして、不意に奇妙な熱い震えを振り払う。「や……、」

リリアンって娘にキスした癖に。

——あれは、仕方がなかったからだ。

確かにルミナスにとって、あの娘は何でもない娘よね。

——そんなことはない。あの学園における格好な情報探索装置のようなものだ。恐らく今後も大いに役に立ってくれることだろう。

……やっぱり。

そんな風に、あたし自身の身体を使って、人を便利に使わないで！

——……。

朦朧とする意識の中、そんなやり取りをその日、最後にした気がした。

「やはり、現れました……か、と」

島嶺は目の前のコンソール上のデータを眺めながら一人呟いた。

しかも、御丁寧に瑠美那が今後通学する予定の学園内に。ま、彼女自身が在籍するのは普通科だが。とはいえ、当然予想された事態とはいえ、的確に“こいつ”の痕跡が残る場所を嗅ぎ当ててきたその本能の鋭さに若干禁じえぬ恐怖を感じる。その“恐怖”を目の当たりにし、体験したのは童堂教授その人であつたのだが、やはりとりあえずの措置として、レプリカを置いてきたのは正解だった。

——デナン・リトラス。先週転入してきたばかりの謎の転校生。確かにプロフ自体には何の疑わしきも感じられないが、時期が時期であるし、あまりにタイミングのよすぎる転入である。画面上に映し出されたカメラの録画映像に映っているのは、手元のプロファイルデータに添付されている写真と同一人物。その少年が、あの無人島で発現した「龍神」と同じ眼の色、そして怪しげに輝く赫光のカラーを全身から発している。

これでマークしなければならぬ人間が一度に二人になってしまったわけだが、シェイプシフト——標的に憑依し肉体を乗っ取り、さらにその血を持つその人間を媒体として分離形態となる「龍神」に顕著である現象を考え併せれば……バイロケーション、よくある死後体験で語られる霊体（アストラル体）の体外離脱現象での魂の二分化を肉体的に固定したようなものなのだが、それが出来るのも、要するに「龍蛇の巫女」の力であるのかもしれない。

「しかし、一体何なんだ……なあ金城ハカセ」

若干冗談めかして言いつつも、その実それは事実だった。そう、俺自身が今まさに直面している現状も、それにアンタが残してきた実績も。いや、この場合“血”というべきか。金城瑠美那の実父である金城隆志。故人となった今でこそ謎の多い人物だが、確かに俺たちは、あそこで人の禁忌を冒した実験をしていた。琉球弧は八重山諸島最南端、与那国島海底地下深く。最初は只の変わり者かと思つてたが、正直驚いたぜ。

まあ、めでたく瑠美那が生まれて研究から手を引いたのもつかの間、例の一七年前の地球規模での大災厄がため、結局アンタは……。何なんだろうな、要するに天罰が下ったという割には、アンタは最後まで拒み続けていた。いや、それを今にまで引き継いでいる俺自身こそが、真に天罰を受けるべき危険人物なのかもしれんが。

思わず苦笑いしてから、ひとしきり思案に耽る。

「神の血族——、」

そんなわけがあるか。そう否定しながらも、島嶺はある仮説定義を脳裏から拭い去れなかった。

イザナギ、この日本はかつて神の国と言われていた。その天皇家自体が神の血脈であるという。確かに八百万の神々がおわすと信じられていたこの国の魂そのものに深く根付いた信仰は伊達ではない。決して表立って信仰という二文字に表現しなくとも、その精神は日本人のDNAに綺麗に刷り込まれている。

それが何を意味しているのか。我々はそれと知らず、神の血脈を受け継いでいる。それがどこからやってきた、海のものとも山のものとも解らぬまま。ただ存在するのは、太陽と月、そして海と自然。それらが織り成す絶対的なものへの目に見えぬ根深い信仰心のみ。

——ならば、これは。

報告では、龍神の映し身の少年が録画画面で告げていた通り、大
国ガイアのギルガメシュ財団から密かに奪取した代物であるという。
まさに勾玉状の胎児。それを知ってか知らずか、あの銀狐め。泳が
されている、目に見えてそう感じながら、何を考えているのか判ら
ない、あの銀縁眼鏡の奥の眸と、その背後にあるガイアという得体
の知れぬ大国の深淵に怖気が走る。

島嶺は、あたかもコンソール台の片隅で呼吸しているかのように
も思える、深緑の袱紗に包まれた得体の知れない未知の物体を一瞥
すると、えもいわれぬ波動が送られてくる気がして、柄にもなく怖
じける自分自身を実感した。

「シユメール、シユメル、スメル……出来すぎた話だがな」

瑠美那に金城隆志、それに龍神、イザナギ、ギルガメシュ財団、
白のメシア……。

まさか、ムーとかアトランティス、それに宇宙人の介在を信じる
わけじゃないが。

それこそ眉唾ものだ、一笑に付して研究室を出ようとした時、一
瞬、背後で何かが笑う気配が部屋に満ちた。

*

——コロセ、コロセ、殺せ……！

その瞬間、睦月真吾はハッとして目覚めた。なんだ……。

ベッドの上で起き上がると、いつしか激しい動悸に襲われ、酷い寝汗を掻いていた自分がいた。何か怖ろしい夢を見ていた気がする。嫌だな。イオリゲルとしての特質ゆえ、時々こんな風に、あらゆるものから念波を受ける。それはよいものから、そして時には悪いものまで。要するに靈感に似たようなもののだが、彼らのそれは、決して死者からのものだけとは決まっていなかった。

『我々の能力に関しては、未だ解らないことの方が圧倒的に多い』

キリアン隊長のその言葉が脳裏に蘇る。僕たち自身でさえ、自分たちのことをよく解っていないのに。人間は、その脳の一部分のみを使用しているだけで、あとの残り90パーセントはずっと眠った状態にあるという。その未知の部分が活性化される瞬間が時にある。それを自発的能動的に行っているのが、我々イオリゲルなのだ。しかしそれも、自分自身で完全にコントロールできているとは決して言い難い。

——僕たちは、自分自身の意思とはかけ離れたところで、様々なことが分かってしまう。

別れ際、少しだけ寂しげな表情をした諒牙の言葉を思い出す。

本当は、こんな能力ない方が幸せなのに。

それでも避けられぬからこそ、この生き方を選んだ。それなのに……。

いずれ誰かと傷つけあう。そんな哀しくも怖ろしい予感を、真吾は一人振り払った。

瑠美那さん、元気にしてるかな。

その太陽のように明るい笑顔を思い出す。彼女なら、きっと大丈夫。なぜだか、そんな気がする。今はただ、彼の中に一つだけ灯った、その日の光だけが唯一守りたい希望に思えた。

*

……ぼとん……ぼとん……ぼとん……。

何かが一滴ずつ落ちていく。その音が決して聞こえるわけではないし、目に見えるわけでもない。しかし確実に何かが自分に繋がれたチューブに続くカプセルの中に落ちていく。そう感じた。もう随分と血を抜かれた気がする。それが証拠に全身に力が入らない。代わりに何か得体の知れない液体を注ぎ込まれているような、そんな絶望にも似た乾いた感情に支配される。

海賊の首領として、そして数多のテロ行為の首謀者として、これがその罪の代償なのか。ならば、この程度では済まされないはずだ。本来ならば、銃弾を打ち込まれ、身体を八つ裂きにされても仕方ないものを。だがアグニは知らなかった。これこそが最も己に相応しい、忌まわしい刑罰なのだと。

——生きる……！

誰かがそう叫ぶ。そうさ、俺は生きるんだ。例え鋼の鎖に繋がれたとしても。ナーガラジャ、あの龍蛇の神がいる限り、俺は生き続ける。そうだろう、ヴァルナ。そして……ああ、君か。クロエ。

『被験体の余力はまだありそうです』
『なら、体力の限界まで続けるんだ』

そんな会話が意識の遠くで響いた気がした。意識が朦朧とする。身体のうちこちが傷む気がするが、幸か不幸か今の彼にはそう感じる感覚さえなかった。そして徐々にその傷ついた肉体に染み込んでいく新たな血液。その繋がれた体躯の傍らには、皮肉にも彼自身が駆っていたマシン、真紅のスーリヤ、アスラがあった。

*

イザナギの三大ドームの一つである、スサノオドーム。そこは数多の軍事施設が立ち並ぶ、まさにイザナギを護る軍事基地の要衝であった。数日前、アステリウスはアマテラスに立ち寄る際、ここスサノオドームに寄航した。かの無人島で捕らえた最重要人物であるテロリスト、海賊パルジャミヤの首領をある施設に移送するためである。

本来ならば数々の裁判にかけるためガイア本国に直送しなければならぬはずが、共に捕らえた若干名の手下達を残し、一人その首領のみがスサノオのその研究施設に送られた。その異例の措置を、正直イオリゲルの隊長キリアンも、そして曹長の睦月真吾も不可解に思った。だが上層部の判断とその命令は絶対である。確かに海賊パルジャミヤとはいえ、その長である褐色の肌をした若き青年は、刑罰にかけて殺すには惜しい器量をしていた。無論そんなことが理由ではあるまいが、荒々しさの中にも決して隠せない貴族出身の者が持つ、いわゆる誇り高き気品のようなものを、なぜだか青年は持っていた。

「アグニ・ヴァシユラート……よくあるインディア系の名前ですがね」

確かヴァシユラート王朝、そんな王族がインディアナ共和国に伝えられていたと聞きます。まるで集中治療室のような研究ブースから離れた応接室で、白衣を着た一人の背の高い青年が呟く。

「まさか彼がそうだとでも言うのですか」

海賊パルジャミヤの首領が、今はなき王朝一族の生き残り。確かに面白い話ではあるが……。スサノオにおける実質的な軍司令部の幕僚長、一色は訝しんだ。彼に背を向け、ブース内の拘束状態にある被験者を見下ろしていた青年博士は振り向き様、冷ややかな微笑みを一色に投げかけた。

「それは可能性の一つです。いや、もし彼がそうであるなら、その“可能性”自体が一気に高まるわけですが」

「ご冗談を、ワイズ博士。まさかそのために、ここスサノオドームを訪れたと？」

その問い掛けにワイズと呼ばれた青年は、冷ややかな笑みをいつそう際立たせ、答えた。

「ええ。只のテロリストであるなら、こちらに寄る必要も皆無だったでしょう。しかし状況は一変しました——、」

単にあの無人島に居合わせたというだけでなく。ドクターワイズの眸の色が銀緑色に輝く。

「捕らえたのは海賊パルジャミヤだけではなかったということです」と、言いますと？」

あの龍神、それと感応すると言われる、我々軍が誇るイオリゲル部隊のD-2と同等の機構を持つマシンを彼らは所有していた——それが何を意味するのか。そして幸い、我々が駆逐攻撃した龍神の

獣態であるサーペントの体液を、あの島で採取することが出来ました……。

そこまで言ってワイズ博士はニヤツと笑った。

——それが今、あの被験者に試験注入されている液体とは。驚愕にも似た感嘆の声を漏らす一色。その反応を敢えて無視するように、ワイズは囁いた。

「見せて貰いますよ、どこまで我々の期待に応えてくれるのかどうか……ふふ、囚われの皇子様」

その声は、今やそのサーペントの血潮と一体になりつつあるアグニには聞こえなかった。

*

おかしい。対応が早すぎる。アグニ奪取のためアステリウス艦内に潜り込み、一人密かに行動していたクロエは異変に気付いた。本来ならアステリウスがスサノオに立ち寄るのは、奴らのマシンの整備のみのためだったはずである。その隙を突いて艦内地下に捕えられていると見られるアグニを救出する手はずであったが、既に彼は数多く痛手を負っていたD-2機体と共に艦内から移送されていた。

陸^{おか}に移動させられたのなら、新たに侵入経路を模索するなど最初から策を練り直さねばならない。つまり新しい情報が必要となってくるというわけである。それほど慎重にならなければ容易に潜り込めない精緻なセキュリティシステムなどを備えた軍の施設なのだ。当然アステリウスに忍び込む際にも、かなりの注意を払った。クロエ自身の思考が、そこまで完璧なほどに洗練され卓越されていたのは、何もこの無法と混沌あふれる世界で一人生きてきたからばかり

ではなかった。その詳細は、実は彼女自身にも分からなかった。何より彼女の意識が目覚めたのは、たった半月前のことだったからである。

それでも、彼女には彼がどこにいて、今どうしているのか手に取るように分かった。

——まさか……！

それは彼女にも予想できなかった事実だった。アグニはただの海賊の首領ではなかった。ヴァシユラート。その失われた王国は、現インディアナ共和国の母体でもあった。しかし、ある時起こったクーデターにより王朝は一族諸共滅ぼされた。ただ支配者が変わっても国民の生活は一定水準に保たれた。それが彼らヴァシユラートの悲哀といえは悲哀だったのかもしれない。

忘れられた王国の生き残り。どうして……。

アステリウスに残されていたアグニのデータを感じしたクロエは、全てを知った。なぜ彼がかの人に似ていると感じたのか。なぜあれほどまでに似た境遇を自分達と重ねたのか。神と人間——例えそれだけの違いだとしても。いや、違う。ヴァシユラートとは……そう、我らがアマテラスの民と同じ血筋を有した者の同等の血脈であった。

我らが神人の血脈は、そうやって次第に人間に受け継がれていった。それはインディア、そしてイザナギも何ら変わらない。……だから「アイツ」も。あのようにクスヒ様選ばれたのだ。

だが！ならば、殊更に救わねばならない命だ。クロエはそのことを実感した。

アグニは今、スサノオの軍研究施設の最奥にいるようだ。被験体としてアスラ共々捕えられている。それに、なんということだ……その体内から感じるのは。奇しくも、かの御方クスヒ様の御代であるカグツチの血潮。アグニは今、まさにカグツチと一体となりつつある。それは奇しくも古ヴァシユラート王朝の伝える伝説そのものだった。

選ばれた王家の者がナーガラージャとなり、世界を治める。

それはアグニ自身が望んでいたことだったのか。そうなのか、アグニ？ クロエは未だ答えのないその魂に訊ねた。例えテロという破壊的な方法を選んだとしても、まさに、お前が求め待ち望んでいた龍蛇の光。それを今、お前自身が己のうちに取り込みつつある。しかし、それで本当によいのか、アグニ。

どちらにしても、今彼が邪悪な意思によって利用され、体内改造されようとしている事実は変わらない。本来の答えはまだ先延ばしに出来ようが……。とにかく今先決なのは、彼を救い出すことだ。超大国ガイア、クスヒ様の敵。例え間違った方法で、かの人が魔神と化すのを今は黙って見ているしかできないのだとしても。

目を覚ませ、アグニ。

……ふふ、しかし本当に似ているな。クロエは不思議な思いを抱いて二人の皇子の面影を重ね見た。

*

『どうやら役者は揃ったようですね——』

——確かに君の言う通り、瑠美那さんには逢えたけど……。

ここツクヨミドームは確かに居心地がよすぎる。未だ朦朧とする聡介には、すべてが夢のように思えた。

男なのか女なのか分からない、そんな月の神。文字通り、彼に全てを託してここまで来た。すべては、瑠美那さんにもう一度逢うため。逢って今度こそ、自分のこの想いを伝えるんだ。そんな風に勇気を出すことができたのも、すべてこのツクヨミに出遭ってからだ。

それにあの龍神、と言われていたという日の神。瑠美那さんを連れていったばかりでなく——、嫌だ！絶対に認めたくない、許さない！唐突に聡介の中の怒りの炎は燃え上がった。ツクヨミの話を聞くまでもなく、この目で見、そして全身で感じた。

あのデュナンという転校生の中に共にいる二人。龍蛇の巫女として日の神に取り込まれ、身も心も一つになってしまった瑠美那とクスビ。その結果、男の子になってしまった、もう一人の彼女。それは何とも身の毛のよだつ感触だった。

僕はたった一人だけの瑠美那さんに逢いたいのに。その掌を握りたい、そして抱き締めて、その唇に触れてみたい……なのに。あいっ！瑠美那さんを返せ！聡介の心は憎悪ではちきれんばかりだった。何とかツクヨミが鎮めていなければ、女性化したこの姿から本来の姿に戻ってしまいそうだ。

「聡介、今は抑えるのです。そのうち大きなチャンスが巡ってきてますから……」

そう言っ月神は微笑んだ。

第一私たちは既にこの仮の姿で日の神と瑠美那に会っている。無

論、まだ互いがそれと、あちらは気付いていないようですが。ふふ、クスヒ。やはり記憶の混乱は、まだ続いているようですね。無理もない。覚醒してから、まだ半年と経っていないのだから。例えば、あの龍蛇の巫女の小娘と誓約したのだとしても……。

そう胸のうちに呟くと、ツクヨミの眸の奥に冷たく鋭い光が走った。

——ありがとう、聡介。
え？

しかし穏やかな表情になって、月の神は優しく微笑んだ。貴方は私と一つになってくれた。そのおかげで昼間でも、こうして人としての形を保って存在してられる。そしていつか、貴方と私の想いは同時に成就する。ね、そうでしょう？

……ツクヨミ。

可哀想な人。聡介は一転して相手を慈しむような穏やかな瞳になった。瑠美那への強い想いと執着心もだが、やはりこの月の神のことを心から思いやる聡介の心の優しさがなかったら、きっとこのメタモルフォーゼも満足に行えなかったことだろう、だから。

そうだよ、僕たちは二人で一人。僕たちの思いを叶えるために、僕はどんなことだってする。僕が瑠美那さんを思っているように、君もあの日の神のことを……相手のことはともかく、僕は君を応援するよ。だって金輪際、月を無視する太陽は絶対に赦せない。いつかその小生意気な全知全能の光をこの地上から奪い去ってやるんだ。そうすれば、あいつのプライドの高い鼻をへし折ってやれる。

それは奇しくも、聡介が瑠美那に対して心の奥底で感じていた思いそのものでもあった。

——可愛さ余って憎さ百倍。

その思いが、こうして一人の少年を食ってしまった。

ツクヨミは一人ほくそ笑んだ。いいえ、私のクスビに対する想いはそんなものではないのだけれど。百倍どころか千倍、一万倍、いえ一億倍。勿論、彼を愛する気持ちですが。そう——男とか女とか、そんなことは瑣末な問題。事実、クスビ。あなた自身がそれを実感していることでしょう。

愛している、愛している、愛している——。

そのために、私たちは相手をも刺し殺す。それが本当に誰かに恋焦がれる気持ちというもの。それを解って貰うまでは、私は。貴方の片割れの友人を飼ひ殺しにし続けるでしょう。なんという残酷な仕打ち。それはクスビ、貴方があの日から私にしてきたこと。

ふとツクヨミの愛撫のような吐息が耳元にかかった気がした。まるで月の光のようなプラチナブロンドの髪。その長い髪を両脇で結わえた少女。無表情な、そのブルーグレイの瞳は何も語らない。

「ねえ、ヴェル。今度デユナンを勉強会に誘おうと思っただけど」
目の前で無邪気に笑う少女が恥ずかしそうに、奇しくもその名を告げた。

最近、学級委員長の様子がどうもおかしい。

そう、この天照大付属学園、通称アマテラス校の真珠、才色兼備を絵に描いたようなリリアン・パスティムその人が、である。

「はい、皆さん。御機嫌いかがあ？ リリアン・パスティムです」

校内放送がやけにハイテンション。かと思えば……。何を思ったのか妙にしゅん、と授業中に沈み込んでみたり、珍しく独り食堂のカフェで物思いに耽る姿を放課後見たという目撃情報もある。

「ねえねえ。最近委員長、変じゃない？」

「そうよねえ、何か話をして上の方空ってカンジ」

クラスの女子の間では、先月転入してきたデュナンが原因、と見事に凶星を突く者もいる。そう、それは確かにずばり凶星であった。デュナン・リトラス。転校早々、学園のマドンナの心を射止めた男。

「え、デュナンが？ リリアン先輩のこと何か言ってなかったか？
」

まず男子生徒から質問攻めにされたのは、彼と同室の睦月諒牙だった。普段から諒牙はデュナンのことを呼び捨てにしている。まあ一年飛び級の天才少年だけのことはある。決して彼は自分自身を過大評価しているわけではなかったし、一応は先輩である二年生たちを見下しているわけではなかったのだが。

ただ単に誰に対しても無邪気なだけだ。それは当然、同室のデユナンに対してもそうだった。

「別に。でも、ああ。確か昨日彼女に勉強会に誘われたって」

ふと思い出したように彼との会話を反芻する。すると、うひょーそれって要するにデートのお誘い？ 委員長も大胆だなあ。無責任にも、そんな声が次々と飛び交う。それってちょっと違うと思うけど。そう思案する諒牙も実は、その勉強会に誘われていたのだった。

「睦月諒牙……」

教室から寮に戻ってきて早々、諒牙はデユナンに珍しく声を掛けられた。

だから、いい加減、諒牙って呼んでくれないかな。もうそろそろ一ヶ月になるのに、未だフルネームっていうのも、どうなの。相変わらずの仏頂面をぶら下げているデユナンを前に諒牙は内心溜息をついた。

「お前、彼女について何か言ったか？」

「彼女って誰？」

「リリアン・パステイムだ」

当然彼には目の前の人物の言いたい事は全部解っていたのだが、わざわざ気付いた素振りをして、ああ、と声に出してみせた。さすがに諒牙は昼間のちょっとした騒動のことを思い出した。椅子の背もたれに全身を傾けると、先輩のこと、どう思う？ むしろ、そう訊ねてみた。

「どうと言われても。賢いと思う。ただ相手の言うことを鵜呑みにしがちな部分はあるな」

その的確な人間観察はさすがと思うが、そういうことじゃないんだけどなあ。と、がっかりしたように呟いてみせる。

「どうもリリアン先輩はデュナンのこと、意識してるみたいだよ」「ん？」

年下の癖にこいつ、と思わず小突きたくなる衝動を押さえ、デュナンの中で実は乙女心そのままにハラハラしている誰かがいるようだが、デュナン自身はかまわず、相変わらず素っ気無い返事を返した。しかし、

「意識するとは、どういうことだ……まさか！」

確かにあの時、あの瞬間の記憶は完全に消したはずだが、そう思い巡らす日神に、思わず顔の前で違う違うと横に手を振る中の女子^{ひと}一人。

なんていうか、リリアン先輩もだけど、この人も時々よく解らないリアクションするよなあ。その意味では二人とも同類かもしれない。そんな諒牙の内心を他所に、目の前の仏頂面^{いんどうめん}の美男子は、そんなわけがない。何かを納得したように、そう独り呟くと自分の机に向かった。

*

そういえばデュナンについて常々思っていた不可思議なことがある。諒牙は殊更に訝しがった。相手の思っていることに、いちいち霞がかかっているのだ。通常の間人ならば、諒牙はすべて相手の考えていることが見通せた。確かにこの能力は事によっては危険だ。

例えばテスト問題の内容など、学校の授業に関することなどにはフィルターを自らの思考にかけ、敢えて全て読み取れないようにする。その“フィルター”の技も、デユナミスを操れるイオリゲル候補生だからこそ、出来ることだった。

そう、彼らはそうしようと思えば、できるのだった。つまり自身に暗示をかけ、全てを読み込むことを停止する。さすがにそうでなければ、まともな日常生活は送れない。しかし、自分自身が相手のことを知りたいと心の底から思っているような場合は無駄である。その無意識の関心の前では、このフィルタリング能力も見事に無効化する。

諒牙は、確かにデユナンについて、もつと色んなことを知りたいと思っていた。それくらい、相手に魅力があったということだ。だが、そう思えば思うほど、デユナンという未知なる人物への探索の旅は苦境に立たされる。やはり見えない何かが障壁となっている。

そういえば、兄の真吾が瑠美那さんについて、同じようなことを言っていたつけ。これは偶然なのだろうか。龍蛇の巫女。彼女自身に憑いている龍神を彼女は、ルミナスと呼んだ。

ルミナス、か。瑠美那さんだけに。でも、光り輝くものとか、なんて素敵なネーミングセンスなんだ。デユナンへの好奇心と共に諒牙は、ますます瑠美那自身をも知りたいという思いを深めていった。

*

——ごめんね、諒牙君。“私たち”のことを知られるわけにはいかないの。

デュナンの中で瑠美那は思った。本当は私も君たちに会いたいよ。でも……。 “デュナン” の在る同じ場所へは、あたしは行けない。勿論、彼がいないなら話は別だけど。会いたいなら、会わせてやつてもいい、だが余計な危険性を冒すべきではない。あたしという肉体をどうも今支配しているらしい日神は、そう言った。わかっているよ。要するに今、あたしに自由はないみたい。さすがに、そういう場合じゃないって自分の立場は理解してるつもりだけど。だけど、でも。

“瑠美那” としてのあたし自身は、未だに納得がいかない。ルミナス、あたしは貴方のなんなの。いいえ、貴方はあたしの……！ ああ、こんな堂々巡りの押し問答、一体何回続けてるんだろう。何度続けても答えは出ない。そうそれでも、何度嫌いって思っても、それ以上の好きという、ワケのわからない果てのない想いに飲み込まれていくんだ。

これが龍蛇の巫女の宿命。怖い……まるで宇宙そのものに恋したみたいだ。

*

普通科の授業は、沖縄はニライカナイの学校とそれほど変わらなかった。

確かにそれはありがたいといえば、ありがたかった。ただでさえ混乱することばかりなのに、これ以上個人的な日常生活でまで、要らぬ負担を抱えたくない。確かにそれはあたしにとって切実な願いだった。

それでも、もうこんな人並みの普通の生活、また送れるなんて正

直思ってなかった。確かに決して普通ではない。普通であるはずがない。それが証拠に、まるで大臣の待遇のように、学校の行き帰りの送り迎えから、何から何まで人の手が加えられていた。要するに、いつ何時も監視の目を怠るな、というわけか。考えてみたら、皮肉なものでデユナンとして覚醒している時の自分の方がずっと自由であることに変わりない。

自由？ まさか。文字通り自由になったのは、あたしじゃなくてルミナスの方でしょ。確かに彼は日中でも自由に歩ける“身体”を得た。これまでの小綺麗な幽霊みたいな姿じゃなく。よかつたじゃない。そんな皮肉でも吐いてやりたいくらい。そのくらい彼は今、自らの自由を失ったあたしの代わりに、まさに自由奔放に行きたい所へ行つて、やりたいことをしているようだ。勿論学生という身分の上では、そのすべてが可能というわけじゃないけど。

一見、平和な日常に潜んでいる悪魔みたいな非日常。それを身をもって体験したあたしには、すべてが突然、胡散臭く思えてしまう。それはこの、アマテラスでの生活もそう。一見してニライカナイよりは、ずっと進んだ都会だけど、何かがものすごく嘘臭い。もしかしたらイザナギという、この国を実質支配しているかもしれない超大国ガイア。そう言われてみれば、確かにそうなのかもしれない。

『瑠美那——、ガイアというこの国のすることに気をつけて、』

真吾にまで、そう言われた。彼自身、ガイアの軍隊に所属しているにも関わらず、だ。本当に久しぶりに生まれ故郷に帰ってきたっていうのに、何だか全然知らない土地に迷い込んだみたい。

「瑠美那さん、この家を自分の家だと思って、ずっと居てくれていいのよ」

そう優しく告げるバーミンガム理事長。確かにその優しさには嘘はない。それはまごう事なき、母として家族としての優しさだった。こついうやけにそれっぽい暖かさに不慣れなあたしだから言うんじゃない。決して何かに騙されての言動じゃない。この人は本当に子供というものに恵まれなかったんだ。リツコ婦人もとい理事長は、ガイアとか全く関係のない、普通に一般人の穏やかな優しい匂いがした。

「ありがとうございます……」

それだけに、その形ばかりの言葉の裏に、いつかはこの人の善意を裏切らなければならぬ予感に申し訳ない思いがよぎる。

——申し訳ないなどということはなかるう。実際彼女もガイアの手の中の人間だ。ただそれに自分自身気付いていないだけだな。

あっけらかんと言うルミナスにさすがに腹が立つも、それは確かに一つの事実であることに、あたし自身も気付いていた。誰がこんな姑息なトリックを仕掛けてるの。あまりにも平和な日常に隠された、それは緻密で何の抜かりのない巧妙な大仕掛け。その網の目のように巧みに張り巡らされた企みに吐き気まで覚える。

……そうだ、それが奴らのやり方だ。覚えておけ瑠美那。決して奴らの間には、情などという余計なものは介在していないのだと。

その言葉を聞いて、あたしは絶句する。もしかしたら既にルミナス自身が……その霸王の摂理に染まっているんじゃない。弱肉強食。それはまるで鏡のようだ。目には目を、歯には歯を。報復と報復が交互に重なり合い、永遠の螺旋を描いていく。確かに人間の歴史とは

そうしたものだ。人は憎悪と戦いとを決して忘れられない存在なのかもしれない。

その中で愛情さえも、いつしか歪んでいく。誰かを守る為じゃなく、誰かを奪うために。奪い奪われ、いつか人は戦うことでしか自身を肯定することができなくなる。現にルミナスは……。

どうしてそんなに哀しい瞳^めをするの。ルミナス、本当は貴方は。

何度かの心の邂逅の末、あたしたちはとうとう、その憎しみの連鎖に組み込まれ、ルミナスはあたし自身を文字通り奪い乗っ取ることで、その哀しみを癒そうと試みた。ねえ、そうでしょう。しかし誇り高い日の神は、それ以上答えることをしなかった。

*

スサノオ、ツクヨミ、そしてアマテラス。

どうして、そんな名前なんだろう。日本神話における三貴子——。建設中の三大ドーム、その先駆けであるアマテラスドームを前に、よく思ったものだ。

それは「時を停める」装置。そう、いずれこの日本は文字通り“時を停める”。そして新しい国家として生まれ変わるだろう。例えばそこに自分がいなくとも。この国は、そして世界は、新たな時を刻み始めるんだ。

しかし、この大いなる三大ドームに集約される“イザナギ”は……時を越え、古の時間^{いにしえ}を歩み始める。いや、あるいは、それは新たな「未来」か。

瑠美那……アマテラスを——お前の貴き神宝を……頼む。かむだから

*

——父さん！

「……ッ」

誰かの短い悲鳴に不意に目を覚ます。ああ、お前か、瑠美那……。

どちらにしても、こちらが目醒めたということは、あちらの肉体は眠りに落ちたというわけか。とんだ眠り姫だな。肉体は眠っているのに、その実、常に目覚めている。まるで醒めない悪夢の中にあるようだ。悪夢、か……。

デュナンは、先程の瑠美那の意識の最奥が見せた夢を思い出した。父さん、どうして。瑠美那自身の精神は近頃、かなり不安定に揺れているようだ。そう、あたし……最近、父さんの夢ばかり見るの。そんな風に、この身体に相応しくない女々しい感情に度々満たされる。それほどまでに死んだ父親のことが恋しいのか。

「ふっ……」

デュナンは鬱陶しく寝汗に光って張り付く額の黒髪を掻きあげた。季節感など、とうに失ったこの国で、奇しくもドーム都市内は、出来る限り自然の風や天候、季節を演出している。それがまた酷く鬱陶しい。何言ってるの、そんなことない。あたしは好きだよ。

瑠美那の声が自身の中で囁く。帰りたいな、沖縄……。奇しくも季節は、初夏を少し過ぎていた。

＊

なんだかんだで、その勉強会とやらは結局、夏休みに移行されてしまった。延期の理由は、何のことはない。結局リリアン自身が忙しいから、という身も蓋もない単純な理由からだったのだが。確かに彼女は、学級委員長としての務めは勿論のこと、所属クラブの放送部や、そしてその他の部活動にも度々駆り出され、普段からその“才女”ぶり多忙ぶりを発揮していたのだが、その実本当の理由は、もつと別なことにありそうだった。

ただでさえ近頃デュナンの前に出ると、平常心を保つのもやっとなのだ。とにかく、やることなすことトンチンカンになってしまふ。本当にわかりやすい人だな、諒牙は思った。思っていることがすぐ顔に出るようなこの人なら、別に敢えて心を読む必要なんてない。……そういうシンプルさ、僕はすごく好きだけど。

結局、問題のデュナンをはじめ、自分もそしてヴェルトーチエカも当然誘われていた勉強会は、改めて夏休みに日程を組み直ししよう、そういうことになった。

「ねえヴェル、最近私、変じゃない？」

——あなたが変なのは、別に今に始まったことじゃないけど。

相変わらず素っ気無い内心の皮肉を胸中で呟きつつ、ヴェルトーチエカは、そのまま顔を縦に振る。

「やっぱり、そう思う？」

はあっと思わず大きな溜息が出る。

……そうなのよね、自分でもここのところ、ずっと変だと思って

るの。何だか胸がドキドキして、まるで自分が自分じゃないみたい。遅れてきた思春期おめでとう、そう思いながら、こちらも隠れて小さく溜息をついた。

「デユナン」

「えっ」

えっ ええっ――。

その名を口にただけで、ほら、この通り。まるで恋する乙女のように慌てふためいて、以前の天真爛漫委員長は、どこへ行ったのか。

「……大丈夫よりリアン」

ふと口を開いたヴェルトーチェカの眸に釘付けになる。深いブルーグレイの瞳は静かに語った。

『彼に好きな人は、今のところいないから――』

その言葉をどう取ればよいのか、リアンには解らなかった。ただヴェルトーチェカに言われると、妙に落ち着いた。貴方は、その時まで待てばいい。きっと大きなチャンスが巡ってくるから……。

だから、いつもの貴方らしくしていて。

「あ、ありがとうヴェル」

少し戸惑いがちに頷くも、やっぱり持つべきものは友達よね、とリアンは明るく微笑んだ。

*

「ねえ、デュナンは本当に何とも思っていないの？」
「だから、何をだ」

……何って、今さら。諒牙は既に学校中の噂と化している二人のことなのにと、またしても溜息をつく。でも、半分どころなく面白がっていきそう。当然デュナン自身も知らないわけがなかった。ただ、そんなことにかまけていられない、それが彼にとっての真実だった。実際、至極迷惑な話だ。

だがその実、彼女を格好の情報収集材料と定めたからには。それなりに彼女自身に近づく必要もあった。

——実際、そのつもりなんでしょ。だってキスもしたんだし。

何だか中にいるあいつが少々不貞腐れているような気がする。あんなに寂しそっだった気配が、少しだけ息づく。
ああ、そっだ、私を誰だと思っている。売り言葉に買い言葉。勢い余ってそう告げ、

『彼女はもう私の手の内にあるのだからな、』

覇者の魂を持つ龍神としてプライドの高い日の神として、当然のその言葉に間を置くと、しかし少しだけ後悔する。

後悔？ 馬鹿な——。

ただ、あいつを悲しませたくないだけだ。私の伴侶は瑠美那、永遠にお前だけなのだから。

*

『ん……はあっ』

時々こうして、二人して生まれたままの姿で交わり抱かれる。先程の減らず口はどこへ行ったか――、当たり前……そんな余裕なんて、ない。

特に最近、あたし自身の霊力、感応力が弱まっているせいか、こうでもしなければ力を保てないのだという。それがルミナスの言う行為の名目だったが、瑠美那でもない、そしてデユナンでもない肉体を介さない場所で、やっと初めて夫婦としての営みを続けられるだなんて。

夫婦、伴侶。何かが違う。こんな言葉で本来言い表せるような関係じゃない。ちよつと悲しい。でも……。

光の守護神ルミナスは、初めて身に纏っていた帷子や衣を脱ぎ捨て、光そのものになった。ただ太陽や光とは無縁の漆黒の闇を映したような、そんな長い黒髪だけが肌蹴た素肌に映える。そして光が満ちるこの場所で、快楽のままにあたし自身を求めてくる。もしかしたら、さっきの小さな喧嘩が火をつけたのかもしれない。こうしている時だけは、本当の己自身を曝け出してくれる。日の神の誇りとかプライドとか、そういう面倒なものは、この際、邪魔だ。

『や、あぁっ……っ！』

熱い舌がその場所に触れると、灼けるような快感が弾け、全身を駆け抜ける。あ……あ、あ。溶ける。思わず掴まれた両足が溢れる蜜に震えてしまう。良い反応だ、もっと耳に心地よい声を聞かせておくれ。そう囁かれて、あたしは蛇のように絡み付いてくるルミナスにしがみつく。長い指でたくさん慣らされたその場所は、二人が繋がる水門を嬉々として押し広げる。

本来ならば、こんなことをせずともよいのだが……それでも今のお前が望んでいることだ。そう、あたし自身が。本当の体温のぬくもりが欲しくて、その幻を脳内に溢れさせ、溺れる永遠の刹那。――もつと舐めて、キスして。その懇願する声に応え、切なく絡め取られる舌。絡み合う指先。秘められた場所に落とされる啄むような口付け。

『ん、ん……んっ』

たくさんの愛撫の末、あたしは只のはしたない雌になる。うっん、ルミナスはそれでいいって言うけど。こうして、たくさん愛されて、たくさん求められて、あたしは初めて実感する。どうやってあたし自身が生まれてきたのか。もしかしたら、ここは海。うねるように、ひたすら波打つ波間が続き、その中で光と水が光合成する。その泡立つ青い輝きの静寂しじまの中で、数多の命が生まれる。潮風がそよぐ沖繩の海岸で見つめていたのは、こんな果てしない水平線の彼方だったんだ。

――ねえ、ずっと抱いていて。

ニライカナイ。本当の神の国へ連れて行って。

相手が恐怖という冠を戴く龍蛇の神であることも忘れて、あたしは。鎌首をもたげて、放たれた精がどこに向かうのかも、わからないまま。

*

『明朝03、被験者をツクヨミドームへ移送する』

その情報を今回は早い段階で掴むことが出来た。それだけでもク

口エにとっては幸いだった。だが……。

既に対象者は、かなりのハイペースで“浄化”が進んでいる可能性がある。浄化……なんと都合の良い言葉だ。むしろ獣化、とでも言った方が相応しい。それでも奴らにとっては、彼自身をどう扱おうと自由だった。彼らにとって都合よく扱うための処置。それを何と呼ぼうと彼らの勝手だ。

それにしても——ツクヨミドーム。そこは牧草地や田園風景の広がる、いわゆる緑化ドームである。農作物の収穫を行うのが、その主目的だが、確かに医療施設や介護施設、サナトリウム、さらにはバイオ研究所なども備えている。のどかで緑豊かなため、敢えてここに移り住む人たちも多い。無論アマテラスにも緑がないことはないのだが。まさにそこは人工の巨大ビオトープだった。

そこへ移送されるアグニ。要するに考えられるのは、サーペント化した心と肉体を落ち着かせる、目的はそんなところか。極端なスピードで急激に龍蛇の血に慣らされた身体には、とりあえずの休息が必要だ。ただでさえアグニは瀕死の状態。それに例え適合者であったとしても、心臓など、その元々の身体機能への耐性を確かめるためには、少なからずの時間が必要なだろう。

「アグニの魂こころに呼びかけるには、今をおいて他にないか……」

比較的、警備の目も他の二大ドームに比べて環境上、厳しすぎるということもない。ただ問題は、やはりアグニ自身にあるだろうことはクロエにも解っていた。

どのくらいの割合で獣化が進んでいるかもだが、それ以上にアグニ自身の心が応えてくれるのかどうか。その状態によっては、かえって自身に救出を拒まれる可能性もなくはない。加えて龍蛇の血だ。

従者であつたクロ工自身も怖れる、そのかの人の本能を蓄えた血潮。どのような獰猛性を見せるとも限らない。

だが、チャンスはもう一度きりしかない。どうあつても、私は彼を救い出す。この繋がれた命に誓つて。

『ねえツクヨミ、何だか色んな人たちが此処にやってくるみたいだね』

——解るのですか、聡介？

“ベアトリーチェ”として覚醒している分離融合体の優れた知覚ゆえか、ついにこちらの本体にまで——、いや、初めて出会った時から、これはとうに感じていたこと。当初は次の検体の繋ぎとして、いつまでもつかと考えていたのですが……。

そんなことを言ったら、聡介が可哀想。

ツクヨミは泉から湧き出る清水を両手に掬い上げ、指の隙間から零れ落ちる、濡れた感触を一人楽しんだ。

……この瑞々しい感触こそがすべて。あたかもそれは、漆黒の闇夜の空で濡れそぼる月の輝きのよう。

聡介には、その月の光のような優しさがある。それは決して他を威圧しない、受容に溢れた思いやりの心。だが、その心とて生き物無下に扱えば硝子のように壊れ、ついには心の臓を刺す冷やかな輝きと化すでしょう。

——デユナンと、その愉快的な御一行。そして、へえ……龍蛇と化した哀れな海賊皇子。それに前者にはベアトリーチェも当然いるね。

僕らには瑠美那さんと日の神のように、心身ともに一心同体化してしまう高い適合率はなかった。ええ、その代わり、こうしてここで貴方と私は、それぞれの個体として相対し、存在していられる。

それに彼らのような、不安定な反物質的交わり方ではありませんから、例えば本体と融合体が出遭ったとしても、魂はそれぞれに戻り、あの少女は只の抜け殻に還るだけ。

聡介に続き、ツクヨミは穏やかに続けた。

——心と身体。もしもそのどちらかを選ぶのだとしたら、僕たちは迷わず魂との同化を望んだ。だから、こうして片方だけの融合を完全に果たした。そうだろう、ツクヨミ。

私たちは二人で一人。ずっと貴方に出逢えることを待ち続けていました。ツクヨミの慈愛に満ちた眼差しに包み込まれる。けれど月には裏の顔があることを少年はひと時忘れている。

どちらにしても彼の月の汀との親和性、それこそが私達を出会わせ、そしてそれ以上に……互いの愛しき者への愛憎の深さゆえに、こうして互いが互いを強く結び合わせた。ツクヨミは密かにその横顔を見つめる。

『瑠美那さんは、どうしてあんなヤツと……』

月神の冷やかな眸に映る聡介の面差し。それは嫉妬という蒼い炎を燦らせ、今にも相手を刺し貫かんばかり。嫉妬。そう、この私も。霸王に抱かれる快楽に身を委ねる龍蛇の巫女に今、気も狂わんばかりの感情に翻弄おもいされている聡介と同じように。

——そうだ、もう指一本も触れさせない！

その嫉妬おそいが疾走はしる度に、私は隠された己自身の秘宝のような想いまでも具現化できる。本当によい素材を見つけたものです……。

密かにほくそ笑む、その眸。

そしてツクヨミ……月の神、君を裏切った忌まわしい日神を、僕は決して赦さない――。

心地よい、その憎悪の響き。聡介、今は貴方にすべてを委ねましよう。ツクヨミ――月の神自身と同じ名前のこのヘミスフィアで、二人は招かれざる客人達を待った。

*

今のところ瑠美那は、おとなしくしているらしい。

だが、実際はどうだか……、島嶺は思わず鼻白んだ。実のところ問題なのは“もう一人”の個体の方なのかもしれない。だからこそあいつらは融合分離したんだ。この場合、瑠美那本体の方がいうなれば影武者だ。今現在、その瑠美那の力を借りて自由好き勝手に動き回っている、分離体――デュナン・リトラス。本当のところ胡散臭いのは、こっちの方だ。

その「龍神」の変身体が、自ら意図してのことなのか、このツクヨミドームへやってくる。そう夏休みだ。なんであの学校は生徒を夏休みに親元に返さず寄宿舎でもなく、わざわざこっちの合宿寮に寄越したりするんですかねえ。たまたまとはいえ迷惑千万。ま、そうでなくとも、あいつの鋭い嗅覚のことだ。まちがいにこの標的に収めてくるだろう。蛇つてのは、それくらい怖ろしく執念深いもんだからな。

だが爬虫類様には爬虫類様への御出迎えの仕方があることは確か

だ。思わず口元をニヤツと歪める。

——あいつらが卵を孵してしまわぬうちに。そうだ、瑠美那がこのオーパーツに触れる前に。

既に“罨”は仕掛けてあった。

*

「ねえ、先輩は知ってた？」

「え？」

不意に訊かれ、リリアンは振り返った。

まるで高原にやってきたように、その日はからつとした爽やかな風が吹いていた。実際はそれ自体が、この季節この時期だからこそ、人工的にあつらえられたものであると知っていても気持ちのいいものだ。そのドーム内になだらかに広がる尾根を望みながら睦月諒牙は言った。

このツクヨミドームに、あの島嶺助教授の研究室があるってこと。島嶺助教授。沖縄出身という、その人は相当の変わり者らしいという噂がアマテラス校にも広まっていた。そもそも研究室とはいえ、これもかなり変わっているらしい。要するにログハウス、山小屋なのだ。山小屋に研究室？ 普通なら一種の違和感を感じるところだろうが、それもこのツクヨミドームならではの話である。そもそもここが一つの巨大なバイオープなのだから。その人工の大自然の中（いや大自然に似せたミニ自然館で）だからこそ、おあつらえ向きな研究内容もあるってことだ。

「生物学か何かの研究なのかしら」

とはいえ実際に島嶺助教授がしている研究内容については、さすがに誰も知らなかった。ただ、様々な動物種の精子と卵子を日々顕微鏡で覗いているくらいに認識だ。実際、島嶺氏は気さくなところがあり、度々ドームに訪れた生徒をその山小屋に招いたりしているようだ。

「そんなことより、これからどうするんだ……」
不機嫌そうに呟くデュナンにリリアンは我に返った。

そういえば先輩、この道でいいんでしたよね？ 諒牙にまでそう訊かれ、思わず緊張して手元の地図を見直す。

「ええっと。そうね、この先を真っ直ぐでいいはずよ」

しかし、なんとなく雲行きが怪しい。それもそのはず、既にリリアンの目は泳いでいる。

リリアン……。

どこことなく無口なヴェルトーチェカも心配そうに何か言いたげだ。

しかし新しく出来たという合宿寮への道程を知らされているのは委員長であるリリアンだけである。こういう時こそデュナミスが使えるイオリゲル候補生である諒牙の能力が役立つはずだったが、彼はあえて適当な理由を付けてそれを使わないでいた。だって僕が全部やってしまったら、つまらないでしょ？ 悪戯っぽく笑ってあえてその訳を話そうとしない。

ようやく実現したリリアン組の勉強会。夏休みを迎え満を持して、という気がしないでもない。リリアン組、何よそれ。変なネーミングと思いながら、命名した諒牙を恨めしそうに睨んだものの、あく

まで無邪気な表情の後輩に、失礼ねとは言葉に出せなかった。

リリアンを先頭に、デュナン、睦月諒牙、そしてヴェルトーチェが続いた。ところどころ叢林の続く緩やかな山道とはいえ、さすがに息が切れる。それでも、木々や植物が放つ草の匂いやマイナスイオンがそうさせるのか、その息切れでさえ、どこことなく心地よく感じられる。

始まったばかりの夏の空はどこまでも青く、風は穏やかに丘陵地帯を駆け抜けていく。

それでも、どことなくリリアンは胸の鼓動を抑えられなかった。こんな風に息が切れるのは、延々と続く丘を登っているからに他ならないのだが、彼女自身にしてみれば、決してそれだけの理由ではなかった。むしろこの状況を利用して、この息苦しさを誤魔化せることができたのが幸いなくらいだ。

自分のすぐ後ろに続く黒髪の少年。表情こそいつも通り無愛想だが、その整った風貌を思うだけで胸が高鳴る。やつと誘えた。勿論、それは彼だけではなかったが。今回の計画は睦月君やヴェルが居てくれるからこそ実現できたようなものだ。無論、それは二人とも承知の上だった。決して二人は示し合わせたわけでも何でもなかったが、それでもリリアンの心の内は、すべてお見通しである。それこそデュナミスを使う以前の話だよね、諒牙は思いながら何気なくヴェルトーチェに微笑む。

「……………」

「ねえ、デュナン。どうして君はいつもあの制服姿なの？」

ふと諒牙にそう訊ねられ、不意にそのまま前方を見据えた視線を

鋭くする。

さすがに今日ばかりはラフな登山用の夏服に着替えていた。だが、確かにデユナンは奇異なほど、夏でも長袖の黒い詰襟を脱いだことがない。だからこそ逆に今日の彼の姿が不思議に思えたのだろう。

「……喪服だから、だ」

え？ その返答に諒牙だけでなく前に行くリリアンも軽く驚く。そしてその言葉の意味するところに、それ以上詳細を訊くことが憚られた。どこことなく背後の空気が思い詰めている。そう感じて、あらためて彼という人のことを思い巡らす。デユナン、どうしてあなたは――。こうしてあたしたちが誘わなければ、彼はきつと独りきりで、この夏休みを過ごすつもりだったのだろう。何となくそんな気がして、結果的によかった、と思った。

そう、私は彼に心を開いてほしい。ただそれだけなんだ。それとも、これって自分の気持ちを無視した単なる優等生的な考え方なのかしら。うつん、きつとそうじゃない。そういうことを全部含めて、あたしは彼のことが……。

――彼のことか。

ああ！それにしたって、何だかもどかしい。そうよ、私はただデユナンに微笑って欲しいだけ。彼の微笑みを見てみたいだけ。そう……それだけで、きつとすごく嬉しいから。

そんなことを取り留めなく思いながら黙々と歩を進めるうち、

――あれっ？ 突如、突拍子もない奇声を発したりリリアンに、――

同ぎょつとして前方を見上げる。そして、

「リリアン……あそこ」

最後尾に続くヴェルトーチエカがふと斜め前方を指差した。てつきり新設の合宿寮が出迎えてくれたかと思いきや、林の向こうに目に入ったのは、でんと聳え立っている風変わりなログハウスだった。

どこで道を間違えたのか寮のある開けた丘ではなく、確かにどんどん山奥に分け入っていくと思った。そう誰もが訝しんでいたに違いない。あちゃーやつぱりさっきの分かれ道だったかー。リリアン自身もしまったと思いつつ、それでもかなり来てしまっていたし、今から戻ったのでは多分日が暮れてしまう。

「ごめんなさい、でもここまで来てしまったんだし、とりあえず行ってみましょう」

そういえば、こんな童話があったっけ。迷い込んだ森の中でみつけたのは、美味しそうなお菓子の家。目の前の山小屋はたぶん、人食い魔女の住む怪しい館でも何でもなくて、ただのログハウスだけ……。

「もしかして、あれって……」

それでも口を開いた諒牙にびくつとする。例の島嶺助教授の研究室じゃ――。

そう言い終わらないうちに、背後からおーい、とでかい声を掛けられ皆、思わず振り向いた。

「おまえら、どっから来た？」

樹木の間に見えたのは、熊でも日焼けした雪男でもなく、悪戯っぽい笑みを浮かべた野生児そのままの中年男だった。

*

島嶺黎司、四三歳。沖縄県出身。二ヶ月前に沖縄ニライカナイドームの天照大付属高校より転勤、現在はアマテラスドームの天照大竜堂教授チームの元、ここツクヨミドームの特殊研究所にて主任研究員として勤務。助教授。

データとしては、こんなものか——、あっさりとした口調の日神に反し、あたしは思わず声にならない声を出した。

『叔父さん！』

あれ以来、もうしばらく会うこともないとは思ってたけど、でも確かに島嶺叔父は二ヶ月前、アマテラスに転勤していた。だから、こついう再会も決してありえないことではなかった。っていうか。

むしろこの場合、あたしの方がおかしいことになってるんだよね。それも見えた目はデュナンだから、あたしの方で分かってても、叔父さんの方では、あたしだとは全然分からない。だが、むしろその方が都合がよいのかもしれないな——、

ルミナスの言葉に、とりあえず相手に気を許してはならない、と言われていたことを思い出す。でも、どうして。なぜ叔父さんが。それは、これから徐々に明らかになっていくことだ。あくまで冷静なルミナスに、なぜだかまた少し怖くなる。

もしかしたら、叔父さんが以前からしていた研究って……。

——それがどういうものか分かっていたら、お前はこの叔父を許したろうかな。その言葉に、背中に得体の知れない戦慄が走る。それってどういう意味？

——いや、お前の父親も……。え？

だが、それ以上、日神は答えなかった。

*

「なんだ、うちの大学の学生だったか」

正確には付属高校の生徒ですけどね。がははと豪快に笑う島嶺を皆で囲んで談笑する。もつとも、正確には専ら話をしたのは諒牙とリリアンだけで、あとの二人は相手から何か話しかけられる時以外は、ほとんど黙っていたのだが。

確かに見た目はログハウス風の作りをしていたが、中は結構広く地下設備もあり、研究室という呼び方に相応しい室内だった。ここで島嶺助教は、数名の助手の研究員とともに日々を送っている。いや、しかしここはいい所だろ。沖縄の海もいいが、例えば人工物でも山も悪くない。まあ二ヶ月ちよいいるだけの新参者の俺なんかより、君たちの方が、このことはずっとよく知ってるだろうかな。

島嶺は、そう愉快そうに言う。マグカップの中のコーヒーを飲み干した。皆が通された事務所兼、応接室は見るからに雑然としていて、ここだけでこの研究所の様子が垣間見れた。それでも山小屋風の高い天井には、自然の木肌そのままの大きな柱が横に渡してあるのが目に入った。

「そうだな、今日はここに泊まっていった方がいいだろうな」

「ご迷惑でしょうが、助かります」

いやなに、あんたらみたいなべっぴんさんを放っておけないからな。そう言いつつリリアンとヴェルトーチェカにウィンクしてみせる。つたく、どこに行っても変わらないんだから。そうデュナンの脳裏で呟くも、やっぱりあたしの心は晴れなかった。っていうか、知りたい。叔父さんのしてること。でも、やっぱり怖い……。

「島嶺先生は、やっぱりここで生物学が何かを？」

「ああ、ここの研究のことか」

好奇心旺盛な諒牙が無邪気に質問する。確か君はイオリゲルの……はい、睦月諒牙です。ははは、まさかこのことを既に透視したりしてるんじゃないだろうな？ ま、見られて困るようなことはしてないつもりだが。あはは、大丈夫ですよ。しかしむしろ島嶺は、いたって余裕で一笑する。

そんな三人のやり取りの中、まるで示し合わせたように相変わらず沈黙しているデュナンとヴェルトーチェカ。夕闇の迫る山小屋で、その二人の間だけが静寂に満たされている。パチパチと爆ぜる暖炉の火。周囲の会話に耳を傾けているようで……その実、何も聴いていない。そんな不可思議な感覚が押し包む。

——こいつは、未だに何も見えない。

目の前で黙りこくる“同類”を、それとなく盗み見る。

それをずっと奇異に思ってきた。確かにそれを言えば、デュナミスを操れるイオリゲルである睦月諒牙もなのだが、それ以上に。前者はイオリゲルといえど、ただの人間。だが、こいつは。どこか不自然なほど張り詰めた、だがその実、核のようなものの自体が何もな

い空洞の無機物のような。そんな異様な感覚。

だが今は、この島嶺黎司だ。日神はターゲットを一つに絞った。

*

とりあえずリリアン一行は島嶺の研究室で一晩を明かすことにした。それぞれ男女ともに割り当てられ、案内された部屋へ向かう四人。デュナンの中で久しぶりの物言わぬ再会を叔父と果たした、あたし瑠美那も、どこことなく複雑な思いを抱いたまま少年の姿で、未だ暖炉の火の爆ぜる談話室を後にした。

「そうだ、デュナン君」

不意に呼び止められて振り返る。島嶺はまるでよく見知っている身内に話しかけるように言った。俺には可愛い姪がいてな――、そいつがえらい御転婆でな、正直結婚相手が見つかるかどうかも怪しい……ってのは冗談だが。

「なぜ俺にそんな話をする？」

そう素っ気無く返すデュナンに島嶺は、せせら笑いながら伝えた。

「何となく、あんたが面白そうな人間に思えたからさ」

「ふぁーまさか温泉があるなんてね……」

すっかりリラックスした状態で胸まで湯に浸かりながら、リリアンはヴェルに話しかけた。

上気した頬に頭髪をタオルで巻いた姿で、もうすっかり出来上がっている。だが、もう一方のヴェルトーチェカの方は相変わらずの無表情を崩さず、それでも静かにこちらもたつぷりの湯に浸かっている。

「ねえヴェル……やっぱりあたし、デユナンのことが好きかどうか分からないけど」

不意にしんみりと語り始めるリリアン。

「でもやっぱり、彼には普通に笑って欲しいな」

きつとずっと一人ぼっちだったのよね。だから……もしかしたら、ものすごいお節介かもしれないけど、あたしには当たり前に家族がいたから。そういう暖かさを彼にも分けてあげたいなって思っ

て。ああでもやっぱり余計な御世話かなー。そう呟きながら、半ば照れ隠しのように顔を湯面に漬ける。

「リリアン……」

「ん、えっ？」

突然、ヴェルが目の前に迫ってきて、思わず気が動転する。気の置けない同性のルームメイトの突然の行為にリリアンは目を白黒させた。ん、んんーっ……って、あたしにそういう趣味はっ。ヴェ、

ヴェル！

リリアンの細い両肩を掴んで湯に浸かったまま、ヴェルトーチェ力は構わず唇と唇を密着させる。息が出来ない。まるでリリアンの想いそのものを吸い上げるような、そんな作為的なキス。しかし、ただでさえ逆上していたのか、リリアンはそのまま気を失った。

ちゅっちゅっ……相変わらず、その透き通るような素肌に音を立てて唇を這わせ、ヴェルは無表情のまま、自動的にその行為を繰り返した。

——ふふ、かわいい子。でも、デュナンは私のもの。今夜は素敵な夜になりそうね……。

*

「ねえデュナン、やっぱりリリアン先輩のこと……」

「——またその話か」

こちらは男湯の会話。どうにも、こいつの人懐っこさには参る。それに、そのリリアン・パスティム。やはり人間というのは面倒だな。……それでもやっぱり利用するんでしょ？ 不意に呟く突き放したような囁きに、ふと耳を傾ける。それもつかのま、隣で湯に浸かる諒牙との会話に引き戻される。

「どう？ 一度二人だけでデートでもしてみたら？」

「そうだな……それを機に彼女に探索端末を仕込むというのも一つの手か。」

「もしそうしたら、お前は俺に何をしてくれる」

ついでにこちらも籠絡する良い機会か。思わず意地悪く凄んでみたが。

「えっ……そうだなあ。じゃあ夕飯一食おごってあげるよ」

ダメだ。こちらはまたの機会にでも考えるか……呆れるように落胆する。

ほんと、酷い神様だね。詰るように脳裏で呟く愛する巫女の声に、しかしニヤリと笑う。そう言うお前はどうかのだ、瑠美那。この私に逆らうこともできないではないか。ああ、そうだ。私は酷い神だ。だがそれも、唯一つの目的があればこそ——それを成就するまでは、お前に痺れるような快楽と身も凍るような辛苦を与え続けるだろう。

『……………』

やっぱり何かが間違ってる。あたしはそう思いつつ身を硬直させる。でも……どこかで誰かが教えるんだ。彼と共に往くことで必ず救える魂があると。それがルミナス自身なのか、それとも他の誰かなのか、今のあたしには何一つ解らないけど。

「デユナン！」

と、その時不意に予期せぬ相手から名前を呼ばれ、はっとする。

ちょうど脱衣所にあがるところだった。見れば、男湯の入り口にバスタオル姿で立ち尽くしていたヴェルトーチェカがいた。

「リリアンが……」

そう告げられ、一切臆せずすっかり灯の消えた女湯の扉をがらつと開ける。小さな露天風呂の一角に気を失ったリリアンが裸のまま

倒れている。どういうわけか、彼女は仮死状態にあった。どういうことだ？ 振り返りヴェルトーチエカに訊ねるも、彼女は「わからない」と繰り返すばかり。とにかく人工呼吸で生き返らせなければ、この際、仕方なく、といった枕詞は後回しだ。

しかしリリアンの胸に屈み込んだ瞬間、背後に立ち込める、ただならぬ怜悯な気配に身構える。

「……お前は、誰だ？」

後ろに立ち尽くし、俯いた小柄な少女を藐睨むと、これまで一度も口にしなかった懷疑を初めて解き放つ。クククク……ッ。長く垂れた前髪に隠れたその表情は容易に見て取れないが、その薄い唇が僅かに歪むのを見た。

『クスヒ——、』

少女の唇が確かにそう動いた。いや、これはテレパス。脳内に直接語りかける声だ。その言葉の意味を理解しようとする瞬間、その脳髄でのパルスのやり取りさえ許さぬ力がデュナンめがけ^{はじ}進った。

その瞬間、全ての記憶が無残にも無理やり巻き戻されていく。

お前は誰だ？ なぜ俺をそんな名前で呼ぶ。月も太陽も出ていない。こんな新月の闇の深淵の中では、すべてが無意味だ。だがしかし。それでも目を凝らし見据える。あの日の慟哭と、その記憶を封じるため、心臓に埋め込まれた鉛のような鈍痛。それが一気に激痛に変わる。ああ、そうだ。すべて解っていた、そうすべての宿命を。

——うああああああああ！

目の前が真っ赤に染まる。緋い両眼あかを持つているからではない。これは網膜に映る血の色。クスヒ。クスヒ様。かつて愛していた者たちが私を抹殺しにやってくる。ならば相手をするまでだ。今の私ならば、おそらくそう答えるだろう、しかし……。

突然のことに、背後に立ち尽くしていた諒牙も、ただ呆然とするばかり。目の前でデュナンはリリアンを蘇生させることも叶わず、両目を押さえて激しく叫び、悶え苦しんでいる。その傍らに俯いたまま立ち尽くすヴェルトーチェカ。

「ねえ、ヴェル！デュナン！一体どうしたの！」

諒牙の叫びも虚しく、二人の間に流れる特異な磁場のようなものに遮られ、容易に近づくことすら出来ない。

——クスヒ。

愛しています、そう貴方だけを。その聞こえない声がプラズマの電流を帯びて、周囲に飛び散った。

「うあっ！」

その飛沫を受けた諒牙は、タイルの上に激しく頭を打ち付けて気を失った。

『これで邪魔者は、いなくなりましたね』

その声が割れんばかりに痛む頭の中に響いてくる。お前は——誰だっ。相変わらず問い掛けるも、一向に記憶の断片が繋がらない。ああ……本当に寂しい。まだ思い出して下さらないのですね。クス

ヒ、私はこんなにも貴方のことを想い続けているというのに。千の昼と億の夜。何度狂おしく想い続けても、貴方は私のものにならない。

奇しくもこの偽りの大地の一つは、私の名でもある。人間どもは愚かです。その愚かな人間を救わんがため、貴方の母君は……おや、昔話をするのは、まだ早すぎますね。それでも私は、その人間の一人と契約を結びました。すべては貴方の心を取り戻さんがため。雄々しく気高く美しかった貴方。そう、すべての宇宙^{もの}が貴方の前に平伏すのです。

誰だ。唯一つ解るのは、こいつが俺の味方ではないということだ。どれほど美しい言葉で飾ろうとも、賞賛の心を向けられようとも、俺には何一つ届かない。そう脳裏に刻み込み込みながら、必死の抵抗を続ける。そうだ、瑠美那！何をしている——お前の力を使えば、どんな邪悪な魂だろうと……。

しかし肝心の巫女は何一つ答ええない。いや、むしろ——震えている。

『聡……介くん、なの……』

聡介、誰だ？ 瑠美那の知り合いか。次第に混濁していく意識の中で、確かにあいつが驚愕しているのが分かった。いや半分は、安堵の気持ち。だが圧倒的な絶望に同時に苛まれてもいる。こいつの中には、あいつを激しく揺さぶる愛憎の感情が渦巻いている。

——聡介君！

そう叫んだのがはじまりだった。長かった。あの月食の夜、故郷

の沖縄で別れてから。でも、おかげで僕は君が僕にとってどういう存在だったのか知ることが出来た。瑠美那さん、君の存在の眩しさ、そしてその理不尽さがすべての答えだ。それでも僕はそれさえひっくるめて、君のすべてを手に入れたと思う。ずっと願っている。好きだよ……でも、これは告白じゃない。君と君の日神への果たし状さ。

クスヒ……これでも思い出して貰えないのですね、それならば。

ヴェルトーチェカの身体が蒼い光に包まれたかと思うと、次第にデュナンに近づいていく。まるでマリオネットのようだ。けれど、その想いは確かなエネルギーとなって少女の身体を自在に動かす。愛している、憎んでいる……その相反する感情が惹き付け跳ね返すすべての力となる。

——クスヒ……。

くっ！その指が触れた途端、デュナンの身体は激痛にも似た辛苦に反り返った。しかし、容赦ない少女の抱擁に日神とその巫女は、すべてを知った。切ない、まるで噛み切るような口付け。その瞬間に霞がかったいた記憶と思念がスパークした。

『——ツクヨミ！』

やめろ、やめろお……！髪を振り乱し頭を抱え、日神は激しく身悶えする。きつく閉じたその両眼からは血が流れ、全身を貫く痛みが電流のように何度も駆け抜けた。愛している、愛している、愛している、愛している……呪文のように幾度となく繰り返される言葉。だが、それは優しく包み込む愛撫ではなく、刃物のように鋭い痛みとなって全身を切り裂いた。

だめ、だめ——！巫女が意味もなく叫ぶ。そう、すべてに既に意味はなくなっていた。月の光が太陽に照らされた幻の光なら。なぜ月はこの世に存在しているのでしょうか。なのに太陽神は絶対神である、なぜ崇められる。貴方の光でさえ、ひと時この世に許された仮初の輝きでしかないのに。いいえ、だからこそ愛しいのです。その刹那の輝きに誰もが惹き付けられる。

ああ、そうだよ。瑠美那さん。やっと君に触れられた。例えその身も心も日の神の光に穢されたのだとしても。僕は君の唇の形をやっと手に入れた。あたたかい、その温もり。もう誰にも渡さないよ！

——聡介くん、やめて！

君は今、龍蛇の巫女だ。畏れと恐怖を頭上に戴いた……そんな君に何が反論できる？ そう詰られ、思わず怯む。そして無駄だといふのに両耳を塞いで頭を振る。^{かぶり} そうなんだ、あたしは龍蛇の巫女。もう戻ることは決して出来ない。ルミナス、父さん、どうしたらいいの、あたし……。

ツクヨミとルミナス。絡み合う双方の過去が織り成す、その真実について何も知らぬまま、それでも龍蛇の巫女は目に見えぬ何かに苛まれる。

聡介君が、まさかそんな風にあたしを思っていたなんて。唐突に告げられた告白に、無邪気だった沖縄での日々が巻き戻される。きっとあたしは、なんにも気付いていなかったんだ。知らないということは、そのまま罪。眩しく鮮やかな陽光を浴びて、きらめく南洋の海。けれど、その裏に潜む、暮れ落ちたあとの漆黒の闇夜。その闇に舞い降りる月の神。そこで密かに呼吸する精霊たちでさえ、

今となつては人々の心に顧みられることはない。

うつ……あ……瑠美那、取り込まれるな、瑠美那。残された力で搾り出すように呼びかける。

お前が何を思おうと、そう今この時を悔やもうと、すべての真実は一つだけだ。クスヒ？ 違う、私は太陽神ルミナス。お前が名付けたこの名が、私のすべてだ。すべての銀河と宇宙の輝き。そうだろう——瑠美那。

しかしその瞬間、何かが変わった気がした。馬鹿な！ツクヨミが一瞬怯んだ。

心の奥底で泣き叫んでいた瑠美那の気配が一瞬でよみがえる。まるで夜明けのヴィーナスだ。しかし、その刹那の輝きは降り注ぐ太陽の神々しい光によって飲み込まれ、別の何かに変貌する。

メタモルフォーゼ。これが誓約そのものの真意なのだ。ツクヨミよ、私は生まれ変わったのだ。そう、瑠美那と出逢い……。たとえばこの邂逅が何処へ迎おうとするのか何一つ分からなくても、その言葉がどんな痛みや哀しみも、すべて照らし癒してくれるような気がした。ルミナス——あなたと出逢つて。

それは生命そのものの黄金の輝き。白銀の月光でさえ、癒し生み出す力。そうなのですか……クスヒ。ですが——。

今日のところは退却しましょう、聡介。聡介？

見ると彼は、それまで仮死状態に置かれていたリリアンに手を触れていた。無論、触れていたのはヴェルトーチェカの掌だった。

「ごめんね、リリアン。君には関係ないのに」

ふっ……冷たく微笑みながらも、ツクヨミは聡介に力を貸した。太陽の暖かさにはかないませんが。次の瞬間、リリアンの心臓は鼓動を打ち呼吸が戻り始めた。

*

「おい、冗談きついで……」

一応、この施設全般の管理も任されている。そんな島嶺にとってそれは痛い出費だった。それもそのはず、なぜだか一晩で岩屋の露天風呂が不自然なほどに木っ端微塵に破壊されていたからだ。それは男湯のみならず、隣接する女湯の壁面もだ。だが一体これは……。

奇妙な熱で融け、すっかり干上がった湯殿の岩肌。それは尋常でない温度の熱が加わった証拠だ。これはやはり、龍神様が御降臨なすったか。それにしただけ。同時に急激な温度変化で急速に冷やされた痕跡もある。灼熱の太陽と、絶対零度の月の夜、か。島嶺には何かの確信があった。実際、日神の足取りは全て掴んでいるも同然だ。だが、しかし。

“彼”を脅かすほどの対抗勢力が現れた、か？ まったくガイアだけでも大変なのに御苦労なこった。頑張れよ、瑠美那——。

『聡介、昨夜は無茶をさせてごめんなさい——』

——ううん、いいんだ。でもそのおかげで、日神にも、そして瑠美那さんにも気付いて貰えた。でも僕たちはそれぞれ、とんでもな

く頑固な相手に恋しちゃったみたいだね。そう茶化して笑う聡介をツクヨミは抱き締めた。ごめんなさい、聡介……。

かえって両者の絆を深めてしまった。そんな太刀打ちできぬ絶望感に独り苛まれる。しかし、私達でさえ、結構打たれ強いのだと知らなければ。なぜなら月の光は太陽光の賜物なのだから。地上のものは、その両者の絶妙な引力によって生かされている。生命を育むのは日光だけでも、それに月の満ち欠けによる潮汐だけでもない。そう私たちがいなければ、この惑星^{ほし}は決して生き長らえない。

『しかし大国ガイア、あの者がもし、かの人を手にかけてようものなら……』

ツクヨミの美しい切れ長の眸が鋭く閃いた。島嶺という男、もう少し解り易くならないものですかね、だが。微妙に眉を顰めながらも、その解りにくさが御せざるを得ない価値へと変貌するのです。どちらにしても、両者ともにガイアは敵――。

本来ならば、高みの見物と行きたいところですが、他ならぬクスヒのため。そう、私は貴方のためだけに存在する。例え互いに刺し違えようとも。

ゆらゆらと水面に浮かぶ月。その刻々と変わる姿は決して移り気なのではなく、愛情の姿それ自体の変化なのですよ……覚えていて下さいね、クスヒ。

*

思い出した……あいつだ、ツクヨミ……。ルミナスは思わず眉を顰めた。確かに漠然と自分を付け狙う月の神がいるとは感じていた

が。

だのに、胸の奥にわだかまる凍るような熱さ。理不尽なその温度差にこの身が引き裂かれそうだ。“あの時”もそうだった。あいつが裏切ったのか、それとも私が裏切ったのか。どちらにしても、私たちは仲違いしたのだ。ああ、そうだ。あれほど美しく愛しいものはいない。いや、いなかった。結局、私たちは過去形なのだ。

あいつは本物の蛇だ。エデンの園に迷い込む者をかどわかす蛇。その毒牙に私はかかった。くっ母様……。なぜだ、どうして。そう問い詰めることが出来るなら問い詰めたい。だが。本来の龍蛇の本性が私自身にあることを、どうして免れよう。

だから私は――。

「デユナン！ねえ、起きてデユナン！」

誰かが呼んでいる。誰だ、どちらにせよ、もう月の神の接吻は、
金輪際ごめんだ……。

「デユナン――！」

どうやら丸一日合宿寮で眠り続けていたらしい。さぞかし瑠美那の本体は久々に伸び伸びしていたことだろう。そんなことを思いながら目を開ける。

「あつ目を覚ましたみたいだよ」

人事のように諒牙が無邪気に笑う。リリアンも、それに釣られて大輪の笑顔で応えた。よかった――一時はどうなることかと思ったのよ。そんなリリアンの声がどこか遠くに聞こえる。何だか耳鳴りがする。

麓まで降りてデユナンをここまで車で運んでくれたのは、島嶺助教授らしかった。四輪駆動車だったから、いつ車内で目を覚ましてもおかしくなかったんだけどね。それくらい眠りが深かったらしい。どちらにしても全員、あの朝、裸同然の格好で、すっかり壊れ果てた女湯に倒れていたというんだから、不思議な話だ。

きっとUFOの仕業か何かだよ。自身の身に起こったことであるにもかかわらず、諒牙は軽いジョークを飛ばした。というか、リリアンは顔から火が出そうなくらい真っ赤だ。それもそのはず、彼女は一系まとわぬ生まれたままの姿で、その場に仰向けに倒れていたのだから。勿論、最初に目を覚ましてそれを介抱したのがヴェルだったからよかったものの。

どちらにしても、長い夏の合宿生活は未だ始まったばかり。リリアンは二カ月後の自分たちに想い馳せ、静かに薔薇のような頬を染めるのだった。

——何だか随分と長い時間、こうしているような気がする。

それはまるで脳内が沸騰するような異様な感覚が繰り返された末、やつと呟いた言葉のようだった。

アグニの身体は確かに以前の身体ではなくなっていた。しかし、なぜだかそれを自分自身はどこかで望んでいたような気もする。どうあがいても、只の人間^{ヒト}でしかない圧倒的な絶望感。それは明らかに暴力と揶揄されるテロという手段を用いてきた自分とて変わらぬ宿命だった。とうに衰退した王朝ヴァシユラート——まさしく御笑い種だ。そのたった一人の生き残り。だが己には己の使命があるとずつと信じてきた。いや、決してそんな綺麗事ではない。それが証拠に血で穢れきった自分の掌。今さら何に変わろうと大した違いはないだろう。しかし……。

——アグニ！

誰かがどこかで俺の名を呼ぶ。そんな幻聴まで聞こえるようになった。いや、これは決して幻聴でも何でも無いぞ……！

クロエは必死に消えかけたアグニの魂に呼びかける。お前に救われた命の主がここにいるのだ。そんな風に簡単に気力を失われては困る。せめてこの思考回路への直接介入を阻む障壁さえ取り除ければ。そう、今クロエの念力を閉ざしているのは、この執拗とも思える強力な思念バリアだった。

*

「おいヴァルナ！一体いつまでこんな所で燻ってなきゃならねんだ――、」

まさか御頭がいいというまで、なんて言い出さないだろうな？

そんな手下たちの辟易した言い分をこれで何度聞いただろうか。だが、確かにこの入り江に停留して早半月。複雑な形状の岩場が海沿いに続き、身を隠すにはもってこいだった。少なからず傷ついた仲間の治癒や船の修復作業には、まだ足りないくらいだが、おそろく戦の神パルジャミヤも嘆いていることだろう。

「そのまさかだ。アグニは決して早まった行為を許さないだろう。だから何らかの動きがあるまで、我々はここを動かない」

それは航海士として船を守る使命からも、そしてアグニの心根を知る信頼に足る部下の一人としても変わらぬ選択だった。常に戦いの先手を切って最前線に飛び込んでいく、そんな彼の後方をいつ何時も自分は守らねばならない。安心してお前が戻って来れるよう……そうだろう、アグニ。

そのヴァルナの揺るがぬ眸^{ひとみ}に、散々文句を垂れていた野郎どもも、さすがに口籠る。王朝として黄昏を迎えたヴァシユラート、その最期の皇子を護る。ヴァルナは皇室の最盛期以前、ほぼ少年時代からアグニと共にいるのだ。その年月を越えた物言わぬ絆に勝るものは何もなかった。そう、あの運命の天変地異でさえ、何事もなかったとは決して言えないが、共に掻い潜ってきたというのに……。

——例え、あの混乱に乗じて反旗を翻した反抗勢力に実質的な政権を奪われたとしても。我々は海賊パルジャミヤとして生き残った。皇子としての地位を捨て、囚われの日々を送るより、そのプライドを護るためにアグニは自ら覆面テロリストとして、だが。

度重なる海上生活によって、その肌は以前以上に野生そのものように浅黒く日焼けし、しかしそれもよしとして本来の肉体的な健全性を取り戻した。だから皮肉にも、その元の気品あふれる素顔を覚えていた人間は皆無だろう。第一その頃アグニはまだ少年だった。皇子として堅く護られた――。それに例え屈辱的にその素顔を晒されたとて、きっと彼は不敵に笑っていることだろう。

テロという行為も、すべてはこの荒廃しきつた世界で生き延びるための一つの手段だった。すべてを搾取し支配する大国ガイア。ほぼ標的はその得体の知れぬ超大国のみだ。王朝を滅ぼした張本人が奪った祖国インディアナも、イザナギ同様その大国の支配に組み込まれていた。そうだ、復讐以上の何かに突き動かされ、我々は――。

だがただ一つ、ヴァルナは何かを危惧していた。

――重要な案件は、あの島で何が起こったのか、ということだ。あの日もやはり後方で待機していたヴァルナたちには決して窺い知れなかったこと。しかしアグニがガイア軍によって連れ去られたことは事実だ。それ如何によつては、彼が尋常でない危機に晒されていることも考えられる。ただ、その情報は何一つ今は得られないのだ。手下たちの焦りも解る。俺だって本当は真つ先にアグニを救^{たす}けに行きたい。夏を迎え洋上にギラギラと光る太陽が笑っている。それは奇しくも、まるで囚われのアグニを誘っているかのように思えた。

*

そんな、ルミナス……あなたはお母さまを。そうだ、私は母上を。

でも、あたしが彼の意識体を介して知り得たのは、まだ不完全な情報でしかなかった。それでも、あの月の神からもたらされた真実は、彼の過去を垣間見るのに十分だった。彼がどこか遠い過去の王国の神であることは推測していた。だけど、それがどれほどの昔なのか、それにどんな国だったのかも未だに分からない。当然それは、その記憶の主であるルミナス自身も同じだろう。

しかしツクヨミ、彼はルミナスのかつての幼馴染だった（あたしが意識内にダウンロードした事実ではそうだった）。その親しい間柄の相手が……まさかルミナスを殺そうとするだなんて。いや、要するにそれは、ものすごく歪んだ愛情なんだろうと思う。歪んでいる、か。それを言ったらルミナス自身だって——でも、それでも。あたしは怖かった。だってルミナスを欲している月神と魂を共有していたのは……あろうことが聡介君だったなんて。

確かにあの月食の夜、その後、彼がどうなったのか全く知らなかった。まさかそんなことに巻き込まれているなんて何一つ知らずにあたしは、自分の身に起こったことだけで精一杯だった。当たり前だ。聡介君は、てっきり沖縄に残されたものと当然思っていたんだから。そして——。

あたしは、彼に告白された。なのに、その凍えるような冷たさに思わず恐怖した。どうして……。

どうして、あなたはツクヨミと一緒にいるの。それはまるで太陽神、ルミナスと一つになったあたしと対を成すよう。あの“接吻”^{くちづけ}は、聡介君とあたし、それにツクヨミとルミナスの再会の合図だった。そう、身も凍るような——。

心なしか、どんどんルミナスが遠くに行ってしまうような気がする

る。気のせいかな、本当はもっと大事な真実を知ったのに、あえてあたしに悟られまいとしているような、何となくそんな気もした（――現に今だって、ずっと押し黙っている）。

『これで、お前がルミナスと呼ぶ御神を……』

ふと、あの日クロエから託された深緑の勾玉の首飾りの存在を思い出す。色んなことが一辺にあって、しばらく忘れていたけど。物言わぬ艶やかな碧緑に、何となく吸い込まれそうになる。試しに日にかざしてみたけど、どう見ても単なる石にしか見えない。その真ん中に開けられた小さな穴から、変わり映えしないアマテラスの日常が覗いて見えた。

*

『そうだ、そちらの導火線をゆっくり外せ』

睦月真吾はキリアンの指示に従い、汗ばむ指先でそつと作業を続けた。

その爆弾解体作業は、確かに本物そっくりのホログラフィが作る幻影の中で行われていたが、もし万が一失敗した時は、これも本物の衝撃が脳髓を襲うという、たいそうな代物だった。アステリウス内部のシミュレーターームにての訓練。軍司令部から出勤要請がない際は、彼らは常にそういったシミュレーション訓練に明け暮れていた。

ふう。“当然だがイオリゲルも楽じゃない”……ふと誰かの弦きが脳内に飛んできた。睦月がへましたら、こつちまでありがたくないう衝撃を喰らう所だったんだからな。誰が、とは言わない。それはおそらく隊の中で誰もが思っていることなのかもしれないのだから。

イオリゲル第三小隊。小隊長のキリアンや曹長の睦月含め七名で構成された隊だ。全部で第九までである中でも（ちなみに先の無人島の戦闘で第八と第九がほぼ全滅）エリート中のエリート。そのせいか、隊の中に渦巻く感情もやつかみや嫉妬などマイナス感情の率が高い。それでも何とか一つの隊としてやって行けているのは、事実隊長であるキリアンの実力や、それに伴う尊敬の念などが隊員たちの中にあつたからだ。キリアンは締める所は締め緩める所は緩めるという、メリハリの利いた独自の采配で隊をまとめていた。時には軽い冗句も言つてのける。そういった気さくさが時にいつ何時も緊張に晒されている隊員たちの心を解きほぐしてくれた。当然そういったマイナス感情についてもた。

特に昨年入隊したばかりだが、目覚しい実力で実績を上げていった睦月に対して噴出した悪感情は、隊そのもののバランスを突き崩すものだった。何かと睦月が精神攻撃される度、

『お前たちは一体何がしたい。何を求めてこのイオリゲルに入った——？』

そう揶揄し諭した。その求めるものを目指す際の邪魔者が同じ隊の者だったら、まずはそいつと上手くやることを考え攻略しろ。頭で考えるな。お前たちの“神”は正直だ。その思いを共有するのは何より同じ隊の者たちだとまず知ることだ。

真吾はキリアンに何度救われたか分からない。それは実戦においても、そしてこうした隊内でのいざこざが起きた際にも。真吾自身、キリアンに抜擢されてこの隊に入隊したという経緯もあるが、だからといって特別扱いしているわけではなかった。それでも常に標的的にされる真吾にとって、このキリアンは何より信頼のおける存

在であることは確かだった。

とつくに通過儀礼として慣れた脳内への悪感情を気にすることなく、真吾は最後の調整を終えてシミュレーターから降りた。すると、

「睦月曹長、軍の御偉方が用があるそうだ」

キリアンの人懐っこい鳶色の瞳が出迎えた。しかし、どこことなくいつものような気さくさの中にも、引き締まるような緊張感が漂っている。

——どうして自分が？ やはりあの無人島で出会った「龍蛇の巫女」金城瑠美那に関することなのだろうか。

『いや、お前の思っていることは当たらずも遠からずだが……それでも少し違っているようだ』

キリアンが直接脳内に話しかけてきた。隊長それは？

だがそれはイオリゲル第三小隊長のキリアン自身も詳細は一切伝えられていなかった。なぜ自分が。それはやはり——。

*

アマテラスに続き、軍施設がひしめくサノオドームに寄航した母艦アステリウスは、イオリゲルの脳波増幅装置も兼ねているマシンD-2の整備も済ませ、あとは上からの指示を仰ぐばかりだった。本当ならこのままツクヨミドームへでも足を伸ばして特別休暇くらい貰いたいもんだ、先の戦闘の激しさからか、案外それが隊員たちの本音だった。

そんな隊を離れ、一人真吾はイザナギのガイア軍司令部へ向かった。極秘の伝令で伝えられた場所は、その中でもスサノオの最奥にある研究実験棟である。

——こんな場所に、どうして自分が……。

正直言つて瑠美那さんをどうにかしろ、とまた言われるのかと思つていた。だが、この場所はどう見ても彼女には関係なさそうだ。無機質な廊下を行きながら、デユナミスは到着まで封印するように、との御達しを思い出す。無論それは、自らやろうとすればできないことではない。

「睦月真吾曹長、参りました！」

そう告げると、真吾は予め案内されていた、ある扉の前で立ち止まった。

*

イオリゲルの操る人型マシンD-2には、多種多様な名称がついていた。ウル、マルドウク、エンリル、ネルガル、ラハム、イシュタル、キシユ、バラシャクシュ、ナムティラク、ザハリム、ルガルドウルマハ、トウク、ラマシュトウ……。古くは古代メソポタミア神話の神々アヌンナキに由来する。けれど真吾は、それがどんな意味を持つのかなどと考えたこともなかった。ただ自分は、自分に与えられた機体を常に整備し、それを円滑に使いこなすだけだ。

イオリゲルの誇る思念パワーによる動力。その振動する波動を電磁波に変えたものがそれだ。いわばその動力源は睦月真吾たちイオリゲル隊の一人一人であると言える。いうなれば、よく出来たデヴァイス。その核たる部品の心臓部である彼らなくしては起動しない

マシンなのだ。通常はバイク型の水陸両用機だが、それが真の意味での力を発揮するのは、飛行形態に移行してからだ。この地球上で、どこへも行けぬ場所はない。それはデユナミスの思いの力のまま、まさに思う所どこへでも、だ。大海原へ、そして遙かな空へ――。

D-2の機構を開発したのは、古来、現在のガイアに連なる基盤を創設したトッブクラスの人々であると教えられているが、それがどのような人々であったのかも無論よく知らない。知らされているのは、そのマシンとしての基本概念と特別、形としての武器などが必要ないこと（すべて光の粒子――プライムパーティクルがそれに相当する）それと実際に感じているマシンを起動させる際の独特の不思議な昂揚感のみだ。

古来、人は自ら持ち得た能力を超えた力を欲した。その一つが空を飛ぶこと。しかし人は元々本当に望むなら飛ぶことすら可能なものかもしれない。ただ“できない”という思い込みが全てを拒絶し不可能にする。真吾は今さらながらイオリゲルという星の名を名付けられた自分たちの真実に思い至った。

『貴方の考えていることに答えてあげましょうか？』

突然、^{テレバス}想念が送られてきて面食らう。そしてシュツと自動的に目の前の扉が開いた。

目の前の椅子に足を組んで腰掛けていたのは、プラチナブロンドの髪がひときわ輝く、不思議な少女だった。

――どうしてこんな女の子が、こんな所に。そう自然に思うほど、自分が呼ばれたその場とその少女とは実に似つかわしくないものだった。年の頃は二三、四歳くらいだろうか。幼さの中にも不思議と

落ち着きのあるブルーグレイの瞳。そして科学者らしく白衣を羽織ったその姿。しかし丈の短いミニスカートから、すらりとした脚が覗いている。

「落ち着きなさい、睦月真吾」

そしてまた突然、今度は生の声を発せられ、真吾は初めて自分が些か動揺していることに気付いた。

「私はベアトリーチェ・アンカ……この研究施設の研究主任です」

ベアトリーチェと名乗った少女は、自分の座高より少し高い椅子から飛び降りると、すたすたと真吾の前までやってきた。——あなただ、本当にイオリゲル？そう面と向かって訊ねられ、些かムツとする。

「まあいいわ。とにかく今回の経緯を説明しましょう」

先頃、海賊パルジャミヤの首領がガイア軍に拘束された事は知っているわね。というよりそれは、我々イオリゲルが直接介入した事でもあるんだが。相手に見透かされていることを薄々知りながら、
「は、はい」それでも頷く。

「その首領が実は高度な適応力を持つ逸材であることが判明したの」

適応力、逸材。一体何の話をしているのかと思っただが、要するに我々イオリゲルのように、ということか。それにしても、あの海賊の首領が……名を何と言ったか。確かアグニ、アグニ・ヴァシユラート……。

「どうして、あんな海賊が……とか思ったでしょ」

少女は悪戯っぽい小悪魔的な笑みを浮かべた。本当にワイズ博士も酷なことをするわね。そう言いつつ自らも楽しそうだ。あんな逸材は、そうそう手に入りそうもない。そう、あなたたちイオリゲルも相当興味深いけれど。そういうこの娘もデユナミスが使えるんじゃないのだろうか。

「睦月真吾曹長、ガイア上層部からの命令を伝えます」

しかし、突然命令口調でベアトリーチェに告げられ、——ハッ！思わず自動的に最敬礼する。

今回の貴方の任務は、後にイオリゲル部隊と平行して「龍神」確保の任を与えられる、被験体アグニ・ヴァシユラートの監視兼、そのマシンのメンテナンス。要するに暴れ馬の手綱を握れということ。わかる？あなたは「龍蛇の巫女」金城瑠美那と接触し、直にその心を開いた。まあ別に今回も被験者の心を開けというわけじゃないけど、要するに調教……、

そう笑った刹那、次の瞬間冷たい声になり、言った。

「あなたたちイオリゲルも相当の暴れ馬。その中であなたとあなたの小隊の小隊長は唯一人の痛みを知る存在と言っている——だから、もっと冷酷になりなさい」

ぞつとするような、その言葉。真吾はここへ来て初めて、背筋が凍るのを覚えた。

……そうだ、あなたも双子だったわね。知ってる？私にも双子の

姉がいるってこと。確かあなたの弟の睦月諒牙が通っている学校の同じクラスに在籍しているヴェルトーチェカ・アルマ。彼女は本当は一四歳なの。でも見た目よりずっと知能は発達してるから。要するにあなたの弟と同じね。それに姓が違うのは姉が別の家に引き取られたからだ、とベアトは言った。

だけど双子って面倒。どうしてあんな姉としょっちゅう……そこまで口を滑らせ押し黙った。

そして、被験体自身は今、ワケあってここにはいないけど、彼のマシンを見て行って頂戴。そう言っただけでベアトリーチェはガラス張りの部屋の眼下で現在、調整中の真紅のマシンを指差した。

今はこの研究主任をしているけど、以前はあなたたちのマシンD-2の開発プロジェクトの主要メンバーだった……ベアトリーチェ自らが許したのか、彼女の意識から垣間見た情報はそう語っていた。要するに自分たちが彼女の御得意先であり、彼女が自分たちの御意見番であると言いたいのか。

——だからさっき、答えてあげるって……。

そこまで考えて、真吾はやはり自分はこのマシンとイオリゲルである自分自身との関係性について深く知りたいのだと思った。それにどうして、捕虜となった海賊の首領アグニが自分たちと行動を共にするのか、それになぜ自分が抜擢されたのか。調教、ベアトはさつきそう言った。それに被験体と呼ばれていたのも気にかかる。

無数のプラグが繋がれた状態で今、眼前に鎮座する真紅の機体。確かにそれは自分たちのバイク形態のマシンと似通っていた。いや、似通っているなんてものじゃない。これはまさにD-2そのものじ

やないか！そう気付く瞬間的に絶句する。

『——どうしてかって？ それはガイアを創造した古代人に訊くのが一番の早道だけ』

いきなりベアトリーチェの思念が頭の中に響き渡った。

あなたにそれをレクチュアしたところで何かが変わるわけじゃない。そうだ、それを訊いたところで自分に何かが出来るとは思わない。『それでも知りたい？』

「さっきから気付いてると思うけど……」
振り向くと、徐にその場にやってきたベアトが口を開いた。

私もあなたたちと同じ力が使える。でも、そっちより研究者としての才能の方が勝ったみたい。案外そういう人間は他にも沢山いるみたいけど（例えばワイズ博士みたいに……）。

「要するにあなたたちは使い捨て。そのために選ばれた人間なのよ」

言葉は冷たいが、どこかその声色には憐憫に似た感情が漂っていた。いや……違う。ああ、そうか。この子はそのために肉親を失っている？　そこまで思っただけで瞬間的に雷電のような衝撃に阻まれる。あまり関心しないわね！とは言っても、人の心を覗くのはイオリゲルの専売特許だったかしら。

「使い捨ての癖に……！」

そう言い捨てると、ベアトリーチェは続けた。

被験者アグニは、あの龍神のサーペントの体液を新たな血液とし

て体内に試験投与されている。それで何が起こるのかは分からない。だから被験体なのよ。要するにあなたたちも平たく言えば彼と同じね。傍目にはガイア軍のエリート部隊として優遇されてるけど、それは単にその能力が高いからでしかない。それを忘れないように！

ああ、そんなことは端から解っていた。でも、それは自分の意思とは関係ない。自分は……自分がイオリゲルとしてガイアに忠誠を尽くすのは。いや、そうだな。瑠美那さんのことといい、もしかしたら自分は危険分子かもしれない。自分がここに呼ばれたのも、あながち既に軍に全てをサーチされているからかもしれない。それでも――。

「あなた、死ぬわよ？」

ベアトの瞳が突き刺さる。どうでもいい、言葉ではそう言っているけど。

あなたたちイオリゲルも、そして龍神も、それにヴァシユラートの元皇子も、元は同じ起源を持っていたとしたら？ そんなわけ……しかし、それでも考えなければ説明のつかないことばかりだ。

D-2の動力源は光の波動。それはあたかも生命活動のパルスそのものだ。そう、あなたたちの命が動力。論理的にはイオリゲルと同等の思念パワーさえ持っていれば、誰でも扱える。そういう面白い機体なのよ。

でも、私はそんなこと全然面白くない――より思いの強い者が全てを制する。じゃあ、そう信じて報われなかった者はどうすればいい？ 思いの強さ＝生命としての強さだなんていう戯言はあたしは信じない！

そう辺りの空気を圧する言葉が人気の途絶えた実験棟の研究ブー
ス内の高い天上に木霊し吸い込まれていく。

生命としての強さ、か。じゃあ、きっと僕も失格だな。

ふと、そう思っただけで瑠美那さんの顔を思い浮かべる。

しかし、

「金城瑠美那を手に入れるのは至難の業かしらね？」

不意にそう問われて思わずベアトを見る。虚を突かれたような真
吾に何を今さら、といった風に彼女は口元だけで笑う。

ああ、そう。弟さんとヴェルナーチエカによくね。特に姉に
は。まあ今のところ、あなたには会う時間は取れないだろうけれど、
それでも真吾は、諒牙にまた近いうちに連絡を取らなければならないと思っ
ていた。

『オセツカイ』

その言葉を背後に感じながら、真吾は実験棟を出た。

*

真吾がそう思った瞬間に、既に諒牙の元にその“連絡”は届いて
いた。

——兄さんの今度の任務は。

やっぱり一度、瑠美那さんに会わなければならないかな。そう考

えながらも、諒牙の脳裏には不思議な思いが浮かんでいた。なんだろう。なんだかも僕は瑠美那さんに会っているような気がする……。

『なかなか鋭いな、睦月諒牙』

無論、その声は諒牙には届かない。デュナンは苦笑いを口元に浮かべた。

そう、諒牙君の思考を通じて、あたしにもその情報が流れ込んできた。真吾、やっぱりあたし。でもデュナンとして行動している限り、あたしはルミナスの支配の元を離れることはできない。勿論、瑠美那自身としても、この監視の目を掻い潜ってどうにかできるとも思えない。諒牙君、やっぱりあなたに頼るしか――。

でもヴェルも双子で、何よりそんな妹さんがいるなんて想像したことなかったな。というより、僕が彼女に対してデュナミスを使えなかったのは、単にそれほど知りたいとも思ってたから、なのか……。

これはデュナンもだけど、本当にヴェルは不思議な人だ。

諒牙はそう思いつつ、改めて彼女に関心を示す自分自身を感じた。

*

だが、しかし――そのヴェルトーチェカ・アルマは、例の月神ツクヨミの隠れ蓑だった。

その真実を知ったあとで、こちらとして、どう出るか。いや、やはり今は相手の出方を窺うしかないのか。要するに我々は常にあの月神の側にいるということになる。この学園に在籍している限り、

だ。だが、その後ヴェルトーチェカはいたって以前通りで、何ら変わった様子もなくツクヨミのツの字も出てきそうにない。単にその無口な仮面の下でこちらの様子を窺っているだけなのか、それが判りかねるのがどうにも不気味だ。

何も窺い知れぬということは、本当にやっかいだ。

デュナンは蒼白に近い色白の表情をピクリとも動かさぬヴェルの横顔を講習中に見やった。こうなったら、こちらから——いや、何を言っている。誰が好き好んで、わざわざヤツの手の内になぞ。思わずチツと舌打ちする。

その様子を盗み見ていた恋する乙女がいることなど、彼自身はまったく夢にも思わなかった。

——どうしたのかしら、デュナン？

何だかさつきからヴェルばかり、ちらちら見ている気がする。やっぱりあの日、何かあったのかしら。私自身もあの温泉での出来事は何一つ覚えていないんだけど。そういえばヴェルとデュナンって、何となく雰囲気似てるよね。

そう今さらのように思い立ってドギマギする。やだ、どうしたんだろう、あたし……。

そういえば島嶺先生も言っていたっけ。『お前ら、まるで兄妹みたいだな』そ、そうよ。ほんと兄妹みたいによく似ている二人よね。そう胸の内を呟いて自らを納得させようとする。いつかも、あたしをヴェルの所へ連れてきてくれたのもデュナンだっていうし。リリアンは転入当初、デュナンに記憶を封じられた日の出来事を思い出

していた（無論、肝心のことは何一つ覚えていなかったが）。

デユナンがツクヨミンヴェルに気を取られている間、瑠美那の意識であるあたし自身は、その視線に気付いていた。こういう時、女の勘、いや分離融合体というのは実に便利だ。それにしても、リアン……困ったな。ルミナスは当然、放っておけと言うに決まっているし、第一あたしたち、実際それどころじゃないんですけど、っていうのは事実だった。彼女のことなんかより、よっぽど真吾のことの方が心配だ。というのが、やはり本音。

でも、こういうのって平和でいいな――。

思わずそう感じてしまう。そういう意味では、すごく彼女が羨ましかった。本当に純粹で初々しくて。それ以上に龍神とか世界情勢とか、そんな不毛な世界とは無関係な、普通の高校生が普通に誰かに恋する気持ち。当然あたしには、もうそんなもの許されない。だから何となく応援したい気持ちになっちゃうんだけどな……。

「冗談を言え！そこまで思って、どうやら“彼”が気付いたらしい。

第一どうやって――だが日神は表情を変え、ふふつと笑った。やはりお前も直々に彼女と付き合いたいというのか。ならば、そうしてやらないこともない。いや、やってやろう！

えっ？　ちょ、ルミナス……！

慌てて前言撤回しようとするも、もう遅かった。

ツクヨミの一件で軸がぶれ、つい失念してしまったが、どちらにしても、もう一度あの島嶺黎司に近づかねばならないようだ。“あれ”の気配が濃厚にあることは確かだ。あの時はあれ以上リサーチすることは叶わなかったが……と、またしても忌々しげに舌打ちする。

そのために彼女という存在がいたことは、確かに好都合だった。

自分一人が行ったのでは格好が悪い。それに、やはり何かの表向きな理由が必要だ。そのため彼女を利用するのは、最早何より手っ取り早い方法だった。そうと決まると、まるで何かのスィッチが入ったように、日神は頭の中で計算を巡らせた。本当、今までは何の関心もなかったのに……何よ。

あたしは何だか嫉妬しているような不思議な感覚に襲われた。だってデュナンはあたし自身の身体でもあり意識体でもある。そのあたし自身であるところのデュナンが、これから攻略しようとしているのは、彼に気のある他の女の子。そもそも、それをあたし自身が応援したいなんて口を滑らせたのがまずかったんだけど……。

とにもかくにも、あたしは自分自身が、とある女の子に接近しようとしている姿に嫉妬している。ああ、なんてややこしいんだか。

——やっぱりツクヨミのこととか、自分自身のこととか、色々あったからなのかな。

何か壊れた玩具のように誤作動し始めたようなルミナスが気にか

かる。確かに表向きには、それで目的は達成できるのかもしれないけど。目的、か。あたしは再び島嶺叔父の研究について考え始めた。本当は一時でも忘れていたかった、その真実。この間のルミナスの言葉も気になる……父さんと叔父さん、やっぱり何かあるの？

——でも、ルミナス。

『……絶対に彼女を傷つけないでね』

その巫女の懇願の言葉に、心配するな。私はフェミニストだからな、どこで覚えたのか、そう冷酷な表情で、さらりと言つてのけられた。

*

「委員長」

「え？」

それは、あるうことがデュナン自身からの誘いの言葉だった。

要するに自分の用事に付き合ってもらいたいのだが、という内容だったが、捉え方によっては、これが一種の隠された意思表示でないとも言い切れない。リリアンは思わず面食らった。というか目眩に襲われた。

「……やはり君が必要だ」

そんな風に情熱的に迫られたら（彼女にはそう思えた）誰だってそうなるに違いない。どちらにしても今、真剣な表情の色男デュナンその人が、まさに目と鼻の先にいた。

「あの、デユナン」

「だから、君が必要だと言っている……！」

願ってもみない展開に、かえって思わず身を引くリリアンに殊更、歩幅を縮める。

「委員長、いやリリアン・パステイム。君はあの髭面の助教授にいたく気に入られていたようだったからな、だから、ぜひとも同行を頼みたい」

——え？

リリアンは瞬間的に凍りついた。

*

今度の道程は二人きりだった。

デユナンが突然切り出した提案に、リリアンは同意せざるを得なかった。というより、別に反対する理由が見つからない。というか他ならぬデユナンの頼みでもある。リリアンは快く承諾した。本当は内心嬉しさで飛び上がりそうだったのだが、それは持ち前の理知的な対応で何とか隠し果せた。おお

あの研究所に、いや島嶺助教授の研究そのものに興味がある。その割には、あの時は気のなさそうな素振りで話を聞いていたけど……などと余計なことは思わない。でも、だったら睦月君とかも誘ったら？ さすがに二人では色々な意味で心もとない。

しかし、「あいつはダメだ……いや、なんでもない」そうボソツと呟くとデュナンは続けた。

「他の者が一緒に行ったのでは台無しだ、リリアン。いや、リリアン先生」

確かに別の意味で真に台無しなのだが、リリアンには、委員長の頼もしい所をぜひ皆に見せたいだろう、などと言って煽^{おた}てあげた。リリアン自身はそんなこと、どうでもよかったのだが、デュナンに言われると思わずその気になってしまう。

「そ、そうね。みんなを驚かせてみるのも面白いかもしれないわね？」

相槌を打ちながら、につこりするリリアン。

——なんか、色々考えてた割に、ものすごく単純な理由ね……。

まんまと引つ掛かったな、単純なヤツめ、そうニヤリとしていた所を、そう瑠美那に突っ込まれ、うるさい！日神は思わず声を荒げた。

*

そんな経緯で二人は、以前登った山道を逆ルートから島嶺助教授の研究所を目指すこととなった。今度はきちんと事前に道程をリサーチしてやって来たから心配なかった。それでも途中、何度も足を滑らしそうになるリリアンに、デュナンはその度に手を差し伸べ紳士的に助け起こした。

「あ、ありがと……う」

その度に互いの物理的距離が接近し、リリアンは顔を赤らめる。一度は本当にデュナンに抱きついてしまった。リリアンの肩にかかるふんわりした髪の手触りがデュナンの頬を撫で、鼻と鼻がくっつきそうになるくらい縮まった距離に彼女はドギマギした。

「ごめんなさい……いや。そう断りながら、しっかり彼女の身体を抱き締めた。何だかデートみたい。まだ一度も告白してもないのに。リリアンは二人きりのこの登山を思う存分、心に刻んだ。

「あとどれくらい、かしら？」

「——そうだな、あと二時間というところか」

そんなに……さすがにそろそろ休憩が必要だ。リリアンの体力のことと考え、二人はその沢の近くで一休みすることにした。

歩みを停めて草の上に腰を下ろすと、途端に汗が吹き出てきた。ふいに吹き渡る風が心地よい。それに突然、森の自然の数多の音が耳に聞こえるようになってきた。そういえば、川の流れる音がする。

「デュナン、こっち！水が冷たくて気持ちいいわよ！」

掌を器にして清水を掬うリリアンの姿が目に入った。二人きりという照れ隠しもあるのか、リリアンは、はしやぎながら一人でパシヤパシヤやっていた。日の光に水滴が光り、濡れた前髪にも、その光の雫が光っていた。やおらリリアンはデュナンの手を取る。

「委員長、そんなにはしゃぐと危な……」
「きゃ！」

つるつと岩の上の苔に足を滑らせ、二人は小さな沢の流れにバシヤツと尻餅をついてしまった。当然、二人ともびしょ濡れだ。

「ごめんなさい……」

濡れた服と身体を乾かすために焚き火を起こし、二人はその沢で予想外の足止めを食らうことになってしまった。お約束の展開にリアンは悪びれるも、やっぱりことなくドキドキ胸が高鳴っている。こんな風に男の人と二人っきりで過ごすのって初めて。そんな初々しいときめきが彼女を包んでいた。

勿論、互いに半裸状態だったので、焚き火を囲んで背を向けてはいたが。とりあえず簡単なランチは持参していたので、それをつつきながら休むことにした。

「ねえ、デユナン……」

彼がずっと沈黙しているので、リアンはそれとなく声をかけた。

何も話すことがないので、などと言うわけにはいかなかったが、それでも、

「あなたの話が聞きたいなって思ってた――、」

そう、おもむろに切り出した。こんな風に二人だけで過ごすことって、これまであんまりなかったから……そんな言い訳っぽいことを言ってみる。勿論、デユナン自身も彼女の気持ちは察してはいたから、それを無碍にすることはなかったが。ただ、

「俺の話など、面白くも何ともないが……」

こちららも弁解するように前置きしてから、記憶を辿るように話し始めた。

記憶を辿るように――確かにその通りだ。私は自分自身のことなど何も知らないに等しい。なのにこの娘は俺に話せという。それは、なんという苦痛か。だが。不思議なことに作り話でもするように、すらすらと言葉が出てきた。

「俺の育った所は緑が美しい光り豊かな国だった――名をアマテラスという」

「アマテラス？」

奇しくも、あたしたちのドームと同じ名前ね。奇異に思いながらリリアンは耳を傾けた。

「天気の良い日は馬を駆り、よく従者たちと狐狩りに出掛けたものだ……ちょうどこんな木漏れ日が眩しい森に迷い込んだり、夜は月明かりの元で……、」

デュナンの話は、まるで御伽噺か何かを聞いているようだった。それでも、どこか懐かしく心地よい響きに満ちたその声色に蕩けるようだ。だが夜の場面にシーンが移ると、その調子に次第に不協和音が混じるようになった。

気付くと次の瞬間、デュナンは苦しい表情で眉を顰め、頭を抱えていた。

「う、うあ――ッ」

「え？ デュナン、どうしたのデュナン！」

背を向けていたリリアンは、思わず向き直ると立ち上がって下着姿でデュナンに駆け寄る。

しかしデュナンは、一向に回復する気配がない。

*

その美しい琴の調べは、月夜をあまねく満たしていた。

『——クスヒ、私たちはこれから、ずっとこうして一緒にいられるでしょうか?』

『何を言うツクヨミ、私たちはいつまでもずっと一緒だ』

その言葉はまるで永遠の誓いのように心に響いた。そう、あの月影の夜のことは、ずっと忘れない。忘れるものですか……一時たりとも。

ハッとして目覚める。最初に視界に入っただのは、半泣きで自分を見つめるリリアンの心配そうな表情だった。

「デュナンよかった! 一時はどうなることかと思ったのよ」

見渡せば、すっかり日は落ち、ただ焚き火のパチパチと爆ぜる音だけが響いている。

——すまない。とんだ足止めを食らってしまったな。そう言いつつ、ゆっくり起き上がろうとする。が、

「うつ」

呻くと、デュナンは再び倒れこんでしまった。酷い頭痛がする。
「まだ起きちゃダメ、おとなしくしていて」

そうは言っても……手で額を覆いながら考える。するとリリアンの声が追いかけてきた。確かにここは携帯の圏外だけど、明日の朝には何とかかなると思うわ。そうだな——そう低く呟くと今度は異様

な眠気が襲ってきた。

*

夢魔の統べる眠りの縁へようこそ。

そんな声が耳元で響いた気がした。

かと思うと、天地がひっくり返るような目眩を感じて、次第にどこかへ落ちていく感覚に捕らわれる。『デュナン、デュナン！』リリアンの叫び声が小さく聞こえたが、それも次第に聞こえなくなつた。気が付くと蒼い月光に包まれていた。そして聞こえる、妙なるハーブの音色。

『お帰りなさい、クスヒ』

またしても、その穏やかな声が出迎える。

その声の主は豎琴を手にしたまま、にこやかに微笑んだ。何だかとても安らかな気持ちになる。

『それはそうです、貴方はやっと帰ってこられたのですから』

——ツクヨミ。そう呟くと疲れた身体を寝台に横たえる。北の遠征は何とか押し留めた。これでしばらく此処は安泰だ……そう夢見るように目を閉じ呟く。気が付くとツクヨミは肩のヴェールを羽だけ、ベッドに腰掛けていた。美しい人——そんな溶けるような言葉とともに、頬を滑る指先の感覚。

思わずその細い手首を掴むと、強引に抱き寄せる。

「ああっ！」

だが、高い声を上げたのはリリアンだった。

眠っていたデュナンに突然手首を掴まれ、驚いて身を引く間もなく、リリアンは強い力で抱き締められた。

「デュナン！やめてデュナン！」

そう叫ぶも、その言葉は彼には全く届いていないようだ。ようやく温まった残りの体温を奪うかのように、デュナンはリリアンの上着を羽織っただけの肌着姿の背中とウエストに手をかける。その探るような指先の仕草に次第にリリアンも正気を失いつつあった。

次の瞬間、反転してリリアンの上に覆い被さったデュナンは、据わった眼差しのまま、その唇を唇で塞いだ。

「ん、んん……っ」

息も絶え絶えに、とろんとした瞳になったリリアンは強引に求めてくるデュナンのなすがままだった。僅かな息遣いの隙間に開いた唇から舌を滑り込ませてくるような濃密なキスは、勿論初めて。はあ……っ。まるで荒れ狂う波に揉まれるように、リリアンは身を擦り必死に抵抗するが「！」下着の上から両乳房をまさぐられ、ハツとするも時、既に遅しだった。

リリアンの胸はスタイルのよい外見からも判るよう、平均的なガイア人のそれ以上の両の手に余るような豊かなものだった。それを文字通り驚掴みにされ、思わず声を上げた。それでも嵐のようなデュナンの愛撫はやむことなく続き、次第に自然と腰が浮き上がるような動きにリリアンは我を失った。

この感じ……時折、一人で自分を慰める時に感じる——でも今は、自分の身に覆い被さる男性それ自身からもたらされる強い力で。そ

の何ともいえない昂揚感に、蹂躪という言葉でさえ心地よく感じる自分自身を疑った。

——ねえ、して……して。そうねだっている自分自身が確かにどこかにいる。「ううん……」

ついには肌着を肌蹴られ、つんと尖った頂点を口に含まれる。そして今度は四つん這いにされ高くあげられた腰を掴まれ……ああ。しかし、夢想はそこで終わった。

——ダメ！起きてルミナス！

「瑠美那……っ」

え？ 半眠半覚醒状態だったリリアンは耳を疑った。デュナンの口から確かに零れ出たその名前。うそ……。

自分でも、どうしてそんなことをしたのか覚えていない。

ただ、やつの、ツクヨミの姿を夢の中に見た気がした。どうやら森の夢魔に半分喰われていたらしい。奴らは消耗しきった者が眠りに就く頃を見計らってやってくる。こんな人工のドームにも精霊が住み着くようになったか、やれやれ。

——やれやれ、じゃないわよ！しかし、瑠美那のけたたましく響き渡る声にムスツとする。確かにお前の声を聞き、その名を呟いた瞬間、ようやく目が醒めた。だが、あれは私の本意ではないのだぞ。あくまで夢魔が彼女の隠された欲望を解き放ったまでのことだ。それに……。

ルミナスは再び忌まわしい月神の姿を思い出して眉を顰めた。そ

して異物を飲み込んだように、苦しげに喉元を押さえた。あんなものに愛撫され、それを欲していたなどと。それでもルミナスの苦しみは、そんな単純なものではない気もした。

夢。……そう、あれは夢だ。現にデュナンは目の前で何事もなかったかのように迅速に身支度を整えている。そして私も。リアンは眩い朝日が差し込む川縁で、そのことにほっとするかのように一人溜息をついた。でも。

確かにあの時デュナンは「瑠美那」という名を囁いた。そのことだけは不思議と夢ではないと思える。女の子の名前……あたしかったら、どういふつもりなの。思わず寂しげに人知れず頭を振る。彼が誰と知り合い、これまでどんな時を過ごしていたかなんて、あたしには関係ないことじゃない。というより一人で思いついていたのは、あたし。だから、あんな突拍子もない夢を見るんだ。

「どうした、委員長」

うつん、何でもないの——不意に声をかけたデュナンに何事もなかったように言葉を返す。それよりよかった、今日の午後には何とか島嶺先生の研究所に着けそうね。ああ。平静を装い、その無表情な横顔を見つめながら、それでもリリアンは、どこことなく淋しい思いを拭えなかった。

*

要するにこいつの存在が、全ての元凶であり始まりだったってわけだな。

相変わらず死んだように眠り続ける“胎児”を見下ろしながら苦

々しげに笑った。実際、実験に参加していた島嶺自身にも「コレ」が何なのか判っていない。当たり前だ。もしかしたら前時代どころか有史始まって以来の発見になるかもしれない、そんな物の正体がそうそう解ってたまえるものか。

だが、どちらにしろ、こいつがヤツをおびき寄せる大きな餌になることだけは事実だった。蛇の癖に卵でもない人間ひとの形をした宝を欲する……そういえば勾玉が二つ合わさった形を太古では陰陽の究極の姿だとしていた。陰と陽。男と女。例え蛇とはいえど、その交尾はかなりの長時間に及ぶという。そんな濃密な時間をたった三ヶ月でもあいつと過ごした瑠美那は。

ふっ——こいつぁ嫌でも女ぶりが上がるってワケだな。

……そう、嫌でも。

「今度は正面から乗り出してくるかもな、」

その島嶺の予感はずかに的中していた。遠からず、確かにたった一人ではなかったが、瑠美那とその龍蛇の神は再び此処にやって来ようとしていた。

少しずつ少しずつ、何かが変化しようとしていた。アグニは横たえられた身をほんの少し起こそうとした。しかし、

「う……っ！」

強烈な重力に引き戻される。身体が重い。未だ朦朧とする意識の中で額に手をやる。窓の外には眩しげな光が降り注ぎ、穏やかな小鳥の声が満ちていた。ここは……どこだ。初めてそのことを意識した。これまでは時間も、そして場所も一切が感知し得なかった。だが今はやっとそのことを改めて考えることができる。そして、ようやく思い出したように残してきた仲間達へ思いを馳せた。

ヴァルナ……。

頭のいない状態がどれほど経過しているのか。だが、あいつなら俺がいなくとも、きっと。海賊パルジャミヤは、いつ何時もパルジャミヤだ。それでも、どこか心配そうにしている友ヴァルナの顔が脳裏に浮かぶ。心配するな……俺は大丈夫だ。

しかし、そう思いながら身体は言うことを利かない。そして意識も。俺は誰だ？ 唐突にそんな疑問が湧いて出る。決して忘れてはいけない。そう何度も念じつつも、次第に心が身体から離れていく。もう一人の自分が、深い眠りから目覚めるのを今か今かと待ちわびている。

アグニ！そう、お前はアグニだ……！

まただ。また、誰かの声がする。その声の主が誰なのかも、もう

思い出せない。

だが。忘れるな——！　そう何度も響き渡る声をせめて辿った。
何度も何度も、繰り返し。

＊

『アグニ——思い出せ……！』
クロエの必死の呼びかけに、相変わらず彼は答えようとしなかった。

あのサナトリウム——見かけ上は——に、アグニはいる。辺りは濃い緑が鬱蒼と茂り、この施設を文字通り人の目から隠していた。人気のない森林を、時折鋭い啼声を上げて鳥が行き交う。ここならば今度こそきつとアグニに合間見えるだろう。休息という名の一時の無の時間。だがそれは、新たな命が目覚める一瞬の嵐の前触れに過ぎない。だからこそ……。

私にはお前を救^{たす}ける義務がある。義務？はたしてそうなのか。むしろ、そんなものよりずっと確かな何かが自分を駆り立てているとしか思えなかった。確かにクロエにとってアグニは命の恩人。だが、その恩以上の思いが今ここにある。

そう、クスヒ様——。

あの方がこの同じドームに来ていることは、既に感知していた。アイツに託した勾玉^{たま}が、この剣と反応していた。アイツはアイツで、かの人とは分離したが、それでも融合体としての強い思念が二人を常に繋いでいるのだ。けれど私は、まず彼を奪取しなければ。クロエは逸る思いをようやく押し留めて再び慎重に歩みを進めた。

*

——…カグツチ。

このアマテラス、そしてツクヨミドームにやってきたのは、財団のオーパーツのありかを探るためだけではなかった。実際、そちらの方が優先的事項ではあったが。あの神の島で失った自身の片割れ。覚醒めたばかりで、その力もままならぬ状態では、突然襲ってきた数多くの敵からの攻撃に、なす術もなかった。幸い己自身は瑠美那との融合により、こうして力を温存できた。しかし。

かつて神人がその力の象徴でもある輩ともからを失うことは、己自身の半身を失うことでもあった。それ以上にカグツチは……この時代せかいで唯一の昔からの友だった。そうか……ルミナスが激しく怒ったのも無理はない。あたしは改めてそのことを思い返す。確かに彼には、もう誰一人傷つけて欲しくないけれど。

しかし、そのカグツチの生体エネルギーが、このドーム内に満ち満ちていることだけは確かだった。龍蛇の血脈は、それほどまでに強く容易くその生が途絶えることはない。その“血”そのものが、新たな命自体を求めるのだ。そう、例えば元の肉体が滅んだとしても。

第一私自身が——こうして瑠美那の生命エネルギーを摂取し、その性の交わりによって新たな肉体を得た。だからカグツチも。

そのことは容易に推測できた。だが今は、まず本懐であるところの“宝”のありかを探らねば。

*

「ねえヴェル、先輩たちは無事に着いたのかな？」

結局、何も知らされずに発った二人、デュナンとリリアンの道程を心配するような、そうでもないような口調で諒牙は訊いた。というより……あの二人、上手くいったのかな。実際そっちの方が気になるところだ。にっと笑う諒牙に向き直り、ヴェルはただ無言で頷いた。

——きつとデュナンはリリアンを使つて。でも、不思議とそんなに上手く行かない気もした。ただ今できるのは、諒牙の興味の方に話を合わせておくくらいのものだろつ。

でも、不器用なああの二人のことだからなあ……諒牙は言いつつ、楽しそうに目を細めた。

*

「あちらに到着したら、上手く話を合わせてくれ」

他ならぬデュナンの頼みだった。確かにそれは、学生の本分としても勉強熱心な姿勢に準じたものに他ならない。だから一切、怪しい素振りなどどこにもなかった。言ってみれば夏休みの自由研究——くらいのものだろう。正直デュナンがそこまで研究熱心だとは思わなかったが、そんなことを言ったら彼に失礼かもしれない。

「爬虫類の卵？」

しかしそれは、考えようによっては奇異な研究対象だったかもしれない。

——ああ、そうだ。島嶺助教授が今最も力を入れている研究対象、それをぜひとも拝みたい。それが爬虫類の卵？ 第一デユナンは、どうしてそのことを知っているのだろう。リリアンは少しだけ訝しみ首を傾げた。だが、

「この際、それをこのリリアン組の研究材料にしてみたらどうだろう。どうせまだ発表内容は決まっていらないんだろ？」

確かにそう言われたら、返す言葉がない。実際デユナンのことばかり考えていて、こちらに来てまで不甲斐ないが、この勉強会での研究内容は未定だった。デユナンにまで「リリアン組」と命名されたのが些か気になるが、そんなことは確かにこの際どうでもよかった。

しかし、島嶺教授が行っている研究内容が、まさかそんなものだとは。爬虫類。卵。そう、我々哺乳類が、いつしか進化の果てに捨て去った受胎形態。私たちは壊れやすく不安定な「卵」という形を捨て、直接、母の胎内で受胎する方法を選択した。そのため格段に進化の道は早まった。哺乳動物という、この形態ならば、例えば氷河期が来ても耐えられる。その生命としての四六億年の記憶が、そう確信する。だが……。

精子と卵子を掛け合わせ、それにより受胎する方法では、いずれ不具合が生じる。それが人類という進化の落とし穴だ。男と女という一組の種により繁栄を続けてきた人類の一つの枷。我々は畢竟そういう危険な賭けによって種の存続を行ってきたのだ。

それは、男の有するY染色体の持つ宿命に起因する。二組のX染色体を持つ女性は、その相互作用により、新たな子を産む度にそれぞれが補完しあい互いの劣化を防ぐことができるが、単体である男

性のY染色体にはそれが不可能だ。そう、いずれ男性種は滅びに瀕する……そして人類それ自体も。
だから。

「……何とも皮肉な話よね。一組の夫婦でしか子供を生まないあたし達は、それだけ大量の候補の中から質のよい精子を選ぶことができないなんて」

昨日の夢のこともあって、自分で言っていて、ちよつと恥ずかしい。

「そうだ。卵で子を産む爬虫類では、例え雄がいなくとも処女懐胎が可能だ。だが、精子の遺伝子によって胎盤を形作る哺乳類では、雌だけで子を作ることとは不可能だ」

——ただの猿のように野生に返って乱交することはできないだろう。そうね。だからこそ、あたしたちには知性があり、そしてその弊害として……。理性の代償、か。だったら、その枷を外したら、あたしたちは、あるいは。

デユナンとの何気ない会話に、自分自身の思いが重なって、何だか少し躊躇する。

「試験管による体外受精や顕微受精など生殖テクノロジーによる新たな種の保存方法も試みられたが、しかし、そういった対外的方法を続けること自体、精子の更なる劣化を招くことに他ならない」

卵、タマゴかあ……あたしたち、もう一度進化の道程を遡った方がいいのかしら？

何気なく言ってみて、ちょっとぞつとする。それって爬虫類、もしくは恐竜の時代に戻るってこと？ 仮説では恐竜は宇宙から飛来した小惑星並の巨大隕石が落下して絶滅した。今も、そしてこの先の未来にも、その可能性は決してなくはない。それはともかく、爬虫類ならできることが、今のあたしたちにはできない。

でも、島嶺先生は、なぜそんな研究を――。

「確かに爬虫類の卵だったら、それができるかもしれないわね」
「何だかこの先、人類が絶滅した後に、マジで爬虫類人とかが誕生しそうだ。」

そんな冗談みたいな考えを振り払って、リリアンは先を進むデュナンとともに山道を急いだ。

*

「あれっ……？」

何だか急に下着がきつくなったような気がする。水泳の授業の後、あたしは更衣室でおかしな違和感に気がついた。そういえば、なんだか……胸が。妙に乳房が張るような異様な感覚にビクツとする。そういえば男子生徒ばかりか、女子生徒たちの視線までもが妙に自分に集まっていたような。

それ自体は、スポーツ万能であるところの沖縄育ちである自分自身に起因しているのだと思った。確かに陸上の短距離走でも、それに水泳の一〇〇メートル競泳でも常にぶつちぎりで一位を獲得していたあたし。そんな自分に注目が集まらないわけがなかった。龍蛇の巫女だし、ほんとは目立った行動を慎んだ方がいいのかもしれない

いけど、逆にそういうストレスをつい発散したくなる。

でも、これは。やっぱりルミナスと日々変なコトしてるからかな。“変なコト”——確かに。眠りに就けば、男の子になったもう一人の自分自身が目覚める。そして、このところ続いたルミナスとの……男と女で自分自身が二人いるような、そんな妙な二重生活。それどころか、龍蛇の神とのセックス。違う、あれはそんなものじゃない。だって肉体ではない。感じているのは脳^{あたま}。肉体など、ただの器でしかない——そういえば、ルミナスはそう言っていた。

じゃ、これはなんなの？ どうなっちゃうんだろう、あたし。無意識のうちに胸の頂を弄りたい衝動に駆られる。ていうか、誰か吸って。お願い。

「あ……っ」

仕方なく密かにその夜、痛いくらいに熱く火照った乳房を絞るように揉みしだいた。どうせそのうち、眠りに落ちれば……あたしはあたしでなくなる。そして自分自身を慰めなくても、きっとルミナスが。でも、その時はまだ気付かなかった。まるで、あたしの背中に羽のような刺青が刻まれていることに。

*

「処女懐胎、か——」

いずれ瑠美那は、やつの子を宿すかもしれない。男のY染色体同士。その二組を有した男児。それが、近い将来目覚めるであろう、こいつってわけか。

いずれこの世は女ばかりになるのだと思っていた。しかし、そう

なると人類は終わりだ。しかし、やつの出現が全てを覆した。要するにあいつは救世主ってわけなのか。馬鹿馬鹿しい。瑠美那を喰つていて救世主も何もあるかよ。それに、何も我々人類の……ってわけでもないしな。

島嶺は案の定、鎌首揃えて再度やってきた少年と少女を出迎えた。ま、近いうちにまた来るんじゃないかと思ってたよ、そのくらいは言ってるでもいいだろう。やつこさん、今度は学園の美女同伴^{マドンナ}と来た。あいつが恐怖の蛇男だと知ったら、さぞかし腰を抜かすだろうな。そういや、竜堂教授の一件で彼女は……おそらく既に籠絡済みってわけか。やれやれ、まったく恐れ入りますってね。

瑠美那とやつとの交わりは、魂同士の交わりだ——つまり霊体アストラル体の。つまりそれが、それによって生み出された種が、どいうわけか、この得体の知れない物体に宿るってか。メシアとは鰐^{ワニ}のことだという。鰐イコール、爬虫類だ。まさか、やつらの樂園が始まるってことじゃあるまいな。だが、そうなる前に——。

「一体どういう組み合わせだい？ ま、委員長さんは解るとして……」

島嶺にそう問われ、思わず二人して顔を見合わせる。

「デユナンの提案……じゃない、あの、ぜひとも先生の研究資料を拝見したいなって」

半ばしどろもどろなりリアンに続き、デユナンがきっぱりと口を開く。

「大学の論文を拝見したんです。とても興味深い内容で……ぜひ一度」

そう、それは俺自身がこの天照大に在籍していた頃の。畳み掛けのようにそう言われ、まあいいだろう。快く了解した。だが。

——くれぐれも、口外なしだぜ。

念を押すようにそう告げられ、二人は地下の閲覧書庫へと案内された。

*

「大昔の地上は、こいつらの御先祖たちの楽園だったなんて信じられないけどな」

延々と続く書棚の向かいの棚に置かれたホルマリン漬けの蛇やらトカゲやらの標本。超温暖な気候と豊富な酸素、豊かな生態系。確かに中生代の昔は彼らが巨大な体躯を堂々と維持できるほどの好環境だった。しかしその爬虫類の楽園は氷河期の到来により突如激変した地球環境によって、いつしか滅んだ。

——それが、今は。

吸い込まれていきそうな暗闇の中で僅かに点された明かりに照らされたガラス瓶の中のシルエットが不気味で、思わず沈黙してしまうが、

「卵生である彼らが生きていく環境は、以前のような大々的なものではないにせよ、それでも卵には卵の特性によって生き延びる縁が、この地上に残されていたってことなんでしょうか？」

ようやくリリアンがそう質問した。

……そうだな。振り返り、ちらとデュナンの方を盗み見つつ、島嶺は答えた。

「むしろ哺乳類である我々人類の世は、そろそろ終わりを迎えようとしているのかもしれない」

そんな終末論、いつ何時だって多方面で論じられてきた。それでも、それがいつ来るのか解らない。一〇〇年先、いや、もしかしたら五〇年先。我々はいつだって、ただ刹那の命を無言で紡いでいくしかない。一足先に滅んでしまった恐竜たちが、どこかでせせら笑っているような気がした。

「だが、まだ生き残る術は、確かに残されている——」
ふと呟くデュナンの言葉に二人は振り向いた。

どうかすると生命は滅びへの道を自ら選んでしまう。いや、それは進化した果ての繁栄が愚かに選択してしまう無意識の行為だ。しかし同時に生命には何があっても生き延びようとする根源的力がある。こちらに至極無意識的、潜在的意識。おそらく恐竜たちも、本来の意味では滅んでいないのかもしれない。例えミニサイズになっても地上にその種が細々と栄えていることは事実だ。そして……。

俺たちの脳あたまの中にも、その“本能”が密かに息づいているのかもしれない。

島嶺は、思わず肩を竦めた。

「ま、どちらにしても面白いテーマであることだけは確かだ」
君たちは目の付け所があるな、いや、“君は”か。

数分暗がりの中を歩いたのに、まだ書庫は奥まで続いている。――

体どれだけの資料が眠っているんだ。島嶺がこの施設を任されたのは、ついこの間だというのに。確かに俺自身も、まだほんの一部分だけしか拝めていないんだが、が、そんなものは、この際どうでもよかった。

「実はこれから見せるものは、曰くつきの代物でね、」
そうもったいぶって前置きする。本当に特別さ、“君たち”はな。

そう言われて、リリアンは少しだけ怖くなった。デュナン……。

思わず傍らのデュナンに擦り寄る。だが当のデュナンは、心なしか瞳の奥を光らせ、じつと島嶺を無言で見つめていた。

——いずれ、この地上は“私たち”のものとなるのです。

そのため、貴方はこの時代によりがえった。そうでしょう、クスヒ。

あの娘は畢竟そのための贅^{ニエ}でしかない。それを心の底で貴方は愛している……実に嘆かわしいことです。やはり貴方は姉上の息子なのです。そして同時に兄上、スサノオの実子でもある。私はそんな貴方がとても眩しい。光と闇、愛と力とを同時に兼ね備えた唯一の存在。だからこそ。

傍らで眠る聡介。ツクヨミの靈力^{よりしろ}で結び合わされた力。それが一定時間の後尽きると、今度は依代であるヴェルトーチェカが目覚める。彼女はその昔、ベアトリーチェと呼ばれ重宝されていた存在だった。何に？ ふふ、知れたこと。私たちのような、負の魂を持つ者たちに、ですよ。

聡介ですら、その感情に逆らえなかった。そのマイナスの磁極に気付いた瞬間、彼は愛するものの存在に気付き、そしてそれを力づくで奪う己自身の裡の力に気付いた。だからこそ私は、この世に顕現することができた。そう、貴方を追って。

「でもまだ、そのヒルコに触れることは叶わぬのかもしれませんが……」

何かが不完全のままなのか、そして、もう少しだけ時間が必要なのかどうか。

——いや、むしろ。

本当の意味で龍蛇の巫女の力を取り込まなければ。というより。

ツクヨミは月を読む。それはすなわち、世界と未来の行く末を闇の時間で推し量ること。その私の心眼が伝えている。あの少女自身が、彼自身を受け入れねば。——なんという因果な役割か。

「ふつまさか、ね……クスヒ、ただ私は貴方を手に入れただけ」

本当の勾玉たまのありがた。 “それ” が宿らねば、その秘宝ですら、ただの石塊でしかない。ヒルコ。我らが始祖イザナギとイザナミが闇に葬った哀しみ。兄妹神きょうだいであることの禁忌の交わり。例えそれが確かな実を結んでも同じことでしょう。アマテラスとスサノオですら、そうだった。彼らから生まれた貴方。そして、貴方とその巫女も。

——禁忌の神クマヌクスヒ。何と甘美な響き。

永遠に月が照らしているような、そんな幻の宮でツクヨミは人知れず微笑んだ。

*

.....

.....

『日が月に飲み込まれし夏至の夜、運命の皇子みこが産まれます……』

——それは真まか、ツクヨミ。

我が心眼ひしめに曇りなきことが真実であれば……。

我が姉君にして、この国を統べる全知全能の日巫女アマテラスと、その弟、軍神スサノオの子。その使命のまま、偽りなき宣託を包み隠さず述べること。それはそのまま、我が身の危うしを示していた。事実私は、その日から陽の光の差さぬ牢獄へと囚われた。だが元より闇夜を照らし、その月の暦で全てを占うのが私の役目。例えばこの身が何処に幽閉されようと違いはないでしょう。そう、貴方に出会うまでは……。

——『貴方は誰？』

『私……？ ツクヨミ……貴方の真の愛人となる者』
まこと まなびと

美しく成長した貴方に出逢ってから、私の心は変わった。

ああ、クスヒ。憂いを含んだ月の光は、それを照らす太陽の眩しさのなせる技なのだと。ならば。

クスヒ、クマヌクスヒノミコト。祖が母君アマテラスノミコトの真の罪深きを御知りか……。私は歳を取らない。幼い少年だった貴方は美しい青年になり、歳の離れた幼馴染として知り合い、いつしか私たちは互いに愛し合うようになった。そう、それは昼と夜とを隔てた秘められた想い。

——そして。

あの日食の日。祖国アマテラスの女帝は、その愛する皇子の手にかかり。唯一人この世から隔絶させられ、日神の子としての証である称号も与えられず、秘されし皇子として文字通り隠されしクマヌクスヒ。だがそんなことが理由ではなかった。

母アマテラスの輝きと父スサノオの猛々しさを同時に兼ね備えた運命の日皇子。私は“真実”を貴方に教えただけなのです……。

そして私たちはスサノオの追撃の手を逃れ、共にこの地上を去った。だのに……。

貴方はなぜ、いずこかに囚われてしまったのですか。

私の心眼でさえ届かぬ真の闇に。ただ再び蘇るその日を今や遅しと待ち続け早幾年。

その間に地上はすっかり変わり果ててしまった、いや。

とうにアマテラスは、まほろばの幻の国へと化した。

だが――。

貴方こそが、かのアマテラスを凌ぐ、いや、昼と夜とを兼ね備え従えた、真の霸王となるのです。それこそが我が本懐。だからこそ運命の日食が起き、女帝アマテラスは身罷った。何より貴方自身の手により。貴方の苦しみも哀しみも、すべてを私が共に預かると誓った、この心に偽りは無い。そして何より貴方は強い。なのに、何を躊躇う。何を怖れる――。

「……クスヒ」

「私の与^{あずか}り知らぬ、もう一つの世界で貴方は――」

……あの巫女^{むすめ}と出逢っていた。同時に存在する二つの世界。この私でさえ、そのような妹巫女^{むすめ}の存在が在るなどと。いや、

おそらくアレは。この世を映した鏡の向こうの世界、あちら側か

らの。

——そして、イザナミの呪い。

*

あの方と出会ったのは、私が近衛隊の準剣士として皇宮に配された翌日だった。

日神アマテラスとその腹心スサノオの皇子。しかし、その存在そのものが秘され、表向きはツクヨミの養子として宮で養われた、私はその方の護衛を任されたのだ。

凜として常に何者をも寄せ付けず、しかし神々しい輝きを身に纏ったその御姿。艶やかな黒髪、そして漆黒の闇を映し同時に不思議な光を宿した紫水晶の眸。何もかもが不思議に満たされた隠されし御皇子。

「クマヌクスヒ……私の名の真の由来を知っているか？」

そう、その通りだ。隠されし光。……そして闇から生まれし真の光。だからこそ母上と父上は、私を怖れたのかもしれない。軟禁も同然の日々。生まれた瞬間から忌むべき存在として、偽りの肩書きで育てられた。何もかも、未来それ自体の奪われた生。

——そんな私に仕えることとなった己の運命を呪うがいい。

ああ、そうか。だから私は……元々私の家柄は低く、だがしかし女だてらに己の実力のみで申し上がり、しかも皇族ばかりでなく常に下々の民をも分け隔てなく手厚く扱い助けた私を快く思わぬ者達の差し金か。けれど。これは、まさしく「運命」だったのだ。

私はかの人に仕えることとなった、その命を呪うことも嘆くこともなかった。かの人自身が言うような思いをしたことは一度もなかった。それどころか。真にその気高く、そして美しいかの人の魂に次第に惹かれていった。いや、決してそんな浮ついた気持ちではない。

いつしか漆黒の闇に飲まれていきそうな、だのにその寸前で己自身を忍留めているような危うさ。そして何よりその隠されし奇しき輝きは、見る者全てを引き付けた。私には、かの人が己自身の生まれを呪っているようには、とても思えなかった。それどころか、真の己自身の光を心から求め信じている。その確信から来る自信。そしてその隠し切れぬ眩しい磁力が、かの生まれの真の気高さ神々しさを物語っていた。

……だから私は時折、己自身を蔑むように嗤うあの方が哀しかった。

——そして、怖ろしい。

クロエは思った。なぜアグニの体内にあの方の分身が巢食ってしまったのか。

無論、それを強要したのはガイアの連中だ。彼は単なる実験材料にされただけのことだ。が、それ以上の引力が二人の間に働いたような気がしてならなかった。その血を受け継ぐものとして、双方が同時に引き付けあった。単にあの場にアグニが居合わせたのは偶然なのか、それとも。いや……そうだ。元はといえば、私が言い出したのだ。彼をそそのかし扇動した。その心が求めるものがどこにあ

るのかも知っていた。それは私だ。

だからこそ私が動かねば。例え血にまみれた運命に飲み込まれて行こうとも、私は私の主人とともにあらねば。そしてアグニも。もし、かの人と彼が同じ宿命を背負うのなら、私は常にその双方の向かうべき魂の真のありかを、この目でしかと見つめていかねば。

——私がアグニとともに在ることは、あの方とともに在ること。

しかし、アグニはその為の仮の我が拠り所ではない。私は同時にどちらの魂をも見つめている。そう、独立した二つの魂として。

……それはおそらく、闇そのものの真実を見つめることになるのかもしれない。

クロエは、改めて龍蛇の皇子としての、かの人の真実を思った。

*

「コモドドラゴンって知ってるかい？」

別名コモドオオトカゲ。まさに絶滅した恐竜そのもの、世界最大のトカゲで生きた化石とも言われている。そいつが単為生殖ってやつをやったのけたのさ。要するに処女懐胎。大型爬虫類では、初の快挙ってわけだ。雄と雌による生殖行為に頼らず、雌だけで身籠った。交尾なしで子を産むなんて、生としての喜びを知らずに可哀想に、ははっそんなわけもないか、と笑う島嶺を他所に、デユナンは一つの水槽に目を凝らした。

「こいつの鋭い牙には毒があり、噛み付いた獲物の血液の凝固を妨げ、失血によるショック状態を引き起こす——」

そんな物騒なオトカゲだ、まさしく生きた化石のまま、おとなしくして欲しいもんだがな。そう呟く島嶺は、デユナンが目にした小振りの水槽を忌々しげに顎でしゃくった。その中には、今にも殻を割って出てきそうな卵が複数眠っていた。

「この卵って孵らないんですか？」

リリアンの呈した素朴な疑問に、ああ、そいつは標本だからな。素っ気無く返って来た返事に、当たり前だと思いつつ、何だか哀想な気もして彼女は再びその卵を見つめた。コモドドラゴンといえば、絶滅危惧種。それでも、こんな所に孵らない卵が保存されている。これもかつての天変地異のなせるわざなのか。それでも生命は、確実に子孫を残そうとしている。例え雌だけになっても単体で子供を産もうとするなんて、なんて強いんだろう。

何だかレプリティアン、先程の爬虫類人の話もあながち嘘でない気がしてきた。

——そういえば、コモドドラゴンの生息地であったインドネシアのコモド島には、こんな言い伝えが二種類あるそうだ。島嶺の言葉に二人とも振り返った。

ある王女が生んだ双子の兄妹きょうだいがいた。兄は人間だが、その妹はオトカゲだった。あるいは別の話では、兄の子供がオトカゲで、妹の子供が人間。その二人を結婚させようという話。どちらにしても、人と爬虫類の交接を嫌でも思わせる。だから現地の人々はコモドドラゴンに襲われても、絶対に故意に傷つけたりしないのだそうだ。我々は彼らの兄弟だからだと。そういえばインドネシア含め東南アジアには、兄妹神きょうだいの神話が数多く存在する。それは、このイザ

ナギ——日本も同じだ。

「なんで人間はこうも近親相姦とか蛇神とか、そういうことばかり考えるんだろうな」

いや、ばかり、とは限らないが。デュナンはそう思いつつも、自らについて深く考え及ばずにはいらなかった。というか、こいつ、やっぱり多少は勘づいているのか。

「その方が強い血を維持できるからじゃないか？　もっとも近親相姦がそうとは限らないが」

デュナンの言葉に、改めて蛇やトカゲの生命力の強さを思い返す。せめて神話の世界だけでも、人は兄と妹が結ばれ、その濃い血脈が永遠にこの大地に栄えることを願ったのか。

——どうでもいいが、そう切り出したデュナンに島嶺は思い出したように、ああ、すまん。そしてもったいぶったように念を押した。

「要するに今から見せるコイツは、俺の大事な研究材料だ。天照大付属高校の学生だからって、そうそう拝めるもんじゃない。だから絶対に見たことも聞いた事も他人には言うなよ」

いいだろう。唐突にデュナンの態度が変わったような気がして、心なしか島嶺は自分が怯えているような気がした。

……そういえば、あのテロリストの海賊、一体どうなったんだろ
うな。

歩を進めながら、さりげなく話題を変える。島嶺自身も、さすが

にその詳細は知らなかった。ただ、心に引っ掛かっているのは、当然身柄を拘束後、すぐにガイア本国に連行されてもおかしくないはずが、その後の詳細が一切ニュース報道されることはなかったことだ。あれほど世界的に世間を脅かしていた海賊テロリストが。なあ、おかしいと思わなくはないか。

デユナン自身も、そいつがどうなったのかなどということとは、それほど意に介さなかったのだが、その海賊の首領が、まさかその後自身とともに行動を共にし、強く相手を必要とすることになるとは思いも寄らなかった。

カグツチ……。

*

本当にルミナスは何も知らないんだろうか。

何がって？ ほら、“あの人”のこと。あたしは、ついこの間再会した例の女剣士のことを思い出していた。あの方はルミナスのことをよく知っているようだった。それも、随分昔から。やっぱり彼女も神人？

そう思い、懷にしまっていた翡翠で作られた勾玉のペンダントを取り出した。これって、やっぱり――。

「はあ……」

本当にルミナスは知らないの。これをあたしが彼女から貰い受けたこと。既に一心同体となっていた、あたしたち。その当人のルミナスがあたしの身に起こったことを何一つ知らないわけがない。それなのに、これについて、それに彼女のことにについて、特に彼から何か聞いたただされてもない。

何だか、どこかであたしたちの間に……見えない壁が張り巡らされているような。だがしかし、実際そんなわけがなかった。常にあたしたちは二人で一人だった。ただ、何かの瞬間に、まるで故意に何かの意思が働いているかのように、あたしたちは互いに見えない秘密を抱えた。

——コレの力ってことなのかな、つまり。

でもルミナス自身も、彼自身の出自についてはつきりしたことを、まだあたしに何も告げてくれていない。勿論それは、まだ完全に記憶が戻ってないからとも考えられるけど、例のツクヨミの一件があってそれでもなお、何も思い出せていないとは言えない。

きっとあの人が言っていたように、この石には何かの力があるのかもしれないけど、けれどそれだけでも思えない。ルミナスは、やっぱり何か隠している？ それとも……。

まるでイオリゲルが持っている“フィルタリング機能”のようだ、と思った。知りたくないことは知らなくてよい。そして、知られたくないことは——相手に読み取らせない。その障壁のような心の壁でもきつと、それが普通なんだ。

今みたいに、時々呼んでも答えがないことが度々ある。どうして？ あたしたちは一心同体になったはずでしょ。それなのに。本当はその方がいいはずなのに、本当なら逃げ出したいはずなのに——不思議とあたしにはそれができなかった。それは逃げ出したいと思っても、どうせ逃げられないからと知っているからとも言えるけど、もし仮に彼から逃れられるのだとしても、きつとあたしは。

瑠美那としての肉体で目覚めている間、殊にそれが顕著だった。むしろあたし自身が眠っている間、デュナンとして覚醒している時の方がルミナスと確実に繋がっていた。それでも……このところ、あたし自身も黙っていることが多かった。それだけルミナス自身の力が強まっているのかもしれないけど、本来の眠って目を瞑っている状態が頻繁にあった。というか、そう。何だかすごく怖い。目を開いて本当のことを知るのが怖い。それは、父さんのこと含めて。

この勾玉の力に、そしてあたし自身に何ができるのか、本当のところは何も分からない。でも、本当はもっと知りたい。ルミナス、あなたのことが。純粋な気持ちとしては、そうだった。それに何がどうなるかと結局のところ、そうすることでは、何も解決しないし進まない。多分きつとそんな気がした。

そう、たぶん、あたし自身がどうなるかと……。

*

「……委員長、俺と付き合わないか？」

暗闇の中、いきなりデュナンから小声でそう告げられ、不意にリアンは目の前を行く背中を見つめた。ここに来る前に同じようなことを言われた気がするけど、今度のは……何だか真剣な色合いを含んでいるその声のトーンに思わず息を詰める。

「あの、デュナン、それって——」

何となくプロポーズみたい。だけど自分で思ってみても、あまりに乙女チックな発想すぎる。またヴェルに呆れられちゃうな。そんなリアンの内心を他所に、デュナンは至極真剣だった。というよ

り、当然彼には彼の思惑があつたのだが。

地下書庫はそのまま得体の知れない鍾乳洞に繋がっていた。その奥へ奥へと無言で進んでいく島嶺。目の前を照らすサーチライトの明かりだけが頼りだ。何となくだが、生温かい蛇の腹の中を進んでいるような錯覚に陥る。それでも、ひんやりとした空気の感触が、時折聞こえるチャポンという水音によつて、さらに冷気を増す。

わ、私……。

自分でも動揺しているのがよく分かった。それでも思つてもみなかつたデュナンのその申し出は、心臓の鼓動を高鳴らせ、否応なしに心を惑わせた。本当に、本当？　思わず声に出して尋ねてみたくなる。嬉しい、純粹にそう思うには、このシチュエーションはあまりに……。確かにいわゆる、お化け屋敷やジェットコースター心理に似てるけど。つまり怖いと感じる状況下でなら、男の子は女の子を自然に誘えるし、女の子は男の子の告白を容易に受け入れられる。それなら……。

「何言つてるの、デュナン」

思つてもみなかつた言葉が口から飛び出して、自分でも軽く失望する。いや、本当の意味で意外に思つたのは、当のデュナンの方だった。その声色には邪な誘惑おかしな誘惑を跳ね除ける凜とした強さがあつた。リリアンの意外な反応にデュナンの中の日神は口元を歪ませる。

あれだけ自分に気があると思つていた人間の女。人間など所詮弱いもの。そう思っていたからこそ、彼女を誘惑しようとした。それが……。何となく？お前？に似ているな。え？　瑠美那とは似ても似つかぬ学園のお嬢様だとは思っていたが。

瑠美那の気を元に融合したこの身体で、瑠美那ではない別の女を誘惑しようとしている。その本意ではない誘いに気付かれたのか。そんな素振りも強さも見せない、この華奢な腕を取り抱き寄せ、思わず自分のものにしてみたくなる。

ルミナス……—。

思わず凶暴な力が満ちるのを感じ、恐怖に支配されそうになる。愛憎という名の情念に縛られ、ばらばらにされるのは自分だけではない。もう誰も傷つけないで。何度そう叫んだことか。そう……本当の意味で愛し愛され殺されるのは、あたしだけでいい。

「――怖くないのか？」

振り返らないままの無言のその背中に再び声をかけられ、初めて自分が震えているのに気付いた。ええ、あなたがいるから。務めて気丈に振舞おうとする、怯えに支配された心はしかし、本当の意味でデュナンを信頼していた。自分でもどうしてそう思うのか解らない。けど、彼だけは信じられる。だって、あたしが好きになった人だもの。

こういうのを根拠のない理由っていうんだろ？　か。　ますますヴェルに呆れられそうだ。

それでもリリアンのその洞察は、深いところでの得ていたのかもしれない。それは、邪神に魅入られた瑠美那自身もが、どこかで信じ続けている深層に沈んだ真実。

要するに、これは一つの賭けだ。もし本当にアイツが瑠美那の、金城？ハカセ？の……、まあ、そんなのは、今の時点では単なるふざけた推測に他ならない。だが勾玉に近づく邪神を追い払ったところで、すべてが安泰というわけでもない。むしろ、こうなったら、とことん見極めてやるだけだ。せつかく大国から秘密裏に奪取したオーパーツだ。あいつらが何を考えているか知らないが、どうせなら日ノ本の国に返してやってもいいじゃないか。

力は力と呼ぶ。そして、その力を制することができるのは、力そのものに飲み込まれてしまわぬ、強靱な精神の持ち主のみだ。こんな風に考えが変わったのは、やはり実際に瑠美那とヤツとが一緒に

なった、この不可思議な少年に会ったからか。何だか娘を男に奪われる父親にでもなったような気分だ、なあ金城さんよ。

運がいいな、兄ちゃん……。

何やら後ろで学園のマドンナと小声で話をしている、端正な顔立ちの色男に振り返る。どちらにしても自分は、その力の源に便乗させて貰うだけだ――。

昔から面白いことには首を突っ込みたがる性分だね。だから瑠美那の父親とも懇意になった。いや？なつてもらった？のか……。相変わらず反吐が出る、あの胡散臭い太陽みたいな笑顔は思い出したくもないがね。それに俺の島嶺って苗字は、あいつとあいつの愛娘から距離を置くための苦し紛れの言い訳みたいなもんだったのかもしれないが。

*

なぜ、こんなにも心が凪いでいるのだろう。この自然に満ちあふれたドームに来てからというものの、喪失しつつある心身とは裏腹に、アグニの心は安らいでいた。世界的に恐怖のテロリストと怖れられ、しかし快活に七つの海を渡り歩いていた海賊としての日々とは別の、どこまでも穏やかな安らかさ。

そうだ、？そこ？には幼い頃の自分がいた。インディアナ共和国、ヴァシュラート王朝。^{いにしへ}古の昔は国名そのものがヴァシュラートであったという。その王朝の自分は最期の皇子だった。南国特有の暖かな気候。茂る椰子の葉。美しく着飾ったラサという民族衣装。肌に心地よいその絹織物の衣装をそよがせる南風。女は美しく明るく優しく、そして男は猛々しく凛々しく勇壮に。

『アグニ……アグニ』

母さま……。

今でも耳に残る、優しく柔らかなその声。中でも殊更に信頼を置いていた家臣の息子ヴァルナと比べても、小さく弱々しかった自分をよく心配してくれていた母上。アグニ、真の意味でもっと強くおなりなさい。そのために学ばなければならないことが、たくさんあるのです。その懐かしい言葉が走馬灯のような映像の中に一瞬掠める。一七年前の大災厄からなる世界の混沌の中においても、インディアナ——ヴァシユラートだけは揺らぐことのない奇跡の島国、樂園だった。

ああ、なぜこんなことを思い出すのだろう。今となっては、すべてが幻。メラメラと燃え盛る炎にヴァルナとともに誓ったはずだ。伝説のナーガラージャ。王朝に伝わるその龍神の真の意味を見出すことが、我らが故国を取り戻す礎^{いしずえ}になるのだと。

父上と母上の敵討ち。最初は本当にそれだけだった。だが――。

いつしか少年は青年となり、次第に世界の明暗を知った。親友ヴァルナはそのよき教師でもあった。我々が生き残る術はただ一つ。例えば容赦なきテロリストと怖れられても、決して？敵？に弱みを見せてはならない。そう綺麗ゴトでは、すべてが済むはずはないのだと。それが証拠に我々が王朝は滅ぼされた。古きよき風習は時の経過とともに廃れ、インディアナは次第に近代化を推し進めていった。時代の流れ——望むと望まぬとに関わらず、いつしか誰もが残酷なその運命に飲み込まれていく。

人は常に自然とともにあるべきだ。おそらくナーガラージャの伝説は、そのことを伝えているのかもしれない。しかし、大地の神という名の大国ガイアがすべてを変えた。人は神になれるとも言うのか。ならば、自分がそれを実践してみせるだけだ。そして憎きやつらを根絶やしにしてやる。そう、いつか……。

そう誓った日を遠く遡り、いつしか心は何も知らなかった頃の古^{いにしへ}の時代へと漂う。まだ幼い少年だった自分。そこで出会った一人の少女。不思議な、^{あか}朱い髪をした……。

「アグニ！」

緑のテラスへと続く無人の病室のベッドで半身を起こし、虚ろな眼差して木漏れ日を見つめていた青年の瞳に映る一人の少女。

君は……。夢の続きのように、アグニはそっと呟いた。

「ク……ロ……エ……」

そう、私だ！クロエだ。半ば夢遊病者のようなアグニの記憶^{こいし}を取り戻すべく、足早に近寄る。暖かな午後の光が、ただ二人を穏やかに包んでいた。やっと会えた。やっと……。そのあまりに容易に仕組まれた再会を訝しむ間もなく、クロエはぼんやりと見つめるアグニの両手を握り締めた。

「君は……どうして」

「どうしてもこうしてもないだろう、アグニ、こうしてお前を取り戻しに来たんだ！」

自分でもいつになく興奮していた。常に冷静沈着なクロエも、この時ばかりは些か我を忘れていた。だが彼を救出する使命に我に返

ると、すぐに周囲に気を配りつつ状況を素早く察知し、まだ朦朧とする意識のアグニに顔を近づけ、そっと囁いた。

「ここも監視されている。さっき動線を切ったが、またすぐ復活する」

だから、急げ。急ぐ？ 何を……とでも言いたげなアグニの虚ろな眼差しを悲しげに見つめる。なぜ、こんな気持ちになるのだろう。どうして、私は。龍蛇の血を注がれたその瞳は、心なしか赫く怪しげな光を宿していた。しかし今、しっかりとその瞳は私を映している。今ならば、あるいは。

「母さま……」

しかし、そう呟くアグニは心ここにあらず、といった風情でただ宙に視線を泳がせるばかりだった。

*

『……被験体に変化が？』

少女からの報告を受けた青年博士は、思わず席から立ち上がった。

だが、それは予想通りの反応でもあった。被験者のサーペント化が進められてからというものの時折、外部からの干渉による脳波波形が常に観測されていた。それが先ほど、サナトリウム内の監視システムの動力が何者かの手によって途絶えてから、強い変化を見せるようになったのだ。

『ドクターワイズ、やはり彼をツクヨミドームで泳がせておくのは、どうかと思います』

「そうとも言い切れないよ、ベアトリーチェ」

ベアトリーチェと呼んだ少女の言葉を遮るように青年博士は言った。

むしろ、面白い余興が見れそうだ……。聞けば、龍神の融合体もツクヨミドームに来ているというではないですか。これは何かの偶然なのか、いや。おそらく島嶺君が仕組んだことなのでしょう。もっとも、彼はパルジャミヤの首領のことは何一つ知らないでしょうがね。

思わずふふつと笑い声が漏れる。ベアトの呆れたような溜息までもが、テレパシーに乗って聞こえてきそうだ。

『まあ確かに、急激なサーペント化は肉体への負担も大きいだけに休息も必要かもしれません』

しかし、その大事な熟成期間に何かあつては――、ベアトのその意見も一理あった。いくらなんでも旧式の監視システムに頼ったあのサナトリウムでは心もとない。が、だからこそその産物も見られるというものののだ。例の異常波形を見せた脳波の干渉者。これは明らかに我々と同様、デュナミスを操る者の仕業だ。心と心との会話もっとも今のアグニ自身には、それに応えるだけの力はないようだが。

「ま、いずれその正体も自ずと判別できようというもの……」

おそらくその干渉者は彼を奪取すべく、ずっと密かに動いていたのでしょう。そして今。ようやく二人は再会した、つまりはそんなところか。

『ツクヨミドーム内の監視システムを強化、ネズミ一匹逃さぬように』

そうテレパスで命じると、ドクターワイズは銀縁眼鏡の奥の眸を殊更に光らせた。

*

どうして、なぜ――。なぜ、いつでも私が求めるものは、容易にこの手にすることが叶わぬのか。

そう思ったところで、何がどうなるわけでもない。それはよく解っていた。私は常に物分りのよい従者として、あの方に仕えていただけだ。しかし。アグニ、今度はお前か……。どうにもならぬとは思いながら、それでもいつになく込み上げる感情。まったく、私らしくもない。

「アグニ……」

思わずその手をぎゅっと握る。しかし力ないその指は今にもクロエの指先から零れ落ちそうだ。それでも確かに彼は今、目と鼻の先にいる。それだけは、まごう事なき事実なのだ。皮肉にもその身体には今、クスヒ様の御代であるカグツチの血が流れている。神と人間。伝説のナーガラジャ。まるでその隙間を埋めるように、今彼が存在しているようでもあった。

思わず、数奇な運命を背負わされた彼をこの手で抱きしめたくなる。アグニ、お前は何も望んで今のお前になったわけではないのだから？　人間が神になることはない。それはあまりにも過酷すぎる。過ぎた運命は誰も幸せにはしない、そうだろう。

だが、アグニは何も応えようとしない。むしろ、今は眠っているだろう龍蛇の本性が静かすぎる方が不気味なくらいだ。しかし、ぐ

ずぐずしてはいられない。ここの監視システムが途絶えてから、もう随分と時が経っている。

「ここにいてはいけない。さあ、私と一緒に行こう」

しかしアグニは容易に立ち上がろうとしない。しかたがない、やはり私の力を使うしかないのか。クロエはそつとアグニの身体に両手を押し当てた。もしかしたら、それによって彼の中の龍蛇の血が目覚めてしまう危険性もなくはなかったが、一か八かだ。

赤いオーラのような光が俄かにクロエの掌から立ち上る。本来ならば温かいその光も、しかしサーペント化が施された身体には、刺激となつて全身に伝わってしまうかもしれない。神人の輩の血潮しゅもからが人の肉体に宿るということは、それだけで何が起るとも分からない。だが、それでも。私と行こう、ここから逃げよう。

うつ……、アグニが低く呻いた。迂闊だった。瞬間的に手を引くも、既に遅かった。

「アグニ、ダメだ！」

逸る心が起こした行動が悪い結果を招くことなど、よくあることだ。普段の彼女ならば、容易にそう考えていた。だが今は、そんな余裕などなかった。何よりアグニへの想いが本来の冷静さを欠く原因となった。それは自分自身でも気付かなかった感情。その思いもしない衝動にも似た何かが彼女を駆り立て、そしてその結果……。

やはり——次第に硬く熱くなつていくその身体。赤黒い血管が浮き出ていく両腕。

ダメだ、アグニ……。いつしかクロエの瞳に涙が滲む。かの人以外のことで私がこれほど熱くなるなどと。それでも、それは彼女が真摯に彼を思っていたからに他ならなかった。お願いだ、もう私を一人にしないでくれ。どこにも行かないでくれ。

「ダメだあ——ッ！」

それは、クロエの絶叫と同時だった。木造のサナトリウムの屋根を突き破るような勢いで、緋色の光の柱が迸った。地響きのような振動。当然、傍にいたクロエは吹き飛ばされ、しゅう——、次の瞬間見上げた方向にいる屈んだアグニの身体からは、白い煙が立ち上っていた。アグニ……。

だが、そこにいる彼は、もう彼ではなかった。赫^{あか}く光る両目。逆立った髪。気がつくと、クロエの腰に差した神剣が反応して振動し、赤い光を放っている。

オマエハ、ダレダ……。

「カグツチ——、」

もうアグニでも、そしてかの人の輩^{ともがら}でもない、違う何かに変わってしまったというのに、クロエはただ呆然と呟いた。

*

私は、なんて馬鹿なんだ——。ただ、泣きじやくりながら走り続けた。

一度あぁなってしまうては、おそらく容易に元の姿に戻ることは

ないだろう。それが、龍蛇の本性。あの方でさえ持っているだろう、その忌まわしい残酷な力。私はなぜアグニに出合ってしまったんだろう。なぜ、アグニをこんな運命に引き込んだ。ただ私は、あの方を探し追いかけていただけだった。そしてその同じ場所に彼がいた。

いつしか古のアマテラスの血流は、時を経てこの地上のあらゆる場所に散っていった。その一つがヴァシユラト、そしてイザナギ、神の降臨伝説——その天孫降臨の神話は、確かに神から人への血の繋がりを示していた。だが、人には人の幸せがある。例えば永い時を生きることがなくとも、いつしかその身体は塵となり滅ぶのだとしても、肉体を持たぬ神には決して感じ得ない濃縮された生の感覚。その光り輝く一瞬一瞬が、永遠にも匹敵する価値を持つ。

アグニはその人としての輝きに満ちていた。だのに。

この地上で目覚めてから、初めて出合った人間。それがあの龍蛇の巫女と、そしてアグニだった。重力に逆らい、この大地にしっかりと足を踏みしめること。その重みに耐えながら、それでも眩しく輝いている。いや、だからこそ彼ら人間は美しいのだろう。そしていつしか私自身も、その同じ肉体を得たことで気付いた。そのまるで闇と光に支配された両極の悲しさと、愛おしさに……。

神人とはいえ、私はあの方の足元にも及ばぬ、下級の力しか持っていない。むしろ、言ってみれば人に近いのかもしれない。ああ、だから、こうしてこの地上に降り立ち肉体を得た時点で、この大地の引力にすぐに馴染むことができたのか。

そして、目覚めるまでの一七年間。長かった。その間、私はある人間から、この地上で生きる術を教示された——彼はスリーピングレクチャー、と言っていたが——。元々剣士の修行を積んでいたせ

いか、飲み込みは速かった。名前のなかった私に、彼はクロエという名をくれた。そう、私の本当の名前はクスヒ様、あの方だけが知っている……。

手の甲で何度か涙を拭い、我に返ったように顔を上げる。この人工のドームにも当たり前のように、太陽の光が降り注いでいた。そして気付く。私がこれから行くべき場所にクスヒ様がいる。アグニを救うためには、やはり龍蛇の巫女とかの人の力が必要だ。あと数時間で夜が来る。そうしたら月の光を頼りに、あの方の元へ向かう。

そうだ、お前の父親は死んだわけじゃない。ただ人としての肉体を失っただけだ。だから私はこうして神界から、かの人を追ってここまで来れたのだ。その魂の思いの深さを、私は託された。そう……瑠美那、と言っていたか。お前の父親は死してなお生き続け、お前を見守っている。それだけは真実だ。

——クロエ、娘に会ったら伝えてくれ。日出る国の夜明けを、お前に託すと。

月が昇る。それは、光を失った夜を照らす太陽の欠片。

*

鍾乳洞の奥深く、その祠はあった。

周囲には透明度の高い水を湛えた、ちょっとした小さな湖面が広がっている。その祠まで栈橋が続いていた。そして、まるで御神体のような巨石が鎮座し祀られている、その祠の窪みにそれはあった。

「俺もこれが何なのか、本当のところは、まだよく解っていない。

ただ言えるのは人魚とか河童とか、そういう類のミイラかもしれないということとは措^おいても、どうも何かの生物学的な化石であることは確かなようだ」

に、人魚ですかつ、すかさずリリアンが突拍子もない声を上げる。まさか、それが爬虫類とどんな関係が？ リリアンの疑問も無理はなかった。その祠に例々しく祀られた、丸まった胎児のような格好をしたその石の塊は、蛇ともトカゲとも凡そ、かけはなれた形状をしていたからだ。しかも研究材料というには、あまりに場違いな神がかった場所に保管もとい祀られている。

「一応は神様の戴き物、ということらしいからな。きちんと祀つてかないと罰^{バチ}が当たるかもしれん」

茶目つ気たつぷりにウインクしてみせる島嶺を他所に、デユナンは意外な感覚に包まれていた。アマテラス校の教授棟であれば感じていた？ 気？ を、ここに来るまで全く感じないのだ。一体どういうことだ？ その化石とやらも、ただ沈黙するばかりで、重要なオパーツの一つとは全く思えない。

—— 瑠美那、どうやら無駄足だったようだ。そう内心で呟くも、いいえ、待つて。その巫女の言葉に耳をそばだてる。

「……人魚とか河童つて、ようするに想像上の生き物だけど、本当にいたんでしょうか？」

ひたすら真面目腐つて尋ねるリリアンに、島嶺は律儀に答える。

「どうだろうな、ただそういうものも進化の過程で生まれなかったと否定することも、あながち出来ないが——」

そこまで続けると、

”アヌンナキは、様々な動物実験の末、ようやく人間を作り出したという”

突然デュナンがそう呟いた。え？という表情でリリアンは振り返った。

その瞬間、何かの光が迸った。閃光、といった方が正しいだろうか。あつという声とともに三人は掌で目を覆った。

巨石の祠の上部、ちょうどその頂に鎮座する化石が信じられない眩しい光を放っていた。もっとも、三人とも目が眩んで、まともに凝視することもかなわなかったのだが。

『くっ——なんだこれはッ。瑠美那、きこえるか、瑠美那！』

デュナンの中の日神は、すかさず巫女の名を呼んだ。だが身体が言うことを利かない。まるで、誰かに操られているみたいだ。ぼんやりと瑠美那は思った。ルミナス、これ、あなたの力じゃないの？残念ながらそうではないようだ……日神が齒噛みながら呟く。

金縛りにでも遭ったように全身が動かない。どうやら何者かに身体を乗っ取られてしまったようだ。そう告げる間もなく、今度は本当に誰かの声が脳内に響いた。

『御機嫌よう。初めまして——アマテラスの日神とその巫女よ』

お前は誰だ？ ふふ、知れたこと。君たちが諸悪の根源と説くその天上の使いさ。

やっとの思いで見上げると、空中に文字通り「天使」が停空して

いた。大きく広げた眩い白い翼。そして輝く銀色の髪。そう……その「天使」は、年に一度しか人々の前に姿を現さない、例の大国ガイアの生神”白のメシア”に似ていた。

だれだ、お前は。改めて問う。おや、君は私のことを知らないのかい。ああ、そういうことではないのか。くくっ——天使は、さもおかしそうに笑った。

……瑠美那、こいつが俺たちの敵だ。

搾り出すような低いその声。ルミナスが憎しみに眩んだ眸で相手を睨んでいる。あたしには、そのことがよく解った。諸悪の根源、その言葉の意味を改めて反芻する。

『すまないね、今日のところはこの辺で失礼するでしょう……ただ、

『冷やかかな微笑みを浮かべた天使が言った。

この娘と那由多の秘宝は戴たからいていくよ。

次の瞬間、突然、傍にいたと思ったりリアンの身体が次第に巨石の中に吸い込まれていく。

え？ い、や……デユナ……ン。

「リアン！」

その時やつと身体が動いた。しかし時既に遅し、その名を叫ぶもあつという間に掻き消えた光と天使とともに、既にそこには彼女の姿は跡形もなかった。

……

……

*

改めて考える。ルミナスって、なんなんだろう。

あたしにとつては、有無を言わさない引力で引き付ける、そんな特別な何かって気がする。それはたぶん、このオタ世界でも同様にそうなんだろう。確かに話としては、何の変哲もない、神様絡みのSFファンタジーってとこだろう。でも……その根幹にある、眩しい光。まるで夢とも現ともつかない、その何かに、いつのまにかあたしたちは取り込まれてる。幻惑させられる……そう、いつのまにか。

あれから未玲は押し黙ったままだった。何だか気まずい空気が流れる。どうして？

「二期のアフレコは明後日らしい……」

ただそう言ったきり。そして不意に、あたしの両腕を掴んで地下鉄の壁に押し付ける。あたしの目をじっと見つめる、その未玲の真剣な眸。

「ナミ、あんた——」

何だか急に胸がドキドキする。未玲はただ黙ったまんま、その先何か言おうとするでもなく、そこに突っ立ったまま、ずっと固まっていた。そして不意にそのまま俯くと、はあっと大きく息をついた。

まさか、あたしと篠崎さんのこと。そんなわけない、か。そう思いつつ、やっぱり何だか心もなかった。

あの通り、水澤ひとみは元通り復帰したようだし、ルミナス二期の制作も順調のようだ。さつき未玲が言った通り、アフレコも予定通り行われるようであるのだし。けど……。

あたしはさつき別れ際、篠崎さんに運命的な何かを感じた。不意に見つめ合った、その一瞬。なぜかしら、事前に携帯番号なんかも交換しあったりして、これじゃあまるで。勿論、篠崎氏には一声優とその作品のファン、という意味合い以上の何かがあるとは思えなかった。それは無論、あたし自身にも。

けれど、未玲はきつとその何かを心配している。おそらく篠崎氏自身には何の思惑もなく、当然何かの企てがあるわけでもないだろう。当たり前だ。けど、もし何か心配があるとしたら、それはこの『ルミナスコード』に、何らかの形で関わってしまったということ。

どう考えても、水澤ひとみの一件は怪しすぎる。そしてそれ以上に、総監督の竜崎悟朗と脚本家の円城寺冬華。問題はあの二人が一体何を考え、あたしと未玲をこの作品に引っ張り込んだか、ということだ。ただのTVシリーズアニメ、それにただのそのファン。なのに、あたしたちは、まるで示し合わせたかのように、共にその異次元の歪みに連れ込まれた。

しかも、未だにその根本が解明されていない。未玲はまだしも、このあたし自身。

？運命の光？——瑠美那がルミナスに感じたのは、まさにそれだった。

そしてあたしも、漏れなくそれと同じ感情を、瑠美那を介してルミナスに感じた。そう、たぶん瑠美那はあたしたちの鏡なんだ。…

…そんな気がする。不思議に、あたしたちはその引力に惹かれて。
なのに篠崎さんは、あたしにとって――。

それがルミナスに感じるものと同じなのか、そうでないのか、後
から考えてみても、あたしには分からなかった。

そして案の定、あたしはその翌日、篠崎さんに呼び出された。

『こんにちは……、』

その日曜の朝、不意に携帯にかかってきたTEL。それにあたしは、あたかも当然のように出た。

少し遠慮がちで控えめなその声。昨日のこともあったし、それに今日はたいした予定もなかったし……。昨日はいつも、ありがとう。あの、篠崎です。あたしは、その人からのTELをまるで待っていたかのように、鸚鵡返しに挨拶した。

「……こんにちは」

『ごめんね、伊勢崎さん。突然電話しちゃって』——い、いいえ。それでも、やっぱりちよつとだけ戸惑う。

実は、ちよつと気になることがあつて。その言葉に、やっぱり？あたしは思った。

篠崎氏の話というのは、案の定やはり水澤ひとみのことだった。予想通り、どうも彼女の様子が変なのだが、あたしが竜崎監督や円城寺氏に何か聞いていないか、ということらしい。あたしは話すべきか否か迷った。……でも、やっぱり彼には今は話さない方がいいかもしれない。

だって久しぶりに会った恋人が、理由も解らず得体の知れない病院の地下の奥深く、今までずっと植物状態でいただなんて。しかも突然、彼女はあたしの目の前で目を覚ましたのだ。一体どうやって説明しろって言うんだらう。あたしだって正直面食らった。一体、

何の意図があつて——なぜ彼女は人知れずあんな所で、まるで幽閉されるように眠っていたのだろ。とりあえず何一つ解らない今の時点で、そんな説明のつかない話したって、ただ目の前の彼を混乱させるだけだ、でも。

それでもあたしは、彼と彼女のことを放っておけない気がした。それは昨日の御払いの時から、ずっと思っていたことだった。

『——あの、これから会えませんか？』
あたしも、直に会って話をした方がよい気がした。というか……単純に会いたかった。

こんなこと、未玲が知ったら、本当なんて言うか。でも。あたし自身としても、何だか上手く説明できないけど。
奇しくもルミナスコード第二期のアフレコは、既に明日に迫っていた。

*

「せつかくのお休みなのに、ごめんね」
「いいえ」

やっぱり、どことなく会話がぎこちない。当たり前だ。だってついこの間、初対面だったばかりだもの。あたしたちは待ち合わせたとある喫茶店で、向かい合って窓際奥の席に座り、何となく当たり前障りのない会話で間を繋いでいた。

何だか、なんとなく恥ずかしい。一応相手は声優さんであるし、結構ルックスもよい。本来なら、そんな人を目の前にして平常心を保てるわけがない。それでも今目の前にいるこの人とあたしは、既

にそんな普通の芸能人とファンではなかった。——そう、ルミナスコードという作品を介して出会った以上。

それでも、あたしは当たり前前にドギマギしていた。考えてみればこれまで、まともに男の人と、こんな風にお茶したこともない。別に男嫌いというわけでもないし、そういう機会に恵まれなかったというわけでもなかった。それでもあたしは、自分でも知らず知らずに、そういう機会を自分から回避してきてしまったのかもしれない。

だって、あたしの趣味は……勿論、女オタのすべてが男の人と付き合ったことないとは限らない。だって主婦しながら、って人だってリアルにいるものね。オタであることと現実とは関係ない。むしろ、そういうこと抜きにして考えるべき問題だろう。

そんなことはともかく。目の前のちょっとかっこいい人（そんなに美形というわけでもないけど）は、どことなく落ち着かない様子で始終、伏し目がちに話していた。やっぱり彼女のことを引っかけているのかな。あたしが思う以上に、実は彼自身があたしを目の前にして、何かを躊躇していたなどと、その時、当のあたし自身は何一つ知る由もなかったのだが。

「伊勢崎さんは、付き合ってる人とかいないの？」

突然そんな質問されて、思わず面食らう。い、いません。緊張しながら当然の如くそう答えると、篠崎氏はそう、と呟いた。そして少しはにかんだように笑って、いや、こんなに可愛い人なのに勿体無いね、なんて面と向かって言われたもんだから、思わず赤面してしまう。

そんなあたしを見て、篠崎氏はくすくす笑った。ああ、笑顔が素

敵な人だな、と自然に思うと、あたし自身も思わず笑顔になった。
すると、

「そう……そうなんだ。ひとみも以前は、もっとそんな風に自然に
笑える子だったのに」

思わず声のトーンが低くなり、あたしも途端に押し黙った。

？ひとみ？——その呼び方を耳にして、改めて二人が付き合っているんだという事実を意識する。実際、篠崎氏自身も一瞬躊躇するも、そう……僕たちは恋人同士だった。と、初めて口に出して打ち明けた。本来なら他人に、それも彼女をこの業界における人気声優と知っているファンの子に、こんなこと暴露できるはずもない。でも、少なくともあたしは違った。ルミナスコードという作品を介して、今ここでこうして彼と話をしている。

「……実はね、本当はとても怖いんだ。君にこんな話をして、どうかと思うけど」

そう打ち明ける篠崎氏を見て、あたし自身も膠着する。確かに尋常じゃない。あの水澤ひとみの様子を見ていたって、そう感じるのには無理はないだろう。現にあたし自身……ついこの間まで病院のベッドで昏睡状態にあった彼女に会っている。

僕が演っていたルミナスを見て、どう思った？ つい、そう訊きたくなるのも無理はない。けど、確かにそう問われて実際に変だ思ったり不自然だと思ったことは一度もない。むしろ——あたし自身、劇中のルミナスというキャラに夢中になっていたんだし。

今日の前にいる篠崎氏は、ルミナスとは別人のようだ。まあそれは当たり前として。独特の柔らかく低い彼自身の肉声は、確かにル

ミナスのそれとは全く違うものに感じられた。けれど実際に画面を前にしてルミナスというキャラクターを演じると、途端にそれは独特の凄みを持った鋭さを増す。その美声が、確かにあのルミナスという架空のキャラクターを形作っているのだ。

けれど篠崎氏は、それを怖いと言う。一体どういうことなんだろう。まさか……その先を尋ねようとたくも、目の前の彼自身が、その真相自体を前にして青ざめているのが判って、思わず訊くのが躊躇われた。

どうして、こんなことが——あたしも篠崎氏も、このルミナスコードという作品の怪に言葉を失うしかなかった。

「本当に変な話だね、こんなことって……でも実際、僕はルミナス役を今回ばかりは断ろうかと思ったんだ」

本来なら、そんな話を聞いたとしたらファンならずとも、えーっとかいう大袈裟な反応を返すことだろう。それは実にファンとしては不本意な話だ。でも……。

あたしだから、わかる。そういう気持ちになるのは当然かもしれない。やっぱり未玲、このルミナスコード怪しすぎるよ。

だけど結局、篠崎氏はルミナス役で続投ということになった。それにはやはり、水澤さんのことが絡んでいるのだろう。やっぱり放っておけないんだ。聞けば水澤ひとみも、瑠美那役として当然の如く今回も起用されるらしい。でも、何かがおかしい。昨日の彼女の様子を思い出して、あたしは改めてそう思った。

何だか操り人形みたいだ……その不可思議な感想が確かに間違っ

ていなかったことを、あたしはその後、身をもって知ることになる。

「……確かにあたし自身としても、変だなと思うことばかりで。実は旧友が、今回この二期で副シリーズ構成の脚本を任せられてるんですけど、それ自体ものすごく唐突らしくて。それにそれを言ったら、あたし自身、どうしてスカウトされたのか解らないんです」

「スカウト？」

そう問われて、自分でも改めて変だと思う。

きつと篠崎氏は、あたしに今回の御払いに呼ばれたファン代表以上の何かがあるとは思ってなかったんだろう。それはそうだ。そして、どうしてかあたしは今日、ここでこうしてルミナス役の声優の篠崎氏と話しているのだ。

「……………」

思わず篠崎氏が思案顔になって黙りこくる。その沈黙には、様々な思いが今彼の中を去来し駆け巡っているのだということが自ずと感じられた。未玲もそうだろうけど、あたしも篠崎氏も何とも言えない、同じような恐怖を体感している。それは直接五感を刺激するような実体を持った恐怖ではないけれど、確かに何かが不気味に蠢いているのが感じられる、そういう、えもいわれぬ得体の知れぬ怖さ。

とつくに冷めてしまったコーヒークップを包む指先が、我知らず震えているのを感じる。

そんなあたしの指先に、ふと篠崎氏の両手が包むように添えられて、瞬間ピクツとする。

「大丈夫。少なくとも僕と君と、そしてその神代さんの三人は、事の実情を知っているわけだし」

確かにそうかもしれない。一人よりも二人。二人より三人。それにもし、たとえひとみがどうかなくなってしまっていたとしても、僕は必ず彼女を元通りにしてみせる。そして篠崎氏は、最後にそう付け加えた。そう、そうだよ。あたしはなぜだか、そのことを淋しく思う自分自身を人知れず感じていた。

明日のアフレコ、頑張ってください。ちょっとそうはストレートに言えない雰囲気の中、それでもあたしは精一杯彼を励ました。正直、未玲がどんなホンを上げたのか、ちょっと気になったけど、その話の内容をそれとなく訊くことは勿論しなかった。

「……本当は君にも見学に来て欲しいところだけど、いや」

無論それは普通に考えて無理だろう。実際ルミナスのアフレコは様々な打ち合わせの後、夕方から行われるようだが、それだったら仕事終わりに駆け付けられないこともないだろうけど、さすがに遠慮した方がよいかもしれない。

ただ、まだ少しだけ心配だった。篠崎さんと、そして水澤さん。実質的に考えて彼はともかくも、問題は彼女の方だ。本当にあんな状態でアフレコに臨めるのだろうか。瑠美那として演技できるのだろうか、そんなことまで押し付けがましく考え及んでしまう。そして、ルミナスを演じることが怖いと言った篠崎氏。だったら、本来ならやめるべきだ。そう考えるのが妥当だろうけど、そうもいかない。

何か、何かない？ あたしにできること。そんな風に実直に考え

てしまう。そんな思いが実際こうして浮かぶのは、やっぱりこの篠崎氏に他人とは思えない何かを感じていたからだろうか。

「本当に今日はありがとう。少し勇気が出たよ」

そう笑顔で返す篠崎氏。その柔らかな表情を見ているうちに、あたしの中にこのまま別れがたい思いが去来した。そして、

「篠崎さん、私……」

思わずそう声をかけていた。

——もう少しだけ、付き合っていただけませんか？ 自分でも驚くような言葉が口をついて出た。

*

午後の臨海公園は、暖かな日差しに包まれていた。それもそのはず、もうすぐ五月。暖かいというより、少し汗ばむくらい。本来ならルミナスコードの放送は、四月に始まっていなければならなかったのだが、この分だと五月の連休を跨いでしまうかもしれない。

その第一話のアフレコを明日に控えているというのに、あたしはずうずうしくも篠崎氏を引き止めてしまった。なんてこったい……。ほんと、自分でも信じられないよ。けど、篠崎氏はそんなことにはお構いなしに付き合ってくれた。いや、本当のことを言えば彼自身、そう申し出てくれたことに感謝していたらしいのだが。

「ええっ？ 竜崎監督にも、もう会ったんだ」

この四月初旬に、あたしが監督と会ったことを話すと、ちょっと

意外な顔をされた。というか、むしろ少し強張った表情になり、篠崎氏は「何かなかった？」と心配してくれた。勿論、紳士的な振る舞いで始終和ませて頂いたことなどは話しても、間違っても一体何の事故か、あるうことか、あたしが監督を殴ってしまったことばかりは内緒にしておいた。

それより先に、脚本家の円城寺氏に例の三月のイベントで会ったこと。それから後、なぜだかこのルミナスコードとの直接の縁ができてしまったこと。勿論、親友の末玲のことなども話した。でも、なぜかルミナスに関することだけは何一つ話さなかった。それ自体篠崎氏の手前、とても話せるような状態ではないということが分かっていたし、それにあたし自身、なんだかそれが普通に躊躇われた。

要するにオタの側面を見られるのが恥ずかしい、ということか。考えてみればオタクって不思議だ。自分自身がそう意識して初めてオタクであると感じる。勿論、同人誌をはじめ様々なグッズを買い漁っている時点で、さらにはコミケやら様々なイベントに顔を出している時点で、あたしたちはオタクと認識される。でも……。

その実情はオタ、アニメ以外の様々なエンターテインメントとたいてい変わらない。ジャニーズなどのアイドルに夢中になったり、韓国ドラマに熱をあげる今時の中年女性なども、その中身は結局同じってこと。だけどオタクというだけで、どうしてこんなにも恥ずかしいものなのか。勿論、声優さんをはじめ、その周辺事業に関わっている人たちは、そんなファンをオタクとかではなく「ただのファン」と認識してくれているので、その辺に関しては、まあ助かるのだが。

頬を撫で吹き抜ける潮風が気持ちよくて、というか、もう、そんなことどうでもよくなる。こればかりは、二次元の世界では感じ

られない感覚だ。たとえ頭の中で考えたとしても、この潮の香りと眩しい日差しは、ようやく脳内で再現するだけのものではない。実際に肌で感じる。そのことがどんなに大切なことか。

あたしは篠崎氏と一緒にいて、思わずそんな風に思っている自分自身を実感していた。そして不意に、傍らで微笑んでいる篠崎氏を強く意識する。考えてみたら、これって何だかデートみたい。そう思うと、急に胸がドキドキ早鐘を打ち始める。

目の前にいる人が、声優さんとかルミナスの中の人とか、そういうことがどうでもよくなる。ちよつと、どうしちゃったのかな、あたしってば。

そんな時、不意にあたしの携帯の着信音が鳴った。ごめんなさい、そう篠崎氏に断って、後ろを向いて携帯を取り出す。やば……未玲からだ。

「もしもし？」

『……ナミ、あんた今までどこにいた？』

案の定、そう尋ねられた。そういえば午前中、喫茶店にいる間中、それに簡単な昼食を篠崎氏にご馳走になっている間も、携帯の電源は切っておいた。その間、未玲は家に連絡したり、心当たりのある色んな所を探し回ったのだそうだ。

携帯電源を切っていたのは、別にわざとじゃないし何か意味があったのでもない。けど。案の定、未玲のイライラを肌で感じて、ごめん！ 思わず携帯ごしに、そう謝っていた。

さすがに昨日の今日で、彼女も心配していたらしい。

『どうでもいいけど、あんた今どこにいんの？』

……まさか、篠崎氏と一緒にだとは口が裂けても言えまい。少しだけ青ざめ、ははは、つい笑って誤魔化した。

「それより、ねえ。明日のアフレコのことだけど、」

未玲は勿論、参加するんでしょ？ そう尋ねた。

『——まあね、今さらあたしなんかに、呼びはかからないかと思っただけだけど、案外細かい内容の手直しなんかも、その場であるようだから』

なら、お願いがあるんだ。そして、その先は小声で。

「水澤さんと篠崎さんのこと、お願い」

そうは言っても、未玲に何かできるとも思えなかった。でも。それでも、誰かに見ていて欲しかった。あたしは現場に行けないだろうから、せめて。

——わかった。あたしの思いが通じたのか、未玲は数秒の沈黙の後、そう快く了解してくれた。そして、

『あたしからも、お願い』

未玲が不意にそう切り出した。ナミ、あんたはこのルミナスコードに今後一切関わらないこと、いいね！ その言葉に、意外にも絶句している自分自身がいて、思わず我ながら驚く。だけど——。

今だからこそ、わかる。だってあたしは今、？彼？と一緒にいるんだもの。そう、このまま金輪際、お別れなんて信じられないよ。

実際、彼とあたしは、このまま、元通りのファンと一声優に戻った方がいいのかもしれない。けど。

「もう時間は進み始めている？——そのことを強く感じる。たとえば、あたし自身が、奇しくも劇中ヒロインの瑠美那のように、数奇な運命と、そしてルミナスそれ自体に飲み込まれていくのだとしても。もしそれが本当なのだとしても。……篠崎さんのことを一人にできない。どうしてもそんな風に思うのか、自分でもよくわからない。だけど、確かに時間はもう新たな未来へと進み始めているのだ。ごめんね、未玲。」

*

「……あたし、ちょっと思っんです」
「え？」

未玲からの電話を切った後しばらくして、自分でも信じられないくらい積極的に、でも少し遠慮がちに、あたしは篠崎さんに声をかけた。

「もし万が一、水澤さんのことがどうにもなくなったら……、」
あたしじゃ、彼女の代わりにはなれませんか？

——はああ？ 自分でも何を言い出すのかと思う。しかし、もう遅かった。あたしの片方に結わえた長い髪が肩先で戸惑うように揺れる。

「伊勢崎、さん……？」

極度の近視で焦点の合わなくなった眼差しが、篠崎氏を捉える。

何だか不思議。自分ではない誰かが、あたしの身体と心に乗っ取ってしまったみたい。でも、こちら不思議に彼は、あたしの真っ直ぐな眸をそのまま受け入れ、ありがとう。そう言って近寄ると、あたしの髪をそつと撫でてくれた。その手の温もり、髪をくすぐる感触が、そのままあたしに伝わる。

えっ えっ とお、これって……。

「伊勢崎さん、いや…… ナミ、さん」

ちよつとぎこちないけれど、彼にはつきりそう呼ばれ、ドキツとする。瞬間的にきゅうん、と胸の奥が啼いて苦しくなる。

ありがとう、その本当の意味は、今ならどうとでも取れる。傷つく前に、身を引いた方がいい。今までの人生における、あたしの勘がそう呟いていた。でも。

彼の真っ直ぐな、綺麗なその瞳が、確かにあたしをじっと見つめていた。

不思議だな、どうして彼女はあんなこと言っただろう。

彼女を車で駅まで送ったあと、篠崎はずっとそのことを考えていた。伊勢崎ナミ、本当に普通の女の子、なのに。だけど、普通とか普通じゃないとか、問題はそんなことではなかった。現に自分だって——一介の声優とはいえ、至極普通の人間だ。むしろ、そっちの方が問題じゃないのか？ この現実における、それぞれの立場や居場所。あるいは歩いてきた人生の道のり。そういうものをすべて取っ払った所にある、もっと別な何か。そういう深層から湧き起こる何かが、自分を彼女に引き付けているんじゃないだろうか。

それよりも、差し当たったこの問題は彼女ではなく、そう、ひとみだ。彼女が心配するのも無理はない。昨日からずっと、ひとみと連絡が取れていないんだ。昨日の神社での御払いが済んだ後、一人暮らしの自宅へ彼女を送った。だけど。それ以降、ずっと彼女の携帯に連絡を取っているのに、一向に返事がない。やっぱりおかしい。そう思いながら藁にもすがる気持ちで、俺は……。

きつと伊勢崎さんとなら、何かの解決の糸口がみつけられる。事実、彼女と色々な話をして、彼女が今置かれている状況、それにルミナスのスタッフの一人に加えられた、友達の神代さんのことなど少ないながらも現状が把握できた。やっぱり竜崎監督、あの人は一体何を考えているんだ。

ルミナスコードのファンとはいえ、素人同然の彼女を巻き込むなんて。一体どういふつもりだ。そうは考えても、それ以上、思考がどこかに進むわけでもなかった。まったく、すべてが霧に包まれて

いる。

それより、なぜだか彼女のことが酷く気になる。伊勢崎ナミ、さなか。

あの時一瞬、彼女の眼差しに吸い込まれそうになった。どうして……。ひとみとは違う、もっと別な純粹な眼差し。ひとみが太陽なら、きっと彼女は月だ。そういう控えめで陰性な光。きっと誰も気付かないだろう。でも、確かにあの時、自分は彼女に引き付けられそうになった。昨日の御払いの時から、ずっと気になっていた。いや、もしかしたら初めて会った時から……。なぜ彼女が、このルミナスコードという作品にこうして引きずり込まれてしまったのか、何となくだが、その理由が解るような気がした。でも、どうして――。

不思議と篠崎は、先ほどの彼女のあの眼差しを、忘れられないでいる自分自身を感じていた。

『ごめん――急に手が動いて……』

そんなまるで白々しい言い訳に、自分自身戸惑った。手を握る以上に、最近知り合ったばかりの女の子の髪に触れるなんて。でも。確かにすごく嬉しかったんだ。だから、つい。彼女の髪を撫でてしまった。だけど……。人知れず頭を振る。かぶり

俺は何をやっているんだ。ひとみが大変なこんな時に――。けれど、その罪悪感ですら次第に薄れていくなどと、その時の彼には想像だにできなかった。

*

……代、クン。かみしろ、みれい君。

「あああああ、もう！るっせえなあ！！！」

未玲は執拗に自分の名を呼ぶその声を振りほどいた。しかしハツと我に返って見やると、副監督の相澤が表情をヒクつかせて、未玲の傍らで苦笑していた。

今日はルミナスコード第二期のアフレコ当日である。その日の午後、都内某所の録音スタジオの小会議室にて、またしても未玲と相澤は二人してアフレコ台本の最後の調整、見直し作業に入っていた。は、調整？ 見直し？ だってもう台本はこの通り出来上がってるじゃないのよ。この期に及んで何をこの優男と話すってのさ。

「だからさ、今日が文字通り最後の詰めのチャンスってこと。役者さんたちも、そろそろスタジオに集まってる頃だし、現場に入れば、もっと具体的なリメイクもあるだろうし。君ももう少し真剣に取り組んで……」

相澤がそう言い終わらないうちに、あたしは凄い形相で相澤を睨み、苦笑いしながら言い返した。

「えーえーそりやもう真剣にやってますよ、ホントこれ以上ないってくらいにね！」

実際、未玲は真剣だった。そう、あたしナミを、こいつらから引き離すことに。

というか、さっきまで未玲は心ここにあらず、という感じだった。

とにかく頭の中がモヤモヤしていた。なんでナミは昨日、朝からずっと連絡が取れなかったんだろう。まさか……未玲がそう考えるのも無理はなかった。勿論、ルミナス関係のスタッフには全て確認は取った。無論、大元締め of 竜崎と円城寺にもだ。でもその日、不思議とナミの消息は誰からも窺い知れなかった。ネプチューンのやつらに捕まっているものでなければ、何の問題もないはずだった。それなのに。

それでも未玲の胸にかかった霧は晴れなかった。というか、どう考えても……、未玲は一昨日の篠崎敏己とナミとのやり取りの一部始終を、その目でしっかり見ていた。そして、自分でも不可解な感情に見舞われた。というより、何となくナミに隠し事されているような気さえする。

やっぱりあたし、どうかしてるんだろうか？

そんな風にぐるぐる考えていた矢先に、相澤から何度も声をかけられたもんだから、怒り心頭、つい大声を出してしまったのだ。

「というか、勿論今日は、監督と円城寺は来るんだろうね？」

とりあえず、そう念を押す。きっとあたしの脚本が気に入らなかつたもんだから、わざとあたしとコイツを二人きり居残りみたいにさせて——、それでまた、どこかで二人して油売ってたりしたら、容赦しないからね！

すると相澤は、待ってましたというように、間延びした声で答えた。

「勿論だよー何せ、大事な第一話のアフレコだからね、きっとそろそろ伊勢崎さんも——、」

——なにいいいい！！　相澤の発したその名に反応し、思わず未玲は大声を張り上げた。今にも目の前の優男の首ったまを引っ掴まんばかりの勢いで。

その頃あたしは、面会人が来ているからと呼び出され、職場に突然現れた円城寺に、今さらながら絶句していた。

*

……何となくどこかで、そんな予感はしていた。

そして、あたしの予感通りに現れた円城寺冬華。ていうか、あたしの職場に堂々と。それより、いつ調べたのかということの方が気になるし、やっぱりちよつと怖い。でも、そんなことどうでもよくなるくらい、あたしは若干戸惑いながらも円城寺の出迎えを受け入れた。

「ごめんなさいね、でも……あなたとしても、やっぱり気になるんじゃない？」

ふふつと確信犯的に微笑する円城寺。そのサングラスの向こうの瞳が妖しく輝いた。

「ね、伊勢崎さん、誰？」

隣の席に着いていた同僚の女子が、目の前の妖艶なおかつ洗練された佇まいの謎の美人を見て小声で囁く。ううん、何でもないから……そう言いつつ、既に五分ほど退社時間を過ぎていたこともあって、あたしは堂々と円城寺氏に連れられていった。むしろ連行……巧みに作られた和やかな雰囲気の中にあっても、あたしとしてはそ

ういう感じの方が的を得ていた。だけど、なぜか今回ばかりは。やつぱり昨日の篠崎さんとのことがあるんだろうか。どこかで、あたしに助けを求めていた——そんな風に考えるのは、ちょっとおこがましいし、第一あたし自身に何かができるなんて、とても思えないでも。

あたしが行って、どうなる。けど円城寺氏は、あたかもあたしの存在が、このルミナスコードに必要な、みたいなことを以前言っていた。未だにそんなことは微塵も信じられない。それに、その言葉自体が何か畏みたいに感じられないこともない。だけど未玲や、それに今度は篠崎さんのことがあって、何だかんだで、やはり今回も言葉巧みに騙されてしまうんだろうか。——いや。

やつぱり、あたしは行かなきゃならない。ほとんど確信と言ってもよいような直感が、あたしの背中を後押しする。もしかしたらそれは、篠崎さんを放っておけないという気持ちから来るものだけなのかもしれない、でも、きつともっと、何か大きな流れみたいなものの中で自然と引き付けられる何かがあって。本当にそれが何なのかも、まったくわからないけれど。

「さ、」

ロータリーに停めてあった円城寺の赤いクーパーに勧められるまま二人して乗り込む。もうそろそろ一話のアフレコが始まるわ、その言葉に思わず緊張する。あたしは思っていた。昨日の篠崎さんとの話……まるで操り人形みたいに、台本を貰いルミナスと向き合った途端、実際に演じる以前から何かに取り込まれる感覚。自分ではない、誰かに魂ごと身体を乗っつけられるような……。

きつと篠崎さんはもう取り込まれてしまってる。その半ば半覚醒

のような意識の淵で、ようやくあたしに連絡することを思いついた。そんな気がする。でも、どうして——どうして、あたしなの。

*

都内某所の録音スタジオ。それほど広くもないスタジオ内には、既に主要キャラと、そしてゲストキャラ役の各声優たちが、それぞれ台本を手に集まっていた。その中で一際目^{ひときわ}を引きながら、なのに誰よりも神妙に畏まっている二枚目声優が一人。そしてその傍らで、ほとんど何も喋らず俯き加減で寄り添っている若手女性声優。主演のルミナス役の篠崎聡己と金城瑠美那役の水澤ひとみだ。

「篠崎君、それに水澤さんも、お久しぶり」

そうにこやかに微笑みかけるのは、ツクヨミ役の男性声優、寺嶋彰である。女性的な役柄通り、たおやかな雰囲気、しかし非常に人を見る目を持った篠崎の二年先輩の実力派声優。今回ツクヨミはモノローグでしか出てこないはずだが、やはりそこは本作の人気を二分するキャラだけあって、しっかり現場に顔を出している。

お久しぶりです……、篠崎はあくまで控えめに、そう答えた。そして不思議に俯いたままだった隣の水澤も、小首を傾げるように、につこり笑った。ほんと久しぶりだね、このメンツ。やっぱりルミナスだけあって他とはちょっと違う緊張感がたまらないね、そんな風に話す寺嶋は、何ともないんだろうか？ 思わず篠崎は、その如才ない先輩の顔を伺う。ん？という表情を向けて寺嶋は、その細い目をさらに細くさせた。慌てて篠崎は視線を前方に戻す。

見ると、既に三台ほどしつらえられた眼前のTVモニターに何やら試験的な動画が映し出されている。一般的なTVアニメはよほど

環境が整っていない限り、アフレコ時に色付の動画が見られることは稀かもしれない。それくらい厳しいスケジュールで制作されているということ。それでも一つの大手アニメスタジオが抱える作品数は多岐に亘るといえ、近年躍進めざましいスタジオネプチューンは文字通りこのルミナスコード一本に今期、時間と労力とを集中させていた。つまり、それだけの人気作ということだ。

それでも、これだけ制作状況が逼迫し、スケジュールそのものが遅れているというのは。

篠崎は今回の二期の脚本シリーズ構成に、彼女伊勢崎ナミの友人である神代未玲が参加していることを思い出した。そういえば、確かにそんな名前がスタッフリストにあったことは知っていたが、まさかそれが素人同然の女性であるなどと。普通だったら、そんなことは考えられない。ある程度この業界での仕事の経験がある者にその資格が与えられるはずだ。

伊勢崎さんのことといい、一体監督は何を考えているんだ。改めてそう思いつつ、それでもメインシリーズ構成の円城寺冬華の独自の采配に支えられ、確かに新しい何かを感じる話の筋に、心なしか感心してもいた。要するにプロの目線ではない、もっと新鮮な新しい息吹が欲しかったということか。容易に考えられるそんな裏のシナリオ。でも、そうだとすると、何かがやっぱりおかしい。

「それより水澤さん、今までどうしてたの？」

何ともいえない独特の個性が天然さまでも醸し出す寺嶋に、そう無心に尋ねられる。勿論、彼は彼女と篠崎が恋人同士だなんてことは一切知らない。

「あ……知らなかったんですか、寺嶋さん。彼女はここの所、体調が芳しくなくて、ずっと休養してたんです」

思わず口を突いて出る、当たり前前に本当のような嘘の偽装発言。あーそうだったの。それは大変だったね……。確かに病み上がりみたいな蒼白の表情の水澤ひとみを見て、あたかも心配そうに気遣う寺嶋。そんなやり取りを、周囲はそれと気付かれない様子で、ひそひそと盗み見ていた。

——やっぱり、水澤さん。わかんないわよ、そんなこと。そうだよな、だって篠崎さんってば。

まるで暗黙の公認の仲だとしても言うように、二人を恋人同士だと知る面々が好き勝手に囁き合う。人知れず、そんな皆の好奇の目に晒される二人。まるで劇中のルミナスと瑠美那の面影は、そこには一切なかった。あるのは、この数奇な物語に弄ばれ疲弊しきった、そして文字通り魂を抜かれたような二組の男女の姿だった。

そんな、がやがやとしたブース内の様子を録音機材のコンソールが並んだ室内で何う色黒のオールバックの男と、そしてもう一人、スラッとしたスリム体型の、まるで俳優と見紛うばかりの美形優男。総監督の竜崎悟朗と、そしてようやく新米脚本家の神代未玲のお守りから開放された副監督の相澤太一である。

「いやー……ようやく始まりますねえ」

感慨もひとしお、といった風情で相澤が口を開く。まったく一時はどうなることかと思いましたよ。実際、脚本作業は遅れに遅れていた。だが、それは今回の二期の白眉ともなる必然的必要性でもあった。確かに今回は神代君と伊勢崎さんがいないと始まらないんです

けど、そんな謎の言葉を相澤は投げかける。

「で、その肝心の……」

伊勢崎君は――、と竜崎が言いかけようとするのを遮るように、相澤は言った。

「もうそろそろ着く頃ですよ。きっと円城寺さんが上手く話を合わせてくれるでしょうし」

だが、何となくそんな必要はない気がした。一昨日の篠崎君と伊勢崎君の様子を見るにつけ――竜崎は異様に視線を鋭くして、眼前のブース内の片隅で畏まる篠崎と水澤両名を舐めるように視姦した。オタクとかオタクでないとかは関係ない。そうであるかと男は男、そして女は女だ。近年めざましく世間一般から注目を浴びている声優という職業も例に漏れず。

「ところで、神代君はどうしたの？」

思い出したように相澤に尋ねる。ああ、それが……伊勢崎さんの名前を出した途端、血相変えて飛び出していきましてね。若干引きつった表情の相澤を気の毒に思いながら、またなんてことを。そう思いつつ、ちよつと面白そうに唇の端でニヤと笑う。どうせこれから実際に現場の手直し作業のライトがあるんだし、彼女にも、ね。ルミナス二期の醍醐味を味わって貰うのも悪くはないだろう。

元腐女子だろうと何だろうと、女は女、か。まるで蛇みたいな執拗さが、もしかしたら世の真理にはあるのかもしれないかった。

*

「やだな、寺嶋さん。水澤さん一ヶ月前のお披露目イベントでも大活躍だったじゃないですか」

そう快活に話しかけるのは、石室聡介役の神崎まことであった。さすがに劇中で因縁のパートナー同士だけあって、ボケとツツコミの絶妙な間柄の二人である。ああ、ごめんごめん。寺嶋が面目ないというように、なぜか後輩の神崎を立てる。

「ね、霧江さん」

「そうだったよねーやっぱり歌も上手いし、あこがれちゃうな」

そう返すのはクロエ役の霧江可奈。彼女は水澤のような華々しい活躍をするタレント並のヴィジュアルタイプの女性声優とは違い、縁の下の力持ち的演技の幅で、人気こそそれほどでもないが、どこか名バイブレーターのような絶妙な雰囲気を持った文字通りの役者だった。本ルミナスコードでは、水を打ったような冷静さが印象的な厳しい女剣士役であるが。

「でもクロエだって一期は結構いい線いってたじゃないすか」

あはは、そうだねえ。アグニがあんなことになって、ちょっと可哀想な気もするけど。それにクスヒ様には結局、全然かまって貰えないしね。そう言いつつ、篠崎にウィンクしてみせる。はあ……これだから中の人は、などとあからさまにファンが漏らすような感想は勿論、声優同士では日常茶飯事なこともあって別段思わないんだけど。それでも篠崎は、そんな何気ないやり取りに少しだけほっとする。

けれど同時に他の役者たちは、たいして何の支障も影響も受けていないようだという事実を目の当たりにしてもいた。じゃあ、やつ

ぱり僕とひとみだけが……。やはりルミナスの根幹に直接関わるルミナス自身と、その巫女であるヒロインだけが。これは一体どういうことなんだろう。

本当は神社での御払いだけじゃ済まないんじゃないだろうか、ちよつと霊媒師イタコでも呼んで貰いたいような気になる。いや、霊媒……まてよ、

ふと篠崎の脳裏に何かが閃いた。俺がルミナスを演っていて感じるあの感覚。自分自身が自分でないような、ふわふわした……。それに、伊勢崎さん。急に不安になる。まさか。奇しくも一期劇中でルミナスは瑠美那と一つになり、デュナンという別の肉体を得た。そうだ、？やつ？は他人の身体を乗っ取るんだ。そうなんだろう……。

今頃気付いたのか、愚かなヤツめ。そんな声が空耳のように、どこからか聞こえた気がした。

そんな風に思い巡らせていた次の瞬間、ブースの外の録音室の扉が突然開いた。そして背の高い美人に連れられた、さして目立たない平凡な風情の一人の眼鏡っ娘の姿が目の端に映った。

「伊勢崎さん……っ」

*

「どうも、皆さんお疲れさまでーっす」

さて、という感じでブース内に入っていた相澤が各声優陣に、こなれた調子で挨拶する。どうも、初めまして。今回のルミナスコード第二期、緋くれないミラージュの記憶で副監督を務めさせていただきます、相澤太一と

申します。やはり現場は相澤の独壇場のようだ。そういえば相澤はこの業界に入る前は、何かのマーケットの営業みたいなことをしていたらしい。加えて、その界限では人気の占い師だったという知られざる事実まで。

そんなどうでもいいことを思いつつ、巧みな話術でどつと場を笑わせ和ませる相澤の背中を感心しながら眺め、竜崎は思い出したように背後にやってきた円城寺と、まるでウサギのように畏まる小柄な細身の女性に振り返った。

「」苦勞様……」

つと、伊勢崎サンお久しぶり。こっこんにちわ！思わず一礼するあたし。そんなに恐縮しなくていいから、ホント楽に見学していいよ。その竜崎監督の言葉に、ほんとにそれだけでいいんだろつかとあたしは思った。席に落ち着いて改めてブース内を見やる。あ、篠崎さん……登場キャラの説明と細かな演技指導を受ける声優陣の合間に、その姿があった。勿論、傍らにはヒロイン瑠美那役の水澤ひとみ。

その二人の姿を見て、何となくだけれど、ぎゅっと胸が締め付けられるような心地がした。自分でもよく解らない、この異様な感覚。やはり昨日の篠崎さんとの密会が功を奏したのだろうか。昨日一日だけのあれは誰も知らない、あたしと篠崎さんだけの秘密の会話。そのことを特別な理由にするわけじゃないけど。だけど。

あはは、碌に男と付き合ったこともない喪女が何やってんのさ。誰かが笑う声がする。そうだよ、あたしって、すっごく変。いい歳してアニメのキャラに熱あげて。だけど、この胸の鼓動は、心の動きは、別に何だってよかったのかもしれない。そういう言い方は

ちよつと誤解生むけどさ。あたしが手を伸ばしたかったのは、本当のあたたかい体温。あたしを抱きしめてくれる優しい腕——きつと誰だつてそうだよ。独りでも、そしてたとえ誰かといても、どうあつても思い通りにならない、そんな誰もが抱える現の病。ただ現実で実現しないなら、別の何かで代用するしかない。別にそんな悲しい理由じゃないけどさ。ただ想いの矛先がそのまま、まだ見ぬ遠い誰かを思つてきかないんだよ。

だつたら、もつと自分に素直におなりなさい……。

——あたしの中の誰かが囁く。そこから出て、早く新しい扉を開くの。そんなわけない……そんなわけないじゃない。そんなことあるわけ。必死に否定する理性とは裏腹に、何かが胸の中で蠢く気がした。ドクンドクン、心臓の鼓動がいつしか鳴り止まない。

「伊勢崎君、どうしたの？」

再び振り返り、そう何気なく訊く竜崎に、なんでもありません、平静を装つて答える。でももう、既に自分の中の何かの準備がスタンバイOKであるのを、当のあたしは何も知らなかった。

*

どうして彼女が……。副監督の説明を受けつつ時折、背後に気を配りながら、篠崎は気が気ではなかった。たとえ一昨日の御払いに参加したファンとはいえ、一般人の彼女がこの場に駆けつけること自体、やはりどう考えても、おかしい。

篠崎君、今はそんなこと考えてる場合じゃないわよ。円城寺は一人思っていた。というか、もうすぐ本当に、そんな場合じゃなくな

るんでしょけどね。しかし、不思議と今回はシンクロ具合が鈍かった。やはり彼女との間に何かあったのかしら？ 元々そうなるように仕向けたわけではないんだけど。でも、実質的に彼と彼女は。皮肉ね、あなたたちがそうやって心を通わせることが、結果的にルミナスという真実への扉を開く切っ掛けになる。冷たい微笑を浮かべながら、ちらと円城寺はあたしを見やる。

さながらイザナギとイザナミは、日本神話におけるアダムとイヴだった。けれど火の神カグチツを産んだため命を落としたイザナミは早々に黄泉の国へと退場する。彼女を追ってきたイザナギは醜く腐敗したイザナミの姿に恐れおののき――そして二人の間に思わぬ夫婦間の確執が生じる。神々が隠れるとされる熊野や出雲には、どことなく黄泉の国のイメージがある。実際、アマテラスやスサノオ、そしてツクヨミを生み出したのは、イザナギである。が、その背後に厳然として存在する、イザナミの亡霊。まるでそれは、日本国土を包み込むように存在する海そのもののようだ。

竜崎は、そんな隠された存在であるイザナミの呪縛に、今さらながら一人思い馳せるのだった。

*

「ナミ……っ！」

そんな折、唐突に未玲がスタジオの扉をばん、と開けて入ってきた。やれやれ、そんな呆れた調子で、いかにもめんどくさそうに振り返る竜崎。あんたら一体何やってんの、さ……、そこまで言いかけた未玲の口は立ち上がり、つかつかとやってきた円城寺に塞がれた。

「もう神代さんたら、何やってるのよ、もうテスト始まつてるじゃない！」

そう大袈裟に皆に聴こえるよう諭す。音響監督も既に度肝を抜かれている。さ、いいから、あなたは現場にお入りなさい。ほとんど押し込むようにブース内の扉を開けて追いついて御丁寧に鍵まで閉める。ばんばん！と未玲は、おかまいなしに内側から、ぎゃあぎゃあ言いながら不服そうに防音ガラスを叩くも、場の空気を全く読まないその剣幕に、気付いた相澤に奥へ連れて行かれた。さすがに声優たちの目に晒されると彼女は途端におとなしくなった。

くっそ……みてるよ。未玲はギリギリと歯軋りして振り返る。ごめん、未玲。相変わらず収まらない胸の鼓動を抑えながら、目線だけで、あたしは謝る。そんな冷たくも静かな攻防戦が繰り広げられる中、ルミナスコード二期第一話のアフレコは着々と進められようとしていた。

なんで、どうしてだよナミ……。

だが、やはり未玲には納得いかなかった。あれほど彼女には、この作品に金輪際関わるな、と言つて聞かせたつていうのに。確かに円城寺たちに今回も無理やり連れてこられたのかもしれない。それを最後まで阻止できなかった自分にも責任はある。それ以上に、未玲はやはりナミ自身の心の変化を疑っていた。嫌なら嫌と言えたはずだ。勿論これまでのように、不可思議な引力が文字通りあたしたちを、このルミナスコードに引き付けたのかもしれない。けれど……。

目の前のモニターに向かい、台本を手にした数名の声優が、何度かマイク前でテストを繰り返す。本作の主演であるルミナス役の篠

崎聡己の出番は、もうすぐだ。そして、そのあとすぐに控えているヒロイン瑠美那の第一声。

だめだ、激しく波打つ心臓の鼓動が停められない。その時、篠崎はこちらも異様な胸の高鳴りを、文字通り人知れず感じていた。やっぱり来るのか……あいつが。

一年前によく終わったと思った恐怖の瞬間の連続。それが再び始まるうとしていた。それに今回は、なぜか声優やこの業界とは一切関わりのない一般人である伊勢崎ナミが、この場にいる。そうだ、ひとみは……篠崎が見やると、隣の席に着いた水澤ひとみは、相変わらず抑揚のない調子で台本を開き、覚えてたの台詞を、ぶつぶつと一人繰り返していた。さっきまでぐったりしていたかと思ったら。すると俄かにその眸に異様な光が宿り始める。……っ！

しかし、篠崎が覚えていたのは悔しいかな、そこまでだった。

「はい、ラステス、いきます」

音響監督の声がマイク越しにブース内に響く中、新たなるルミナスの舞台が次第に、その場に集うプロの声優陣によって巧みに形作られていくのだった。

一体未玲は、二期でどんなルミナスコードを作りたかったんだろう。

あたしは、どうしても一期のラストが思い出せなかった。あれほど当たり前のように自分自身の中で議論していた、衝撃的なラストの展開だったっていうのに。なのに、目の前では既に二期の本編が滑り出そうとしていた。

……あれっ？　そういえば、睦月がいない、そう兄の真吾の方。あの声優さん、ちょっとよかったと思ってたんだけどな。あんなに瑠美那を大切にしてくれてた、文字通り、いい人だったのに。それにヴェルトーチェカ。え、なんでそんな立ち位置なわけっ。あとやつぱりデユナンは拉致られたリリアンを追ってアマテラスの学園を飛び出したんだ。まあ、やつぱり後半はガイアでの戦いがメインになりそうだったからね。勾玉も取られちゃったし。^{オーバー}

しかし白のメシアであるデナムさんは根っからの鬼畜だからなあ。そしてカグツチの血を分けたアグニも勿論、一緒。そしてクロエもね。肝心の主役ヒロインの瑠美那は、やつぱり主役だけあってガイアに旅立ってしまった、もう一人の自分であるデユナンとは別の意味で、イザナギ本国で自分自身のルーツである父親との絆に向き合うことに……。そして、アグニやクスヒ様と一緒にいることに耐えかねたクロエは、その後瑠美那と合流ってか。そして本当の意味で、それぞれの二人の皇子を大切に思う気持ちを新たに。それにツクヨミと聡介は——本当、どうなっちゃうんだろう、この先。

でも、そんなただのあらすじみたいなものの感想、どうでもよか

った。まあ、普通に面白いんだけど、ね。それより何より、今日の前で繰り広げられてる、ただ肝心の動画も音楽もないけど、生の声優さんたちの迫真の演技。ああ、やっぱりすごい。キャラクターに命を吹き込むっていう言葉の意味が身をもって感じられる。

そう、本当ならあたしは今頃、そんなアニメファンであるオタ丸出しの感嘆に耽っていたはずである。だが、しかし……。

あれ、ここってどこだろう。いつしか、あたしは自分が録音スタジオではない別の場所にいることに気付いた。何だかふわふわして、自分が自分じゃないみたい。それに気付けば自分の身体が見当たらない。何だかこれって――俗に言う幽体離脱ってやつじゃ。そのうち目の前に広がる映像は、^{スクリーン}いつのまにか別の場所に移っていった。

「何をしているッ、お前たち！」

何だか聞き覚えのある、凜と響きわたる、よく通る低い美声が、辺りの空気を圧した。

あれって――ル、ルミナス……ッ。不意に目の前に例の黒髪の長身の麗神が現れたような気がした。おかしいな、やっぱり夢見てるんだ、あたし。それより篠崎さんと水澤さん、大丈夫かな。ああ、それに未玲。ふと眼下を見ると、見慣れたアフレコスタジオの風景が立体的にそこにあった。そこで懸命に演じている各声優さんたち。そしてマイク前で台本を構えた篠崎さんも。

ああそうか、篠崎さんが喋ってるんだ。それは確かに個人的にも聞き覚えのあるルミナスの声だった。

「お前たちじゃないわよ、ルミナス！アンタこそ今まで何してたのよっ――」

その、これまでにないほど意気揚々とした快活な明るい声は、確かにこちらにも聞き覚えのあるヒロイン金城瑠美那のものだった。あー何だかスカツとする。やっぱり、それでこそ瑠美那って気がするよ。えっ……ということは、瑠美那役の水澤さんは。

眼下を見ると、いかにもらしいカンジで瑠美那役の水澤ひとみが、これもマイク前でピンと背筋を伸ばし、特徴のある明朗な叫び声を高らかに発していた。ほえーっすごいや。と、視線を微妙にライトの当たったブース内から薄暗い録音室の方に移すと――じっと聞き耳を立てる竜崎や円城寺、そして音響監督に混じって席に着くあたしが……。

『…………ッ』あたしは俄かにぞつとした。

その眠るように気を失った姿を発見した途端、いきなり意識が混濁し始め、唐突に頭がぐらぐらし始めるのだった。

*

「ナミッ……ナミッ!!」

未玲は狂ったように目の前の防音ガラスを叩いていた。その向こうでは、ぐったりしたあたし伊勢崎ナミと、さも当然の如く前方の声優たちの演技をシビアにチェックする竜崎監督と円城寺冬華の姿、どうということだよ……。呆然とする未玲には、一体何がどうしたのか正確に事態を把握することも叶わなかった。

目の前のマイク前では今までの鬱屈した様子が嘘のように篠崎と水澤が、生き生きと水を得た魚のように、それぞれルミナスと瑠美

那とを演じていた。やはりプロの仕事は違うな……そんな少し前までは、ファン側の意識でいたはずの素直なアフレコの感想も、実際にその現場を肌で感じると全く違って感じられた。それは、まさに闘いだ。あたかも、もう一人の自分自身と戦うかのような。その一人一人の演技のせめぎ合いが、複数間だとさらに多面的に増幅される。そのまさしく火花を散らすかのような化学反応が、ものすごい。

いや、そんなことはこの際どうでもいい……だがしかし、実際はそうでもなかった。水澤たちが活発に迫真の演技ができるのは。このルミナスコードに限っては、やはり何か神がかっていた。誰かの身体に乗り移れば、確かにもう一人の自分になれる。新たな自分自身として生きられる。そう、もしかしたら今ナミは、文字通り目の前の水澤ひとみ演じる、金城瑠美那として生きていたのかもしれない。

そう、あたしは確かに今、金城瑠美那だった。これまでTV画面を通して感情移入していたのと同様。いや、もしくはそれ以上のシンクロ率で、文字通りあたしは今、瑠美那だった。そして目の前には、篠崎敏己演じる、いや彼の呼吸や鼓動をその糧として生きる太陽神ルミナスが……こんな話、きっと誰も信じないだろう。うっん、それはあたし自身が信じたくない事実だった。だって既に生ける屍と化した水澤ひとみの身体を乗っ取って、あたしは。そして傍らにいる篠崎さんは、やっぱり誰か違う人格に乗っ取られているかのように、嬉々とした表情で冷酷な様のルミナスを演じていた。

ダークヒーローと宿命というその数奇な運命に翻弄されるヒロイン。それも表面上の認識では、それは悲恋、いや悲哀と称される愛。それでも、やっぱり瑠美那は、ルミナスという呪縛から逃れられない。その仮面の下の真実に気付いてしまったから？ いいや、それ以上に。

それは文字通り、あたし自身が瑠美那として直にルミナスに触れて感じたものだ。いや、これからもっともっと、それを身をもつて感じるようになるだろう。決して理屈では説明できない、混沌としているけど、どこまでも世の真理に近い、その生の感情。

それはあたかも、全てを飲み込む闇のようでもあり、同時に奇しくも子宮の如くの母なる海のようにもあった。生の誕生は、その闇の中から始まる。誰もが皆、その闇を経験して生まれてきたんだ。そして誕生の瞬間、光が満ちる。光あれ、そう天地創造の神は言った。一度しかない、その究極の光を感じる瞬間。だから本物の闇は怖い。怖いと感じる思いが、その反対の死を常に人に怖れさせてきた。でも、本当は逆なんだ。本当は怖くも何ともない……そう思い込んでいるだけで。でも、それでも、やっぱりそのことに気付くには随分と時間が必要なんだろうけれど。

*

別段、何か特別な原因があるってことでもなかった。けど、あたしはずっと以前から、何かの病に取り付かれていたんだ。実際、高校で未玲に出会うまでは、ずっと友達というものが作れなかった。怖かった。自分自身を取り巻く、世界のすべてが。それを言葉で表現するのは、とても難しいけれど。けど、実際あたしは、幼少時から自分だけの世界に閉じこもり、そこで想像の翼を広げることが、あたしの中のすべてだった。幼い頃から多種多様に見続けてきたアニメの数々。それが確かに、あたしの孤独な心を救ってくれた。空も海も、そして友情や恋も冒険も、その中で想像することだけで、すべて事足りた。心は、いつだってそれだけで十二分に満たされた。

そう……どうせそんなこと、単なる引きこもりの隠れ蓑に過ぎな

いつてこと解つてた。第一、二次元萌えじゃあ恋に恋する乙女レベルでしかないよ。いや、それ以下か。でも。恋愛云々はともかく、あたしの心は、そんなものに救われてしまうほど絶海の孤島に幽閉されていたんだ。ずっとあたしの周囲には、見えない冷たい壁が張り巡らされていた。それを作り出したのは、もしかしたら、あたし自身だったのかもしれないけど。

ここにこうしている間は、あたしはものすごく自由だった。誰も何も、あたしを責めたり怖がらせたりしない。これじゃあまるで身体障害者みたい。どこにも行けず、何一つ満足に自由に行えない。だから一種の精神疾患なんだ。怖い、と怯える感情が、すべてをぎこちなくさせた。何より自分自身を誰かに意識されることが怖い。見られることが、そして見ることで自分が怖い。できるなら、この世界からいなくなりたいかった。消えてしまいたい。淋しいとか、ひとりぼっちとか考えるその前に、あたしは人の間に自分がいることが体が怖くて、とにかくここからいなくなりたいかった。どうして――。

そんな時だ。未玲と出会ったのは。勿論、最初はオタ絡みの接触だったかもしれない。それにしても、未玲は派手に目立つ外見や立ち振る舞い自体が独特だったけれど。実際あたし自身、未玲と友達になれるなんて最初は思ってもみなかった。それでも、未玲も様相は全く違うけれど、あたしと同じ孤独を抱えていたのかもしれない。だから、とてもそうは思えないけど、彼女もアニメなんかの想像の世界に遊ぶ趣味を持っていたんだ。

*

「もう少し瑠美那の台詞に説得力が欲しいな」

神代君、神代君ってば。相澤にしては珍しく？副監督らしくアフ

レコ現場の指揮を執る相澤太一の言葉に、未玲は現実引き戻された。見ればナミは普通に席に着き、何事もなかったように、こちらを見学している。まさか、夢……だったのかな。そこは何の異常も感じられない、当たり前のアフレコ現場に戻っていた。ルミナス役の篠崎も、そして瑠美那役の水澤ひとみも、何の違和感もなくアフレコ作業に没頭している。未玲は慌てて手にしたアフレコ台本を見直した。

何かもう少し……そう、分離したルミナスを気遣うような。そうか、二期ではデュナンとルミナス形態とで、いうなれば一粒で二度楽しめるような展開にしたんだっけ。確かにデュナンとして存在していた方が、ルミナスとしては都合がよいかもしれないけど、そればかりだと本来の神様形態の魅力が薄れてしまう。それに、その方が瑠美那とも直に接触できるしね。

「じゃ……じゃあ、ここのタンカ切る部分を削りますかー副監督」

そうすれば分数も足りるし。そうだね、そうしてみようか——そんな当たり前のやり取りを、わざとらしく相澤と交わしながら、なんであかし、こんなことしてるんだろうと改めて思う。それでも、それが今のあかし自身の仕事だ。アニメ業界、脚本家。まるで降って湧いたような突然の抜擢だったけど。でも……まさか、そこにナミが関わるなんて信じられないようなコトさえなけりゃ、絶対に引き受けなかったんだけど。というか。

逆に考えれば、ナミが関係するとなれば、あかしは絶対にこの場から去るなんてできない。第一ナミを守らなくちゃならないあたしが、どうしてあいつらから背を向けられる。そう、ナミがここにいる限り、やっぱりあかしは。

やっぱりものすごく疲れた。そう、久々にルミナスを演じた篠崎聡己は、ぐったりとした疲労感を抱え、アフレコ現場ロビーのソファで頂垂れた。しかし、そのアフレコ後ひとみは、不思議と以前の水澤ひとみに戻っていた。ほんと久しぶりね、篠崎さん。まるでその時、初めて再会したかのように？声優仲間として？水澤ひとみは明るく話しかけてきた。どういうことだ……？その当たり前に喜ばしい変化に、逆に戸惑う自分。アフレコ前までは、ずっと魂が抜けたような状態だったのに。それはそうと、伊勢崎さんは。

竜崎監督と円城寺女史との間にいる彼女を先程見かけた。無事第一回目のアフレコ作業が終了した直後だ。俺とひとみは、最後のちよつとした録り直し部分があったからブース内に残っていたけど。その後、彼女の姿はもうなかった。それより不思議なのは、今回は一期の頃のような同じ脱力感があったとしても、以前のような、自分が自分でないような、そんな金縛り状態にはならなかった。確かにアフレコ時には、自分はルミナスとして存在していたかもしれない。そういう別人格状態とでもいうのか、確かに何かが、どこから降りてくるような感覚は依然としてあった。よく歌手とか俳優や、あるいは創作系アーティストなどが、その状態をそう表現しているのを見かける。

何か自分ではない別のものを演じる時、あるいは何かの別世界に魂を飛翔させる時、そういう感覚を感じることはよくある。そんな瞬間、確かに人は神がかった何かに触れるのを感じる。自分のそれ、そういう類のものかもしれない。しかし、それにしただって……この得体の知れない恐怖感は異様すぎる。それでも篠崎は、このルミナスコード二期を介して彼女、伊勢崎ナミに出会ったことで、確かに何かが変わったことを実感していた。

「あの……篠崎さん、」

その時、不意に自分に声をかける人の気配を感じて、篠崎は顔を上げた。

君は……神代、未玲さん。見ると先程、自分たちのいた同じブー
ス内で脚本の手直し作業を行っていた神代未玲が、どこか所在なげ
な表情で佇んでいた。伊勢崎さんの親友の神代未玲。自分と同じに
たった今、アフレコ作業から解放されたところか。

未玲はずっと何か言いたげな顔をして黙っていたが、その沈黙に
自ら耐え切れなくなっただよように、ようやく口を開いた。

「ナミに……伊勢崎ナミに、これ以上関わらないで貰えませんか？」

自分でも何を言っているのかと思う。しかし未玲は、そう直接声
をかけずにはいらなかった。篠崎は、ビクツとして改めて未玲の
顔を見上げた。そのどこか何かを怖れているような、それでいて至
極真剣な表情に、篠崎は釘付けになる。やっぱり彼女は勘付いてい
るんだろうか、俺と伊勢崎さんのこと。

しかし、そんな何かが彼女と自分との間にあるとは到底思えなか
った。——いや。

それでも、その未玲の強い眼差しを見ると、自分が何か罪悪
でも犯したような気分になる。

「伊勢崎……さん？」

その名を口にして、改めて自分が彼女を強く意識していることを
実感する。そして不意にその罪の意識から逃れるように、篠崎は途

切れ途切れに小さく呟いた。……どうして。どうして彼女は、今日この場所に現れたんだろう。その消え入りそうな呟きを聞いて、未玲は初めて自分が篠崎を責めているような気分になった。そう、あたしは確かに？彼に嫉妬していた？。ナミを、ナミを取らないで。あたしからナミを奪わないでよ。

実際奪われたのは、篠崎ではなくルミナスコードそのものからだっただのかもしれないのに。

「きつとあなたも、ナミも、そしてあたしも――、」

このルミナスコードの呪縛から逃れられないのかもしれない。自分でも意味不明のコトを言っている気がする。それでも、どこかでそれは、あたしたち三人を表現するのに最適な言葉のような気がした。

「神代さん……」

*

ここにいるのは、自分自身。そして、あたしが見つめているのは、確かにそこに存在している、誰かのあたたかな温もり。このややこしい現実では、あたし自身が当たり前に感じるものが叶わぬ何か。それは、あたしが欲しいと思うすべてだった。

想像の世界の中だけで満足してしまうなんて、本当に馬鹿みたい。これじゃ永遠に恋人も作れないし、結婚もできないよ。そんな切実な問題に囚われてしまうなんて、ほんとつまらないやつだね。それでも。

それでもあたしは、その想像の世界を介して、すべてが広がって
いくななんてこと、確かに俄かには信じられなかった。

ああ、そうか。確かにそうやって、あたしは未玲とも出会ったん
だ。そして、今度は篠崎さん……。

あたしが好きだったのは、ずっと囚われていたのは、二次元の存
在のルミナスだったかもしれないのに。もしかしたら、そう思っ
ていた心が、引き寄せた出会い。そして——その出会いさえも、見
えない遠い世界へ繋がる道しるべだったただなんて、当のあたし自身、
当たり前想像することもできなかった。

逢いたいな……篠崎さん。

ふと携帯画面のアドレス帳のTEL番号に目が留まる。精神的引
きこもりの自分が、まさかここまで積極的になるとは思わなかった。
あたしの指は自然と吸い寄せられるように、呼び出しボタンを押し
ていた。

トゥルルルrrrrr……

その遠い携帯の呼び出し音に、眩暈まで感じる気がする。

数秒後。少しためらったような間隔の後、その声が言葉を発した。
「……はい、篠崎です」

*

本当にこんなこと、未玲は絶対に許さないだろうな。それに……
本当にあたしってば、何やってるんだらう。篠崎さんの車が待ち合
わせの場所にやって来るまで、数分もかからなかったのに、随分と

長く感じた。篠崎さんは、さっきの電話で少し躊躇いながらも、すぐにOKしてくれた。明日は休みだから……そう付け加えた言葉に、そういえば、あたしも明日休みを貰っていたことを思い出した。それはなぜか円城寺が、あたしの職場の上司に強引に頼み込んだことだったらしいのだが。

夜九時。夕方五時から始まった、さっきのアフレコが終わったのが、ちょうど七時半頃。案外、収録自体は二時間強くらいでスピーディに終わってしまうものだ。それから、あたしも篠崎さんも一旦帰宅したんだけど。

本当にどうしたの……きつと篠崎さんは、そう思っていたに違いない。けれど、それでも二人とも、きつと躊躇う気持ちを越える何かを感じていたのかもしれない。「こんばんわ」——そんな当たり前の挨拶。けれど、その後ずっと続く沈黙が、お互いの心の葛藤をそれぞれ抱えていたことを示していたなんて。……本当にいいの？ 本当に。そして、その沈黙を破り、ようやくと口を開いた篠崎氏。

「……さっきは驚いたよ」

ああ。そういえば、あたしも篠崎さんも、さっきのアフレコ時には一度も言葉を交わさなかった。

その——あたしも。確かにあたし自身、自分が問題のアフレコ現場に連れてこられるなんて思いもなかったんだけど。

「本当にあの人たちは、何を考えているんだ」

勿論それは、竜崎監督と円城寺女史。でも……もしかしたら今日、水澤さんが無事にアフレコ参加することができたのは、そのおかげ

だったのかもしれない。あたしは心の中で思っていたことを篠崎さんに言おうか言うまいか迷った。だって、あたしはさつき、確かに水澤さんの意識の中の金城瑠美那だったんだもの。しかしそれはイコール、むしろあたしがいなければ、水澤ひとみは金城瑠美那として存在しえないということになる。いや、それ以上に。

あたしは水澤さんの代わりに、瑠美那として生きていた。そんな自分でも信じられないような事実が、確かに感覚として先程、感じられたのだ。そして、もしかしたら今もあたしは――。

「――まだ、ルミナスはあなたの中にいるんですか？」

あたしは不意に、まるで独り言のように俯きながら助手席で呟いた。え？と、瞬間驚きの表情を浮かべる篠崎氏の横顔。

けれど、それ以上にそうではないと否定したがる自分の心があった。そう、決してやつに操られて、こうして君と会っているんじゃないと。

『これ以上、伊勢崎ナミに関わらないで貰えませんか？』

さつきの神代未玲の言葉が、何度も篠崎の脳裏で木霊のように鳴り響いた。けれどそうやって意識の壁を叩かれる度に、何かの思いが不思議に強くなっていく。瑠美那とルミナスが惹かれ合うのは、まるで運命そのものの導きに拠るもの――そう、それは決して理屈では片付けられない宿命的な何かだった。

きつとおそらくそういうものは、作中の話だけじゃなくリアルな世界にも存在しているのかもしれない。だからこそ、アニメ作品という架空の物語が決して書き割りのような平面的なものにならず、

妙な説得力を持つに至るのかもしれない。それはきつと人の心が生み出すものだからだ。もし、そうであるなら、彼女伊勢崎ナミとの、まるで偶然のようなこの出会いも、単なる偶然ではなく、それを越えたところにある必然であるといえる。

ふと胸中に去来する、そんなロジックでさえ、今この瞬間の引力に勝る術を持たない。篠崎は、なぜこうして彼女と逢っているのか、その理屈を越えたところにある理由を、無意識のうちに理解している自分自身を感じた。

そうであっても、あたしは——あたしたちは、水澤さんの心と身体そのものを蔑ろにしているんじゃないがし……。――

その罪の意識に心が震える。けれど、それはあたしだけじゃなく篠崎さんも一緒だったに違いない。その罪悪感という共通意識が、奇しくもあたしたちをこうして結びつける。その意味でもあたしたちは共犯だった。それでも——もっと彼と話したい、二人でいたい。こんな気持ちになるなんて、最初は微塵も思わなかった。

まるで女の子みたいに透ける肌の静脈。どことなく憂いを含んだ、けれど綺麗に揺れる真っ直ぐな瞳。すつと通った鼻筋、ふつくらと整った顔立ちに細い指先。あまり男の人ということを意識させない、それに気さくで話しやすい、あたたかな人柄。

彼という人に出会って初めて思った。誰かを好きになるという、このきゅつと胸を締め付けるような甘酸っぱい気持ち。勿論、これが初めてじゃないけれど、これまでのそのどれもが、あたし自身の想像の枠を出ない類のものばかりだった。けど久しぶりに感じたこのカンジ。これもまた以前のような独りよがりな堂々巡りに終わるんだろうか……。

そんなことを思いながら、それでも今度は決してそうではない感覚に襲われる。とても一つ年下とは思えないほど、篠崎氏のエスコートは優しく頼り甲斐があり、それだけで何か安心しきってしまう。ああ、でも。やっぱりどこか切なく苦しい。そんな心の傷みを、きつと篠崎さん自身も実感していたのかもしれない。

「本当は私、今日は来るつもりじゃなかったんです」

勿論それは、夕方のアフレコのことだ。でも……あたしは、夜景の綺麗な居酒屋風のラウンジで篠崎氏を前にして呟いた。でも、その言葉の続きは、ついには出てこなかった。その代わり、実はあたし、お酒が飲めないんです。そう切り出すと「実は僕も……」と篠崎氏は苦笑いしながら告白した。それでも、ちよっぴりアルコールが欲しい気分だった。あたしにとっては会社の飲み会というのは、ほぼ苦行に近いものがあつたのだが、そう打ち明けると篠崎さんは、じゃあ今も？ と、少しだけ意地悪っぽく訊くも、嘘、嘘と、笑いながら謝った。

それでも、そんな当たり障りのない会話で談笑しながら、あたしたちはどことなく不安だった。そもそも、その不安を埋めるためにこうして二人して逢っていること自体が、その傷みの元凶であるというのに。その矛盾の悪循環に、次第に互いに嵌っているとも知らず……そして、だからこそ。

そのループ地獄を忘れるために、今こうして飲めないお酒を二人して飲んでいる。嫌だ、何だかすごく自虐的。本当なら楽しいはずのこの会話も、どこか見えない心が痛くて、でも、その傷みをこうして分かち合っていること自体が、今彼とあたしとを深く結び付けている——きつと延々と続く、甘い痛みが無間地獄。

「じゃあ、どうして僕を呼び出したりしたの？」
さっき言い淀んだ言葉の続きを確認するように、篠崎さんが尋ねる。

そんなこと——言えるわけない。急に心臓が早鐘を打ち始め、心なしか頬が紅く染まったのは、決してちよっぴりのアルコールのせいではなかった。

黙ったまま俯くあたしに、篠崎さんは「行こう」不意にあたしの手を取って店を出る。

*

実はさっきね、神代さんにこれ以上、あなたに関わらないで欲しいって言われたんだ——えっ。あたしはそう告げられ、思わず篠崎さんの顔を見上げる。でも……篠崎さんは、そう言って夜空を振り仰いだ。もう初夏に近いけれど、どことなくまだ冷たい夜風。春とも夏ともつかない五月のそよ風が、悪戯のように頬をくすぐる。

「何だか不思議だね、どうしてあの夜空に星がまたたいているのか考えると」

そんなまるで関係のない話をしているようで、その実、篠崎さんは真剣だった。

僕たちがこうして出会ったのだって、その不思議の一つかもしれない。確かにルミナスコードという作品を介してだけ。あの星の光が、こうしてここにいる僕たちの目に届いているのと同じように、いつかどこかで、これまで絶対に出会うことのなかった、たくさんの人たちと、この仕事を通じて出合える。それは、実際に会っていない人たちとも。きっと演じている作中の登場キャラクターを通じて……だから僕は、この仕事を選んだのかもしれない。最初は映画を作るのが夢だったんだけどね、でも結果的によかったと思ってる。

そう、そうだよな。あたしと篠崎さんも、このルミナスコードという作品がなければ、きつとずっと出会えなかった。

それでも、そんな彼の話を聞いていると、殊更に自分自身が小さく思えてきてしまう。あたしは——そんな夢とつくに諦めてしまったかもしれない。自分がやりたい、関わりたいたいなとおぼろげに思ったことは、どれもがすべて実現しない儚い夢幻^{まぼろし}でしかなかった。だからこそ篠崎さんみたいな人が、あたしにはすごく眩しく思える。

でも……今、傍にいるこの人を身近に感じていると、急に自分にも何か出来るような気がしてくる。ああ、これってきつと奇跡だ。胸に湧き上がる、こみあげる、この熱い思い。ルミナスコード云々とかじゃなく。あたしは素直にそう思っていた。

「よかった」「え？」

やっと笑顔が戻った——篠崎さんは、そう言って微笑んだ。あたしは嬉しかった。その笑顔が、ものすごく。

そして、だからこそ。再び先程の胸の痛みが心に迫る。

「篠崎さん……あたし」

急に涙声になって自分自身でも焦る。でも。どうして、こんな出逢い方しかできなかったんだろう。それでも、確かにそのルミナスの呪縛があればこそ、あたしたち二人はこうして出逢えたのだ。その切ない皮肉を愛しく思いながら、それでも彼に引き付けられてしまっ自分自身のこの運命を呪った。

「伊勢崎……さん？」

やだ、ダメだ——止められない、よ。胸が痛くて、苦しくて、知

らず知らずに零れる涙。

「ナミ——、」

しかし次の瞬間、ふわつとしたシャツの感触が濡れた頬に触れた
と思ったら、あたしはいつのまにか篠崎さんの胸の中にいた。

ぎゅつとしつかり抱きしめられていたのに、あたしはまるで大海
原で波にさらわれる小舟のようだった。篠崎さん、篠崎さん、篠崎
さん……無意識のうちに、いや、強く心の中で何度もその名を呼ぶ。
あたしをしつかりと抱いていてくれる、その温もりが今、確かにこ
こにあった。

何だか淋しそうだったから……だから不思議と、その本当の笑顔
が心から見たいと思った。きつと初めて会った時から、そう感じて
いた。多分、この出会いは遠くから誰かに仕組まれたものだ。でも、
たえそうだとしても。どこかで、誰かの声が囁く。

——オマエノココロハモウ、ワタシノモノダ。

ルミナス、お前か。

それでも、やつに操られるままに、意識を手放す。

『聡己……あなたはもう、私だけのものではないのね、』そう、先
にルミナスに心を捧げてしまった、ひとみが胸の奥で囁いた。

あたしは、篠崎さんの腕に身体を預けながら、その初めての唇の
感触を受け入れた。

実際二期はルミナスコードの第二段階だ。一期でまず広げた間口——その取っ掛かりを切っ掛けとして？餌？を蒔いた。そして案の定、こうして逸材が見つかった。それはしかるべき手順に従い、しかるべき時に罠にかかった、見つかるべくして見つかった存在だ。……神代未玲しかり、そして伊勢崎ナミしかり。

二期の制作がどれほど押そうと、これだけは絶対に譲れない。実質彼女らがいなければ、始まることすらなかった二期。おそらくこのまま、水澤ひとみも意識を取り戻すこともなかっただろう……ただしそれも、既に朽ちてしまった抜け殻に過ぎないが。

『水澤さん、来月にも新しいアルバムの制作に取り掛かるそうよ』

彼女の事務所とも秘密裏に繋がりを持つ円城寺冬華が言った。「ひとみレボリューション」既にその新譜アルバム発売に伴う全国主要都市でのツアーの日程まで組まれているほどだ。実質、水澤のマネージャーにも既に円城寺の息がかかっていた。そう、人の心を掌握するのは彼女の先輩特許だった。

「まったく、ご苦勞なことだな」

ええ、そのようね。まるで人事のように竜崎とのTEL会話で話す円城寺。実際彼女は押しも押されぬトップ声優アイドル。その彼女にはまだ、多くの使い道が残されているということだ。勿論それは、ルミナスコードヒロインを演じるという重要な役割含め。だから——やはり？彼？と？彼女？は文字通り付き合ってもらわないとその想いの輝きが大事な命それ自体の輝きとなる。恋人を生かすために、その恋人に心を偽り永遠に裏切り続けなければならないなんて、篠崎君も随分と不憫な役回りですけどね。

しかし、ふふつと笑うその声は、確かにこの事態を楽しんでいた。誰も好き好んで人の不幸を喜んだりしないだろう。だが、そうとも限らないのが、この世の常だ。だが彼女の場合、いや、それは己自身もだが——こういうことに慣れっこというか、何事にも余計な感傷を抱いたりせず、ここまで不感症なまでに冷静になれるというのは。

しかし。……ふつ。次の瞬間、受話器から響く溜息を聞き、我に返る。

『ほんとう、彼女たちを見てみると、何か昔を思い出してしまいますね』

昔、か。それは我々未来人にとって、いつのことを示すのか。いや。ここは既に別の世界なのだ。

「ところで、どうするつもりだ——次のアフレコまでに、」
しかし、竜崎の言葉を半ばで遮るように、円城寺は即答した。

『……熊野』

そつと置くようなその言葉。聖地巡礼、か。そうだな、それは確かに生まれたばかりの新しい恋人たちにとって、そこへ赴くことは、楔みそぎそのものだ。まさにこの世とあの世の境目、あるいは神界への扉を開くに相応しい場所。ひっそりと深い神秘の杜もりに覆われ、聖なるものと忌むべきものとが織りなす深淵なる息吹。

「篠崎君には、既にそのことを吹き込んであるってわけか」

ええ。本気で水澤さんの意識を取り戻したいなら、本当に彼女を救いたいと思うなら……彼は？彼女？と繋がるしかない。それは愛ではない。いや、愛であってその愛そのものを穢す極上の行為。あの子たちには申し訳ないけれど。

せつかくのGWですよ？^{ゴールデンウィーク}いかがです、竜崎さん。私たちも御一緒に。本放送を直前に控え、ルミナスの制作は現在その真っ只中であるというのに、その円城寺の冗談とも本気ともつかない言葉に、思わずふっと笑った。

＊

まったく、制作が遅れに遅れたルミナスコード第二期。そのおかげで制作進行デスクの自分は各セクションから酷いブライングの嵐を受けている。乙部晴之は深い溜息をついた。遅々として進まぬ脚本作業。大本の脚本^{ホン}が上がってこなければ、（絵）コンテも出来上がらないし、当然、作画作業も思うように進まない。一体、総監督は何を考えてるんでしょうか。あんな素人上がりの生娘みたいな新人脚本家連れてきて。こちらと甚だ迷惑ですよ。

だが、ようやくここに来て曇っていた事態に明るい兆しが見えてきたようだ。

「おっとベクウン、ごめんねー色々迷惑かけてエ」

おっとベくんじゃないっすよ。……ああ、ここにもいた。どこの馬の骨とも判らないホストもどきが。そう、副監督の相澤太一。こつちも神代未玲と同様、今回の二期で抜擢された胡散臭い新参者^{ニユーカマー}。ま、ようやく先日二期第一話のアフレコも滞りなく終了したし、制作自体も何とか軌道に乗り始めたけど、あと半年もこの人たちと付

き合なけりやならないと思うと……。

「ところで、一体誰なんですか、あの一般人の娘は」

一般人？…… ああ、伊勢崎さんね。先日のアフレコ現場で見かけたのだろう、思わず不審がる乙部の疑問に答える相澤。要するに彼女はファン代表。今回のルミナスの指針は一風変わっていてね。そりゃわかりますよ、どんだけ一風変わってるかなんてのは一目瞭然、第一あなたを見れば。内心、乙部は晴れやかに続ける相澤に一人突っ込んだ。

「ああ、そうそう。実はこれから一週間、とあるロケハンに出掛けることになったから、あとはよろしく」

え”え”え——ッ

思わず乙部は、その言葉にその場に卒倒しそうになった。

*

その夜、どうしても未玲は容易に寝付けなかった。まだ、さっきの篠崎氏との会話が脳裏に焼きついている。結局あたしには、何一つ止められないのかな…… どうしようもなく弱気になる。ナミにはナミの意味というものがある。だけど、そうだとしても。

そうだとしても、あたしはナミを守る——。

それは一〇年という年月を経て、再会したあの日に誓ったこと。確かにあたしは何かから逃げていた。ナミと、そして自分自身の心からも。二人が一緒にいればいるほど、あたしたちは遠ざかる。そ

れは同じ孤独をどこかで共有していながら、まだ一〇代だったあたしたちが常に実感していたことだった。

オタクという冗談そのものの聖域に守られて。そう、あたしたちは、あたしたちだけの理屈が通じる世界に逃げ込んでいた。というか、腐の道はそのなれの果て、だったのか。どちらにしても、あたしたちのモラトリアムの時間はとくに過ぎ去っていたのだ。

——結局どうしたって、この悪循環は停められない。

ええい！何がどうなろうと知ったこっちゃない！

「ナミ、あんたが篠崎氏とどうなろうと、あたしは……」

そうだ、もうルミナスコード二期冒頭の脚本^{ホン}は、上げてしまったのだから。新たなステージ、か。？あいつら？が何を望んでるのか知らないが、こうなったら、やるしかないんだ。やつらの好き勝手になんかさせるもんか。

そう思いつつ、未玲はそれでも自分たちが既に竜崎と円城寺、二人の手の内にいることを、本当の意味で、まだ知らなかった。

*

翌日、あたしはいつものように都内某所にあるスタジオネプチューンへ向かった。

必ずしもアニメ脚本家は制作スタジオへ出向いて作業しなければならぬというわけではなかったが、脚本家によっては、そちらで実際の執筆作業を進めた方が、監督や作画スタッフなどとの意思の

疎通も出来、結果として効率が良いということもある。

——というか、あたしの場合、あいつらの動向を常に窺ってなければならぬ、という切実な理由もあったのだが。

「神代未玲を舐めんなよお……っ！」

気合が入りすぎて、思わずそんな台詞が口を突いて出る。

するとスタジオの片隅のデスクで、何やらマップやら時刻表やらを広げて思案している相澤が目に入った。

「や、やあ神代くん、今日は早いね」

いつも通り嬉しそうに挨拶するも、どこかその表情からは、慌てふためいた様子が容易に見て取れた。

はーん、これは。あたしに隠れて何か企ててるんじゃない？……図星だった。見ると、相澤は机の上に広げていた諸々を慌てて片付け始めている。

「どうかしましたかあ副監督」

凶悪な笑顔を浮かべてにじり寄ると、ほんとなんでもない、なんでもないからっ。あははは、と冷や汗をこめかみに浮かべ、笑いながら相澤は後ずさった。

「何コレ——へえ、熊野？」

今度は熊野まで、わざわざ御払いー？ 意地悪くそう呟き、デスクの上にしまい忘れた一枚のパンフレットを手取る未玲。いやいや、違う違う。こっこれは単に口、ロケハン、いや、ただの観光……。ロケハン？ 未玲はその言葉尻を捉えると、すかさず睨みを効

かせて相澤を視姦する。

「ほんとほんと、何だか今回は監督や円城寺さんたちも？彼ら？に付いてくみたいだし」

あつと思つたが遅かつた。思わず口が滑ってしまった相澤に、さらに未玲はにじり寄る。彼らつて誰——？ まさか……。

結局、相澤は未玲の脅迫に、すべて吐かされてしまった。次のアフレコまでの一週間。ルミナス役の声優の篠崎聡己、そして瑠美那役の水澤ひとみと、そしてもう一人。伊勢崎ナミは熊野へ向かう。その一行に気付かれぬよう、どうやら竜崎たち黒幕連中も同行するようなのだが……。

相澤は一人単独行動で、別の案件——そう文字通りのロケということで、伊勢路から一路、熊野三山へ向かうとのこと。今さら何のロケハン？ それに主要スタッフである監督たち——この際、竜崎や円城寺はともかく現場の指揮を執らねばならない副監督の相澤まで——が、揃いも揃つて。一体、何の目的があつて熊野くんたりまで（というか、あんたら仕事しろ、仕事）。

それより、ナミ……！

どうしても解せぬことばかりだ。これまでもこれまでだったが、今回ばかりはさすがに……ナミと篠崎氏、そして水澤ひとみ。奇しくも、この間の神社での御払いの面子。何となく聞き齧っていた知識程度だけど、確かに熊野は伊勢、出雲と並んで霊験あらたかな神社の総本山がある所だ。というか、いまや世界遺産。そのほとんどを深い森林に覆われた紀伊山塊は、それだけで思わず拝んでしまいそうなのが隠れていそうだ。

神様——か。ルミナスは、ほんとに神様なのかな。だとしたら。

しかしそれより。こんなこととして、ほんとに大丈夫なんだろう
か、このアニメ。これまでも、うつすら思っていたことだったが、
あまりに全てがルーズすぎる（盛大に脚本作業を遅らせた、あたし
が言うことじゃないが）。まさか、それさえも神様とやらの威光で、
どうとでもなるとか本気で考えてやしないだろうな。

そうは言っても実際未玲には、そんなことどうでもよかったのか
もしれない。そう、本当はナミさえ無事なら。あいつらの考えてる
ことは、本当に解らない。それだけに実際、ナミが彼らに付いて行
くとは容易に思えない。だが——、

何となく未玲は不吉な予感を感じていた。ナミは篠崎氏のために
……。
そんなばかな、そんなこと、あたし——あたしは。

それでも未玲には、ナミを止めることはできない気がした。

「……行くよ」

え？ 行ってくてどこに。思わずそう尋ねる相澤に未玲は言い放つ。

「熊野に決まってるじゃないのよ！」

*

「新キャラの設定、もうあがってきてるんですかね？」

現在、急ピッチで作画作業が進められているスタッフルーム作画

室。作画監督兼、メインアニメーターである大森貴幸は、もう一人コンビを組む同アニメーターの若林聖子に作業途中、話しかけた。

「うーん、それがね。監督も副監督も、まだ何も言ってきてないんだよ」

ええ？ もう放送日は目と鼻の先だよ——怪訝そうに困惑の色を浮かべた声で返す大森。というか……、既に呆れ顔の相手に若林は、さらに追い討ちをかけるように呟いた。

「おかしい指示が入ってるの知ってる？」

これからの一週間ですべてが決まる。週明けには、完全な態勢が整っているから。だから、それまでに予定される要求にいつでも応えられるようにしておいてくれ……。

「はあ、それ監督が言ったの？」

一体どういう意味だよ。第一、四話で登場する予定の新キャラの詳細な設定も、まだ届けられてないのに、どう要求に応えりゃいいっての。確かにその指示を伝えた制作進行の乙部を責めてもどうにもならないが。外注から上がってくる原画チェックの作業も山のように積みまれているっていうのに……確かに大森は先の見えない作業の連続に些か苛立っていた。

それでも大森は監督である竜崎や、その女房役であるメインシリーズ構成の円城寺の指示には逆らえない気がした。つつか、あの人たちこの業界では有名だもんなあ。あれで、よくネプチューン破綻しないと思うよ。それどころか、その強引な手腕が、いつでもこの世界の先端を切り拓く目新しいヒット作を生み出してきた。結局、

そういう無理難題を押し付けられることが結果的に、最初は思いもしなかった限界を超えた何かを導き出すのだ。

それに今回は……神代未玲という新人脚本家まで起用して一期とは一味も二味も違う作風に、いやルミナスそのものの本質を今一度掘り返すような一大手術までしようっていうらしいから。しかし、当然それに付いていく現場の制作スタッフは並の神経ではやっていけない。こればかりは暗黙の了解のようなものだった。

「でも少し……、」え？

ほんの少しだけど何となく変わった気がする。何が——ルミナスのキアラ表を見ながら呟く若林に大森は改めて聞き返した。

「ほんと何となくだけど、なんていうか……少しだけ優しくなったような」

狂おしいまでに美しく凶悪で冷酷なその表情は何一つ変わらないけど。それは脚本に新たに神代未玲という、まっさらな色加わったせいだろうか。それを動く絵として解釈する演出、絵コンテ（勿論、総監督や副監督のチェックが入ったものだが）も、微妙にその変化を敏感に捉えていた。

> i 2 6 1 5 — 4 4 7 <

実際、美麗で華のあるダイナミックな動きや表情を作り出す大森とはまた違って、若林の描くルミナスは、どこか繊細さの漂う絵柄が人知れず人気を集めていた。無論、静と動で異なる画風の大森・若林二人のコンビであるからこそ、それがこの実質的なルミナス人気を支えているとも言えた。ほとんど女性的な勘とも言える、そんな柔らかな眼差しで、若林聖子はルミナスという典型的なダークヒ

ーロー的美形キャラの中に潜む何かに気付いていたのかもしれない。

このキツキツの余裕のない容赦なさがいよねえ、ほとんどファン目線のようなミーハー発言をしていた四十代目のアラフォー女性。まあ……そういう露骨な心酔精神が、ほぼ執念のようなものに支えられた、あの半端ないクオリティを生み出しているのだが。

それは無論、大森も同じだ。彼は同人あがりの人気クリエイター集団、A/R/Cの紡ぎ出したキャラデザインから多くのものを学んだ。そしてそれを母体として、今回のルミナスコードのような、ほぼ女性向け作品の真髄とは何かということを自身の中に獲得した。すなわちそれは、媚とはまた違ったところで、華やかさと硬質さとの境界に見出せる、独特の人の心を惹き付ける魅力ある作風——A/R/Cの真咲奏、^{かなで}夕海みなど、榊結衣の三人が紡ぎ出すキャラ原案が伝えるもの。

その本来、乙女心が（笑）いや人の心が見たいと思う世界を作り出すところが常に、アニメ制作のみならず創作それ自体の原初的な命題であると言ってもよい。それに確かに今、ルミナスのような女性向け作品が、時代的なマーケティング的にもアニメ界において注目を浴びていた。そこに竜崎悟朗のような硬派な作風で一世を風靡してきた鬼才の監督が参入してきたのも、ある意味で頷ける話かもしれない。

「副監督の相澤氏、言ってたよ。神代さんの描く瑠美那とルミナスは一味違っって」

大森の言葉に、二人の会話に耳を傾けていた若手アニメーターの一人、磯村はづきが口を挟む。

「ああ、そう言えば同じようなこと竜崎監督も言っていましたよ」

時々思い出したように各セクションをチェックする合間に作画スタジオにも常時足を運び、それぞれのスタッフのデスクを覗き込むついでに、ふと漏らした呟き。

「やつぱり”恋する乙女”は侮れないなっ——」

あはは、それ磯村さんのことじゃない？ ええ、違いますよ。そんな和やかな笑い声がひと時、夜も更けた作画ルームの現場に灯った。

……蒼い海のしらべ

触れた未来 光の向こうへ

あたたかな歌声が 呼ぶ静寂^{しじま}……

もう一度 生まれるため 闇にまどろむ

……

「それ、何？ 新しい曲か何か——？」

「……うん。今度起用する新人の作詞家さんの詞につけてみた曲」

何気なくアコギの弾き語りで歌ってみせた、片言のフレーズ。ヴォーカルの沙原琴音は今回新しくユニットメンバーとして加わることになる帆苅洋介に告げた。今度始まるアニメの曲——そう、例のルミナスコードっていう。あたしたちが以前、OP^{オープニング}を担当してた……今度もOP主題歌かどうかは、わからないけど。

「何だか、優しいけど、ちょっと悲しい曲だね」

で、誰。その新人作詞家って。帆苅の質問に沙原は、そのアニメの監督さんから紹介されて……、ごめん、名前なんて言っただか覚えてないや。まだこの最初のフレーズしか出来てないし。それにまだ正式な決定じゃないしね。

そんなやり取りをしたのが、ちょうど一ヶ月前。それからしばらくしたGW後、晴れて曲は完成した。絡み合うようなツインヴォーカルが売りのユニットLuna-Mariaの歌うその曲が再び主題歌としてOPを飾る「ルミナスコード」第二期？くれないミラージュ緋の記憶？。どこか忘却の彼方を想うような、その穏やかな冒頭フレーズは、物語のほんの始まりに過ぎなかった。

いつだって、それははじまり。おずおずと、けれど確かな確信で伸ばしたこの手。

——たとえそれが誰かを、いや自分自身を傷つけることになっても。決して止められぬ運命という、あらかじめ決められた時のレールさえ捻じ曲げるような、そんな想いの力。最初から飛ぶことを怖れては、鳥は羽ばたけない。空から海へ飛び込んで魚になるくらいの勢いで——いや。海に飛び込んで泳いだのは鳥、そして空を羽ばたいたのは魚かもしれない。そう、あたしたちが向かうのは、そんな想像もできない遙かな未来だった。

*

「……じゃ、彼女とはあちらで会えるんですね？監督」

『ああ、草薙君。君の方が色々知っているんだろぅがね』

はは、御謙遜を——竜崎さん。いや、ヴァルゴ。携帯を手に話す一人の後姿の人影。その口元は僅かな、しかし確かな笑いを浮かべていた。

「懐かしいな、熊野……神々の隠れるその神聖なる悠久の杜で、皆さんをお待ちしていますよ」

白々しい、リベルテの狗^{いぬ}が。そう胸中で呟^{ささや}きながら、それでも竜崎は目に見えぬ距離を越えて相手の思惑を見透かそうとした。草薙^{なぐさ}那由人。我々の計画の先にある総てを知る人間。無論、伊勢崎ナミについても……。

「それにしても、どういう風の吹き回しでしょうね？　あなた自ら、こちらへ出向くなんて——」

ああ。ちよつとした息抜きみたいなもんさ。それよりLuna - Mariaの作詞家の君こそ……、いや。そのための熊野だつたな。要するにパワースポットなんですよ、熊野も、そして出雲も。極々平凡な人間が、いつしかその本当の力に目覚める——デユナミスとか超能力とか、確かに至極便利な力なんでしょうけどね。

『——いや、案外そんな都合のいいもんじゃないかもしれないがな』
竜崎の言葉に、草薙はふと眉を顰める。

「彼女がこれから紡ぎ出す物語なら、もう届いていますよ。その一部が既に一ヶ月前に、ね」
時間を歪める能力、いや？その地？では、既に過去も未来もないのかもしれない。

それでは、楽しみにしていますよ。あなたの大切な小羊さんに逢える瞬間^{とき}を。その言葉を最後に男は携帯を切った。

*

その翌日、どういいうわけか、あたしは近畿地方行きの新幹線に揺られていた。

目指すは伊勢、そして熊野。そう、熊野古道をはじめ、熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社の熊野三山を懷に抱いた霊場である紀伊山塊周辺は世界遺産に登録されている。その熊野に、である。なんで、どうして？ 正直頭がぼうつとしていて要領を得ないが、その理由を自分自身に思わず尋ねる。しかも一緒に同行しているのは、篠崎さんと、そして水澤ひとみ……そう、そうなんだ。あたしは未だ夢の中にいるように、昨夜のことを思い出していた。

『ごめん……』

突然のキス。それもファースト……、濡れた瞳のまま、あたしは何が何だか分からぬまま、その初めての感触に、ただただ心を奪われていた。何だか意識が朦朧とする。呼吸が出来ないくらい唇を吸われた気がして、その瞬間、突然気が遠くなる。まるで永遠みたいな、その一瞬の後、そっと唇を離れた篠崎さんが、そう謝った言葉も、どこか遠くに聞こえた。

うん……、あたしは声も出せずに、泣きじゃくることもできず、喉を鳴らしてただ俯いた。どうしていいかわからない。篠崎さんの顔がまともに見れない。本当はこのまま抱きしめていて欲しかった。何もかも忘れて、どこかに連れて行って欲しかった。でも――。

瞬間、直に感じていた篠崎さんの体温が急に身体から離れる。やつぱり。どこかもどかしげに、躊躇するように、その気配が戸惑っているのが分かった。二人とも言葉をなくしたまま、その場に留まり、本当に随分と長い時間が経過したような気がした。

ごめんね――、もう一度確かめるように篠崎さんが言った。その泣くような声色に、あたしは改めてぎゅうつと胸が締め付けられるのを感じた。確かにあたしは恋をしていた、篠崎さんに。あたしは、

この人が好き——そう思うと、再び涙が溢れ出してくるような気がして、思わず俯いたまま唇を引き結んだ。さっきまで篠崎さんが触れていた口付けの余韻が殺されていく。そう思うと、このまま離れがたい思いに揺さぶられてしまう。

『——やっぱり僕には、ひとみがいる。でも、君を傷つけるつもりじゃなかったんだ』

ついて出たその言葉に、そんなこと言わないで……！あたしは胸の中で、そう叫んでいた。そして、

『……さん、篠崎……さん、』あたしは小さく呟きながら、背を向けたそのシャツにしがみつくように両の手を添えた。

ナミ……——、もう一度そう呼ばれた。振り返ったその人に優しく抱きしめられる。それだけで、あたしのすべてが溶けていきそうだった。

*

とりあえず落ち着いたあたしたちは、もう一度穏やかに話をした。冷静に、とまではいかなかったかもしれないけれど。

——実は円城寺さんに、昨日こんな話をされたんだ。ひとみを連れて、熊野まで行ってくるようにって。確かに向こうは僕の生まれ故郷でもある。熊野三山にも学生時代、何度か足を運んだことがあるし……、でもそれにしあって突然、一体そのことに何の意味が。そう思ったけれど、もしかしたら、それでひとみの意識が元通りになる可能性も、あながちなくはないんじゃないかって。

要するに、単なる度重なる仕事のストレスということも考えられ

た。それならば一時でも、空気のよい場所へ行つて英気を養うという選択もありうるわけだ。

それはともかく……、篠崎さんの声が瞬間、一層低くなった。君も一緒に連れて行くように、確かに円城寺女史はそう付け加えた。確かに時前に用意され、渡された切符は三枚――。
チケット

『私……？』

思わず篠崎さんと目が合い、不意に互いに視線を逸らす。

『やっぱり今回の件については、納得がいくまで調べて見極めた方がいいと思うんだ』

というか、これ以上おかしなことに巻き込まれないように――、本来なら君は手を引いた方がいいとは思うけど、もうここまで来てしまった以上。確かに篠崎さんの言う通り、あたしはもう後戻りすることは、かなわないような気がした。それは多分、未玲も。

そういえば、間もよく定期的にGW。ゴールデンウィークあたしも明日からちょうど一週間休みだった。本当にごめんね、そう篠崎さんに言われて、思わず無言で頭を振る。まだ、さっきのキスの余韻が唇に残っている気がして、少しだけあたしの頬は紅みあかがかつていたかもしれない。

＊

ぼんやりと車窓に映る景色を見つめる。ほとんど流線型に流れていく初夏の緑は、それでも瑞々しい色彩を眸の残像に残して過ぎていく。見ると、向かい合つて席に座る水澤ひとみも同じように、いや、あたし以上にぼんやりと焦点の合わぬ眼差しを窓際に向けていた。

一応、家の親には友達と急遽旅行に行くことになったから、とだけ伝えておいた。確かに、あれから一旦家に戻ったとはいえ、その足で夜が明けきらぬ前に簡単に荷物をまとめ家を出て、そのまま篠崎さんの待つ駅前に向かったんだから、自分でもちよつと常軌を逸していると思う。

だけど、それ以上にあたしは何かにせかされるように、ほとんど何をおいても、その先に進まざるを得ないような衝動に突き動かされて。それを恋のせいだと言うのなら、そう言っつかまわないのかもしれない。

目の前の水澤さんは、昨日のアフレコ時の元気のよさが嘘のように、再び深い水の底に沈んでいるような異様な静けさを纏っていた。声をかけようにもかかれられない、そんな重たい空気が辺りを包んでいる。篠崎さんは、そんな重い空気を和ませようかとするように、何か飲み物を買ってくる、と席を立った。それが、ついさっきのこと。けれど、本当はこの三人で顔を突き合わせているのに耐え切れなくなった、そんな感じだったのかもしれない。

それは、あたしだって同じ。まるで呼吸を停めた人形のように押し黙る水澤さんは、それでも確かに息をしてここにいた。そして時折、思い出したように誰かに向かつてにつこりと微笑む。それが何だか、何とも言えず息苦しかった。

「ひとみ……ほら、」

席に戻った篠崎さんがペットボトルのお茶を差し出すと、水澤ひとみは、差し出されたそれを無言で受け取る。まるで篠崎さんのことが見えていないみたいだ。そんな彼女を、切なげな表情で見つめ

る篠崎さん。そんな二人の様子を見つめる、あたし自身も胸が痛かった。

彼女がどうしてこうなったのかは、篠崎さんにも本当のところはよく分からないとのことだった。でも、確かに彼女はルミナスコードの一期最終回を録り終わってから、こうなってしまったことは確かなのだ。しかしその後、一年前の春から、ほとんど音信不通になっってしまった。それは恋人である篠崎さんは勿論のこと、世間一般の人たちの目からも。

例えば若手声優といえど、彼女はトップアイドルに近い存在感で、その世界の通であるオタたちの人気を得ていた。その彼女が――、様々な憶測が一時飛び交った。引退、そして失踪、自殺説まで。けれど、そんなわけがないという強い思いに支えられ、皆じつと待った。ネットでは相変わらず彼女の消息を占い考察するサイトやスレツドがあふれ続けた。

そして今年の三月。ルミナスコード第二期の放送が唐突に発表され、そのスペシャルイベントまでが満を持して開かれた。そう、ほとんど用意周到なまでに。

それから、それほど多くはない公式のインタビューやゲストなど、まともに人の目に姿を現す時には、当たり前のように彼女は以前と何ら変わらぬ眩しい笑顔を振り撒き、その存在感のオーラが未だ健在であることを人々に知らしめた。でも……。

あたしと篠崎さんは、その笑顔が作られたものであることを知っている。まるで操り人形のように、彼女は何かの人為的な力によって、文字通り「生かされている」。でもそれが、まさかあたし伊勢崎ナミがいるから、キープされている偽りの輝きだなんて――そんな

なこと未だに信じられないでいる。

「……はい」

篠崎さんの差し出す飲み物を「……すみません」そう言っただけでも受け取る。

確かに何かが歪んでいる。その世界の片隅で生じた歪みの中に、時間と空間ごと放り込まれてしまったような。そんな不可思議な思いに包まれる。その歪な時空の狭間に、既にあたしたちは片足を踏み入れてしまっていた。それがきつとルミナスコードなんだ。

それでも多分、この人となら、いいえ「この人だから」あたしはそんなワケの分からない世界の歪みに踏み込む決心をしたんだと思う。そして、けれどそんなあたしをきつと未玲は……本当にごめん未玲。でも、あたしは篠崎さんを放っておけない。ほとんどそんな確信のようなものに支えられて、あたしは。

三重県は伊勢まで、あと三時間。とりあえずその玄関口のような伊勢神宮に詣でてから熊野に向かう。夜明け前に東京を経ったから、もうそろそろあちらに着く頃だろう。その日、生まれたばかりの日の光を浴びて、キラキラと輝く世界そのものが、あたしたちを歓迎しているような気がした。

*

「本日は、最新アルバム『ひとみんなレボリューション』の制作も決定した水澤ひとみさんにゲストにお越しいただきましたあ！」

「ほんとにお久しぶりですねー」

「はい、ファンの皆さんには大変ご心配おかけして、すみませんでしたー！」

「何かインドの山奥へ修行しにいったとかいう噂もあるみたいだけど？」

「あっちは、インドですかあ」

「いやマジで修行かなと……何だか前より日焼けしてるような気がするし」

「ええまあ、ちょっとね。グラビア撮影とか南の島で」

「それは楽しみですね、ひとみんオブ（ピー）ヨイトイとか見られるわけですかー」

「いい加減におし！ボヤツキー」

「ぎやはははは」

これが今日の前に写っている若手声優アイドルと同一人物なのだろうか。先週放送された某アニメ系ラジオ番組録音を聴きながら、相澤は思った。数時間前に秘密裏に某駅構内で撮影された一枚のフオート画像。できるだけ人目につかぬよう、ひっそりと行動する男女三人組のその中で、一層青白い表情で人形のように俯く美少女。ま、無理もないか。予定通り例の三人は近畿地方行きの「のぞみ11号」に乗車した。それを追って竜崎円城寺組も、ほどなくしてあちらへ向かうだろう。そして自分はいえ……、本来なら実質、単独行動で某人物の監視を行うため、同時進行でレンタカーを使い、断続的に熊野路に行く予定だった、のだが。

「おい相澤、酒が足りねーぞ、聞いてんのか、コラ」

突発事項発生。てゆうか、この酔っ払い女どうにかしてくれ。音楽プレイヤーのイヤホンを外し、相澤は目の前の席で、ふんぞり返る未玲を苦笑いしながら見やった。どうして僕が——とは思いつつ、結局未玲には頭の上がない自分自身の不甲斐なさを呪った。

「神代さん、昼間からそんなに飲んだら身体に毒だよ」

うつせーこれが飲まずにいられるかってんだ。相澤の忠告を他所に未玲は缶ビールを煽った。確かに今、未玲はどうしようもなく落ち着かなかった。このまま素面^{シラフ}でいたら、どうにかなりそうだった。

そりゃ、いくら親友だからって年がら年中、ナミのことを監視しているわけにはいかない。それじゃまるでストーカーだよ。だけど……ナミはやっぱ篠崎聡己と。それほど大々的ではなく確かに地味にだが、その手のアニメ誌や声優雑誌のグラビアで最近取り上げられるようになった篠崎は、それなりのイケメン声優だった。今のご時勢、たかが声優だろうと、声だけでなく歌やグラビアやTVなどへの顔出しなど、マルチなタレントとしての側面も必要とされてきている。

親友のナミを疑うわけじゃないが、ナミがその篠崎に絶対に心傾かないとも保証できない。ていうか、確かあいつ、水澤ひとみと付き合ってるって噂もあるんじゃないかったのか。

「だああああー……ッ」

ナミに指一本でも手を出してみろ、タダじゃおかないんだから！突然、髪を？きむしり始めた未玲に、さらに相澤は苦笑い。

「それはそうとアンタ、実際、熊野へ何しにいくつもりなのさ」

思い出したように口を開いた未玲に相澤は相変わらず、はつきりしない態度で口ごもった。だ、だから、単なる口ケで……こうしてカメラ持参で来てるし。そりゃそうだろうよ、旅行にカメラは付き物だしね。ていうか、肝心のナミたちは、いつ頃あつちに着く予定なのさ。それをまず押さえておかなければ始まらない。

「今頃もう着いてるんじゃないかな？　僕たちより一本前の新幹線
のようだったしね」

しかし、伊勢から熊野路に点在する熊野三山まで、それなりの距離がある。

「ね、熊野古道って世界遺産なんだよね」

「うん、そうだよ。熊野三山は勿論のこと、あの辺りの霊場や参詣道はすべて」

じゃあハイキングの装備は現地で調達するとして――、え？
とりあえず、その伊勢路から行けるんでしょ？

本来ならハイキング気分で行けるような所ではなかった。場所に
よっては急峻な峠を越えなければならぬ箇所もあり、実際すべての
参道を踏破することなど常人には不可能に近かった。しかし、そ
れを知らない未玲は、こともなげに言い放った。

「急ぐぞ家臣ども、ナミたちを追って伊勢路を――！」

*

「おい凜！　待てよ凜――」

そう声をかけ、唐突に録音スタジオを飛び出していこうとする、
その肩先を掴む。

「……いきなり作詞家変更かよ」

Luna - Mariaのリーダー岬リュウジに振り返ったのは、
同バンドユニットのヴォーカル担当、黒崎凜であった。凜は確かに

憤慨していた。確かにそれは今回だけかもしれない。しかし、これまで絶大な信頼を置いていた、ある専属作詞家の意思を無視してまで、レコード会社とそのタイアップ先であるアニメスタッフの意向に従わねばならないなど、どうしても納得いかなかった。

「お前の言いたいことは解る……だが俺たちは遊びでバンドやってるんじゃないだぞ」

確かにそれはそうだ。レコード会社と契約し、プロデビューを果たした時点で、そんなことは既に解りきっていたことだった。凜も子供ではない。そのくらいのビジネス的理性は一応持ち合わせているつもりだった。だが……。

「俺是那由人さん以外の歌は歌わない」

おい、凜！　しかし、その声は、とうとう踵を返し乱暴に扉を閉じて出て行く後姿には届かなかった。

「岬さん……」

心配すんな、琴音。不安げな眼差しを向ける同ヴォーカル担当の沙原琴音に、優しく声をかける岬。

「凜も解っているはずだ、那由人がどうしても今回、敢えてこういう選択をしたか」

それは信頼以上の信頼だった。確かに今の彼らがあるのは、彼、草薙那由人の存在があればこそだった。それは女性ヴォーカルとして沙原琴音が参入することに決まり、バンド自体の方向性が大きく変わろうとした時もあった。確かにそれによって、とある大手レコード会社の目に留まり、晴れてLuna-Mariaはプロデビュー

ーへの階段を登ることが出来たのだが。

「あのお……お取り込み中のところ、すみません」

岬と琴音は、そうおずおずと声を掛けられ初めて、その存在を思い出した。

ごめんね、帆苅君——琴音は今回新たにバンドメンバーとして加わったドラム担当の帆苅洋介に、ばつが悪そうに振り返った。ちょうど彼を紹介しようとした矢先、作詞家変更の事実を知った凜との言い合いになり……。

「ドラム担当変更に、今度は作詞家が……」

確かに帆苅は何も悪くない。単に一人抜けてしまったドラムの補完要員として、彼が抜擢されただけなのだ。しかし、先程の黒崎凜のあまりに陰悪な態度とその剣幕に、帆苅は面食らった。あれほど情熱的に歌うLuna-Mariaの男性ヴォーカルが、これほどまでに頑なな頑固者だったとは。

「あたし、もう一度だけ黒崎君に掛け合ってみる——」

そう言ってスタジオを出て行く琴音。岬も帆苅も、ただ無言でその背中を見送るだけだった。

*

とってもいい曲に仕上がったのに……出来上がったばかりのデモテープを手に琴音は途方に暮れた。

「黒崎君……」

考えてみれば、凜と最初に出会った時も、こんな風に手酷く否定

され、容易には受け入れて貰えなかった。それでも、これまで何度かぶつかりながらも、こうやってプロのアーティストとして一曲一曲をリリースし成功するその度に、お互いを認め合えたと思っていた。しかしそれも、あたしたちの間に必ず那由人さんがいたから――

五人目のLuna-Maria。メディアは彼のことを必ずそう謳った。それは作詞ばかりでなく、ユニット全体のサウンドアレンジャーまでも、一部彼が担当していたからだ。ほとんどはベース担当である岬リュウジの手によるものだったが、彼草薙那由人が加わることで、独特の深遠な世界が楽曲全体に広がった。

勿論、今回作詞からは手を引くが、それでもサウンドプロデューサーは今まで通り、彼と岬リュウジとの手になるものだった。それでも彼の紡ぐ詞の世界は、それだけで楽曲全体を左右するほどの独特の存在感を持っており、それが違ってしまっただけで、どれほどの違和感を生んでしまうのか。……それも、どこの馬の骨とも判らぬ、新人作詞家。

でも琴音は確信していた。きっと那由人さんは、この曲がどんなに人の心を動かすよい作品になれるか、解ってくれている。だから、黒崎君も。

『琴音……凜を信頼してやってくれ。必ず君たちは上手くやっていく――』

そう囁いた那由人の声が、彼女の脳裏で人知れず木霊した。

*

琴音から、ほぼ頼み込むように強引にデモテープの入ったMDを

渡されるも、しばらく放置していた凜だったが、妙な胸騒ぎに誘われるように、渋々それを音楽プレイヤーにかける。那由人さんは俺にとって特別だ。彼女の存在を認めたのも、最終的に彼がいたからだ。その特別な存在である彼が――誰が許しても俺自身が許さない。

凜がそこまで那由人の紡ぎ出す詞にこだわるのは、やはりそれなりの理由があつた。その？言葉？は誤解を怖れずに言うと、彼にとって神のような存在だったのかもしれない。彼は自分たちが歌いたい、伝えたい言葉を知っていた。その重なり合う奇跡に導かれて……言葉といえる言葉を持たなかった俺たちの想いに形をくれたその人は。

凜が心酔する以上に、きっと彼は凜の心深くにまで入り込んでいたのかもしれない。

「I z a - n a m i……作詞家の名前か」
ベッドに寝転がったまま、MDケースを見やりながら一人呟く。

しかし凜は、次の瞬間プレイヤーから流れてきた弾き語りの琴音の歌声を聴いた瞬間、心ならずもハツとした。

古来人々は神を崇めた。それは古今東西、何ら変わらない連綿と続く縁。^{えにし} 例え人の心が様々に変化し、時代が移り変わったとて。昔々に人々の心を一つにした神々の存在。目に見えぬそれは、目に見えぬものであるからこそ、尊い威光を人々の心に投げかけた。川のせせらぎ、森の緑、そよ吹く風にまで――、神々はそここにあふれ、時代と人の心をそつと見守ってきた。

ここ伊勢神宮も、既に人の手で整備され作られた聖域であれ、そこに神が宿っていることは間違いなかった。人々の衣食住を司る豊受大御神を祀った外宮、そして天照大神を祭神とする内宮。特に天照大神は皇室の始祖神で、日本人の総氏神でもある。内宮である皇大神宮と、外宮豊受大神宮は伊勢自動車道を隔て直線距離で約六キロ離れている。本来は陰の気質を持つ外宮から詣で、次に陽の気質の内宮へと参るのが古くからの習わしであった。

伊勢市駅から徒歩十分。連休中とはいえ、早朝の神宮は、さすがに人気もまばらだった。あたしたち三人は、清々しい初夏の空気に包まれながら、まずは外宮へ向かう。

「やつぱり一味違うな――、伊勢崎さんは神宮は初めて？」
「ええ、」

あたしの苗字とも似通っているのに、勿論あたし自身は一度も伊勢神宮にお参りしたことはない。それでも、何となく不思議な親和感に包まれて、あたしは思わず深呼吸する。とっても空気がいいんですね。そんなことを呟きながら、一時ルミナスコードのことを忘れる。

まず駐車場から第一鳥居参道に向かう。そこには神域を守るようにぐるっと堀川が巡らされ、そこに渡された火除橋ひよけはしを渡る。渡りきったすぐ左側には手水舎があり、ここで手を洗い口を漱ぎ心身を清め、正宮へと向う。その北側にも、勾玉池から流れ出る堀川に守られた北御門口参道がある。静々と敷き詰められた玉砂利を踏みながら進むと見えてくる第二鳥居の右前方に、外宮神楽殿が臨め、さらに小さな社殿の風宮、土宮、多賀宮たかのみやなどが鎮座する左手を臨みながら進むと、右側に正宮が見えてくる。

豊受大御神とようけのおおみかみは御饌都神みけつかみとも呼ばれ、御饌、つまり神々に奉る食物を司る。衣食住ひろくは産業の守護神とも言われているが、それでも神宮の本殿は、あくまで天照大神を祀る内宮なのである。要するに、こう言っては罰が当たりそうだが、本編を拝む前の前戯とでも言えばよいのか。一通り外宮の正宮へ参拝した後、今度はお待ちかねの内宮へ向かう。内宮行きのバスが数分置きに出ているので便利なのだが、早朝とはいえGW中とあって早くからバスが出ていたの助かった。

「神宮の神様はね、やきもち焼きでカップルでの参拝を嫌うんだ――だからというわけじゃないけど、君がいてくれてよかった」

バスに揺られながら、ふとそんなことを呟く篠崎さん。それは半分冗談めかして言った言葉のような。軽く驚く。でも、それは本当は水澤さんのことなのかもしれない。それでもあたしは、今回の旅の始まりにまず、お伊勢さんへ参ることが出来てよかったと思った。

.....

全能なる母なる海、イザナミよ。

イザナギが生み出した天照^{アマテル}の巫女が再びこの世に顕現しようとしている。

巫女は闇から出し^{いで}原初の光の皇子と一体となり、世界を蘇らせる。

イザナミよ。今一度生まれ出、この海の闇を生命の輝きで満たすのだ。

それこそが、那由多の宝となる……

……… 那由多の宝と

え？

一瞬、ルミナスの気が揺れたような気がした。いいえ、それは確かな鼓動。

大切なものを奪われるこの感じ——そう、確かに今、目の前で彼女が消えた。リリアン、リリアン・パスティム。彼が絶対に認めることのなかった、その存在。しかし、すべてはその手にする瞬間に一抹の泡と消えた。ううん、消えたわけじゃない。ただ彼の手の届かぬ場所へと失われてしまっただけ。

『瑠美那——！』

瑠美那、はやく！……私と共に結界を張るんだ！

しかし一瞬遅く、彼の言葉はその願いに届かなかった。次の瞬間、空耳のように響いた鳥の羽ばたき。その残響だけを残し……気付いた時には、光の奔流はやみ、あとには深淵とも思える黒々とした闇が残されただけだった。

あたしたちは、その後島嶺叔父と別れ、研究所を後にする。そう、夏休みはまだ始まったばかりだというのに、その学園の真珠は失われた。共に奪われた宝の方が重要なはずなのに、何だかルミナスは、そのことには一切感知していないようだった。あたし自身と一緒になったデュナンの——ルミナスとしてではなく——その魂だけが慟哭にも似た怒りを全身に震わせ、今にも常日頃の冷静さを失い暴発してしまいそうだった。

……きっと彼は認めないだろう。あたしと一体となった身体で別の誰かを想っている、そんなことがあるはずがない、あつてたまるものかと、そう呟き続ける声が延々と脳裏に響き続けている。けれども同時に、絶対に許すものかと闇に向かって咆哮しているのだ。

——彼女に手を出してみろ、俺が絶対に許さない！と。

ここで一期前半終了つと。この後の次回予告がまた憎らしいんだよな。次の展開の期待を煽りつつ、実際来週は総集編だもの。しかし、ここからがルミナスの正念場なんだよね……主人公とヒロイン的にも、それに作品的にも。実際、このラストへ向けての一期後半の怒涛の展開が、ルミナスコードをルミナスコードたらしめたんだけど。

桐子は未玲に送った近況報告メールの返信画面を、ちらと見やりながらルミナス一期のDVD第五巻を手に、溜息をついた。あんた

仕事ほっぽって何やってんのさ。確かに桐子は知らなかった。未玲だけでなく主要スタッフが揃いも揃って熊野入りしようとしてるなんてこと。

……冗談は、ほどほどに。そう思って立ち上がろうとして、ふと不吉な予感がよぎり、メール本文の最後をもう一度読み返す。

『——あたし、どうしたらいいんだろう。友達が危ない橋渡ろうとしてるのに、それを止められない』

友達って、確か以前言ってたナミって子？

未玲には、それほど友人は多くない。専門学校時代のみ一緒だった桐子でさえ、そのことをよく知っている。けれど？彼女？だけは特別だった。あたしに対するようなラフな感じとはまた別な、もっところ、壊れ物を大事に扱うような。でも、桐子には解っていた。未玲なら絶対大丈夫だって……絶対。それはあたしが保証する。

「ドンマイ、ドンマイ」

桐子は携帯にただその一言だけを書き込んで送信し、一人ぼつんと苦笑いした。

*

「どうするんですか、竜崎さん」
だが、そう尋ねた声は確かにこの状況を楽しんでいるのだと分かった。

——どうするって、彼女のしたいようにさせておくしか、ね。

「未玲ちゃんは伊弉冉いざなみの君に御執心、と」

やれやれ、といった口調で低く呟く。まあこういう状況は、ほぼ想定内の範囲だった。というより定められた必然というべきか。相澤たちとほぼ同時に、こちらは空路で出発した。羽田から伊勢を素通りしてJAS南紀白浜便で南紀白浜空港へ——約一時間のフライトだ。

どっちにしたって彼女がいようがいまいが。とうに気付いているかもしれないが、時間の流れが微妙に緩やかになっっているそのことを思えば。世間の誰もが気づいてはいまいがね。それも？彼？の仕業だというんですか。円城寺は竜崎に尋ねた。

「そうだな、やつに会って実際に確かめてみる、か……」

伊勢路は魂の浄化の途だ。みち二つの聖地を結ぶ参詣道。かつてそこを往時の多くの巡礼者が往き、あるいは命を落とした。熊野を黄泉の国だとする説もある。そこは極楽浄土か、あるいは地獄か。どちらにしても神と仏とが同化し人々に広く受け入れられてきた日本人の信仰の原郷ルーツそのものとも言える。その奥深い山懷に抱かれた神々の隠れる辺境の地。

「いずれ？彼女たち？とも合流できるでしょう、その忌まわしい邪念を辿っていけば」

円城寺の涼やかな声が、背中越しに竜崎の见ている機内窓外に続く紺青の空の遙か彼方へ吸い込まれていった。

*

「瑠美那、行くぞ……！」

唐突に意を決し、怒りに我を忘れた少年に、しかし問いかける。

『行くつて……どこへ？』——決まっている。

ただその一言だけ答えると？彼？は黙ったまま歩き出す。無論、宿舎に戻るでもなく、そしてアマテラスドームに向かうでもなく。何かを約束したわけじゃない。でも、その存在自体がなかったものであるなどと肯定することはできない、今さら——何も、何もなかったなどと。ルミナス……。

くっ……ふふ、ふ……突然眸を伏せて笑い出す。額を覆ったその黒髪が、ふわりと揺れる。

「これほど滑稽な茶番は見当たらないな、そうだろう瑠美那」

ルミナス、か。太陽神、日の神……光の守護神。そう謳われた、この私が。それもお前以外の、つまらぬ人間の女などに現を抜かすなどと。そう、所詮私は隠されし光。あのツクヨミの如し穢れた存在と、どこが違うというのだ。わかっていて——この身が往くその後ろには、常に無数の屍が横たわるのだと。お前も感じているのだろ、我が望みの向こうに拡がる、黒々とした深い闇を。……当たり前前、か。

「所詮、我が身には何人たりとも救うことなど——！」

そんな、こと……苦渋に満ちたその魂に、あたしがその声をかけようとした、その次の瞬間。

「——そんなことはない、太陽の皇子^{みこ}よ」

そう呼びかけたその声に、デュナン・リトラスは顔を上げた。

『えっ……リリアンが行方不明？』

その突然の報告に諒牙は言葉を失った。

「ああ、そうだ——俺が付いていながら面目ないが、いきなり目の前から忽然と……」

まずイオリゲル候補生である諒牙に連絡したのは。そうだ、こんなこと誰も信じちゃあくれまいからな——、島嶺は念を押すように言った。

「いいか、このことはしばらく誰の耳にも入れるなよ……幸い、今は夏休みだ。少なくとも、あと一ヶ月は」

あと一ヶ月。その間にどうにかできるって言うんだろつか。そんなこと。彼女が突然消えた理由の、そのまだ何一つ判ってないっていうのに。

「確かにお前さんの考えてることは分かってる。別にイオリゲルじゃない俺でなくたってな、」

そう笑いながら告げながらも、島嶺の表情は引きつっていた。あれは……龍神の仕業とも違う。確かあの眩しい光の奔流の中でデユナンは誰かと話していた。それだけは、おぼろげに覚えている。しかし同時にあるうことが、あのオーバーッツも一緒に。

一体どういうことだ？ 龍神の化身であるアイツは俺の傍にいた。ってことは……。

『いいか、彼女は俺の用事で、しばらく沖縄に行くことになった、

「とでも皆に言つといてくれ——後のことは全部俺が責任持つ」

「あつ……島嶺先生！」

島嶺からのTELは、それだけ告げてガチャンと切れた。

＊

「ふたさん さんまる二三、三〇、メンテナンス先のツクヨミドームより先ほど移送されたサーペントの被験体が到着する——」

その報告に、睦月真吾はゴクリと生唾を飲み込んだ。

「いいか、我々に今回与えられた任務は、そのサーペントの被験体の保持及び生体観測、並びに共に？龍神？の捕獲を行うことにある——そして、睦月曹長」

ハッ。名を呼ばれて背筋を伸ばし敬礼する。

「曹長には、その被験体と？彼？の乗る機体の直接管理の命が下っている」

並び居る隊員たちの間で、そのひよる長い背格好の青年が緊張しているのは誰の目にも明らかだった。貧乏クジ。誰彼と言わず無造作に放たれた、その思念が雑多に睦月の脳裏に流れ込む。だが、

「……大丈夫だ、そんなに心配すんな」

睦月だけと言わず不安に支配された隊全体に、キリアンは突然表情と口調を崩して呼びかけた。お前たちなら、どんな任務でもこなしていける、そうだろう？睦月曹長。

いきなり、こちらに振られ「はっ」思わずそのままの体勢で答える。腰が引けてんぞ、曹長。ポンと尻を叩かれ、さっきからの緊張が途端に緩む。

「やつこさんは、ちょっと手のかかる野生児だそうだが、それなら俺たちも負けてないからな！」

隊長、それ言いすぎ——口々に放たれるそんな声なき声に、キリアンはお茶目にウィンクしてみせた。

*

ま、ちょうどよい頃合だったってわけね。先ほどスサノオドーム港に停泊しているアステリウスに移送させた被験体。あいつが覚醒するのをこのまま気長に待ってたら、首を長くして待機してる彼らに申し訳ないもの。ベアトリーチェは思った。

ツクヨミドームで何があったかは分からない。でも、確かにサーペントの被験体は、その本来の姿に目覚めた。そう、あれはもう人間じゃないわ。本能で動く獣……確かに半分化け物の彼らにはお似合い、かしらね。

「陸月真吾……」

しかし、唐突にアイツのことが脳裏に浮かんで頭を振る。

「ああ、もう！」

どうせ彼は彼自身の想い人である龍蛇の巫女を——そう、もう逃れることなどできないのよ。アイツも、アイツが想ってる金城瑠美那っていう小憎らしい小娘も。全ては逃れることのできぬ、運命。

『どうしました、ベアトリーチェ……』
「うるさいっ！」

思わずそう声を荒げるも、テレパスの相手がワイズ博士と知り我に返る。

……っ、なんでもないです。

『——そうですか、何か物思いに耽ってらっしゃるようでしたので、てっきり被験者に情が移ったものと……いや、そうではないようですね』「当たり前です」

ブイツと目に見えぬ相手の声に顔を横に振る。それはよかった、一級の研究者とはいえ、まだ一四歳の少女相手にワイズは柔らかく答えた。それはそうと――、

『例の小ネズミの正体が判明したようです』

その言葉と共に目の前に転送され展開される光化学スクリーン。何こいつ、まだ小娘じゃない。素早く森林の蔭を走り抜ける、その姿をカメラはそれでも克明に捉えていた。

『惜しくも取り逃したようですし、それにまだ、どこの手のかも判ってはおりませんがね』

しかし、どう見てもその少女は龍神と同じアストラル体とは思えなかった。しっかりと地に足をつけ大地を駆け抜ける逞しさが、そこにはあった。

「……お前は、誰だ？」

人目を忍ぶように月明かりに照らされ、立ち尽くしているその人影に目を凝らす。見覚えのない赤毛の少女——いや、あの眼光。一分の隙のないその気配や、半ば煤けたマントを羽織ったその姿からは、相手がそこらのハイキングで迷った青少年でないことは明らかだった。

それより、俺のことを知っているのか？ 俄かに警戒心が強まる。

「そつだ、お前のことはよく知っている——」

一瞬、ただの学生の振りをして、この場をしのごうかとも思ったが、どうやらそうもいかないらしい。どういうことだ？ デュナンは目の前の相手に鸚鵡返しに尋ねた。

「お前に……お前に救って欲しい人がいるのだ」

突然現れた、俺のことを知っていると言う見も知らぬ女に誰かを救ってくれと頼まれる。これほど奇妙なことはない。だが——。

「私の名はクロエ……お前は、」

デュナン・リトラス。そう、俺は太陽の皇子^{おうじ}さ。

いきなり相手からそうあからさまに名乗られ、瞬間クロエは面食らう。しかし、本当の意味でデュナンは自身を曝け出してはいなかった。そう……こいつはクスヒ様ではないのだ、そう己自身を納得させる。確かにニヤリと笑う目の前の黒髪の少年は、別の思惑を持つて今、クロエと対峙していた。

『——もしかしたら、こいつは使えるかもしれない』

どうやら神話時代の俺のことを知っているようでもある。だとしたら好都合だ。相手には相手の頼み事もあるようだし、そうであるなら、こいつは気兼ねなく俺が動くための助けとなりそうだ。

「そうか、なら……交換条件と行くか」

お前のその救って欲しいというやつを助ける代わりに、俺にも俺の——それも今すぐに動かねばならない目的があるのだが——お前には、その手助けをして貰う。わかった、いいだろう。女はすぐに承諾した。

その二人のやり取りを息を殺しながら、一人あたしはデュナンの意識の裡で見守っていた。

『あ、あなたは……っ！』

思わずそう声に出し叫びそうになるのを必死で抑えた。っていうか、なんでだよ。なんで、あたしは彼女と少し前から知り合ってたことをルミナスに隠そうとしてるんだか。ていうか、アイツ自身がかれまで、そのことに関して何も知らなかったことが、今でもまだ尾を引いている。あたしとアイツは今や一心同体。であるならアイツがそのことを知らないわけがないんだ。じゃあ、なんで……。

だからあたしは、思わず声を嚟んだ。何かワケがありそうな気がして、そのことをこちらから尋ねることさえ、何だか憚られるような。けど、どちらにしてもルミナスはルミナスとしてではなく、あたし自身でもあるデュナンとして、クロエと出会った。

でも、ルミナスはまだ彼女のことを思い出していないみたい。てつきり彼女とルミナスは昔からの知り合いだと思ってたのに。思わず、今は眠っているあたし自身の本体が持っている、例の翡翠の勾玉のペンダントを心に思う。

そうだ、龍蛇の巫女よ。お前の御神は、どうやら私が誰かも、まだ気付いていないらしい……。

目の前の少年の中に潜む少女の思いを知ってか知らずか、クロエは瑠美那に人知れず呼びかける。だが、その方がこちらとしてもやりやすい。例えこのまま互いの正体を知らずとも、そう、私自身の本当の名を思い出して貰えなくとも。

ただクロエの心は、龍神と化した哀れなある皇子を救^{たす}けるためだけに、今は動くのだった。

*

「龍神？」

「ああそうだ。理^{わけ}由あつて龍神の血潮を体内に注がれ、今ガイア軍に捕らわれているある人を私は助けねばならない」

——彼は私の命の恩人でもある。そう言つて押し黙るクロエ。その表情には深い悔恨の念が沈んでいた。悔やんでも悔やみきれぬ、深い海のような。……お前は俺のことを知っていると云っていたな。重い空気を他所にデュナンは矛先を変え、話の核心に触れた。

「まだ思い出していないというのなら、無理に全てを思い出す必要はない……どちらにせよ、」

……どちらにせよ、血塗られた道。そう低く呟くデュナンの表情

を見やるクロエ。

「お前の言う、そのテロリストの親玉でさえ同じ道を歩んできたのだろう、ならば、そいつを救^{たす}けようとしている俺自身とて、同じだ」

デユナンが何を思っ^てその言葉を紡いでいるのか、クロエには判らない。もし嘘をついているのだとしても、その真意を測^あることはできないのだ。クロエにとって彼は仕えるべき主^{あるじ}。それも高位の神威を宿した龍王の中の王であれば、なおのこと。

「どちらにしろ、俺はガイアの連中を倒さねばならない。奪われた宝も取り返さなければならぬしな」

…… 那由多の宝。記憶を辿^{たど}るように、そうそつと呟^{ささや}くクロエの言葉^{ことば}を反芻^{はんじゅう}する。

「那由多、か。森羅万象、万物の中でも、その遙^{おほ}かな巨^{おお}きさ、甚大さに誰^{おの}もが慄^{おそ}く」

俺には「力」が必要だ。そうだろう、クロエ。お前が知っているという俺自身の真実が俺にあるならば、必ずそれは大いなる力を欲する。やつらに捕らわれているのは、何もそのアグニとやらだけではないのだから……、そこまで続け、不意に途切れる言葉。その眸^{まなこ}の奥に沸々と煮え滾る怒りの焰。それを確かにクロエは今、自身の眸^{まなこ}に映^{うつ}していた。

こいつの言っている龍神とは、おそらくカグツチのことだろう。アグニ、焰の神か。何という奇しき巡り合わせ、俺はそうとでも喜べばよいのか。例え死しても、あやつなら必ず蘇^さる。それが炎^{サラマシ}の龍の宿命なら。奇しくもその海賊テロリストの身体に宿ったカグツチ。それが例えガイアの仕業^{しぎょう}なのとしても、双方に融和するもの^{もの}がな

ければ、やつの血潮が再生することは決してかなわなかっただろう。インディアナのヴァシユラート——ナーガラージャの伝説か。そのまま龍神を意味する龍王は、確かにその皇子の中にもいたのかもしれない。

「クロエ、明朝にもこのドームを出発する——やつらに気取られぬうちに、ガイアの狗いぬどもの居場所を突き止める……！」

デユナンは、まるで自身の中のもう一人の半身のことなど思い出しもしないように、毅然とした声で告げた。

*

目の前から忽然と消えたのは、リリアンだけではなかった。デユナン・リトラス。念のためと思い、学校の学籍名簿を確認してみたが、案の定やつが存在それ自体が、跡形もなく抹消されていた。それに驚くことに彼の存在について覚えている者は誰一人として学内にいなかった。教師や教授、そして同じクラスだった彼と関わりがあった学生全て。

やはり、動いたか。あの後突然、研究所からいなくなったデユナンの痕跡を辿ろうとしたが無駄だった。おいおい、悔しいが仕事が速すぎるぜ。島嶺は舌打ちした。結局やつのことを覚えているのは、俺と睦月諒牙だけってわけか。それと多分……リリアン、リリアン・パスティム。イオリゲルである諒牙はともかく、あいつが俺の記憶を消さずに置いたのは。つまり追って来いつてことかよ。笑いながら、どこまでも面白いやつだと思った。

「ま、やつこさんを追っていけば、自然と消えた宝のありかにも辿り着けるって寸法ですかね」

——それと、やはりガイアの連中の動きも気になる。お久しぶり、瑞穂ちゃん……、島嶺は手元の携帯を手にし、久方ぶりにその番号をプッシュした。

どうしても諒牙には納得がいかかった。それもそのはず、ツクヨミドームは島嶺助教授の研究所に向かったまま行方不明となったリリアンについても、腑に落ちない点が勿論あったのだが、一緒にツクヨミドームに来た学生たちの誰もがデュナンのことを覚えていなかった。彼らが誰一人として嘘をついていないのは、デュナミスの力を持つ諒牙ならば容易に見透かせた。例えばリリアンと一緒に彼も行方不明になったのだとしても、彼のことを皆が皆、突然忘れてしまうというのは、どう考えてもおかしい。

そうだ、ヴェルなら！　そう思って彼女の姿を探す。

「ヴェル、ヴェル！」

しかし、真っ先にリリアンのことを伝えなければと考えていたヴェルトーチェカの姿が、ここ数日見えないのを思い出した。無論、学園の寄宿舎同様、こちらの合宿寮も男女別々だったが、そういえば、ここのところ、勉強会にも顔を出してなかったしな。

リリアンにデュナン、そして今度はヴェルまで……。

まさかとは思うが、あまりに不自然すぎる。本当に気味が悪いほど。やっぱり、もう一度島嶺先生に。そう思って携帯を取り出すが、ツーツー……結局、相手は話中で繋がらなかった。兄さん。何だかおかしいよね、イオリゲル候補生の僕にも見通せないことがあるだなんて。でも内心、そのことがほんの少しだけ嬉しくもあった。

＊

「ええ、そうよ。金城瑠美那を来期から、そちらへ移籍させることが決まったわ……そう、普通科から」

ちょうど間もよく久しぶりに連絡してきた島嶺に、草薙瑞穂は告げた。そう、そもそも、これは金城瑠美那を監視するように命じているガイア本国からの指示。それを聞き、なんで今さら……、何かを思案するように、そう耳元に響く低い声。

「ま、確かに同時に唐突に二人も学生がいなくなっただから無理もな——、いや、それとこれとは関係ない、か」
「……正確には三人、かもしれないわ」

三人……？ さすがに驚きを隠しきれない島嶺。

「ヴェルトーチェカ・アルマ。彼女は親御さんの都合でガイア本国に帰国、本当に突然の話だけれど」

あの嬢ちゃんもか……。偶然の一致にしては……一体どういうことなんだか。

どちらにしろ、彼女の身柄をイオリゲル候補生の睦月諒牙に任せるとは、以前からの決定でしたしね。確かに竜堂教授とも、そういう話はしていたが——、確かに想定された事態ではあったが、教授がああいうことになるとは思わなかったからな。島嶺は、龍神との接触により一時記憶が混濁している状態が続いている竜堂教授を思い出した。そう、ただ先送りされていた事項が予定通り決定されただけなのだ。瑠美那自身も普通科で学校生活にも慣れたことでもあるし……って、おい。

「確かに彼女の学力レベルが普通科以上かどうかは分からないけど、」

それともう少し——彼女自身を泳がせてみる、という目的もありそうね……。龍蛇の巫女としての。確かに龍神と瑠美那自身が融合合体したデュナンの方が重要ではあるとはいえ、その肝心の融合体が行方不明、とあつては。

『……本体である瑠美那自身がいなければ、融合も何もあつたもんじゃない、というわけか』

極論すれば、彼女本体自身の存在が龍神にとって最も重要、ということになる。だが、その本体からやつは、離れた。

「本末転倒……。」

実際、泳がせるように見せかけて、彼女自身をがんじがらめにしようという作戦なのかもしれない。そのための睦月諒牙……。

『まさか……』

……諒牙……諒牙……

……彼女を……瑠美那さんを……、

……守って……、……くれ……

その言葉が僕の心に響く。

でも、兄さん。僕が彼女を守るのは、兄さんのためじゃない。僕は僕自身の意思で、彼女のことを……。

結局、島嶺先生の携帯へは繋がらなかった。それよりも、唐突に脳裏にフラッシュする、あるイメージ。これは……？

諒牙は突然、頭を抱えた。わからない、わからないよ。兄さん、なぜ、僕は――。

瑠美那さんが、もうすぐ僕の元へやってくる。そして僕は、彼女を。

しかし次の瞬間、諒牙は何事もなかったように、ゆっくりと顔を上げるのだった。

それは、文字通り眠れる獣だった。いや、正確には龍蛇か。

麻酔銃で一時的に眠らされ、沈黙を守っている水中カプセルの中の、その赤黒い体躯を睦月真吾は見つめた。同時にスサノオドームの研究所から移送されてきていた、彼のスーリヤ「アスラ」。その真紅の機体は、以前ベアトリーチェの研究室で見た通り、彼らイオリゲルの保有するD-2そのものだった。

「睦月、これは……」

さすがにそれを見て、キリアンも息を飲んだ。

「以前、お話しておいた通りです。隊長、やはり僕たちと龍神の間には……」

「確かに、これまでの龍神確保の作戦でも、それを見越して我々に任務が下ったと考えることもできる。だがな、睦月」

決して結論を急ぐなよ。キリアンのその声が直接睦月の心に響く。我々がどこから来たのか、あるいは龍神が何なのか、確かに一つの疑問としては、それはあまりに大きすぎる命題であり、それを突き詰めることは皆の混乱を招くことに他ならない。

それに、何よりそれは、このD-2という機体を造り出したガイアの科学力そのものの起源を辿ることでもある。ガイアの起源……それは確かにガイアのエリート部隊であるイオリゲルといえど、容易に触れてはならぬ機密事項だった。

かつて起こった一七年前の大災厄。それによって唐突にこの大地

は引き裂かれ、同時に新たなる巨大大陸を生み出した。無論それによって大多数の人類は失われたが、その破壊の余波がこうして新たな世界を創出するに至った。それが大国ガイアの見えざる支配によって成り立つこの世界だ。かつての米合衆国は解体し国家を束ねていた首脳らも大混乱のうちに闇に没した。その混沌の中から、いつしか現れた？白のメシア？――。

『……そのすべてを見透かすことは、おそらく我々イオリゲルである』

睦月もキリアンも、その瞬間押し黙った。

どちらにしても、今は平穩を保っている、この？野獣？の世話を任されたのだ。決して油断するな、上からのその指示は確かに理解しているつもりだった。でもベアトの言ったように、決して真吾は「彼」を調教するなどという気にはなれなかった。ましてや……。

『もっと冷酷におなりなさい……！』

いつかのベアトの冷たい声突き刺さるように脳裏に響き渡る。真吾は無言で頭を振った。

彼は元々は人間だ。それを――その人間としての彼を、こんな風に扱ってよいわけがない。どこか哀れみに満ちた眸を向けると、何となく？彼？は、拘束された強化ガラスの内側で、むず痒そうに身体を震わせるのだった。

*

ただそこは、沈黙の支配する世界だった。時折ゴボゴボと、いくつかの気泡が生まれ、彼方上方の水面に吸い込まれるように消えていった。いや、その気泡を吐いていたのは自分自身だった。アグニ

は既にアグニではなくなっていた。ただ、無数の無意識が集まる、生ける屍のような野生の塊そのものになって、ただ虚しくその両腕で中空を掻いていた。

——クロエ……。

その野生の内に眠る魂は、確かにその名前を呼んでいたのに、今となってはもう、以前のように、思うことも声に出すことも、一切がかなわなかった。

「——ギャウアン！」

鋭い牙、赫く光るその眼。そして全身を覆う鎧のような固い鱗。時々思い出したように、そう咆哮する。まるで何かに抗うかのよう。それはそうだ。こんな風に水の中に閉じ込められ拘束されて——、きつと誰だって抵抗したくなる。

真吾は？彼？に対して、いつでもそんな風に考えた。それが、実際に下っている指示から逸脱するものであることは、彼自身よく分かっていた。それでも……。

『睦月、お前のその優しさが、いつかお前自身を危険に晒すことになる——』

そう、いつか脳裏に響いたクリアン隊長の言葉が蘇る。そういえば、ベ아트にも同じようなことを言われたっけ。真吾はベアートのツンとすました表情を思い出した。彼女は今頃どうしてるかな、ふと、そう思いをめぐらせる。

思い出したい、逢いたい人たちは皆、こんなにたくさんいるのに

……ベアト、諒牙、そして——、瑠美那さん。確かにその意味では、僕は君と同じかもしれない。その目の前で、相変わらず凶暴な音量で啼き喚いている、その声を切なげな表情で彼は聴いているのだった。

*

目を覚ますと、そこはいつも通りの自分の部屋だった。

……やっと帰ってこれた。でも、そう思っのも、つかのま。いつでもあたしは、ルミナスの腕に抱かれて、気がつくと男の子の姿になってる。それに心なしか、その間隔がとても短くなっているような気がする。何だか次第に自分が自分でなくなっていくような。それでもあたしは瑠美那という、この自分自身より、ルミナスと一緒にいることを選んだ。

誓約——龍神との融合。それが何を意味するのか、最初は何もかも、その真実について何一つ解ってなかった。けど、こうしてデユナンとしてルミナスに身体と精神を預けているうちに、その期間が長くなればなるほど、その？確信？が強くなる。多分あたしは……もしかしたら「ルミナスそのもの」になっってしまうんじゃないかって。

一瞬、ぶるつと身体を震わせる。そろそろ夜明けが近い窓の外の薄闇が、カーテン越しに蒼い光を鈍く放っていた。

「……そんなことより、」

以前、諒牙君から伝わってきた会話が脳裏に蘇る。真吾のいるイオリゲル隊に移送される龍神……それは、クロエの搜索している海賊の首領であるアグニ・ヴァシユラートだった。デユナンとして彼

と思考を共有している以上、あたしにはルミナスの考えていることが手に取るようによく解った。カグツチ、なんだ……。

クロエは以前あたしに「救^{たす}けなければならぬ人がいる」と、直接言った。それがもし、そのアグニなら。あたしは勿論、その人のことはよく知らない。ましてや海賊、テロリスト。パルジャミヤという海賊の名は、時々TVのニュース番組などでも耳にしていた。まさに世界を震撼させる危険人物。本来ならば、そんな海賊の人となりについて考え及ぼすという気にもならなかったはずである。しかし。

あの時のクロエの真剣な眼差しを、あたしはすっかり覚えていた。目に焼きついた、その眸の奥の鉱石のような貴い光。あれは……。

「きつと大切な人なんだ——」

あたしのこの呟きは、今眠っているルミナスに届くのだろうか。

正直、あたし自身には、クロエとルミナスが昔、どんな関係だったのか知る由もない。でも、そんなクロエをルミナスは半ば利用しようとしている。ね、そうなんでしょ？ あんなに、もう誰も傷つけないでと叫んだのに——けれど反面ルミナスは、あの天使に連れで行かれたリリアンを救うために。そのためにはクロエの力が必要だ、勿論それは解るけど。

「……ならば、もう何も言うな——」

突然、脳裏に幻のように響くその声に、びくつと身体中が戦慄^{せんれつ}く。

けれどその声は、半ば眠りの淵から届く夢うつつの言葉のように、強くも激しくもない、ただ、たゆたう波のような静かな穏やかさで、

しかし、いつしかあたしの意識は、すっかり明けきった眩しい朝陽の中、手元の携帯のけたたましい着信音によって目覚めさせられた。その胸元に揺れる、翡翠色した勾玉のペンダント。

『金城瑠美那さん……？』

「は、はい」

おはようございます。それは、ちょっと優しい女の人の声だった。その声の主に唐突に告げられる。

金城さん、あなたは来期より、そちらの普通科からアマテラス校エリートアカデミー科への転入が決まりました。え？ 突然のことに頭が全然ついていかない。えっと理事長先生、じゃないよね。でも、この声どこかで聞いたことがあるような？

『……つきましては、明後日、早速こちらの学園案内をさせていただきます。無論、今学内は夏休み中ですが、臨時でこちらの生徒を寄越しましょう』

「は、はあ……」

その翌々日、その女性が言った通り、アマテラス校のエリート科であたしをにっこりと出迎えたのは、あの睦月諒牙だった。

「こんにちは、初めまして、金城瑠美那さん」

*

「僕のことは兄さんから聞いてると思うけど……、」
「初めまして、睦月諒牙君……！」

諒牙が言い終わるか終わらないかというところで、あたしはこちらも負けじと、にっこり微笑んでみせた。すると諒牙君は、あはは、やっぱり知ってるんだ。と、思わず表情を崩して笑った。思った通り、こういう素直な反応する子なんだ。と言いつつ、あたしはあたしでデユナンとして、諒牙君のことを見てきたことは、勿論こちらだけの内緒話。

「思ったとおりだ——」、「え？」

兄さんの思考を通して、瑠美那さんのことは、ずっと見てきたけど、やっぱり実物は可愛いなって。こいつう、ちよつと生意気だぞと、そんな言動に、つい一つ年上のお姉さんのに、いじめてあげたくなる。でも、そう言われて確かに悪い気はしない。

「そう、あたしもお兄さんから色々と噂は聞いてるよ、すつごく頭がいい子なんだって」

それから……と、あたしが言わなくてもいいことまで本人の目の前で喋りだしそうになると、あーっタンマ、タンマ！と、諒牙君は慌ててそれを遮ろうとする。きつと？能力？で、その先が全部解つてしまったんだろう。

「知ってると思うけど、僕は兄さんの属してるイオリゲル隊メンバーと同じ力があります。かと言って、瑠美那さんの考えてることとか、色々詮索はしないから安心して」

知ってるよ、フィルタリング機能、でしょ。兄さん、そんなことまで話したんだ。ちよつと呆れ顔の諒牙君。

「でも、瑠美那さんのこと、ほんとに色々知りたいな」

「ふふっ教えられる範囲でなら、教えてあげてもいいわよ」

何だか弟みたいな諒牙君と接していると、ほんとに兄弟ができたみたいなのがしてくる。あたしはつかのま、先日心の震えを忘れ、燦々と降り注ぐ真夏の太陽の下、諒牙君の前で生き生きとした笑顔を振り撒いた。

それはそうと、ごめんね、夏休み中に。確かエリートアカデミー科の生徒はツクヨミドームで夏期合宿中なんじゃ。あたしの言葉に、彼はまったく気にした様子もなく笑いかけた。

「気にしないで。ほんとは今あちらで色々しなくちゃならないことがたくさんあるんだけど、ちょっとした息抜きになって、ありがたいのは、むしろこちらの方だよ」

やっぱり大変なんだーエリート科って……思わず溜息をつくあたしに、大丈夫。解らないことがあったら、勉強のことでも何でも、僕に聞いていいから。そんな頼もしい諒牙君に「ありがとう」と、思わずにっこり微笑む。

確かにどうして突然、こちらの普通科からエリートアカデミー科に転入になったのか、あたし自身にも分からない。天照大付属高校は、確かに高等教育を主軸とするエリート校だったけど、そのエリート中のエリートである、アマテラス校のエリートアカデミー科。諒牙君は、ああ言ってくれたけど、ほんとにこっちで上手くやっていけるのかな。ちょっと不安になる。というか……、

そんな、あまりに当たり前の高校生が悩みそうな事に、当たり前で悩んでいるあたし。本来のあたし自身の、もっと深層で捕らえられているあたし自身の悩みからすれば、それは、なんてことない平

和な悩みだった。それより、本当のあたし自身は、一体どっちなんだろう。沖縄からアマテラスへ転校してきた天照大付属高校の生徒？ それとも龍神の庇護の元、その龍神であるところの日神と誓約した龍蛇の巫女？ きつとルミナスには、馬鹿なことを言うな、とか頭ごなしに一刀両断させられてしまいそうだけど。

その日は終日、諒牙君に連れられて、夏休み中の構内を色々と見て回った。確かに大学の構内から、そのまま直結しているエリートアカデミー科は広い。少し離れた場所に向かい合って立っている、何もかもがこじんまりした普通科の建物とはわけが違う、ということを実感する。講義室や研究室など、天照大の施設も勿論、エリート科の生徒は使ってよいことになっている。

「もう聞いていると思うけど、瑠美那さんは来月から理事長先生宅から、こちらの女子寮に移ることになるんだってね」

女子寮かあ。なんだか楽しみだなあ……沖縄では勿論、こちらに来てからも経験したことのないことばかりが待っていそうで、ちょっとワクワクする。勿論、龍蛇の巫女である、あたしが言うのもなだけど。

そう、本当はこんな風に、普通の高校生でいたかった。ほんのつかのま、あたしは諒牙君の前で、そんな普通の女子高生だった。

*

「ね、瑠美那さん」

「ん……？」

別れ際、諒牙君に突然呼び止められる。すっかり夏の陽は傾き、

蝉時雨のざわめきが黄昏の校舎を包んでいた。その斜陽の陰影の中で、ぼつねんと佇む目の前の男子高校生の影が妙に淋しげに目に映る。

一瞬、彼は戸惑うように頭を振ると、それでも何か言いたげに口を開いた。

「兄さん……、兄さんのこと、瑠美那さんはどう思ってる？」

あれきり離れてしまってから、互いにしばらく会っていない。その睦月真吾に瓜二つの彼、睦月諒牙。それでも微妙に違う空気に、彼とお兄さんの真吾とは意識的に自分の中で区別できてる。それでもふとあたしは、目の前の神妙な面持ちの諒牙君の表情に、さらりと本音を漏らしてしまえるほど、いつのまにか彼自身にも同じような親近感で接することができていた。

「とても……、とても感謝してるよ。あたしが今ここにこうしてられるのも、あの時、彼に出会うことができたからだと思うし……」

イオリゲルと龍神とが初めて接触した、あの島での邂逅。勿論、諒牙君はあたしが龍蛇の巫女だと知っている。そう、睦月兄弟はともにイオリゲルの能力であるデュナミスを抑える。彼らにその意図があるのか真実は定かではないが、それでもあたしは、未だその監視の檻の中にいることだけは確かなのだ。

それでもあたしは、彼らに余計な警戒心は抱いていない。だってそれは、真吾の言葉の一つ一つを思い返してみても容易に解る。彼は、彼らは違う、ガイアの人たちとは――。何を持ってして、そう捉えるのかとルミナスには手酷く批判されてしまいそうだけど、でも、あたしは信じてる。真吾も、そしてこの諒牙君のことも。

「そう、そうだね。兄さんも言ってたよ、ことある毎に瑠美那さんのこと」

——あんなにいい子はいないって。そう、にっこりと諒牙君に言われて、ちよっとドキッとする。

「知つての通り、僕はイオリゲルの正規隊員というわけじゃないけど、兄さんたちと同じ力を使える……だから今回も瑠美那さんのことを頼まれたんだろうと思うけど、」

そこまで言つて、あ、ごめんね。と、彼は付け加えた。本当のところを言つと、僕もそれにイオリゲルである兄さんも、実質ガイアの手のの中では、そういう役割を与えられてる。それは瑠美那さんの立場上、勘繰つてもかまわないんだけど……、そんなこと！ そう言われて思わず口に出して小さく叫んでしまう。

「……確かに、あたしは龍蛇の巫女。だけど真吾も、それに諒牙君だつて……！」

「——ありがとう」

素直に諒牙は嬉しかった。龍蛇の巫女である瑠美那さん自身が、僕たちを疑うどころか、ここまで真つ直ぐに信じて受け入れてくれる。その真心はどこか危ういほどに純真だ。未だ彼女の深層の奥は不可思議な障壁に守られ、デュナミスの力で容易に窺い知ることはできなくても、そのことだけは解る。

「兄さんはね、正直ガイアのやり方には疑問を感じてる——、これは双子の兄弟である僕たちの総意でもあるんだけど、ここだけの話……、」

ふと、そこで言葉を切ると、諒牙はそつと耳元に囁いた。――確かにこれ以上は、不味いよね。そう言って何事もなかったように微笑む。

「あ、そうだ。これは理事長先生にも提案してただけど、よかつたら、この夏休み、僕たちと一緒にツクヨミドームで過ごさない？」

確かにエリートアカデミー科の生徒たちとは違い、あたしたち普通科の生徒は、夏休み中、実家に帰るかしていたのだし、それにあたし自身はというと、相も変わらず理事長先生宅でぼんやり過ごしているくらいのものであったのだから……確かにそれはよい提案かもしれない。それに、これから始まる慣れないエリートコースでの学校生活を思えば、今のうちから早めに慣れておいて正解かもしれない。

でも、本当はあたしは知ってる。デュナンも、そしてリリアンもヴェルトーチェカも、既にいないのだということを。きっと諒牙君、淋しいんだよね。リリアン組は、とうとう彼独りきりになってしまった。あんなに仲がよかった四人。というか、不思議に自然と結びついて……リリアンがいなくなつて、それは初めてデュナンとして感じられたことだった。だから今の諒牙君の気持ち、よく解るよ。不意にひとりぼっちになつてしまう淋しさ。そう悟られることを知つていて、でも、あたしは迷わず彼の手を取った。

「うん、いいよ。早速よろしくお願いね！」

そう満面の笑みで返すと、諒牙君の頬がぱつと朱を差して明るくなる。握手を交わすその手のひらの温もりは、確かにまごうことのない彼自身の人となりを示しているようだった。

「じゃ、明日！ またここに迎えに来るから……！」

そう別れの挨拶をする諒牙君に向かって笑顔で手を振るあたしは、これから先、彼と兄の真吾との間で起こる目に見えぬ事件のことなど、微塵も考え及びもしなかった。——そう、あたし自身を巡って起こる、その事件のことなど。

*

……いやだな。

改めて自分自身がそういう境遇に置かれて初めて、ルミナスの本編内容をも、こうして違った観点から見直すことになるだなんて。本当のところ、あたしは全然思いもしなかった。

ルミナスとツクヨミ、そして聡介。それに、双子である睦月真吾と諒牙の睦月兄弟。その彼らに深く関係する本作ヒロインの金城瑠美那。裏切る者と裏切られる者。まあ、確かに双壁であるルミナスとツクヨミのエピソードは別格の別次元としても、聡介と瑠美那、そして後半からラストにかけて彼女自身を強く翻弄することになる、睦月兄弟。最初は、とても仲のよい双子の兄弟だった。しかし瑠美那と出会うことで、次第に二人の間に生まれる思わぬ確執……。確かに双子って同じ人を好きになるって、よく言うけど。

あたし自身が、ルミナスコード一期ラストの展開をほぼ覚えてないのって、もしかしたら、だからなのかもしれない。何らかの理由で、瑠美那は再起不能なほどに絶望のどん底に突き落とされる——ほんと円城寺脚本で、こういうの好きだよな。というか世の女子は、もしかしたらこういう展開って大好物なのかもしれない。そういう例え架空のフィクションだとしても、人の不幸は蜜の味みたいなジ

エイトコースターの、数奇な運命に翻弄されるヒロインの図みtainなものに、どうして人間という生き物は、かくも異様に引き込まれてしまうものなのだろうか。

それはそうと、……あたし自身が今直面してる？運命？という名のストーリーは、一体誰の目に快感となって映ってるんだろう？

そんなありもしない妄想を現実のものと実感してしまうだなんて……、それでも、今日の前にいる二人の男女、人気声優の篠崎聡己と水澤ひとみ。どうして、なぜ今あたしがこの二人の間にいるの。あたしはといえば、何の変哲もない平凡を絵に描いたような、ただの一般人。いや、違うな。通称アニオタ。その「ただのアニメオタク」のあたし、伊勢崎ナミ。そのあたしが、恋人同士だったこの二人の間に入って、ルミナスのヒロイン瑠美那顔負けの悲劇、いわゆる恋のドロドロ展開に巻き込まれてる……嘘だ。

やっぱりあたし、今半分瑠美那になってるんじゃないだろうか。あの時、ルミナス二期第一話のアフレコ現場で遭遇した異様な感覚を思い出す。奇しくも篠崎さんは、彼自身が言っていた通り、その時まるでルミナスそのものになってしまってるようだった。そう、彼と出会ってから、時々あの時の感覚がよみがえる。瑠美那とルミナス。まさしくあたしたちは、その架空の二次元存在であるはずの、二人の主人公とヒロインになってしまっていた。

それはとても不思議な感覚だ。よくフィクションは現実の映し鏡だなんていうけど、それ以上に。あたしたちの頭の中は一体どうなっているんだろう？ 映画やドラマ、ましてや二次元のアニメ、そして小説……。例えそれがどんな次元で展開される物語だろうと、あたしたちの脳内では、それは漏れなく現実に実感できる事実として再生される。

いや、待つてよ。逆にこういうことも考えられる。あたしたちのこの現実が、誰かが考え出した架空の物語でない保証なんてどこにある？ そう考えると、ものすごく不自然。あたしがあたしじゃない。でも、それでもあたしは、確かにこの物語の中の登場人物の誰かであることは事実だ。百歩譲って例えフィクションだろうとノンフィクションだろうと、あたしは今、あたしの物語を生きているんだ。

『はあ……ありえない。ただの不健康な妄想だよね、やっぱりこんなのも……』

そう、溜息をつくも、やはり事実は事実として変わりなかった。

あたしは人気声優の二人と一緒に、今伊勢神宮に来ている。でも、実質的には三人ではなく？二人？なのかもしれない。まるで本編の瑠美那そのもののように、ほとんど魂の入れ物同然の空洞になつてしまった水澤さん。そして、あたしはその彼女を文字通り生かすために存在しているのかもしれない。ルミナス役の篠崎さん。あたしは、その篠崎さんと――。

「伊勢崎さん、どうしたの……？」

不意に呼びかけられて、ドキツとする。外宮に続いて、今度はお待ちかねの内宮。いつの間にかバスを降りて、あたしたちはその入り口付近にやってきていた。少し向こうに臨める、五十鈴川に掛かる宇治橋。その入り口の鳥居は、朝靄の中、確かに神聖な神域へと至る結界のようにも感じられた。しかし、その向こうには火除け橋を渡った先に、本当の神域への入り口である一の鳥居、そして二の鳥居が控えている。

五十鈴川の辺^{ほとり}に來ただけで、あたしにはすぐわかった。ここが、これから先続く、遙かな神話の入り口に続いているのだと。

*

正直、相澤にとっては誤算だった。それでも、それをどこかで誰かが当然起こり得る必然であると囁く——そう、神代未玲だ。確かに、本音を言えば今自分は、あの夢にまで見た未玲と共にこうして旅を続けている。いやま、今はまだ、ほんの旅の入り口に過ぎないのだが。

酒に酔っているせいなのか、未玲は今のところ上機嫌で一人陽気に騒いでいる。確かに他の乗客の手前、あまり迷惑にならないようにと一応は釘を刺しておいたんだけど……ああもう、早いとこ名古屋に着いてよ。

「神代さーん……おい。神代、未玲ちゃん」

かと思えば、今度はグースカ高いびき。まったく、かわいいもんだよ。なんだかんだ言って——そ、なんだかんだ言って自分は未玲に惚れてる。こんな本音、本人の前で漏らそうものなら、それこそ袋叩きに遭いそうだけど。あはは。苦笑いしながら、保護者よろしく手前の座席で無邪気な寝顔を晒している高飛車女に再び視線を投げかける。

かつてのヲタでいじめっ子だった自分が、まさか……でも、それはそれである種の必然だったとも言える。確かに当時は無自覚だったとはいえ、当然好きだからこそ苛めたくなるっていうのは、さ。その上、その彼女が当初の自分からすれば理解不能な世界に堂々と手を染めていて。そんな彼女を煽らずにはいらなかった、ってい

うの？　それが高じて今では自分自身が——正真正銘の腐男子君、ですよ。はいはい。

未玲はもう？その世界？から、すっかり足を洗ってしまったんだろつか。だからといって今さら、身についてしまった性癖は曲げられない。何より彼女自身を理解するために始めたことだ。それとこれとが、そうこのルミナスコードの現場を取り仕切る副監督に自分が抜擢されたことが、そのまま一直線に繋がるとも思えないけど。

思えば竜崎悟朗というのは不思議な人だ。西洋占星術やタロットそれに中国系の占術やら、ある程度一通りの占いを小遣い稼ぎの副業みたいに路上や勤め先なんかでやっていた時、ふとした切っ掛けで出遭った風変わりな中年男。ま、自分が占いなんかやり始めたのも、よく分からない他人^{ひと}の心理なんかを読み解きたいっていう明快な意図があつてのことだったけどね。

それから……そう、その竜崎悟朗と出遭ってから、色々なことが面白おかしく回り始めたのは確かだ。そして、コイツも——。

突然、胸ポケットの携带着信音が鳴り出し、相澤はトイレに立つ振りをしながら、徐に席を立った。

『——久しぶりだね、相澤太一君』

何食わぬ顔をして携帯に電話をかけてくる相手に、こちらも挨拶する。

「お久しぶりです……、那由人さん」

例の写真、ちゃんと届いてたかな？　ああ、と、さっき眺めていたばかりのメール添付のワケあり男女三人のフォト画像を思い出す。

「御丁寧に、どうもです」

『それはそうと君たち二人は、これから伊勢市を素通りして真っ直ぐ熊野へ向かうのかい？』

とりあえず、その予定ですけどね。今後の未玲との前途多難の道中を予想して、苦笑いしながら軽く溜息をつく。

『？彼ら？は伊勢参りのあと、どうやらその足で伊勢神宮の別宮である滝原宮を経て、紀伊長島、尾鷲を経由、花の巖神社が鎮座する熊野市へ、という寸法かな。勿論、ありていに鉄道やレンタカーを利用して、だろうけどね』

「何言ってるんですか、その「伊勢路」の醍醐味は、何といつても熊野古道ですよ」

くふっ……相手がそう噴き出すのもかまわず、未玲の好奇心に騙されてみるのも一興かと思う。そんな自分は、やはりどうかしているんだろうか。

『いや、申し訳ない。しかし、どうもこうも……君といい、竜崎さんといい。ああ、そうそう。竜崎さんといえば、彼らは、おそらく南紀白浜で待機——まあそんなはずはないか、あの人に限って』

本州最南端の潮岬、串本を経て、ぐるっと一回り。ちょうど熊野速玉大社のある新宮の反対側に位置する。紀伊半島の熱海とも称される、南紀白浜リゾート。まあ、海もいいが山もいい。

そういうアンタだって。にしても、こっちの思惑を既に察知してたとは、さすがに恐れ入ったな。相澤は旅の最初に送られてきた、例の写真のアドレスを見て一瞬絶句したことを脳裏に思い巡らした。

『どちらにしても、時間はまだたっぷりある。君たちも、よい旅を——』

そのまま無造作に通話は切られた。

*

「ナミ……ナミ、行っちゃダメだ……」

席に戻った途端、そんな未玲の寝言が耳に入ってくる。そか、やっぱ俺の恋敵は——。

そう思いながら窓外に目をやる。伊勢崎ナミ。相澤にとっては何の値打ちもない、ただの凡人オタク女。だが、彼女が確かにこのルミナスコードの鍵を握っていることだけは、悔しいかな事実だった。

？神？とは一体何ものなのか。

そのことをここで今論じるべきなのか——その真実とは別に、熊野も伊勢も厳然として、そこにあった。神とは人が崇拝するもの。手厚く崇め奉り、それによって己自身の生と己が生きるこの世界の平安を祈る。そう、人という崇め奉る者がいなければ、神がある必要はない。それは、何もこの日本だけではない。最高神である一神そして多神教の有無を問わず、世界は多種多様な神々で満ちている。人がこの世に生きている限り、神は存在し、それに伴う信仰や宗教が数多に存在する。

『なんて愚かなんだろうね……』

草薙那由人、と呼ばれた男は自嘲するかのように笑った。

神とは何だ。しかし、その問いはどこからともなく湧き出る泉のように、人々の胸で枯れることを知らない。我々人間が存在することとは別に、神という存在が、確かにここに……どこかにあることを証明できるのか。ハ、人間……そう、今はそうだったな。改めて己自身の身の置き所を思いやる。

あの時、彼は言った。ヴァルゴ、いや今は竜崎悟朗と名乗っている。

この世界は一体誰のものなのか……そうだね、少なくとも人間たちのものじゃないことだけは確かだ。その彼の問いに躊躇うことな^{としか}く答えてやった。それはあまりに切実な設問。その疑問を自らの疑問として発するには、僕たちはあまりに長く生き過ぎた。かといっ

て自分たちを神のように神聖化することなど、ではしないけどね。

……ルミナス、もし彼が本当に神のだとしたら、僕たちは彼に何を望もうとしているのだろう。もう何もかも、すべてが遅すぎるかもしれないのに。

*

伊勢神宮内宮。正式には、皇大神宮という。外宮である豊受大神宮とともに、天皇家の皇祖神であり日本人の総氏神である、天照大神を祀る数々の末社、摂社など別宮一二五社の総称であり集合体である。伊勢市内、神路山と島路山の山懷に抱かれ、その頂きから流れ来る五十鈴川の清流を受け、その神域の杜には確かに聖なる何かの存在が密かに感じられる。鬱蒼とした森が導く、その凜と澄み切った早朝の空気に、ひっそりと呼吸する自然の息吹。ああ、なんだかとっても安心する。初めて来た場所なのに、全然初めてじゃないような……。

五十鈴川にかかる宇治橋を渡る前に、その袂にある参宮案内所と衛士見張所に寄って、その端にあるコインロッカーに荷物を預ける。あまり数は多くないがGWとはいえ、この時間なら十分利用できた。

長さ百メートル以上ある総檜造りの宇治橋は、その両側に立つ鳥居ともあいまって朝陽の中、その背後の緑と共に、どこか荘厳な、不思議な印象を残して佇んでいた。まさに結界、あちら側とこちら側の境界のようだ。

瑞々しい川のせせらぎを耳にしながら、あたしたちはその神域に足を踏み入れる。篠崎さんは、すっかり水澤さんの手を引いていた。

もし手を離したら、このままこのひっそりと静まり返った神様の聖域の中に吸い込まれていきそうだから、まるでそんなことを言いたげに、篠崎さんは神妙な顔つきで彼女をそっと守っているかのようだった。

勿論、水澤さんは黙ったままだ。それでも時折、何かに引かれるように眸をあげて遠くを見つめる。新緑の緑に覆われた山々は、穏やかな面持ちで清らかな空気をあたしたち三人に届けてくれた。

「……この宇治橋はね、二〇年に一度架け替えられるんだ。式年遷宮——勿論神殿も、同じように二〇年に一度建て替えられるんだけどね」

それは聖地として世界的に見ても、あまり例のない珍しい行事だった。神様の社も、そしてそれに繋がる宇治橋も、その度に新しく作り替えられる。その時解体された内宮外宮の御正殿むなもちばしらの棟持柱は、この宇治橋の両側に立つ、それぞれの鳥居に姿を変える。さらに二〇年後には、その二つの鳥居は別の社の鳥居となる。

完全なるその循環は、まるで自然そのものの大いなる循環サイクルを見るようだ。

「……すごい、つまりリサイクルってことですよね？」

篠崎さんの説明を受け、あたしは感心したように改めて前方の大きな鳥居を見上げる。それはこの五十鈴川の水の流れにも当然例えられた。山や森など大地に降る雨が、そのまま土に蓄えられ、滝や小さな小川になって、この川面に注ぐ。それが伊勢湾の海に注がれ、いずれ太陽に温められて蒸発した水は再び大地に降り注がれる。

「そうだね、廻り廻って、すべてが巡る——それって確かにすごい

ことだよね」

アマテラス。それはルミナスの母であり故郷。なのに太陽神である彼女は、どうして――。

*

すべての行いが罪なのだ。だが、それを知ってどうするというのが。

デュナン・リトラスは再び自問した。夢の終わり――確かに自分はそれを望んでいたはずだった。だがしかし、こうして日が昇り朝が来て自分は出逢った。夢にまで見た己自身の半身である、かの人
の映し身……そしてこの世界に降臨したのだ。今では、その依人である巫女をこの身に取り込んで……、そうだ、お前を。私は金城瑠美那を。かつての愛する者をこの手にし、そしてこの地上に顕現できる新たな身体を手に入れた。それが今の俺自身だ。おそらく瑠美那は恨んでいることだろう。この悪逆非道の日ノ神を。いずれ、この地を焼き尽くし焦土と化そうとしている、この命に従うことを。そうだろう、瑠美那……。

「アグニの仲間たち……まずは彼らと合流するのが得策だろう」

海賊パルジャミヤ、か。クロエの提案は確かに的を得ていた。差し当たって我々が必要とするのは最低限の戦力と、それを実行できる人員に他ならない。クロエの目的がその海賊の首領アグニを救出することにあるなら、彼らは当然力を貸すだろう。それに一応は顔見知りでもあるしな。ふ、と笑って女剣士はデュナンに振り返った。

「とりあえず、そいつらが今どこにいるのか。それを探ることが最

優先事項というわけか」

「策は既に練ってある。私の感応機能を使って、ある程度は場所を絞り込める、その先は——、」

しかし少年に姿を変えた日神は、躊躇うことなくその言葉尻を取って彼女の思惑を遮った。

「そんな悠長なことはしてられないな。簡単なことさ、俺自身はやつらをおびき寄せればよいだけのこと……！」

太陽神、いや太陽の皇子として——。

……何考えてるの、ルミナス！？

その思考をいち早く感じ取ったあたしは、彼がいきなり危険な賭けに出ようとしていることに気付いた。それはパルジャミヤである彼らに知らせるばかりでなく、イザナギ全土、いやガイアを含む世界全体にその存在を大々的に知らしめることに他ならないのだということに。……太陽の皇子^{みこ}。ルミナスとしてではなくデュナン・リトラスとして。確かにあの学園にいたデュナンは既にもういない。だからもう一度生まれ変われるとでもいうのか。

『それが最良の策なのだ、瑠美那——これは？ヤツら？への宣戦布告でもある』

——確かに日本、古^{いにしへ}のイザナギには天皇^{スメラミコト}が存在した。だがかつての日本で形骸化した事実がそうであったようにイザナギとなった今では、まるでアグニの祖国インディアナのヴァシュラート王朝の如く、その存在は混乱の内に闇に葬られてしまった。だが、その生き残りが仮にもし生きていたとしたら？

「そんなことが簡単にできると思うのか——っ!？」

「出来る出来ないの結論を出す前に、やってみるまでのことさ」

驚くクロエの反論さえ意に介さないかのようにデュナンは不適に笑った。そうだ、いずれ？ ヤツ？ に、ガイアの連中どもに誰がこのイザナギの皇帝であるのかを教えてやらねば。そのために、この身体が真の意味で必要となる時がやってきたのだ。奇しくも現イザナギの首相である御統要一は王道復古、とまでは行かぬが、かつての古の神への信仰を殊更に推し進めていると聞く。その波を一気に押し広げるには確固たる指導者が必要だろう……いや、それはまさに力を持つ者の神権そのものだ。

『まさか——このイザナギの帝になるつもりなの？』

……今はまだ無理かもしれぬ。が、太陽の皇子は海賊パルジャミヤと共に暗躍し、いずれは……。

日神の胸の内に閃いた大いなる企みは、その神威、神の力を感じるまま発揮できる礎、それを獲得することから始まるのだった。

*

「確かに、ものすごいタブーだったかもしれないわね」

南紀白浜空港に降り立ち、待ち構えていたタクシーに乗り込むと、後部座席に座って涼しげな表情で潮風を受けている円城寺が徐に口を開いた。

それだけに各メディアには多大な気を遣った。それだけじゃない。

制作そのものが危ぶまれるかもしれない、その一つの賭け。何しろ菊の御紋の問題は、それを口にするのも憚られる。深夜帯とはいえTV電波に乗ることすら危うかった。そう架空の近未来世界、単なるファンタジーとはいえ。イザナギもアマテラスも、事実この国の国生みの神であり神話なのだ。

「だが、その問題を避けては真実は語れない」

竜崎は運転手の助手席で、それを受けて呟く。とりあえず予約したあるホテルに向かうのもいいが、まずは下見くらいはしておきたい。

真実……、そうね、でも。

「ま、イルカのショーやパンダに会ってくるのも一興かもしれないがね？」

調子を崩して、しれっとした表情で笑うその男の表情には、先ほどの真剣さは微塵も感じられなかった。

白浜の物言わぬ美しい海は、そこが南紀のリゾート地であると共に、黒潮の暖流が流れ込む、まさに海と山に挟まれたこの世の楽園であることを伝えていた。そしてそれは南海の楽園であり、同時に死者の魂が行き着く黄泉の国であるのかもしれない。

*

日本列島が四季に恵まれたのは、中緯度の大陸東端に位置し、かつ風上に海があるため、海洋上の高気圧などによる夏の季節風によって海洋性気団の暖かく湿った空気が入りやすい環境にある、乾燥とは無縁の地域に属しているからである。海からの風は湿潤な気候

をもたらし、さらに海流・黒潮の暖流によって供給される、たくさん
の水蒸気が国土の大半を占める緑、森林を育む。さらには、その
山塊に抱かれた森林から海岸へ流れ込む河川からは、多量に含まれ
るミネラルが海へと注ぎ込まれる。そのため河口付近の海では、そ
の栄養豊富な海水を養分としてプランクトンや海藻が育ち、多様な
種の魚類が生息する。同じ世界遺産に登録されている、ブナなどの
原生林に恵まれた東北の白神山地などは、その落葉樹による豊かな
生態系によって形作られているのだ。

この紀伊半島の熊野の杜は、かつては照葉樹林の生い茂る、暗く
湿った閉ざされた森だった。特に熊野本宮大社のある本宮町の南に
位置し、本宮町と古座川町にまたがる熊野最高峰の大塔山には、そ
の貴重な照葉樹林が数多く残されており、温暖多雨な気候で複雑な
地形を持つ自然条件下により、極めて多種多様な動植物が生息して
いた。が、西日本の全域を覆っていた照葉樹の杜は、屋久島や沖縄
そして九州の一部、そして本州では只一箇所、この熊野の本宮町を
残すのみであったのだが、今では、そのほとんどが杉や檜の人工林
に植え替えられてしまった。それはすなわち、この国に住む者たち
が自分たちの住みやすいように、国土を開発してきた結果……。

白浜海岸に降り立った円城寺を残すと、そのまま陸路を沿岸沿い
に向かう。国道42号線。周参見町すさみの道の駅から始まるシーサイド
ドライブインより、夫婦波や潮岬、海金剛、橋杭岩などの絶景が続
く海岸道路から、串本、太地、紀伊勝浦までは絶好の観光名所であ
るが、それまでは特に注目されていない、同じ熊野古道でも殺風景
な大辺路が続くばかりである。

熊野古道といえば、熊野本宮大社へ至る京都、大阪など関西方面
からのメインルートである中辺路なかへちが主なルートであるが、その他に
も東からの伊勢路、高野山からの小辺路こへち、そして最も険しい山岳地

帯を縫う大峯奥駈道、さらに伊勢路とは反対側の比較的、緩やかなこの大辺路がある。まさに網の目のように張り巡らされた熊野街道。

白浜町からレンタカーを利用し、竜崎は一人無言で、まさに海と山に挟まれた陸路を東に進んでいた。大辺路は、今では国道と鉄道に吸収され、ほとんど見る影もなくなってしまった。しかし白浜町から周参見町にかけて、富田坂、仏坂、長井坂など険しい道が続く。だが山岳地帯を行く中辺路や同じ沿岸路でも伊勢路ほどではない。本来の熊野観光であれば、中辺路の出発地点、滝尻への路線バスが出ている紀伊田辺へと逆方向へ向かうのであるが、生憎そういう目的で来ているわけではなかった。

日置川を渡り、周参見へと至る。枯木灘、とはよく言ったものだ。平野部のない絶海の辺境。まさに今、自分は熊野、海と山とが直接面した錯綜する紀の国の光と影の境界線を走っているのだと錯覚した。

ルミナスコードの世界では、既にその森と山を抱いた日本列島——イザナギの大地の大半は失われてしまった。しかし、人々が都市を形成したドームとは別に、そのミニプラントとも言うべき生態系の姿は小規模だけ残された島嶼にも存在していた。それが富士の樹海や桜島などの火山帯である。むしろその富士火山帯である、伊豆大島、三宅島などは少しだけ隆起した。アマテラスは現在の東京より少し北側に位置している。それに併設されるスサノオ、ツクヨミドームは、それぞれその北と南に、都市機能の三角地帯を形成する。それも人々の生活水準のための万全の体勢を整えているに過ぎない。本来の自然——それがもたらす恵みは、かつての列島の非ではない。やはり海と山……大地は、二つで一つなのだ。

「あんがい、それを探す旅になったりな……」

ふと、車から降りて周囲を見渡すと、生暖かい潮風に混じり？声が、聞こえる気がする。

それはまるで既に失われてしまったものが、僅かにすすり泣くようですがあるかのようなだった。

*

宇治橋を渡り、参道の両側に広がる松が茂る神苑を行くと、しばらくして火除橋ひよけが見えてくる。そして渡りきつてすぐに聳える一の鳥居。まずはその手前の手水舎で水を柄杓から掬って左手に取り、口と手を漱ぐ。でも、そのあとすぐに右手に広がる五十鈴川の清流に面した御手洗場みたらしが迫っているので、同じことのような気がする。

ここに至るまで、ずっとその五十鈴川のせせらぎの水音が耳元を洗っていた。やっぱり外宮と同様に、ここ皇大神宮の神様も、カッブルが参拝することをよく思っていないんだろうか。だからずっと、さつきからあたしたちは、この川のせせらぎに耳を傾けていた。それだけじゃない、この場所がもたらす森の緑、その空気の清浄さは何より後ろめたい心をずっとなだめてくれていた。心なしか、水澤さんの表情も和らいでいる気がする。ただ冷たく、心をなくした人形のようなだった、その能面のような無表情に不思議に宿る優しさ。

「そもそも、この内宮の御神体は、この五十鈴川の向こう岸に祀られていたらしいよ」

思い出したように呟く篠崎さん。それは水神、天から山頂に下り、さらに山から川の流れに潜り、そこで楔する巫女に拠り付いた龍神……。だから天照大神は、元々はその日ノ神、自然神を祀る日巫女が成り代わったものだという説がある。だから太陽神なのに女神様

なんだ。古来、代々の天皇家の斎王^{いつきのみや}は、そういった処女が選出され、都からここ伊勢へと派遣された。その御手洗場のすぐ脇に設えられた、四方を注連縄で囲った被所^{はらえど}がある。この被所がその名残りなのだそうだ。

水面^{みなも}に映る杜の緑が朝陽にキラキラと輝いている。ただ澄み切ったマイナスイオンの空気が、何もかもを浄化してくれるような気がする。それなのに。やはり昨夜の篠崎さんとのことが胸から消えない。すぐそばに、その篠崎さんと、そしてその恋人である水澤さんがいるっていうのに。水際の石畳にしゃがみ込み、手のひらに清流を掬う。その冷たさが、夢から醒めたかのような、今この瞬間を今さらのように思い出させる。

どうして……今あたしはここにいるんだろう。伊勢崎ナミ、そうあたしは、ただの普通の女の子、だよ。でも、傍らの水澤さんに常に目を配りながら、それでも篠崎さんは、同時にあたしのことをずっと見つめていた。忘れない、なんだかそう言われているようで、不意にその瞳から視線を逸らす。

「……っ、あたし、おかしいですよ。こんなところまで、篠崎さんたちに付いてきてしまうなんて、」

そう笑って、ふと自分を誤魔化す。でも……。

「——君は、いや僕たちは、きっとここに呼ばれて来たのかもしれないよ」

その言葉に再び振り返る。篠崎さんは、まるで捕らえられた小動物が観念した時の静けさを纏ったかのような穏やかな眼差しを向けて、そっと置くように真剣に呟いた。もう、僕たちは……。

でも、その消え入りそうな言葉の先は、清流の水音に飲み込まれてしまった。

かつて日の神を祀った日の巫女が、その身を龍神に捧げて自らが天照となったように。奇しくもルミナスコードのヒロイン瑠美那も。

清らかであるはずなのに、どこか怖ろしい。神とは一体、どのような存在なんだろう。

*

御手洗場をあとにし、二の鳥居をくぐる。澄み切った大気に包まれた身体は確かに安らいでいるのに、次第にどこか胸苦しくなっていくような気がする。なんだか自分の心も身体も、この空気に染まって透明になってしまふみたい。自分自身がなくなるって、こういう感覚なの？ 心なしか、そんなあたし自身の気持ちを読み取ってくれたのか、傍らの篠崎さんが、そっと左手を伸ばした。あたしの手を取った、その手のひらの温かさに何となく安心する。

確かにこの内宮は、外宮よりも一回り大きいような気がする。そのせいか、神苑に足を踏み込んでから、随分と時が経っているような気がした。まるで一滴の水滴が、ささやかな小川となり、山を流れ谷を下って大海となるように。でも、今はその逆だ。どんどん自分自身が凝縮され、何も纏わない芯だけの裸にされていくような。でもそれは、原石であった頃の昔に人を遡らせていくような感覚だった。

人はこんなに豊かになったのに……でも実際は、どんどん削り取られていく。本当に大切なものが何なのか分からなくなるくらい。まるで永遠さえも一瞬に閉じ込められるかのような静寂の中、ただ

あたしは前だけを向いていた。心は過去に、生まれる以前に限りなく引き込まれていくような、それでいて、どこかその先にまだ見ぬ未来が開けているような――。

少しだけ、怖い気がする。本当は聖地とは、こんな風に自分自身をなくすために存在してるんじゃないだろうか。制限なく肥大した、余計なものばかりを背負い込んだ荒んだ気持ちも現実も、すべてを一度リセットするために。でも、あたし自身はリセットするどころか、だんだん違う何かに自分が近づいていくような気さえする。それがルミナス――神様の御神託だつていうの？

現に瑠美那を演じていた水澤さんは、この通り心をなくしてしまった。篠崎さんも、ルミナスを演じる度に、自分が向かっているマイクと画面の向こうに拡がる何ものかに、次第に魂を吸い取られていつてるんじゃないだろうか。あの時、アフレコ現場で目にした彼の姿は、まるでルミナスそのものだった。心なしか、あたしの手を握る篠崎さんの指先の力が強くなる。つられて、あたし自身も、震える指先に力を込める。

離さないでいて……お願い。互いが溶け合うような、その感覚は、どちらにせよ二人を強く結びつけるのに他ならないと知っていて。

*

内宮にも外宮にも、その御正宮の社の床下の中央には、大地に突き刺さるかのように突き立てられた、心御柱しんのみはしらというものが存在する。社全体を支えているのでもなく、空に浮いたその柱は、ただその大事な骨組の芯であるかのように、伊勢神宮そのものを支える。二〇年に一度の式年遷宮の際、大木ほどもあるその巨大な柱は、秘密裏に神苑から切り出され、夜のうちに神域に運び込まれる。神宮関係

者以外、誰も見ることの許されぬ、まさに御神体。その存在は、まさしく口にするのも憚られるほど。

「神様って、本来そういうものなのかもしれないね」

だから、こうして聖域に足を踏み入れるのにも、様々な手順が存在する。参道の中央は正中と言って神様の通り道だから、必ず右端から左端を歩く。鳥居をくぐる前に手水舎で手と口を漱いで、まず身を清める。特に神宮の場合、その参拝方法は、二拝二拍手一拝。正面からは畏れ多いので、脇からそつと参拝する。

あたしたちは、実はとんでもない神様に御参りしようとしているのかもしれない。失礼な話だが、若干そんな気も否めない。とにかく心を無にして、最大限の感謝の念をもつてして御参りするしかないようである。まるでかつての天皇や、言葉では言い表せられないほど、ものすごく畏れ多い人に面会するみたいだ。既に外宮を参拝してきた後だというのに、思わず身体が震える。なぜかこの内宮、皇大神宮は、そのスケールがまるで違うという気がする。それもそのはず、祀られているのは天照大神。日本人の総氏神様である。アマテラス……そうルミナスコード本編では、ルミナスのお母様。

考えてみれば――、

一瞬にして体から血の気が引く。思えば、なんていう話なんだろう。ここ伊勢神宮に来て、神様の御住まいに足を踏み入れて、そのことがものすごく畏れ多いことであると実感する。……怖ろしい。本当は、なんて怖ろしい話なんじゃないだろうか？ 何の抵抗もなくオタクとして一ファンとして単純に受け入れてきた、そのストーリー。

それが一気に神の怒りを買う冒瀆そのものの行為であるかのような気がしてくる。そんな、馬鹿な、こと……。もしかして、あたしはその愚かなファン代表として、ここへ呼ばれたとか。それでルミナス役の篠崎さんと太陽神の巫女である瑠美那役の水澤さんと一緒に、直接神様の逆鱗を受ける。

ウソ――。

そんな冗談みたいな真実めいた真相を想像して、神様殺しが、いかに罪深いか思い知る。例えそれがフィクションであろうと。

かざひのみのみや

風日祈宮へ至る風日祈宮橋を右手に見送り、左手の神楽殿や五丈殿を過ぎ。その五丈殿の角と忌火屋殿の間の道を左へ折れる。数々の杉や檜その他の樹々の梢から差す緑色の日の光は、確かにものすごく柔らかく美しいのに。

天照大神の荒魂をあらみたまを祀る荒祭宮へ至る石畳の階段が見えてくる。その向かい、三〇段ほどの石段を昇ると、もう御正宮は目と鼻の先である。

美しい杉木立の間に、整然と並べられた石段。何も間違いのない、その正しさに自然と襟元を正したくなる。思わずあたしたちは、強く握っていた手を離れた。やっぱり神様が怒っている気がする。きつとそんなことないよって、篠崎さんは言ってくれる気がするけど、でも、やっぱり。

「……っ、」

すると、いきなり傍らの水澤さんが、苦しそうに胸をかき抱いてその場にしゃがみ込んでしまったので、面食らった。

「み、水澤さん！」

神様の御前なのに、思わず叫んでしまう。ひとみ、大丈夫、大丈夫だよ……篠崎さんは、必死にそう彼女をなだめた。どうして、こんな……こんな、ことに。改めて彼女自身が陥っている状況の尋常のなさに気付く。それはまるで天と地そのものがひっくり返ってしまったような重大さ。その果てしない重さ。どこか遠くに感じていた。そう、今まで。なのにここへ来て、初めて解った。

胸が、痛い……。

「篠崎さん、あたし——、」

縋るような目で篠崎さんを見上げる。消えてしまいたい、このまま。自分自身さえ失うほどの、その？力？の強さを感じていながら、あたしはそう強く願った——だけど。

「行こう……」

篠崎さんは、水澤さんをその場に残し、再びあたしの手を取って石段を昇り始める。覚悟を決めた、その横顔はそう語っていた。君は選ばれたんだろ、神様に。そう言われている気もした。どうして神宮は二〇年に一度、建て替えられるんだろう。それは常に新しい新鮮な空気をこの神域に呼び込むためだ。かつて瑠美那役だった水澤さんは、言ってみれば古くなった社。だから新しい社に、その住まいを住み替える。

それが、この清浄な神域を永劫に永らえる唯一の方法。だから古来、何代にも亘ってその巫女であった斎宮は何人もの皇女たちが務

めた。彼女たちは第一に清纯であることが、選ばれるその条件であった。

確かにあたしは、ずっと一人ぼっちだった。友達も少ないし、そして恋人も、そんな経験全然ない。ただ、見えないものに心奪われて、それですべてを満たしていた。それだけでよかった。外の世界はすべて自分を傷つけるから……いつでも、あたしは。

？ならば、お行きなさい——？え？

「その声」が、また胸の奥底から響いた。希望も絶望も、すべてがこの石段の向こう側にある。待っている、夢にまで見た、誰かが。

緑に苔生した茅葺屋根に載せられた十本の鰹木^{かつおぎ}。唯一神明造^{ゆいしんめいづくら}の、物言わぬその神殿が、鳥居の向こう、ひっそりと佇んでいた。

お行きなさい。？信じる？という、その心だけを胸に抱いて。

.....

.....

.....

「こんにちは、金城瑠美那さん」

盛夏のツクヨミドームであたしを出迎えたのは、睦月諒牙ではなかった。

それは、その声の人は、以前あたしに転入の連絡をTELしてきた、あの声の主の女の人だった。

ふわつと華やかに整えたロングヘア。嫌味のない薄化粧。加えてセンスのよい銀縁眼鏡。天照大にて以前、島嶺助教の秘書を勤めていたという、その女性は、草薙瑞穂^{みずき}、と名乗った。

「そうです、草薙瑞穂は私の姉です」

現在、天照大に勤めながら、各教授達のスケジュール管理などは勿論、同時にこの学園のエリートアカデミーコースの生徒の様々なサポート役も兼ねているという。まさに文字通りの才女、である。イオリゲル候補生の、そう睦月諒牙君から既にお話はうかがってます。そう言って、草薙瑞穂は微笑んだ。

「確かにエリートコースに転入になる前に、色々と準備は必要ですね」

それがこのツクヨミドームにおける、エリートアカデミー科の夏季合宿である。合宿といっても、ほとんどは夏休みのようなものですけれどね。しかし、こなさなければならぬ課題は山とある。瑠美那さんの場合は、それをする代わりに転入前の準備段階である、予備学習をしていただきます。何だかそう告げられると、途端に緊張する。

「でも、あんまり硬くならないでくださいね？」

にっこりと微笑む、瑞憐女史。あなたの学習の面倒は、睦月君がしっかり見てくださるそうですから。ああ、それなら安心だ。その名前を出されて、改めてあたしは、ほっとした。よ、よろしくお願いします！と律儀に頭を下げる。既に理事長先生の家は引き払ったあだった。そう、今後あたしはエリートアカデミー科の女子寮に入るのだ。

当の諒牙君からは、その翌日連絡があった。ごめんね！急に都合がつかなくなってしまうて……あたし自身は、それほど気にはしてなかったのだが、彼自身はというと、自分が言い出したことでもあるし、ものすごく恐縮していた。というより、もつとずっと切実な思いで。

大丈夫だよ、草薙さんに色々と教えて貰ったから、だからあんまり気にしないで。諒牙君からのTELにそう答える。でも、これからはよろしくね？　そう茶目つ気たつぷりに告げると、相手の男子高校生は携帯越しに激しく頷くのが分かった。もう、諒牙君ったら、くすくすと笑いながらも、ちよつとだけ前途多難な新たな学園生活のことを思った。

本当は、そんな今日の前にある現実より、あれからずっと気にかかっていることがあった。それも、驚くような……ルミナス、本気なの？　心の奥底で一人呟く。本来なら、この学園生活は、ほぼ仮初の生活であると言ってもよいようなものだった。しかも、あたしは未だアマテラスにいるのだ。勿論この夏は、ここツクヨミドームにいることになったんだけど、それだってガイアの人たちに監視されたままなんだろうし。裁くなら早くしろ、とでも言いたいような

酷く緩い軟禁状態。例え諒牙君のいるアカデミー科に移ったとしても、それは一切変わらないだろう。

しかもルミナスが——突然、あんなことを言い出すなんて。このイザナギの帝になる。それって、もしかして天皇ってこと？ でも、この国の天皇は……まさに天地がひっくり返ってしまったんだ。確かに以前は、ただの国の象徴でしかなかったって歴史の授業では、そう教えられてきていたけど。

でも、その血筋をどうやって証明するの？……知れたこと、この私にできないことがあるとも思うのか。ルミナスはそう告げて高々と笑った。確かに。あなたには、できないことなんて何一つないかもしれないわね……。そう低く呟いて少なからず困惑する。まさに太陽の皇子、というわけである。

まさか、国民全員に催眠術でもかける気じゃ。実際は、そんなチープな方法でないことは解っていたけど、それでもあたしは、胸にこみ上げる不安を抑えきれなかった。クロエも苦労するわね、こんな神様の参謀役を務めなければならぬなんて。ふ、言いたければ存分に言え。そのうち、目にももの見せてやるさ。

……そう、あいつに、突然現れて我々を煙に巻いた、憎つくきガイアの腹黒い白のメシアに。もうそいつが、どこの誰かなどという野暮なことは、彼には判りきっていた。そしてむしろその怒りの焰は、確かに未だ彼自身の中でずっと燦っていた。いや、燦るなどというものではない。例のリリアン・パステイムのこともあるが……、でも、その彼の胸の内に燃え盛る、本当のところの真実については、あたし自身、まだ何一つ知らされていなかった。

ただ一つだけ分かったのは、案外、彼には人間臭い部分があるの

だということだった。確かに、そうかもしれぬ。不意にそう呟かれて、自分の思考は筒抜けなのだと改めて気付く。故郷アマテラスにおける神話時代、ルミナスは神人として、アマテラスの子として、一切の権限を周囲から認められていなかった。いや、むしろ離宮に監禁され、アマテラスの子であることも日神であることも、ひた隠しにされ続けてきたのだ。——確かに今さら、そんなことにこだわりはしないが。

だから、むしろ神よりも人に近いと言えるのだろうか。だからこそ、こうしてお前を見つけることができたのかもしれない……。それにしたって。だったらなぜ、あんな酷いこと平気でできるの？ あたし自身の中の嫌な記憶が一気に脳裏に蘇る。きっと必要ならば、人類を皆殺しにすることだって厭わない——なのに、その一方で……。

ルミナス、時々あなたが分からなくなる。あたしの意識を取り込んで、巫女として平然とあたし自身の身体をいのように使っているのだって——。いいえ、そう。それはあたし自身が。思わず目を瞑って頭を振る。それについては、確かに合意の上のことだったのだ。なのに後からグダグダ言ってるあたし自身こそルール違反だ。

『解っているなら、それでいい——』

ふつと笑いながら、ルミナスは囁いた。……お前は、おとなしく私に従っていればよいのだ。ゾクツとするような、その声色。確かにルミナスは、あたし自身の弱い部分を突いてくる。それは確かに遙か遠い昔、あたしが彼を心から愛していたという、その揺るぎのない真実。あたし自身でさえ、どうしようもない、一つの運命の枷。

「命そのものは、記号……そうでしょう？」

不意にワイズ博士の口から漏れ出た言葉に、耳をそばだてる。だからイオリゲルも、そしてあの龍蛇の血潮を注がれた海賊皇子も、こうしてつつがなく役立てることができるので。そうでしょうね、そう言っただけ再び黙り込む。あいつ、睦月真吾は、また自分に会いに来てくる気がする、しかも今度は自発的に。なら、その前にそれはそのことが悔しいから、というよりは、ある程度の必然において、という意味合いからだった。実際、あの龍蛇と化したアグニを調教するには、どう考えても彼らだけでは役不足だった。

「……しかたがないわね、」

ふふつやはりお出掛けですか。確かにあのマシンについても、興味深いことが非常に多いですからね。ただでさえ貴重な被験体であるのに加えて、その彼が乗りこなしていた、あの緋い機体。せいぜい優しく扱ってやってください。——解ってます！声色は柔らかだが、明らかに面白がっているような博士の態度は少々気に食わないけど、でも、こればかりは。

「イオリゲルには色々と貸しがあります。だからというわけじゃないけど……」

ベアトリーチェは、彼女らのチームが開発したマシンD-2の真の性能を見事に引き出した彼らイオリゲルの才能を高く買っていた。それだけは事実であり真実だった。例え犠牲を前提の上の寄せ集め集団だろうと、なんだろうと。睦月真吾の属するイオリゲル第七小隊。しかし、そこに派遣されているアグニ・ヴァシユラートという被験者は既に被験者？ではなくなっていた。そいつをどう扱う

と、とうに知ったことではないというわけである。それがこのガイア軍指令本部。そこに監察の名目で度々やってきているドクター・ワイズ。時々その底冷たい眼鏡の奥のアイスブルーの眸が、やけにうざったく感じる時があるけど。

「ああ、ベアトリーチエ。彼によろしく……何しろ大切な囚われの皇子様を預けているわけですから」

知ったことか。あいつに言うことなんか何も無い。ただ無事に任務をこなせということ意外。

それでも何となく、睦月真吾、あいつからは、片時も目が離せない気がする。作り物みたいな、このワイズ博士や、それからガイア本国の取ってつけたような余所余所しい雰囲気よりは、ずっといい。

*

やっぱり僕には無理だ。？彼？に接する度、そう思う。

相手は、やはり「蛇」だった。いや龍神の化身ならぬ、その血潮を注がれた元は人間……その元若き海賊の首領は、確かに自身のよすがを残す人の姿形をしてはいたが、それでも、その本質は全く別なものに変化してしまった。それをガイア流に進化、と呼ぶのかどうか。そんなはずがない、こんなこと、許されるはずが。そう切なげに思いながら、睦月真吾は一人溜息をつく。

だが、今自分自身に課せられた、その使命。思えばイオリゲルとして自身の力を使う度に、そんな重苦しさから逃れることはできなかった。ただ、できるのは目の前に横たわる問題を命令通り、解決することだけだ。解ってるんだ――。それこそが物分りのよい現実そのもの。でも……。

ただ一人、金城瑠美那という、その少女に出会ってから、すべてが微妙に変わった。それはいつしか、僕自身の生きる一つの道しるべとなったのかもしれない。そう、ただ一人君だけを守ることが。

そんな風に龍蛇の化身となったアグニに接することに躊躇している間に、その報告は彼の耳に告げられた。

「え、ベアトが？」

確かに彼女のことは、あれから少なからず気になっていた。それでもイオリゲル隊員としての職務をこなす日々^{あか}に紛れ、いつしか時間が経ってしまっていた。確かにアグニ自身はともかくも、この緋い機体アスラのメンテナンス的^{あか}なことは、未だ未知の領域であることもあり、やはりD-2開発メンバーだった彼女に来てもらうのは理に適うことでもあり、その実色々^{あか}とありがたかった。

「よかった……」

「しかし、早々ほつとしてももらえないぞ？」

キリアンのその指摘は、もつともだった。やつこさんが来るということは、ガイア本国の監察の目も厳しくなるということである。何しろ司令部直属のお偉方でもあるしな。それこそ、以前睦月に冷たく放たれた言葉の意味を考えたくなるというものである。『もつと冷酷におなりなさい』——すなわち、心を無にする。何も考えず、ただ淡々と非情な任務をこなす。軍上層部が？彼？に下した運命のように。そう、ガイアという大国の、それが国是でもあった。

しかし、

「僕たちは、一体何のために存在しているんでしょうか？」

思わず口を突いて出た、その言葉に自分自身思い悩む。そして、このアグニも——一体何のために、こんな過酷な運命を受け入れねばならないのか。

「そうだな、だが……」

我々は、我々自身が生きるために、できることだけのことをするしかないんじゃないのか。そのキリアンの言葉に改めて「生きる」ということ思い返す。

それは他を圧し、自らを生かすためだけに行動するガイアの本質そのものだ。だが同時にそれは、人それ自体の本質とも言えるのかもしれない。誰かのために自分を犠牲にしているは、何のために自身が生きているのかわからない、という、そういう理屈である。そうだ、常に生物とは誰かを、何かを犠牲にして自らが生き残ってきた。それが原初からの弱肉強食の掟。それを国是とする大国ガイア。けど……。

やはり僕自身には、納得がいかない。他人を退け蹴落として、自分自身だけが生き残って何になる。解っていても、心と体は受け入れようとはしない。確かに僕たちは、そのためにこれまで生きてきた。自分自身と、その家族を守るために。でも、それ以外にも道はあるんじゃないだろうか。自分以外の誰かを救う、そのもう一つの道が。それこそが、本来僕たちが「生きる」ということの本当の意味だ。キリアンの我々自身が生きるためだけのことをする、というその言葉の裏には、そんな真実が隠されていたのかもしれない。

——諒牙、瑠美那さんを守ってくれ。

……その言葉の意味を改めて思い返す。その瑠美那さんと今、僕は一緒にいる。

夏季合宿とはいえ、エリートアカデミー科の寮生活をそのまま夏の間だけツクヨミドームへ持ってきたような毎日は、それほど何も変わらない。ただ夏休みとしての自由時間が少しだけ多いような感じである。それでも山と積まれた課題をこなす間にも、ここの環境のよさが醸しだす空気は確かに、いつもの学園での毎日と微妙に違っていた。でも、それはもしかしたら……？

「ねえ諒牙君、ここの問題なんだけど……」

慣れない学習内容からか、遠慮なく度々かけられる質問に、諒牙は穏やかな笑顔を崩さず優しく応えた。

「瑠美那さんは、やっぱり飲み込みが早いと思うよ」

「え、そう？ あたしの脳ミソは体育会系の細胞で出来てるんじゃないかって地元の友達によく言われてたから」

アハハ、と屈託なく笑うその笑顔が、とても心地いい。

でも、ちょっとだけ心が苦しい。どうして？ だって兄さんは彼女と離れて今、自分自身に課せられた非情な命令に従わなければならないのに。それなのに僕は。

「ね、諒牙君、諒牙君ってば——」

「あ、ごめんね。えと、ここは……」

一瞬、うわの空になった彼を彼女は訝しんだ。

確かに気になっているのは、兄さんのことだけじゃない。あれから、いきなり行方不明になってしまってから、一向に音沙汰なしのリリアン、そして……デュナン。デュナン・リトラス。島嶺先生か

らも、その後まだ一度も連絡がない。家族の都合で急遽、本国に帰国したというヴェルトーチェ力はともかくも、彼ら二人は一体。皆がいて当たり前だった日常が、ついこの間まで自分の近くにあった。それが突然――。

確かにいきなり一人だけ残された夏休み。だから彼女、瑠美那さんを誘いたい気持ちは、きっと兄さんだって解ってくれるだろう。それに、兄さんだって。そんな少しばかり言い訳じみた思いでさえも、自分自身の驕りだとさえ思えてしまう。

そんな僕自身の心の中を瑠美那さんに見られなくてよかった。他人の心を見透かす「神の技」を持つイオリゲル候補生である彼は一人思うのだった。

*

かつて古代の日本がそうであったように、^{とき}時代の流れに沿うままに中央集権化、その道を辿ることは簡単だ。

だが、それ自体は己自身の生命線を保つ上で必然とならざるを得なかったことだけは事実だった。イザナギ、この国がその名を太古の神の名に変えて生まれ変わったことも、すべてが必然であった。それが例え、混沌の末に生まれ変わった大国のなすがままの運命であつたとしても――。

「神の力を請うがゆえに、この身を悪魔に売り渡すか……」

上辺では首相官邸の体裁を取りながら、その社は既に神威を借る祭壇でしかなかった。アマテラスドーム、その太陽神の名が名付けられた、かつての方舟。その懷に抱かれ行^{マッシュコート}う政自体が、それでも全

てを担う鍵であると信じていた。ふ、信じる？ そんな戯言を今さら誰が赦すというのだ。こうして平安の時に騙される国の民すべてを人身御供にしておきながら……。

『——その神も悪魔も同様の姿をしているとしたら、お前はどうかする』

ふと、どこからともなく聴こえたその声に、御統は身構えた。

「誰だっ」

まるで純度の高い白焰。凜と涼やかに響くようで、それでいて残酷な熱を帯びたその声色に祭壇に視線を移すと、その蔭から瘦身を翻し、一人の黒髪の少年が姿を現した。その眸は燃えるような緋紫に輝き、有無を言わせぬ視線に捉えられると、御統の手足は動くことを亡失した。お前は——っ その言葉でさえ目の前の少年が発する目に見えぬオーラに飲み込まれ、金縛りにでも遭ったかのように自由を奪われる。

「大国ガイア、其に齒向かう者には死——その暗示を讀み享受するからこそ、得られた平和」

それが今あるこの国の現状まじいなのだろう？ 一見日本人、東洋系の美しい少年の姿をしていながら、その実、不適に笑う面構えにはゾッとする怜悧さが漂っていた。

「お前は……」

やっと発した言葉に、だが載せて問う意味それ自体が瞬時に消え失せる。御統要一、かつての日本を神に売り渡した男。神とはなんだ。その答えさえも見出せず、ただ万物を超える神威ちからに絡め取られ

た。いや既に日本だろうとイザナギだろうと、すべては泡沫に帰するだけだ。ガイアという大いなる生命の揺りかごで、すべては淘汰される……その篩ふるいにかけられた末にやっと生き残ったのが、このイザナギなのだ。

「太陽の皇子——、そう名乗りを挙げたら神はガイアどうするだろうな」

日出処の皇子みこ、もしそれが今日の前にいる少年なのだとしたら。すべては目に見えぬ磁力が語っていた。御統は夢現のまま、言葉もなく立ち尽くした。

……再び私が現れたら、それが合図と思え。

そう刹那、高らかな声だけを残して謎の少年——日ノ神は消えた。

*

例えその身に大いなる力を秘めているのだとしても、今のままの状態では非力も同然だ。

当然、クロエはそう考えていた。だが、相手は思うよりさらに偉大だった。いや尊大、と言った方が早いのか……それでも、それがそのまま太陽神の力のなせる技なのだということは、クロエにも分かっていて。そう、瑠美那。その巫女を手にしたかの人には、既に怖いものなど何もなかったのだ。

かの人は古の約束により、その巫女を見出し、本来目覚めるべき力を得た——それがためカグツチも、この地に蘇ったのだ。だがそれも刹那、火龍は得体の知れぬ未知の力に襲われ、そしてあろうことか……あろうことか、その血潮がヴァシユラートの皇子の身に宿った。だが、私はかの人の象意の化身であり輩ともからであるカグツチを取

り戻したいのか、それとも――。

そんな考えを振り払うように、視線の先に立つ黒髪の少年を見た。

夜の間だけ力を取り戻す妖術にも似た神通力で、デユナン・リトラスは、いとも簡単に首相官邸の警備網を潜り抜けた。その怪しげな祭壇に御統がいることは既に調査済みだった。毎月の新月の夜、この国の首相であり要人である、その男は神に祈りを捧げる。

「ガイアは既にこの国の懐深くに入り込んでいる……細胞単位で見えぬ鎖を張り巡らせ、ついには、」

それがこのイザナギの現実であり、そして未来の姿なのだ。だが、その鎖を腐らせ断ち切る楔、それに俺自身がなつてやろう。その言葉は、かつての祖国アマテラスでの境遇から来る言葉なのか、それとも真の意味で万物を統べる礎になろうという、その意思なのか。

すべては明後日に迫ったガイア側の秘されし要人、そう「白のメシア」の異例のイザナギ訪問、に掛かっていた。

「どういうことだ？ 元々白のメシアは門外不出。その生き神様が直々に、こつちへお出ましになるってのは——、」

島嶺は柄にもなく唸った。それもそのはず、そんな話は金輪際、聞いた事がないからだ。当然、ガイアには政治そのものを司る国家元首が存在する。無論、総て国家の公務は、その元首が行う。白のメシアは、ただ静かにその大いなる力で全てを見守る——それがガイアの定説であり理^{ことわり}だった。いや、むしろ全てを把握しているからこそ出来ることだろう。白のメシア、それがそれとして存在しているのは、異様な磁場で人々の心を惹き付け、信仰という名の目に見えぬ鎖で容易に全てを掌握しているからに他ならない。

この件に関しては、全て神の御心に沿う形で決定されたのです——、「そうワイズ博士が事前に連絡を寄越してきたわ……既に各メディアには通達済みのようだけど」

「神の御心ねえ、何だか気色悪い響きだな」

島嶺とともに、例のアマテラスハイスクールの女生徒リリアン・パステイム失踪事件の調査を行っていた草薙瑞穂。島嶺があの日、遭遇した現場に进った未知の閃光。まずそれが何であるのか辿ることから始めねばならなかったが、その日、同現場で島嶺とともに同様の現象に遭遇して以来、ツクヨミドームから姿を消したデュナン・リトラスも、その消息が依然として掴めぬままだった。

いや……ヤツの所在に関しては。いつ何時でも、把握しようと思えば出来る所にあった。それが常に日神が瑠美那と心身を共有して

いる所以であった。もしかしたら——、彼女リリアンに繋がる糸もデユナン自身が既に掴んでいるかもしれない。

「だったら、金城瑠美那を今すぐ拘束して……いいえ、そうね。それは、瑞憐と諒牙君に任せていたんだったわ」

「そういうコト」

頼んだよイオリゲル候補生クン、こっちはこっちで忙しくなりそうなんでね。一説には、ガイア創生の源とも噂される白のメシア。やつこさんがどういう意図を持ってお出ましになるのかは、未だもって不明だがな。だが、さしもの島嶺自身も、その生き神、白のメシアの訪問が思わぬ火種を生むことになるうとは、全く予想だにしないことだった。

*

「おいヴァルナ、聞いたか!？」

ガイアの生き神、白のメシアがこのイザナギにやってくる。既にTVなどマスコミは、この話題で持ちきりだった。当然、彼ら海賊パルジャミヤの面々にも、その情報は風のように伝わっていた。

アグニ……ヴァルナは戦々恐々とする手下どもを他所に一人唇を噛んだ。頭不在の状態が既に数ヶ月、続いていた。ガイア軍に捕らえられたアグニがその後、どうなったのか、しかし肝心のそのことだけは容易に掴めなかった。何より彼ら自身が不用意に動けないというのもある。なぜなら頭領自体を人質に取られているようなものだからだ。それは、ガイア本国で海賊パルジャミヤの首領を捕らえたこと自体が、大々的に報道されていないことから窺い知れた。おそらくはアグニは秘密裏に——いや殺されているのではないこと

は、ヴァルナにも直感で解った。

あの人型兵器、どこかで……。それに、あの日あの海域全体を覆い尽くした謎の発光現象。生き残った手下の中には、龍のような咆哮を聞いたという者もいる。そういえば、あの女剣士。事の発端である彼女は、我々をナーガラージャの隠れる島へと導いたのだった。そのクロエも……。あのまま海へ吞まれて命を落としたのか、それとも戦闘の流れ弾に当たったのか、生きているのか死んでいるのかさえ判らない。

「白のメシアか……。何か臭うな」

ヴァシユラート——古来からの我々インディアナの王朝を滅ぼした張本人。本来ならば、そいつを狙わない手はないだろう。いや、アグニだったら既に。だが同時にそれは、ある種の罠である可能性も否めない。ヴァルナは迷った。この海域でこのまま息を潜めていくべきなのか、それとも。だがしかし、時は十分に熟しきつてもいた。

「……頭はもうヤツらに殺られてる！ その弔い合戦を仕掛けるなら今だ」

「そんなはずがない、我らの頭がそう簡単にやられてたまるもんかつ」

戦いの気配に鬼気とする者、変わらず頭領の無事を信じる者。その双方の意見がぶつかる。

……落ち着け、皆。事態を静観し、沈黙をもってアグニ自身の見えぬ意思を汲み取ろうとするヴァルナ自身も、内面では揺れ続いていた。

アグニ、お前は今どこにいる。生きているのか、それとも――。
ナーガラージャ、やはりお前は、その神の光に飲み込まれてしま
ったのか。

俺は王族ではないから、本当の所はよく分からない。だが、お前
自身の痛みも苦しみも、あの日以来、こうして変わらず共有してき
たつもりだ。本来なら今すぐにでも、お前を助けに行きたい……だ
が。

犬死にだけはするな。復讐なんて、ただの感情的な愚行でしかな
い。あの時、不意に口にした柄にもない言葉に絶句した。俺達の本
当の目的は復讐なんかじゃないはずだ、そうだろう、ヴァルナ。

その時、悟った。あいつは、アグニは、もっと大きなものを求め
ているんじゃないかと。まったく……知らなかったよ。いつの間に
そんなに大きくなっていったんだ。その瞬間の思いを胸にヴァルナは
笑った。ああ、そうだ。これは復讐なんかじゃない。

「……解った。明朝4時、夜明けを待つて、我々はこの海域より離
脱する！」

――正気か、ヴァルナ！？　いいや、よくぞ言った！　様々な手
下達の反応が直に返ってくる。しかし、そのどれもが、頭であるア
グニを案じてのものであることには変わりなかった。そんな彼らの
思いに今応えなくて、いつ応えられる。きっとアグニは待っている。
なぜかは分からないが、ヴァルナにはそう思えてならなかった。

*

「本当なんですか？……でも、そんな急な話、」

正直、真吾は酷く戸惑った。まさか、あの「白のメシア」が――。

「急でも何でも、二週間後までに、やつこさんを仕上げなきゃならないらしい。今、イザナギにいるのは我々だけだからな」

しかし、キリアンの言うことも、もつともだった。元より自分たちイオリゲルに与えられた使命は、この龍蛇の血潮を注がれた元パルジャミヤの首領アグニを、彼のマシンであるスーリヤ”アスラ”ともども、十二分に闘える状態に仕立てあげること。そしてその暁には、それをもってしてイザナギに潜伏中の龍蛇、龍神の討伐を実行すること――それそのものだった。

勿論、そんなに簡単にいくことだとは思っていない。実際、真吾自身も本当の所は乗り気ではなかった。しかし、事実、それが我々に命じられた使命なのだ。それが我々イオリゲル。その真吾自身の矛盾と、その胸中の葛藤はずっと人知れず続いていた。が、それを打破しなければならない切っ掛けが、ついにやってきたのだ。それは、何も真吾一人だけのものというわけではなかったのではあるが。

「……んもう、無駄に騒がしいわね。これだから寄せ集め集団はキライよ」

その声にふと振り返ると、相変わらず小柄だけれど尊大な態度の白衣を着た少女が、むっとした表情で辺りを見回し立ち尽くしていた。どうやら専用機で先程、到着したらしい。

「ベアトリーチェ！？」

しかし、突拍子もない声を上げる真吾に、さらに不機嫌な態度で、

「どうして呼び捨てなの！？　ベアトリーチェ様とお呼びなさいっ！」

相手が相手だけに、予想通り、そう食って掛かる。ぐ、ごめん……しかし、

「……これは、これはベ아트様。こんなむさ苦しい所へ、ようこそおいで下さいました」

一応、貴族のあしらい方は心得ているのか、やけに神妙になっ、
かしづくキリアン隊長。アナタは少しはものの言い方を心得ている
ようね？　そのもの静かな態度と凜とした雰囲気が入り、すぐ
にベアトは満足げに微笑んだ。……でも、ちよつと初対面でベアト
様つてのが気になるわね？　そう首を傾げるも、

「さ、こんな所で立ち話もなんでしょうから、どうぞこちらへ」

そう言うが早いかキリアンは恭しくベアトを貴賓室へと案内する。
一人廊下に残された真吾は、振り返ってウィンクして見せるキリア
ンに呆然とした表情を向けるも、ハツと我に返ると慌てて二人の後
に付いていくのだった。

*

「正直、今の状態だとキツイわね」

貴賓室で出されたお茶もそこそこに、一応は科学者らしく、ベア
トは目の前に用意されたデータ資料に目を通して渋い表情で呟いた。

確かにまだリハビリ段階にも進んでいない。ただゆっくりと助走
状態を続けているようなものだ。ただし一度は目覚めた龍蛇の血。

もう十分にエンジンは温まっているはず。それはアグニに対して言っているのか、それとも彼の深紅のマシンであるアスラに対して言っているのか。おそらくは、その無機質な言葉が、同様にそのどちらに對してもあることが真吾は哀しかった。

「だが、我々はすぐにでも臨戦態勢に入らなければならない。それだけは事実です」

先程の半分は冗談めいたやり取りとは打って変わって、キリアンは厳しい顔をして告げた。それは軍人の、いや己に課せられた使命に忠実に挑む者の真剣な眼差しだった。そして、その目は目の前の相手が、同様に職務にだけは実直さを見せる正直者であることを知っていた。

「……………」

厳しい顔つきで黙り込むベアトリチェ。確かに、これはただの護衛ではない。何しろ相手は「白のメシア」なのだ。本来ならば極秘にされなければならない程の、そのイザナギ訪問を、こういとも大々的に宣伝されちゃね。龍神は今も、ここイザナギ国内に潜伏中。首相自身は何も見えてはいないと言っているけど、聞けば、昨夜何者かが首相官邸に忍び込んだというじゃない。しかも、あの手口、どこかで……。

ベアトはツクヨミドームでの一件を思い出していた。

「——でも、無理は……無理はしない方がいいんじゃないかと思えます」

思わず口を突いて出た言葉。曹長として隊長と、今回そのイオリ

ゲル隊のサポーター兼、お目付け役として訪問したベアトに付き添いながら、しかし今の発言は、やはり不味かったかもしれない。

「はぁ？ あんた、それでもイオリゲル！？ 今回の任務を何だと思ってるのよ！」

「い、いや、決してそういうわけじゃ……」

案の定、そう食って掛かるベアトと真吾のやり取りを、だがキリアンは真剣な表情で見つめていた。

「龍神も白のメシアも、国家としてのガイアの重要な案件よ。確かに現状としては甚だ厳しいものがあるけど」

その言葉の意味するところの重大さを噛み締めながら、それでも真吾は言った。

「——それでも、自分は彼を徒に危険に晒してはならないと思います」

彼は、まだ目覚めたばかりの龍蛇化した人間。例え元テロリストだからと言って、その人権的なものが無視されるというのも酷い話ではあるけど……無論、これは自身の胸中だけに留めておこうと思ったが、我々同様の能力を元々持っている彼女には無駄だったかもしれない。しかし、

「博士、確かに睦月の言う事にも一理あるでしょう。力の暴走は、かえって面倒なことを引き起こしかねない」

静かに口を開いたキリアンに真吾は救われた。

「……確かに不安定な状態であることは否めないわね。それでも一応あたしたちは、あんたたちイオリゲルを信頼してるんだから、」

あ、これは違っ！不意に零れ出てしまった本音に、すぐにベアトは顔を真っ赤にして前言撤回。……そ、そうじゃなくって。アンタたちイオリゲルの能力は、ずっと前から買ってるってこと、誤解しないでよね！　そう強く吐露されるも、真吾とキリアンは表情を崩して静かに微笑んだ。

「と、とにかく……、」

明後日の警備任務に向けて、これからすぐに再調整を始めるわよ。あんたたちは、そのためのイオリゲルなんだから、きちんと能力発揮して仕事なさい！　勿論、それはベアトに言われるまでもないことだった。

＊

……力が、次第に漲^{みなぎ}っていく。

これは以前自分だった人間には、絶対に望めなかったこと。そうだが、俺はナーガと一体化したのだ。この力の源がどこから来るのか、それを感じ取るだけで、すぐにそうと解る。だが、それと引き換えに俺は俺自身を失った。……本当にこれでよかったのか？　だが、遠くから誰かがそう問いかける。ああ、後悔などするものか。例えば俺自身が塵となり消え去るうとも、別の何かに変わってしまったとしても。この力を手に入れた、そのことだけで全てが報われる――。

ああ……これはなんだ。このあたたかい光は。全身は既に硬く冷たい鎧のような鱗で覆われているというのに。死んでいるのか、生きているのかさえも、わからない。それは、大いなる宇宙。無。生まれる前の仄暗い闇に抱かれるような、そう。ここは羊水に包まれ

た母胎そのものだった。まるで血の色をした海のような緋い光に抱かれ。俺は、もうじき目覚める。誰かが……誰かが呼んでる。

「脳波、心拍数ともに正常——これよりシンクロナイズを開始します」

＊

実際、僕自身に何かができるなんて思っていない。そういうおこがましさは、このイオリゲルに入ってから僕自身の中から消えることはなかった。それでも——今は自分ができる限りのことをするしかない。真吾は強く思った。それが何より彼女、瑠美那さんを救うことに繋がるような気がした。もしかしたらそれこそが、僕自身が怖れている、際限なく続く根拠のない自信、そんなものに形容されるのかもしれないけれど……でも、それでも。

しかし、それとこれとは多分、別だ。？彼？をこれ以上、不幸な現実を引き込んでほならない。それがたとえガイア上層部の命令に背くことになっても。ああ、結局同じだ。龍蛇の巫女と呼ばれる瑠美那さん。そして、その龍蛇の血潮を注がれ、その化身と化してしまった哀れな？彼？。どうして……どうして、なんだ。そんな不幸な彼らを利用するように、なぜ僕たちは命じられなければならない。

どちらにしても今、僕自身にできることは。？彼？をこれ以上、哀しい暴走に導いてはならない。そう、あの時の龍神のような……、もう、僕は瑠美那さんを悲しませない。

そして、なぜだか真吾には、そのアグニと心なしか同調できる何かがある気がした。やはり、あの緋い機あか体。あれが僕らのD-2とあまりにも似通っていた事実と、この感覚が奇しくも符合するよう

な。だとしたら――。アグニ、僕たちはやっぱりお互いの心と心で感じ合うことができるかもしれない。それは多分、ガイアが望んでいるようなこととは違う。そして、瑠美那さん。

「まだ完全というわけじゃないだろうけど……いいんじゃない？
これは、いけるかもしれないわ」

強化ガラス越しに見えるアステリウス内の実験槽の中で、今まさにアグニが搭乗したアスラと真吾の乗るD-2エンリルが各種プラグで繋がれ、事実上のシンクロ実験が行われていた。その様子を各インジケーター類と交互に見つめながら、ベアトが呟いた。やはり徒に同様のシステムを有している機体ではないということか。その言葉を聞きながらキリアンは思った。

どちらにせよ、やはり人選に間違いはなかったということだ。おそらく真吾はアグニとも。彼はかつて龍蛇の巫女、金城瑠美那の心を開いた。それはイオリゲルの力が成せる技であったのか、それとも。そして今回も同様に、龍蛇の化身となったアグニ・ヴァシユラートと少なからずの親和性を見せた。それはマシンを起動させる上での脳波波形やエネルギー変換率などの実質上のシンクロ率以上に、もっと根本的な何かで彼ら双方が繋がることのできる可能性を指示しているようだった。

その時、異変が起こった。

『グオアアオオオ――！！』

突然アグニが眸を大きく見開き、声にならない叫び声をあげたと思うと、傍らに接続されたプラグを激しく引きちぎった。

「うつ！」

その衝撃は隣接する真吾の機体にも直接伝わる。飛び散ったプラズマの放電が周囲を青白く照らし出し、実験ブース内は一時騒然となった。

「電源カット！　すぐに接続を切りなさい！」

ベアトの切迫した声が響き渡る。しかし、すぐにはその放電はやまず、真吾とアグニの機体を包み込んだ。今時点では有線での実験となるが、本格的なシンクロ状態では、アグニと真吾の機体はそのままの状態で意識や肉体の感覚ごと瞬時に互いが結合される。つまりどちらかが感じる痛みはそのまま、相対する側へと直接伝わるのだ。

今、アグニは自らの掌が掴んだプラグが放つプラズマの衝撃に身体ごと襲われていた。しかも一向にそれを離す気配がない。まるでアグニ自身の腕がプラズマ放電の電導体となってしまっているかのよう、に、襲われるその衝撃に激しく身を打ち震わせた。

「くっ……う！」

真吾は全身を貫くその痛みに耐えながら、傍らのアグニを見た。やはり彼も同様にこの激痛に苦しんでいる。大丈夫だ、アグニ——落ち着いて！　その声が聞こえたのか、アグニは掴んでいた傍らのプラグを離れた。次の瞬間、全電源がカットされ、僅かな飛沫を残してプラズマの放電はやんだ。

——シューウウウ……。

黒々とした灰色の煙と白い蒸気が上がる実験槽内。まるで時間が停まったかのように、全てが停止していた。

『大丈夫だ、もう大丈夫』

真吾の心の声がアグニの耳に届いた。次の瞬間、そのまま眠りに落ちるように、アグニは静かに目を閉じた。

*

「一時はどうなることかと思ったが——アイツ。結構、素直な所もあるんじゃないのか？」

キリアンにそう励まされ、真吾は思わず微笑して頷いた。確かにアグニは以前のような剥き出しの敵意を真吾に向かって顕にすることがなくなった。この分ならおそらく、我々と問題なくやっていけそうだ。

「それを調教するっていうのよ」

そんな穏やかな空気を不意にベアトの冷やかな言葉が切り裂いた。ま、そういうことになる、か……。その言葉にキリアンは観念したかのように呟く。そんな——、けれどそれは文字通りの事実だった。今僕たちがやっているのは、彼アグニを自分たちの思い通りに動かすための、そのための事実上の実験訓練だった。これまでは彼らを容易に近づけさせないほどの激しいアグニ自身の拒否反応から、それを行うことを引き延ばす他なかったのだが。

しかし事態が事態だけに、そうも言っていられなくなった。そして、真吾はアグニの精神に直接接触を試みた。それ自体は、どうや

ら上手くいったようだった。そんな過程を経て、ようやく実際のマシンの起動シンクロ実験にまで漕ぎ付けたのだが。

「それは違います……僕は彼に、アグニに何かを強要したわけじゃない」

「――何が違うっていうのよ？ 実際、彼は今こうして素直に私たちの意図に従ってるけど、それは彼自身を騙した結果にすぎないじゃない」

騙した？ そのベアトの指摘に、またしても真吾は言葉を失う。

「いい？ 睦月真吾、あなたはいい加減、自分たちの置かれている状況を把握した方がいいわ」

一見冷たく感じられるベアトリーチェのその言葉には真実が宿っていた。これから僕たちは彼を使って何をする？ さしあたって下っている命令は、白のメシアの護衛だろうが、結局僕らは彼を自身自身の生みの親かもしれない、龍神討伐のための先遣隊の矛先として利用するために、文字通り彼を手なずけようとしている。そうだ、どんなに取り繕ったって、その事実是不変ならない。僕たちはイオリゲル。そして、アグニは……。

「睦月……」

蒼白な表情で拳を握り、黙り込む真吾にキリアンでさえ、かける言葉を持たなかった。

「ね、瑠美那さん、これから僕たちだけで食事に行かない？」

「なあに、それ——もしかして、デートのお誘い？」

冗談めかして無邪気に笑う彼女と僕は一緒に歩いていた。物理理論の講習の帰り道だった。彼女はそのまま合宿寮の女子棟へ。僕自身も同じく寮へ戻って、このあと食事するだけだった。

「実は……美味しそうなビュッフェレストランを見つけたんだ」

僕らエリートアカデミー科の学生は夏季合宿中は指定の食堂で食事を摂ることになっていたが、基本的には、どこで食事してもよいことになっていた。その辺は夏休み中に親元に帰れないだけあって、結構自由だと思う。

「うわあ！　もしかして食べ放題？　諒牙くん、ナイスチョイス！」

手を叩いて、あからさまに喜ぶ彼女を見て、ちょっと苦笑い。でも、そんな素直なトコもよかったりするんだよね。兄さん、ごめんね。僕またちょっと一人だけ抜けがけしてるかな？　それでも、瑠美那さんの笑顔を見れるだけで単純に嬉しい。だけど……。

「本当のことを言うと、実はね……」

思い切りイタリアンの料理を盛り付けた皿を前にフォークを手にして嬉々としている、その笑顔に徐に語りかける。

「なあに、諒牙君？」

けれど、ほとんど食事に夢中で彼女がうわの空であることに少しだけ安心しながら、話を続けた。

「……こっちの授業に付いて行くのは確かに大変かもしれないけど、それでも僕は瑠美那さんが来てくれて本当に嬉しいんだ」

「何、諒牙君ったら、いきなり改まっちゃって」

無邪気に笑いかけながら、あたし自身も、それを言ったらあたしの方こそ——、と思っていた。だって諒牙君がいなかったら、ホント今頃どうしてたか。まだ夏休み中とはいえ、今の時点で、もうアカデミー科の授業は始まってるようなものだもの。ほんと早く付いてかなくちゃ……。

でも、それはやっぱり本来のあたし自身とはあまり関係のないことだったのだろうか。龍蛇の巫女としての、あたし自身の現実とはそんなあたし自身の気持ちを知ってかしらずか、あたしを見て諒牙君は軽く微笑んだ。

「よかった、気に入ってくれた、ここ？」

「うん、正直言つと寮の食事、そろそろ飽きてきたトコだったのよ」

そうだよな、こんなのは建前のあたしの日常にすぎないんだって、きつと諒牙君なら……全部お見通しだよな？ そう思いながら、彼の顔を見る。屈託なく笑うその笑顔に、また笑い返す。

「実はね、最近一緒だった友達が急に皆、家に帰っちゃって」

「あーそれで諒牙君、寂しかったんだ？」

まあ……そんなとこかな？ 微笑む彼の横顔が突然翳って見える。そうか、そうだよな。あたしはデュナンの中にいた。だから、リリ

アンが急にいなくなったのも、そして突然デユナン自身が消えた事実だって知ってる。いいえ、むしろ彼は私自身でもあったんだから。

彼はあたしが龍蛇の巫女であることは知ってるけど、でも、そこまではまだ話してない。だって、何だか話せないよ。もしかしたら、彼だったらもう全部知ってるかもしれないけど……。

「今になって急にね、突然ひとりぼっちになっちゃった気がして」

リリアンも、ヴェルトーチェカも、そしてデユナンも——、いつも皆一緒だった。それが急にどうしたんだろうな。本当のことを言えば、デユナミスの能力^{ちから}を持つてる僕自身が彼らの行方を捜せないことを何より不可解に感じているし、そのことが一番悔しいんだ。瑠美那さんに、それは今は言わないでいようとは思うけど。

「その中でも同じ部屋でもあったデユナンは一風変わっていてね、」
その一言に思わず、あたしはドキンとする。すっごく変とか、まさか言い出さないでしようね？

「素っ気ないんだけど、結構あれで優しい所もあって、確かに時々ちよっと面白いなってると思うことはあったけど」

そういえば、ここの所ルミナスは口を出そうとしない、というかあたしの意識にのぼって来ない。やっぱりそのデユナンとして力を使うのが忙しいからなのかな？　そう言うあたし自身、瑠美那として覚醒していない時は同時にデユナンでもあるっていうのに、最近ルミナスの力の方が強くて。

そう思いながら、あたしは妙な違和感を感じていた。睦月諒牙君彼といて、ちっとも嫌な感じはしない。それなのに。時々すごく不

安になるの。ルミナス、貴方が傍にいないことに……。

「ね、瑠美那さん？」

「ん、ナニ？」

と、気付いて、途中から彼の話を聞いていなかったことに気付く。だから、そのデュナンがね、リリアン先輩とデートすることになった。ああ、そうね。慌てて彼の話に頷く。まあデートって言つのも、ちよつと違つかもしれないけど。とにかく、そのあと二人とも突然、僕たちに内緒で、それぞれの自宅へ戻ってしまったっていうんだ。

「本当なのかな、それって……」

ふと真剣な表情になって話す彼を見つめる。勿論、僕としては二人を疑うわけではないけど、何しろ急なことで驚くだろ。僕たち学生や先生たちにも何の連絡もなく、本当にどうしたんだろって。もしかしたら、あの二人は。

「え——っ？」

やっぱり諒牙君は気付いてるんだろうか。あたしがデュナンだったこと。そう考えてすぐ、

「まさか、駆け落ちってことはないよね？」

あはは、と照れ隠しに笑い、おもむろに気付いたように時計を見て彼は言った。

「そろそろ寮に戻った方がいいよね」

*

——ねえ諒牙君の力で、その二人のことを捜せないの？

瑠美那さんは、話の途中で結局そう僕に尋ねては来なかった。それについて安堵するも、実はそのこと自体が心に妙に引っ掛かってもいた。ものすごく複雑だ——二人とも内心では、実はそう思っていたのだが。互いが互いであるだけに、もしかしたらそんな心の内まで見透かされているような……。

龍蛇の巫女とイオリゲル候補生。本当は、僕たちだって兄さんと同じように、本当の意味で解り合うことはできないのかもしれない。龍蛇の力を持つ巫女には、出来ないことはない。そのくらいの情報はイオリゲルの内部から僕の思考の中へ入ってくる。それは、むしろ僕自身が読み取ろうとしてるんだ。勿論、兄さんの手前、あまり派手なことはしようとは思わないけどね。

ああ、それにしても、本当に……なんて厄介な能力ちからなんだろうね、兄さん。

そう思うと、もう絶対に彼女は自分の手に入らないような気がしてしまう。そう苛立ちながら、ふと、そんなことを当たり前のように考えている自分自身に愕然とした。

本当なら僕はこんな力、金輪際、封印してしまいたい。将来イオリゲルになりたい？ 冗談じゃない。兄さんと僕は、いつだって自分自身の力に翻弄されてきた。そんな自分の姿が嫌でも分かっつまうから、普段から必要以上に使わないようにしてるだけなんだ。

「ね、瑠美那さん——、」

ん？ ふと振り向くと、俯き気味で表情のよく分からない諒牙君

の右手が、いつの間にかあたしの左手を握っていた。帰り道、お互いの合宿寮は、もう目と鼻の先だ。

次の瞬間、あたしは突然握ったその手を引つ張られ、コンクリートの壁際に押さえ込まれた。きゃっ！　そう叫んだのも、つかの間。

「……ねえ瑠美那さん、君は本当はデュナンのこと何か知ってるんじゃない？」

口元を掌で塞がれて声が出せない。誰もいない夜道、坂道の脇のコンクリート塀の片隅。その薄暗がり。……助けて、ルミナス！　あたしは思わずその名を胸の内て叫んでいた。

「実はね、僕は何度も君のことを探ろうとした。けれどこれまでいっただって成功したためしがないんだ……不思議だね、実を言うと、それはデュナンも一緒だった。もしかしたらデュナンは君と同じ龍蛇の、」

そこまで言うと、突然彼は押し黙った。つかのまの恐怖に支配されながら、あたしは前髪に隠れたその眸から頬へと、一筋の涙が伝うのを見た。

「諒牙、くん……？」

僕はいつのまにか、兄さんを憎んでしまっていた。それは多分、瑠美那さん、君に出会ってからだ。兄さんの心を通して君に出会ってから。それまで僕たちは、いつも同じだった。同じ力を持つ同志。そんな言い方をしてもいいかもしれない。双子だから、そしてデュナミスの力を持っているから。それ以上に僕たち兄弟は解り合えていると思っていたのに。

「兄さんは、近いうちに……、」
「え？」

その言葉尻を確かめるか確かめないかという刹那、突然あたしは唇を奪われていた。……諒牙君、はなして！ それでも彼に強く両腕を掴まれたまま動けない。涙の味がしたそのキスは、彼の兄への強い思いが滲んでいた。そう、睦月真吾。たった一人の、彼の兄さん。

「ごめん——、瑠美那さん……」

そう呟きながら、あたしは膠着したままの姿勢で諒牙君に抱きしめられていた。君がどんな人でもかまわない。僕は……僕は。その言葉の裏で、やっぱり彼はお兄さんの真吾のことを——、どうしたらいいのか解らないまま、あたしは身体を硬くしたまま、じっとその彼の抱擁に身を任せていた。

「ん……、」

そして再び、くちづけ。んう……やつ、諒、牙っくん、やめ……、いつしかあたしは抵抗をやめていた。彼、諒牙君の思いと、そして真吾の思い。どっちも同じくらい真剣なんだって気付いた、だから涙……、また彼の涙の味がする。そんなに、そんなに苦しんでいたんだ、諒牙君も、そしてお兄さんの真吾も、きつと。

「好きだよ——、瑠美、那」

そう耳元で囁くその声。切なくて苦しい、二人の兄弟の思いがそのまま伝わってくる。イオリゲルとかデュナミスとか、もうどうだ

つていいと思えるくらい、強く。あたしはこの二人の気持ちに、どう応えたらいい？　ねえルミナス、あたしはどうしたらいいの。お願い——答えて、ルミナス。

*

「——そんなことをなぜ俺に訊く？」

「似てねー……桐子サンったら、ダメダメだな」

無理やり渋みを効かせた低い声に、携帯を手にした未玲が思わずダメだしを入れる。つーか、このヒロイン、フラグ立ちまくり。この先どうすんのさっていうくらい。色々泥沼すぎて既に昼メロも真っ青な展開だつてえの。——以前だったら、そんな他愛ないオタ話で幾らでも盛り上がったのだが。だが今は状況的にも、さすがにそれどころじゃなさそうだ。

「……それよか未玲ちゃん、アンタ、今何やってんのさ？」

おもむろに切り出した携帯電波の向こうの桐子に、未玲はこれみよがしに端末に口元を寄せ、小声で叫んだ。

「ロケハン！……らしいんだけどね、要するに」

とりあえず名古屋に到着。こちらで足りないトレーニングの装備を調達するために、先ほど相澤は一人ホテルの部屋を出て行ったばかりだ。つまり一泊。未玲同行ということで思わぬ御荷物が追加されてしまったため、相澤の当初の予定はすっかり変更されてしまった。実質、出発するのは翌朝ということで、それまで、とりあえずの今後の旅程を資金繰りともども計画し直すことになったのだ。

「ええ、じゃルミナスの制作どうなってんの？」

「そりゃこつちが訊きたい」

そうだ、それをみっちり相澤副監督にこれから伺おうかと思った
ら、アイツめ、到着早々そそくさと出ていきやがりました……った
く、どうあっても真意を明かさないつもりってか？ どつちにしろ、
あたしは付いていく。ナミたちの行方とあいつらの目的を掴むまで
は、死んでも離さないんだからね！

そう思いつつ酔い覚ましのコーヒーを飲み干した。

「ねえ桐子、ちょっと訊きたいんだけどさ」

『何よ？』

おもむろに未玲は尋ねた。

「ルミナスのさ——、その瑠美那役の水澤ひとみなんだけど……ち
よつと前からおかしいとか思わなかった？」

『水澤ひとみい？』

あれでも結構、桐子は声優関係には詳しい方だった。それは男女
問わず、大方の人気声優の話なら察しが付く。んーそうだわねえ、
確かに色々噂は流れてたみたいだけど。あーその失踪以前の話だつ
て！ ルミナスの一期やつてた頃の……。未玲にそう言われて桐子
は電話口で、ふと考え込んだ。

『別にこれといって何も——、うーん、強いて言えば一期のラスト
直前とか瑠美那って異様にテンション高かったよなあとか……それ
くらいしか覚えてないなア』

そっか、あながと。さすがに視聴者ファン側である桐子に、何か
特別に変に感じるような部分はないか。それでも桐子の口にした、

異様に高かったテンション、というその言葉。それは確かに未玲自身の記憶にも、くつきりと深く刻まれていた。当時は作品自体の盛り上がりの中で感じていたそれが、急にここへ来て別の意味を持つてくるような気がしないでもなかった。

あの日、御払い時に例の神社で篠崎とともにいた水澤ひとみの様子は、明らかにどこかおかしかった。何というか、どことなく目が据わっている感じ。それにあの第一話のアフレコの時だって……。大体なんでその場に、いつもナミがいるんだ。そして今回も御多分に漏れず、その水澤や篠崎とともに、ナミは行動を共にしている。相澤からようやく聞き出した、その話が事実なら――。

なぜナミはルミナスの主演声優二人と一緒に唐突に旅に出ることになったんだろう。確かに次回のアフレコは一週間後だから何の問題もないとはいえ。それにしても熊野、熊野ねえ――そういえばルミナスの本名って。そこまで考えた所で、部屋の扉の閉まる音に未玲は我に返った。どうやら相澤が帰ってきたようだ。

「あつれ、神代さん、起きてたんだ」
あつたりきよー、いつまでも、このあたしが惰眠を貪っているとも思うのかい。そう内心で悪態をつきながら、未玲は相澤を睨んだ。

「ところでさ、どうしてあたしたち同室なのよ？」
「しかたないだろ、懐具合が心もとないんだから――、」

そう釈明し始めた相澤に、その原因を作っているのが何を隠そう自分自身であるという自覚は未玲には全くなかった。んじゃ、まず部屋割り。そう言つと、未玲はカーテンを引いた大部分の部屋の一角を占拠して不適に笑う。

「こつからこつちまで入ってこないでね、絶対！ 襲ったらクロス！」

……ま、当然の反応だろう。相澤は口元をひくつかせながら頷いた。

*

密やかな静寂が、朝陽の零れる木立の間に満ちていた。

水と杜の聖地……伊勢神宮内宮、その社の目前は、もしかしたら本当の杜の奥地への入り口だったのかもしれない。簡素な宮の前で純白の絹の御帳がふわりと風に揺れる。清々しい檜の香が、意識の奥のどこかを知らず知らずに覚醒させていく。

神は確かにここにいて、けれどどこにもいない。限りなく無である神。そしてだからこそ、そこそこにある、その存在。その〇（ゼロ）次元の真実に、ふと眩暈がする。決して何も語らず、けれど同時に数多の声が鼓膜を劈く。

篠崎さんと二人、あたしはつかの間の不思議な瞑想のあと、はつと辺りを見回した。そこにはもう、内宮の宮は跡形もなかった。代わりに目に入ったのは、やはり鬱蒼とした木々の間に立つ大きな檜の鳥居。

「ここは……瀧原宮だ」

そこは神宮の別宮の一つ、宮川の支流である大内山川沿いに佇む瀧原宮だった。伊勢神宮より、さらに山奥に分け入った場所にそれはあった。内宮から西へ約三十キロ。静寂に包まれた神域——それ

は何ら、皇大神宮と変わらない。しかし……。

呆然と呟く篠原さん。あたし自身も、何が起こったのか分からないまま、同様に一人立ち尽くしていた。

瀧原宮は、いわば伊勢神宮内宮のミニチュアのようなものだった。しかし数ある宮社のうちで最も遠い場所にある、そんな所へ、どうしてあたしたちは瞬時に移動してしまったのだろう。さっきまで確かに、内宮の社の石段を昇って御正宮ごしょうぐうの前に立っていたと思っていたのに。

それに、水澤さんは……！ あたしは思い出したように身を弾かれ、けれどそこにはもう彼女の姿はないのだということに瞬時に悟った。

「これは、一体」

狐につままれたような表情で呆氣に取られたまま、篠崎さんはまだ現状を把握できないでいるようだった。それは勿論、あたしだって。けれど、あたしたち二人は、何かの力によって一瞬の後に別の場所に瞬間移動してしまった。それが証拠に、時計の針は内宮に到着してから僅か二十五分後の七時三十六分を差していた。

「篠崎さん……、」

ああ——と頷いて、ようやく彼は我に返ったように歩を進めた。あたしもそんな篠崎さんに付いていく。褪色した色合いの木肌を晒す鳥居。神宮の「遙宮たののみや」とも呼ばれるそこは、内宮ほどの規模や格式の高さほどのものはないにしろ、それ以上にもっと原初的な祀りの場であると感じられる何かが、そこここに漂っていた。

伊勢神宮を興した第一一代すいにんてんのう垂仁天皇の皇女倭姫命やまとひめのみことが天照坐皇大御神（天照大神）を祀る地を探すために各地を訪れた際、「瀧原の国」という美しい場所を見つけ、そこに新宮を建てたという。

それがこの瀧原宮なのだ。いわば神宮の故郷とでも言うべきだろうか。「瀧原」というのは、この瀧原宮のある大紀町滝原の地名であり、大小の滝を表してもいる。実際、伊勢神宮のある三重県東部を流れる宮川は数々の支流から連なり、それに注ぐ滝が山間を縫うように数多く存在している。

それは五十鈴川同様、大自然の大いなるサイクルによってもたらされる水の恵み。倭姫が美しいと見たままに形容したその国は、まさに瑞々しい樹々と水の密やかな隠れ郷だったのだ。それはこの瀧原宮の、社自体は質素ながら、それを包み込み、ただならぬ鬱蒼とした気配を醸し出す、杜の木立が無言のうちに語っていた。

老齢の大杉が茂る参道。その参道と平行して流れる谷川の川面。この森に抱かれたすべてが、今生き生きと朝陽に光り輝いていた。神はむしろここに建てられた社のみならず、この杜全体にいるのかもしれない。そこここにおいて、常にあたしたちを見守り続けている。それは多分、この一滴の水にだって。

そう考えながら御手洗場の清水を掌にすくう。篠崎さんは携帯で水澤さんに連絡を取ってみる、と言って河原を出て行ったけど、何となくあたしは繋がらない気がした。そして案の定、篠崎さんは頭かぶりを左右に振る。

今起こっていることがどういふことなのかはともかく、ひとみが心配だ。そう呟く篠崎さんに頷く。すると、唐突に彼の手にしてい

る携帯の着信音が鳴った。

はい……、恐る恐る出ると、電波の向こうで見知らぬ男の声がした。

『——彼女のことなら心配要らないよ、僕がしっかり保護しているから』

唐突のことに篠崎さんが面食らっていると、男はさらに言った。

——それより君たちは、そのまま熊野へ向かいなさい。

たった今切られた携帯画面には「n a y u t a」と記された記号のようなローマ字が表示されていた。不思議な思いに襲われたまま言葉を失う篠崎さん。

けれど今はとにかく進むしかない気がした。けれど一体何に、どこへ？ 考えてみれば、その本当の理由も解らないまま、あたしたちはこうして……。でも、ここに来てはつきり解った気がした。天照大神の坐す神宮の杜。そして——いつしか我知らず、もつと先へと進まなければならぬ気がした。どうして。

篠崎さんもあたしも、その本当の答えがわかっていた。互いの目を見ただけで、そのことが解る。もしかしたらそれは、何かの言葉に出来るようなことじゃなく、目に見える目的という目的的なのではなく。何だか変……、本当にあたしたち、どこへ行こうとしてるのかな。

「ひとみのことなら心配いらぬみたいだ——、」

けれど、あからさまに篠崎さんの眸には不安げな色が映る。きつ

と水澤さんは、もうこのルミナスの、瑠美那の役割を終えたのかも
しれない。だから、あの時、神様の御前で壊れてしまったのが最後。
壊れた？ 違う、その魂はもっとずっと安らかな場所へ戻っていつ
たのに違いない。

なぜだかそう思えて、大丈夫、と篠崎さんに伝えたくて……、あ
たしは思わず彼の手を取っていた。あたたかい体温。その奇跡に目
覚めた指先が、何だかたった一つの約束を探しているような気がし
た。

「何だか不思議だね……いや、不思議なことは君と出会ってから、
もう何度も始まっていたけど」

傍らでそう囁く篠崎さんを見つめながら、不思議に穏やかな心地
に包まれていく。大丈夫、大丈夫だから、未玲。いつしかあたしは、
差し込む朝陽に向かって微笑む力を持った自分自身を感じていた。

いちど壊れてしまった方が　せいせいするのは
てない願いは　どこへも羽ばたかず
ささやかな日常が　今日も張りつめてゆくだけ

守ってあげるよ　キミがキミである証
おねがい　もう明日をあきらめないで
永遠なんて　どこにもないから
僕たちのカケラは　いつしか旅だつ

—— その歌声が哀しいほどの抑揚のなさを保ったまま、耳元で延々語りかける。

水澤ひとみのアルバムの中の一曲。彼女の曲としては、あまりにも地味でファンの間でもおそらく話題にも上らないであろう、その一曲を、彼は飽きもせず携帯端末で聴き続けていた。

作詞は彼女自身によるものだったが、あまりに彼女自身とのイメージとのギャップのせいで、かえって暗黙のうちに語ることすら憚られてきたのかもしれない。そう、特別顧みられる機会を持たない、そんな不遇の一曲。……水澤ひとみは、しかし、この詞をどのような気持ちで紡いでいたのだろう。

過去に作曲者でもあった彼自身にも、おそらくその詳細は分からなかった。彼女自身、この曲について何も語ることはなかったし、たぶん金輪際、語られることはないだろう。

それでも彼は、その曲をじつと聴き続けていた。

「……今の君だったら、何か話したいことがあるのかな」

ふつと微笑むと、男は傍らの席で蹲る年若い娘の肩にそつと手を廻した。水澤ひとみ、かつてそう呼ばれていた彼女の抜け殻。おそらく誰にも打ち明けることのなかった、そんな切なる思い。絶望的な孤独、それを持つことは彼女には許されなかった。そんなものは絶対に無縁な場所に彼女はいたはずだから。――眩い光の中の囚われの姫君。

伊勢から南紀へと向かう特急列車。僕が連れて行ってあげるよ、そつとさりげなく包む込むその温もりとは裏腹な眼差しが、じつと前方の車窓に踊る陽光を見つめていた。

*

そこは闇。決して朝の光の届かぬ静寂^{しじま}。ただ水を張ったような静けさが辺りを支配していた。目が醒めているのか、それともまだ夢の中で微睡^{まいしろ}んでいるのか、それさえも分からない。それでも少女は辺りに目を凝らした。何も見えない。もしかしたら自分は視力を失ってしまったのだろうか？ そんな不安まで胸に過^{よぎ}り、瞬間身を震わせる。

わたしは……けれども一切の記憶が脳裏から抜け落ちていた。周囲の暗闇と、それはまるで同調するかのようには彼女の心を圧した。が、ふつと頬に触れる指先の感覚が突然彼女を襲い、びくんと身を硬くする。

「……驚かせてしまったようだね、すまない」

そう声を掛けられ、改めて振り向くと、そこにはいつの間にか眩い光が満ちていた。

その光の中で、白銀の髪と白い肌をした少年が一人佇んでいた。

年の頃は自分と同じくらいだろうか。じっと見つめる穏やかなその銀色の眸に吸い込まれそうになる。少年は何も言わず、少女の頬に当てた掌をそつと滑らせ、その指が顎の先を掬うように包み込んだ。

「——君の名は？」

穏やかな、けれどどこことなく張り詰めたようなその硬質な声色に、為す術もなく頭を振る。おそらくは、それほどまでに突然奪われた心、そしてその身を襲った衝撃だったのだろう。それでも少年は、どこか愛しむように少女の髪に触れた。亜麻色の長い髪がふんわりと流れる。その華奢な身体は、先ほどから身の置き所がないというように小刻みに震えていた。

畏れ……白銀の光に包まれた少年に触れたまま、少女が感じていたのは、未知なるものへの畏怖に他ならなかった。ただ口も利けず、そこに蹲るしか術を持たず。だが少年が欲しいと思っていたものを、少女は持っていた。——それは、本当に生きているものの体温と輝き。

これが、いのち生命。

「……私と一緒ともにいてくれないか——？」

それは哀願……、いや、むしろ命じられたといった方が正しい。それほどまでに、その姿は高貴なもののように思えた。それなのに少女の瞳に映る少年の眸は、どことなく哀しそうに見えた。

*

いまや混沌に包まれた世界中を席卷している大陸国家ガイア。その中枢を司り、実質的に人々の心を掌握している「白のメシア」――その生き神と称された存在が、ここイザナギを訪れる。このニュースは各メディアを通じて大々的に報じられた。数年に一度しか人々の前に姿を現さない。その謎の存在は人々の好奇心を掻き立てるのに十分だった。噂では代々選ばれた者が入れ替わり立ち替わり、その少年の姿のままで何十年という月日、国家を統べる象徴として守られているのだという説もあつたが、その詳細は明らかでない。

『実際の来訪日は未だ明かされておりませんが、スポークスマンを務める国枝外相によると、ガイアが聖蕎祭への準備に入る二週間後までに、その可能性が大きいとのことす――、この件について御統総理は、』

TV画面に映るキャスターが、どこか慌ただしくそのニュースを伝える。

アマテラスドームを訪れた島嶺は相棒である表向きはガイアの秘密工作員でもある草薙瑞穂を前に唸った。

「……未だリリアンの消息は不明。俺たちと一緒にいたデユナンが何処へ雲隠れしたのかつても無論、同様に一切不明だが」

本当は瑠美那ちゃんに直接訊くのが一番手っ取り早いんだが――、それでも今、彼女に直接そのことを尋ねられるわけがなかった。第

—そんなことしたら、すべてがパアだ。龍神は常に瑠美那とともにいる。だからこそ、それとなく近づいて……、

瑞穂の妹、草薙瑞悸はアマテラス校エリートアカデミー科に務めると同時に、姉同様ガイア直属の秘密構成員でもあった。その瑞悸はアカデミー科に移った金城瑠美那の動向を監視することを義務付けられていた。……要するに、その情報の横流しなのだが。

「瑞悸からの報告だと彼女は今、睦月諒牙の監視の元、至極当たり前に合宿寮で過ごしているようだけど、」

しかし、それは単なるダミーだと言えなくもなかった。第一デュナン、龍神の動きが全く見えないことの方が、かえって不気味だ。それでも、だからこそ金城瑠美那の動向を注意深く監視することが必要だったのだが。喫茶室のTVからは相変わらず白のメシア来訪に関するニュース番組が流され続けていた。

「……確かに睦月諒牙の千里眼を持っても、あいつの中のヤツを見定めることは困難だろうがな」

肝心の兄の方が属しているイオリゲル正規隊員的能力を使っても、透視することができないという龍蛇の巫女。自分の姪がそんな得体の知れないものに憑かれてしまったという事実には、さすがにもう動揺することさえないが、それでも。

「案外、例の光は龍神絡み、いやそうでないという可能性の方が圧倒的に低い……」だとしたら。

リリアンも、あいつの冒した世界のただ中へ——？

だが、さしもの島嶺たちにも、今イザナギ中の話題を独占してい

る「白のメシア」とデュナン、そしてリリアンの失踪が、いずれ一つの線で繋がってくるのだということは全く想像だにできなかった。

*

『……アグニ……おはよう……調子はどうだい？』

そう頭の中に囁きかける声にサーペントの青年は目を見開いた。

ここところ真吾はアグニが収納されている液槽のカプセルが保管されているラボで共に寝泊りしていた。彼の心を常に把握していたい、いや、もっと彼自身に近づきたい。真剣に真吾はそう思っていた。屈託のない穏やかな微笑みを向ける真吾に、アグニも次第に心を開きつつあった。

この人間——いや、その彼自身も勿論、元は同じ人間だったのだが——の真摯さは、そのものに直に触れるだけですぐ解った。真吾の瞳は、いつだって透明な澄んだ光を放っていたからだ。オマエ、ハ……既に言葉というものを失くしてしまった彼には、それをどう形容したらよいのか分からない。それでも、ただ穏やかな空気だけが流れ、？それ？が語りかける言葉がどんな意味を持っているのか、きっと彼は理解できていたのかもしれない。

そう、言葉ではない。動物同士は決して言葉で互いを理解しあうのではない。むしろ、その言葉が互いの距離を阻むことさえある。大切なのは言葉だけではない。むしろ真に大切なのは……。

——グルルル……、

喉の奥を鳴らすような音がアグニから漏れる。硬い鱗に覆われた皮膚、鋭い牙と爪、そして赤い光を放つ眼光。そのすべてが怖ろし

くも思むべき姿であると自ずと感じさせる、けれど。

真吾は変わらぬ微笑みでアグニに接した。

驚くべきことに彼は何らかの栄養を特に摂取しなくとも当たり前に生き続けることができた。それも龍神の尋常ならざる生命力の驚くべき強さであると言えた。まさに人間以上の存在？ けれど、どうしても真吾は、そんな彼が哀れに思えて仕方なかった。たとえ元が海賊だろうとテロリストだろうと――、彼は自分たちと同じように当たり前に人間として生きていたのに。

誰が彼をこんな風にしてしまったのだ。それは……ガイア。まさに今イオリゲルに属している真吾自身が従属している大国の差し金だった。アグニ……真吾はいたたまれない思いで彼を見つめた。その瞳が先ほどとは打って変わった潤んだような光を宿す。それはアグニ自身を包み込む慈愛の波動。拒否することの意味をなさない、その次第に浸透してくる水のようなあたたかさ。

その浸透力のなすまま、真吾はアグニの痛みを我がことのように感じていた。実際、普段からのそういった双方の距離が、互いのマシンを操る上でも重要であったのだが、真吾にとって既にそんなことはどうでもよいことだった。君は今、何を感じている？ 僕はもっと君に近づきたい。人として生きていた頃の君はどんな人だったの？ 海賊とかテロリストとか、それ以前の人間だった頃の君は。

だが、ガイアは元は海賊パルジャミヤの首領であった彼を決して赦しはしない。だから、こんな。もし僕が君を今の鳥籠の中のような状態から救い出そうとしたら、即座に反逆罪で処罰されるだろう。ああ、それは奇しくも瑠美那さんと同じだ。龍蛇の巫女。いつか君を迎えに行く、そう約束してから何日が経っただろう。

——せめて今は、その痛みを僕に分けて。

真吾は液層の硬いガラスに両手を当てたまま、切なげにその向こうを一人見つめた。

*

イオリゲルの睦月真吾の弟として、その使命は至極当たり前のように下された。

そう、瑠美那さんがこのエリートアカデミー科に転入になったときから、いやアマテラス校に入った時点で、既にそれは決められていたことだったのかもしれない。最初は何も考えず、瑠美那さんがこつちへ来ることを、ただ単純に喜んだ。でも——やっぱり彼女は龍蛇の巫女。そして自分は次期イオリゲル候補生なのだ。

『睦月諒牙君、あなたがお兄さん同様の力を持つこと——それがどいう意味を持つことなのか知っているわね？』

そうだ、僕は兄さんと同じに。アカデミー科のスタッフとして働いている草薙瑞憐は、やはりガイアの手の内で働いているも同然だった。そして、それは僕自身も。ガイアという国の元くびきにいる以上、僕たちはその構成員の一人一人なのだ。決してその軛くびきからは逃れられない。

だから、僕は。瑠美那さんに近づこうとして、あの日ああして食事に誘った。でも……。

好きになったその人は、兄さんの想い人で、同時に龍蛇の巫女。

いや、既にそんなことは解っていた。解っていたつもりだったのに。それなのに、いつの間にか好きになってた。次第に心に満ちてくるのは、彼女への想いと、そして兄への思い。その両方が一気に押し寄せて、僕は何が何だか分からなくなる。

瑠美那さん——、その名を呟く度に、僕は僕自身でなくなっていくような。

ただ大切にしたいという思いは兄さんと同じなのに。なのに残酷な運命がそつと囁く。

『……金城瑠美那を、お前のものに、しろ——、』

そう呟き、諒牙は観念したかのように頂垂れた。その声は、どこから彼自身を常に縛り拘束する。ただ自分の欲望に素直になりさえすればいい。そうすれば、きっと楽になる。誰かがそう耳元で囁く。

「そう、睦月真吾はガイアへの反逆を企てつつある——、」

兄を排除するには、ただそう報告するだけでよいのだ。金城瑠美那、龍蛇の巫女を解放しようとしているばかりか、サーペント化したアグニ・ヴァシラートまでも。それは既に冒されざる大罪なのだ。

はっとして、諒牙は自室の片隅で顔を覆い、壁際に凭れ掛かった。

*

「太陽の皇子……」

今も思い出される、背筋を貫く悪寒。それがどこなく「白のメシア」が発するものと似通っているような思いにかられ、御統は深く息を吐いた。まさかあれは失われた皇家の――、そんなはずはない。この国がまだ日本と呼ばれていた頃、すべてがその見えざる手によってまさに培われていた。例え国力自体が衰弱し、国民が墮落しきつても。スメラミコト、確かにそれは崇高なる神の一族だった人と交わり、すべてを包み込み愛しむ、その慈愛。それこそが大地を照らし、あまねく天空を抱く天照アマテラスでなくて何なのだ。

？あれ？は自らを、そう呼んだ。そして、まるでそのことを予見しつつあるような、大陸のメシアの来訪。おそらくは神とは、人が人たらしめるために創り出した絵空事なのやもしれぬ、しかし。それでも神は確かに存在するのだ。人が信じると信じまいとにかかわらず。そして神は試そうとしている――どちらがどう、ということも認識できぬまま、暫定的にこの国を任された者である苦悩を滲ませ、今さらのように呻く。

例え名を変え、その支配権を目には見えぬよう、超大国に譲り渡したとて。やはりイザナギという名がすべてを如実に言い表していた。ただ一つの、それがこの国の精神の抵抗だったのかもしれない。国土の大半を失くし、それゆえ大いなる方舟と海洋の恵みによって生きながらえた命。そこに古の約束いじえのように現れ、拮抗する神の意思。

『御統総理、白のメシア来訪の件ですが、実質的な日時が決定したとのことです、至急会議室へ』

「……わかった」

執務室に響いた内閣秘書からの報告に御統は席を立った。

「白のメシア」のイザナギ訪問の情報はクロエの感応能力を使うまでもなく、その意識に浸透していた。

「ふ、これこそが好機でなくて何なのだ……」

少年の不適な呟きに思わず意識全体を集中させる。その意思が何を行おうとしているのかは容易に感じ取れた。ただ己に出来るのは、その神の意思に従いながら、決して向かうべきでない暴走を水際で食い止めることだけだ。例えどんな姿に変わろうと、その本質が依人である巫女の力によって変質しようとして、オマエはやはり、かの人なのだから。

クロエは観念したかのように息を吐くと呟いた。

「白のメシアは単なる大国の要人ではない。あやつにはただならぬ霊氣が漂っているのを感じる——、」

それはお前の勘か？ そう問われ、改めてデュナンと称する皇子の表情を窺った。思えば人としての生を受けた自身と、その巫女の力で肉体を手に入れた目の前の少年とは、既に同じ存在になり得ていた。それでも微妙に違^{たが}うこの距離感は、やはり根源的に意図するものの相違だろうか。

それでも……。

「この海とその懷に沈んだ大地とは、遙かな古より我々のものなのだ。そこへ単身乗り込まんとすること自体、ヤツの宣戦布告だろう」

そう、若干方法としては陳腐と言えなくもないが、この靈力を持

つてすればイザナギ全土を掌握するなど、造作もないこと、だが。
——彼奴の考えていることが何なのか、その凡^{おおよ}その察しがつかないでもない。

「——要するに、この私への挑戦状さ」

その黒曜石のような紫水晶の異様な輝き……その眸の色にクロエは失った世界の闇を見た思いがした。

アマテラスの皇子。確かにそれは正統な太陽神としての称号に他ならない、しかし。かの人は、その称号でさえ許されることはなかった。それは、さしずめ暗黒の太陽だ。……私は結局、知らなかったのだ。かの人の母君であるアマテラスの命を奪ったのは誰であろう、その血塗られた御手であつたのだと。そのことをデユナンとしての肉体を得た、かの人が感知してしまった。私は何も知らなかった。知らずになぜ、かの人が、あのまま祖国へ戻らぬまま何処^{いずこ}かへ消えてしまったのか、ずっと一人思い悩んでいた。

だがしかし。だからこそ、その胸の内に沈む哀しみを信じることができる。もう、おこがましいなどとは思わない。なぜならば、かの人が生涯をかけて仕えるべき主君であると悟ったからだ。生涯、そうだ。この命がどんな形に変わろうとも。

「太陽の皇子……、もしも本当に、それがかなえることのできる約束ならば、」

——ん？ いや、何でもない。テレパスではなく小声で囁いたその声は、幸いデユナンの耳には届かなかったようだ。もう夜が明ける。かの人の眠りに就く刻限だ。それでも巫女である金城瑠美那の霊力を既に上まっている証拠に、日ノ神は一睡もせぬまま、スサノ

オドームにて奪取した小型水陸両用艇のエンジン動力源の波形を一心に見つめていた。

ヤツが来訪するとしたら、それはやはりその日をおいてない。

「カグツチ……あいつの鼓動を感じる……、どうやら近くに来てい
るようだな」

それは、太陽神であることの宣言——その一大セレモニーを飾るデモンストレーションとしては最適だった。まるで眠ることさえ忘れたかのように——、いや、おそらくはそんな平安が、その心に訪れることは二度とないのかもしれない。その予感を胸にクロエ自身も、かの人とよく似た面影を持ったヴァシユラートの皇子が、そこにいることを悟った。

イオリゲルの母艦でもある、巡洋艦アステリウス。かつて一度アグニ奪取のため、巫女を乗せたその船に忍び込んだことがある。彼女に託した例の宝玉は役に立っているだろうか。その時はアグニ自身の救出は敵わなかったが。その碧緑には心の均衡を保つ、まじないの類の力がある。そう、お前は、お前自身の信じる意味においてのみ、この太陽神に仕えるがよい。

決して本位ではない命に惑わされるな……！それが翻つては、かの人を救うことにも繋がるのだ。

おそらくは、それは、お前にしかできない仕事だろう。私はこのまま、アグニのいるあの船を太陽の皇子とともに追う。アグニを取り戻し、そしてカグツチを——、双方の魂の結合を解く鍵を探す。それまで、お前とお前の神の魂の融合の妥協点を見つけ、その答えを探せ。もう決して、人間と龍蛇の狭間で悲劇が起きぬように。

波頭がぶつかり起こす飛沫にもかまわず、水平線の一点を見つめる眼差し。それが、まだ純粋な光を宿している間は……。

*

「デユナム様、それは……っ」

白のメシア、そう下々に呼称されている御身の決定とはいえ、その家臣であり執政官の一人でもあるリヒテルは、その言葉に息を呑んだ。

「何も問題はないよ、そうだろう？ リヒテル——」

いつしか、かの人の傍にある少女が控えているのを知った時には、正直何が起こっているのか把握することもままならなかった。許してくれ、彼女は私の大切な友人だ、そう密やかに微笑んだまま、ただ相手の反応を楽しんでいる。

「許すなどと、そのような……、」

呼吸を整え、何とか一息つくと、リヒテルは予定されているイザナギ訪問の日程を伝えた。——本来ならばしかし、それでさえも異例の出来事であるだけに、彼自身の在任中にまさか起こりうることも知らず、ただ徒に躊躇してしまわぬよう、平常心を保つのがやっとだった。

「……すべては御身の御心のままに、」

そう恭しく頭を下げ、ただ今回の案件が無事、滞りなく行われることを願う。それにしても——、

彼の傍らに寄り添い傳かすく少女は、口を利くことさえできないよう

だった。確かに予てから独りぼつちは淋しい、誰か話をする相手が欲しい、との要望を口になさってはいたが。しかし、ことはガイア全土をその神秘の力で司る「白のメシア」——そのような品位を満たした話し相手など、そうそう見つからなかったというのが事実……だのに。

せめて身なりだけでもと、身を清めさせ、純白の絹のドレスを着せて、身なりを整えさせた。確かに元々が身に着けていた、各国に数多く存在するガイア直系の学校の制服から、貴族出身の娘のようであると推測できたが。

「実はイザナギには彼女も連れて行こうと考えているのだが、」
だが、またしてもリヒテルは、その聖なる御言葉に振り回されることになった。

*

「——驚いただろう、彼は熱心な信者でね、でも少々口煩いところが玉に瑕なんだ」

くくつと笑うその銀灰色の瞳は、どことなく猫のそれを連想させた。しかし、実際はペットにされたかもしれないのは彼女自身の方だった。……結局、何も思い出せない。私はどこから来たのだろうか？まるで怯えきった小鳥のように、ただ身をすくめて震えていた。しかし、そんな自身の名前を思い出せない彼女に、彼はフェリシア、そう名付けた。

「……とてもよい名だろう？ 君のイメージにぴったりだよ」
「……フェ、リシア」

ようやく口に出せた言葉。けれど、どこかそれは以前の彼女とはどことなく違って見えた。もし、そこに以前の彼女を知る者がいたとしたら。今はまだ、おずおずとでも微笑むより戸惑うことの方が勝っていた。白銀の輝きを放つ不思議な人。その眸の奥に宿る、ひんやりとした冷たさ。高貴であると感じるのに、どこか彼女はそれが怖ろしかった。

リュシフェラス・デナム。それが彼の真の名。このクリスタルパレスで彼に仕える者は、皆下のラストネームに敬称を付け呼んでいるものの、それも極々傍に仕える高位の臣下に限られていた。だが、彼女の前で彼は、

「——リュシフェラス。いや、リュシーと呼んでかまわない」

平然と、そう告げた。宮廷と思しき住んでいる場所の煌びやかさ、多くの家臣たち、そして、あの神々しいばかりの高貴な佇まい。どれを取っても彼女など、その足元にも及ばない位の高い方であると解る。それだけに直々の申し出とはいえ、そのことがとても躊躇われた。

……遠慮することはない、この私がそう言っているのだから。可愛い私の小鳥。

「リュ、リュシフェラス……、さま。リュ、リュシ……」

やっとその名を口にするも、すぐに畏れ多く感じて口竅ってしまった。

——フェリシア。不意に優しく抱きしめられ、身にまとったふんわりとした絹の衣と、その白い指先のひんやりした感触に言葉を失う。それから身体を離すと、彼はじっと彼女の驚色の瞳を見つめた。

怖がらないで……その穏やかな眼差しにそう諭されるも、腰に回されたままの右手と、そして左手には震えるフェイスラインの頂点である細い顎を包み込まれたまま、ただじっと膠着しているしかかった。

いつしか「白のメシア」のイザナギ来訪が明後日に迫っていた。

それに伴い、その護衛の任を任されたイオリゲル部隊内部も慌ただしさを極めていた。特に第三小隊は同時にサーペントの被験体の御披露目も兼ねていたのだから、その緊張感は尋常ではなかった。無論、龍蛇と化したその姿は直接晒さず、むしろ目的としては彼自身の分身ともいえるスーリヤ、アスラの起動そのものに比重が置かれていた。そう、通常の間人とは一線を画したその機動力はそのまま、イオリゲルの起動マシンD-2同等に人型形態へと移行した際に、最もその真価が発揮される。

だがしかしイオリゲルと龍神の力の融合の真価は、それだけに留まらなかった。奇しくもエネルギー系統などの同等のシステムがそれを可能にした。それは、文字通りの融合。不思議なことに、まるでそれぞれが予め仕組まれた機構であつたかのように、ぴつたりと双方のマシンの合体が可能となつたのだ。それは当然おそらくは、予てからの真吾とアグニ二人の精神の融和性にあつたのだとも言えるのだが。

どちらにしてもそれが、実質的な龍神討伐のための力強い布石となることは事実だった。既にアステリウスは寄港先の太平洋上、小笠原諸島からアマテラスドームへ向け航行中。後戻りは、もうできないということなのだ。

「ルミナス……、確か瑠美那さんは、そう呼んでいたっけ」

アグニが今のアグニになってしまったのが、どういった経緯からなのか。それは当然、あの不思議な孤島での龍神との戦闘から端を発していることは明らかだった。そこでのことが奇しくも彼女と出会った最初だった。龍蛇の巫女——、そういえばアマテラスに彼女はいるのだった。

アグニとのことで一生懸命だったため、しばらく彼女のことは胸の奥底に封印していた。それでも決して一瞬たりとも忘れたことはなかった。ただ、そばに諒牙がいてくれるのだと安心していたのは本当だ。弟からの近況では、彼女は来期からエリートアカデミー科へと転入となるらしい。よかった、瑠美那さん。例え監視の籠の中にいるのだとしても、それが僕の弟の諒牙の元へ行くのだったら心配はない。彼は心から双子の片割れである、弟を信じていた。

それでも、もしアグニの中にいるモノと瑠美那さんとともにいる龍神が同じものなのだとしたら……、それが僕たちが融合できる本当の理由なのだとしたら。瑠美那さんとアグニ、それぞれの苦しみ哀しみ、それを僕はきつと取り除いてみせる。決して傷つけるためじゃない、ルミナスという龍蛇の神に、二人を返して貰うために、僕は。

そう考えると殊更に勇気が湧いてくるのを感じる。光り輝くもの——、だったっけ？ 諒牙。その名を持つ神様だって、本当はこんなこと望んでないんだろう？ だって光は、太陽は、皆をあたためるために存在しているのだから。

*

薄れていく意識を僅かに繋ぎ止めた、確かにそれは絆と呼べる類

のものだったのかもしれない。

アグニはかつての同胞の一人であり、彼の友人でもあったヴァルナのことを思い出していた。いや、それは思い出すという直截的な心の動きではない。睦月真吾——、今日の前で穏やかに微笑む人間から発せられる、仄かに温かいオーラが、その思い出すという人間だった頃の行為を表層に浮かび上がらせているのだ。

深い水底から、いつしか日の光の差す明るい浅瀬へ。そこで彼は確かに大切なものを自身に刻み付けていた。そう、それは言葉ではなく体験。この肌に触れる風の感触や陽射しの暖かさ。そんな体感するすべてのものに似た心地よい波動を感じる。それは、かつて海賊としてテロリストとして悪名を馳せていた頃には、既に遠い記憶となっていた類のものだ。

おそらくは、もう戻ることさえ敵わぬ遠い過去。何も知らない、ひたすら無垢だったあの頃へは……。

だが、時折？声？が聴こえる気がする。アグニ・ヴァシユライト、その名でさえ既に捨て去ったのかもしれない、それでも。人とは違う能力。化け物のような、異様なその姿形と引き換えに手にした力。それがかつての俺自身の望みだった。ナーガラージャ、その真実に近づくことはそのまま、自身の身を捧げることもあった。

心なしか、俺を呼んでいる声が聴こえる。もう、そこまで来ている。誰だ？ クロ、……エ。いや、違う。もっと根源的で求心的な、この力の源とも言える何、か。それは確かに俺を呼んでいる。手を伸ばせば、すぐにも届く場所で、もうすぐ。

グrrrrrr……、龍蛇としての本性を今は眠らせたまま、ア

グーは目を閉じ、つかの間の休息に身を委ねるのだった。

それにしてもなぜ、熊野は伊勢や出雲とは違った姿をこうして見せるのだろうか。

現在、世界遺産に登録されている「紀伊山地の霊場と参詣道」――それは、この熊野がまさに複合的に見えざる神を幾重にも抱える聖地であることを示している。まさしく神仏混淆こんぶこう、その真髄は日本人が元来根源的に自ら抱く、深層心理的宗教観とも合致していた。例えばキリスト教を引き合いに出してみても解る。決して信者ではなくても当たり前のように年間行事の一環として存在するキリスト生誕際であるクリスマス。あるいは正月、そして盆。仏教もだが、例え海外由来の伝来のものであっても日本人の魂は、それらを常に懐深く受け入れてきた。

そして、この熊野にも同様のことが言えるのだ。それは、まるで日本という精神構造そのものの縮図だ。蟻の熊野詣――江戸時代に隆盛を極めたその一大ブームは、位の高い者のみならず多くの庶民の足をこの聖地へと導いた。それは老若男女、身分の高低に限らず、どんな人間だろうと容易に懐へ招き入れる、その寛容さにこそあったのに他ならない。

紀伊半島をぐるりと取り囲む海岸線と山々とが接する、その僅かな場所での人々の慎ましい暮らし。それはそのまま、神が海と山とに姿を変えた究極の聖なる土地そのものであった。奥深い山地と森林から臨む海、それ以外には何もないということの本来の意味。そう、そういったプリミティブな処にこそ確かに神は存在するのかもしれない。それぞれの神の名を例々しく祀った熊野三山でさえ既に出来合いの社でしかなく、本来の神の坐す場所ではないのかもしれない。

ない。そして時に人を拒むほどの急峻な坂道に行く熊野古道、あるいは陸路以上に海上は、困難を極めた巡礼の道だった。事実、志半ばで命を落とす者も少なくなかったという。それほどまでの代償を経て人々が、ここ熊野を目指す理由とは。

……時に人は安易な道でなく己自身に厳しい道を選んでしまう。それは、この俺自身もか。

竜崎はいつしか夕陽が傾き始めた海岸道路を車を走らせていた。やつが水澤ひとみを保護したという。その連絡は、先ほど白浜で待機している円城寺からの携帯で受けた。その目的はいざ知らず、伊勢崎ナミと篠崎聡己を本来の道標へと導く一つの演出に他ならないだろう。そこまでは我々と同じ——それでも何一つ油断はならないってことが。

まるで一分が一時間のようにも感じられる。誰の策略なのかと疑う以前に、それはこの熊野自身が既に大昔から仕組んでいることなのだと思える。これでは、さしずめ逆浦島太郎だな。竜宮城での一年は地上の三〇〇年、だがここでは真逆の磁場が確かに働いている、そんな錯覚にまでいつしか陥る。

熊野市の海岸沿いに伊弉冉尊イザナミノミコトとその子軻遇突智カグツチを祀る花の窟神社いわや、あるいは新宮市の神倉神社のゴトビキ岩や、丹倉神社あかくらなど、巨石を御神体とする独特の聖域は日本各地にも数多くある。それは、まさに沖縄の御嶽ウタキそのままだ。熊野那智大社などは、その背後の絶壁から雪崩下る日本髄一の高低差を誇る那智の滝を御神体としている。神とは時に巖いわであり水であり、そして山々そのものであった。自然と共存する、しかしそのことを一時忘れ、一方的に肥大した己自身への過信から人間は墮落と崩壊への道を辿ることになる。何より内なる己自身の中に鎮座する神の存在を忘れ去った時から——。

たかだか一〇〇年弱の命、そんなものはこの大自然の前では、どんな意味も持たない。荒れ狂う海と嵐、火を吹き地殻を引き裂く大地の鼓動。我欲に走らず清貧を尊び、ひたすら慎ましく生きる。いや、既にそんなものは幻想であると、その本質を見失った瞬間に起きる悲劇。

事実、日本人は無宗教を貫く人々で溢れかえっている。むしろそのことにさえ気付かない。本来の自分自身の核が、無意識のうちにどれほどそんなものに強く依存しているのかも知らず。本来の宗教とは形ではないばかりか、教義や偶像でさえも持たない。ただ無心に自身の欲望とは限りなくかけ離れた境地にしか存在しえない、限りなく点に近いその次元の最涯。さいはて いにしえ古の時代、確かにこの国にもそれは存在していたのだ。

——所詮リベルテのやろうとしていることは詭弁でしかない。ただの狂ったペシミストだ。この大地を離れた時点で、人は人ではなくなってしまう。例えそれがどのような手段を用いることになっても、やつらの暴挙は停めるしかない。一見して、その飼犬のように成り下がった己自身に幾度となく念じ続ける。

*

「堕天使、まさにそういうイメージなんだけど」

「やらしいわな、こういうヤツほど一見善人の面の顔だけは厚かったりしてっ」

「その対極にあるのがルミナスってか？ 解り易すぎてお姉さん恥ずかしくなっちゃうよ」

「……くふっ究極の厨二病」

——そして、つかの間の暗転。

——ところでさあ。竜崎監督からの発注、困っちゃうよね。正直あの人がそんなこと言い出すなんて赤い雪でも降るかね？ ダメダメ、本気にしちゃ。ソレがあの人の手でもあるんだからア。アンナコトやソナコト……これは、かなり気になりますわね。巷の噂のトレースまんまのネタで恐縮ですが、実はカントクって未来からタイムワープしてきた正義の味方ってオチ。……誰がそんなこと信じるのよ？ アタシのリビドーの源泉でもある心臓が既にばくばく言ってますがな。おう、そりゃ早く病院行った方がええぞ。

人呼んで同人あがりの無敵クリエイター集団、A/R/C。^{アーク}人はあたしたちのことを、そう4？。キャラ設定及びメインコンセプト担当、真咲奏。カラーイラスト、デザイン画及びネーム担当、夕海みなど。同イラスト担当、榊結衣。面白いことを面白おかしく、しかして仕事はハードに、そしてちよっぴりの乙女ゴコロも忘れずに！ ってか。それが、あたしたちのモットー。↑え、ちよっぴりなのかよ（汗）少しはセンチティブに、とかなんとかほざけよ。それよか、またも当たってしまった、あたしたちが手掛けたキャラデのルミナスコードですが、めでたく第二期制作が決定いたしましたっ！ ドンドンパフパフ。姉ちゃん、その話もう聞いたー。うるさい小娘、皆まで聞いてからコメントしなっ。それがどこでどう間違ったのか、制作が異常に遅れておりまする！ それだけならまだしも、さっきカントクから電話があったんよっ。え、それって、もしかしてラブコー……（ばしっ）いてーよ、アンタ！ いきなり何すんのさっ。みなとの腹黒ジト目線はどっかに置いといて……って。ええと『今、熊野だから。頼んどいた新キャラよろしくね』だってさ。何考えてんの、この監督詐欺、もしくは昼行灯！

——再び、暗転。

「だからさーつまり、そういうコト」

「で、どうすんの……コンセプトがいまいち曖昧すぎて説得力に欠けるんだけど？」

「と、言う以前の問題でしょ、コレ」

「……くふっ現実^{リアル}ヲタトレース疑惑」

「イマドキのRPGプレイヤー異世界転送ラノベでもあるまいし――、どうしまひょーみなとさん！」

「いや、これはこれで面白いと私は思うぞ、切実に」

「結構ノリノリで絵が描けたりね？」

「結衣っち……そういうオマエがノリノリなのがむしろ怖いよ、姐さんのに」

「別にあたしは諒牙クンさえ予定通り腹黒くなってくれば、それで満足。さらにツクヨミと聡介が結婚してくれさえすれば再び万事オケ」

「どういう方向性だよ、それ？」

「いやフツーにBLじゃないの健全な……」

「ともかく面白トリプル漫才もといキャラデザ会議終了！」

「監督の熊野土産でも期待しましょ……」

「おい、それでいいのか姉貴」

（終了）

*

んー、いちお熊野三山は押さえといた方がいいかな……、それでも、これを一週間でこなすとなると……。単なる観光目的でないことは相澤にも解っていた。それでも竜崎たちからの指示を鑑みるに端折る部分は端折るとしても、とりあえず……、そう一人ブツブツ

呟きながら地図と睨めっこ。

「んで、どの辺をどう歩くわけ？」

「そりゃ時間と体力との相談でしょ、単なるハイキングと違うんだからね」

「なはは、高校時代、陸上水泳をはじめとして各種運動部かけもち女王と呼ばれた、この神代未玲サマの辞書に不可能という文字はない！」

「あのね神代さん、それは非常に心強いんだけど、時間の制約だってあるんだからね一応。それに僕自身あんまり体力に自信ないし、とりあえず二人とも最低限の余力があつた方がいいと思うから」

こんの、モヤシ男め。いかにも頼りなさそうな相方を無言で睨んで未玲は温くなったコーヒークップに口をつけた。そもそも、こいつが唐突に熊野行きの計画を実行に移したのも何かの裏があるはずだ。ルミナス主役二人とナミ一行といい、やはり何か関係がありそうな気がする。それでも、いくら何でも放送直前アニメの制作中に（しかも、その制作自体が大幅に遅れている）実質的な現場の指揮を執る副監督が……、一体ぜんたい、どうなつてんだよ。

などと、これまで何度も脳内で呟いた疑問を繰り返しても意味がない。それよりも今頃ナミは。多分、携帯は持つて出てるだろうけど、何となくかけてみるのが躊躇われた。第一あたし自身、本来なら今頃はコイツともども、ルミナスの制作に多忙を極めていなければならぬんだから。それでも未玲は、何気なく手にした携帯画面を見つめていた。

とりあえず移動手段としてバスや鉄道を駆使するのは外せないな、あいかわらずブツブツ言っている相澤の手元の紀伊半島全体をプリントした地図と観光雑誌。これが熊野観光以外でなくて何なのだと

いう件。それでも、ナミと未玲のことを思えば、どうしたって不可解に思う以上に、監督や副監督の相澤含め、主要スタッフ陣が揃いも揃って熊野入りしたのには、何か深い意味合いがあるうというものだ。

相澤と未玲の熊野珍道中は、とりあえず伊勢路の玄関口である伊勢神宮は素通りして、鉄道利用で伊勢路の中でもポピュラーなツツラト峠入り口である梅ヶ谷駅まで向かうことに。そこまでの所要時間は途中の乗り換え含め、約二時間強。三瀬谷駅まで特急を利用、そのあとは梅ヶ谷までＪＲ紀伊本線普通列車の新宮行、途中下車。初日ではあるが、時間的なことも考慮して多少割高だが、その経路で行くことになった。

「うっはーいよいよ出発だねえ！」

子供みたいにはしゃぐ未玲を他所に軽装にリュックを背負った相澤は未玲の分の荷物まで持たされ、少々困惑気味だが、大目に見ることにした。

特急ワイドビュー南紀１号、八時八分、名古屋発。名前の通り前方の見通しのよい大きな車窓からは、晴れ渡った青空が見える。早朝からＧＷの混雑に紛れ、未玲と相澤は何とかその自由席に落ち着いた。

当初は、より初心者向けで緩やかな荷坂峠コースを予定していたのだが、未玲の一言によって急遽変更。あ、ここいいじゃん！ いかにも熊野古道ってカンジ——観光ガイドに載せられていたツツラト峠の石畳の坂道が御気に召したようだ。ツツラトというのは九十九折りのことで、この石畳へ向かう急カーブを差す言葉でもある。所要時間は荷坂峠コースより一時間長いおおよそ三時間半。梅ヶ谷

駅を出発して紀伊長島駅まで歩くコースだ。

ツヅラト峠は、かつて伊勢と熊野の国境でもあった峠。それとほぼ平行に下る、江戸時代に新たに整備された荷坂峠よりも歴史が古く昭和初期まで生活道としても使われていたコースだ。それを考慮するなら、未玲の勘は正しかったのだとも言える。

歴史を知るには、実際にその場所を歩いてみるのが一番の早道だ。とはいっても相澤は観光以外に何かの目的があつて、熊野を目指しているわけではなかった。一応名目上はロケということにはなっているけど。じゃあ御払い？ 以前、未玲にそう訊かれたことを思い出し、思わず苦笑いする。未玲が同行することになって何となく主導権を握られてしまった感もあるが、結局はそれでよかったのかもしれない。

今回、異例とも思える抜擢で本作ルミナスコードの助監を任された相澤太一。副監督といえば、何となく監督の右腕、監督の手助けをする役回りといったニュアンスが強いが、実際はそうではなかった。監督の制作意図を現場に伝え、監督の代わりに実質的に制作現場を切り盛りしていく、そういう役目を担っていた。

それでも、その相澤が……、確かに制作それ自体が遅れているとは言つても、既に決定している放送枠を潰すわけにもいかない。当初は四月新番組の予定だったのが、もう五月にずれ込んでいる。ではなぜ？ 青い顔をして、あたふたする制作進行デスクの乙部が脳裏に浮かんだ。

でも、最初に円城寺から「熊野」の二文字を提示された時には、何かのインスピレーションが浮かんだ気がした。伊達に過去に俄かでも占い師の肩書きを持っていた相澤ではなかった。確かに熊野に

については齧った程度の知識しかなかったけれど。何となくだが自分が未玲に触発されて腐男子の階段を昇っていったのとも似ているような？（いや、この場合、下っていったという表現の方が似つかわしいが）

何かすべてが予定通り、予定調和的に進んでいく世の中が、ある日突然煩わしくなった。男は可愛い女の子に萌え、女はイケメン男子に憧れる。それだけじゃない、自分はなんで生きているのか、何に向かつて突き進もうとしているのか、唐突に解らなくなった。面白いことというのは、案外そうじゃない所に転がっているのかもしれない。そう思っていた相澤の考えを直接察したわけではないだろうが、ルミナスの竜崎悟朗に出会って今に至る。

確かに破天荒なことをする監督と脚本家だと思う。だが実質的な実績は、それに比例するかのように表れている。ネプチューンは何か魔法でも使ってるんじゃないか、よくそう言われた。アニメ制作のこともよく知らなかった自分が、いつの間にか人気作である、このルミナスコードの助監。一応段取りだけは頭に叩き込んで、そのあとは迷走しながらでも本人の勘を頼りにすれば何とかなるとでも思ってたんだろうか。

それでも元々飲み込みの早かった相澤は、多忙を極める制作現場で、その俄かの知識以上の働きを見せた。よく何事も経験とは言うけど、それでもその経験自体を、ある程度の時間をかけて培ってきたでもない自分が、よくそこまで出来たと思う。いや、もしかしたら今この時の経験そのものが、次の何かに繋がっていくのかもしれない。勿論、大事なものは次じゃなくて、今この時なんだけどね。

……光が、眩しい。檜木立から零れ出る木漏れ日に、額に滲む汗を拭いながら目を細めた。

馬越峠^{まごせ}。三重県尾鷲市に近いその峠を、あたしは生まれて初めて歩いた。先に行く篠崎さんの背中が頼もしく感じる。篠崎さんの出身地は、お隣の和歌山でもあるだけに熊野古道には詳しく、ある程度の山歩きの経験も従ってあるようだ。それにしても熊野古道の石畳が、こんなにダイナミックなものとは思わなかった。勿論、人の手で造られたものだけど、それが見事に自然と調和している。ところどころ苔むしていたり、場所によっては清水が流れていたり。

瀧原から普通列車に乗り、紀北町の相賀駅に到着。そこからバスに乗って上り口の鷲毛^{わしげ}まで向かった。

GW中ということもあって熊野古道伊勢路の中でも人気ルートである馬越峠は、それなりに混雑していた。それでも初夏のような陽射しの中で緑の木々は光り、森林のイオンが吐き出す空気は随所で澄み切っていた。山の季節は既に夏へと向かいつつある。

本当に……ここに来ただけで、どんな矛盾も解決するような。そんな清々しさに包まれ、そして何より篠崎さんと一緒にこの場所に来れたことが、あたしは嬉しかった。燦々と日光が降り注ぐ檜木立、どこまでも山道に続く石畳。それはどこことなく奇妙なほど、何の矛盾もなくしっくりした自然の風景であると思われた。事実として、この杉や檜の木立は植林されたものであり、当然この石畳も江戸時代に人の手によって整備されたものである。けれどそれは、どこか懐かしい心の原風景のように胸の奥底に沁みた。

何もない、何のことはない、ただの山道。けれど、それが何処かへ続いている、そしてこの道を歩きたくさんの人たちがいる——そのことを思うと、どこか目に見えない価値が、いや価値などという

言葉を使う時点で既に何か違う気もするけれど、ともかく今あたしたちが、この道を歩いていることに最大限の意味があるのだと思えた。

一時間も歩くと、さすがに息が切れてきた。やはり日頃の運動不足が祟ったようである。

「……大丈夫？」

「はい、……でもちよつとだけキツいかも」

笑いながら振り返る篠崎さんに額の汗を拭いながら答える。不思議とこれまでの何となくギクシャクしていた感じが、ここへ来て次第にほぐれていくのを、あたしは感じた。それが自然の力なのだと真顔で言われても、多分今なら何の矛盾なく信じてしまおうだろう。

もしかしたら、水澤さんも一緒に来ていたら……。そう思っしまうのは仕方ないことだろう。篠崎さんだって本当はすごく心配してる、でも。

貴重品以外の荷物は神宮のロッカーの中に置いて来てしまった。それでも服装的なことや簡単な山歩きに必要なものは、ほぼ麓の町で揃った。これからのことはまだどうなるか分からないけど、当面宿泊に困るようなこともないだろう。確かに着の身着のまま、というわけではなかったけれど、ほぼそれに近い状態で、あたしたちは熊野への道程に立たされた。それはつまり、心を無にして何も持たずにここへ来なさい、ということなのだろうか。

伊勢と熊野は、この伊勢路で繋がっている。おそらくずっと途絶えることのない人々の巡礼の道。勿論、あたしは何かの宗教を信じてるわけじゃない。それはあたし自身だけじゃなく、ほとんどの日

本人がそうだと思う。それなのに不思議。別段何かの意味が見出せるというわけでもないのに、ここを歩くことに、いつしか何かの意味を見出してる。本当は神様は、自分自身の中にいるんじゃないかと思う。それがこの自然と一体になった大昔から続く古道を歩くことでスイッチが入る。自然の中で、ただ歩くことに意識を集中していると、不思議に無心になるものなのだ。

羊歯^{シダ}の葉陰が落ちる冷たい沢の水。道端の名もない草花。すつきりと澄み切ったものたちが、今ここに生きていた。どこかで囀っている鳥の声。染み渡るような静けさの中、ただ響き渡る無言の心の声……。

相変わらず前に行くその人も、そしてあたし自身も、ほとんど始終黙ったままだった。それでも、どこかで何か伝わるものが二人の間に流れていた。それは多分、このまっさらな自然が何かを媒介してくれているのだろう、そんな思いにかられる。声優とかアニメファンとか、そういうことは勿論、ここでは何も意味を成さない。そのことが酷く清々しく思えた。自然には、人と人との間にある見えない壁を不思議に消し去ってしまう作用があるらしい。

「さすがに疲れたね？」

「ええ……、ほとんど山歩きなんてしたことなかったから」

峠の頂上に辿り着いて、ようやくまともに言葉を交わしたような気がする。それでも、すれ違う道行く人たちが当たり前のように挨拶を交し合い、実際あたしたちも声を掛けられたので、驚き半分ながら、これがこの当たり前なんだと思った。もつとも彼氏、彼女同士？と、当然思われるようなことを面と向かって言われ、気恥ずかしい思いをしたけれど。

「僕も古道は久しぶりだったから、でもやっぱりいいものはいいいね」

額に浮かんだ汗が光ったその日焼けした笑顔が、殊更に輝いてみえた。それにつられて、あたしも笑顔になる。篠崎さんに勧められて道端の石に腰掛け、何気に両足をさすりながら水分補給。

「ほんと、熊野っていいところですよ。皆、気持ちが同じになるっていうか」

「ああ、そうだね。確かにそうかもしれない。ここでは歩くことが一番の目的だからね。でも何のために歩くとか、そんな直接の目的がない所がいい——だから、人の心が柔らかくて温かいのかもしれないね」

その言葉で、これまでどことなく心のどこかでわだかまっていた何かが急速に解け出していく気がした。それはもしかしたら篠崎さん自身も同じだったかもしれない。確かに全てが解決したわけじゃない。ルミナスに囚われた篠崎さんと水澤さん、そしてあたしと未玲。それでも皮肉なことに不思議に導かれた、ここ熊野に来たことで何かの答えが見つかる気がしている。それを直訳して神様の御導き、と言っのだろうか。

「確かにあの時はびっくりしたけど——……、」

と、切り出した篠崎さんの言葉で、再び一人残された水澤さんのことを思い出す。大丈夫でしょうか、水澤さん。そう言葉に出すと篠崎さんは不意に黙り込んで木立の間から臨める彼方の景色を見つめた。そのじつと一点を見つめる眼差しは、酷く真剣だった。

「信じるしかないよ、今は……」

水澤さんを保護したという男は言った。熊野へ向かいなさい、と。やはりルミナスの関係者なのか。そのどこか落ち着き払った、よく通る声が醸し出す安心感に全てを委ねた、委ねるしかなかった、今は。けれど、まるで糸の切れた凧のような状態の水澤ひとみの、それが今いるべき場所なのだと、二人ともまだ真に理解するまでには至らなかった。

——クマヌクスヒ……そう、貴方はまつろわぬ神。

鬱蒼と生い茂る杜の闇に滴る一滴の月光。その藍色の夜空をツクヨミは見つめていた。

そして私も……、いや所詮私は表舞台から退場した幻の存在。けれど、それも貴方が姿を消していたほんの数百年の間だけだった。貴方は再びこの世に顕現し、貴方の巫女をみつけた。そして私は——貴方を追うようにして、またこの地上に降り立ち力をつけることができた。

聡介は未だ貴方の巫女……金城瑠美那を諦めてはいない。もはや自分自身の身体と生体エネルギーを私に預け、月の光と一体になつたにも関わらず。人間とは、おかしなものだ。己自身を捨ててまで何かを渴望する。けれど私にはそれを愚かと嘲笑することなどできない。それは多分私自身も同じだから。私はツクヨミ、夜を照らす月の神。そしてクスヒ、貴方は——。

＊

「ツクヨミ、ツクヨミはおらぬか？」

「……は、兄上。私はここに」

周囲の空気を轟かす怒号のようなその声音に静かに応えた。スサノオ、私の兄君だ。しかし、その姿は私たち姉弟とは全く異なり、文字通り獣の如き怖ろしい異形。すなわち牛頭神である。兄スサノオはかつて天界から地上へ降りた際、自らに代わってクニを治めることになった王オオナムチに地上を任せ、その後、母イザナミの眠

る冥界へ下ることとなる。

これはその直前の話だ。そう、それはまだ私が三貴神としての地位を保っていた頃の。

「姉者のことなのだが、——そうアマテラスノミコトよ」

姉上が何か？ そう怪訝そうに尋ねたのも無理はなかった。その名を口にする兄の声には不穏な気配が漂っていた。予てから兄スサノオの姉アマテラスを見る目に異様なものを感じてもいた。

「儂^{わし}は姉者と婚礼を挙げようと思う——、」

天と大地をあまねく照らし文字通り統べる太陽の神。その威光には、ただならぬものがある。それを手にしようとすることは決して愚かなこととは思わない。そうだ、兄はこの天空の中心に位置する北極星でもあったからだ。まさに夜と昼。太陽と星。……つまり、そこには月の神の付け入る隙はないということである。

「そこで、そなたに一役買って貰いたいのだが」

兄の言いたいことは解っている。姉君との仲を取り持つ仲介役。幸い私は無骨な兄以上に姉アマテラスとは親しい間柄だった。それだけに、この兄の提案には内心穏やかではなかった。姉は絶対に嫌がるだろう。それでもスサノオに反抗することはできない。すれば、ただ斬って捨てられるだけのことだ。それは例え姉の女帝アマテラスであろうとも……。世界の中心星の威厳とは裏腹な乱暴狼藉者。それは覇者たるもののさだめか——それが兄スサノオだった。

しかし、姉君にはすべてお見通しだった。さすがは日神、日の巫

女である。

「スサノオよ、そなたが望むのであれば、このアマテラスとともに国を治める力を授けましょう」

健気、などとは口が裂けても言うまい。まさに太陽の如くの絶対的威厳、眩いばかりの美しさと神々しさ。そして、それはスサノオ自体の強大な力を収めるためであつたのだと今さらながら気付く。まさに身を犠牲にして、ということなのだ。

婚礼の夜、姉アマテラスはミノタウロスの如き兄に身を開き、幾度かの夜伽の末、懐妊し産み落とした一つ種。それが――。

*

「分かっているのです……姉アマテラスと兄スサノオ、昼と夜そのどちらもがなければ国、世界は立ち行かないことを」

しかし、スサノオには我慢ならなかった。しかも生まれた五柱の全てが日の皇子だった。スサノオがもうけた三柱は全て姫。――だから。最後に生まれたアマテラスの皇子の存在を天地に隠し、離宮へと追いやった。そしてツクヨミ自身も。そう運命の皇子、クマヌクスヒ。

「私は確かにそう預言した。けれどその運命を産み落としたのは生まれた皇子そのものの力」

決してスサノオに誑たがひかされたのでもなければ、己の境遇を呪ったでもない。……ふふ、すべては貴方自身のまま。

かの人になつわる、こんな昔話を聡介に話したのは単なる気まぐ

れだったのか、それとも。

「それでも僕は絶対に認めたくないよ——ツクヨミ、君には悪いけど」

無碍もなく言い捨てる少年の心は既に読めていた。そして、やはり話の端々から滲み出る不遇な月の神の姿。クスヒ、どれだけ私が貴方の境遇を私自身に重ねていたか。そして例えその神格が昼と夜、太陽と中心星双方のそれを擁していようと、そこかしこに纏った妖しげな翳を隠せないこと——、

……もうお解かりでしょう？　かの人が、どれほどの闇をその身に抱えているのかを。

しかし、身罷ったアマテラスの代わりとなる巫女を探さねばならない。いや、それだけの力を持つているとすれば、むしろ己自身の依代として。どちらにしても、それは手にかけてものの宿命的な使命となる。一度大切なものを失うということは、そういうことでもあるのだ。ある意味で、それは脅迫的な渴望。もう永遠にその魂には安らぎは来ない——そうですね、クスヒ。

ツクヨミはゾツとするほどの冷たい微笑みで夜を照らす。聡介は思わずぐくりと喉元を鳴らした。

「……大丈夫ですよ、貴方には私がついていきますから」

月は太陽が夜に零した涙なのかもしれない。自らが輝くことをしない、だからこそ主である日あるじの光に恋焦がれる。そうなのだ、もし太陽がなくなってしまうたら月は……。

瑠美那さんのこととは別に——、本当はすごく哀しい君を、僕は

やっぱり放っておけない。

＊

突然こんなことになって彼女は著しく困惑した。

しかし、そもそもどうして自分がここにいるのかも一切解らなかった。そう……自分自身が誰なのか解らない。その根源的な惑いは彼女を混乱させるのに十分だった。突然留まることになった煌びやかな宮殿。そして……、まるで天の使いのように神々しい人。その人に身を委ねることと、どうにか留まっていられる不確かなこの身とことなく何かが不安で、いつも心が震えている感じがする。そして、そんな風に震え続ける自分を優しく気遣ってくれる、不思議なその人。

それでも、何かが心の奥底に引っ掛かっている。何か——おそらくそれは、彼女がかつて大切に思っていた何がかだったのかもしれない。それは、決して忘れてはいけないと胸の奥で常に彼女に囁き続ける。

そんな胸の内を知ることもなく、彼女を取り巻く状況は新しい時を紡いでみせるのだった。

「えっ……イザナギ？」

「そうだよ、フェリシア。私と一緒に行こう」

その国の名前に妙に心が騒いだ。知っている……いいえ、私はそこにいた、の？

何となくそんな気がしなくてもなかった。突然、不確かに揺らい

でいた記憶が濃淡を増し、心を混乱させる。どちらにしても明後日、私はリュシフェラス様と、ここを発つことになった。それでも、自分が鳥籠の中にいることは変わらない、そんな気がした。だのに私は、その人に養われている自分から当たり前のように逃げ出すことができなかった。優しく、甘い束縛。むしろ、それ以上の何かが私を捕らえて離そうとしない。

遠い記憶の彼方で誰かが呼んでいる。フェリシア……、勿論そんな名前じゃない。そこにいてはいけない、誰かがそう悲痛な声で強く囁く。まるで耳鳴りのように響くその声に、けれど私は応えることができない。

*

クリスタルパレス——ここはそう呼ばれていた。大陸国家ガイア、その中心部。

全てが滞りなく運営され、何一つ間違いのない正しい秩序。だから人々は心から豊かな生活を享受していた。犯罪一つ起こらない、いや起こる芽さえ当たり前に芽生えない。この国で生まれた子供の教育は基本的に人道博愛主義に根ざしたものであり、青少年が何不自由なく学び愉しみ、そして成人して社会のために働くことは、すなわち自分や家族の幸福を純粹に意味することでもあった。それでも、その極当たり前の社会基盤ともいえる人々の安寧と秩序が今、この世界で保たれていることは、もはや奇跡に近い。

ガイアはすなわち世界の中心。かつては数多の国々だったそれが世界の混乱の末一つ所に集約され、巨大国家として新たな社会を構築するに至った。……そのまさに中心軸に彼女はいた。

そこで彼は常に祈り続けていた。永遠の瞑想。けれど時に目を見開き、一人きりの繭の中で、今にも滞りそうな空気が淀まぬうちに彼女を探す。そう――、私はあの方の大切な小鳥になった。孤独とは無縁のはずの、あの方。もし神様がほんとうにこの世にいたとしたら、神様はきつともものすごく退屈しているのに違いない。誰の目にも見えない、けれど誰もが無意識のうちに、その存在を思い、心に描いている。

けれども本当は耐え難いくらいに、神様はひとりぼっち。だから私にだけ、あんな楽しそうな、嬉しそうな笑顔をくれる、心から。きつと他の誰も見たことがない、そんな奇跡のような天使の美しい微笑み。

「君は時々すごく淋しそうな瞳をする……」

突然、覗き込むようにそう言われてドキツとする。

「――まるで世界中から見放されてしまったみたいだ」

……そう、かもしれません。少し戸惑いがちに答えて俯く。自分のことが何一つ分らない、そのことがこんなにも世界というものを不確かにさせるなんて。だからだろうか。その曖昧になった自分と世界の分、確かな何かを求めてしまふ。それが今目の前にいる、この大天使のように優しく美しい人であることは間違いなかった。

なのに……なのに、何かがどこかで違うという気がする。

「大丈夫だよ――フェリシア。君はまだ本当の自分に出会っていないだけなのだから」

その言葉が何を意味するのかさえ、何一つ解らなかった。

*

「フェリシア……今はそう呼ばれているのね」

一人テラスで物思いに耽っていると、突然背後からポツリと声を掛けられ、はっとして振り返る。

そこにいたのは一人の不思議な少女だった。自分より二つくらい下だろうか。お下げに結い上げたプラチナブロンドの髪、幼げな顔立ち。けれどもどこか理知的なブルーグレイの眼差しに、どこことなく見覚えがあるような気がして、しばらく無言で見つめてしまった。

「あなたは……？」

それには答えず、少女は遠い瞳をしてテラスの向こうに広がる薄闇を見つめる。

「……世界は混沌に飲み込まれてしまった。決して明けぬことのない本当の闇。けれど、もうじき新しい夜明けが来る」

まるで預言でもするような儼かな口調。でも、どこか他人事のように抑揚のない声色と無表情。

あの——、と言い掛けた、その言葉を遮るかのように少女は再び呟いた。

「……私はベアトリーチェ」

私は彼女を知っている——そんな気がして、思わず言葉にして問いかけたくなる。けれど、それきり黙ったままの少女から無言の圧力のようなものを感じて、こちらもそのまま押し黙ってしまうのだ。

大いなる海。この惑星^{ほし}が大陸と海とに二分されてしまったことで、その大海原はさらに拡大され広がった。決して途絶えることのない涯^はてない青い波――。

けれどそれが、ただの誇張であることを知るには、人々はまだ未^お熟^{さな}すぎた。

世界の崩壊があまりに簡単に起こりすぎたのだ。それは言うなれば、これみよがしに絵に描かれた書き割りのよう。それでも人々は、目の前に提示された真実のみを信じる。それ以外に彼らの？世界？はありえないからだ。本当の「意味」とは、その真実とは、人々の心の中にこそ在る。

それでも人は、彼らの物語を欲しがる。彼ら自身が生きる糧となる、嘘でも偽りでもよいから、そんなカタルシスを欲するのだ。

神とは、そのための免罪符だ。畢竟、誰も彼もが己の感情を高揚させ、自ずと見えざる真実へと導く物語に縋る。

そこに何かがあるのか、何かあるとしたら、それは自分自身と何の関係があるのか、そんなものがあるはずのないものにまで、人は自分の思いを重ね合わせる。決して手の届かないものを手のするため、その形。そうだ、形さえあれば、すべてが動き出す。

そうやって人の歴史は過去から未来へと永劫に続けられてきた。人が人として、生きている限り続けられる命の舞台。

その舞台で演じられる一幕に、すべてを賭ける――。

太陽が昇ったあとも、星は必ず目に見えない夜空に輝いている。太陽だけに目を奪われるから、何かの罠に捕らえられてしまうのだ。それでも太陽は、そこにあるだけで無条件の豊穡を人々にもたらしただ。もはや太陽のない世界など誰にも信じられないだろう。その無意識のうちの拘束、呪縛。その無為の闇を、あまねく銀河に散らばる星々は突き崩す。……星だけではない。海と大気とをこの惑星^{ちきゅう}に押し留めた引力は、絶妙な距離間にある月とのバランスにおいて保たれているのだという。その無言の輝きは、文字通りそこに在るといふ、その奇跡を示してもいい。

——そんなことはどうでもいい。

日神の少年は、改めて前方を強く見据えた。たとえこの世界が、どのような嘘偽りに支配されているのだとしても、何かに踊らされるだけの幻でしかないのだとしても。むしろ、その幻をこちらから利用してやればいいのだ。騙されるのではなく、相手を騙す。隙を突かれた、その隙を逆にいち早く突いてやるのだ。それだけの強い気概が今の彼にはあった。

ルミナス——思えば、その名はまさに今の彼自身に相応しかった。

なんという真理。龍神の巫女は、その目に見えない真実に気付いていた。闇の中でこそ輝く光。それは大宇宙のただ中に放り込まれた意識そのものだ。この大地に立っている限り、人は人としての生のみには目が行かなくなる。だから、己自身の繁栄を願い、生きるために太陽を崇め祀る。

だが人はいつか死ぬ。その生を終えた魂が向かうのは、自分自身が生まれた闇の果てだ。すなわち、それは宇宙。大いなる生命の海原。魂とは、エネルギーそのものだ。その生体エネルギーが集まり、

そして循環する。それは一つ一つの星の輝きそのもの。

この惑星^{ほし}の大地を踏みしめている限り、しかしそれは大きな力を持つ。そして――。

太陽の擬態を纏い、見えざる銀河の輝きを魂に焼き付けさせる……。

それでこそ？隠されし皇子？の本領発揮というわけだ。

*

「白のメシア」――それがどのような存在なのか、あたしは何一つ知らなかった。

勿論それは、イザナギや他のどの国の人たちだって、いいえガイアの人たちでさえ、その真実について実際、何も知ってはいなかったのだらう。

それでも、それとあたし自身の場合は少し違っていた。龍蛇の巫女。ルミナス、太陽神の巫女であるあたしは、その存在について本当の真実を知らなければならぬ気がした。そんなに知りたいか……きつとルミナスなら、そう意地悪く言いそうだけど。でも。少しだけ怖い気がした。最もそんな感情は、今さらルミナスと一緒にいて感じることはないのかもしれないけれど。

もし、あの時現れた？天使？が白のメシアなのだとしたら。ガイアは諸悪の根源と言った、かつてのルミナス自身の言葉が胸に蘇る。そして、リリアンを奪われた怒りも――。

まだどこかで置き去りにされている自分自身を感じながら、それ

でもルミナス自身の胸の奥底に眠る何かに触れるには、それは避け
ては通れない真実なのかもしれない。

その「白のメシア」が、ここイザナギへやってくる。ルミナスは
自分に対する宣戦布告だと言った。だとしたら何かが起こらないわ
けはない。何か、とてつもない重大な何か。

それでも今は、諒牙君のことの方が酷く気にかかった。それはす
なわち、真吾と諒牙、睦月兄弟に深く関ることなのかもしれないか
ら。あれから彼とは会っていない。それだけに、あの哀しいキスの
余韻が自分自身の感覚から離れなかった。

白のメシアのイザナギ訪問のニュースが連日報道される中、まる
で嵐の前の静けさのような高ぶりが胸の中から消えなかった。

——お前が誰のことを思おうと、すべては初めから決まっている
ことなのだ。

その声が唐突に胸に響き渡った。「……っ！」

思わず絶句するも、その哀しいくらいの引力の強さに眩暈に襲わ
れ、抗いたいようで抗えない、そんな自分自身の矛盾に満ちた運命
を今さらながら呪う。

そう真吾、諒牙君。あたしも、あなたたちと一緒にだよ。あたしと
ルミナスは一心同体。何一つ隠せない、何もかもが、見通せる。そ
れでも……微妙な距離が二人の間を阻む。それだけは事実だった。
もしかしたらそれは、二人で一人だからこそ無意識のうちに働いて
しまう、目に見えないバリアなのかもしれない。

誰よりも近しい、味方なのに、敵。だから、いつのまにか互いに

壁を作る。それはイオリゲルのフィルタリング以上に、強力な心の壁なのかもしれない。

……そうだ、瑠美那。私のことをどう思おうが、それもお前の勝手だ。

だが忘れるな——俺は、お前を決して離しはしない。

その言葉に、不意に胸の奥底がじんと熱くなった。

7・（後書き）

（ご注意）

執筆開始当初、プロローグを第一部分として書き忘れ、前書き枠を使用した為、こちらで――連載小説として掲載中申し訳ありませんが、基本的にリアルタイムで実験的にストーリーを練りながら公開している為、場合により多少前後して、設定内容等の補正修整あり。ですが、おおもとの基本的流れは予め脳内決定してから創作しており、作者自身も結末が全く予想できていない、物語作りそのものの醍醐味を、とくと御堪能あれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3543f/>

幻影-まぼろし-のルミナス

2011年11月14日17時44分発行